短編集
「輪ゴムのイカフライ」

黒川 文

www.comipo.com

目次

はじめに 1

輪ゴムのイカフライ
輪ゴムのイカフライ 4

植え込みの中にて
植え込みの中にて 12

万国郵便条約
万国郵便条約 18

お父さんの参観日
お父さんの参観日 22

デパ地下大騒動
デパ地下大騒動 32

プチ談合
プチ談合 40

回り出した車輪
まわり出した車輪 48

受けない奇術師
受けない奇術師 58

消えていく町
消えていく街 66

黒猫
黒猫 74

下着にカレー
下着にカレー 82

台所の死体
台所の死体 90

小指の標本
小指の標本 98

即席うどん職人
即席うどん職人 106

ネコと女の子
ネコと女の子 114

着信ナシ
着信ナシ 120

幽霊屋敷
幽霊屋敷 128

アライグマの親子
アライグマの親子 136

ゴミステーション
ゴミステーション 144

じいちゃんとアブラゼミ
じいちゃんとアブラゼミ 152

タヌキの置物
タヌキの置物 158

ロボット・コンテスト
ロボット・コンテスト 166

過去の遺物
過去の遺物 174

海釣りパーク
海釣りパーク 182

三セク鉄道
三セク鉄道 190

水源
水源 198

瑞々しいブドウ
瑞々しいブドウ 206

暗号機と百枚の小判

暗号機と百枚の小判 214

屋根裏の悪意
屋根裏の悪意 222

雨に降られて
雨に降られて 230

階段の下
階段の下 236

犬の散歩
犬の散歩 244

魔球
魔球 250

紺屋の白袴
紺屋の白袴 258

作家のタマゴ
作家のタマゴ 266

２０２Ｘ年
２０１Ｘ年 274

愛・ラブ・ガン
愛・ラブ・ガン 282

トイレの落書き
トイレの落書き 290

懸賞生活
懸賞生活 298

忘れ物
忘れ物 306

テロリスト入門
テロリスト入門 314

チューリップの花言葉
チューリップの花言葉 320

枯渇
枯渇 328

忘れ物
忘れ物 334

院長先生
院長先生 340

カゴに入った三匹のアライグマ
カゴに入った三匹のアライグマ 348

毒蛇
毒蛇 356

死神の頼み事
死神の頼み事 364

冬眠から目覚めた朝
冬眠から目覚めた朝 372

目からウロコ
目からウロコ 380

パンドラの箱を開けてみれば
パンドラの箱を開けてみたら 388

「五時四十六分の時計」
「五時四十六分の時計」 396

散る桜と去る桜
散る桜と去る桜 404

妖怪奇譚
妖怪奇譚 412

金庫破り
金庫破り 420

にわか占い師
にわか占い師 428

ペルシャ猫
ペルシャ猫 436

剣豪
剣豪 444

恐怖の携帯メール

恐怖の携帯メール 452

時計職人
時計職人 460

年賀状シーズンの一風景
年賀状シーズンの一風景 468

結婚行進曲
結婚行進曲 476

ファミリー・ビジネス
ファミリィ・ビジネス 484

路上ライブ
路上ライブ 492

フェア・プレイ精神
フェア・プレイ精神 500

隣の不幸
隣の不幸 508

幽霊マンション
幽霊マンション 516

犯人なき犯行
犯人なき犯行 526

職業選択の自由
職業選択の自由 534

ギア・チェンジ！
ギア・チェンジ！ 542

猛毒のおひたし
猛毒のおひたし 550

真夏の殺意
真夏の殺意 558

カブトムシの中の妄想
カブトムシの中の妄想 562

戦略的獲得
戦略的獲得 566

一番になる才能
一番になる才能 574

クールビズ
クールビズ 582

アルバイト生活
アルバイト生活 590

タヌキのお札
タヌキのお札 598

まむし酒
まむし酒 606

目印
目印 614

吸い取り石
吸い取り石 622

富士登山
富士登山 630

お遍路さん
お遍路さん 638

晩秋
晩秋 646

カラフルボックス
カラフルボックス 654

総崩れ
総崩れ 662

ハイブリッド自転車
ハイブリッド自転車 670

完璧なイミテーション
完璧なイミテーション 678

晴耕雨読
晴耕雨読 686

交差点

交差点 692

乳歯
乳歯 698

イナズマ運輸
イナズマ運輸 704

健康の価値
健康の価値 710

ブラック電話帳
ブラック電話帳 716

ニワトリ
ニワトリ 722

抜け道
抜け道 728

容疑者X
容疑者X 734

真夜中のこびとたち
真夜中のこびとたち 740

タイムマシンに乗って
タイムマシンに乗って 746

遺品
遺品 752

原稿プロセッサ
原稿プロセッサ 758

エスピオナージ
エスピオナージ 764

北斎
北斎 770

柿とメジロ
柿とメジロ 776

放屁
放屁 782

完璧な喫茶店
完璧な喫茶店 790

収賄
収賄 798

遭難
遭難 804

おばあさんの背中
おばあさんの背中 812

名刀
名刀 818

ツキノワグマと老ハンターたち
ツキノワグマと老ハンターたち 824

オウムの独り言
オウムのヒトリゴト 832

絶望と花束
絶望と花束 840

狂った時計
狂った時計 848

ロボットと夢と希望
ロボットと夢と希望 856

ＮＩＣＵ
ＮＩＣＵ 862

埋葬
埋葬 870

レトルトバナナ
レトルトバナナ 878

２００時間
２００時間 886

飲酒検問
飲酒検問 894

おばあさんポスト

おばあさんポスト 902

老老介護
老老介護 908

パガテサバティ
パガテサバティ 916

葬儀社の女
葬儀社の女 922

仮想通貨
仮想通貨 928

逆走車
逆走車 936

転職と転職
転職と転職 942

高レベル廃棄物処分場
高レベル廃棄物処分場 950

諜報戦・エスピオナージ
諜報戦・エスピオナージ 958

小説家、小説を書く
小説家、小説を書く 966

振り込み詐欺
振り込み詐欺 972

司法通訳
司法通訳 978

暗闇のかくれんぼ
暗闇のかくれんぼ 982

魔女の宅急便
魔女の宅急便 986

ナマズの養殖
ナマズの養殖 990

遺伝子操作
遺伝子操作 994

１３日の金曜日
１３日の金曜日 998

お姉ちゃんのハムスター
お姉ちゃんのハムスター 1002

火星旅行
火星旅行 1006

凶悪犯罪者
凶悪犯罪者 1010

子ども病院
子ども病院 1014

放火魔ｖｓ消火器男
放火魔ｖｓ消火器男 1018

テッポウ厳禁
テッポウ厳禁 1022

チタンカーメン
チタン・カーメン 1026

IR
ＩＲ 1030

小鳥
小鳥 1034

接待
接待 1038

アジの自販機
アジの自販機 1042

NG ワード辞書
ＮＧワード辞書 1046

トンビにサンドイッチを攫われる
トンビにサンドイッチを攫われる 1050

ウグイス
ウグイス 1054

ハブ茶とハブ茶とハーブティー

ハブ茶とハブ茶とハーブティー 1058

AI 棋士
ＡＩ棋士 1062

電動車いすマラソン
電動車いすマラソン 1066

昆虫食ノススメ
昆虫食ノススメ 1070

最後の一報
最後の一報 1074

タイムトラベル
タイムトラベル 1078

尾翼の行方
尾翼の行方 1082

最後のフライト
最後のフライト 1086

弱気な競技者
弱気な競技者 1090

苦渋の決断
苦渋の決断 1094

アクリルガラスの向こう側
アクリルガラスの向こう側 1098

はじめに

電子書籍作家の黒川文《くろかわ　ぶん》です。
地元、神戸の神戸新聞の文芸に投稿を続けています。
初期は原稿用紙１２枚、そして、１０枚、７枚と変更を重ねて今に至ります。
２００６年からの活動です。

大体、１作５分くらいで読めるでしょうか。
電車一駅分。
時間つぶしにしていただければ幸いと存じます。

輪ゴムのイカフライ

輪ゴムのイカフライ

わたしは当時スーパーの店長をしていた。

都内にいくつもある中規模チェーンの中でも結構売り上げのある店で、他のスーパーから赴任を命じられたときには、少しは誇らしげに感じたものだった。自宅の賃貸マンションからは少し遠くなり、帰宅時間が少し遅くなったこと以外に特に不満はなかった。

以前の店よりも多くのパートの女性と、食品メーカーからの店頭営業の女性が多かった。だが、彼女たちは比較的、自分たちで仲良くやっており自治のルールもあるようで、店長として介入しなければならない問題もなく、比較的楽な職場であった。

ある日、店内の商品在庫を確認して回っていると、試食の担当をしている、吉崎さんと言う女性から、苦情めいたことを言われた。

「あの、店長、こんなこと言っていいのか、……」

「なんですか？」

「あの、毎日お昼ご飯代わりに、試食品を食べているおばさんがいるんです」

「何だって？」

わたしは、意味がわからなった。試食品は元々、お客さんに食べてもらうためのものである、それに、お昼ご飯代わりかどうかなんて、どうして分かるのか、彼女に問い詰めた。

「すみません、証拠何てありません、ただ、……毎日同じ時間に来て、全売り場の食品を試食して、最後はジュースとワインを飲んで、満足げに帰って行くんです」

「満足げならいいじゃないか、それに、それだけじゃ文句のつけようもない、気にせずに職務を続けてください」

彼女は不満そうに、はい、と返事をした。

次の日、同じように、お昼頃、店内を巡回していると今度は精肉売り場で、焼き肉用のお肉をグリルで焼いて試食用にしている担当の沢井さんという女性が昨日と同じ様な、苦情めいたことをわたしに伝えた。

「あの、店長、こんなこと言っていいのか、……」

「まさか、試食おばさんじゃないだろうね？」

「そうなんです」

「もう、気にせず、職務を続けてください」

彼女は、黙って、むっとしてしまった。

だが、わたしは何となくその女性のことが気になってきた。一体、この店のパートに嫌われるくらい試食を繰り返しているなんて、何をしているんだろうと思った。

この店の客は多く、彼女たちの職務も試食担当だけではない。普段は精肉担当で、たまに週に一回くらい、試食担当になるだけだった。だから、その彼女たちに顔を覚えられるなんて、ただ者ではない。そう思ったわたしは、念のため、食品メーカーから来ている、店頭営業員に聞いてみた。

ハムのメーカーから来ている若い女性は、

「はい、確かにあの女性は他の店でも見たことがあります」

と、答えた。色んなスーパーでこうした店頭営業をしているのだから、それこそ何千人という客にハムの試食を勧めているはずだ、どうして覚えていられるのか不思議だった。

「ええ、ちょっと変わった人なんです。普通は楊枝に刺したハムを一口食べて頂くだけなんですが、その方は、楊枝はいらないよっておっしゃられて、自分の持ってきた、タッパに入れて持ち帰られるんです、それもお代わりをなさってまで」

「何だって？ それは試食じゃないじゃない？」

「ええ、そう思うんですけど、こちらもお断りすることも致しかねまして」

そんなことを、言っていた。わたしは、厚かましい人がいるもんだなと、ついでにビールの営業が来ていたのでそちらにも聞いてみた。

「ああ、あの女性ですか？ 来ますよ」

「それで、爪楊枝はいらないって言うわけ？」

「いいえ、ビールですから。サンプルの缶から、水筒に入れてくれって、……お断りしようかと思ったんですが、こちらも売るのが商売じゃないですからねえ。」

言われてみれば、確かに試食品は売るのが商売ではないが、そこまで厚かましいと逆に腹が立ってきた。さっき話しを聞かなかった、パートの女性に話しを聞くとその場で食べたり、タッパに入れて持ち帰ったりと言ったことは同じだった。わたしは、明日の試食担当のスケジュールを確かめて、担当者にその人が来たら教えてくれと言っておいた。自分の目で確かめて目に余るようだと、一言注意しようと思ったからだ。

次の日、わたしは早めに昼食を取り、店内を巡回しながらあの女性を待ち伏せしようと身構えていた。途中でレジの女性に、目つきが怖いですよと言われてしまったほどだ。こちらも、かなり意地になっていた。

十二時十分、インターカム（店内無線）で焼き肉の試食の所にあの女性が来たと言う情報を受け、小走りに店内を急いだ。だが、わたしが到着したときには既にそのおばさんは立ち去った後だった。わたしは、焼き肉の試食担当の女性にその時の様子を確かめた。

「はい、いつもの中年女性でした。タッパに焼き肉の爪楊枝はいらないからと、二、三切

れお持ちになりました」

そんな、おばさんに敬語を使うなと思ったが、わたしは冷静に聞いた。

「買い物かごには何か買っていた？」

「はい、……でも、お一人様一個限りの特売のコーヒーと玉子だけでした」

「そう」

わたしは、完全に頭に来た、軽くあしらわれたと思うと同時に、スーパーを馬鹿にしていると思ったからだ。わたしは裏に戻り、調理担当に相談した。

「何かいい手はないかな？」

「そうですね、でも変なことするとこっちが訴えられるかも知れないし、……」

確かにその通りだった。腐った肉など出しては後々問題が大きくなる。

「ハムサラダにからしをたっぷり塗っておくと言うのはどうだろう？」

「でも、そのおばさんに当たればいいけど、他のお客さんに当たると大変ですよ」

「それもそうだな」

結局いいアイディアも浮かばす、そんなことにかまけていないで、商売に専念する方がいい、そう思い直した。

だが、次の日もそのおばさんが現れたと、報告をうけたわたしは、また現場に急行した。

「今度は何をした？」

「あの、ワインを半分水筒に入れてお持ちになりました」

「買い物かごには何か入っていたかい？」

「あの、特売品って言うんですか？ トマトが一つ」

わたしはとうとう計画を実行に移した。

総菜担当に頼んで、からしをたっぷり塗り込んだ、ハムを混入したハムサラダを用意し、試食担当者には別の皿を用意してそのおばさんが来たときだけ、このハムサラダを出すように言った。試食担当もこのおばさんには腹が立っているらしく、作戦に乗り気だった。

次の日、わたしは現場を押さえるべく店内を巡回した。

突然、レジの女の子がわたしを呼びに来た。

「どうしたの？」

「あの、迷子です。売り場でお母さんとはぐれたらしいです」

「そう、僕が相手をするよ、君はレジに戻ってくれ」

「はい」

迷子は三歳くらいの女の子だった。名前を言えるかなとわたしは心配しながら、なるべく優しく声を掛けた。

「お嬢ちゃん、いくつなのかな？」

「……」

「お名前は？」

「……」

「ママと一緒だったの？」

「うん」

得られた情報はこれだけだった。店内放送で、わたしはアナウンスした。

《三歳くらいの女の子を預かっています、白いトレーナーと赤いスカートの女の子です。お心当たりのお母さん、レジ前のサービスカウンターまでお越し下さい、繰り返します……》

しばらく待っていると若いお母さんが飛んできた。女の子も、ママと呼んでいる。これで、わたしも安心した。若いお母さんはどうもすみませんと、何度も頭を下げ、女の子を叱って、帰って行った。

ふと、からし入りハムサラダを思い出した。わたしは小走りにハム売り場に行った。だが、担当者の話では、いつものおばさんは帰った後の様だった。

「あのおばさん。引っかかったかい？」

「いいえ、うまくからしの付いたのをよけて、いいところだけつまんでタッパに入れて帰りました」

「またかよ」

その日、家に帰ると、わたしは不機嫌だった。妻は何かあったのと聞いてきたが、話しをするには余りに馬鹿馬鹿しすぎる。相談相手もないまま次の日、スーパーに出勤した。

わたしは、さらに意地になっていた。今日は総菜担当者に、イカフライと輪ゴムのフライを作るよう依頼した。さすがに顔色が変わっていた。

「そんなの食べたら死んじゃいますよ」

「輪ゴムなんかで死ぬもんか」

また、皿を二つ用意し、おばさん用と一般客用とに分けた。もはや完全な動物用の罠みたいだった。試食担当者には厳重に注意をしておいた。万が一普通の客がこんなもの食べたら大騒ぎになるし、業務停止処分を食うかも知れない。

わたしは、また店内を巡回した。今日もおばさんを目撃することが出来なかったが、試

食担当者からは、おばさんが罠に掛かったことを知らされた。わたしは心の中で喝采を上げた。

「おばさん、あれ持って帰ったの？」

「はい、三つほど。相変わらず、買い物は特売品のティッシュだけでした」

「いいよ。うん」

わたしは、それだけで満足だった。

その日、わたしはうれしそうな満面の笑みで帰宅した。妻は何かいいことあったのと、聞いてきたが、余りに馬鹿馬鹿しすぎるので、やはり、言えなかった。

その日の夕食のおかずはフライだった。

わたしは、イカフライを一つ口に入れた。

輪ゴムだった。了

植え込みの中にて

植え込みの中にて

十月は植木の剪定に適した時期である。

道路の街路樹は言うまでもなく、公園の樹木やマンションの植木も、この時期一斉に剪定作業に入るのだ。もちろん、個人宅では職人などに頼まずに、自分でやられることが多いが、道路や公園は植木職人の本領である。

わたしは当時、植木職人の下でアルバイト作業員として働いていた。

高い枝を払うときには、はしごを用いて鋏やのこぎりで落とし、低木ではエンジン付きのバリカンを使う。どちらの場合も、みるみるうちに――まるで散髪をするかのように――余分な枝は払われ、綺麗な姿になっていく。これもただむやみやたらに枝を払うのではなく、来年の初夏を迎え新たな枝が伸びた時期に綺麗な姿になるように職人の頭の中で計算しながら切っている、そうだった。

その日、わたしが助手についた職人はバリカンでバリバリッという甲高い音を立てながら、公園を取り囲む低木の枝を払っていった。みるみる枝葉の山が出来ていく。それを熊手で集めてトラックの荷台に積みこむのがわたしの仕事だった。

汗が額を伝って目に入ろうとして、軍手をした手の甲で汗をぬぐう。

公園には公衆トイレがあり、道幅の広い道路に面していたので、タクシー運転手の休憩場所になっていた。仕事の手を休めて見ていると、ひっきりなしにタクシーが停車し、背伸びをしながら運転手が降りてきてドアのロックをしてトイレに向かう。しばらく、知り合いの運転手同士で話し込んでいる人もいると思えば、すぐに車に戻り営業に向かう運転手もいる。

しかし、駐車スペースと化した道路の前には交番があり、常時数人のお巡りさんが詰めている。何も言われないのかなと、不思議に思っていた。まあ、交番にトイレを借りに来られるよりはいいのかもしれない。まあ、そんなことはどうでもいい。

そして、その横では公園で犬の散歩をさせる人たちが大勢うろうろしつつ、犬に小便をさせたり、糞をさせてその処分をしたりしていた。当然、熊手で集めた枝葉の中にはそういったものも混じっている。乾いているものはいいが、湿ったものは慎重に処理しなければならない。

そんなある時のこと。

「おや？」

わたしは熊手で植木の下から枝を掃き出したとき、いつもと違う感触がしたのに気づいた。がさっという音がして何かが引っ掛かった。結構な重量感が、熊手の竹を軽くしならせる。ゴミを捨てていく人がいるのか？　のぞき込んでみると紙封筒のようだ。

わたしは軍手のまま手を伸ばし、封筒を指先でつまみ出した。雨で濡れたのだろうか、黒く粉を吹いたように変色している。封がしてあったが、わたしは隙間から中身をのぞき込んだ。ぎょっとした。

――現金だ。

わたしは親方に見えないように、背中を向けてその場でかがんで、軍手を外し、中身をじっくりと確認した。隙間から指を入れて、一枚、一枚、くっついているのをはがして確かめた。自分の中では結構な時間がたったと思う。汚れた紙の札が百枚入っていた。封筒は近くの郵便局のもののように思えた。

植木の向こう側を歩行者が横切った。わたしは彼らからも見えないようにさらに身体の向きを変えた。

「おい、何をしてんねや。手が止まっとるで！」

「あ、いいえ、何でもありません」

わたしは封筒を汚れた作業服のズボンのポケットにねじ込んだ。ずっしりとした紙幣の重みが布地を通して肌に感じ取ることが出来た。

心ここにあらずという状態で、わたしは百枚の札束の使い道をあれこれ想像してみた。当面のアパート代、食費、国民年金に国保、.....そして、前から資格を取るために通おうと思っていた専門学校の入学金にも。わたしの想像は膨らんだ。

法律系の資格、例えば司法書士の試験を受けて合格して、当面は雇われで働き、資金が出来たら自立して事務所を構える。そんな遠くの未来までぼんやりと頭の中に浮かんでは消えた。

そんな悪魔のささやきに対抗して、司法書士なんかになるのならネコババ（法律用語では遺失物横領だ）などしてはならないぞ、と良心がとがめた。

「おい！」

さらに親方の怒鳴り声が聞こえた。バリバリバリとバリカンを動かし、枝を払う手は止めずに。彼の額から汗がこぼれ落ちた。わたしは急ぎ、自分の作業に集中した。

熊手で枝葉を集め、トラックの荷台に放り込む。細かい葉っぱが宙を舞い、目に入って涙が出た。

「お前、さっきから様子がおかしいで。何かあったんかいな？」

「え、いや、別に」

「嘘を言うな。ポケットになんぞ入っているやないか」

「あ！」

ズボンのポケットは工具入れとして使えるくらい容量が大きいものであったが、作業補助の身分では入れるべきものは特段なく、ここがふくれているのは本来おかしいものであったのだ。

わたしは良心の呵責と、親方の視線に耐えられず、おそるおそる真相を話した。そしてポケットからお札の入った封筒を取り出した。

「これ、どこに落ちていたんや？」

「さっき親方がバリカンで刈っていた植え込みの中です。枝を集めていたときに熊手に引っ掛かったんです。こっそり数えたら百枚入っていました」

わたしは正直に白状した。

「ふうん。世の中には運のええもんもおるんやなあ。わしなんか、今まで百円以上の金額なんかひろうたことあれへんで」

親方はしれっとしてそう言い、百万円入りの封筒をしげしげと見つめた。

わたしの背中には、これで、このアルバイトをクビになってしまうのではないかということと、良心の呵責、ここから見える交番への通報などいろんなことで頭が一杯になり、背中にじっとりとした寒気をおびた汗が滲んできた。もう終わりだ。

「おい、これ山分けにせえへんか？　ええやろ」

「は？」

思わぬ展開になってきたと思った。謹厳実直だと思っていたこの男がとんでもない悪党であるとわかったのだ。しかし、人間誰しもこれだけの大きな金額を目の前にすると変わってしまうのかも知れない。でもこれなら、親方が主犯でわたしは単に分け前をもらうだけとなり、罪の意識は幾分和らぐのだ。五十万円でも今のわたしには十分な金額だった。後はうなずくだけだった。

わたしはポケットの中で泥に汚れた封筒を握りしめた。

と、同時に考えた。――誰が落としたのだろう？　郵便局でお金をおろした後、この公園のトイレに行く途中で落としたに違いない。もし、身寄りのないお年寄りの生活費だったらどうしよう。そんな人の虎の子をネコババするのはひとでなしのすることだ。

「あの、……職人、すんません」

「なんや？」

職人の目がぎらりと光った。今更、交番に届けようとは言い出しにくくなってしまっていた。白目の部分に血管が赤く浮き出し、凄惨な顔つきになっている。悪いことをする人の形相だった。

「実は……あの……」

「なんや、はっきり言え」

「実はさっき、お巡りさんがこっちを見ていた様な気がするんです。届けないと怪しまれるかなと思って……」わたしは職人からこの封筒を守ろうと試みた。

「あほか。ここのお巡りさんが仕事なんかしとるもんか。現にタクシーの路上駐車し放題やないか」

わたしは追い詰められた。

親方と対峙したまま三十秒くらいが経過したと思う。

バリカンのエンジンが止まったままであるのを不審に思った交番のお巡りさんが、こちらを見ていることに気がついた。職人はちらりと交番の窓を一瞥し、見られていることを悟ると、何も言わずにバリカンを持ち上げてエンジンを掛けた。また、バリバリと轟音を上げ、わたしには何も言わなくなった。

わたしは職人に「トイレに行ってきます」とだけ告げて、その場を立ち去った。

封筒はさっき見ていた交番のお巡りさんに、落ちていた場所を告げ、遺失物として正式に届け出た。六ヶ月経って落とし主が現れぬ場合にはこれはわたしのものになるらしい。

お巡りさんは、わたしの見ている前で封筒を開け、中身を取り出した。そして、おやっと言う表情になった。

「あなた.....」

「は？」

「これ、お金じゃないよ。ただのクーポン券だ。きっかり百枚なのは合っているけどね。しかも、期限は先月末で切れているよ。多分、要らなくなって植え込みの中に捨てたのだろうね。.....まあ、こう言っちゃ何なのだけど。君も正直なひとだねえ。最近ではお札でも、自分のポケットにしれっとした顔で入れてしまうひとが多いのに。あはは」

お巡りさんはそう言って笑い飛ばした。しかし、落とし物は落とし物である。彼は面倒臭そうに机の引き出しから用紙を取り出して書類を作成した。

交番から戻った後も、親方はわたしに話しかけることはなく、わたしも作業報告の他は話すこともなくなった。彼はわたしが百万円を渡さなかったことに酷く憤慨しているみたいだった。もう、お札ではなかったことは、問題ではなくなってしまっていた。この一件の後、わたしは作業助手のアルバイトを辞め、それ以来、親方とは会っていない。了

万国郵便条約

万国郵便条約

江戸時代の終わり頃、吾一《ごいち》は田舎で生まれた。小さいときから走るのが速く、よくお使いものを頼まれていた。吾一が十歳になると父親は吾一を、飛脚問屋の丁稚《でっち》に出した。

丁稚というのはその店に住み込みで働き、仕事を覚えながら修行することで、戦前まであった。もちろん給料制ではない。

吾一もしばらくは見習いだったが、やがて、親方に脚が早いことと、真面目なことを買われて段々と大事な仕事を頼まれるようになった。

飛脚の仕事は手紙やお金などを、料金をもらって運ぶ仕事である。時間通りに正確に届けることが信用を守ることであった。村の名主《なぬし》からの手紙を隣村の名主や大きな商家に届ける、それが吾一の誇りでもあった。早く運ぶには馬で運べばもっと早かったのだが、昔は馬は身分の高い武士にしか許されておらず百姓であった吾一たちの身分では自分の脚で走るのが一番の早道であった。

だが、江戸時代も終わり、時代が明治になって間もなく、飛脚が次々と駅逓所（郵便局）に仕事を取られていった。親方は大きな店だったので、自分の店を駅逓所に変えてしまった。

ある日吾一が、親方の部屋に行くと、壁に駅逓所長の辞令が掛かっていた。「駅逓所長（郵便局長）を任ず、駅逓頭《えきていのかみ》前島密《まえじま・ひそか》」吾一が見るところ、政府の偉い役人からもらったものの様だった。

駅逓頭とは後の郵政大臣、今の総務大臣のことである。親方が誇らしげにするのも無理はなかった。吾一は親方がこれが欲しいために、飛脚問屋から駅逓所に変えたのかと勘ぐった。

吾一は今まで名主や大店への配達ばかりだったのに、駅逓所になった途端、宛先に書いてあるどんな人にでも運ばなければならなくなり脚の速い吾一にはそれは苦痛ではなかったが、彼の飛脚としての誇りは少し傷つけられた。

そんな吾一に親方が言った。

「おい、万国郵便条約を知っているか？」

「ばん……、それは何ですか？」

吾一はそんな難しい言葉は知らなかった。

「明治十年に我が国が加盟した。これで切手さえ貼ってあれば例え外国でも、イギリスの王様だろうが、アメリカの大統領だろうが届けなければならない。画期的な条約だ。その代わりこの村に外国からの手紙が届いたらお前が届けるんだ」

「はぁー、じゃあわたしがアメリカの大統領に手紙を書いても届けてもらえるんですか？」

「その通りだ。読んでもらえるかは知らないがな」

その言葉に吾一は感動した。自分が運んでいる手紙がその世界をまたに掛けたネットワークの一部だと知ったからだ。その日から吾一はまた、仕事に誇りを持って手紙を配り始めた。

そして、配達先で会う人ごとに、この郵便制度は世界中共通で切手さえ貼れば、世界のどこにでも届けられるんだと自慢して回った。

それを聞いた村の学者の先生が、それじゃあと外国語で書いた手紙を吾一に託した。吾一は自慢した手前、引き受けて帰った。

吾一は不安になり、親方、今は駅逓所長だが、相談すると、隣の村の駅逓所まで持って行け、後は同じ駅逓所同士でどんどん引き継いで、最後は横浜の港に着くはずだ。そう吾一に命じた。吾一はその手紙を懐に抱えて隣村の駅逓所に届けた。

やがて、六ヶ月ほど経った頃、相手からの返事が来たらしく外国語の手紙が再び吾一の村にやって来た。所長は、

「これ、読めないけど多分あの先生だろうな」

と言って、吾一に配達を命じた。

吾一は本当にあの先生の手紙が遠い外国に届いて、その返事がまたこんな田舎に届いたのだろうかと、半信半疑ながら、村の学者の先生にその手紙を届けた。先生は、うれしそうにその手紙を受け取った。吾一は先生に、その手紙が何なのか聞いた。

「これはなイギリスの大学の先生に、植物の肥料について質問した手紙の返事なのだ。これから翻訳しないとわしにも分からんが、お前さんがほら吹きでないことが証明されたな。はっはっは」

吾一は少し腹が立ったが、それにしても、こんな田舎の村とイギリスの大学が手紙でつながったことに感動した。

この万国郵便条約は今では世界一八九カ国が加盟し、世界中の郵便物をやりとりしている。了

お父さんの参観日

お父さんの参観日

六年生の一学期の終業式の後、各クラスでホームルームがあり、先生は夏休みの宿題と共に奇妙なプリントを配った。

受け取った子供達は皆、首をかしげている。「父親参観」と言うのはよくあるが「お父さんの参観日」って何だろうと不思議に思ったのだ。

渡辺桃《もも》は先生に質問した。

「あの、先生、お父さんの参観日って何ですか？」

「はい、いい質問です。日頃、お父さんが仕事をしている姿は見たことないと思います、もちろん家で商売をなさっている方は別です。そこで夏休みの中の一日を利用して、各会社に見学しに行って貰うことにしました」

「えぇー」

皆が声を上げて文句を言った。

「はい、はい、静かに、折角の夏休みですから普段出来ない勉強をしましょう、では」

桃は少し不安だった。家では休みの日はゴロゴロしているお父さんだが、会社でもゴロゴロしていたらどうしよう。そんなつまらないことを考えていた。

家に帰るとお母さんにそのプリントを見せた。お母さんは、知っていたらしく、それをちらっと見て桃に言った。

「じゃあお父さんには言っておくから、桃ちゃんは宿題をしなさいね」

「はーい」

後はお母さんが、話をしてくれるだろうと安心して任せていた。その日もお父さんは夜遅く帰ってきた。桃はもう寝ていた。お母さんは桃が寝た後でお父さんに、保護者の勤め先に各児童が学校から見学に行くと言うプリントを見せた。

「おい、お母さん、これ何だよ？ 知らないぞ、会社の許可なんか取れないぞ」

「またまた、教育委員会から直接、あなたの会社の総務課に連絡するって書いてあるわよ」

「おい、これ全部の小学六年生にだろ？」

「そうよ、昔だったらパニックだっただろうけど、今は一クラス二十五人だから、楽だと思ったんじゃない？」

次の日の朝、お父さんは朝食の時間に、桃に言った。

「おいモモ子、参観日の日はお腹が痛いと言って休め、来ても面白くないぞ」

そんなことを言い出した。

「モモ子じゃなくて桃だよ」

――お父さんはいつも、モモ子と呼ぶのだ。桃は嫌だったが、嫌がると余計に面白がってそう呼ぶ。

「それにお父さん、これ行って感想文書かないと夏休みの宿題が終わらないの」

「じゃあ、俺が書いてやるよ」

「駄目よ、あなた、そんなことしちゃ、ちょっとの間だからいいじゃないの？」

お母さんが取りなしてくれた。

参観日当日、お父さんはいつも通り、六時五十分の電車で通勤してしまったが、桃は十時頃行くので九時の電車に乗って行った。会社は、海岸近くにある電機メーカである。お父さんはそこの発電機の設計部で働いている。

会社の受付で、桃が小学校からの手紙を見せると、総務課の人がやってきて会社の中を一通り案内してくれ、最後にお父さんのいる事務所に連れて行ってくれた。

「じゃあ、お昼ご飯は会社の食堂でお父さんと食べてね、それから、一時に迎えに来ます、じゃあ渡辺さんよろしくね」

と、総務課の人はお父さんに挨拶して行ってしまった。

お父さんは、渋い顔で机に向かい書類を書いたり、それをパソコンに打ち込んだりといったことを繰り返している。桃は最初、電機メーカと言うから工場の中を製品が並んで製造されるようなことを想像していたが、お父さんの言うとおり全然見てて面白くないところだった。感想文どうしようかなと、桃が悩んでいると……。

「渡辺君ちょっと」

と、お父さんは課長さんらしき人に呼ばれた。桃は先生に怒られる自分を想像した。

「この書類は何だね、お客の仕様書と合っているのか？」

「はい、そう言う契約です」

「馬鹿野郎、そんな契約があるか、どうして見積時に報告しないんだ、万が一の時、こっちが赤字になるじゃないか？」

「万が一にならないよう、努力します」

「上に報告する、その万が一にならない方法を何例か考えろ、いいな」

「はい」

お父さんは真っ赤な顔で戻ってきた。ゴロゴロしていないのはいいが、怒られるのも可哀想と桃は思った。

「おい、モモ子、ジュースでも奢ってやる」

と、お父さんは桃を誘って休憩に行った。桃は休憩なんかしていて、いいのかなと思いながらついていった。お父さんは自動販売機にコインを入れた。

「どれでもいいぞ、好きなのを選べ」

そう言われたので桃は、フルーツヨーグルトを選んだ。お父さんはコーヒーだった。コーヒーを飲みながらお父さんは言い訳した。

「モモ子、お父さんは別に怒られていたんじゃないぞ、分かるか？」

「うん」

「書類の解釈に俺と課長とで食い違いがあった、それだけのことだ、日常茶飯事だ」

「うん、お父さんは悪くないよ」

と、桃は答えざるを得なかった。仕事内容なんてよく解らないし、課長に怒られた後、ジュースで機嫌を取ってごまかした上、娘にまで馬鹿にされたのでは可哀想と思ったのだ。

休憩が終わるとお父さんはさっき言われた資料を作る為に、スタッフに過去の事故事例の資料を資料室から取り寄せさせ、自分は文章をパソコンに打ち込んでいった。ときどき、事務のお姉さんが、書類を届けてくれると冗談を言ってからかっていた。

桃は、お母さんに言ってやろと思った。だが、仕事をしているお父さんは格好よく見えた。最初はここでゴロゴロしてたらどうしようと思っていたら、陸に上がったペンギンと水中のペンギンほどに違っていた。

昼のチャイムが鳴り、桃はお父さんに連れられ、会社の食堂に行った。

「何がいい？ Ａ定食とＢ定食とうどんがある」

「どれが美味しいの？」

「馬鹿だな、どれも一緒だ、何なら会社の前の食堂で、カレーでも食うか？」

「うん」

少し歩いて、正門を出ると他の作業員達も同じように出ていた。適当な喫茶店を探すと、そこに入り、カレーライスを二つとアイスコーヒーとフルーツジュースを頼んだ。

ウェイトレスがすぐに持ってきてくれた。

「早いんだね、ここ」

「そうさ、会社の昼休みがかき入れ時なんだ。それで、宿題のネタにはなりそうか？」

「わかんない、お父さんが怒られてましたなんて書けないもの」

「優しいなあ、モモ子は。だがな、適当に書いておけよ、上司の課長の指示を受けてパソコンとかＩＴ技術を駆使して資料を作って提出し、誉められましたって」

「誉められるの？ これから」

「ああそうだよ、でもモモ子は昼から帰るんだったな、残念だな」

お父さんはそう言って笑った。絶対に昼からもっと偉い人に怒られに行くんだ。だから自分を早く帰そうと企んでいるんだと、桃は勘ぐった。それで帰った振りをしてコピーの陰に隠れてお父さんを夕方まで観察することにした。でないと、このままでは感想文が書けないと思ったのだ。

昼からのお父さんは、二時頃からゴロゴロといつものように集中力が切れ、事務員のお

姉さんのお尻を触ったりしてふざけだした。桃はきちんとメモを取り出した。

三時になると課長が会議から戻ってきて、それを見るとお父さんの背筋が伸びた。

「渡辺君、資料は出来たの？」

「あと少しです、済みません」

実際は、少しどころか全然出来てないんだろうなと、桃は思った。案の定、さっきの余裕はなくなり必死にパソコンに向かい文章を打ち込み始めた。そんなことなら、お姉さんのお尻なんか触ったりせずに真面目にやれば良かったのにと、桃は思った。

――わたしの夏休みの宿題と同じじゃん。

桃も八月の終わり頃になるまで宿題には手を付けない。お父さんに似たからだと、お父さんを恨めしく思った。

やっと出来た資料のコピーを取って、お父さんは課長に説明しに行った。

「万が一の事態ですが過去の故障及び事故の例はこの資料の通りで、こちらの補償額は右側の数字です」

「ふむ、それで、それを回避するにはどうするんだ？」

お父さんは、そこで詰まってしまった。

「馬鹿野郎！ 補償額がこれですなんて部長に報告できるか、壊れて被害が出ない保証でもあるのか、違うだろ？」

「はい、その通りです」

――あーあ、案の定怒られてるじゃん、お姉さんのお尻ばっかり触ってるからだよ。

絶対にお母さんに言いつけてやろうと、桃は思っていた。

もう絶体絶命だと思ったとき、若い背の高いかっこいい女性が、仲裁に入った。

――うわ、かっこいい、誰だろう？

「あの、課長、ちょっといいですか？」

「なんだね」

「その事故の事例は全てメンテナンス上の不備による物で、設計上のミスではありません、ですが道義上の責任から当社が補償したものです。ですので、設計サイドとしては、点検箇所に整備上の注意を促す、ラベルを取り付けることで責任は果たせるものと考えられますが、どうでしょう？」

「ふむ、ラベルねえ、まあそれでいいだろう。取扱説明書にもきちんと反映しておけよ、いいな」

「はい」

「じゃあ、これで部長に報告しておく」

課長はそう言って出ていった。お父さんはその女の人に、御礼を言っていた。

「お父さんあの人だあれ？」

「うわっ、お前まだいたのか？」

「うん、全部見てたよ」

「あの子はね、去年入った大学院出の優秀な子だ、それに会社の女の子をからかっていたのは母さんには内緒だぞ」

「どうしよっかな、えへ」

桃は、その女性に憧れを抱いた。

――わたしも勉強して大学院にいこっ。

夏休みの宿題も終わらないのにそう決心した桃だった。参観日も無駄ではなかった。了

デパ地下大騒動

デパ地下大騒動

わたしは都内にある老舗デパート地下食品売り場の企画を担当していた。各テナントの売り場面積当たりの売り上げを監視したり、時には新しい催し物の企画を考えたりと言ったことをしている。

今日、先月の各テナントの売り上げをデータにまとめ、それを売り場面積で割った数字を上司の大川主任に報告した。彼は、まずまずの表情を見せながら注文を付けた。売り場面積当たりで評価するのは、デパートの地下食品売り場の面積が限られているので、如何にそのスペースを有効活用するかが、この業界の死命を制するものであると同時に、広いスペースを取っているテナントと、少ないスペースで頑張っているテナントを公平に評価する目的もあった。

大川主任は、不機嫌そうに言った。

「おい、丸川豆腐店の売り上げがここ三ヶ月三割以上落ちている、三割というのは季節のせいじゃないぞ、どうなっているんだ？」

「色々事情があるみたいです」

「その事情を聞いているんだ！」

「はあ、中東情勢の混乱で、石油価格の高騰が回り回って大豆の原価を押し上げ、結果的に値上げには踏み切れず、質を落としたようです」

「むしろ値上げして売り上げをキープすべきだったな」

「最初はそうしたんですが、何しろ豆腐ですから値上げしてまで売れるようなものではありません」

「なら、来月から撤去だ、新しいテナントに入ってもらうしかない、お前、連絡しろ」

わたしは、そう言われるのは前々からわかっていたが、実際、この宣告をするのはつらかった。先代店主の代からここで商売をしていてわたしも入社当時はよく勉強させてもらったものだった。今の店主が無能だとは思わないが、やはり、工夫がないと生きていけないのが実情なのだ。この売り場に豆腐店はもう二軒あり、どこも大変そうだが何とか珍しい名前を付けたりして頑張っている。

売り場に出ると、鮮魚店のおやじに呼び止められた。

「あのさ、明日のまぐろ解体直売会のマグロが入ってるよ」

「そうですか」

わたしは、そのマグロを見に行った。これは、毎週土曜日の夕方に開催している、キハダマグロを店頭でさばいてもらい、直売すると言うものでこの売り場の呼び物の一つだった。企画したのはわたしで、結構評判もよく、また、マグロのトロもその場で買えるとあって客の評判も概ねよかった。

鮮魚店の冷蔵庫に入ったマグロを見ると、今週のは二百キロを超えそうな本マグロだった。

「よく手に入りましたね」

「いやぁ、デパート側で漁港と直接交渉してくれたからですよ、卸売市場に入るとこんなのは高級料亭や銀座の寿司屋に取られちゃうからね、それでもこんな上物、近年、みたことがないね、明日が楽しみだ」

「本当に」

いつもは、百五十キロから百八十キロのキハダマグロが多かった。それでも、最初に陸揚げされる漁港に話を付けに行くのに難航したものだった。従来の慣例を崩してまで、このデパートに入れてくれるようになったのが、漁港を管理している漁協の理事長だった。

彼を何度も接待し一年がかりで上物をこっちに回してくれる様、話を付けたのだ。この企画は大当たりし、土曜日の地下食品売り場の売り上げ自体を底上げした。その結果、マグロの値段を何倍も上まわる利益を生み出した。

初めての企画が終わった後、骨の周りに残った、トロや赤身で職人は簡単なすしを作ってスタッフに配ってくれた。醤油につけて食べると口の中でトロの脂がとろけて甘い味がした。

「本当に美味しいですね」

「ええ、最高です、職人冥利に尽きます。このような企画を作っていただいてありがとうございました」

「いや、こちらこそ」

鮮魚をさばく職人も、心から喜んでくれた。わたしは嬉しかった。

だが、良いことは、いつまでも続いてくれない。これから、売り上げの落ちた、丸川豆腐店に引導を渡さなければならない。テナントに入ってもらうときは頭を下げて頼むだけだが、追い出すときには何だかこちらが悪者の様な気がする。

「あの、店長いるかな？」

「はい、お待ち下さい」

こちらが、デパートの名札を付けているので、店員はあわてて丸川店長を呼びに行った。

「はい、何でしょう？」

「丸川さん、ここしばらくの売り上げの件なんです。もうおわかりでしょうが、三割以上落ち込んでいますね、回復の見込みもないでしょう？」

「そ、そんなことないです、今頑張って、新しい豆腐を考えてるんです」

「どんな？」

彼は具体的なプランは言えなかった。わたしは残酷だが主任に言われたとおり、テナント契約の解除を伝えた。彼のがっかりした顔が、今でも頭に残っている。ここを引き払えば、高い出店料を払わずにすむが、自分の豆腐屋の売り上げでは家族が食べて行くにも困るだろうと言うことは容易に想像がついた。この一等場所でも売り上げを確保できないのに、郊外の商店街の店ではたかが知れている。

だが、悪いことは重なるもので、次の日のマグロ解体即売会は失敗した。わたしはアルバイトの学生に命じて付近にあるライバル店に偵察に出した。

「どうだった？」

「あの、同じ様なマグロ解体をしているんですが、更に、赤身のブロックのパック詰め放題コーナーがあるんです。多分それに客を取られたと思います」

「そう……」

わたしにとって大ちょんぼだった。ライバルデパートの行動くらい事前のチラシのチェックで把握できたことだった。完全に秘密を守っていたなら話しは別だが、そんなに極秘にしてしまうとお客も来ない。わたしは怒られるのを覚悟で上司の大川主任に報告した。

「馬鹿野郎、この企画を作るのにどれだけ投資したと思ってるんだ、漁協の接待だけでも大変な額だ。早急に対抗策を作れ、いいな！」

「しかし、マグロ対マグロでは詰め放題の量で勝負するしかありません。他の商品も視野に入れてもいいでしょうか？」

「例えば何だ？」

「高級和牛のパック詰め放題です」

「赤字決算じゃどうしようもないぞ、大丈夫なんだろうな？」

「要は、地下食品売り場の売り上げ全体を底上げすれば、牛肉自体の赤字は認めていただけますよね？」

「まあ、結果次第だよ、マグロのときはここだけでなく他の売り場にもいい影響が出たから営業部長から誉められたんだ」

「わかりました、考えます」

それから、着替えてライバル店をいくつか偵察してまわった。高級和牛はすでに手が付けられていた。野菜も玉子も食パンも、ほとんどの食材が催し物のテーマに選ばれていた。事ここにいたって、わたしは困り果てた。また、地下食品売り場に戻り精肉店に行ってみた。

「あのさ」

「はい、何でしょう？」

「変わった企画できないかな、こう、パック詰め放題ってどこの食品売り場でもやってるじゃない」

「そうですねえ、例えば高級松阪牛や神戸牛でそれをするとか？」

「それも、他店ですでにやっていた。さっき見てきたところだ」

「そうですか、赤字にならないんですかねえ？」

「いや、赤字だろう、ただ、お客さんが来てくれることでデパート全体が潤ったらそれでいいんだ。テナント単独の損失はこっちで負担する」

「そうですねえ」

結局いいアイディアは出してもらえなかった。

段々とわたしは口数が少なくなり、一人で考え込むことが多くなっていった。大川主任は少し心配したようだったが、元々、自分さえよければいい性格の人物だったので、わ

たしもあまり、援護射撃を期待したわけではなかった。

次の週の、マグロの解体をしているとき、わたしは制服を脱いで客に紛れ込んでいた。お客さんの生の声が聞きたかったからだ。

「やっぱり、さばきたてっていいですか？」

と、来ていた奥さんにさりげなく聞いてみた。

「そりゃあ、やっぱり目の前でさばいたらこれ以上新鮮なことってないでしょ、パックのものは、本当はいつさばいたのかなんてわからないじゃない？」

そんなことを言った。やはり、パックの食品の鮮度に疑問を抱かれている。わたしは自分の精神状態がその時、追い詰められていることに気付いていなかった。

わたしは、兵庫県の但馬に行き毎週牛を一頭入れてもらう交渉をし、金曜日の夕方に屠殺業者と精肉店主に来てもらうよう依頼した。

そして当日、「神戸牛、さばきたて、パック詰め放題」と銘打って、地下食品売り場の一角で催し物をした。

連れてこられたのは、一頭の黒毛の但馬牛の三歳の雌牛だった。つぶらな瞳をしている。

「可愛いー、牛さんだ！」

と言う声が、客の間からこぼれてきた。何か勘違いしていると思った。わたしは解体のサインを送った。

屠殺の専門家は、専用器具を持ち、つながれた牛の頭部にあてバシュッと言う音と共に、ビスを打ち込んだ。その瞬間牛は、気を失いけいれんを始めた、彼は牛に蹴られないよう注意しながら額から穴を開けて針金を通し、中枢神経を麻痺させた。その後、首をかき切って頸動脈を切った。血液が水道のようにほとばりしり、それを見た客は悲鳴を上

げて逃げていった。だが、まだ、三割くらいの人が頑張っている。彼は牛の後脚をチェーンブロックで天井につり下げ、そのまま腹を割いて、食道を縛った。こうしないと、胃の内容物が漏れてくるそうだ。そうしておいて反対側の結腸を縛り糞が漏れないようにすると、一気に腹を切り裂くと内臓がぼとりと落ちてきた。それを見ていた何人かの客が卒倒した。嘔吐している客もいる。彼は、嬉しそうに皮を剥ぎ始め、それを見た何人かの客が青い顔で逃げ出した。彼は綺麗に剥ぐと牛刀で大きな塊に分解した。

その後は肉屋の出番だ。彼も嬉しそうな顔で、肉をさばき始め最終的に、肉屋に並んでいるのと同じ状態になった。

だが、血まみれになった会場を見ると、そこだけでなく全フロアに客は誰もいなかった。

屠殺屋は、あの人達は肉って、スライスやハンバーグの形で牧場にいると思ってるんですかねえ、としょうがなさそうな顔で言った。子供達の好きなハンバーグも毎日こうやって牛を処理しているのだ。それに、目の前でさばいたのなら新鮮だし混ぜものが一切ないのだ。どうして嫌われたのか、その時のわたしの頭ではついて行けなかった。

次の日、動物愛護条例違反で警察の捜索を受けた。動物虐待だという。

「何故ですか？ どうしてマグロならよくて神戸牛だといけないんですか、お巡りさんは肉が嫌いなんですね？」

と、警官に食ってかかるわたしの姿を、上司の大川主任は憐れみの目で見ていた。了

プチ談合

プチ談合

「ちぇっ」

高史はパソコンの前に座って舌打ちした。思うようには行かない。

現在、高校生なのだが夜中にインターネットオークションに興じている。もちろん、未成年者の参加は出来ないはずなのだが、大学生の姉貴、美紀の名前で登録している。姉貴はこのことを知らないはず、と、高史はタカをくくっていた。

オークションは、欲しい出品物に値段をつけていき最高値をつけた人が落札する権利を得る仕組みで、競争相手が多ければ多いほど高値になることが多い。それでインターネット上の取引なので相手の顔が見えないのが不安といえば不安なのだが、逆に二十二歳の女子大生の振りをして参加できるところは利点である。

初めて姉貴の名前で登録し、ＩＤパスを交付され参加したとき、高史は古くなったゲームや聞かなくなったＣＤやＭＤを出品し、偶然……本当に偶然だと思ったのだが、異常な競り合いが最後の二十分間に起こり二千五百円のＣＤが、五千円で売れた。後のメールのやりとりで、マニアの間では人気のコレクターズアイテムだったそうだ。むろん高史にはそんなことに興味はなかったが、そんな、ビギナーズラックに取り憑かれ、オークションに没頭し始めた。

インターネットオークションに参加してすぐに自分の周りの不要なものは売り尽くしてしまい、ゴミにするより幾分儲かったのだが、あろう事か姉貴の着ていない洋服なども出品しはじめ、これに気付いた姉貴と大喧嘩をした。

「ねえ、お父さん聞いてよ」

「なんだよ、大学生にもなってまだ姉弟喧嘩か？」

「そうじゃなくて高史がいかがわしいことしてるのよ」

父親は高史の方をちらりと見て、にこっと笑った。どうも、いかがわしいことの意味を取り違えたらしかった。姉貴……美紀は大人しく引っ込み思案な性格で、大学に四年もいて男友達もいなければ、男と喋ったこともないほどだったが、高史にだけは昔から高飛車で、高史にとっては天敵の様な相手だった。

「高史、正直に言いなさい。何をしたんだ？」

「い、いや、姉貴の不要物をインターネットオークションで処分したんだ」

「リサイクルのことか？」

父親は高史のやっているシステムを把握していなかった。

怒られずに済んだ高史は次の日、眠い目をこすりながら高校へ行った。午前中はほとんど居眠りしながら、次は何を出品しようか悩んでいた。

昼休みになり、友人と弁当を食べながらオークションのことを話すと、嬉しそうに食いついてきた。

「高史よぉ、俺もいらなくなったゲームソフト何かあるんだけど、高校生は出来ないじゃん？ 代わりに出品してくれないか？」

「ああ、いいけど年齢確認なんかしないぜ」

「でも、やったことないし、高史やってくれよ」

「しょうがないな、でもさ、ＩＤだけ取ってくれない？」

「何すればいいんだ？」

「オークションって競り合いがないと全然値上がりしないんだ。そんなときに俺がメールで指示を出すから、煽り役をして欲しいんだ。自分でやってもいいんだけど、相手にす

ぐ気付かれるんだ」

「ふーん、そんな談合みたいなことしてもいいのか？」

「お、いいこと言うね、確かに談合と言えるな。でもプチ談合だ、みんなやってるよこんなこと。見てると同じＩＤナンバーで何度も特定の入札を繰り返しているんだ」

「それで間違って落札したらどうするの？」

「オークションとしては成立だが、間を置いてまた出品する……商談不成立でしたって」

「知能犯だね。ＩＤは親父の名前で作るよ、じゃあお願いね」

午後の授業は弁当の後でまた居眠りし、帰る頃になり元気になってきた。

家に帰ると、早速、頼まれたゲームソフトのデジタルカメラでの撮影写真を送ってもらうと、気の利いたフレーズを考え多くの人の気を引くような画面を作成していく。スタート価格は三百円とし、五千円くらいに上がればいいなと思っていた。

出品ボタンを押して、夕食を食べていると、姉貴が疑い深そうな目で高史を見た。

「あんた、また、あたしの洋服とか下着とか売り飛ばそうとしているんじゃないでしょうね」

「そんなことしてません」

「ならいいけど」

ここで余計なことを喋ってまた妨害されたらたまったものじゃない。

部屋に戻りパソコンを見ると、早速、入札があった、現在価格六百円。高史は別のＩＤで自分の出品物に入札し、八百円と入れた。すかさず相手は千円に値上げした。もう一度千五百円と上げて相手が二千円と上げたところで怪しまれてはいけないので、このＩＤではこれ以上の値上げはしなかった。終了は今夜午前十二時だ。

ある程度の競り合いが始まると他の人もそれを見て興味半分で入札する奴もいる。本気で欲しいわけではなく。競り合いに呼び水と言う感覚だ。

だが、三千円で上げ止まりになり、高史は少し迷った。出来れば五千円くらいにはしたいところだ。だが、手持ちのＩＤではこれ以上の競り合いには、怪しまれて相手が手を引いてしまうかも知れない。一種の賭けだが、堅実な商売と自認している高史には危ない橋を渡る気はなかった。

高史は、友人の何人かにサクラの入札者を演じて貰うことにした。メールで事情を話し、今晩十二時まで、小競り合いで五千円まで持って行くのが目標だった。

高史がパソコンの前で、他の出品物も監視していた。友人からの委託出品の他に姉貴のいらなくなった洋服や下着など、いかがわしいことこの上ないが、変態的なものに見せないためウエス（工業的に使われる、ぼろ布のこと）と、書いてみたりしたが写真を見れば年頃の女性の下着と一目で分かる。

この姉貴の洋服が誰か入札したようで、これも友人に入札の競り上げを依頼した。万が一彼らが落札しても、送らなかったらいいわけである。

この入札者も五百円スタートで、その後の高史の煽りにも動ぜず、一向に値上がりの気配はなかった。

「なんだよこいつ冷やかしか？」

確かに落札出来っこない金額で、そのまま静観している人も中にはいる。もし他に誰も入札しなければスタート価格の五百円や、百円でそれが手に入るのだ。

高史は気を取り直し、友人から代理出品しているゲームソフトの動きを見ていた。確かに動きはあるのだが、大ヒット作だけに持っている人も多いらしく高値はつきそうになかった。現在は三千二百円だ。友人二人が煽り役で少しずつ値段を上げていく。誰かが三千五百円で入札すれば、すかさず、三千六百円で入札するのだ。どこまででも上がりそうなのだが、相手の予算が三千五百円と決まっているとしたら、自分で引き取らなけ

ればならなくなる。その心理の読み合いが、高史にとってはオークションの醍醐味なのだが、元々五千円のゲームソフトだし友人から引き受けた手前、少なくともその位の値段にしたかった。こっちの強みは人気商品だったと言うことと、もう店頭では手に入らないと言うことだけだったが、オークションではそれだけで十分だった。

高史は二度目のメールを友人達に送った。四千五百円まで吊り上げる様指示を出した。

さっきまで、入札していたＩＤの人はここで諦めてしまった。高史はまずいことをしたと思ったが、しばらくすると五千円で入札してきた人がいた。新品価格でいきなり入札すると言うことは、余程欲しいのだろう。高史は更に、別のＩＤを使用して五千五百円で入札した。相手が食いついてくるか分からなかったからだ。

だが、食いついてきた。高史は三度目のメールを友人達に送り、希望価格を七千円にした。彼らは、相手の入札に応じて徐々に値段を上げていく。

予算のある人は千円単位でがばっと上げていくが、ない人は百円単位だ。このターゲットの人は千円単位の入札に応じていた。

――余程欲しいんだな、このゲームソフト。

高史は自分が不正行為をしていることについて、少し相手に悪いような気がした。相手が終了時刻前に六千円で入札したとき、そこで次の入札をやめた。友人には電話で連絡した。

「落札価格六千円、もっと上がるかも知れないけど……これでいいよな？」

「あ、ああ、俺も何か相手に悪い気がして、だから、高史、半分取れよ」

「半分、三千円てことか？ それは駄目だ、俺は代理人に過ぎないんだから」

「でも、荒ゴミならただだったんだ。いいから」

「そうか」

友人も何か小さな悪事をはたらいていた気分だったに違いない。もう少しするとインターネットオークションのシステムから相手に落札通知が届くに違いない。郵送場所や入金先の連絡はこの後のメールのやりとり……姉貴のアドレスなのだが、これで連絡を取り合い、商品が届けば全てが終わる。

ふと、気が付き、姉貴の洋服の出品状況を見てみた。余り競り合っていないらしく設定価格の千円スタートから二千五百円で推移していた。間もなく終了だ。

お買い得価格で落札されたのは、高史には面白くなかった。終了後、オークションシステムから相手のメールアドレスが連絡された。しばらくやりとりしてから入金方法、配達方法を話し合う為である。

だが、この相手とと思っていたのが女性であり。相手からのメールの文章も何となく見覚えがあった。大人しそうに見えて高飛車な態度……高史は嫌な予感がした。

《貴方の住所氏名を教えてください》

とメールを打つと住所と名前が帰ってきた。

名前を見ると姉貴だった。

高史は、このＩＤを放棄して、以後の連絡は取らずその洋服を姉貴のタンスにばれないように戻しておいた。

――くそ、姉貴もいかがわしいことしてるんじゃないか。

全然気にしていない顔で、姉貴と顔を合わせていたが、何となく顔を見ると笑ってしまう。姉貴も薄々気付いていたのか、その洋服がタンスの中にあったことに何も言わなかった。

「何よ、変な子ね」

姉貴は平然とその洋服を着ていた。了

回り出した車輪

まわり出した車輪

――石田君。と彼は戸川教授に呼ばれた。

「はい」

「研究テーマのことだ。少し話しがある」

「わかりました。すぐ行きます」

すぐ、と言う割には石田は研究資料やデータの入ったファイルを乱雑にしている机から拾い集めて、小脇に抱えてついて行った。

石田は燃焼工学が専門で、戸川教授には学生時代から師事していた。今年で三十八歳になるが、未だに学位（工学博士）が取れずに研究生をしながら論文を書いている。学位がないと研究者としても認められないし、就職にも差し支えがあり、教授もいい加減取らせなければ、そろそろ困るだろうという気持ちが強いのだ、と想像した。

「まあ、掛けたまえ」

そう言われ、石田は戸川教授の部屋の応接席用の椅子に腰を下ろした。

「君は、続かないねえ」

「はあ」

一つの研究には三年から五年ほどかかるものが多いが、石田は今まで途中で挫折するものが多かった。

「テーマの選定がまずかったのだろうか」

「いえ、そんなことはないと思います」

「正直に言いたまえ」

テーマが悪くないのであれば、研究生本人の責任だ。正直なところ、研究を開始するときにはある程度の見通しを立ててはいるものの、ほとんど参考文献がない状態なので、自身で考えて進んでいかなければならない。たいていの場合は数回の壁にぶつかり、それを突破することで一人前の研究者に育っていく。現に、この研究室の助教授は石田と同い年であったし、助手は二十八歳と若かった。彼らは若くしてその壁を突破して研究論文をものにしたのだった。

「石田君、君はよく壁にぶつかるね」

「はあ」

「それは、それでいいことだ。問題意識を持っていないと壁に当たったことにすら気付かないものもいる」

「ありがとうございます」

「いや、誉めているんじゃないよ。ぶつかって突破できないのなら気付かないのと同じじゃないか」

「すみません。時間を掛ければ突破できそうなのです」

「時間を掛けすぎると、他の研究者に先を越されるし、時代遅れになってしまう恐れもある。現にこの燃焼工学自体もそのうちなくなるかも知れないんだ。わかるかい？」

「二酸化炭素問題ですか」

「うん、こればっかりは避けようがない。窒素酸化物や硫黄酸化物の排出を抑えるのが、この技術、すなわち、燃焼工学の肝なんだが、何を燃焼させても必ず二酸化炭素は出てくる」

「他の研究に移った方がいいのでしょうか」

「水素は高価だし、アルコールは酒税がかかって我が国では燃料としては使えない。そういうことも考えた方がいい」

教授はそんなことを言った。その割には新たに助教授を採用したなど、研究室の拡充を図ってもいる。石田は戸川教授の真意を図りかねていた。

話を聞いていると、どうやら、長年この研究室にとどまっている石田本人の存在自体を問題にし、また、この年齢で学位を取ったとしても、その後のことを心配していたようだった。すでに、二十八歳の男が助手に採用されているので、定員に空きはあるものの石田を採用する状況ではないようだった。

「でも、わたしは四年の卒業研究のときから、ずっと、内燃機関の燃焼室の実験とシミュレーションを続けてきました。今更、他の分野になどかわれるものではありません」

「だから、かわれと言うんじゃないんだ。今の研究でこれからの見通しが立っているのかを聞きたいだけだ」

「はずかしながら、壁にぶつかっているのは確かです。来月から少し角度を変えたアプローチをしようと思っているのです」

「そう、まあいい。中津川先生ともよく相談して、研究計画を早急に見直してくれ」

「わかりました」

中津川先生とは、隣の熱機関工学研究室から異動してきた、石田と同い年の助教授のことである。予算上、石田は中津川の下で研究していることになっている。多分、石田のことを古参兵みたいに思っていて、内心では追い出したがっていることは、うすうす、感じてはいた。

石田は面白くない顔で研究室に戻った。こちらでは、四年生から大学院生まで全員の大部屋になっていて、年長の石田は少し大きな顔をしていた。教官のような態度で、田辺と小川という二人の四年生の卒業研究の指導をしている。石田のやっている研究テーマの裾野的な分野をしているので、石田が動かされると彼らにも影響があった。だから、すぐには何も言わずに黙っていた。

――石田さん。と、田辺浩二が敬語で呼びかけた。やはり、わざわざ教授が呼び出すなど、何かあったのかと思ったようだった。

「何だい？」

「戸川先生のところに行ってきたんでしょう。何かあったんですか」

「いや、別に。研究の進捗状況を聞かれただけだよ」

「そうですか。あの、僕たちの卒業に影響ないですよね？」

無礼なことを言う奴らである、と思ったが、図星なので黙っていた。

「田辺君、今年はコンパなどはやらないのかね？」

結構風雲急を告げているのに、のんびりしたことを聞いてみた。年に数回、教室の仲間で飲みに行っているののだ。石田はそのつもりで聞いたが、田辺は勘違いしたようだった。

「えっとですね、短大生とのコンパがありますけど、おいでになりますか？」

本来なら誘わないという態度がありありと見えた。石田はかちんときて、即座に、行くさ、と答えた。成り行きだった。

田辺が手帳を取りだし、週末の土曜日に、駅近くの居酒屋で合計六名くらいの規模で、飲み会を行うことを教えてくれた。

石田は、そんなことより、研究の方が不安だった。田辺達の卒業研究のレベルには差し支えはないだろうが、自分自身はこれから、これを学会発表して論文にまとめる必要があった。だから、理論も実験装置も完璧にしておく必要がある。具体的には内燃機

関、……エンジンの上半部に窓をつけて、燃料の燃え具合を撮影し、自分の立てた燃焼理論と合致させなければならなかった。今まで、エンジンに窓を開ける段階や、中を覗く装置の開発、理論の研究など、ことごとく壁に当たり、他に助けを求めてきていた。

――少しはオリジナリティのある論文を書かないと、審査に通らないだろう。

そんな心配が常にあった。時間さえ掛ければ、……いつもはそう思っていたし、そう言っても来ていた。

土曜日、学生の田辺が呼びに来た。

「石田さん、時間ですよ、行きましょう」

「ああ、考え事をしているんだ。後から車で行くよ」

「駄目ですよ、お酒が入るんですから、一緒にタクシーで行きましょう」

「そうか？」

誘いに乗り、少し早めに大学正門前からタクシーに乗った。バスも出ているが、土曜日など講義のない日は大幅に本数が少ない。

石田にとり久々の外出でもある。たまの飲み会だが、十数年もいると頻繁にあったように錯覚してしまうものだ。半年ぶりの繁華街は、やはり、すっかりと店並びが変わっていた。

「田辺君、わかるのか？」と、少し不安感を覚えたほどだ。

「大丈夫ですよ」

大学院まではしょっちゅう、こうしたコンパに顔を出しているものだ。

田辺の案内で、石田ともう一人の学生が居酒屋に入った。

――予約の田辺です。と、店員に告げて座敷席に案内してもらった。六人分の席があった。

「今日は誰が来るの？」

「やだなあ、短大の子ですよ。幹事は中村さんという子です。三人来る予定です」

「そう」

やがて、七時になり、約束の時間だったらしく、二十歳くらいの女性三人がやって来た。賑やかに田辺と挨拶して楽しそうに笑った。研究室とは全く態度が違っていた。

「中村です、よろしくお願いします」

幹事役の女性はそう言って、石田の目の前に座った。石田もよろしくと答えた。何だか場違いな気がしてきた。

中村達は結構酒に強かった。と、言うより、石田が先につぶれそうになった。

「ちょ、ちょっと、大丈夫ですか？」

そんなことを言われ、じろっと、上目遣いで彼女をにらんだ。

「石田さん、完璧に酔っぱらいのおじさんですよ。おさえて、おさえて」と、田辺。

「馬鹿野郎、おさえていて研究者がつとまるか！」

少し荒れた。女性達は白けたムードになったが、中村は気が強かった。

「何を一人で荒れてるんです。仕事の憂さをこんなところで晴らすようなことは最低です」

「何だと！」

「だから、酔っぱらうなら帰って下さい。迷惑です」

きっぱりと言われてしまった。

――迷っているなら、辞めて下さい。迷惑です。と、戸川教授や中津川助教授達も思っているに違いないと、くるくる回る頭で考えていると意識が遠のいていった。

気が付くと、駅前の歩道でしゃがみ込んでいた。冷たい夜風が気持ちよかった。

「気が付きましたか？」

田辺が厄介そうな顔で、背中を撫でていた。

「ああ」と、うなずいた。

「彼女たちは怒って帰っちゃいました。もう、二度と誘えませんよ」

「すまんな。もう誘わないでいいよ」

「そう言わないで下さい。まだ、この先、長いんですし」

「本当に長いのか？」

「ええ」

石田は少し痛みの残る頭で記憶をたぐり、彼女に言われたことを反芻してみた。

――酔っぱらうなら帰って下さい。迷っているなら辞めて下さい。

「なあ、田辺君」

「はい、もう、立てますか？」

「うん、三十八歳って若いんだろうか？ どう思う」

「僕に聞かないで下さい。人によるでしょう」と、彼は答えを逃げた。

「それもそうだな、人生八十年と思うなら、まだ若いし、五十年なら、あと十二年だもんな」

「石田さん、もしかして、大学を辞めてやり直そうとか考えてないですか？」

「考えてるよ。もう一軒付き合えよ」

そう言うと露骨に嫌な顔をした。

「駄目ですよ、これ以上飲んじゃ」

石田は田辺の肩を借りながら歩いた。体重を掛けても彼はびくともしなかった。

――こいつはまだまだ若いな、と思った。了

受けない奇術師

受けない奇術師

わたしは、現役を引退し悠々自適の生活を送っていた。正直、暇を持て余していたと言ってもよかったくらいだ。毎日、犬の散歩と自分の散歩を、犬と自分の健康のためにやっている。

ある日、いつもの散歩のコースである公園の角で、路上パフォーマンスとでも言うのだろうか、人だかりが出来て何組かの芸人が技を競っていた。わたしも現役時代はそんなものに興味はなかったが、暇を持て余すようになり、余計なことに首を突っ込みたくてしょうがなくなっていた。

一段高くなったところ……植木の植え込み……で、木の錘のようなものを投げたり振り回したりしていた。わたしは隣で見ていたおじさんに、あれは何かと聞いてみた。

「じいさん、あんた、知らないの？」

人をじいさん呼ばわりした上に、馬鹿にしたような言い方をした。だが、聞かないことには気が収まらない。

「あれはね……えーと、なんてったかな、おい、君知らないか」

その男も、正式名称は知らないらしかった。ものを知らない割に態度が大きい。いつから日本人はこんな礼儀知らずになったんだと、わたしは嘆かわしい思いだった。

「あれは、ジャグリングといい、やっている人をジャグラーと言うんですよ。いかに多くの棒を扱えるかがポイントです」

「ほぅ」

若者の方が態度も丁寧だった。

わたしは注意深くその演技を見終わり、ジャグラーが一礼すると、一部の客が前に置いてある箱に、お金を投げ入れた。どうやら大道芸のようなものらしい。

「都の条例では無許可営業は禁止なのではないかね」

わたしは、お金を投げ入れた客の一人に言った。

「じいさん、そんな堅いこと言うなよ、楽しければいいんだよ」

そんなことを言われた。わたしもそれ以上議論する気にもなれず、黙って次の演目を見ていた。

出て来たのは奇術師だった。初っぱなから山高帽を取りその中に花束を入れ、ハンカチを掛けて気合いを入れた。何か出てくるのかと思ったら、花束は消えてしまった。観客は白けたようでお付き合いの拍手がぱらぱらと湧き上がった。それに勘違いして気をよくしたのか、奇術師は箱を取り出した。彼は観客の方に箱の中が見えるように掲げ、中に何も仕掛けがないことを示し、台の上に置くとボールをこれ見よがしに入れ、気合いを入れると、箱を掲げ、中が空になったことを示した。

今度は誰も拍手しなかった。

もし、これ以後の演技で何か落ちがつかないと、それこそブーイングの嵐だろうとわたしは思った。だが、予想に反し、続く彼の演技は、ものが消えるワンパターンでとうとうしびれを切らした客が、一人、また一人と消えていった。

――これが落ちだったのかな？

最後に残ったのはわたし一人だった。

彼は、最後の観客であるわたしに深々と礼をした。何となくその姿に自分自身を重ね合わせたわたしは彼に声を掛けるために前に進んだ。

「君ぃ、演目はあれだけかね」

「まだまだありますが、公園の隅で出来るのはこれくらいです」

「お客さんが途中でいなくなったのには気付いていたかな」

「ええ、でも初めてのことではないので、理由は分かりません」

――この男は馬鹿なのか？

「教えてあげようか」

「分かるんですか？」

「ああ、君がものがなくなる演目ばかり続けてやるもんだから、客が嫌気を出したんだ。誰しもものがなくなるのは嫌なもんさ。もしやるなら、途中で鳩を出しなさい。多ければ多いほどいい」

「鳩は高いんです」

「しょうがないな」

結局わたしはおひねりを渡す羽目になった。だが、これで売れない芸人が救われるなら安いものかと、これまでの人生の世話になった人へのお返しの気持ちもあったことは確かだった。

次の週、同じ公園に行って見ると、あの奇術師も来ていた。裏方で彼に会うと、わたしの教え通り鳩を買って来たと言う。今日の彼は自信満々だった。それは演技にも現れていた。先週よりも動作が大きく、自信に満ちていた。

そして、山高帽から鳩を出した。

観客は拍手喝采だった。気をよくした彼は、後半で飛ばす鳩をさらに倍増した。すると、観客の拍手は鳩に比例する様に、大きくなった。わたしは頷きながら彼の演技を見ていた。最後に両手から鳩を出し、皆に一礼すると観客は大喜びで彼におひねりを投げていた。彼も初めての大受けで満足そうな笑みを浮かべていた。

演目が終わった後、わたしは彼のところに行った。

「やっぱり受けただろう」

「はい、先生の言う通りでした」

「そうかい、でもワンパターンじゃ飽きられてしまう。鳩もほどほどにするんだな」

「待ってください。先生の言う通り鳩を出したんですよ。この後はどうすればいいんですか」

「君自身が考えることだよ、さもないとこれから奇術師としてやっていけないだろう」

「そんな、困ります」

本当に困っているように見えた。だが、これを考えることに喜びを見い出すタイプの人間でなければ、こんな仕事は向かないだろう。だが、わたしは余計なアドバイスをした。

最初に観客がそっぽを向いたのは、ものが消える演目を中心にしたせいだ。だが、技術を誇示するためにするのなら、少しは入れた方がいい。人はどんな時代でも派手で景気のいいことが好きなのだ。だから、鳩を出すのだが、多く出した後に一羽出しても白けるだけだ。絶対に鳩の数は少なく出して最後は大盤振る舞いすること。それが大受けする秘訣だ。そういう風な話しをした。

こんな話しをした割りに、わたしはエンターテインメントに関しては全くの素人であった。何故こんなアドバイスを出来たかというと、わたしの現役時代に似た様な仕事をしてきたからであった。技術的な割に、人の人気に左右される職業。今の奇術師の置かれた状況で四十年間頑張ってきたのだ。

このアドバイスをしてから、段々と、彼はこの公園の人気者になりつつあった。他のジャグラーやカード手品、風船マジックが休んでも誰も文句は言わないが、彼がいないと客が帰ってしまう、そんなにまで人気が出て来た。

そんなある日、わたしが演技を見に行った帰り道、彼から相談を持ちかけられた。

「あの、先生お願いがあるのです」

「僕は先生じゃないよ」

「いいえ、わたしにとっては師匠の様なものです」

そこまで言われて、私も話しを聞かないわけに行かなかった。

「何だい、お願いとは？」

「実は、わたしも一流の芸人を目指しています」

「うん、熱意は分かるよ」

「それで、演芸場に出場できるよう誰かにお口添え願えないかと思いまして」

「僕はそんなところに顔は利かないよ。元々芸人ではないし」

「いえ、そこを何とか、お知り合いをたどって……」

そう、頼み込まれ、わたしは元の秘書だった男を訪ね、こういう男がいると話しをした。わたしは、余りよい辞め方をしなかったから、秘書だった男が動いてくれるか不安だったが、案に相違して気分よく動いてくれ、演芸場の地元警察の風俗担当課長に紹介状を書かせ、先方に届けてくれた。

その連絡を受けて、わたしは奇術師の男に、演芸場の支配人に会う様に伝えた。根回しの効果は絶大で、演技も見ずに出演が決まった。わたしは彼の技術がしっかりしていたことから、演目さえ誤らなければ失敗はないと考えていた。

しかし、彼の出演が決まると、やはり心配で初演日だけは見に行った。

流石に、公園の片隅と違い、演芸場のホールは楽しみを求める客であふれかえり、出てくる芸人もそれに答えるべく、芸の粋を競っていた。やはり、公園の芸人とは一段とランクが違う、そんな気がした。彼の演技は、漫才の間に入る色物と呼ばれる奇術だった。

最初は、一段と大きな客席に圧倒され緊張していた様だったが、最初に服の袖から鳩を出すと観客が喝采を挙げた。

――やはり鳩か。

予想通り、最初にものを消して見せた後、鳩、鳩、鳩、……

初日は、大盛況だった。

演芸場の掃除係のおじさんから、鳩の糞を何とかしてくれと文句をいわれたそうだったが、人気さえ出ればそう大した問題ではなかった。後は、鳩だけでは飽きられるから、他の品を考えることが彼の課題だった。案の定、楽屋に行くと相談された。

「先生のお陰でこのような大きな舞台で演技できるようになりました」

「鳩ばかりだと三週間ももたないよ、きっと」

「先生もそう思いますか？」

「ああ、大衆は熱しやすく飽きやすいもんさ。君も覚えておくといい」

「しかし、それを味わうのはもう御免です。何とかならないでしょうか」

「そうさな……」

わたしは、今までの経験を思い返した。人に嫌われることでもあえてやらなければならない、そんなことはよくある。そして、前任者が大盤振る舞いで人気を得た後は決まって緊縮して、人からけちんぼと言われるのだ。好きでけちんぼになったわけではない。時代の要請だったのだ。そんなことを考えながら、この目の前の男の将来を心配してやった。

「鳩を出しまくった後は、どうしても、締まらなければならない時期がある。緊縮財政とも言い、じらし、とも言う。それをうまく使って嫌われず、ときに大受けし、タイミングを見計らうすべを身につけなければならない。演芸場の舞台に出た瞬間が勝負だ。今日のお客はじらしても大丈夫か、そのギリギリで鳩を使うんだ」

「先生、先生ほどの師匠にいまだかつて出会ったことはありません。一体、どこの舞台を

張っていらしたんですか？」

この男はまだわたしを引退した芸人と思っていた。

残念ながら、芸能界とは無縁な世界で、大学法学部を出た後、政治家秘書となり、衆議院議員を十期勤め、その間、総理大臣を半年だけ拝命した。前任者の放漫財政を受けてわたしは続けざまの緊縮財政策を打ち、お陰で内閣支持率を過去最低記録にまで下げて、居たたまれなくなるように総辞職したのだった。この奇術師が、知らなかったのも無理からぬことだった。了

消えていく町

消えていく街

わたしが、郊外の住宅地に引っ越してきたのは二十年前のことだった。

日曜日が来る度、子供達を連れてあちこちにある空き地や公園に連れて行った。公園にはプランコや滑り台、ジャングルジム、砂場があり、空いたスペースで子供達が野球をしていた。のどかな街だった。

異変があったのは、越してきた年の夏に起きた大きな雷の後だった。新聞に「子供が箱形ブランコで死亡」と言う記事が載り、しばらくして公園にも市の土木課の係員が来て何やら調査らしきことをしたあと、一週間後、業者が来てその箱形ブランコを撤去しトラックに積み込んで持ち去った。小さな子供達はがっかりしたようだったが、ただちに慣れた様子でまた別の遊びに夢中になった。

その年の秋に消えたのは鉄棒だった。どこかの小学校で「折れて落下した児童が死亡」した、と言う記事が載り、早速、市の土木課の係員がやって来て調査し、その一週間後、業者が来て公園から鉄棒を撤去してしまった。

鉄棒の練習をしていた子供達は、

「お父さん、鉄棒の練習をしないと学校で残されるんだ。それに数が少ないし」

今時の学校は逆上がりが出来ないと特訓させられるらしい。家の庭に、ホームセンターで売ってるようなのを取り付け様かと思ったが、スペースがないのであきらめた。

「ごめんな、学校で順番待ちしなさい」

「ええー」

子供は駄々をこねた。わたしは、贅沢言うんじゃないと怒ってその場は終わった。

二年目の春、公園での犬の散歩が問題になった。フンの後始末をしない人が増え、近所から苦情が相次いだことから動物の立ち入り禁止になった。だが、猫などは勝手に砂場にフンをする。禁止自体が無意味になり、保健所の検査で砂場から寄生虫が検出され、小さい子供が口にしたら危険と言う意見が出て砂場も派生的に撤去された。

その夏、同じ市内の学校で事故があったらしく、ジャングルジムや滑り台も落ちて怪我をしたり、首の骨を折ったりする子供がいて危険と見なされこれも撤去の対象になった。

こうして公園からは何もなくなった。何もない公園では野球なりサッカーなり何らかの運動をするしかなかった。だが、うちの小さい子供ではまだ参加はさせられなかった。

野球をしている上級生の少年がいたが、やがて小さい子供に当たり怪我をさせた。双方の両親は同じ町内と言うことで、円満に示談がまとまった。だが、それ以来、危険行為一切、野球・サッカー・自転車にスケボー、あらゆる競技が禁止の対象になった。

そうして、三年目の春に行ってみると、雑草が芽を出していた。心配していたとおり夏には雑草が茫々と生い茂っていた。誰も入らない公園で、踏む人がいないので雑草も伸び放題に伸びていた。

こうして公園は子供達の意識からも消え去っていった。

五年目の冬、妻がわたしに深刻な顔で相談を持ちかけた。

「あのさ、近所にＳスーパーがあるじゃない？」

「ああ、近くて便利だな」

「それがさ、今年いっぱいで閉店らしいの」

「どうして、スーパーと公園が近いからこの家を選んだんだよ。なくなったら後はどうするの？」

「それがさ、近所の奥さん方がみんな免許を持ってて、旦那さんが電車通勤するじゃない。それで、家の車でみんな郊外のスーパーに行ってたらしいの」

うちには車がなかった。だが、買い物だけのために車を新たに買うほどの余裕はなかった。

「それで、郊外のスーパーに行ったから売り上げが落ちて、赤字倒産と言う訳かい？」

「そんな感じみたい、それに、そんな状況だから後に入るテナントもないみたいなの。更地にして分譲地にするそうよ」

「そんなことしても、スーパーも学校も公園もない、そんな条件で売れるのか？」

「あたしに言わないでよ。車があれば何の問題もないわ」

わたしはついに車を買う決心をした。但し買い物用途限定で一番安い軽自動車だ。もっとも、買い物を週に一回にまとめたらタクシーを使う方が安いことがわかっていた。だが、買い物の度に、はるか離れたタクシー会社から来て貰うのも気の毒で実用的な案ではなかった。ここ数年で街の中心は新交通システムの終点のある、領域に限定され、そこまでタクシーで二十分程度だった。買い物に行くのは郊外の店でこれも二十分くらいだ。

六年目の春、我が家の自動車がなくなった。民間交通巡視員制度の始まりでちょっとの間も見逃して貰えない。妻も友人宅に行って荷物を下ろす間に、……それも大型荷物を手伝ったそうだ……何と、レッカー移動されてしまった。わたしは警察に文句を言いに行った。

「こんなやり方だと、行き先に駐車場がないところには、車で行くなと言うことじゃないですか？」

「その通りです。道路交通法の通りです」

「ですが、この法律は交通安全と交通の円滑さを目的にしたものではなかったのですか？」

「それは、警察の関知するところではありません。法律を制定するのは国会です。国会で議論するのはあなた方の選んだ議員さんです。文句は自分自身に向けてください。駐車違反が原因の事故も多いのです。そのたびに警察は責任を取ってきました。これ以上の被害を食い止めるためにご協力お願いします」

わたしはしばらく考えた上車を手放した。妻は文句を言ったが、この国で車を使用するのは困難だと判断した。

十年目の六月、大手自動車メーカのいくつかが売れ行き不振で国内市場から撤退すると発表した。相次ぐ自動車離れで、すでに二輪車メーカは国内から撤退していた。二輪車には街の中に駐車場がないからである。つまり、自分の家のガレージと、それ以外の場所には行けなくなったのだ。

そうした家庭も多く、多くは近くはタクシー、遠くはバスか電車と言うライフスタイルが定着した。街から月極駐車場がなくなり跡地は空き地となり雑草の生い茂るままになった。やがて、人々の意識から自動車の姿も消えていった。

十一年目の春、上の子供が行くはずの中学校がなくなった。生徒数の減少で隣町の学校と合併することになった。少し遠いが自転車通学だ。

高校に進学したら電車通学になるだろうと思っていたら、最寄りの電鉄会社が倒産した。

前から、乗る人も少なく、駅員を廃止したり車掌を廃止したりしてコストダウンしてきたが、人身事故が起こり、車掌も駅員もいないのが国土交通省事故調査委員会で問題にされ、ついに耐えきれなかったようだ。そうして、線路や操車場の跡地には雑草が生い茂り人々の意識からは電車の記憶が消えていった。

その頃、街から小さな子供の姿がなくなった。妻の話によると近所の奥さんもぼやいていたそうだ。保育園に子供を預けようとしたら、去年預かった子供さんが最後で、その子達が小学校に上がると廃止になると言われたそうだ。この保育園も最後の子供達を送り出すと跡地には雑草が生い茂り、やがて人々の意識から消えていった。

これだけ子供が少なく、また、預ける時間は朝八時から夜の十一時まで預ける人も多いらしい。子供のためには余りよくない環境だが、現在の経済情勢では女性も、男性並みに残業をこなさないとたちまちリストラリストに載せられる。

電鉄会社がなくなって以来、わたしの通勤ルートも、バスで新交通システムまで行き、それで、街の中心に出てそこからＪＲで会社のある街に通うと言うものに変わっていた。今まで乗っていた電鉄が倒産したのだから、しょうがなかった。だからといって交通費差額を会社が補填するのを期待するほど、のんびりした時代ではないことはわかっていた。

何故みんなが自動車通勤をやめたかも時代の流れだった。一時はマイカー通勤は通勤ラッシュを逃れるための贅沢な通勤方法だった。早めに出たら空いているし、快適だ。だが、当初ガソリン代を余分に呉れていたのだが、会社、自宅のルートをセンチメートル単位で計算し、燃費もリッター二十キロで計算し始めたものだから、自動車組はたちまち赤字になった。それで、奥さんに車を譲り、実費の出る電車通勤に切り替えたのだ。だが、それすら危なくなってきた。一番安い年間定期券を買うよう指示されたが、落としたり盗まれると危険なのでわたしは三ヶ月にしていたが、差額は自分持ちだった。

十二年目の年末、街に一軒だけあった、内科医院の奥さんが挨拶に来た。長年内科医院を開業していたが、先生がお年のために今年いっぱいで閉院するらしかった。わたしはいままでの感謝を述べた。奥さんは涙ぐんでいた。

だが、それ以降、タクシーで二十分程度の新交通システムの終点にある、西市民病院に行かなくてはならなくなった。ちょっとした風邪など、先生の内科医院で注射一本売って貰うだけのことが、市民病院だと一日仕事になった。個人病院だとすぐにみてもらえたが、基幹病院では三、四時間待ちは当たり前なのだ。

それに、近隣の産婦人科は閉院しているので、お産の女性も皆この市民病院に来ている。もう、婦人科も小児科も消えてしまったのだ。それにお産をする女性自体が減ってきている。共働きしないと生活できないし、それ以前に結婚しない人が増えたのだ。

そうして、産婦人科医院も地元の医院も姿を消し、お腹の大きい女性も姿を消し、やがて人々の意識から消えていった。

わたしが、この街にすんで二十年たち定年を迎えると、することがなくなり街の中を歩いてみたが、草茫々の空き地ばかりで以前何があったかすら思い出せない。車が消えたせいでアスファルト舗装もされていない地域もあり、人が歩かないところはどこも草某々であった。いつの間にか昔あった町内会の存在も人々の意識から消えていた。

「ご近所の人はどこに行ったんだ？」

と、妻に聞いた。

「お金のある人は、新交通システムかＪＲの沿線に引っ越したみたいよ。だって、買い物は通販ばっかりだし、こんなとこにいても何のメリットもないじゃない」

「退職金で引っ越せるかな？」

「昔ならともかく、今すごく上がってるわよ。それにこっちは下がる一方でしょ。市町村合併で、新交通システムの終点はK市に編入し、こっちはM市らしいわ五年後のことだけど。あなたどうする？」

老人世帯にとってK市か、M市かは重要な意味を持っていた。まず、福祉サービスが断然K市の方がいいのだ。福祉がなければ税金を取られるだけ損である。わたしは真剣に検討を始め、K市のＪＲ沿線の特急が止まらない駅近くの小さなマンションに引っ越すことにした。特急が止まる駅の周辺はかなり高かったのだ。

同じことを考える人も多かったらしく、この住宅地がM市に編入される頃には、雑草の生い茂る平原と化し、皆の意識からは消え去っていた。了

黒猫

黒猫

我が家に黒猫が迷い込んだ。

黒い毛がつやつやとし、ちびの割には、精悍さをうかがわせる筋肉質な体つきだった。瞳は青くひげが長かった。抱いてひっくり返してみるとオスであることが分かった。まだ、幼い様でときどき、親猫を呼ぶかのごとくミャーと言う声を上げた。

「これ、どこかで飼ってたのかな？」

と、わたしが誰とはなしに聞くと、妻は、

「首輪も鈴もしてないし、捨て猫じゃないかしら。でも、かわいいわ」

と、飼いたそうなことを言い出した。子供達もこの猫を気に入ってしまったので、わたしはやむなくといった感じで、許可してしまった。

「名前はどうするんだい？」

「ポチでいいんじゃない？」

「それは犬よ、猫ならミケね」

と娘たちが勝手に名前をつけだした。妻も色々考えていたようだったが、いつの間にかミケに決まってしまった。黒猫なのにミケなんておかしいと思ったがまあ別にどうでもいいことだった。

ミケは最初はおとなしくしていたのだが、そのうち我が家のごとく振る舞いだした。だが、犬と違って、お手もしないし、お座りもしない。餌だけは一人前だった。最初の内

は七歳と四歳になる娘がミルクなどを与えていたが、しばらくすると大きくなったのか、ミルクよりも固形物を欲しがるようになった。娘達のいいおもちゃになった様で、わたしも猫の成長が楽しみだった。最初は愛想のない奴だと思っていたが、元々、猫に犬のような従順さを求めること自体が無理の様で、愛想のないのがいいのだと、妻も言い出した。

そのうち会社が忙しくなり、わたしも、猫どころではなくなり、遅く帰ってきてはご飯を食べて風呂に入って寝てしまう生活が続いた。

「ねえ、あなた」

「何だよ？」

「最近ミケの様子がおかしいの」

「化けるのかい？」

「そんな訳ないでしょ、キャットフードを食べないのよ」

「じゃあ、何を食べているの？」

「人間様と同じ、肉とか肉とか、……とにかく高い肉しか食べないの」

「しつけが悪いんだよ。最初が肝心だったな」

「もうっ」

わたしは、他愛もない話しと軽く聞き流していた。高い肉といっても我が家ではそんなに高い肉など買わないし、それに猫一匹の分量など知れている。そう考えていた。

わたしは、普段は市内にある工場の管理課に勤めていた。工場に出入りする車両の管理や、業者の管理が仕事で、工場の外にある別の小さな建物、と言っても工場に比べての話しだが、そこで働いていた。そこでは、事務所の女の子が、どこからか迷い込んで来た犬に、ポチと名付けて昼休みに餌をやっていた。別に趣味の範囲だし、工場の人にもかわいがられているし、誰も問題にしなかった。

わたしも、昼ご飯の工場給食を食べ終わると、残ったパンなどを持って、ポチを呼んだ。普段は見向きもしてくれないが、餌を持っているときは呼ぶと飛んでくる。現金な奴だと思ったが、飼い主は事務所の女の子だ。

「ほれ」

と、わたしはパンをちぎって投げた。ポチはそれをくわえて、地面に並べた。もう一個パンの切れ端を投げた。また、ポチはそれをくわえて、並べた。まるで、わたしがいくつパンを持っているか知っているかのようだった。そして、全部投げ終わると、確認したかの様に、パンを食べるのだ。たまにソーセージなどやると、どこかに持って行って隠れて食べる。犬独特の性質の様だ。

「ちょっと主任、勝手にポチに餌をやらないで下さい。太っちゃうじゃないですか」

と、わたしは文句を言われた、飼い主の女の子だ。

「何だい、体調管理でもしてるの？」

「そんなんじゃないです、みんながお昼の残りをやるものだから、すっかり贅肉がついて、お腹が垂れてるじゃないですか」

彼女はそう文句を言った。確かに皆が残り物をポチに与えていた。食べ物の残りを捨てるのは抵抗感があるものだが、生き物に与えるのは余り抵抗がない。それで、皆がポチに与えていたのだろう。ポチは彼女が昼休み、工場の敷地内を散歩させていたが、流石に運動量としては少ないと、素人目にもわかった。

その点猫だと、セルフサービスだ。勝手にそこらを散歩してくれる。だが、近所の敷地内を散歩するわけだから、一応、隣の人くらいには挨拶しておけと妻には言っていた。

その日、家に帰ると、妻から文句を言われた。

「菜々がね、今日ミケに引っ掻かれて病院に連れて行ったのよ」

「大げさだな」

「違うのよ、すごーく鋭い爪でサッと引っ掻いたと思うと、もうすぱっと切れて七針も縫ったのよ。どうしよう？」

「どうしようって、もう手当は済んだんだろう」

「そうじゃなくてミケの処分よ」

「何だよ、引っ掻かれたくらいで保健所に引き渡すのか？ 情けない」

「もうっ、でもね、ミケって何か猫じゃない気がするの」

「化け猫とでも？」

「もうっふざけないでよ」

その日はそれで話は終わってしまった。わたしももう少し真面目に話しを聞いておけばよかったと、反省した。菜々は七歳の上の娘だ。このとき、ミケはわたしの足下にまとわりつき、話しを聞いている風な感じであったが、普通の猫には違いなかった。

次の週、会社が持つ別の工場で事故があり、管理部門の人間を派遣しなければならなくなり、人手が足りないのはこちらも同じだったので、主任であるわたしが一週間、出向くことになった。県外なのでしばらくホテル住まいになった。出発の前の日、妻に、下着と作業服と背広の用意を頼んでおいた。妻は何となく不安そうだったが、子供が出来てから初めての一週間の出張なので、緊張しているのだろうと勝手に解釈していた。

「あなた、気をつけてね、それからミケのことなんだけど」

「どうしたんだい？」

「この頃、成長が激しいのよ」

「大きくなるのはいいことじゃないか」

「でも、猫ってどの位まで成長したかしら、昔の野良猫ってもっと小さかったわ」

「そりゃ、野良猫と一緒にするなよ、寄生虫の薬もやってるし、栄養状態もいいし」

「そうね、でも、最近じゃ里沙の言うこと何か聞かないのよ、反抗的な目をして」

「里沙は四歳じゃないか、動物に馬鹿にされても不思議じゃないよ。俺だって会社のポチになめられてるぜ、事務所の女の子には服従なのにな。飼い主とそうでない人を見分けるんだよ」

「そうね」

そう言って、わたしは栃木県にある工場に出掛けた。製造中の機械が破損して生産ライン全体が止まった事故だった。幸い人身事故でないのですぐに復旧作業をすることが出来たが、操業が週単位で止まってしまったため、部品業者の納期を遅らせたり、製品の出荷を急がせたりと管理部門がかなり忙しくなっていた。普段はコンピューターでバーコードをピッと読ませるだけで済む検品作業も現場では手作業になっている。そうして出荷、入荷調整をしている合間に、本来の生産ラインの修理を済ませるのだ。

わたしは、工場のある町の駅前にあるビジネスホテルを一週間取っていたが、最初の三日間はホテルに帰ることが出来ないくらい忙しかった。その後も十二時過ぎて帰るくらいのペースだった。わたしは所属の課長に電話してもう二週間作業が伸びることを連絡した。向こうでも困っている様子だったが、やむを得なかった。結局、普通にホテルに帰れる様になったのは、二週間目の終わりくらいだった。それで、久々に夕食後ホテルから自宅に電話した。だが、しばらく呼び出し音が続いても出なかった。どこかに出掛けているのかと思って、妻の携帯電話に掛けてみた。

「もしもし、あなた？」

「どうしたんだよ、家の電話誰も出なかったぞ」

「里沙が、ミケに噛まれて重傷なの。今病院」

「えぇっ？ 怪我ってそんなにひどいのか？」

わたしは信じられなかった。猫に噛まれたくらい、と言っても猫が噛むとは知らなかったが、大した傷ではないだろうと、勝手に判断した。

「それで、何針くらいだ？」

「だから重傷だって言ってるでしょ！」

「猫に噛まれて重傷？ 言ってる意味が分からない」

「だから、腹部をえぐられて、生命維持装置につながれているの。内臓に損傷を受けているから、かなり危ないってお医者様に言われたわ」

「何か、よく事態が飲み込めないが、それで、菜々は？」

「今塾に行ってるけど、……どうしよう、家に一人でいいかなぁ、あたしもいないと、」

「大げさなこと言うなよ、塾って町内だろ。そんな、まあ、好きにしたらいいよ」

「好きにしたらってどういうことよっ！」

電話が切られてしまった。わたしはしょうがないので、冷蔵庫のビールを飲んでテレビをつけたが、チャンネルが少なく飽きて寝てしまった。

次の日も工場は忙しかった。朝から晩まで業者の持ってくる部品と工場から出荷する製品の交通整理だった。こうして、地獄の三週間の出張が終わり、無事、元の工場に戻ってきた。課長に、ことの顛末を報告すると、管理課のメンバーで慰労会を催してくれ、その日はアルコールも入り、帰ったのは午前一時だった。出張の荷物も重かったので、家に帰ったら風呂に入ってと、気楽に考えていた。

家の前に着くと、明かりは消え、雨戸も閉まったままだった。今日わたしが帰ることは知っているはずだった。不審に思いながらも、鍵を開け中にはいると、誰もいなかった。妻の携帯に掛けると台所から音がした。携帯だけが落ちていた。わたしは、むにゅっとした感触のものを踏みつけドキッとして、明かりをつけた。肉のかたまりだった。だが、妙なことに、骨がついていた。

台所の隅に大きな黒い動物がいるのに気付いた。わたしはあわてて警官を呼び、警官は応援を呼んで一時間がかりの大捕物になった。捕まったのは黒ヒョウだった。へぇ、ミケって猫じゃなかったのかと今頃になって気付いた。

警察の調べで、妻と娘はこの黒ヒョウの餌になっていたことが後日判明した。了

下着にカレー

下着にカレー

わたしが下着の用を足す部分に、昨日の夕食のカレーが付いているのを発見したのは、会社の昼食後に、トイレに行き便座に座って用を足しながら雑誌を読んでいるときだった。その時は思わず粗相をしてしまったのかと思ったのだが、記憶をたどると朝から普通に電車で出勤し、下痢とか便秘などと言ったトラブルもなかった。昨日風呂上がりにこの下着に着替えてから、用を足すのはこれが初めてのはず、だった。

恐る恐る前屈みになり……普段はこんなに身体が柔らかいことはなかったが……臭いで確かめるとカレーの臭いがした。

昨日の行動を思い起こすと、夕食の後、妻が洗い物をした後で洗濯物をたたんでいた。多分その時に妻の手にカレーが付いていたのだろう。状況は把握できたが、納得は出来なかった。近くのコンビニに行って、一つ買ってこようと思ったが別に人に見られる予定はないし、そのままにしておいた。

昼休みが終わり、メンバー各位はそれぞれ自分の席に着き、会議のある人は書類を抱えて出ていった。わたしは夕方までに出す書類があるので、パソコンの画面を入れワープロソフトを起動させた。

課長席では、これから会議に出るらしく書類を抱えて、机の受け箱の書類に急ぎのものがないかかき回し、ふと、何か見つけたらしく手を止め、じっくりと読み始めた。

わたしは課長と目が合った。

「おい、磯野君、きみは三十五歳だったな？」

「は？」

「この書類に書いてある。勤労課衛生係の書類だ。今日二時から健康診断だ」

――まずいと思った。やはり下着を買いに行けばよかった。

「どうした？」

課長は不思議な動物でも見るような目でわたしを見つめた。わたしはとっさに断るか、時間を引き延ばす理由を考えた。しかし健康診断の通知の書類は一週間前の日付だった。課長が仕事を止める人なのか、わたしを故意に陥れようとしているかのどちらかの様に思えてきた。

「あの、課長、ちょっといいですか」

「何だ、これから会議なんだ三分だけならいいぞ」

「この書類の日付は一週間前ですが、何故前もって知らせてくれないんですか」

「だから、二時までまだ一時間あるじゃないか、医務室まで行くのに五分も掛からないだろう？ 違うかね」

「ええ、確かにそうです。でも下着.....」

――これを言ってはならない、相手の思う壺だ。パンツになにが付いていたなんて会社中に言いふらす気に違いない。

「いえ、何でもありません、今の書類を四時までに提出しなければ処理が遅れるのですが、それでも行かなければなりませんか？」

わたしは何が何でも書類のせいにして突っぱねる気でいた。そんなわたしを嘲笑うかの様に課長はわたしの申し出を却下した。

「仕事と健康とは別の次元の話しだ。理由にもならん、もう会議だから行くぞ、四時には帰ってくるから品質保証部への連絡書なら間に合うだろう」

そう言って会議室の方向に小走りに去っていった。きっと、帰ってからわたしの大失態を皆で笑いの種にしようとしているに違いないと思った。

課長がいなくなると、先輩社員の田中主任から注意されてしまった。

「磯野君、あまり上司に逆らってはいけないよ、それに健康診断くらいで文句を言うなんて君らしくないよ。もしかしてパンツにウンチでもついているのかい？ あはは」

――冗談ではなかった。今、まさにそれが現実のものになろうとしていた。

わたしはむっとしながらも、善後策を考えた。スラックスと一緒にこのカレーの付いたパンツも一緒に脱いでしまおうか、それとも、頑としてスラックスを脱ぐのを拒否するか、いずれの選択肢も不自然かつ反抗的態度だった。問題はスラックスを脱ぐことでなくてパンツに付いた茶色い染みを他人に見られ、会社内で笑いものになることを何としてでも避けると言うことなのだ。

わたしは何度も腕時計を見た。今は一時二十分だ、課長とのやりとりで貴重な時間をつぶしてしまった。

「あの、図面制作会社に行ってきます」

そう言ってわたしは外出しようと試みた。会社から五百メートルのところにコンビニエンスストアがあったはずだ。そこでサイズMのトランクスか、ブリーフを手に入れればことは解決する。だが、田中主任は執拗にわたしを妨害した。

「磯野君、さっき昼休みに用事を済ませなかったのかい、どうしても必要な用事だったら仕方がないけど、急ぎでないなら明日の定期便にしなさい」

――何としてでもパンツを買いに行かせない気だ。ひょっとしてさっきのウンチの話しは牽制だったのかもしれない。

「いや、四時の報告に是非ともいる資料なのです。大きな図面なのでメールにも添付できませんし……」

わたしも執拗に食い下がった。その結果田中主任も妨害する気が失せた様で、外出の許可を与えてくれた。

「じゃあ、すぐに帰ってくるんだよ、健康診断は二時からだからね、携帯電話を忘れたら駄目だよ……」

どこまでも言葉の矢が背中に突き刺さった。わたしは逃げるように職場を後にした。表に出て人に悟られないように平然とコンビニエンスストアを目指して歩いた。

コンビニエンスストアに入って、中を見渡すと……週刊誌に日用品……コーナーに下着があった。探してみると、男性用の下着が品切れ寸前だった。唯一履けそうな黒のブリーフを手に取ろうとした瞬間、後ろの男性がスッと手を伸ばしてわたしの取ろうとしたブリーフを篭に入れてしまった。

――何をするんだ！

わたしが彼の顔を見ると、サングラスをして髪は茶色、何となく柄が悪く背も高かった。

「何だよ」

彼はそう言った。

「いや、別に」

わたしは大人しく引き下がった。ペンは剣より強しと言うが、わたしのペンはサングラスにも弱かった。残りの品を見ると女性用しかない。これを買って帰ると言う選択肢も残されていたが、女性用のパンティーをはいて健康診断を受けるか、カレーの染みの付いたブリーフで健康診断を受けるかの判断だった。

店員に聞いてみた。

「急な出張で、下着がいるんだけど在庫はないの？」

「すみません、今日の夕方の便で入荷予定なんですが……もしお急ぎでしたら、このバス道沿いに八百メートルほど先に行ったところにコンビニエンスストアがございますが」

「ああそう、ありがとう」

わたしは、表に出るなり走り出した。あのサングラス野郎のせいで時間と距離を稼がなくてはならなかった。だが八百メートルと簡単に言ったが、電車で一駅分の距離だった。わたしが半分もたどり着かないうちに、携帯電話が鳴り出した。

「はい、磯野」

わたしは泣きそうな声で応答した。

「すみません、庶務の小川です。医務室から電話があって、健康診断に来て下さいと言うことです」

「二時きっかりでなくていいんでしょ？ 三時前でも」

「いえ、三時から女性社員の健康診断なので五分前には男性は完全に撤退するように部長名で通達が来ています」

部長は社内セクハラ委員会幹事だから、そんな通達を出したに違いない。女性社員が着替えだしたときにパンツに染みの付いた男が現れたら、それこそ大騒ぎになるだろう。わたしは一生、彼女たちの笑いものになる気がした。

こうなるとあのコンビニエンスストアにたどり着くしか、残された道はなかった。わたしは携帯電話を切るやいなや走りに走った。もう時間がなかった。たどり着いたコンビニエンスストアに入ると同じ様な配置で、探してみると少し小さいＳサイズしかなかった。女性用よりはいいかとそれを買い、また、全力疾走で会社に戻った。

再三、催促の電話が掛かってきた。それを無視して会社に戻り、今度はどこでパンツを

履き替えるかが問題だった。わたしの職場の階のトイレに行くと午後のひとときらしく、全部閉まっていた。小用のはもちろん誰もいない。いらいらしたわたしは上の階に行ったり、下の階に行ったりしたがどこも塞がっていた。こんなことは入社以来なかったことだ。皆がわたしを笑いものにしようと手ぐすね引いて待っている。わたしはそう信じ込んでいた。

ジャー、と言う水の流れがし、そこが空くかとわたしはコンビニエンスストアの袋に入ったパンツを持って待っていた。だが、中々出てこない。いらいらしたわたしはドアを乱暴にノックした。出て来たのは部長だった。

「君ぃ、何をするのかね？」

「失礼しました、用を足したかったので焦ってつい失礼な真似をしてしまいました」

ここでもわたしは頭を下げるしかなかった。時計を見ると、二時だった。もう猶予はない。部長を押しのけわたしはトイレに入った。

ベルトを外してジッパーをおろし、スラックスを脱いで新しいパンツをはこうとした。少し小さいが何とか入りそうだった。その時点で新しいパンツに、材質と値段の入ったタグが付いていることに気付いた。しかも、糸ではなくナイロン製の丈夫なワイヤでつけられていた。

わたしは、隣の便座をノックし、ハサミはないですかと、尋ねた。もちろんトイレに入るのにハサミを持ってくる人はいなかった。迷った末、ライターをスラックスのポケットから取りだし、火傷しそうになりながら履いているパンツのワイヤを切ろうとした。

ジュッと一瞬でワイヤは切れたが、その時出た炎で、火災報知器のスイッチとスプリンクラーが作動し、天井から降り注ぐ水とサイレンでトイレはパニック状態になり、わたしもずぶ濡れになった。

それでも、携帯電話は丈夫だった。

「磯野さん、早くして下さい。何してるんですか？」

「すぐ行きます」

びしょ濡れのまま、わたしは医務室に駆け込んだ。早くしないと女性社員が来てしまう。医師はわたしに上半身だけ脱ぐ様言って、聴診器で呼吸音を診て、後はレントゲン写真を撮られた。

「あの、ズボンは？」

「脱がなくても結構です」

わたしはその場に座り込んだ。了

台所の死体

台所の死体

風一つない六月の蒸し暑い夜、寝苦しくて容子は布団をはねのけた。しばらく寝ていたが、おなかが冷えて目が覚めた。何時だろう、そう思って月明かりで時計を見た。午前二時だった。寝苦しい夜は一度目が覚めるともう一度寝付くのは大変だ。いつもいびきをかいている夫の信輔はどうしているのだろうと、布団を並べて寝ている夫を見た。だが、姿が確認できない。月明かりで目を凝らした、どうもいない様だと容子は思った。

容子は二十八歳で今の夫、信輔と見合い結婚して今年もう五年になる。夫は大手企業のサラリーマンだったので、最初のうち容子も奥様として比較的気楽な生活だった。だが、一年目にして、不況時代に突入し、会社の業績が悪化すると大幅なリストラが断行され、戦々恐々の日々が続いた。あのときはサラリーマンなんかと結婚するんじゃなかったと後悔もした。しかし、夫も必死で努力したお陰で、夫の部署だけは業績を維持し、リストラも免れた。

この経験で、容子はサラリーマンの厳しさを実感するとともに、いざというときに貯金しか頼るものがないことを痛感し、パートの仕事を始めた。もちろん、家事に支障がない程度である、夫の負担を増やしたのでは本末転倒になってしまう。こうした容子の努力を夫も認め、夫婦の結束はますます堅くなった。

それはよかったのだが、景気は依然として厳しかった。大幅なリストラは回避されたものの、小規模な人員削減は静かに進行していった。定年退職者の後を埋めないとか、転勤しても後任がこないとか、そう言った姑息な手段で会社は人口を減らしていった。

その結果、夫の仕事は相対的に増えていった。仕事は、食品会社の企画部で新しい商品の開発にかかる材料の調達や輸送ルートの確保である。たとえ世界一の珍味を手に入れられても、戦争地域でしか入手できないものだと意味がない。だからと言ってどこでも手に入るものだと競争力がない、そのせめぎ合いの中での仕事であった。しかも、定期

的、季節ごとや正月やお盆、母の日や父の日など、新製品投入の名目だけは年間通じてその気になれば毎日が勝負なのだ。大きな会社なので、目には見えないが、だが、着実に売り上げと利潤を低下させていった。

それに、反比例するように、夫の勤務時間は伸びていった。元々は八時から五時までの仕事だったのが、一年前には帰りが八時になり、半年前には十時になり、三ヶ月前からは十二時を回るようになった。最近では帰宅を諦め、そのまま会社で泊まることもしばしばだった、帰ってくるのは週三日という有様だ。さすがに、容子は夫には直接言わないが、体の具合を心配し始めた。

先週の月曜日、夫が出勤するとき、ついに容子は口に出した。

「あなた、本当に大丈夫？」

「何が？」

「目にくまができてるし、顔色も悪いわよ、一回お医者様に診てもらったら？」

「そんな暇ないよ、医者なんかに行ったら一日つぶれちゃうじゃないか。俺が行かないと仕事が止まってしまうんだ。休めるもんか」

そう言って、出勤してしまった。夫の口調に、容子は何か悲壮感の様なものを感じた。

夫の様子が三ヶ月前からおかしいとは何となく感じてはいた。夜の生活もなくなってしまったし、食欲もないし、夜も疲れているという割にはあまり寝られないようで、ときどき、容子の目に付かないところで、夜中一人でウィスキーを飲んでいる。容子は体に悪いと思いつつも、寝られないのだからしょうがないかと見て見ぬふりをした。

ある日、パート先でご主人が自殺したという人が現れた。気になった容子はその人には悪いと思いつつも、事情を聞いた。やはり、仕事が極端に忙しく休みもなく、最後の何ヶ月かは話しかけても、ボーとして相手にならず、もう死にたい、死にたいと口にするようになったと言う。

「あの、ご主人は元々、落ち込みやすい性格だったの？」

「そんな人じゃありませんでした。大学ではラグビーをやり、忙しくなるまでは会社のレクリエーションでスポーツをやっていたんです。明るくて活発な人でした。三ヶ月前までは」

「何か兆候はあったの？」

「わかりません、ただ、今思うと、……食欲がなくなって、夜の生活もなくなって、何もかもなくなりました。主人には仕事と通勤、それ以外意識になかったようでした」

それを聞いて容子は不安になった。その一歩手前に夫がいるような気がしたからだ。パートの同僚に聞いて、市の保健センターに相談に行った。

少し待たされた後、相談ブースに呼ばれた。係員は慣れた感じの男性だった。

「それで、どうされました」

「あの、あたしのことじゃないんですけど、夫のことで、……」

容子は最近の夫の様子と、勤務状況、そして、パート先の同僚のご主人の事例と似ているので心配なのだと説明した。係員は、担当の保健師を呼んで同じことを彼女に伝えた。保健師は容子くらいの歳の女性だった。

「えっとですね、現在そうした例の自殺が増えているんです。年間三万人が自殺していますが、このうちの何割かはこれが原因と考えられています」

「あの、どういう状況と考えればいいんでしょう」

「一般に過労自殺と呼ばれるもので、うつ病という精神病にかかり、自殺衝動に駆られると言うのが特徴です。自責の念が強く、仕事がうまくいかないのは自分のせいだと強く自分を責め、遺書が残っている場合でも、仕事を投げ出して申し訳ありません。と書いてある例が多いです。もちろんご本人のせいではありません。会社の勤労管理上の責任が問われ、労災認定される例が多いです」

容子にとっては労災なんてどうでもよかった。自殺さえ回避できればそれでいいと思った。

「あの、今の主人の状態はどの位、……その、自殺の危険性という意味ですが？」

「それは何とも言えません、うつ病が重症だと却って行動力がなくなり自殺率は低いんです。自殺する人は比較的軽度な段階で実行している様です。その判断は保健師ではできませんので、一度、精神科にかかられた方がよろしいかと存じます」

容子はそれが出来ないから、ここへ自分だけきたんだと心の中で思った。

その夜、容子は夫にそれとなく職場の同僚のご主人が自殺して大騒ぎだったと言って、夫にも精神科に一度行くよう勧めてみた。だが、即座に却下された。

「何だよ、俺がおかしいとでも言うのか？」

「そんなこと、……言ってないわよ。おかしくなる前に行った方がいいんじゃないかって、……そう思ったから」

「ふん、下らん、誰でも心配事があると寝られないだろう、普通のことだ。心配しなくていい」

そう言って、夫は全く取り合わなかった。だが、容子が保健センターでもらった、パンフレットの自己診断の項目を見ると、性欲がなくなる、食欲がない、不眠、いらいら、集中力がない、無関心、……など、すべての項目が当てはまっていた。容子は夫には内緒で一人で精神科に行って、本人は来ないんですがと、先生に相談した。

「まず本人を見ないことには診察は出来かねます」

「でも、本人は来たがらないんです。何とか自殺と言う事態だけは回避したいんです。何か、その兆候を事前につかむか、うつ病にならない方法はないでしょうか？」

「予防としては、規則正しい生活と十分な睡眠、これしかありません。夜中まで働いたり

午前様が続いたり、会社に泊まり込むような生活では、病状が進行するばかりでしょう」

「あの、今、そっくりそのままの生活がもう何ヶ月も続いているんです」

「ですから、本人を連れてきてください、さもないと薬も何も処方できません」

結局、容子としてはなすすべがなかった。二日に一回帰ってくる夫の気を遣うしかない。そんな生活が続いた。食欲のない夫になるべく食べてもらおうと好きなものを出したりしてもあまり箸をつけようともしないし、風呂に入るとすぐに寝てしまう。話しかけてもあまり興味を示さなかった。

三日前、夜遅く夫が帰ったとき、容子は、お帰りなさいと言ったが、いつも、ただいまと答えるはずの夫は伏し目がちに、ぶつぶつ言うだけで返事をしなかった。そうして、

「俺もう駄目かも知れない。死にたいよ」

とつぶやいた。容子は背筋が凍った。

「何があったの？ 仕事が行き詰まってるの？」

聞き出そうとすればするほど、夫の口数は少なかった。

「俺の責任だ。何とかしなければな、……」

気になる言葉を口にして、食事もとらずに風呂に入り、ろくに洗っていないのか五分も経たないうちに出てきた。容子は二日分の下着を洗濯機に放り込みながら、夫に悩み事があるなら言ってと聞いてみたが、おまえには関係ないからと拒否された。その夜も、ろくに寝られなかったようだが、次の日は時間通り出勤した。

そして二日後、また、二日分の汚れた下着を持ち帰り、口数が少ないまま寝られないのに布団に入ってしまったのだ、そうして夜中に容子が目を覚ますと夫の姿がなかった。

容子がパニックに陥るには十分な状況がそろっていた。まさかと思ったが、窓を開け、道路に落ちていないか目を凝らした、だが、ここは社宅の二階だ飛び降りには低すぎると思った。夫の書斎にしている続きの間の電灯を点けた。だが、誰もいない、……そう

だ、と思ってベランダを見た。物干しからロープをつるせるはずだ。そう思って探したが、ここにも、それらしき人影はなかった。

水を飲んで落ち着こうと容子が台所に行き、電灯を点けようとしたが点かなかった。おかしいと思った。暗い中で目を凝らすと、台所の真ん中で黒い人影が宙からぶら下がっているのが見えた。容子はどきっとした。ぶらんぶらん、人影は音を立てずに揺れている。容子は夫が台所で自殺したんだと分かった。悲鳴を上げようと横隔膜は動いているが、のどから声も出なかった。そのまま、腰から力が抜け、座り込んでしまった。声を出そうとしても、あわわとしか言えなかった。そして、強い自責の念と後悔の念に駆られた。夫に何を言われても無理矢理、首に縄をつけて精神科に掛かっていれば、こんな事態は回避できたんだ。全部自分の責任だと自分を責め続けた。

十五分くらい、座り込んで、夫を下ろしてあげなければならないと容子は思い、立ち上がろうとしてよろめき、また後ろにひっくり返った。

そのとき、背後で水の流れる音がし、がちゃっとトイレの扉が開いた。

「おまえ何しているんだ。トイレの電球が切れているぞ」

「あ、あなた、本物？」

「はぁ？」

「幽霊じゃないよね？」

「当たり前だ、脚もついてる」

「でも、あそこに死体がぶら下がってるのよ」

「何を馬鹿なこと言ってるんだ。病院にでも行った方がいいんじゃないか？」

夫は馬鹿にしたような目で容子を見て懐中電灯で台所を照らした。

死体だと思ったのは、金具が壊れてコードだけ残して宙づりになった蛍光灯の無惨な姿だった。夫は明日直しておけよと言い残して寝室に戻った。了

小指の標本

小指の標本

わたしは姫路から山陽本線で大阪駅に出て、そこから特急雷鳥に乗り換えた。もう何度もこの列車に乗って北陸方面に向かったことがある。慣れた通勤列車も同然だったが、やはり、特急独特の雰囲気がある。第一、通勤電車ではお弁当など食べたことがないし、ましてやビールを飲んでうたた寝することもない。これは特急列車と言う特殊な空間だけがなせる技だろう。わたしは荷物を抱えて、指定席に着くと落ち着いて本を読み出した。弁当とビールはまだしばらくしないと売りに来ないことは分かっていた。車内は比較的空いており、富山まで誰も乗ってこないかなと思ったくらいだ。

だが、次の新大阪駅で大きな荷物を抱えたおじいさんが乗ってきた。目つきが鋭く、一瞬わたしはその筋の人かと思ったほどだった。おじいさんは、わたしに対して丁寧にこの荷物を足下に置いてよいか断って、これを置いた。網棚には上げたくない事情があるみたいだった。なにやら、液体の入った容器が入っているようで揺れると、たぽんたぽんと音がした。そのたびにおじいさんは、にやりとこちらを向いて笑った。しばらくは、無口なまますごし、わたしは本に集中していた。

やがて、車内販売が通りかかった。わたしは、すみませんと声を掛け、通路側に座っているおじいさん越しに、ビール二本と日本酒のワンパック二本そしてお弁当を買った。お弁当だけは早めに買っておかないと昼前にはなくなってしまう。補充の効かない車内では致命的だ。弁当は席の前のかごに入れておいて、わたしはビールのふたを開けようとして、ふと、となりのおじいさんが気になった。頭越しに買い物しておいて何か言わないと失礼かなと、不要な気を遣った。

「あの、たくさん買ったのでビール一本いかがですか？」

と、聞いてみた。おじいさんは炭酸が苦手だからと手を振った。じゃあと、日本酒のワンパックを勧めると遠慮せずに受け取った。おじいさんは、ありがとうとだけ言って、パックを開け、ちびちびと行きだした。半分くらい飲むと老人の顔が赤くなり、段々と言葉数が増えてきた。

「あんたは何をしとる人？」

「わたしですか？ ボイラーの燃焼技師です。これから北陸地方に行ってお客さんのボイラーに点火するのが仕事なんです」

おじいさんは不思議そうな顔をした。

「そんなことが仕事になるのか？」

「ええ、自動化している工場が多いですが点検の後など結構難しい作業なんです。何年かに一度爆発しては死人が出ているでしょう。重油も石炭も簡単には点火出来ないんです」

「ほう？」

おじいさんは、この仕事に興味を持ったようだった。わたしもおじいさんに、この荷物のことと、仕事について聞いた。

「外科の医者だ、無資格だがな」

おじいさんはそう答えた。わたしはますます興味を持った。無資格で外科医など、まるで漫画の主人公の様だからだ。

おじいさんの話では、暴力団員の若い人で指を自分で切断する人がいる、映画でよく、指を詰めるシーンがあるが、そのことらしい、そう言った人が、年をとって引退した後や、孫が出来て指がないのが不都合になったとき、元に戻す仕事をしていると言った。

「そんなことが可能なんですか？」

とわたしが聞くと、おじいさんは指が残っていれば、鞄の中に入っているこの保存液につけて、凍らないぎりぎりの温度で冷蔵保存しておけば将来、移植することが可能だと言った。この保存液について聞いたが、特製のアミノ酸から出来た特殊な薬品だとしか教えてくれなかった。もちろん、厚生労働省の認可など受けていない。

だが、移植しても神経が痛んでいたりすると、せっかく付けてもうまく動かすことが出来ないという。うまく切るには、骨に傷を付けずに、神経も傷つけず、骨と骨の間の軟骨の中間を切るのが理想的と言った。だが、本職の解剖医でもなければそんなことは不可能で、ほとんどは何らかの障害が残ると言った。

おじいさんが、お酒を飲み干したので、わたしは、もう一本勧めた。

「おじさん、もう一本いかがですか？」

わたしも四十過ぎなのでおじいさんと呼ぶのは、ちょっと失礼かなと思い、おじさんと呼んだ。おじいさんもこの呼び方を気に入り、もう一本のワンカップを開けた。おじいさんはわたしの左手を見て、指が欠けているのに気付いた。

「お前さんも左手の指が何本か欠けているな」

確かに、若い頃、機械に挟まれて、小指と薬指の第二関節から先を失っていた。だが、欠けた指は粉砕されてもはやこの世にはない、そう答えた。

「ふーん、お前さん堅気の人だろう。困ることはないのか？」

別に利き腕ではないので、小指と薬指の先くらい、日常生活には差し支えなかった。だが、

「結婚指輪が出来ないのが、唯一心残りです」

実際、妻もわたしのことを気遣って自分も結婚指輪を嵌めていない。

「余ったのでよければ、付けてあげるよ」

「え？」

わたしはその申し出に戸惑った。確かに今の状態より見てくれは、格段によくなるが、元々誰のものだったか分からない指である。第一余った指とは何のことなのか、それが気になった。聞いてみると、引退後、元に戻すつもりが結局最後まで極道しているか、もしくは、それまでに命を失ってしまったかで、引き取り手のない標本だという。

「それに、臓器移植ならだれも前の持ち主など気にするやつはおらんだろう？」

「確かにそうですが、・・・」

「わしのクリニックは、小浜にあるんだ、一度寄ってみないか？」

おじいさんの自称クリニックは奇しくも、わたしの目的地の途中にある。今日は泊まるつもりで明日、お客さんのところに行く予定だから、今日、途中下車しても別に差し支えなかった。それに、おじいさんの仕事にも興味があった、だから、小浜駅で途中下車した。改札で、切符に印を入れてもらって駅を下りた。

おじいさんの自称クリニックは、町外れの更に、入り組んだ路地の中の海の見えるプレハブの建物だった。おじいさんは先に立って、鍵を開けた。わたしは中の大きな冷蔵庫と、診察設備に驚いた。大学の研究室並みだった。

「この設備はどこから購入したんですか？」

「全部自分で、組み立てたんだ、四十年がかりの成果だ。」

そう言って、おじいさんは、大阪で買ってきたというあの、保存液を冷蔵庫に付いている金属製タンクに注ぎ込んだ。

「これが切れたら保存できなくなるからな、」

おじいさんは、冷蔵庫を開け、茶色のビンを二つ取り出した。薬指の先端と小指だった。わたしは驚いてそのビンを見た。いつのものか分からないが、保存液の中でゆらゆらと、持ち主が来るのを待っていた。

「お前さんどうするね？ 今だったら二十万円でつけてあげるよ」

わたしは、自分の指の再生と言うより、このおじいさんの秘密の医療行為自体に興味があった。それに、二十万くらいなら、今度の仕事で入りそうな値段だ。興味本位でつけてもらうことにした。

おじいさんの指示で、わたしは左腕に麻酔を掛けられ、診療台の上に固定された。おじいさんは小さなメスを持ち、わたしの薬指に切れ目を入れ、ピンセットで、血管と神経の端を外に引っ張り出した。そうして置いてビンから取りだした薬指を同じように処理し、わたしの身体に接合し、皮膚を器用に縫い合わせた。わたしの薬指はまるで、あつらえたかの様にぴたりと合い、事故に遭う前の状態に戻った。驚くわたしを尻目に、次は小指の作業に入った。同じように、神経と血管を接合し、皮膚を縫い合わせる。わずか三十分の間にわたしの左手は完璧なものになった。抗生物質だと言って薬をくれたのでわたしは何の疑いも抱かずにそれを飲んだ。

「あの、おじさんはどうしてこういう仕事を始められたんですか？」

「まあ、来てご覧」

おじいさんは手招きしてわたしを更に奥にある冷蔵庫に導いた。その中にはさっきの茶色のビンより更に大きい容器が置いてあった。

「こ、これは何が入っているんですか？」

「臓器だよ」

「ぞ、臓器？」

「そう、身体の部品だ」

おじいさんの話では、肝臓や腎臓、肺、脳、あらゆる臓器を保存していると言う。

「何のためにそんなものを？」

「じゃあ、臓器移植は何のために行うのかな？」

「ええ？　じゃあ、先生は臓器移植もしているんですか？」

いつの間にか呼び方が先生になっていた。わたしも肝臓の半分を切り取って標本にしておけば、将来、肝硬変や肝臓癌になったとき、自分の肝臓をそのまま移植できると言い出した。もうここまでくると半信半疑だった。

「あの、先生は何のためにこんなことをしているんですか？」

「哲学的な質問かね？」

「いえ、素朴な質問です、例えばご家族を移植が出来ないために失ったとか」

先生は、目をつぶってしばらく考えた。

「戦友をな、目の前で失ったんだ。あいつは何度もわしの命を助けてくれた。そして戦争が終わって内地に引き上げたら一緒に仕事をしないかと誘ってくれたんだ。だが、その前に敵の爆弾でやられてしまった」

わたしは一瞬、先生の年齢を推察した、戦争に行ったにしては若すぎる。

「あの、いつの戦争ですか？」

「ふふ、わしが若すぎると思っているんだろう」

「はい」

「あの身体の部品を見ても気付かなかったかい？」

わたしは、まさかと思った。あの身体の部品をとっかえひっかえしながら、生き延びてきたとでも言うのだろうか、だが、目の当たりにした事実からは十分可能だった。

「すみません、戦争に行ったと言うのは分かりました。それで、ご戦友の方は戦死されたのですか？」

「目の前でバラバラになった、だが、わしは必ず、故郷の土を踏ませてやると約束して、あいつのバラバラになった肉片をかき集め、当時、入手できた最低限の成分の保存液につけて、内地に持ち帰ったのだ。だが、臓器のいくつかは足りなかった」

「そうだったんですか、それで菩提を弔うためにこういうことを始められたんですね」

「菩提を弔うためじゃないさ。足りない臓器は心臓と眼球だけだったんだ」

「え？」

「そう、まだあきらめちゃいない」

わたしはいやな予感がした。意識が段々ともうろうとしてきた。

「悪いな、麻酔が効いてきたようだ。ここを見せたのはせめてもの償いだ」

遠のく意識の中でおじいさんの声がした。了

即席うどん職人

即席うどん職人

地元自治会の要請で商店街の催し物に当社からも何か出すことになった。決めたのは総務部長だった。わたしのいる課も含めて、各課から一名ずつ人員を出すことになった。わたしの課ではくじ引きを提案したが、くじ引き案はすぐに却下されて現在大きな仕事を抱えていない人間を出す、と言うことになり、わたしに白羽の矢が立った。

金曜日の終業時間後、その運の悪い面々五人が会議室に集まった。集まったはいいが、皆やる気のなさでは一致していたし、進んで司会をしようという者もいなかった。仕方なしにわたしが口火を切った。

「えー、今回出し物をすることになったわけですが、まず、予算がありません。そう言うわけで安上がりに済むものを考えたいと思います」

「予算がないってどれだけだい？」

「課のレクリエーション費、昼休みにしているバレーボールの購入代金に充てられるものですね、あそこから二万円ほど出るそうです」

「おいおい、それだけじゃ金魚すくいも、ヨーヨー釣りも出来ないよ」

皆が文句を言う中、一人だけ黙っている者がいた。わたしは少し気を回して発言を求めた。

「何かアイディアはありますか？」

「そう言うわけでもないんですが、うどんはどうでしょう。材料は小麦粉と塩だけですよ」

「あの、だしは？」

「それはスーパーで売っているものを使いましょう、讃岐風ぶっかけうどんです」

確かにいい考えだった。それに面白そうでもあるし、手打ちうどんを作って、カップに入れて一杯百円くらいで売り出そうという案だった。他にやるといってもたこ焼きなら型もいるしタコを仕入れなければならないし、焼きそばにしても同様だった。それに風船マジックなど高度なわざを持っているものなければ、口上の立つものもいない。

「では、讃岐風ぶっかけうどんでいいですね」

反対するものはいなかった。

早速、土曜日に小麦粉と塩を買いに行き、わたしが住んでいた独身寮の炊事場で練習をした。とは言っても最初は小麦粉と塩を練り合わせて熟成させるために一晩寝かせておかなければならない。ボールの中に置いておき日曜日に麺を打つことにした。

翌朝、独身寮に五人が集まって昨日寝かせておいた生地を麺にすることになった。集まりが悪く作業を開始したのが十時だった。ボールの中でラップにくるまれた生地はやや黄色みがかっていた。小麦粉がグルテンに変化しているのだ。

その時、寮の管理人が老人を連れて入ってきた。

「管理人さん、おはようございます」

「おはようさん、何しているんですか」

「今度の自治会の催しでうどんを作ることになったんですよ。手打ちうどんです」

連れの老人は、管理人の父親にしては少し若いような感じだったが、会社の人間にしてはやや年を食っている気がした。綺麗な白髪で髪型は上品にバックにしていたが、態度は粗っぽかった。建物の管理会社の人かなと想像した。老人はわたしたちのうどん生地を見て文句をつけた。

「君ぃ、それじゃ熟成に時間を掛けすぎだ。もっと早く麺を打たないと駄目だ。それに、これから麺を打つなら、先に湯を沸かしておきなさい」

その指摘は専門的な内容を含んでいた。

「おじいさんは、うどん職人だったんですか」

「いいや、しかし、そんなものでは駄目だ、麺棒を貸してみなさい」

そう言って仲間の一人から麺棒を受け取ると器用な手つきで、小麦粉のかたまりを手でぺたん、ぺたんとまな板の上に打ち付けてその後、麺棒で引き延ばして平たくした。老人は平たくなったかたまりを更に二つ折りにして、延ばし、また、折りたたんで延ばした。

丁度、火に掛けていた鍋から湯気が立ち上り始めた。

老人は耳で沸騰具合を確認しながらも集中力が途切れることはなく、わたしが眺めていると、今度は包丁で折りたたまれたかたまりを包丁で細かく刻んでいった。

これを元に戻すと一本の麺になった。

「なるほど、でも、おじいさんは職人並みですね」

「無駄口を叩かずに、これをゆでなさい、さっとな」

言われるままにわたしたちは麺をゆでて、さっと引き上げて水道で洗って冷やした。

立派なうどんだった。表面はつやつやして、中は口に含むともっちりしていた。いかにも美味しそうな小麦の香りもしていた。完璧だと思った。

「後はだしだな」

老人はそう言った。わたしは讃岐風ぶっかけうどんにするつもりだと説明すると、老人は一喝した。

「馬鹿者、あれはもっとレベルの高い麺でしかしてはならない。君たち素人がするのならちゃんとだしを取って、ネギと揚げでごまかすんだな」

わたしが予算の話しをすると、ねぎとかつお節、醤油、容器などは商店街組合に協力を要請するのも出し物の幹事の仕事だと説教された。催しは来週日曜だったので、管理人に相談すると話しをしてくれると言ってくれた。寮の食事の材料を仕入れているのでそれくらいなら何とかなりそうだと言ってくれた。

わたしたちは、当日が不安だったので、老人にも調理指導をお願いした。

「君たち、人を頼ることばかりではいかんよ、でも心配だから来てあげよう」

そう言い残し帰って行った。

次の週の日曜日、わたしたちが商店街の広場で店開きしていると老人がやってきた。白衣を着て本格的なうどん職人になっていた。わたしたちは一騎当千の強者が味方してくれた気持ちだった。

老人の指示で、前の日に作った生地を、仲間の男がせっせと麺棒で延ばしていき、もう一人が包丁で刻んだ。わたしはだしを作る係で、これも老人の指示通りかつお節を削って煮込み、みりんと醤油で味付けしたものだ。折角来てくれるお客さんに素うどん（かけうどん）も愛想がないからと、薄揚げを刻んだものとネギを入れた。だし汁が煮立ってくると段々といい香りが辺りに漂い、お客さんが一人、また一人と集まりだした。

どんぶりは、使い捨てのポリエチレン製だが見た目は立派なうどんだった。

「おい、ちょっと味見してくれ」

麺とだしを互いに味見し合った。

一生懸命に打った麺はほどよい固さにゆであげられ、舌の上で快感を呼ぶような歯触りだった。これなら大丈夫だと思った。

うどんを売り始めてしばらくして中学校の制服を着た少女がこの店の周りをうろうろしていた。わたしは最初のうち、誰かの娘さんかなと思っていたが、このメンバーにはこ

の年齢の子供はいなかった。可愛らしい女の子だった。

「君、食べていかない？」

と、わたしは声を掛けた。

「でも……」

「いいから、いいから」

わたしはそう言ってうどんを押しつけた。最初のうちは遠慮がちにしていたが、美味しそうにうどんを食べてくれた。

「美味しいかい？」

「はい、でも、ちょっと味が濃いかな」

結構生意気な感想を述べた。

老人が手洗いから戻ってくると、少女は嬉しそうな顔で、おじいちゃん、と呼んだ。

「あれ、先生のお孫さんだったんですか」

「そうだよ」

「いつも、おじいちゃんの打ったおうどんを食べているんです」

そう言ってにっこり笑った。わたしはおじいさんのことを聞いてみた。

「おじいさんはうどん職人だったのかい？」

少女は首を横に振った。うどん作りは趣味で、何度も讃岐に修行に行ったことがあると話した。わたしはこの老人が筋金入りのうどんマニアであることをこのとき理解した。

老人が声を掛けてこの少女もエプロンを掛けて店を手伝うことになった。可愛らしい売り子が店頭に立ったせいなのか、丁度昼ご飯時になったせいだったのか、売り上げが急

に増えだして、麺うちと釜ゆでの火力が追いつかなくなるほどだった。

だしは大量に作るせいなのか、辺りに食欲を誘う香ばしい匂いを漂わせていた。

最初のうちはご老人が多く食べに来て、美味しいねぇと言う感想を残して行った。しかし、老人が麺を打ち出すとその手つきに並々ならぬものを感じたのか、いわゆる、うどんマニア達が立ち寄り始めた。そして皆が絶賛するのだ。

「この麺は本物だね、だしはいまいちだけど」

わたしは半分面白くなかったが、うどん屋自体は褒められたのだと思うようにした。それに老人も少女も楽しそうにしている。一人の老人が幸せに感じるのであればそれでもいいと、偉そうなことを考えていた。

昼頃になり、会社の総務部長が心配になったのだろうか、わたしたちのうどんの屋台を見に来た。ちゃんと陣中見舞いのビールを持ってきてくれていた。しかし、わたしたちのメンバーを見て直立不動の姿勢になった。

「どうも、本日はご苦労様です」

「いいえ、どういたしまして」

わたしたちは気楽に返事した。

「君たちじゃない、社長に申し上げているんだ」

「はぁ？」

この老人はわたしたちの会社の社長だそうだ。一般社員が社長の顔など知るはずもなかったのだが、社員教育がなっていないのは総務部長の手落ちになる。わたしたちは後で怒られそうだと思った。

「社長、どうも、申し訳ありません」

「いいよ、じいさんと呼んでも、今更態度を変えるんじゃない」

社長も頑固だった。今度はわたしたちがはらはらする中、麺を打ち、刻んでゆであげる作業を夕方までこなした。

四時に作業が終わり、社長には深々と頭を下げ、お孫さんには買ってきたケーキをプレゼントした。

「おかげさまで催し物が無事に終わりました」

「なに、会社のためだよ。うどん屋をやるならまた呼んでくれ」

そう言い残して孫娘と仲良く帰っていった。その後ろ姿を見て、老人にとっても孫と一緒に楽しめて良かったのかなと、少しだけいいことをしたような気になったが、他の仲間達は後で怒られそうだと気にしていた。

実際、休み明けに総務部長から苦情めいたことを言われたがそれほどの叱責でもなかったし、後で、商店街組合から感謝状をもらったらしく、わたしたちには次の催し物への参加を要請された。了

ネコと女の子

ネコと女の子

三月の暖かな週末、僕は和室の縁側の窓を全部開け放ち、おやつに家庭教師先からもらったイチゴを食べようとしていた。僕は大学院生で高校生と中学生の男の子の数学と英語を教えていた。ときおり、そうしたもらい物があるので、貧乏な学生には助かる。

冷蔵庫を開けると牛乳があった。

イチゴミルクにしてみる気が起こった。ボールにイチゴを洗って入れ、その上から少量の砂糖をふりかけ、牛乳を注いだ。見るからに美味しそうで、実際、口に含むとわずかな酸味と甘みが口いっぱいに広がった。僕はこれをくれた男の子のお母さんに感謝した。

ーーみゃあ。

ふと、足元を見ると小さな黒ネコが開け放された窓から入り込んできていた。まだ赤ちゃんネコで、僕の足元に体をすりつけ、何か欲しそうな仕草を見せた。

僕はイチゴをネコにやる気はなかったし、ネコもイチゴを食べようとはしなかったが、残った牛乳には興味を示した。

「わかったよ。やるよ」

僕は牛乳の入ったボールを彼女の目の前に差し出した。

ネコはぴちゃぴちゃと舐めるように牛乳を飲んだ。

それから、ネコは僕の家に居着いてしまった。僕も時々、ネコじゃらしで遊んでやったりして、彼女に愛着を感じるようになっていった。

ネコが僕の下宿部屋に居着いて、すっかりなついた頃。

僕が研究論文を書く膝の上ですやすやと眠るようになった。

そんなある日、近くの住民がやって来た。

「ごめん下さい」

ミニスカートからすらりと伸びた脚が魅力的な二十代くらいの女性だった。髪は少し茶色なのを急に黒く染め直したような色をしていた。

「すみません。僕は下宿人なので、用件は大家さんに伝えてもらえませんか？」

そう言うと、彼女は少し困った顔をし、バッグからもぞもぞとチラシを取り出した。パソコンのカラープリンターで打ち出したような印刷物だった。真ん中には暗い写真が載っていて、彼女は説明を始めた。

「うちのネコちゃんがいなくなったんです。ミーちゃんと言うんですけど、この子見たことありませんか？」

彼女はそう言い、チラシを差し出した。

見たことあるもないも、さっきまで僕の膝の上で寝ていたネコだった。彼女のうちのネコだったとは知らなかった。彼女自身はこれまでにも見かけたことはあった。ここから近い駅で通学途中と思われる彼女の姿を見たことがある。多分、うちの大学の近所の女子大生だと思われた。

「さあ、知らないな」

僕はとっさに嘘をついた。ネコを返すのが惜しかったわけではない。なぜそんな嘘をついたのか、自分でも不思議だった。でも、彼女が可愛かったから、もう少し引き留めて起きたかったのかも知れない。

ーーみゃあ。

ネコは自分で出てきた。僕は心の中でちっと舌打ちした。

「あ、この子！」

女子大生は嬉しそうに叫んだ。「やっぱりいたじゃないですか？ ご近所を訊いて回ってもどこにもいないから、ここにしかいないと思ったんです。まったく、もう！」

彼女はそう言って、少しふくれた顔をした。でも、本気で怒っているわけではなさそうで、可愛い感じだった。

「君んちのネコだったんだ」

「そうです。もらってきたんです。けど……」

少し悲しそうな目をしてこちらを見た。

「どうかしたの？」

「あたし、今年大学を卒業して東京の会社に就職が決まっているんです。だから、この子とも三月三十一日でお別れなんです」

髪を黒く染めたのは就職活動のせいだったのかと勘づいた。

「もし、……もしよかったら、僕が飼おうか？ そうしたら、毎日メールで様子を知らせてあげる」

僕は思わず心にもないことを口にしてしまった。そんな責任を負う必要がどこにあるのだ？

「本当ですか？」

彼女は潤んだ瞳で僕を見た。

そして、僕は彼女の携帯のアドレスやなんかを聞き出すことに成功した。これで、卒業してもネコがいる限りずっと一緒だね、と思った。

春、大学の構内に桜が満開となり、新入生が多く入ってくる中、大学院生だけはしけた顔をして研究室と下宿とを往復している。

そして、僕はといえば、かわいいメル友が出来たおかげで、毎日ネコの写真を撮ってメールで送っている。ただ、彼女からの返信がないのが唯一の悩みの種だった。これってメル友と言えるのだろうか？ 了

着信ナシ

着信ナシ

わたしは、日曜日に家族と一緒に、デパートにお中元を手配しに出掛けた。毎年、面倒だが慣例なので仕方がない。近くの量販店で買って風呂敷に包んで持って行けば安いし、お手軽なのだが、宛先は遠くの親戚もいるし何より、高級デパートの包装紙自体に意味があるのだ。不条理とは思いつつ、毎年、同じ店で手配している。

わざわざ混んでいる時期に、それも休日に行く必要もなかったのだが、やはり、会社関係は自分で選ばなければならないと思ったし、親戚関係はおばあちゃんが自分で見たいと言う。それで、妻と子供二人とおばあちゃんと連れだって、お食事がてら行くことになったのだ。

デパートに着いて早々、わたしは家族で来たことを後悔した。時間的に丁度いいので、食事にしようと思ったところ、子供達は、やれハンバーグだスパゲティーだと騒ぎだし、おばあちゃんは肉は嫌いで、うどんがいいと言う。わたしと妻は顔を合わせ、二人で別れて店に入ることにした。子供は妻が連れてファミリーレストランに入り、わたしはおばあちゃんを連れてうどん屋に入った。

「お前と食事なんて何年ぶりかねえ」

とおばあちゃんはうれしそうに言った。だが、忘れてもらっては困る。

「去年も来たじゃないか」

わたしは、何を食べようか迷うおばあちゃんを無視して、ザルうどんと、きつねうどんを頼んだ。肉が嫌いなら他に注文するものなど、あろうはずがなかったからだ。ここに来て迷っても困る。だが、いざ、うどんが運ばれてくると、おばあちゃんは冷たい方がいいと言いだした。

「また、お腹を壊しては面倒だからきつねにしてくれよ」

とわたしはあっけなく、決めてしまった。ザルうどんなど食べるのに五分もかからない。それで、お茶を飲みながら、熱いきつねうどんと格闘するおばあちゃんの食べ終わるのを待っていた。多分、最後の方は麺がのびてしまったのだろう。年寄りだから食べられないとわがままを言って残してしまった。だったら、もっと早く残せよと、内心思いながら代金を払い外に出た。

子供と妻はすでに食事を終えていたらしく、デパートのレストラン街に併設してある、子供広場で遊んでいた。

「おばあちゃん、遅いよ！」

と子供が責めると、おばあちゃんはわたしのせいにしはじめた。頭に来たが黙っていた。

それから、本来の目的であるお中元売り場に行った。子供は妻の後をついてきている。先におばあちゃん関係を見ることにした、主に親戚とお寺さんである。毎年同じものを選んでいる割には、ここで迷うのだ。わたしはいらいらしながらおばあちゃんが、品物を選ぶのを後ろから見ていた。

「やっぱり佃煮の方がいいかねえ？」

「去年は何を送ったの？」

「覚えてないよ」

幸い、妻が帳面につけていた。やはり佃煮だった。それでいいじゃないかと、投げやりに言った。おばあちゃんは不満そうにそれを選んだ。一体何を選ぶことがあるというのだ。わたしは段々不機嫌になっていった。

「お寺さんには何を送ったらいいかねえ、お前だったら何がうれしい？」

それは現金が一番うれしいに決まっている。だが、それを言ったら身も蓋もない。それを何か選ばなければならなから、面倒に感じるのだ。わたしは妻に去年何を送ったのか聞いた。

「お寺はビールセットね」

「ビールねえ？ 日本酒の方がいいんじゃないかしら」

「もう暑いからビールでいいんだよ」

「でも」

わたしは面倒になり、携帯電話をおばあちゃんに渡して決まったら、お中元売り場の外の椅子に座って待っておくことと、もし、はぐれたら携帯電話で妻の携帯に電話を入れる様に言った。

「使い方が分からないよ」

「だからぁ、」

面倒になり、マジックで押すボタンに、順番に、一、二、三と書き入れた。後でシンナーで消せばいい、その時はそう思った。そこで、おばあちゃんを放っておいて、自分の用事を済ませることにした。上司と普段お世話になっている人だ。これは毎年のことだが、少しくらい心のこもった、と思われるものにしなければならない。それで、妻と二人で選びに掛かった。

「課長は去年は？」

「えーと、ウィスキーね。今年もそうする？」

「銘柄だけ変えようか。」

そして、同じ様なウィスキーを選んだ。

「後は、山田さんだけど」

「去年送ってないわね。何で？」

「ああ、そうか、一年間海外赴任だったんだ。今は日本にいるから、何送ろうか？」

取引先の商社の人だが個人的に色々面倒を見てもらっているのだ。会社から送るわけにはいかなかった。

「一昨年は、ビールとカニ缶のセットよ。どうする？」

「同じだと芸がないな、このグルメセットはどうだろう」

「あたしが欲しいな」

「また今度ね、じゃあこれにしよう」

こうして次々と決め、カウンターに並んだ。案内のお姉さんが番号札を渡してくれた。

「こちらでお掛けになってお待ち下さい」

「ありがとう」

そして、妻と喋りながら座って待っていた。二十分くらいして呼び出され、送り先の住所を書いて、支払いはカードで済ませた。発送控えをもらい、

「さあ、やっと終わった。帰ろうか？」

「そうね」

今日は子供もおとなしく着いてきている。

だが、外に出て、椅子のあるところに行ってもおばあちゃんはいなかった。デパートで一旦はぐれると二度と捕まらないのは経験上知っていた。だから、わたしの携帯電話を渡していたのだ。わたしは妻に、

「おい、ちょっと掛けてくれ」

「しょうがないわね」

しばらく掛けていたが、誰も出ないと言う。

「どういうこと？」

「だから、出ないのよ。十回くらい鳴って後は留守録のメッセージになるの」

わたしは、ひょっとして携帯の受け方を知らないのではないかと心配になった。そうすると向こうから掛かってくるのを待つしかない。

「どうしよう、ここで子供を見てくれるか。おれがそこらを探してくる」

「でも、あなたも携帯がないんでしょ？ 一回はぐれるとわかんなくなっちゃうわよ」

「じゃあ、子供を連れて一緒に探すしかないじゃないか」

「しょうがないじゃない。これからお義母さんにも、携帯を持ってもらうようにしなくちゃ」

「一年に一回のことに、そんなの不経済だ」

「まあいいわ、一緒に探しましょ」

そうして、わたしと妻そして子供達を連れて、辺りを探してもらった。だが、どこにも見あたらない。店員に、聞いてみた。

「この階に他に休憩できる場所はありますか？」

「そうですね、この特設会場の裏側にもう一カ所こうした、椅子をご用意した場所がございます」

それを聞いて、そこまで小走りに急いだ。椅子に座っている老人が何人かいたが、うちのおばあちゃんの姿はなかった。わたしは妻を振り返り、

「ひょっとしてトイレで倒れているのかな」

「まさか」

「でも、電話にも出ないんだろ」

妻は渋々、女子トイレの中を探索した。開いているトイレをのぞき、閉まっているところにはノックをして回った。妻はいやそうな顔で出て来て、おばあちゃんの声はしなかったとわたしに報告した。

「どこに消えたんだろう」

「本当に倒れたのかな？」

「縁起でもないこと言うな」

「でも、電話にも出ないし、もし、出る気があるならその辺の人に聞いてでも出られるでしょ」

「そうだな」

わたしたちは、一階の総合カウンターまで降りて、呼び出しをしてもらった。

《町田市からお越しの山田つね子様、町田市からお越しの山田つね子様、ご家族の方がお待ちです。おられましたら一階の総合カウンターまでお越し下さい。繰り返します。……》

それでも、おばあちゃんは現れなかった。

「ひょっとしたら先に帰ったんじゃないかしら」

「まさか、待ってるって言ったんだよ」

「でも、聞いてる風で聞こえてないときもあるみたいだし」

「本当かよ。じゃあ、先に子供達連れて帰ってみて。それから、連絡用に携帯貸して。着いたらすぐに電話しろよ」

「うん」

そうして、妻と子供は電車に乗って自宅に帰った。わたしはその間もデパートの各階の休憩所を探し回った。やがて、一時間ほど経ち、家から妻が電話をしてきた。

「あのね、お義母さん家の前で座ってたわよ」

「何だって、俺の携帯は？」

「さあ、持ってると思うけど、疲れてるみたいだから、そっとしておいてあげたら」

そうはいかなかった。わたしは完全に頭に来ていた。家に帰るなり、おばあちゃんを捕まえて大文句を言った。

「何で電話に出ないんだよ」

「全然鳴らないよ。これ」

「嘘つけ！」

わたしはその携帯を取り上げた。よく見ると子供のおもちゃだった。了

幽霊屋敷

幽霊屋敷

わたしは家族を連れて不動産屋の案内で、一軒の貸家を見に来ていた。別にこの家が気に入って見に来たのではない。今まで勤めていた会社を解雇され、派遣会社に転職したのだが、派遣先があるときと待機中で給与が変わるためにこれまで通り自宅のローンが払えなくなったのだ。他にも削れる生活費はあったのだが、これが一番大きかったのと、子供の教育費用まで削るべきではないと思ったのだ。それで、ローン中だったが、今まで住んでいた家を売って、ローンの残金を支払った。買ったときよりかなり安かった。

不動産屋で、今の家族、妻と子供二人と今までの家具を収容できる家を探した。どことも家賃が高く迷っていると、不動産屋が一軒だけ掘り出し物があると言い出した。築二十五年だが、最初に住んでいた人が二十年住んでリフォームを一度しており、その後入った人は一家族だけだったという。

それで、今日家族を連れて、見に来たのだ。

外から見ると、白かった外壁は所々黒ずんで古さを感じさせた。それに、蔦らしい植物が壁をはって、何となく陰気な雰囲気を醸し出していた。

「いや、古いんですけどね、前に住んでいた人が三年で出てしまってその後二年ほど空き家だったんですよ。もし、お入りになるんなら事前にクリーニング会社に委託して中の掃除は致しますよ」

と、不動産屋は言った。彼は、金属製の門の鍵を開け我々を敷地内に案内した。庭は草ぼうぼうで、雨樋も所々外れていた。そこから水が漏れたのだろうか、窓枠に水が流れ込んだ跡がついていた。水はすぐにものをカビさせ、黒くしてしまうものだ。

「前の人はどうして三年で出たんですか？」

わたしは、無意味な質問をした。正直に答えることはないだろう。

「仕事の都合らしいですよ。ご家族で引っ越されました」

当たり前だ、家族で引っ越さないでどうするというのだ、とわたしは思った。

不動産屋がドアの鍵を開けた。むっとする空気が流れてきた。わたしは何となく背筋の凍る感覚に見舞われた。妻も同じように感じたらしく。わたしの顔を見た。子供達はこれから廃屋に探検にでも行くようなつもりで待ちかまえている。それだけが救いだった。

不動産屋に案内され、スリッパを履き廊下を進んでいった。床はかなりすすが溜まっていた。二年も空き家ならこれくらいしょうがない。手前に日本間があり、奥に洋間、そして一番奥に台所で部屋と反対方向に、トイレと風呂が並んであった。子供達は喜んで階段を走り上がっていった。

「おい、怪我するんじゃないぞ」

「はーい」

日本間を見ると、畳は茶色に変色し、ちゃちな床の間が付いてはいたが、かなり焼けていた。ふすまを開けると押し入れだった。ここもむっとした空気があった。ふと上を見ると、押し入れの天井のフタが少しずれていた。

「あの、ここから天井裏に出られるんですか？」

「ああ、電気工事なんかのときに使うものです」

そう言って、不動産屋は身軽に押し入れに飛び上がり、天井のフタから上をのぞいた。一瞬彼の顔色が変わったのをわたしは見逃さなかった。だが、彼は何事もなかったかのように、フタを元に戻し、下りてきた。

「さてと、お次は洋間です」

わたしと妻は、隣の洋間に行った。ここも、壁紙が茶色に変色していた。

「あの、本当にリフォームしたんですか？」

「ええ、工事業者はうちの提携先ですから確実です。五年前ですが」

五年でここまで壁紙や畳が痛むとは、前の住人がよほどずぼらだったのか、扱いが悪かったのだろうと思った。洋間は板の間だった。妻が踏むとギシギシと音を立てた。それに、板の表面に何やら茶色い丸いシミがあちこちにある。まさか血の跡ではないだろうなと疑いながら、不動産屋に聞いた。

「床下と、板材が痛んでいますね？」

「いや、この部屋は、元々、建て付けが悪いらしく、何度補修してもこうなんです」

わたしは風呂場を見た。黒い水が溜まっていた。思わずぎくっとした。不動産屋が慌てて、水を抜こうと栓のチェーンを引っ張った。ゴボ・ゴボ・・・と二、三回音を立てただけで水は抜けなかった。

「排水管が詰まっているようです。これも、業者に言って掃除させます」

「それならいいですが」

トイレも同様に詰まっていた。明らかにおかしかった。二年も空き家なら普通は乾燥してしまっているはずだ。なのに、こんなに湿気ていてカビや変な藻が繁殖して排水管を詰まらせてしまっている。

わたしたちは、子供のことが気になった。二階で暴れているなら不思議ではない、さっきから全然その気配がしないのだ。

「二階も見ましょうか」

と、わたしの方から促した。妻も子供達が気になったらしく付いてきた。階段も所々、ギシッと音を立てる段があった。だが、言ったところで建て付けが悪いと言うに決まっている。わたしは放って置いて上がっていった。妻が変なことを言い出した。

「あら、この階段、ちょうど十三段だわ」

「え、そんなことないでしょう」

「でも、ほら、いち、にい、さん、……ほら、十三段」

不動産業者も素直に認めた。珍しい建て付けだが西洋ならともかく、日本では取り立てて問題にすべき事項ではない。二階には洋間が三部屋あった。順番に見て回った。最初に入った部屋は妙に薄暗かった。北側に向いているせいなのか隣の木が光を遮っているのかとにかく陰気な部屋だった。床はその割りに茶色くなり、すすけていた。

隣の部屋には、何故か木製の机が置いてあった。子供用にしては少し大きいが、大人用の事務机ではない。

「あの、どうしてこの部屋にこんなものが置いてあるのですか？」

「いや、二度目の入居者のものらしいんですが置いていったんです。我々も廃棄処分にしようとしたんですが、何故だか部屋から出せないんです」

「出せない？ 変なこと言わないで下さい。じゃあ、どうやって入れたんですか？」

「それがわからないんです。組み立て式かなと思ったんですが、どこにもそんな継ぎ目はないし、ここで組み立てたようなちゃちなもんでもないし、しっかりした木製ですよね。お使いになったらいかがです？」

「冗談じゃない。前の入居者と知り合いならもらったりも出来ますが、知らない人ですよ。気持ちが悪いので何とかして下さい」

「困りましたねえ」

わたしも、家賃が２ＤＫの賃貸マンション並みの値段なので、多少の気味悪さは我慢して、なるべくならここにしたかったのだ。だが、気味悪さは、説明を聞けば聞くほど募る一方だった。

わたしは、その机を調べてみた。表面には子供が使っていたらしく、小さな傷と落書き見たいなのがあった。どうやら娘さんがいたようだった。引き出しを開けてみると、一番上に茶色に変色したノートがあった。見ていいのかわからなかったが、何となく気になりページを開いた。

六月三日（月曜）今日、学校でトイレに入ったら水を掛けられた。もう行きたくないよ。学校を変わりたい。

六月四日（火曜）お父さんの会社がうまく行って、都心に事務所を移すことになり、あたし達も都心のマンションに変わることになった。うれしいよー。

六月十日（月曜）お父さんの会社の引っ越しがなくなった。お父さんは思い詰めた顔をしていた。あたし達にも八つ当たりする。あたしは居場所がなくなった。死にたい。

六月十八日（火曜）最近お父さんが家の中で暴れる、昨日はお母さんが包丁で切られて泣いていた。次は、あたしだ。

六月三十日（日曜）タンスを動かしてドアが開かないようにしている。ドンドンとドアを叩く音がする。もうすぐ殺されるかも知れない。神様.....。

日記はここで終わっていた。わたしは何となくいやな予感がしてきた。

「あの、不動産屋さん」

「何ですか？」

これ以上何か文句があるのかと言う顔でわたしを見た、これが最後の質問だった。

「前のご家族がここを出て行ったのは、七月の初旬じゃないですか？」

「えーと、どうだったかな」

と、ファイルを繰り出した。わたしは、この不動産屋がすっとぼけていると思っていた。

この家のこの部屋できっと忌まわしい事件が起こったのだ。それで家賃が安いのだ。わたしはそう決めつけていた。

「えー、そうですね、二年前の七月三日に鍵を預かった記録がございます」

「その鍵はここの御主人が持ってきたんですか？」

「署名が男の人の名前なので、お子さんでなければ御主人でしょうね」

やっぱりそうだ。ここは惨劇のあった現場なのだ。そう考えると床の茶色い染みも、家族の血の跡に見えてきた。わたしは妻にさっきの日記のことを小声で話した。

「えぇー、ほんと？」

「声が大きい。それで子供達は？」

「それがいないのよ。あの、不動産屋さん、子供の隠れられる場所ありますか？」

「二階は洋間が三室です。押し入れくらいじゃないですか？」

妻が、この部屋の押し入れを開け、わたしは隣の最後の部屋の押し入れを開けた。ここも、天井板が外れるようになっていた。また、電気工事のためだと言うんだろうと、わたしは押し入れに、ひょいと上がり天井板をずらして頭だけ天井裏に出した。真っ暗で何も見えなかった。何やら黒い人影がチラチラと動いているように感じた。わたしも一瞬、表情がこわばった。さっき下の階で不動産屋が表情を変えたのは、何か見たのだと確信した。わたしは持っていたライターで照らそうとしたが、その手を急に押さえられた。

「ヒェッ」

「いや、わたしです。火事の危険があるので、このペンライトを使って下さい」

不動産屋だった。驚かせやがってと、ペンライトで天井裏を照らした。だが、さっきの黒い影はもうなかった。

「あなたー、こっちにいたわよ」

と妻がわたしを呼んだ。あの木製机の裏側に隠れていたらしい。

だが、わたしは、この家に住む度胸はなかった。余りにまがまがしいと思ったからだ。不動産屋には、もう少し検討してみますと言って帰ることにした。妻もこの家を余り気に入ってなかった。階段を下りたとき、階段下の物置で音がした。気になったわたしは勢いよく物置を開けた。

首吊り死体がぶら下がっていた。

わたしは気を失って倒れてしまった。しばらくして妻のわたしを起こす声がした。

「あなた、あれ、サンドバッグよ」

これも前の住人が置いていったものらしかった。了

アライグマの親子

アライグマの親子

子供達の夏休みが始まって一週間たった頃に、山奥に住んでいるおばから電話があった。

「ああ、真ちゃんかい。子供たちが夏休みだろう？」

「うん、どこか遊びに連れて行けってうるさいんだよ。そっちに変わったものってないかな」

わたしが子供の頃からよく遊びに行っていた、親戚のおばさんであり、田舎に住んでいて子供にとって珍しいものがたくさん置いてあり、しかも、そのおばさんの存在自体が面白いという一番お金の掛からない行楽先でもあった。

「そうそう、それでね……」

おばの話しは長かった。畑で作っているトマトやキュウリ、阪神タイガースの試合結果や、オリンピックマラソンの選考会の文句など延々と三十分くらいしゃべり、ようやく本題に入ったのだ。それまでの前置きは落語で言えば小咄《こばなし》のようなものらしかった。しかし、今回のねたは少し面白かった。

「この間からさ、作物が荒らされて役場に罠《わな》を借りて仕掛けていたのよ」

「イタチとかイノシシとか言うんだろ、何か掛かったの」

「それがね、変わった色のタヌキみたいなのよ。真ちゃんのうちでペットにしない？」

「タヌキだって？」

「タヌキかどうかわからないよ。でも、可愛いから一度見においで」

そんなことを言われて、面倒だったが今週末に見に行くことにした。夏休みと言えど子供は塾に通っている。わたしが勝手に約束を取ってしまって、後で先生に叱られても困ると思ったが、幸い予定はあいているようだった。

週末に自家用車で一時間ほどのところにあるおばの家に子供二人と行ってみた。夏のさなかのドライブなど、車内は暑く、しかも、皆も休みと見えて道も混んでいた。

空いて来たのは、道が片側一車線になる郊外に差し掛かってからだった。ここからおばの家まではいつも快調にとばせるのだ。

さっきまで後ろの席で、ドライブに飽きて駄々をこねていた下の子も、快調にとばす乗用車と、遠くまで見える山と川の景色にすっかり機嫌がよくなってきた。

「退職したらこんなところに引っ越すのも悪くないね」

わたしはそんなのんきなことを言った。

「僕は嫌だよ、何にもないんだもの」

「何もないのがいいんだよ」

田舎暮らしのいいところは、何もないところだと、わたしは思いこんでいたが、実際はそうでもないそうだった。村の消防団や婦人会などの付き合いが大変だし、農業もお天気次第で苦労が絶えないと、わたし達がつくやいなやおばは愚痴をこぼした。子供たちは早速、母屋の周りを走り回っている。

わたしは、涼しそうに見えた縁側に腰掛けて子供たちが遊んでいる姿を眺めていると、おばが麦茶を入れて持ってきてくれた。お菓子もあるので子供たちも走ってきた。

「最近どうなの、おばさん」

「今年はお天気がいいから、……でも、そっちはいいんだけど、町に働きに出た息子た

ちがねえ」

おばは溜息をついた。ここには中学校までしかなく、ここの息子、即ち、わたしの従兄弟たちが進学する年頃から就職する時まで、何かとお金もかかるし心配事が絶えなかったのだ。そして、現在は町で働いているのはいいが、今度は適齢期なのに、いいお相手がいないと文句をいった。

「そんなもの、真面目に働いていればそのうち現れるよ」

わたしが気休めをいうと。三十分ほど説教をされてしまった。適齢期を過ぎると、相手の女性も当然適齢期を過ぎる。今時の若い人だから意識の上では問題はないだろうが、人間は気持ちだけの生き物ではないと言い切った。要するに早く孫の顔が見たい、ということを遠回しに言っただけのような気がした。

「でも今の若い女性って、本当に結婚しないよ」

「それが信じられないのよ。昔は二十四、五で片付いていたじゃない」

「だから、誰も結婚しなくなったから、世間体も気にならなくなって、そのまま職場に残っても何の差し支えもないんだよ。それに、総合職の人は、男性社員とほとんど同じ扱いだからね」

「ああ、困った、困った」

おばは、ここの二人の息子さんの行く末を案じて嘆いた。わたしは、そんな世間話に興じると早速本題に入った。

「この前に電話で聞いたタヌキなんだけど。ここから近いの？」

「ああ、忘れてたわ。ちゃんと餌もやってるから元気よ」

おばの話しでは、母屋の裏山から侵入してきて、畑の作物を荒らして、また帰っていくという。役場の専門家の助言で、そのルートになる裏山の出口付近に、罠を仕掛けたところ早速掛かったらしい。本来なら、とっとと、役場に連絡して、獲物を保健所に渡さなければならないのだが、うちの子供たちに見せてやりたいと言って、餌を与えてその

まま飼っている状態らしかった。

おばを先頭にして、長袖に着替えたわたしたちは、裏山を少し上がったところの獣道が少し広くなっているところまで歩いた。子供たちはまるで探検にでも出掛けるかのように楽しそうにしていた。

ヤブ蚊が首筋にまとわりつき、汗にまみれた。わたしは、感覚に任せて手のひらで追い払ったが、早くこんな所を出たいと思っていた。

「ここよ」

叔母が指さしたのは、大きさが一メートルくらいの鉄パイプで組んだオリで、中に餌をぶら下げて獲物がそれを食べようとするとフタがガチャンと降りて閉じこめられるようになっている罠だった。

中には、白黒の模様のアライグマがいた。小さな手のひらで餌のリンゴを掴んで、食べていた。

「これ、アライグマだよ」

「そんなもの、日本にもいたんだねえ」

「違うよ、元々、北米の生き物だから、野生状態のアライグマが日本にいるわけがない。誰かがいらなくなって山に捨てたんだろう」

「ねえ、お父さん二匹いるよ」

「何だって？」

子供の声に、オリの中をよく見てみると、親アライグマの体の横に小さな子アライグマがくっついていた。多分、親にくっついて夜間餌を採りに出掛け、そのまま親子でこの罠に捉えられてしまったと想像した。

「おとうさん、可愛いねえ、アライグマ」

子供はうれしそうにはしゃいでいた。が、おばは少し可哀想なものを見るような目で見つめた。

「まあ、あんたたちに見せたらね、役場に連絡しようと思ってたの、そしたら引き取りに来るから」

「ねえ、おばちゃん、アライグマはどうなるの？」

「そうねえ」

おばは口を濁した。はっきりとは知らないが、害獣はこのあと保健所に送られてガス室で処分されるはずだった。子供たちには少し言いにくいことだった。しかし、どうせ、いつかはそう言う現実も知る時期が来るし、目を背ける人間になってはいけない。

「アライグマはね、神様の所に行っちゃうんだよお」

そんな風にとぼけていった。

「いやだよ、僕が飼うから、ねえ、連れて帰ろうよう」

子供はアライグマをペットにする気でいたようだった。おばは、この後、獲物のありなしに関わらず、罠を役場に返さなければならない。だから、飼った後でやっぱり嫌になったからと言い出しても、後からアライグマを返すわけにはいかない。今度は本当に自分で保健所に持って行かなくてはならない。

本当に自分たちで責任もって世話できるのか、子供たちに確認したが、こんな時に、自信がないと断言するようなら、もはや子供ではない。彼らはこのアライグマの親子を世話すると言ってのけた。

ことの成り行きで、二匹のアライグマをペットにすることになった。

早速、ペットショップで小型獣用のケージを買ってきてそこで飼うことにした。最初のうち、子供たちは喜んでアライグマに餌をやったり遊んだり、友達を連れてきて見せた

り得意そうにしていたが、子アライグマが成長するにつれ大きくなり、親アライグマと引き離す必要が生じた。もう一つケージが必要だったが、この頃にはすでに子供たちの興味も薄れていた。

段々と子供達がアライグマの世話を焼く回数も、アライグマを見る回数も目に見えて減っていった。そのうち、餌も、ケージの中にたまった糞の掃除もわたしや妻の仕事になりつつあった。

子供が小学校低学年なら、まだ、目をつぶることも出来たが、そろそろ、責任を持って行動すると言うことを教え込まなければならない年齢でもあり、丁度いい機会だと思った。

「おい、お前たち、最初にちゃんとアライグマの面倒を見ると約束しただろう」

「だって」

「だってじゃない。誰も世話をしないなら保健所に行く羽目になるぞ」

「保健所に行ったら本当に殺されちゃうの？ 本当は飼ってくれるんじゃないの？」

「都合のいいことばかり言うんじゃない。ちゃんと世話しなさい」

わたしがそうは言ったものの、そのうち、誰も面倒を見なくなり、アライグマも餌をもらえないものだから段々と反抗的になってきた。可愛くなくなると余計にペットとしての地位を失い、完全に放置状態になった。

子供の教育上よくないので、責任を取ることを学ばせるために、子供たちを連れて保健所にアライグマを連れて行くことにした。車の中で最後のお別れをするとき、アライグマが両手の手のひらを合わせて拝むような仕草をした。

「お父さん、やっぱり可哀想だよ」

「じゃあ、世話をするのか？」

「でも」

確かに、アライグマでも拝まれれば可哀想になった。その上誰も面倒を見ないとなると、取るべき選択肢はなかった。

次の週末、わたし達は、おばの住んでいる家の近くの山に登り、そこでアライグマの入ったケージを開けた。二匹のアライグマは最初のうち餌をくれていた子供たちに遠慮していたのか、二人の周りをうろついていたが、やがて、藪に隠れて見えなくなり、山の中に入っていった。わたしは、無責任な飼い主そのままを演じていたことを悔やんだ。

次の日、おばから電話が掛かった。

「あら、真ちゃん？ また、アライグマが掛かったわよ！」

電話口からおばのうれしそうな声が飛び込んできた。わたしは、溜息をついた。了

ゴミステーション

ゴミステーション

「こんにちは、いいですかね？」

日曜日に家でゆっくりと新聞を読んでいるとインターホンが鳴り、出てみるとわが町内の自治会長をしている山中さんのご主人が立っていた。彼は六十五歳くらいで元市役所勤めと聞いている。根回しなどの得意技があり、自治会でもその辣腕《らつわん》をふるっていただけに、我が家にやってきたときには一瞬身構える思いだった。

「細谷《ほそや》さんを見込んで、頼みがあるんですよ、ふふふ」

彼はそう言って意味ありげな笑みをこぼした。

「何でしょう」

と、わたしは平静さを装って尋ねた。

彼の話しは、他でもない町内のゴミステーション増設のことだった。前から場所が少なすぎると文句を言う人がいて、春の総会では何とかするという執行部の返事があったばかりだった。それをうけて、自治会ゴミステーションを増やすことになったのだ。

ゴミが増えたのはコンビニ弁当の空き殻や、パックなどが増えて来たためだ。従来の置き場だけでは道路にあふれかえり、自動車の通行に支障が出るのと、衛生上の問題が起こっていた。そのため自治会総会では各丁目ごとに一、二カ所ずつ増加させることが決定された。

さて、わが三丁目では、現在二カ所あるうちの近くにもう一カ所を増やすことで、役員である大野さんが各番地ごとに一軒ある幹事に割り当てて、候補地を挙げることにした。当然、幅の狭い道路では使用許可は下りないし、交通量の多すぎるところでもゴミを出

すのが危険だ。そういう条件を勘案すると、二番地の大野さんと四番地の佐々木さんの家の角に設置するほかなかった。

これを、決定事項として自治会執行部から本人たちに押しつければ、それとなく、決まってしまうはずだったのに、理事の大野さんが、自分の家の前に設置されるのに難色を示したことから、ことは紛糾した。当然、進んで、是非うちにという人などいなかったからだ。

「実は相談があるんですよ、ええ」

山中会長はほほえんだ。

「何ですかね？」

わたしも分かっていて、聞き返した。持って回った言い方をされると反発してしまう性格なのだ。それは、他の人も同じかも知れない。この自治会長はきっと、わたしから進んでゴミステーションを引き受けたことにしてしまうに違いないと彼の目を見て、そう悟った。

「三丁目のゴミステーションなんですが、どこがいいでしょうかねえ」

「そうですねえ、どこがいいでしょうねえ」

と、わたしもすっとぼけた。四十にして少し大人げないとは思ったが、相手だって六十半ばにして幼い真似をするのだからしょうがなかった。

「いやね、こういう問題はですね、わたしが市役所にいたときからそうなんですが、常に理想的なことには賛成だけど、具体的になると反対に回る人が多いものなんですよ」

「そうなんですか、へえ」

別に市役所でなくたって、総論賛成・各論反対はどこの会社の会議でも同じことだった。忘年会の幹事すら自分に回ってくると嫌がるものなのだ。それも、一番盛り上がる人でさえである。

以前、バスの運行経路を変えてもらうことを陳情した際にも同じ問題が起こった。

県道をまっすぐ町まで走っているバスを、こちらの町内に迂回させて、便利にしようというもくろみがあったのだ。バスの誘致までは、全員賛成だったのだが、いざ、バスの停留所を決める段になり、受け入れる人はいなくなってしまった。

バス停が近いのは、大歓迎だが、だからといって、家の前は困る。そう言う人ばかりだったのだ。バス停があれば、待っている間にたばこを吸ったり、ジュースを飲んだりする人がいる、それで、家の前の掃除が増えるというのが反対の理由だ。それに、車を持っている人も、家の前の道路がバスでふさがれるのを嫌がった。

そんなわけで、最終的にはバスが通ったのだが、こんな問題に一年近い小田原評定をしていたのだ。結果はわかっていても、相手にどう納得させるかだけの話し合いだった。

「ひとつ、……どうでしょう。一肌脱いでもらえませんか、細谷さん？」

わたしがとぼけるのに業を煮やし、とうとう山中会長は口火を切った。

「一肌？」

「ええ、細谷さんの前の道路は、確か、……五メートルありますよね」

口火を切ったかと思うとまたも、持って回った言い方をした。誰でも家の前にゴミステーションがくるのは躊躇するものだ。もちろん、町内の持ち回りで各家庭がゴミ収集車が回収に来た後で掃除することは決まっている。しかしながら、掃除が済んだ後で、とぼけてゴミを持ってくる非常識な人は少なからずいるし、そのたびに注意するか、見つけ損なったら次の回収まで保管しておかなければならない。何にしても仕事が増えるだけだった。

「この道路は、本当に五メートルもありましたかねえ、普段は駐車違反の車が多いから、実際の幅なんて知りませんでしたよ。あはは」

わたしは、なおもとぼけ続けた。

「いや、幅は図面で調べてあります。衛生局と警察署の交通課への届けには差し支えありません」

――もう調べているんじゃないか、と思った。

「ほう？ 大野さんの前の道路は、ここより少し広いんではないですか？」

「いや、同じですよ。広くはありません」

彼が持って回った言い方をする理由がわかった。本来の大野さん宅の前の道路と同じ条件で、理事である向こうが断ってきたから言いにくいのだ。しかし、こちらも、なぜか彼の対応を見ていると意固地になってきた。直接、ゴミステーションを引き受けてくれと言われない限り応じない気になってきた。

「大野さんはどうして断ったんでしょうねえ、今年度の理事をなさっておいでなのに」

「まあ、そう言わないでください。あそこの奥さんも色々忙しいんです。それに、まあ、交通量も多いそうなんですよ」

奥さんが忙しいのはこちらも同じだったし、交通量とて具体的なデータがあるわけでもなかった。

「ほう。交通量が？ うちも同じですよ」

山中会長がついに墓穴を掘ったとわたしは言葉尻をとらえてほくそ笑んだ。

「い、いや、あそこは幹線道路に近いし、緊急自動車が通るときに差し支えがあるんです」

彼は、ああだこうだと、言を左右にし、言い逃れ始めた。わたしもそろそろ、けりをつけようと逆に、話しの糸口を探そうとした。だが、みつからない。一旦、引き受けないような言い方をしておいて、後から、じゃあわたしがやります、と言うようなことは中々言えないものだった。

「だ、だから、とにかくですね。町内のゴミが増えて困っているんですよ。総会の議事録を見てご存じでしょう？」

段々と、山中会長は真っ赤な顔をして熱がこもってきた。こもっている割にわたしが返事を出来ないのは、最初から、用件を話さないためだった。ゴミが増えているのは分かっているし、ゴミステーションを増設しなければならないのも知っている、誰かが手を挙げない限り問題は解決しない、と、それくらいのことは分かっていて、双方が意地になっていた。

結局、この日は用件にまで至らず、話し合いは決裂した。後でことの成り行きを聞いた妻からは叱られる羽目になった。

「まるで、わたしが掃除が嫌であれこれ言っている様に近所の人に思われるじゃない」

「すまない」

「すまないじゃないわよ。もう」

「大野さんの奥さんとよろしく話し合ってくれ。な」

「もう」

こうして、妻の機嫌を損ねたまま、陰鬱な週末を終えた。週末にまでストレスがたまると平日の仕事もどんどん疲れがたまってくる。そんな金曜日、朝出勤の途中で昨夜から出されていたと思われるゴミが置いてあるのを見かけた。

――駄目だねえ、こういうことをしては。

わたしは、犯人を突き止めようと手が汚れるのも気にせず、ポリエチレン製の袋を破って内容物を点検し始めた。葉書やレシートなど、何か手がかりになるものが、大抵一つや二つは入っているものだ。

電車の時間が過ぎるのも忘れていた。中からは女性のものらしき下着など数点が見つかり、道路の上に並べていった。

その瞬間、後ろから肩をたたかれた。

「ちょっと、何をしているですか！」

警官が立っていた。変質者と思われて通報されたようだった。わたしは言い訳しようにも女性の下着を手にして単なる変質者にしか見えないことを悟った。

「いや、ここに誰かがゴミを捨ててですね。それで、犯人を突き止めようとしたんです」

「本当に？ お名前は？ 住所は？」

厳しく尋問され、身分証を持っていなかったために交番にまで引っ張って行かれた。警官にしつこく尋問されるうちに段々と不条理な気がしてきた。ゴミを捨てた人間には何のおとがめもないのに、その犯人を捜そうとしてこうして濡れ衣を着せられていると感じたのだ。

「大体、お巡りさんがちゃんと見回らないからゴミの不法投棄が後を絶たないんじゃないですか。ええ？」

「それはそれです」

「それに、捨ててあるゴミの袋を開けて何か法に触れるんですか？」

「いえ、別に」

「じゃあ、帰っていいですね」

と、強引に警官を納得させてその場を離れた。この光景を誰かが見ていて、一部始終を面白おかしく吹聴したために、わたしはすっかり朝から女性の下着を漁る変質者呼ばわりされてしまった。

次の週末、わたしはバツが悪くなり山中会長の元を訪れた。

「あの、ゴミステーションのことなんですが、是非うちの前に置いてほしいんです。いや、置かせてください」

「細谷さんもずいぶんと人が変わりましたね。大野さんも相変わらずしぶといしで、是非ともお引き受け下さると助かるんですが。ただ、ねえ……」

「何です？」

「細谷さん一昨日の朝、変なことで警官に職務質問を受けていらしたでしょう」

「あれは、何でもありません、無実です」

「それは、承知しているんです。ただ、あのときに女性ものの下着を漁っていたと、失礼、これは、噂です。それで、近所の奥さん連中が今度は文句を言ってましてね」

またもや会長は持って回った言い方をした。要するに自治会長が近所の奥さん連中から猛反発を受けて、うちがゴミステーションをしなくていい、いや、絶対にさせないことになったようだった。了

じいちゃんとアブラゼミ

じいちゃんとアブラゼミ

少年は夏休みに、田舎にあるじいちゃんの家にやって来た。七月の最後の週に五日間だけ泊まることにしていた。

じいちゃんの家は大きな農家で、母屋の裏手は山になっていて、いくらでも虫捕りができると聞き、少年は目を輝かせた。

「じいちゃん、一緒に行こうよう」

少年がそう言うと、じいちゃんは蔵の中から、古い網と虫かごを出してきた。ほこりだらけで、しかも、網は破れていた。ここから虫が逃げていきそうである。

山に分け入って最初に気が付いたのは、じいじいと鳴いているセミだった。

「あれは、何なの？」

「アブラゼミだな」

じいちゃんは鳴き声だけで分かるようだった。じいちゃんが指さす方向を見ると、茶色い羽根をした大きなセミがあちこちにいるのがわかった。少年は捕まえたくて、手の届きそうなところにいないか鳴き声を頼りに探したが、最初はどこにいるのかさえ分からない。木々の間に入ると、耳が割れんばかりに響いていたセミの声が一斉に停まった。

「向こうも人間の気配を感じているんだよ」

子供なんかに捕られてはかなわない。セミもそう思っているに違いない。

じいっと目をこらすと、木肌にわずかな色の違いがあるのに気がついた。そこにアブラゼミの成虫がいた。少年は網をバサッとかぶせるが、ぺちゃっとおしっこを少年の顔に引っ掛けて飛び去ってしまった。じぃぃと言う声だけが残った。じいちゃんは、そんな少年を見て、がはは、と笑った。

じいちゃんに頼んで最初に手本を見せてもらうことにした。じいちゃんは慣れた手つきでセミの後ろ側から手を伸ばし、手頃な高さにいる奴を手ですいっとつまんで捕ってしまった。

あっと少年はさけんだ。こんな風に捕れば簡単そうに思えた。

「ほれ」

じいちゃんはセミを少年に渡してくれた。セミはじぃぃと鳴き、少年がつまむその手にも、振動が伝わってきた。

「あれ、鳴くんじゃないんだね？」

「そうだよ、おなかを振動させているんだ。この丸いところを振るわせているんだよ」

少年は、セミを観察し終えると満足そうに、かごに入れた。まだまだ取る気だった。

「セミは三日くらいしか飼えないんだよ」

じいちゃんはしんみりした顔でそう言った。

「え、どうなるの？」

「すぐに死んでしまうんだ」

「うそ」

そう言われてみれば、ペットショップにもカブトやクワガタは売っているがセミだけはなかったのを思い出した。

「ねえ、セミってどうやって生まれてくるの？」

「こうして樹にとまって、鳴くことで結婚相手を探すんだよ。見つかったら卵を産むんだ。卵から孵った幼虫は地面にもぐって根っこから樹液を吸って大きくなるんだ」

「じゃあ、来年大きくなってセミになるの？」

「いいや、六年ほど土の中で過ごすんだ。だから、お前と同い年のセミもいるかも知れないな」

何だか、少年はセミを捕るのが気の毒に思えてきた。六年も土の中で頑張っていたのに、最後の三日間を自分が邪魔をしてはかわいそうだ。でも、幼虫がどんな格好をしているのかすごく知りたくなった。

「じいちゃん、セミの幼虫ってどうやったら捕まえられるの？」

「捕まえなくても、夕方になれば地面から出てくるさ。捕まえるのかい？」

「理科の自由研究にしたいんだ」

学校の宿題を持ち出すと、じいちゃんは嫌とは言わなかった。少年は夕方まで待ち、かごだけ持ってじいちゃんと山に入った。

地面を見ると所々小さな穴が開いている。じいちゃんはこれがセミの通る穴だと言った。

「おい、これがそうだ」

じいちゃんが指さしたところを見ると、茶色い羽根のないセミのような虫が一生懸命木に登っていくのを見つけることが出来た。

「捕まえないのか？」

少年はセミを捕まえようとしたが、じいちゃんの言葉を思い出し踏みとどまった。地上

に出てくるまで六年もかかるのに、捕まえるのはかわいそうだと思ったのだ。

でも、じいちゃんは遠慮なく、ひょいとつまんでかごに入れた。少年がさっきまで、幼虫を見ることをせがんでいたからだった。少年はセミもかわいそうだが、じいちゃんをがっかりさせるのもかわいそうで、複雑な笑顔を見せた。了

タヌキの置物

タヌキの置物

わたしが、バスツアーに参加することを思い立ったのはゴールデンウィークが過ぎた、五月下旬のことだった。サラリーマンを定年で退職してからは、別に行楽シーズンに合わせて混んだ中を動き回ることなどない。そう考えて、比較的、人混みの少ない時期に小旅行を楽しもうと、妻と申し合わせて決めたのだ。

その日、朝八時に駅前に集合し、ご近所の知っている方も何人かいたもののほとんどは知らない顔ばかりだった。バスの中にもすでに前の集合場所からの客がいたから、こうして、旅行友達として知り合っていくのだろうと素直に感じていた。

――お弁当はどうしましょう？

行く前に、妻は弁当や水筒のお茶、おやつ、つまらないことを心配していた。これまで、近場とはいえそろって出かけたことなどなかったからだ。

――そんなものいらないよ。途中のドライブインやサービスエリアで食べるんだろう？

わたしは普段からできるだけ軽装で出かける主義だった。

バスに乗り込むと比較的空いていた。やはり、ゴールデンウィークを外してスケジュールを組んだのは正解だったと確信した。妻はバスの空いている席めがけて突進していい席を確保した。

「こっち、こっち。窓際にする？」

「いいよ、好きな方に座れよ」

「そう？ じゃあ、お言葉に甘えて通路側にするわ」

なぜか彼女は通路側の席に陣取った。

バスが出発して高速道路に入ると、さっきの疑問はすぐに解けた。トンネルと高速道路の遮音壁のせいで、景色を楽しむ余裕が全くないのだ。見えるのは壁ばかり一時間。通路側に陣取ったのは、お手洗い休憩に行きやすいためだった。

バスガイドさんの説明もろくに聞いてはいなかった。実際、サラリーマン時代には年に一度は社内旅行などであちこち行っていたし、今日の行き先も取り立てて珍しくもない、観光地なのだ。わたしは、大きな欠伸をした。

「おやつ食べる？」

「いや、いいよ」

妻は楽しそうに水筒のお茶を飲みながらおやつを口にしている。——そう、社員旅行ではないのだ、楽しまなければ。そう思うほどに違和感は増していった。

やがて、一回目のサービスエリアで、トイレ休憩があり、わたしは、トイレに駆け込む妻と別れて、休憩コーナーでコーヒーを買って飲んでいた。十五分ばかりの休憩時間をつぶすには暇すぎたが、ここにはテレビもあり道路情報などにも目がいってしまう。

ゴールデンウィークでもないし、こんな平日に渋滞などあり得なかった。

ぶらぶらしていると、妻が戻ってきたので一緒にバスに戻った。この後しばらく走り、高速道路を降りてから、予定の琵琶湖沿いにある食堂に入った。

「変わったものでもあるのか？」

と、わたしが期待せずに聞くと、妻が旅行のパンフレットを持ってきていて、鮎が出ると言った。特に珍しいとは思わなかったが、妻は喜んでいた。姿焼きに、唐揚げとあり、わたしはビールの当てにちょうどいいと思い、つまんでいた。

同行していたグループにはやはり、同じような年代の夫婦が多かった。男同士はあまり話しなどしないものだが、妻はよその奥様方と早速おしゃべりしていた。そのせいか、妻の唐揚げにまで手を伸ばし、ビールの量が増えていった。

昼ご飯をこの食堂でとった後、バスは信楽焼の里公園に向かった。

ここも、サラリーマン時代に何度か来たことがあったし、今は壊れてなくなったが、タヌキの置物も何度か買った記憶があった。

「懐かしいな」

「ねえ、何か一つ買いましょうよ」

「また？ すぐに壊すんだからやめとけよ」

そんなことを言いつつも、陶器店の前を見ていると、背丈ほどもある大きなものから、玄関に飾れそうな手頃なものまで数多くのタヌキの置物が展示してあった。

他の人たちは珍しそうに物色していた。

「タヌキですか？」

と、わたしはその人自身が珍しいもののように見えて、聞いてみた。

「ええ、好きでしてねえ、うちにも二十体くらいはあったかな。なあ」

と、彼の奥さんに声をかけた。

「うちの主人が焼き物好きで、でも、タヌキばかりなんですよ。おほほ」

そんなことを言っていた。何の変哲もないタヌキだった。

そう思いながら、でも、暇なので一つ一つ見ていくと、タヌキたちの表情が微妙に違うのに気がついた。愛嬌のある顔や、それほどでもないもの、無愛想な顔。

「ねえ、この四十センチくらいのやつ、うちも一つ買っていかない？」

と、妻が声をかけてきた。

「どこに置くんだよ」

「庭先に決まってるじゃない。こんなの枕元に置く人なんていないわ」

――当たり前じゃないか。嫌みの通じないやつだ。

すでに、庭先にもタヌキが二、三匹置いてあった。大きさは全然違うが、そんなにたくさん置いて楽しいものでもない。わたしは即座に却下しようとしたが、妻が食い下がった。

「ねえ、いいじゃない。一個だけ、ね」

その一個が問題なのだが、小さいのでいいという妻の言葉に負けて一個だけ選ぶことにした。彼女が選んだのは、あの無愛想な顔のタヌキだった。無愛想な目つきでわたしを眺め、手には大福帳と五合瓶を持っている。

「おい、別のにしろよ」

「いいじゃない。かわいいし」

一旦許可が出ると、聞く耳を持たないようだった。仕方なしにその四十センチのタヌキを買い、彼女は持ち帰ると言い出した。送ってもらえば手ぶらで帰れるのに、わざわざ持って帰るという。他にも見ていると、結構大きなタヌキを持ち帰る人が多かった。わたしは何となく気味が悪かった。

「どうして持ち帰るんだ？」

「だって、送ってもらったりしたら途中で割れたりしてもかわいそうじゃない。それに、バスも空いているし、空いている席にお座りになっていただいたら？」

「タヌキに敬語を使うなよ。気味が悪い」

「まあ」

ツアーの一行はめいめいタヌキの置物を手にバスに戻り、ほどよく空いている席にタヌキを据えて、バスは走り出した。少し異様な風景だった。

夕方の高速道路は少し混み出していた。わたしは、別に用事があるわけでもないのに、一人でいらいらし始めた。

「どうしたのよ？」

「いや、別に。でも、なんだかおかしくないかこのバス？」

「そう？」

そう、皆が皆、タヌキの置物を買うなど、滅多にあることではない。そのタヌキが丁度空いている席に、また、丁度よく収まっているのだ。

最初のサービスエリアに近づく前にわたしは腹痛を覚えた。昼前に脂っこいものを食べすぎたのが原因と思えた。それにビールとの食べ合わせもよくなかったのだろう。わたしは妻に言ってガイドさんに次のトイレのある所で止めてもらえないか、聞いてもらった。

次の休憩地点まで距離があるので、近くの寂しげなパーキングエリアで止めてもらった。

「十分だけ停車します。すぐに戻ってくださいね」

「はい、はい」

わたしは、そういってトイレに走った。パーキングエリアは、大きなサービスエリアと異なり、店も休憩所も自販機も何もない、トイレと駐車スペースだけのドライバーのための休憩場所だ。当然、他に降りる客もなく、自分がはた迷惑な存在だと気づきつつも、自分の用を足すことにしか頭になかった。

寂しげなトイレだった。

わたしは一番奥に入り、建て付けの悪そうな扉を勢いよく閉じて用を足した。ふと、気

づいて周りを見ると落書きだらけで、使用者のマナーの悪さがうかがい知れた。

――嘆かわしい。

さて、水を流してドアを開けようとして、開かないことに気がついた。

元々建て付けが悪いところに、使い方が悪くて金具が曲がり、更に、わたしが勢いよく閉めたことで完璧に封じ込められてしまった感じだった。

――バスガイドは十分だけの停車と言っていた、ことを思い出した。

わたしは非常事態を連絡しようとポケットから携帯電話を取り出そうとしたが、なくしてはいけないからと、財布とともに妻に預けていたのを思い出した。腕時計を見るとまもなく十分が経過しようとしていた。わたしは、金具に手をかけ、がたがたがたと、こじ開けようとしたが、びくともしなかった。

もう、後は、どんどんとドアをたたいて誰かに気づいてもらうしかなかった。

――助けてくださあい。

と、恥ずかしながらも、助けを求めたが、こんな寂しいパーキングエリアのトイレになど来る人もなく、誰も来なかった。時間だけが刻一刻と経過していく。

一時間ほど、格闘したとき、外から声がした。

「誰かいなさるのかね？」

「閉じこめられたんです。助けてください」

彼は、がたがたと金具をこじると、すっとドアが開いた。

「ふう、助かりました。なんとお礼を言っていいやら」

「いや、ここの清掃人なんです。少しこつがいるんですよ」

こつがいるようなトイレだったらしかった。彼の好意で肩を借りて表に出るとバスはす

でにいなかった。わたしは、公衆電話で旅行会社に電話すると、先方は大あわてで代車を手配するといい、しばらくすると、タクシーが迎えに来てくれた。旅行会社も恐縮していたが、わたしはそれ以上に恐縮していた。

「すみませんねえ」

「いえ、このたびは誠に申し訳ありませんでした。乗客を確認せずに発進させるなどあってはならないことなんですが。運転手には厳重注意しておきます」

「いえ、わたしが、イレギュラーな運行をお願いしたのが原因なんです。十分で帰る約束を破ったのもわたしですし。どうか穏便にお願いします」

「そうですか。どうも申し訳ありませんでした」

旅行会社の担当者は何度もわびてくれた。

解散場所に着くと、渋滞に巻き込まれたバスも丁度ついた所みたいだった。バスの運転手にはわびておいたが、妻には文句を言おうと中に入っていった。

「あれ、人数に間違いはなかったんですけどねえ」

そんな運転手と旅行会社担当者の会話が聞こえてきた。

妻の横の席を見ると、わたしの姿をしたタヌキが座っていた。了

ロボット・コンテスト

ロボット・コンテスト

五月の連休明け、ぼけっとしながら資料整理をしていると、遠くからわたしの名を呼ぶ声がした。

「飯田くん、少しいいかな？」

課長の声だった。

「何でしょうか」

わたしは取るものもとりあえず、押っ取り刀で駆けつけるふりをした。課長の命令は最優先だ。

「今度ね。地元の三木山大学の学生さんがロボット・コンテストに参加することになって、当社の開発課に技術協力を求められたんだ」

「あの、……それは仕事なのですか？」

学生のお遊びでも、上司の命令なら従うまでだ。

「うーん、何と言っていいかな。彼らは単なるサークル活動なんだけど、面倒を見ている長谷教授にはこちらも色々と世話になっているから、いい加減なことは出来ない。時間外につきあってもらいたいんだ」

課長は、時間外という微妙な時間帯を指定してきた。開発課ではフレックスタイム制なので定時勤務という観念はないから、時間外と言うことはこちらの仕事に差し支えない程度に向こうの手伝いもきっちりやれということと思われた。わたしは、はあ、と曖昧に返事し大学からもらっている計画書めいた書類を受け取った。

計画書は全くなっていなかった。

最初から、研究目的も目標も記載されていなかったし、予算も人員も不明で、何が何だかわからなかった。これでは、手の貸しようもないのでわたしは課長の許可を取り、一度、この学生たちの顔を見に大学に行くことにした。

学生サークルの参加者は三名で、文化系部室の入っている長屋の一角に、その作業場があり、何か機械みたいなものを作りかけと言うことはわかった。彼らの一人に話を聞いてみると長谷教授は、ロボット・コンテストに参加するに当たって名前を貸してもらっただけで、この無謀な試みに積極的に参加しているわけではないということがわかった。

「でもねえ、……当社もロボットの専門メーカーではないんだけどな。知ってた？」

わたしは、後輩だと思って気さくに尋ねた。

「はい、ロボットとは言っても、この競技に参加する専門のものなのです。ルール通りに僕たちが機械を組み立てるので、飯田さんには専門家の目からアドバイスしていただきたいのです」

「アドバイス？ 例えば？」

「そうですねえ、例えば、この腕のアルミ材が細くて折れそうだとか、モーターが小さくて動かないぞ、とか」

「よくわかってるじゃない。それだけわかれば、僕のアドバイスなんていらないよ」

「あ、いえ、これはもう何度も失敗してわかったことなのです。これ以上失敗し続けると予算もなくなるし時間も足りなくなるのです」

聞くと、予算は彼らがアルバイトして出し合っているらしかった。そういうことなら、少しでも材料費を削り、安く仕上げなくてはかわいそうだ。わたしはまず、計画書と設計

図を作ることを進めた。

しかし、学生たちにはとにかくアルミ材を削って成形し、継ぎ手を合わせて全体を、小猿のような形のロボットにしてしまうことを最優先させ、今更、書類をそろえることの重要性を何ら意識しなかった。

「君たち、書類って馬鹿にするけど。重要なんだよ。どうしてこの部品がいるのか、この部品の強度はどれくらいいるかなんて、最初に書き上げておく計画書に従わなければならないんだ。さもないと、工業製品ではなく工芸品だね」

「はい、それは、そうです」

学生はあくまで食い下がる。大失敗を経験していない若さのなせる技だ。あまり指摘するのも実際にはかわいそうだった。彼らは自分のアルバイトで稼いだ中から供出しているのだ。ロボットの腕が折れたり、モーターが小さすぎて動かなかったりしても、それを捨てて新しいのを買うのは全部自腹なのだ。

わたしは、基本計画書は書いてやることにして、設計図面も面倒を見なければならないなと思い始めていた。

「君たち、ロボット・コンテストの内容とルールを教えてもらえるかい？」

「はい、今年のコンテストはバスケットボールがテーマになっていまして、小型のヒト型ロボットにボールを持たせて地上から３メートルあるかごにボールを入れるんです。本物のバスケットと同じく、投げ入れるのもよし、飛び上がって入れるのもよしです」

「だったら、ヒト型ロボットでなくてもいいじゃない。大砲みたくボールを飛ばして入れればいいんだろう？」

「いえ、バスケットに入ったボールが地面に落ちた後、自分で取りに行って拾わなければなりません。相手チームの妨害もあります。やはり、小猿みたいな格好が一番です」

「なるほどね」

わたしは、一度、バスケットボールの重さと大きさを計測し、コート、バスケットの位置を図面にまとめ計画書をまとめ上げた。これによって、モーター出力などの計算を行って、搭載するモーターや制御装置、そしてモーターが載る本体の骨組みの強度が計算で求められる。これから作成するのが設計図だ。

工作に掛かるのはこの図面をさらに、工作用に引き直したものをつかう。

これらをもとに彼らの尻をたたくと、次の作業の取りかかりは早かった。アルミの鉄骨を削るか切るかで揉めることがなくなっただけでも大きい。

こうして、試作機ができあがった。

「飯田さん、ありがとうございました。何と言ってお礼を言っていいやら」

彼らは怪しげな日本語で挨拶した。

「まだまだ、これからだろう。最下位になると長谷教授に顔向けできないよ」

「そうなんです。大会のセコンドについてもらえないでしょうか？」

「ええ？ 僕がかい？」

「ほとんど設計者と言ってもいいくらいですよ。大きな顔をして座っていてください」

わたしは実のところ不安だった。計画書まで起こして作ったのではあるが、各部品の信用性の検証などしていないし、本当にバスケットボールを何回も投げて壊れないとは思えなかったのだ。いや、別に壊れることを希望していたわけでもない。

ロボット・コンテストは町の中心にあった、市民ホールで開催された。

たかが機械系学生の趣味の集まりと高を括っていたら、大勢の高等専門学校の学生や、趣味のサークルが大挙して集まり、昨今のロボット・ブームを実感させられた。ギャラリーの中には、応援の大学生の他に、ファンの小・中学生が数多く混じっていた。

わたしとしては予想外の出来事だが、ロボットが一昔前と異なり、皆、愛らしい形状をしていることと、動きが敏捷で、コミカルな動きが人気を博していたことが原因のように思われた。

いよいよ、対戦が始まった。

うちの「小猿」も愛想を振りまきながら、バスケットコートに出ると、中学生の女の子たちから黄色い声の声援が飛んできた。結構な人気だった。相手チームは同じ様な他大学から出ているサークルチームのようで、同じ基本設計ながらモーター動力が弱いらしく、うちより動作が緩慢だった。

わたしは、それをついて、フリースローで点数を稼ぐ作戦を立てた。ブロックに出られない相手のいないところから、ボールを投げバスケットに入れる。失敗率は高かったが、これで大差をつけ一回戦は楽勝だった。

試合が終わった後、会場最前列で、まじめそうな中学生らしき少女が熱心に「小猿」のことを見ていた。彼女の目には愛がこもっていて、「小猿」のファンらしいと思われた。

きっと機械が好きなんだなと、そのときは思っていた。

二日目の第二回戦は、高等専門学校の製作した少し高度なロボットだった。こちらは学生といえど、向こうの方がきちんと設計・製作されている。部品の加工精度もよさそうだった。

いざ、勝負が始まると、相手チームの動きがよく、「小猿」はフリースローの状態には持って行けなかった。たぶん、総重量で向こうが軽いのだと思った。

わたしは操作している学生に、「小猿」にボールをドリブルさせて接近戦に持ち込むよう指示した。接触したら反則になるが、逆に相手も接触しないよう操作に細心の注意を払わなければならない。

いつの間にかわたし一人が熱くなっていた。

あの少女の瞳が気になっていたのかも知れない。

しかし、総重量で劣り、部品の加工精度でも負けていた「小猿」は相手の敏捷さに追いつかず、じりじりと点数を入れられ、気がついたときにはひっくり返せないほどの差になっていた。

「飯田さん。大丈夫なんですか？」

たかが、学生とのおつきあいと思っていたわたしだったが、段々と熱くなり卑怯な手を使っても勝ちたいと思ったが。さすがに子供たちが見ているコートの真ん中でそんなことをするわけにも行かずフェアプレイに徹するしかなかった。

そんなわけで二回戦では惜しくも蹴散らされてしまったが、とぼとぼと帰ってくる「小猿」の姿に拍手が惜しみなく沸き上がった。わたしは自分たちに対する奮戦へのねぎらいと拍手と受け取っていた。

大会が終わって、学生たちと工具やロボットを会社のバンに積み込んでいたら、子供たちがカメラ付き携帯電話を片手にやってきた。

「一緒に撮らせてください」

「いいよ」

会社の宣伝にもなるし、わたしは快く承諾した。子供たちはうれしそうに写真を撮り、また、あるいは、「小猿」の構造を学生に熱心に尋ねたりしていた。

わたしが、ふと、気づくと、子供たちの後ろから、あの熱心だった中学生の少女がその光景を眺めていた。

――サインでももらいに来たのかな？

そう思ったわたしの方から声を掛けた。

「君、ロボットに興味があるのかい？」

「え、おじさん、誰ですか？」

少女は、信じられないという表情でわたしの顔をまじまじと見つめた。

わたしはこのとき気づいたのだった。一生懸命応援していた子供たちは、コートでプレイしていたロボットの応援団であり、彼女も、純粋に「小猿」のファンであった。ロボットのセコンドとして奮戦していたわたしのことなど全く眼中になかった様だった。了

過去の遺物

過去の遺物

日曜日に、敏夫がリビングで新聞を読んでいると、妻の容子が買い物から帰ってきた。

大きな買い物袋に、今日のおかずとは関係のない、インスタントラーメン、缶詰、ミネラルウォーターを買い込んでいた。しかも、敏夫が気付いている限りでは、ここ数週間も同じ様なことをしていた。前から不思議に思っていたが、口には出さなかった。聞こうと思っていると今日はたまたま容子の方から声を掛けた。

――ちょっと、これ物置に運んでよ。

敏夫は丁度いい機会と思って聞いてみた。

「おい、こんなもの買い込んで、子供たちがどこかにキャンプでも行くのか？」

「そんなのじゃないわよ、最近物騒じゃない。それで買い置きしているの」

敏夫にはその意味するところが解らなかった。物騒であることと、インスタントラーメンや缶詰を買うことが頭の中で結びつかなかった。不審そうな顔をしながらも、不承不承手伝って、その買い置き品を物置に運んだ。扉を開けると物置の中にはすでに相当量の食料やトイレットペーパー、飲料水があった。

「何だよこれ、オイルショックでも起こるのかい？」

敏夫は皮肉気に質問した。

「そうじゃなくて、これよ、これ」

容子がパンフレットを見せた。

「何だよ、意味がわからない」

容子の説明によると、核シェルターの広告だった。原子爆弾などの核兵器による攻撃を受けたときに生き残るための、防空壕の一種だった。本体は厚さ一メートルの鉄筋コンクリートで、扉は三十センチの鋼鉄製、空気フィルターと換気装置がついていた。これを地下に埋め込むか工事で設置する。ちょっとした地下室だった。最近物騒と言ったのは、核実験やミサイルのことを心配している様だった。

「新手の冗談か？ キューバ危機のときにアメリカでも流行ったらしいけど、日本でこんなもの要るわけないじゃないか」

「こっちは真面目に言っているのよ、お隣の国で核実験を行うようになったら安全とは言えないじゃない。わたしたちには子供達を守る義務があるわ。そう思わない？」

敏夫の立場上、思わないとは言えなかったが、そんなものに出費するほどお人好しではない。すかさず、広告の隅っこの但し書きを指摘した。

「このシェルターが耐えるのは、半径一キロ以上離れた場所に広島級の十倍の原子爆弾が落ちた場合までだ。よく考えろ、決まった位置にミサイル基地のある欧米なら考えられるが、日本が攻撃を受けるとしたら無差別攻撃しかないぞ。もし運悪く直撃だったら意味がないじゃないか、そうだろ？」

「でも、ないよりはましじゃない。そうでしょ？」

「ふむ」

確かに保険のようなもの、と、考えれば必要と言えるが、自分が原子爆弾の爆発に巻き込まれる確率なんて、交通事故に比べればはるかに低い、そんなことのために二千万円以上もする設備を買う気なんてさらさらなかった。

「容子、お前少し疲れているんだよ、お前にだけ家事を押しつけて済まなかった」

「何よそれ、わたしがおかしいとでも言うつもりなの」

「そういう訳じゃないけど……でも、巻き込まれる確率なんてないよ。それに、仮にだよ、仮に作るとして費用はどうするんだ。家のローンも残っているし、出せないぞ」

「じゃあ、実家のお父さんに出してもらうわよ」

敏夫はまたかと言う顔をした。容子の実家は確かに羽振りはいいが、そんなことをされると敏夫の立場がない。

「わかったよ。わかったから」

「じゃあ、作っていいのね」

敏夫は渋々……内心は反対だが……承知した。しかし、容子にこれ以上介入させないために、そのパンフレットの会社には自分で電話した。一番安いので見積を頼む、と言ったところ、先方の会社は庭の地盤を確認したいと返事してきた。色々、説明を聞いた後、次の日曜に測量も含めて調査することになった。

容子は敏夫の横で電話を聞いていたがそれで、一応満足したようだった。

日曜日の午前九時、早速、日本核シェルター研究所という会社の技師が測量のためにやって来た。軽ワゴン車に一杯の機材を積んでいた。家の前に会社の名前入りの自動車をとめられたことにいささか恥ずかしさもあったが、その技師に挨拶した。彼は村上と名乗り、社長と技師を兼ねていることがわかった。

「いやいや、今のご時世、自分だけは関係ないと言う方が多い中、こうして有事に備えて準備されるというのは中々出来ることではありません。すばらしい、本当にすばらしい」

彼はそう何度も繰り返した。

「でも、核シェルターなんて買う人はいるんですか？」

「そりゃあ、そうですよ。ミサイル防衛に不安がある以上、現代の必需品ですよ。購入された方には好評を頂いております」

そう宣伝されて、一層不安感が増してきた。容子は隣で満足気にうなずいていた。

庭先に設置した簡易式の台の上で彼は地下シェルターの図面を広げて構造を説明した。核シェルターの鉄筋コンクリートは、原子爆弾の直接の衝撃波と熱、そして放射線を遮る作用があると力説した。

「でも、この付近が爆撃された場合、空気は放射能に汚染されていますよね」

「はい、そのための空気フィルターです。〇・〇〇一ミリの微粒子をも捕捉します」

「それ以下の大きさの粒子はどうなるんですか？」

「それは素通りです。ですが、爆発による生成物ですので、それほど小さいものはないと考えていいでしょう」

聞けば聞くほど、敏夫は不信感を募らせていった。

技師が測量を開始した。敷地の端から順番に寸法を採っていった。村上氏は少し工事が難しくなるようなことを言った。

「少し庭が狭くなっていますので建物の下まで掘り込む必要があるかも知れませんね。それに、超音波検査ではこの下に大きな岩が観測されるので、これを撤去するか別の場所にするかも検討しないと行けません」

この家の配置で文句あるというのなら、建物を壊して、少し小さくするしかなかった。

「でも、ついでだから掘ってみましょうか？」

「お願いします」

実際はとても、ついで、と言うレベルの調査ではなかったが、もうシェルターを建設する気でいたので、気軽に依頼してしまった。

午後からショベルカーが来て庭の一画を掘り始めた。大切にしていた、松の木や、植えていた花が掘り返されて土と一緒に山になった。二メートル近く掘り下げた頃、岩に当たった。それに超音波検査を掛けたところ、この岩が深さ五メートルのコンクリートのかたまりであることがわかった。

「お宅では戦時中、防空壕を作っていたのですか」

村上は、いつものことですよ、と言う口調で聞いた。

「いいえ、聞いたこともありません」

「ほら、超音波映像だと、地下七メートルまで大きなコンクリートの構造物があるのです」

「それって一体、何ですか？」

「経験上、ほとんどの例では戦時中の防空壕跡が多いですが、もう少し調べてみましょう」

もうここまで来ては後には引けない。わたしはそのまま掘削試験を続行させた。コンクリートの回りの土を掘り続けて夜中まで掛かってほぼ全容を現した。

敏夫と村上は、梯子で下に降りてこのコンクリートのかたまりを調べた。容子は穴の上で心配そうに見ていた。村上はその形を見比べた。

「当社のシェルターと似てますね」

彼の会社の製品などどうでもよかった。わたしが気になったのは、これが何故ここにあるのか、そして、何年前から我が家の庭先に住み込んでいるのかだった。どこかに手掛かりがないか探すために水道からホースを引っ張り土砂を洗い流し、コンクリートのかたまりは徐々に製品だった頃の姿になっていった。

わたしは、扉を発見した。厚さ三十センチの頑丈な鋼鉄製だった。だが、錆びてびくともしなかった。そして、扉の近くにある製品銘板を見つけた。

――一九七四年七月十日竣工。日本核シェルター研究所製造。

そう書いてあった。

「どういうことですか？」

「わたしにもわかりません……あなたもお父上から何か聞いていなかったんですか」

わたしはしばらく迷った後で、村上に扉を破ることを提案した。中に何かあるかも知れないと思ったのだ。

村上がガスバーナーで扉を焼き切った。恐る恐る入ってみると、中には古くなった食料と、乾燥して空になったポリタンクがあった。おそらく水を貯蔵していたに違いない。そこに書きかけの日誌があった。敏夫の父親がこれを作ったときにしばらくは、ここを管理していたらしかった。

「一日目、一九七四年六月七日午後三時（日本時間）に中国は新彊ウィグル自治区のロプノールで大気圏核実験を実施した。このとき、日本には影響はないと政府は発表したが、信用せず、このシェルターを購入、実際に居住できるかを一晩試験した。住み心地は悪いが耐えられないほどでもない」

こんな日誌が一週間ほど続き、そこで、飽きてしまったと見えて途絶えていた。敏夫がまだ小さい頃だったので父親がこんなことをしていたとは知らなかった。中には暇つぶしに読んだと思われる雑誌が何冊かあった。やはり、当時の世相を反映してか放射能汚染やその恐怖をあおり立てていた。ひどいものでは偏西風の影響で雨の日に濡れると、それに含まれる放射性物質で頭がはげてしまうとさえ書かれていたのだ。しかし、人の噂も七十五日で、忘れ去る人と、こうして自宅に核シェルターを作る人に分かれていたようだ。

それに、父親もそれ以降、ここのことを口にすることもなく記憶の彼方へ飛んでしまったかのように、ここの日誌以外の全ての資料を残すことなく先年亡くなってしまっていた。日誌をパラパラとめくり、父もおそらくこんな場所に一週間もいられなかったのだろうと想像した。

敏夫は村上に向かって言った。

「これ、お宅の製品ではないですか」

「その様ですね」

「まだ、使えますよね？」

「ええ、核兵器が存在する限り使えますよ」

わたしの質問の意味を取り違えて、村上はそう言ってにっこり笑った。了

海釣りパーク

海釣りパーク

いつも電車で通る海沿いの町に、海釣りパークが出来たらしく、週末になると釣り竿を持って電車から降りる人を見かけた。わたしも釣りに興味があったのでいつかは行ってみたいと思いながら中々行く機会がなかったのだが、この週末、仕事が半日で終わる日があり、せっかくの機会だと途中下車して、少し寄り道することにした。

目的の海釣りパークは駅から歩いて十分の場所にあった。

入り口で入場券を買い、道具のない人でも中の釣具店で道具を借りたり、餌も買うことが出来る。餌の在庫も豊富だった。これなら週末でなくても、仕事帰りにちょっと寄ってみてもよかったと思うくらいだった。

釣り場は海の中に桟橋を延ばして四角く区切ったような格好になっていて、丁度、池にある釣り堀の海版と言った感じだ。わたしは、どの餌にしようかなと吟味を始めた。

透明のケースの中を覗くと、おが屑と一緒にゴカイやイソメ、イワムシなどが並んでいた。

同じ様だが、狙う魚、さらには釣り糸を投げるか垂れるかによって、餌の種類が替わるのだ。

わたしが、一般的なゴカイにしようと、ケースを見ると、同じゴカイでも何種類もあり値段も一桁違っていた。

「あの、同じゴカイなのに、どうしてこんなに値段が違うんですか？」

「産地が違うんですよ。やっぱり国産は高くなってますよ。でも、釣りを楽しむなら、やっぱりねえ」

店主のおじさんはそうつぶやいた。わたしは、彼のやっぱりという意味がわからなかった。

食べる魚に国産と輸入品で違いがあることは知っていたが、釣り餌にまでそんな差があるとは、この十数年釣りなどしなかったわたしには新鮮な驚きだった。

確かに餌は高い方がいいに決まっている、しかし、今日は釣りを楽しみに来たのであって夕食のおかずを釣りに来たわけではないと思った。

そう考え、一番安い輸入品のゴカイを買った。

「これ三十グラム下さい」

と、店主に告げて秤に掛けてもらって代金を払った。

そして、竿と道具を一通り選んで借りて、いよいよ釣り糸を垂れに桟橋へと向かった。

十数年海の側まで近寄ったことがなかったが、魚のいそうな場所は感覚で覚えていた。海水の流れと流れがぶつかって少しよどんでいたり、岩の影になり日光が届きにくいところで、第六感と言うのだろうか、魚の気配を感じる場所がある。それが、通称ポイントだ。わたしは釣り人が少し混み合って釣り糸を垂れている場所に惹かれてしまった。やはり、誰しも感じるところは同じらしい。

隣の人に挨拶をして場所を取り、釣り竿に糸を通して針をつけ、餌をつけた。いよいよ、魚との戦いが始まる。わたしは、ポイントを目測で見極め、ぽいとおもりを投げ入れて糸を垂れた。

しばらく、釣り糸を垂れていると段々に気分が爽快になってきた。十数年ぶりの海である。海釣りパークは周りを桟橋で覆われているとはいえ、その向こうは大海だという感覚が自然と気分をおおらかなものにさせた。

そのせいか、右隣の釣り人も左隣もその横の人も、みな悠然とした顔つきで竿とリールを操っていた。

すっかり、この気分に浸りきった頃、突然右隣の釣り人が、あっ、と小さく叫んで、リール捌きを細かく取り始めた。巻き上げたり、少しゆるめたりを細かく繰り返す。そして、段々と糸を巻き上げていくのだ。

竿の先は、わたしから見ても大物が掛かっているとわかるくらいに大きく引き込まれ、釣り人はその魚の反撃を両手で押さえ込もうと全力で竿を立てたり戻したりしながら、糸をたぐり寄せた。

わたしは、糸が切れないか心配でハラハラしていた。たぐり寄せる二十メートルかそこらの釣り糸がとんでもなく長いものに感じられ、彼の身になって応援してしまうくらいだった。

魚身が浮上し水面を上下に叩き、派手な水しぶきを上げ出すと、彼は竿を下に降ろして今度は玉網を片手で持って水面すれすれに魚身をすくい上げた。三十センチほどの真っ赤な鯛だった。これほどの赤さは見たことない気がするほどだった。

突然、その横や周りの人たちが拍手を送り、彼は恥ずかしそうに微笑みながら、みんなに鯛を掲げて見せてから、クーラーボックスにしまった。

この喧噪の後、わたしは我に返って負けじと釣り糸を垂れた。こちらは一向に反応がない。

十分ほどすると、今度は左隣の人の釣り糸にスズキが掛かった。彼も大格闘の末、獲物を自分のクーラーボックスに収めた。

周りの釣り人の大釣果にも関わらず、わたしの釣り糸は、ぴくりともしなかった。

「えさをこまめに付け替えた方がいいですよ。ここの魚たちは口が肥えているから」

横の釣り人がそう言って笑った。わたしは内心かちんと来たが、何でもない風を装った。外洋の魚ならちょっとした餌にも手を出すが、この、周りを覆われた海釣りパークではみんなが競い合うように高級な餌をばらまくために、魚も安い餌を口にしなくなっている様に思えてきた。

新鮮な餌なら問題はないはずだと、わたしは思い、リールを巻き上げて針を手に取り、餌を付け替えた。

「ここはね、成魚を放流していて沖合に網を張っているんだ。まあ、大きな生け簀とも言えるかな。そのうち、釣れますよ、はは」

と、右隣の男はそう言ってほほえんだ。

「そうですか、どうも」

と言いわたしは再度、新しい餌のついた針をおもりとともに投げ込んだ。ちゃぽん、と小さな飛沫を上げて底の方に沈んでいった。

周りから歓声が上がるのとは裏腹に、三分待っても、五分待ってもあたりが来ない。わたしは段々といらだちを募らせ、針を引き上げると、今度は餌だけなくなっていた。まるで、魚にも馬鹿にされている様な気がしてきた。

わたしは、隣の人に気づかれないように、向こうを向いてから、むっとした表情をした。無意味だったが、少しだけ気が晴れるというものだ。

餌を付け替えていると、右の更に隣の人にシマアジが掛かった。見事としか言いようのない大物だった。周りの釣り人も皆一斉に賞賛の声を浴びせていた。彼も、いやぁといいながら頭を後ろ手でかいた。

わたしは気を取り直して、餌をつけ直し、また、水の中に投げ入れた。

本当にこの下に魚などいるのだろうか、という疑問がいつも湧いてくる。それでも、掛かった瞬間の快感が忘れられないから、釣りはやめられない。しかし、この日ばかりは本当にわたしの下だけ魚がいないような気がした。

周りの人には、見事なまでの大物が次々掛かるのに、わたしの所には何も掛からない。

釣具店の店主の言葉が気になってきた。ゴカイにも国産品と輸入品とがあり、輸入品も産地により値段が違うのだ。まさか、海の魚に味の違いなどわかるとは思えなかった。が、段々と隣の人たちの餌の種類が気になってきた。わたしは聞きたくてしょうがなくなっていた。でも、大漁に沸き立っている釣り人に餌の産地など質問するには余りに馬鹿げている様な気がして聞けなかった。

わたしが、聞こうかどうしようか、もじもじしていると、隣の男の方から声を掛けてきた。

「あなた、餌は何を使っているんですか？」

「いやあ、一番安いのを選んだんですが」

「では、会社帰りに寄った口ですかね？」

「ええ」

聞くと、彼も海釣りパークに来た最初のうちは一番安い餌を使っていたという。

「でも、周りの人が大物を次々と釣り上げるのをみて、つい」

彼も目の前の釣果という誘惑に負け、高級餌を使い始めたと言う。

確かに、大物を釣れば餌代など問題にならない範囲の出費だった。いや、大物の単価を気にするのでは釣り人とは言えまい。しかし、釣り上げたときの喜びを一番知っているのも釣り人なのだ。

「そんなに食い付きが違うんですか？」

「そりゃあ」

彼が嬉しそうに言った途端、彼の竿の先に、当たりがきて、竿が左右に振られた。見るからに大物のようだった。

わたしは居ても立ってもいられず、釣具屋の餌売り場に行き、一番生きのいい国産餌を買った。

「やっぱりその気になりましたか？」

店主はにやりと笑って聞いた。

「ええ、国産も輸入品も関係ありません。当たりがないと話しになりませんから」

わたしは釣り場に取って返し、早速新しい餌をつけ、少し勢いよくおもりを前方に投げ込んだ。

そこが、丁度ポイントだったのかもしれない。わたしの投げ込んだ餌に、早速当たりが来て、手首に小気味よい反動が伝わってきた。

わたしはリールを巻いたりゆるめたりしながら、眼下の大物と格闘した。釣りの醍醐味はこれである。浮かんだ瞬間、大きなシマアジだと言うことがわかった。浮かんでしまえば力は掛からない。わたしは玉網を出してシマアジを傷つけないよう丁寧にすくった。

「お見事ですねえ」

隣の男も誉めてくれた。これも、釣りの醍醐味だ。

「いいえ、餌がいいからでしょう」

わたしは謙虚だった。

一日の釣果は、シマアジが三尾と鯛が一尾で隣の男には遠くかなわなかったが、釣りを堪能することが出来た。こんなことなら最初から高いえさを買っておけばよかったと思っ

たのだ。

「でも、こんなに釣ったら魚がいなくなるんではないですか？」

わたしは本気でもない冗談を口にした。

「どうでしょうねえ、ここは、定期的に成魚を放流しているから」

「その成魚はどこから持ってくるんです？」

「さあ、輸入品じゃないかなあ」

隣の男はそう言って、自分のクーラーボックスの中身を愛おしそうに眺めてから、蓋をした。彼は純粋に今晩のおかずを調達しに来ているだけの様だった。了

三セク鉄道

三セク鉄道

「これって、電車なんですか？」

「そうだよ」

と、老婆は答えた。目の前にあるのはレールの上を走る一両だけの列車だった。しかし、乗車口にはバスのような料金箱があるし、乗員は運転手一人だけだった。わたしはこの風変わりな乗り物がおもちゃか冗談の様に見え、乗り込むのをためらった。

「あんた、どこまで行きなさる？」

老婆は買い物袋を下げた手押し車をのせようと、もがいていた。わたしは手を貸し、手押し車をどっこいしょと持ち上げ車内に乗せてやった。ぐるりと車内を見渡すと、誰も乗っていなかった。もし、これは試運転で車庫に帰る途中なのだと言われたらそう信じてしまうだろう。

「ありがとう。助かったわい」

老婆は車内に乗り込み、わたしの方を向いて礼を言った。

「あの、これは本町駅まで行きますか？」

わたしは一抹の不安を覚えて運転手に聞いた。彼は行きますよと当然のように返事した。わたしはおずおずと空いている席に座った。

やがて、発車時間になったらしく運転手が車内を点検し、ドアを閉め、出発進行と言ってブレーキレバーを解除した。電車と違いモーターではなくディーゼルエンジンの音が床の下から響いてきた。時々黒煙が窓の外に俟っていた。

がたたん、がたたん、と、列車は十分ばかり走り続け終点の本町駅に着いた。

たったこれだけの区間のおもちゃの鉄道みたいだった。老婆を見ると、うなずいていた。また、荷物を下ろすのを手伝って欲しいようだった。わたしは先に料金を箱の中に入れ、老婆の荷物を持ってタラップの下に降りた。

「すまんな。ところでお前さんはどこに行きなさる？」

「ええ、仕事でしばらくこの町に泊まることになったんです」

わたしは、書店本部から渡された住所を書いたメモを老婆に見せた。

「すまんな、老眼で見えんのじゃ。読んでくれ」

「三林市本町の、……」

「おや、わしの民宿じゃ。あなたお客さんだったか？」

どうやら、会社が手配してくれていた民宿の女主人の様だった。偶然と言えば偶然なのだが、他に人は見あたらず、出会うのは高い確率の偶然に思えた。おばあさんはそのままひょこひょこと手押し車を押して、わたしの前を歩き始めた。

民宿は駅のあるロータリーから少し小高い丘の上の農家のような家だった。木造のしっかりした母屋に隣接している離れがわたしのしばらくの間の宿になる、と彼女は歩きながら話した。

部屋に上がるとわたしは荷物をトラベルバッグから取り出した。書店に行くときのスーツと、仕事用のパソコン、そして新しくなった在庫管理マニュアルだ。こんな田舎にある割にここの書店はチェーン店の中でも大規模な部類に入っていた。駅前にある書店が流行っていたのは昭和の時代までで、それ以降は自動車で訪れる郊外型の店舗が主流になっていた。もっとも、それすら、インターネット販売という形に押されつつはあるが、やはり、大きな書棚に囲まれていたいという人々の古典的欲求というか、読書欲に支持され、こうした書店は生き残っている。

わたしが今回、仕事をする店は蔵書数が十万冊規模の大型書店であった。だから、お客さんもあの電車に乗る通勤客ではなく、裏手にある駐車場一杯の自家用車の人たちである。

おばあさんがお茶を出してくれ、庭で採れたミカンを持ってきた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

お茶は熱くて飲めなかった。少し冷まそうとミカンをむきながら、この土地の話しでも聞いておこうと思った。

「さっきの電車は昔からあるんですか？」

「あるよ。でも、昔は国鉄だったな。コウリツカとやらで、シンキ鉄道に名前が変わったんだよ」

「へぇ、じゃあ列車は昔のまんまですか？」

「さあ、子供の頃は蒸気機関車だったが、いつあれになったのかな」

おばあさんは記憶をたどり始めた。

わたしが歩いて書店に行くと店長が出迎えてくれた。すでに本部から連絡を受けて作業の準備も整っているということだった。もともと、バーコードで本を管理するＰＯＳシステムが導入済みの店舗だったから、作業はもっぱらコンピュータプログラムの修正だけである。わたしは事務所の机を一つ借りうけ、ノートパソコンを在庫管理用のコンピュータに接続して作業を開始した。

売り上げデータを少し見ただけでも、この店舗がチェーン店全体の中でも大きな存在であることはすぐにわかった。どの時間帯を取ってみても都市部にあるどの店舗より大きな売り上げがあるのだ。一人当たりの売り上げも総じて大きく、やはり、自動車時代を実感させるデータが出てきた。電車なら一人で何冊も買うことはしないだろうからだ。

その日、仕事を終えて、民宿に帰るとおばあさんが食事の用意をしているところに、近

所の奥さんらしい人が来ていた。わたしは軽く会釈をして離れに戻ろうとしたが、彼女はわたしにまで話しかけてきた。よほど話し好きなのか、暇な人なのかと思った。

「あなたも聞いて下さい。三林市の財政問題を住民が問題にすべく、署名を集めているんです」

「ああ、そうなんですか。ご苦労様です」

どうやら、住民運動家の様だ。

「すみません。わたしは民宿に泊まっているだけで、住民ではないのですよ」

「あら、失礼しました。じゃあ、おばあちゃん」

彼女はおばあさんの方に再び向き直った。手に持っていた回覧板らしきものは、署名名簿らしかった。

「三林市は現在十五億円もの赤字を垂れ流しているんです。どうにかしないと破産してしまいますよ。ねえ」

「だからって、福祉切り捨てはごめんだよ」とおばあさんは現金な意見を述べた。

「市の行政の無駄遣いを切り詰める方法で、十分吸収できるんですよ。例えば、赤字事業の筆頭である第三セクター鉄道。あれは、お金のかかる趣味以外の何者でもありませんよ」

その奥さんはそんなことを言っていた。彼女は自動車でここに来ていたし、確かに、乗らない人にとってあののどかな鉄道は趣味以外の何者でもないだろう。

おばあさんは面倒くさそうに相手をしていたが、そのうち、鍋の噴きこぼれる音がして渋々署名し急いで台所に戻っていった。わたしは奥さんの行動に何か強引さを感じていたのだが、住民でもないのに口を出すべきことでもないしそのまま彼女が名簿をバッグにしまい、再び車に乗って帰って行くのを見送っていた。

「あんた、ご飯の用意が出来ましたよ」

おばあさんの声がして、わたしは離れに戻った。

白いほかほかのご飯と、おばあさんが町で仕入れてきたアブラメの煮付けが美味しく、ビールを注文することなく食事が進んだ。

次の日、歩いて丘の上から駅前の書店に通勤していると、あの奥さんの仲間らしき人が同じように近所の人と話し込んでいた。

話題は同じく、市の財政悪化とその対策である第三セクター鉄道の廃止であった。

よくよく、話しを聞いてみると、この市では従来、七十歳以上の高齢者に敬老パスとして市営バスや第三セクター鉄道の無料乗車券がもらえる制度があったらしい。それが、二年前に財政悪化の理由で交付される年齢条件が引き上げられ、民宿のおばあさんのようなよほどの高齢者にしか当たらなくなってしまったことが不満を引き起こしている理由らしかった。

理屈ではどうとでも言えるのだが、もはや、感情論のように思えてきた。第三セクター鉄道は自動車を持たない人にとっては唯一の交通の足であり、持っている人にとっては財政悪化の諸悪の根源とも映っている。

町の人たちのいざこざとは別にコンピュータの補修作業はうまく進んでいた。じきに実際の営業用コンピュータと接続させられ、販売データの管理に役立てられた。

町の財政とは関係なく、書店には他の町からの買い物客が途絶えることがなかったし、わたしの構築したコンピュータプログラムも大忙しで稼働を続けた。三日ほど動作を観察し、予定通り一週間でおばあさんの民宿を引き払い、わたしは次の書店へと移動した。

六ヶ月後、再点検するために一日だけ三林市本町に来ることになった。本部のスタッフは何故か、駅からのタクシーチケットをくれた。以前では考えられなかったことである。

駅前に来てみると、大勢の人が集まっていて、列車はきれいに飾り立てられていた。その中におばあさんの姿があった。

「お久しぶりです。お祭りですか？」

「いいや、この鉄道がこの三月で廃止されることになったんじゃ。最後だからと思ってな」

「ええ？ まさか、市の財政難で廃止になったんですか」

わたしは、鉄道が廃止になるなど身近に起こる出来事とは思えず、言葉が出ないほど驚いた。そして、書店本部が今回、タクシーチケットをくれた理由を理解した。今日で廃止になると時刻表を見て知っていたのだ。

「こんな小さな電車くらい残してやってもいいのにな」

老婆は寂しそうに笑った。

「でも、あのとき、署名していたじゃないですか」

わたしは皮肉を言った。

「そんな、年寄りが名前を書いたくらいで鉄道がなくなると思うもんかね」

おばあさんはとことん否定した。了

水源

水源

急に出張を命じられたのは、昨日の午前中のことだった。

わたしが勤めている上水道局にO町の水量が低下していると、連絡があったのが発端だった。課長からすぐに原因を突き止める様に言われて、即刻、上水道の入った地図を引っ張り出しO町から浄水場までの水路を目で遡っていった。

調べてみるとO町では、他の町とは異なり、河川から引っ張っている市の水道網につながっておらず、独自に掘った井戸から引いていた。

昭和三十年代に、住宅地が急速に広がったため、上水道網の建設が間に合わず、何本も地域ごとに井戸が掘られていた時期があり、ほとんどはその後の地盤沈下問題や、あるいは水源が枯れたりして井戸から河川水への切り替えが行われていった。O町の井戸はその中の一つで時代の流れに取り残されたものであることがわかった。

課長には、これが古い井戸であることを報告し別のファイルからO町の水源となっている井戸の地図とポンプ小屋の図面を引っ張り出して、埃を払って説明した。

――当初は耕作地と共用で使っていたが、昭和四十年代に水が枯れそうになって五百メートルの深さにまで掘削して再利用。また、平成三年には八百メートルにまでなっていて、ポンプも一回り大きなものに交換されている。と資料にあった。

「どうしてそんな工事をしたんでしょうか。何か事情を御存知ないですか？」

「さあね、市の水道を引けばよかったのに。あの当時だから予算が余ってたんじゃないか？」

そんな冗談を言いわたしに、ポンプの実物を調べてくる様命じたのだった。

ポンプ小屋は、O町から一つ山を隔てた、狭い窪地の藪の中にあった。わたしは電車をO町から二つ先の駅で降りてバッグを肩から担いで歩き始めた。

O町から近くに低い山があり、遙か遠方に高い山々が連なっている。その低い山を越したところに小さな雑木ばかり生い茂った窪地があり、その地下に遠方の山からの伏流水が脈々として流れていた。

もっとも、これは、現在の深い井戸を掘ったときの地質調査から明らかになったことで、このデータを元に、その窪地に八百メートルも掘削して井戸を掘ったのだった。もし、これが枯れるとなると更に一千メートル級の掘削が必要になり、今の水道局の方針から言えば、他の地域と同様に、河川から引いている上水道と連結する工事をした方が簡単だと、言われてしまうだろう。

わたしは駅から続いている道路を、重たいバッグを抱えて歩き始めた。

アスファルト舗装の道は十五分も経たないうちに、砂利道に変わり段々と道幅も狭くなっていった。途中までの道幅は地図で確認できたが、未舗装の道の幅など保証の限りではなく仕方なく自動車を諦めたのだ。もし、工事をするなら、資材の輸送手段も検討する必要があると思った。

――前の井戸はどうやって工事したんだろう？

素朴な疑問が湧いてきた。

砂利道すら途絶えて、足元は土になってきた。一・五メートルの幅はあるはずだったが、実際には周りの草が茫々と伸び、人一人がかろうじて通れるに過ぎない。それでも、完全に草に飲み込まれないのは、やはり誰かが定期的に通っているからで、この道にも草の生えていない踏み固められた筋がついていた。もっとも、獣道だと思えばそう見えないこともなかった。

山道に差し掛かっても、様子は余り変わらなかった。歩くスペースだけは人一人分でさっ

きと変わらなかった。やはり、誰か通っているのだ。

やがて、昼になり、わたしは道が曲がって少し広くなっているところの岩の上に腰を下ろした。足元にバッグを置いて、額に浮かんだ汗をタオルでぬぐった。わたしはバッグを開けて、電車に乗る前に買って置いた弁当とお茶のペットボトルを取り出した。蓋を取りバッグの上に置いて風に吹かれていると、事務所で取るいつもの昼休みとは違いピクニックにでも来たかのような錯覚にとらわれる。

弁当を食べ終わってお茶を飲んでいると、前方から誰かが歩いてやって来た。背中に大きなかごを背負って重そうに歩いている。近づいてきたので、わたしから先に挨拶した。彼は、いぶかしげにわたしを見たが、わたしが市のマーク入りの作業服を着ているのに気づいたのか、――ご苦労様です、と、場違いな挨拶を返された。

彼はわたしの近くに腰を下ろして一休みした。

「遠いところご苦労様です」

「いえ、あなたはこの山で農業をしておられるのですか？」

「はい、この先十分ほどの場所に、畑があるんです」

わたしが彼のかごの中身を見ると、玉葱《たまねぎ》が五、六個入っていた。どう見ても趣味で作っているようにしか見えなかった。農業と言うには少し態度が大きいと思った。

「畑とおっしゃると、玉葱農家ですか？」

わたしは少し興味を持った。

「いいえ、この玉葱は空いている所に趣味で作っているんですよ。本業は万能葱《ねぎ》なんです。もう少ししたら夏葱を収穫します。トラックが使えないのでこれが一番いいんですよ」

彼はそう自慢した。そう言われれば、この山の中で収穫してトラックを使わずに出荷できる農産物など、そうありはしないと納得した。

「よかったら畑をご覧になりますか？」

わたしは仕事があるから無理だと断ったが、彼は、――どうせこの一本道の途中だからと強引に手を引っ張って案内した。わたしは少しペースを乱されるのには困ったが、彼がどんな農業を営んでいるかが興味深かった。

下り坂の中腹に、畑、と言うにはほど遠い、五十坪ほどの平坦地に葱の青い葉が広がっているのが見えた。ほとりにはちゃんと配管が通り、弁の先にはホースがつながって、ちゃんと灌漑 (かんがい) 出来るようになっていた。

「ね、ちゃんと育っているでしょう。ああ、少し早いけど何本か持って行きなされ」

彼はそう言い、手近にあった青い葱を七、八本引き抜いてわたしにくれた。貰うことには抵抗があったが、もう引き抜いてしまったものを、また植えるわけにもいかない。食べないともったいないと言う彼の言葉に促され、わたしは葱を受け取った。

彼の話しによると、この畑は曾祖父の代から耕しており、元々の水源は井戸を使っていたらしかった。それが、O町が最初に使っていた井戸である。そこにポンプをつけて町に配管を通したときに畑にも分水する約束で井戸の水利権を明け渡し、畑の地下を配管が通ることも了承したという。もちろん、本当かどうかわからない。市の水道局にもそんな資料は残っていなかったのだ。

「じゃあ、新しい井戸の水もここで使われているんですね？」

「もちろん、あれは平成三年だったかな。確か水源を切り替えたはずですよ」

彼は、畑の前から井戸のあるポンプ小屋へ、親切に案内してくれた。

午後になり、わたしは彼が案内してくれたことに感謝せざるを得なかった。畑からの道が草むらに覆われ、山道沿いに立っている電線を頼る以外に方向すらわからなくなっていたからである。彼は、草を棒で払いながら進んで行った。

窪地に入ると、草むらの勢力はますます衰えを知らない有様だったが、近くまで行くと

ツタに覆われたコンクリート製の小屋が見つかった。

――地下に水が豊富な証拠ですよ、と、彼はつぶやいた。

わたしが、小屋の鉄扉を開けて中に入ると、モーターはフル回転し、ポンプが轟音を立てて動いていた。整備は半年前に済まされていて、小屋の中もきれいに清掃、整頓が行き届いていた。汚いのは外だけだった。

わたしはマニュアルを見ながら、ポンプの水量や井戸の水位を点検したが、やはりポンプの水量が定められた値より少なくなっていた。据え付けの聴診棒で音を確かめると、異音がした。

この場でポンプを止めて解体するしかないが、次の点検まで半年は持たさなければならない。

「やはり、壊れたんですね？」

彼は不安そうに聞いた。

「ええ、でも、このまま続けるか、部品を交換するか、あるいは市の水道に変えるかはこれから検討してみないとわかりません」

「なくなると困るんです」

彼は、畑の灌漑用水を心配していた様だった。確かにこの山間の畑だけのために、水源を確保するなど不可能な気がした。すでに百メートルの井戸も枯れてしまい、使うとすれば八百メートルの井戸しかない。これだけの畑のために、井戸とポンプを設置するのも現実的ではなかった。

「曾祖父の代から耕しているんです。わたしの代で止めるわけにも行きません」

「葱ももらってしまったしねえ」

わたしは曖昧な返事を残したまま、ポンプ小屋の状況をつぶさにカメラに収めて再び山

を下りた。

役所に戻ると、課長に報告を求められて、わたしはポンプ小屋の様子をそのまま述べた。

「君、様子を話すくらいは子供でも出来るよ。意見を述べなさい」

「ですから、ポンプを止めて部品を交換するか、市の上水道をO町まで延長するしかありません」

「君の意見は？ 現場をよく見てきたんだろう」

課長は決断をわたしに押しつけた。もし大規模な工事になれば、その予算は議会を通さなければならなかった。水道局の無駄遣いだと、うるさく追求されたときに、その矛先を誰かのせいにしなければならない。

――長い目で見れば、この際、水道工事をしてしまうのがいいに決まっている。

わたしも、そう考えていたが、課長の意地悪な目を向けられて少し意固地になった。それに、あの畑のおじさんには葱一束をもらってしまった。収賄事件の成立だ。

「ポンプを直す方が安上がりでしょうね」

わたしはそう答えて、ポンプ小屋の写真を貼り付けて報告書を書いた。

しばらくしてポンプの修理が認められた。

ポンプメーカーに羽根車やパッキンなどの部品を注文すると、すぐに手配してくれた。あの山道で工事できるのかと不安だったが、案ずるより産むが易しで、エンジニアは小型の農業用トラクターに積み込んで、あっという間に現場に届けてしまった。

断水してから、ポンプを止めて部品交換している間、畑のおじさんが外から嬉しそうに見ていた。

エンジニアは、彼を見て懐かしそうな顔をした。

「どうかしましたか？」

「あの人、このポンプを据え付けたときにも来てましたよ。葱を持って」

わたしは、O町の水源が市の水道に切り替わらなかった理由を理解した。了

瑞々しいブドウ

瑞々しいブドウ

少年が入院したのは夏休みを目前に控えた七月上旬だった。腹痛で学校の試験を休んで市民病院に行ったら、黄疸が出ていると言われてその場で入院させられてしまったのだ。

肝臓から膵液を十二指腸に送り出す胆管にできものが出来、うまく膵液が流れなくなり、その結果、肝臓が腫れ上がって機能障害を起こして黄疸が出ていると、主治医の先生がお母さんに説明していた。お母さんは先生の前でただ、はあ、はあとうなずくばかりだった。

次の週からの中二の一学期末の試験を合法的に受けずに済んだことはラッキーだったが、ベッドの上で過ごさなければならないのが苦痛になってきた。

最初のうちは看護師さんも優しくてそれなりに入院生活を楽しんでいたのだが、抗生物質と点滴の注射を左腕につながれ、その上、鼻からチューブを差し込まれていた。チューブの先は詰まっている胆管で、十二指腸から上へとのばし、のどから鼻を通って外に出し、その先は排出された膵液をためるポリタンクにつながっていた。

入院してから一週間はベッドの上から動けなくてもなんとか、気を紛らわすことが出来たし、点滴の中に、少し眠たくなる成分があった様で、出来る限り睡眠時間に回していた。

起きたところで、まわりのベッドは大人の人ばかりで話しをするどころの雰囲気ではなさそうだったのだ。これまでにも、少年の体は弱く、入院した経験がないわけではなかったが、大抵は小児病棟に入っていて、今年から中学生と言うことで一般病棟に回されてしまったのだ。

「ね、瑞樹、何か欲しいものない？」

お母さんが面会に来て枕元でそう言った。

「別に」

実際、このベッドの上で欲しいものなどありはしなかったが、あまりに淡白な言い方だと自分で反省した。

「ほら、下着も替えなくちゃならないし、テレホンカードとか、自販機用の小銭とか」

普段なら喜びそうなことを、お母さんは言ったが少年は顔を背けた。一日中ベッドの上にいて何にも興味がなくなっていたし、それに、ジュースを飲もうにも鼻からのどに掛けてチューブが通っているので、少しも美味しくないし、苦痛でさえあったのだ。

「もう帰ってよ」

少年はすねてしまい、そう言ってタオルケットを頭からかぶってしまった。

お母さんが帰ってからしばらくぼぅっとしていたが、夕方頃になり、同室の他の患者さんにもお見舞い客がやってきた。

少年は起き上がることが出来ないので、耳だけ澄ましていると、胃がなくて食べられない人なのに、お菓子をもらったり、糖尿病なのにプリンやゼリーをもらったりしている人もいた。少年は看護師さんに見つかりますようにと意地悪なことを考えていた。

ふと、枕元に誰かの気配がして少年は目を覚ました。

「すみません、斜め向かいの崎田です」

「どうも」

「お見舞いにブドウを頂いたんだけど、うちの主人は食べられないから、あなた食べない？」

少年は断る理由を頭の中で探したが、嫌いだとか、手が汚れるからとか子供用の言葉しか思い浮かばずに、結局もらってしまった。ブドウと言っても一房丸まるではなく、この病室の患者で分けた、五、六粒ついた房だった。

少年は恐る恐る手をつけてみた。やや赤みがかったうすみどりのつるんとしたまるい果実だった。普段は果物のブドウにこんなに関心を示したことがない。まだ、フルーツジュースの方が嬉しかったくらいだ。鼻を近づけると、爽やかな朝の香りがした。

一口飲み込むと、最初はのどの奥に通っているチューブにつかえて気持ちが悪かったが、食道を通過してしまうと急に爽やかな心地がした。元来果物なんて好きじゃないのに、いくらでも口にすることが出来たくらいだ。

「あら、あなた、ブドウが好きなのね」

このブドウをくれた奥さんは、そう言って楽しそうな顔をして少年に笑いかけた。彼が食べ終わると濡れたタオルを貸してくれた。

少年が手を拭くと、そこが、真っ赤に染まった。汚れてしまったことをわびようと何か言おうと考えたが、奥さんは笑って、――どうせついでだからと、他の洗い物と一緒に持ち帰った。少年は後で、斜め向かいのおじさんに頭を少し下げた。彼はうなずいた。

「病院の前にある屋敷の庭に生えていたそうだよ。家内がそこの奥さんと同級生なんだ」

おじさんは聞きもしないのにそんなことを言った。

少年は、はあ、と言うようにうなずいた。のどの奥のチューブが邪魔をして、やはり、上手くはしゃべれないのだ。

トイレに行った後で、窓から下を見下ろすと、五階からの景色がよく見えた。おじさんが言う通りに、病院の前の道路に面して大きな屋敷があり、庭から壁一面に蔓のような植物が覆っていた。青々としたブドウの蔓は、庭だけでは飽きたらず、道路にまではみ出し、屋敷の前を通る幅三メートルの細い道路を車がこすりながら通過したり、小学生

が傘を振り回すのにときどき葉っぱを舞い散らせたりしていた。

――切らなくていいのかな？

少年は純粋に疑問に思った。と、その瞬間、通りかかった小学生くらいの男の子の姿が見えなくなった。丁度、ブドウの葉で視界が遮られ見えなくなったと思って見ていても、そのまま出てこなくなったのだ。まるで、ブドウに飲み込まれたかのようだった。

少年は男の子がいなくなったブドウの影をじっと見続けたが、そこに誰もいないことは、後ろから通った別の児童が次々とそこを抜けていくことからも明らかだ。

ブドウをくれたおじさんの方を見ても、知らん顔をして美味しそうにブドウを一つ一つ口にしていた。その口元をぬぐった布巾はやはり赤く染まっていた。少年は、その赤みになんとなくブルぶるっとふるえが来た。

「どうしたんだい？」

隣のベッドのおじいさんが声を掛けてきた。

「いえ、別に」

少年は、今見たことを口にすることは、このブドウにけちをつけるような気がしたのだ。無口な少年に気を遣って声を掛けてくれたおじいさんにも申し訳ないが黙っていた。

少年の元に再びブドウがやってきたのは次の日の午後だった。お母さんが、――顔色がよくなったね、と言って帰ったのと入れ違いに斜め向かいのおじさんのところに、奥さんがブドウを持って面会に来た。昨日のブドウよりやや赤みがかっている様に見えた。

奥さんは当然の様に、――もらい物ですが、と言いながら、他の患者さんにも配り、少年のところにも持ってきてくれた。

「どうぞ」

奥さんは、にっこり笑って少年の枕元にある皿の上に、実が五、六個ついた房を置いてくれた。

「あ、いいです」

「どうして、昨日のがおいしくなかったのかな？」

「いいえ、そう言うわけでは」

少年は断り切れず、ブドウをもらってしまい、目の前のテーブルに威圧感を持っておかれてしまった。この奥さんが帰ったら、後で捨ててしまおう、と、思っていた。

でも、おじさんの奥さんは執拗に食い下がった。

「これを植えているおうちはね、わたしの短大の同窓生だったの。野菜作りが趣味でね、あんな屋敷に住んでいても、外観を損なわない程度に野菜や果物を植えて、友達に配っているの。本当の無農薬農産物なんだもの」

「そ、そうですね」

「だったら、食べてよ。五粒くらいいいんでしょ？」

奥さんは、糖尿病でもないくせにと責めるような目で少年を凝視した。

少年は恐る恐る、ブドウを一つつまんで、赤みのかかったまるい果実を眺めた。

奥さんの、威圧感を感じながら少年はブドウの割れ目から果肉をぷるんと出した。皮ほど赤みはかかっていなかったが、昨日より酸味と甘酸っぱい香りは鼻につくくらい強くなっていた。

緑色をした果肉を少年がのどに流し込むと、口腔内に爽やかな甘みと、野趣あふれる香りが残った。少年は、この中にあの子供の生命力が宿されているのではないかという、そこはかとない不安にさいなまれた。

少年は益々、疑念の目であの屋敷のブドウを監視し続けた。さっきも一人の小学校低学

年の女の子がブドウの蔓の下影で姿を消してしまったのだ。

少年はブドウが人を食べるなど考えられなかったし、仮にそんなブドウがあったとして、そのブドウを自分が食べるなど思いも寄らなかった。

――それに、あれだけの子供たちが行方不明になっているんだ。いつの日かその屋敷にも捜査の手が及ぶだろう、そんな気がした。

しかし、少年の思いとは裏腹に、次の日も、また次の日も奥さんはブドウのお見舞いを続けた。

「おい、ブドウばかり食べられないよ。プリンが食べたい。買ってこいよ」

おじさんは、奥さんに文句を言っていた。

「わがまま言わないで、お菓子なんかは先生に止められているの。食べていいものなんてないのよ」

奥さんはすまなそうに、そう言った。彼には絶食の指示が出されていたのだ。

少年は、次は自分の番だとばかりに身構えた。あのブドウだけはもう、これ以上食べられなかった。あのブドウ屋敷の前の道路で二人の子供がブドウの蔓に食べられてしまっているのだ。段々と赤みを増す果実に少年の、ブドウへの不気味さはつのって行った。

「毎日ブドウばかりで悪いけど、どうぞ」

奥さんは少年に今日もブドウを勧めた。

「あ、いえ。いつも、すみません」

今日こそは本当に後で捨てるつもりだった。

「あら、食べないの？」

奥さんは、少年にこの場で食べることを強要するかのように、すすめた。

「あのお屋敷は奥さんのお友達の家なんですか？」

「そうよ」

そう答える奥さんの表情は、どこか、寂しげだった。

後から、斜め前のおじさんから聞いた話しでは、奥さんの友人は、以前に幼い娘を病気で失い、気を紛らわせるために果物のなる木を庭中に植えるようになったらしかった。

ブドウの味はますます不気味さを増していったが、少年とおじさんの血液検査の値は好転していった。了

暗号機と百枚の小判

暗号機と百枚の小判

おじいさんがミカン箱くらいの大きさの荷物を運び込んだのは、冷たい雪の降る二月の日曜日だった。僕はおじいさんがこっそりと部屋に運び込む現場を目撃して後をついていった。おじいさんは僕が見ていることに気づいていたが、それを気に留める風でもなく、自分の部屋に運び込んで箱を開け、僕に手招きした。

部屋はおじいさんが若いときから買い集めているアンティークで一杯だった。古びた木製のテーブルの上に置かれたさっきの箱から中身を出すのを手伝わされた。僕が触った感触ではきれいな木箱に入った何かの機械のように思えた。

「これ、なんなの？」

「開けてごらん」

おじいさんは手袋を僕に渡し触らせてくれた。ぎぎっと錆びた金具の音がして上蓋を開けると中にはアルファベットが記入されたタイプライターのようなキーボードが並んでいた。おじいさんは嬉しそうにこれが普通のタイプライターではないことを説明し始めた。

まず、キーの奥に同じ並びになっているランプがあり、キーを押すと点滅すること、そして、さらにその奥にはダイヤルがついていて、キーと点滅するランプのつながりを不規則にしてしまう暗号機になっていると説明してくれた。

「どうしてこんなものを買ったの？」

僕は家族がおじいさんの趣味に関してあまり理解を示していないことに、薄々感づいていた。お父さんが見たらまた変なものを買ってきてと、いやな顔をするに違いない。しかし、おじいさんは僕の質問の意味を取り違えた。

「これは第二次世界大戦のときに使われた暗号機で今では貴重なものなんだよ」

そう言って、比較的新しそうな電源装置に暗号機をつなぎ、スイッチを入れてキーを叩くとランプが点灯して、その瞬間ダイヤルの一つががちゃりとまわった。ダイヤルの中には電気接点が入っていて、まわることで配線を組み替えて複雑な暗号を作り出す、らしかった。

こうして、おじいさんのアンティークコレクションがまた一つ増えたのだ。

おじいさんの部屋に山積みされたアンティークが再び日の目を見たのは、僕が中学三年生になった年の春だった。おじいさんが亡くなってから三ヶ月が経ち、残されたアンティークはほとんどが処分されてしまい、そのうち何点かは歴史的価値を買われてアンティークショップに引き取られていった。

僕はおじいさんの愛着がこもっていると知っているだけに安い値段で引き取られていくこれらの品々か悲しげに見えた。

「おいおい、これは大変だ！」

父の素っ頓狂な叫び声で騒ぎは始まった。

おじいさんのアンティークの目録がご丁寧にも封筒に入った形で見つかり、その中に誰の目にも値打ちがわかるもの、すなわち小判があったのだ。実際の目録には「慶長小判、傷なし」とか細かい項目が書かれていたが、アンティークには素人な父たちは小判とあるだけで大騒ぎとなった。何せ、百枚もあることがわかったのだ。財産分与に際して初めて出てきた財産らしい財産であった。

しばらくして、我が家に叔父と叔母がやってきた。

父とおじいさんの財産分与についての話し合いのようだった。

「兄さん、小判百枚だって、兄弟三人で割り切れるかなあ」

「何言うのよ、一枚ずつの値打ちが違うんでしょ。換金してから分割すればいいわ」

そんな好き勝手なことを言っていた。

「でもさ、小判なんかおじいさんの部屋にはなかったんだよね」

「どこかに預けていたのかしら？ 兄さん、遺言書は残ってなかったの？」

「さあ、保険とか証券類に分けて封筒に入っていたから、それ以上は探さなかったな。もしかしたら何かあったかも知れない」

父がそう言って、おじいさんの書類入れを引っかき回すと小さな封筒が出てきた。皆固唾をのんで出てくる紙切れを待った。出てきた紙には、定規を当てて書いたと思われる几帳面な字のアルファベットが並んでいた。

「ローマ字？」と叔母。

「いや、ローマ字にはなっていない、何語だろう？」

父は叔父にそれを見せた。

「さあ、暗号じゃないかなあ。逆から読んでいくと文章になるとか、特定の文字、例えばＸを抜くとローマ字になるとか」

思いつくままに皆がそれぞれのアイディアを述べた。何せ小判百枚の行方がかかっているのだ。しかし、何をどう並べ替えたって読める文章にはならなかった。

僕は何年か前におじいさんが大事そうに買ってきた暗号機を思い浮かべた。元のローマ字を一字打つと別の文字に変換され、電気接点の入ったダイヤルががちゃりとまわり、また次の文字が全然別の文字に変換される。どう考えてもあの暗号機がないことには解読しようがなかった。

父や叔父さんたちが散々知恵を絞り尽くしたところで、僕はおじいさんの暗号機の話を持ち出した。

「ええ、暗号機かい？」

「それなら、使われる頻度をヒントにして解析できないかなあ」

「昔の日本軍やドイツ軍の暗号も解読されてたんだろう。解読できるよ、きっと」

そんな楽観的な意見を述べた。

「暗号機はどうなったんですか？」

「さあ？ おじいさんのアンティークは全部まとめて引き取ってもらったからなあ」

僕は悲観的になった。

「でも、おじいさんの暗号機はもっと複雑だったよ」

そう主張すると、おじいさんの暗号書がさっぱりわからないことに根を上げていたのだろう。父がアンティークの売却先をショップに問い合わせてみることになった。

叔母さんは、クロスワードパズルの得意な従兄弟に一度チャレンジさせてみるといい、暗号書のコピーを取り持って帰った。

アンティークショップから連絡があったのはそれから一週間ほどした頃だった。あの暗号機は実際にものすごく値打ちがあったものらしく買い手はすぐにつき、現在は東京のコレクターの所有物になっていて、その人は二度と手放す意思はないらしかった。

「困ったなあ、少しだけでも借りられませんか？」

電話口で父は店主にそう頼み込んだ。

アンティークショップの店主とおじいさんとは長いつきあいでもあり、新しい持ち主に頼んでくれることになった。先方は手で直接触らないことを条件に一日だけ貸してくれることとなった。精密機器扱いで送られてきた暗号機の使い方を少しだけ知っている僕に操作する出番がまわってきた。

数年ぶりに見る木箱は、あのときと少しも変わっていなかった。

僕が白い手袋をはめた手で上蓋を開けると、なかからアルファベットの並んだキーボードが現れた。

「何だよ、ただのタイプライターじゃないか」

隣で父がため息をついた。でもただのタイプライターではなかった。僕はおじいさんのやっていた通りの手順で電源をつなぎ、操作しようとした。暗号書の通りにキーボードを叩けば、元の文章をランプで点滅して示してくれる、はずだった。

結果は出鱈目だった。何の意味もないアルファベットの羅列がさらに何の意味もなさない羅列に変換されただけだった。

「なんだよ、頼りにならないな」

父はまたもため息をついた。

「使い方が間違っているのではないか」と叔父は言い出した。叔母は自分の息子が解読する方にかけている。

ふと、僕はキーボードの上の方についているダイヤルが外せることに気がついた。これの組み合わせによって暗号が何通りにも作り出されるのだ。だから、この暗号を作ったときと同じ組み合わせにしないと元の文章が再現できないと父に説明した。

再び、おじいさんの書類箱の探索が始まった。どこかに、暗号解読のためのメモがないかと思ったのだ。ダイアルの組み合わせはアルファベットの二十六文字が三重にかかるので理論上二十六の三乗で一万七千五百五十六通りの組み合わせを順番に確かめなければならなくなってしまう。

でも、今度はアルファベット三文字のメモということがわかっていたので割合と簡単に見つけることができた。最初は小判に気を取られ、みんながゴミと思っていた紙くずの中にあったのだ。ＰＤＨをダイアルにあわせてキーを叩くと今度は、ローマ字に変換された。

――わたしのアンティークは大事に残してください。小判が百枚ありますが台所の床下の壺に入れて埋めてあります。三人で仲良くわけること。

そんな遺言が書いてあった。アンティークを残すことという遺志は残念ながら果たされなかったが、小判の方は図らずも手つかずだったからみんなの目に生気が戻った。

「早速掘り出そうぜ」

「駄目よ、お母さんも台所を使っているのだから」

「そうだな。この暗号機も返さなくちゃならないし、埋蔵金の発掘は来週の日曜日だな」

三人はそう相談をまとめ、発掘は来週の日曜日に持ち越した。

役目を終えた暗号機は、先方がわざわざ取りに来てくれた。やはりよほどの貴重品らしく他人任せの運搬にはできないらしかった。

「いやぁ、お役に立ちましたか？」

「ええ、おじいさんが暗号の遺書を残していたもので往生しましたよ。貸していただいたお陰で何とか解読できました」

「そうですか。この暗号機は歴史的にも、……」

彼はこの暗号機の価値をまた説明し始めた。興味のない人には猫に小判だと思ったが、僕は余計なことは何も言わず横に座って聞いていた。当時の使い方では、ダイヤルのあわせ方を毎日更新して秘密を守るのに利用したという。その暗号帳が連合国側に落ちたという事件もあったそうだ。

さて、日曜日になり叔父と叔母は従兄弟と共に我が家にやってきた。台所の家具はあらかじめきれいに片付けられていつでも発掘作業にかかれるようになっている。

「いくよ」

叔父がスコップを土の上に突き立てた。ザクッという音が響き、何杯かの土をすくったところでカチンという堅い音に変わった。

「お、何かに当たった」

三人は色めき立った。いよいよ、黄金色の小判と対面することが出来る。従兄弟が下に下りて手で周りの土をどかし叔父と二人で壺を抱え上げた。

「何だか軽そうだぞ」

不吉な予感が三人の脳裏をよぎった。

「ふたを取ってみよう」

壺の中から一通の封筒が出てきた。第二の暗号だった。了

屋根裏の悪意

屋根裏の悪意

わたしが今のアパートのこの部屋に引っ越してきたのは、大学三年の夏休みの最中だった。必要な単位を取り揃えてしまい、就職活動の始まる春までの半年間に「何か」をしたいと思い、一人暮らしを始めたのだ。興味本位で始めたアパートでの生活だから、家賃は安いほどよかったし、部屋の住人は何度も変わっている方がよかったし、そのうえいわく付きの物件ならいうことなし、だった。しかし、そんな本音はおくびにも出さずに不動産屋さんを訪ねて出来る限り安い部屋ということで、ここを斡旋してもらったのだ。

ちなみに、段ボール一箱と文机だけの荷物で引っ越しし、隣のおばさんに挨拶したときにはごく普通の人で何だか肩すかしを食ってしまったような気がした。

荷物を運び込む前に部屋の掃除をしていると、天井に隙間があり、脚立に上がってそっと押すと板が外れることに気づいた。興味本位で屋根裏を覗いていると、そこにひもで縛られた紙の束があるのに気づいた。古新聞か何かだろうか？

「あれ、前の人が置いていったのかなあ。何なら捨てておきましょうか」

と、大家さんが言ってくれたが、それくらいは自分で出来る。

「いや、いいですよ。次の資源ゴミの日に出しておきますよ」

返事をして、わたしは脚立からそろりと降りた。どすんとやると下の階に響きそうだったからだ。持って降りた紙の束は案の定、古新聞と広告ばかりだったが、ふと、記事に目が行きそのまま読み始めた。三年ほど前の日付の新聞だが、そのまま捨てるには惜しい。後で読もうと置いておき、掃除をすませて荷物を運び込み、流しに食器を並べただけで簡単な引っ越しは完了した。

その夜は蒸し暑く、昨日までの冷夏が嘘のように感じられるくらいだった。八月中こんな暑苦しい夜が続くのならクーラーを取り付けなければならないなと思いながら、流しに水を飲みに行った。

「ふぅ」

手ぬぐいで額の汗をぬぐうと、昼間に少し読みかけた古新聞の束が目に入ってきた。縛ってある紐を解かずにそのまま捨てればよかったのだが、何を思ったのだろう。どうせ寝られやしないと覚悟し、新聞紙の束を解いて一部ずつ丹念に目を通し始めた。

しばらくして見つかったのは几帳面な字でびっしりと文字が書き込まれた何枚かの原稿用紙だった。

「何だ、これは？」

よく見てみると原稿用紙にボールペンで小説のようなものが書かれていた。手にしていたのは途中の一枚と思われ、用紙の欄外左下にページ数らしきものが振られ、――私は、という文章が何度も繰り返し登場していた。

「前の住人が小説でも書いていたのか？」

わたしは独り言を喋りながら薄暗い流しの前から布団の敷いてある部屋の真ん中に移動し、他のページを探す作業を始めた。

「ふうむ、何やら推理小説っぽい書き出しだぞ」

わたしは最初の何枚かを通して読んでみた。「動機」はよくわからないが、誰かが誰かを殺害して、しかも、それを第三者には自殺に見せかけようという、ありがちな推理小説のトリックだった。

本気とは思えなかったが、そのトリックとは次の通りだ。

まず被害者を部屋に呼び、疑いを抱かれないように話しかけ、睡眠薬の入ったウィスキーを飲ませて眠らせる。

この時点で犯人と被害者は顔見知りでなければ不自然だと思った。さもなければ、部屋に上がったりウィスキーをよばれたりしないだろう。

眠った被害者を椅子に座らせ、天井からつるしておいた縄をわっかに巻いて首に巻き付ける。椅子の下には厚みのある氷が敷いてあって、時間と共にとける仕組みだ。おそらく朝方までには氷は溶けて椅子が沈み込み、被害者は天井から首つりしたような格好になるに違いない。

「そんな馬鹿な！」

この部屋で厚さ十センチ以上もある氷の塊を溶かしたら部屋中水浸しになるに違いないし、下の階にも漏れていくだろう。下手をすれば漏電して事故になるかも知れない。首尾よく被害者を絞殺出来たとしても、……

わたしはそこまで読んで、他の部分の原稿が気になった。犯人の動機、そして、事件の結末が知りたくなったのだ。一晩中、眠るのも忘れて新聞紙の束を一枚一枚めくって探したが、残っていたのは犯行そのものの部分の記述だけだった。

字から判断するに、この小説を書いた人物はものすごく几帳面な性格と思われた。もしかしたら推理小説の習作として書き上げ、この部分だけが気に入らずに書き直し、そうして捨ててしまったのかも知れないなと思い始めた。

――いや、そんなに几帳面な人なら古新聞の束を屋根裏に残したまま引っ越したりはしないだろう。自分はそんなに几帳面ではないが、そのくらいは後片付けしてから引っ越すものだと思っている。

次の朝、日光が部屋に差し込み出すと、わたしは居間の畳がやけに新しいのに気づいた。もちろん、まだ青々しいとか、そこまで新しいとか言うわけではない。アパートが築三十年近い代物で、部屋は壁とカーテンもそこそこ古びていて、西日が当たるところだけ日に焼けて茶色くなっている。

あまり気が進まなかったが、一度畳をめくり上げてみることにした。隙間に竹製の定規をつっこんで間隔を広げて指を差し入れ、持ち上げる。四畳半のうち三枚の畳を持ち上げた。

「あっ」

私は思わず息をのんだ。

畳をどけると、その下の板に大きな水で濡れたらしい黒いしみがついていた。長い間ぬれたままになりそのまま黴びたに違いない。あの小説の現場はこの部屋だったのかと私は思い至った。だとすると、あの小説を書いた人物は一体犯人だったのか、被害者だったのかが依然として謎のままだ。犯人が自分の部屋で他人を殺すとは思えなかったし、自分で自分を殺したのならあれは告白記録となるだろう。

わたしはもう一度、原稿用紙を取り出して丹念に調べた。全部で四十枚ほどの分量だった。これが推理小説なのか、告白文なのか、文体から解析してみようと試みたのだった。全体の構成がわからないから、本職の作家さんなのか、あるいは修行中の身であるのかはわからない。ただ、句読点の配置や語彙の豊富さなどから、小説であることの可能性が強いとしか判断できないでいる。

夕方、隣のおばさんのところに、さりげなく話を聞きに行った。もう大分お年を召した方で、おしゃべりは好きそうだった。

ストレートに殺人事件のことなど聞いても教えてはくれまい、そう思った。

「そうねえ、三年ほど前だったかねえ。……ここだけの話だけど自殺者が出てね」

「ええ？ どの部屋でですか？」

「それは口止めされてるから言えないよ」

おばさんは妙なところで口が堅かった。が、話を総合すると自殺事件があった後、不動産会社の関係者が三年ほど借りていたらしい。さもないと新しい入居者に告知義務があるそうだ。その前には売れない小説家の先生が住んでいたと言った。やはり、あれは「小説」だったのだろうか？

「実はあれは自殺事件ではないんですよ！」

わたしはカマをかけてみた。

「またまた、あんたまで怪しいこと言わないでよ」

おばさんは本気にはしなかった。

このときからわたしは犯人捜しを始めた。

とはいえ、実際には「事件」ではなかったから、そんなに難しいことではなかった。不動産屋さんに行き、前の住人の連絡先を調べてもらったのだ。意外と近くに住んでいて、やはり、同じような間取りのアパートだった。

わたしは歩いて「彼」に会いに行った。

「ごめん下さい」

とドアをとんとんと叩くと、四十歳くらいのうさんくさい男が出てきた。わたしはアパートから持ってきた原稿用紙の一部を見せた。

「すみません。この小説はあなたのものですよね？」

「見覚えはあるかな。でも、あんた誰？」

わたしはあのアパートのかつて彼が住んでいた部屋の現在の住人であることを告げた。

そして、掃除している最中に天井裏の原稿を見つけてしまったこと、畳の下の水のしみのことを彼に説明した。そこまで言うと彼の顔色が少し変わった。

「まあ、上がって下さい」

彼にそう勧められ、わたしは、四畳半の間に上がり込んだ。イメージ通りの部屋だった。小さな文机と積み上げられた文芸誌、真ん中にはちゃぶ台。こうでなければならないという風に完璧なまでにわたしのイメージを再現していた。

「自殺事件との関係をお話し願えますか？」

「わたしがやったのではありません。知り合いの男なんです」

彼の説明によると、自殺した知り合いの男とは彼の学生時代の友人で、事件の少し前にあの原稿を見せたことがあると言った。何か悩み事があるとは夢にも思わなかった。

推理小説として応募するつもりの原稿と同じ方法で自殺されてしまったのだという。

その日の夕方彼の話を聞きながら酒を飲んだそうだ。

「正直困っているんですよ。明るみに出れば、僕に変な疑いが掛かるし、自殺のままそっとしておくには原稿を封印するしかない。それで天井裏に隠していたんですよ。よくあんな所から見つけましたね」

彼の話は一応筋が通っているが、わたしの第六感は警鐘を鳴らしていた。推理小説のトリックを使われたというのはあまりに出来すぎているし、疑われないために作品を発表できないというのも作家としては自信満々と受け取れたが、そこが却って怪しかった。実際に、友人を手に掛けて、それをネタにトリックを考えたのではないかと疑わせるような態度だった。

「わたしは見た目で損をするタイプなんですよ。まあ、お茶でもどうぞ」

彼は冷蔵庫から麦茶を出してくれ、わたしの前に置いた。ガラスのコップの中で茶色に揺れる液体を見ていると彼の小説の中の睡眠薬入りウィスキーのような感じがして手を出すことが出来なかった。了

雨に降られて

雨に降られて

六月の第一日曜日の朝、やっとデートの日程が合い、僕は彼女と待ち合わせしていた。彼女とは大学の同級生で、同じ研究室を出てからも付き合って四年になる。僕は卒業後、メーカーに勤務し、彼女は突如始めた茶道にのめり込みそのまま師範になっていた。結構レッスンが多いらしく景気も不景気も関係なく生徒が集まってくるそうだ。僕はといえば、貧乏暇なしというやつで、景気が悪いほど現場が忙しくなると言う法則通りに休みの取れない職場だった。

そんなわけで、お互いメールなどで連絡は取り合っていたものの、中々会えない日々が続いていた。

彼女の家の最寄りにあるコンビニエンスストアの駐車場に停めた、買ったばかりの軽自動車の運転席からバックミラーを眺めていると、約束の時間を十分ほど過ぎて彼女が姿を現した。十分遅れは学生時代から変わらない。

しかし、今日は彼女は和服姿だった。

「おい、どうしたんだよ？ 見合いか？」

「馬鹿ね。お茶のレッスンがあったのよ。ごめんね。遅くなって」

彼女はそう言い助手席のドアを開けて、裾を気にしながら乗り込んだ。簡素な柄の大島紬だった。

「高いんだろう、それ？」

「まあね、久しぶりのデートだから」と言ってちょろりと舌を出した。

「業務用だろ。要するに」と、僕は照れ隠しに言った。

「そうとも言えるわね」

僕はクルマのエンジンを掛けた。エンジンが快適な音を立てて始動した。

「音楽はないの？ このクルマ」

「ああ、さっきまでＦＭ放送を聞いていたんだけど、クラッシックになったから切っちゃった」

そういうと、彼女はバッグの中からｉＰｏｄを取り出した。一応、僕のクルマの車載オーディオに接続できるようにはなっている。手元のコンソールを開け、コードを勝手に接続した。かかってきた曲は今はやりのアニソンだった。和風美人の彼女にもこんな趣味がある。

しばらくすると、フロントガラスにぽつぽつと雨粒が落ちてきた。

「あら、雨！」

「本当だ。もう梅雨なのかな。天気予報では降水確率低かったのにな」

僕は彼女の姿を上から下までじろりと観察した。紺の着物にベージュ色の帯、白い足袋に草履である。元々今日は遊園地に行こうという約束で出かけるつもりだったのだ。レッスンが急遽入ったのは仕方がないとしても、この格好で行けるのか疑問だった。

「ごめん。着物ぬらしたくないんだ」

すまなそうな表情でそんなことを口にした。

まあ、こんな時のためのナビゲーションシステムだ。僕は同じくらいの距離にあり、雨天でも構わない施設を検索した。

「灘の酒造博物館ってどうだろう？ 酒蔵の中なら雨が降っても大丈夫だ」

「えー、いいの？ 利き酒とかあるんでしょ？ 飲めないわよ」

「いいよ、酒ならコンパの時にいくらでも飲めるんだから。君との時間の方が大事だよ。今となっては」

「うまいこと言うわね。いいわ、そこにしましょう」

僕は行き先を設定し、ナビゲーションの指示通りに運転した。

一時間半ほどかかって、目的地に到着した。流石に軽自動車では腰が痛くなる距離である。最初、軽自動車にするか普通車の小さいのにするか少しだけ迷ったのだ。会社は寮に住んでいるので毎日の通勤に使うわけでもないし、滅多に使わないものにお金を掛けるのはもったいないと判断し、今のクルマを購入した。

博物館と言うほどのものではなかった。中の展示スペースには過去に酒造に使われた桶や、道具などが展示されているだけで特に気を引くようなアトラクションなどはなかった。

「ほら、利き酒もあるじゃない？」

彼女はけしかけた。無論本気ではない。でも一周してしまうと他に何もなかった。

土産物売り場で、彼女は僕とおそろいの鈴のついたストラップを選んだ。

彼女は僕の目の前でちりんちりんと鳴らした。僕はそれを買った。

帰り道、彼女は将来のことを話題にした。

「あのさ、今の仕事が忙しいのは理解しているけど、将来あたしたちどうなるのかな？」

「そうだよなあ。何とかせねばならんな」

僕はハンドルを握りながら上の空で答えた。

「もう、真剣に聞いてよ」ぷんと、彼女はふくれた。「月に一回こうして会うだけでいいの？ いつか終わっちゃうかもよ」

「そうだよなあ。何とかせねばならんな」

一時間半、居心地の悪い時間を過ごし、彼女の家の前まで送っていくことになった。そう言えば、彼女の家族とはほとんど顔を合わしたことがなかった。彼女には先に結婚した妹がいるという話だった。

雨が降っていた。

僕は、先にクルマを降り、傘を差して助手席の彼女にかざした。

そのとき、家の中から二十代の男性が出てきた。

「はじめまして、義姉がお世話になっています」

彼はそう言って挨拶した。どうやら、話に聞く義弟のようだった。僕も挨拶し、お辞儀した。

「どうぞ、上がっていってください」

彼は僕を家に上げようとした。僕は今日は帰りたい気分だったが、彼女に雨が掛からないよう、傘を支えているのでそのまま家の中に入らざるを得なかった。

「ありがとう」

彼女はバッグで頭を覆いながら家の中に入った。と、そのとき、弟のスラックスのポケットから携帯電話が見えた。ストラップに鈴がついていた。

僕は弟の顔を見たら目と目が合ってしまった。「君も？」「ええ」彼はそう言ってうなづき、笑顔で微笑んだ。

僕はご両親に挨拶するため、奥に通された。了

階段の下

階段の下

ジイーッとセミの鳴き声が頭の中でこだました。わたしは二階の一室で夕日を浴びながら原稿の一字一字をキーボードに打ち込んだ。このときわたしは短編小説に取り組んでいた。

ふと、窓から外を眺めると、通りを挟んだ向かい側の家の新築工事が進んでいるのが見えた。グラインダーで金属を削る音がキーンと耳の奥にまで響き、圧縮空気工具のバシュッという音が癇にさわる。締め切った窓のこちらでは室温が四十度を超えた。しかし、開けるわけにはいかなかった。額からポトリと汗がしたたり落ちた。手元に置いてあった原稿用紙に染みを作り、あわててチリ紙でふきとった。

そんなある日、物書きをしている先輩が息抜きにと、居酒屋に誘ってくれた。

「中々大変なようだね？」

「ええ、そうなんです。うるさくて原稿に集中できないんですよ。締め切って防音材を入れたいくらいですが、締め切ると暑いし、かといって開けると埃が舞い込んでくるしで」

わたしは現在の環境の悪さに、つい愚痴をもらしてしまった。

「冷房はないんだったね？」

「はい。作品が売れるまでは贅沢品は切り詰めなければ、というところですよ」

彼はそれを聞くと苦笑して灰皿を取り寄せてポケットからタバコを取り出した。一口吸ってから軽く煙を吐き出した。大学の時分から色々世話になってばかりだったが、社会人になりきれぬままこうして原稿書きにいそしんでいる今も時折精神的に支えにもなってもらっている。

「今何を書いているの？ やはり、純文学かい？」

「いいえ、もうその方面は諦めましたよ。もっぱら推理小説です。読者層が広そうだし」

「そうだねえ、……まあ広いといえば広いかも知れないね」

適当に相づちを打ってこの話を終えてしまい、脇に置いてあった茶封筒を取り出した。中には雑誌のようなものが入っていて、彼はテーブルの上を綺麗に拭いてから大事そうに置き、その中からしおりを挟んでいるページをわたしに指し示した。古い街中の絵地図に当時の世相を反映した記事が並んでいた。

「これって今の住所だとどの辺りになるかわかるかな？」

「さあ」

昭和二十年代に出版された雑誌の様で、出てくる地名にあまり馴染みがなかったものの無碍には、知らないと言えない。それに、知っている地名に近い名前もあった。

「そうですね、わたしが住んでいる地域と重なっていると思いますよ。でも何故？」

「僕の取材しているテーマに関することなんだ」

彼はノンフィクション作家ですでに本を何冊か書いている。それでわたしは歴史物かなと思った。わたしはあやふやな答えを返しただけだったが、彼には何か思い当たる節があったらしく、急に声のトーンが変わった。

「どうだろう？ 僕はしばらくの間、君の住所を基点にして調査取材を行いたいんだ。その代わりと言っては何なんだが、昼間は僕の家の冷房の効いた部屋を自由に使ってくれたまえ。君にとっても悪い条件ではないと思う」

「ええ、本当にいいんですか？」

一夏の間、そんなにオーバーでなくても暑さの厳しいちょっとの間だけでも、冷房の効いた部屋で作業できるのは大きな魅力と言えた。それに、彼はわたしの家を単に休憩場所として使うだけという。それでは少し申し訳ない気がした。

「いいんだよ。持ちつ持たれつで行こうじゃないか。な」

それで、次の日からわたしは、電車で一駅の距離にある先輩の家に執筆活動をしに行き、日中、冷房のキンキンに効いた部屋で作業をすることになった。毎朝、八時に家を出て、パソコンと電源をキャリングバッグに入れて持ち運ぶ。今日日の執筆活動はパソコン抜きには考えられない。

彼の書斎は、整然としていた。

わたしはエアコンのスイッチを入れ、パソコンに向かい執筆を始めた。今まで雑念ではかどらなかったのが嘘のように思えるくらい快適に作業が進んだ。やはり、仕事の出来る人のオフィスはそれ自体が違うもののように思える。冷房で温度が下がっただけの効果以上の何かを感じていた。

――何だか悪いな。

少し遠慮し、冷房の温度を一度上げた。

そんなこんなで、五日ほど経ち、わたしの取り組んでいる短編小説にも一応の目処が立った。後は全体を見直して齟齬がなければ決まり切った結末に導いたらそれで終わり、というところまでこぎ着けた。これも、先輩の厚意に甘えたお陰であった。

目頭が熱くなる思いでパソコンの画面を見つめていると、突如、バッテリー切れの警報のサインが表示された。昨日の夜に十分に充電したつもりでいたが、コンセントがしっかりはまっていなかったと見える。わたしはキャリーバッグから電源コードを取り出そうとして手探りで探った。

「あれ？」

手探りでは見つからず、バッグをひっくり返して底まで確かめたが見つからなかった。わたしの拳より大きなものなので何かに紛れ込んだりするような性質のものではない。

家に置き忘れたに違いない。先輩も同型の充電器を持っているかも知れないと一瞬思ったが、ここまで世話になっておいて、勝手に机の中を引っかき回すのはよくない。

わたしは、預かった鍵を掛けて、自分の家に戻ることにした。

家の前には一台のワゴン車が停まっていた。

「誰だろう？」

いかにも不審な車で、先輩がこの家を基地にして周辺の調査に当たっているということを聞いていたが、それを抜きにしても怪しげな車だった。それに、皆が家の中に入っているらしく、車の中には誰もいなかった。

わたしはおそるおそる、自宅のドアを開けた。玄関から青いビニールシートが敷かれ、その上は土足で踏みしめられていた。何人かは奥の台所にまでは入り込んでいる気配がした。

「先輩ですか！」

わたしは、中の人を刺激せぬよう玄関から大きな声を掛けた。

しばらくして、腰から手ぬぐいをぶら下げた格好で先輩が出てきた。しょうがないなという顔をしている。

「やあ、黙ってこんなことをしてすまないな。調査がうまくいってから報告しようと思っていたんだ」

「どうして、そんなことを？」

「君だって小説家の端くれだろう。先を越されたくなかったんだよ」

いくら何でも買いかぶり過ぎという言い訳に聞こえた。先輩の膝は土で汚れ、その他にも助手を一人引き連れていたが、彼の膝やすねも泥だらけだった。まるで穴掘り工事をしていたかのようだった。わたしはイギリスの有名な小説を思い出した。

「まさか、銀行強盗の準備をしていたんではないでしょうね？」

「ははは、そんなことはしていないよ。たねを明かそう。この間見せた手記を覚えているかい？」

「ええ」

「戦時中に防空壕が掘られ、陸軍の臨時の司令部が作られたらしいんだ。その証拠に他の壕が土壁なのに対し、ここはコンクリート壁だ。実際にそれを確かめるのが目的だったんだ。君んちの階段下の物置の下から床に出ると、大きなコンクリートの空洞にぶち当たったんだ。記録が正確な証拠だよ」

先輩はそう言って、計測ボードにスケッチした穴蔵の寸法と、手記にあった壕のサイズとを比較し、当時の防空壕の一部であると結論づけた。

「何か、当時の品とか出たんですか？」

「それを探していたんだけどねえ、終戦時に押収されてしまったのかも知れないな」

先輩はがっかりした顔で言った。

「記録では金の延べ板が運び込まれたらしい。埋蔵金だよ」

「ええー！」

わたしは違う意味で愕然とした。この家は父の生前に建て替えられたものだったが、家を崩した後、やけににこやかになり、気味が悪いくらいに気前よく代金を現金で支払っていたのが記憶によみがえった。まさか、あのときに埋蔵金が掘り出されたのだろうか？

「先輩。その記録というのは確かなんですか？」

わたしは声が震えているのを感づかれないようにわざと関心がないふりを装って尋ねた。

「確かかどうかわからないから、こうして実地調査をしているんじゃないか」

「そ、それもそうですよね」

「一キログラムの金塊が五個あったらしいんだよな。今出てきたらいくらくらいになるかなあ、……」

彼は頭を手ぬぐいをつかんだまま埃にまみれた頭をかきむしった。残念だなあという風に。わたしだって残念だった。家の下にそんなものが眠っていたとは夢にも思わなかったのだ。いや、家を立て直したのは十二年前だったから、そのときに取り出されたのかも知れない。

「ところで、その金塊の情報源はどこからなんですか？」

「どこって言われても情報源は明かせないよ。当時建設に携わった関係者としか言えないなあ」

「このことを書くんですか？」

「僕も物書きだからね」

先輩たちがワゴン車に乗り引き上げていった後で、わたしはたまらなく不安になった。

誰もいない家の中でわたしは古い書類を探し回り、父が生前書いていた日記や通帳の類を丹念に調べていった。そのほとんどは日常に関するもので、地下から金塊が出てきたなどとは一言も書いていなかった。もし、出てきたなら、……やはり父の性格からすると書き残すわけがなかった。

そうして、先輩が執筆している文芸誌が発売されて、わたしはいの一番に書店に飛んでいって買ってきたが、街中に残された防空壕の跡というルポだけで金塊のことは書いていなかった。

これで、「シロ」ということが確定したわけではないがとりあえず、積極的に関わった証拠もないことだけ確信することが出来た。

あれからも、先輩の家には時々お邪魔して執筆させてもらったりという関係は続いていた。やがて秋になり自宅でのんびり書けるようになった頃、小さな地震が起こった。

わたしは一階の和室で寝ていたのだが、そのとき、地震の揺れより床下でゴトリという音がしたのが気になった。幸い大した地震ではなかったので、収まるのを待って畳をめくり床下を調べた。長さ三十センチほどの木箱が地面から頭を出していた。わたしはそれを見て嫌な予感がした。

――先輩を呼んでこようか？

色々迷ったが、いまさら言えることではなかった。釘抜きを持ってきて木箱をこじ開けると中には一キロの金塊が五本入っていた。確かに発掘されたものの使われなかったようだ。わたしは金塊の表面に指紋が残らないよう綺麗に拭き取り、箱ごと担いで階段の下の穴蔵に潜り込んだ。了

犬の散歩

犬の散歩

愛犬ジョンを飼い始めて半年、毎日の散歩もわたしの生活習慣の一部となりつつあった。ジョンと暮らし始めるまでは気がつかなかったのだが、犬の散歩に出ることで犬を飼う人通しのつきあいが出来る。いわゆる犬友達ともいうべき顔見知りだ。

「やあ、どうも、今日は早いですねえ」

「やあゴンちゃん、今日は元気そうですねえ」

「プリンちゃんの調子はどうですか」

などと、お互いの愛犬の名前で呼び合い、声を掛けたり掛けられたりしてそこから話が始まるのだ。だから、人間には興味はなくひたすら犬を中心とした話になり、結局、親しくなった割には、相手がどこの人だか知らない場合もよくあることである。

そんなある日、犬を連れていない年配の男性に声をかけられた。

「可愛いワンちゃんですね。散歩ですか？」

「ええ、夕方の散歩です」

午前中の散歩は妻が、夕方の散歩はわたしが連れて行っていた。町内を一周して公園で一服するというコースである。その男性とは公園のベンチ付近で出会った。彼は自治会の清掃担当の役員をしていると言い、公園の草むらのあちらこちらに落ちているフンの後始末がなされていないことを嘆いていた。

「日曜の清掃のたびに見つかるんですよ。別に普通のゴミと思えばいいんですけどね」

「わたしは、いつもちゃんと後始末していますよ。ほら」

わたしはポリ袋の入った小さめのバッグを見せた。

「袋を持つだけで、後始末しない人もおられるし、最初っから持ってもいない人も結構多いんです。この公園に落ちているフンの量から言ってもわかると思います」

「確かにねえ」

そんな飼い主が多いのも事実だが、わたしの犬友達にはそんな人に心当たりはなかった。みんなきちんとマナーを守る人たちだ。それにこの町内の住人だという証拠もどこにもない。

「いや、あなたに文句を言っているのではないのです。自治会に意見を言う人がいて、その人たちへのポーズとしてですね、日曜日の清掃に愛犬家の方達にも草むらの掃除をしてもらいたいのですよ」

「そんな！ わたしには関係ないはずですよ」

別に掃除することが嫌なわけではない。もし、ボランティアで参加を要請されるのであれば喜んで参加したであろう。しかし、一部の不心得者の尻ぬぐいをさせられるような行為はごめんだった。自治会は先にそう言ったマナーを守らない飼い主を説得すべきだ、と思ったのだ。

「いやあ、誰がどこでフンをして後始末をしていないかがわかっていれば問題はないんですよ。それこそ、条例違反ですからね。わからないからこそ、不心得者なんです」

「何だか不本意ですね。掃除を手伝うのはやぶさかではないですが、そうした不心得者の一人とみなされて掃除に参加させられたくはありません」

つい、犬のこととなるとムキになってしまう。自治会役員との対立はそんな感じで始まった。わたしは、散歩のたびに出会う犬友達数人に声を掛け、他の愛犬家達に非難の目が向けられないうちに見廻り隊を組織することにした。暗くなりかけの時間帯に散歩をさせる人が呼びかけ合って一緒に散歩して周り、公園で用を足す犬の飼い主を監視しよう

というものだった。いわゆる自警団とも呼べるだろうか。

そうして、袋を持たずに散歩している人、袋を持っていても用を足した後に何もせずに立ち去ろうという人に一言注意し、マナーの向上に努めようと試みたのだった。

自警団の人数はごく少数にすぎなかったものの、効果はあったようだ。

見廻りをはじめて、三週間がたつ頃には、公園の草むらにぽつんと落ちているフンがめっきり減ってきたのだ。やはり、誰かに見られているという意識がマナーの向上につながるに違いないとわたしは仲間の一人に自慢そうに感想を述べた。

結局、公園掃除に犬を飼う人が加わる話は少し延期になるかに思えた。

が、今度はわたしが代表者のように見なされてしまい、自治会の役員は直接やってきた。

「この間の件を、お話ししてから公園が少し綺麗になったようですね」

彼は素直に認めた。

「ええ、モラル向上の証ですよ。やれば出来るものですよ」

「でも、まだ、フンは落ちています」

確かに完全にゼロになったわけではない。でも、言いがかりに感じた。

「もし、落ちていたとしたら町内の人ではないと思いますよ。そんなよその人のことまで愛犬家に押しつけるのはよくないと思います」

「だから、誰がやったとかやらないとか言う議論から一歩踏み出してですね。全員参加ということで落としどころを探りませんか？」

と、何だか政治家のようなことを言い出す始末。元々、犬を飼うのは個人の自由であり、公園の掃除は自治会の決まり事だが、ボランティアの一環である。だから、犬を飼うことと公園の掃除とを強引に結びつけようという彼の意図が理解できない。

要請があってから最初の公園掃除の前の夕暮れ時のことであった。

我々自警団が公園を見張っていると、いつも見慣れた犬、「ゴン」を連れたご婦人が散歩させに来ていた。知っている犬だし、そう注意もせずにいると、急に催したのか、ゴンは草むらでしゃがみ込んで用を足した。あいにく、ご婦人はいつも来るご主人の代わりというのか、袋も持っていなかった。

我々の方を見て、あらあら、やってしまいましたよ、という顔で気まずい笑い顔になった。

「まあ、一回くらいはいいんではないですか。そんなに大型犬でもないし」

「そうそう、どうせすぐに干からびて肥料になってしまいますよ」

自警団の仲間はそう言ってご婦人を慰めた。わたしとて、犬仲間であればそう言うべきかも知れないが、仲間なのは犬だけであり、この女性とは面識がないのだ。見逃すかどうか少しだけ迷い、やはり、仲間の輪が大切と思い、大目に見ることで同意した。

運の悪いことは重なるもので、ことの一部始終を自治会役員の男に見られていた。彼は鬼の首を取ったように騒ぎ立て、わたしの言うことなど当てにならないとうそぶき、愛犬家仲間全員を次の公園掃除に駆り出すことを約束させた。

渋々ながらも、次の公園掃除からわたしの声かけで愛犬仲間が参加することになった。必ずしも町内の犬を飼う人全員ということでもなく、徹底はされていなかったが体裁はあくまでもボランティアだ。

見ると草むらの、特に立木の側にフンがころころと乾燥して落ちているのがわかる。わたしたちはゴミばさみで挟んでつまみ上げポリ袋に放り込んでいった。

「しかし、まあ、何ですな」

一人が、わたしに声を掛けた。

「普段は、犬の顔しか覚えていないから、こうして飼い主通だけで何かで顔を合わせるのもいいものだと思いますよ」

そのご主人はそんなことを言った。

「それもそうですね」

日光が照りつけ皆の額にいい汗が浮かんでいた。たまには犬抜きの犬仲間もいいものかも知れないと思った。了

魔球

魔球

木曜日の昼休みにわたしは職場の上司から、ソフトボール大会の幹事を仰せつかった。と、言ってもそんな大層なものではなく、自分の所属している品質保証課と生産管理課からメンバーを集め、同じく総務課と勤労課から編成されるチームと対戦するだけのことで、もう、何年も前から続く恒例行事となっていた。

わたしは、早速、日程を調整して相手先の主要メンバーのスケジュールを聞いてまわり週末の土曜日に試合時間を設定した。後は、ソフトボールの得意な面々に声を掛けて回るだけである。今年は二十二歳の男性新入社員がいたので彼にも声を掛けてみた。

「ええ、ソフトは得意ですよ」

そう、笑顔で答えた。わたしは彼の名前をメンバー表に書き加えた。

昼休み、わたしは件の青年、村西の実力を計るため、昼食後にキャッチボールに誘った。野球と違い、ソフトボールのピッチャーは下手投げとなる。ボールも一回り大きいし、勝手が違うと困ると思ったのだ。

案に相違して彼は、器用に下手投げをこなし、しかも、いい肩をしていた。手首をひねらせて、びゅっとボールを投げてくる。ボールはわたしのグローブでパシッという乾いた音を響かせた。

「君、いい肩をしているね。ソフトを専門にやっていたの？」

「はい、同好会レベルですけど」

村西は遠慮がちにそう答えた。しかし、わたしの左手のグローブに残る感触は、ただの同好会レベルとは思えなかった。腰の入った、しっかりしたピッチングだ。

「ピッチャーも出来そうだね？」

「いや、……」

彼は少しはにかんだ。自信はありそうだ。

わたしは、かがんだキャッチャースタイルで彼の投球を受けることにした。コントロールがよければ本気で当日のピッチャーを任せる気に、すでになっていた。

彼は大きく振りかぶって、本格的なウィンドミル投法で大きく腕を回し、手首をひねるやいなや勢いのあるボールを投げ、わたしの構えるグローブにバシッと決めた。打者の手元でぐいっと伸びる本格的な球種だった。何球か投げさせてみたらコントロールも非常に安定していて即戦力として期待できるものであった。

球の冴えとは裏腹に彼の表情には、冴えがなかった。

「おいおい、抜群のコントロールだが、何か不安要素でもあるのかい？」

わたしは新入社員のことを気遣って尋ねた。あまり出しゃばりすぎて不興を買うことを恐れているのなら、こちらが防波堤になってあげなければならないのだ。

「別に何でもないです」

彼は肩をぐるぐる回して答えた。

見た感じでは特に違和感もなかったし、本人が言い出せないのは何か個人的な理由でもあるのに違いない。

現にこれだけの実力があり、社内のソフトボール大会ごときで困るようなことは考えられない。わたしは、ふと、日程のことが頭に浮かんだ。もしかしたら、貴重な週末の土曜日を会社の親睦行事でつぶされるのに抵抗があるのかも知れなかった。しかし、これぱっかりは昔からの慣例であり、こういうときには喜んで参加するものに決まっている。

「あ！」

わたしは彼の表情から気づくものがあった。

「もしかして、デートの約束でもあるのか？」

そう聞いてみたら図星だったようだ。

わたしは、年の功でもって、彼から事情を聞き出した。

そうすると、相手の女性とは今年知り合ったばかりなのだそうだ。

「彼女は学生で、居酒屋でアルバイトをしているので、お互いの都合のつく時間が週末の昼間しかないんです」

「あ、そう。それは気の毒だねえ」

せっかくのデートの時間である土曜日の昼間を会社行事に費やすのは確かにかわいそうであった。だからといって、平日に試合時間を持ってくることも出来ないし、ナイトゲームにするわけにも行かない。グラウンドは会社の横の広っぱなのだから。

「それでは、俺が魔球を投げさせてやる」

「ま、魔球ですか？」

「相手バッターの苦手なコースは、俺が全部知っている。うまくリードしてやるから、その通りに投げろ。そうすれば五回コールドゲームで十時には終わるかも知れない」

「はい！」

彼は目を輝かせた。

土曜日の九時、プレイボールが宣告された。試合開始である。

わたしは、一番バッターの苦手なコースである、脇の下に食い込むストレートを要求するサインを出した。もっとも、コントロールが悪ければこんなサインを出しても無駄である。彼のセンスの良さに賭けるのみであった。

第一球、要求通りわたしのミットにバシッと速球が決まり、バッターは空振りをした。

「くそっ、ボールだったな」

バッターは文句を言っていた。

「何いってんだよ。ストライクゾーンだよ」

と、わたしは聞こえよがしにつぶやいた。次に投げる球への伏線である。インコースにストライクを取られれば、外角コースへの見極めが甘くなりがちである。

第二球、外角に伸ばしたミットにストレートがバシッと決まった。今度は見逃しのストライクだった。まさにこちらの思うつぼである。

第三球は低めワンバウンドに来た緩めのボールを思いっきり空振りして、三振に切って落とした。一人目は絵に描いたような打ち取り方であった。ワン・アウト。

二人目の打者には、村西も慣れて来たようでうまくツーストライクを取ったのだが、色気を出して三球目もストライクを取りに行こうとして打たれてしまった。カツンという金属音を残して打球は内野手の前に転がった。

ショートの主任がうまく捕球して一塁に送球してツーアウトになった。

「ピッチャー。無理するなよ。打たせていけ」

主任はそう言った。が、そうはいかない。

三人目の打者。気合いを入れ直し、内角ストライクから攻めていった。相変わらず、スピードと切れがあり打者は空振りする。わたしは、一球外すサインを出した。あまりにストライク先行しすぎていて相手の目が慣れてしまうと心配したのだ。しかし、ここまでの好投振りに彼はストライクを要求した。

――まあ、いいか。

と、わたしは外角低めストレートのサインを出し、彼は綺麗なフォームで速球を投げた。

カツンと金属バットの先端がボールを引っかけ、一塁線上にボールを転がした。打者は一塁めがけて懸命に走り出した。

「あ」

一塁手が転がりながら痛烈なゴロを拾い上げ、カバーのために一塁に走り込んだ村西にボールをトスして手渡した。

危なかったが、スリーアウト、チェンジだ。

魔球で楽勝のつもりでいたのだが、結構難航した。原因は十年以上この試合に関わっていると自負してきたつもりが、相手にも有力な新入社員や転入者がいることを失念していたことだった。こちらの村西以上に強力な戦力となっている。

味方の攻撃は結構当たりがあり、先頭打者がヒットで出塁し、二人目は三振したもののその後の連続ヒットで五点が入った。

二回表の守備。

最初からひどかった。打者にこちらの投球術が読まれてしまったのか、ボール球を空振りすることはなくなり、村西の投球数が増えて来つつあった。

走者を抱え込んで、三人目の打者を迎えた。

わたしは、もはや弱気になり、ボール球を要求するサインを出した。

――そんなことしていたら、試合が終わりませんよ。と、彼が目で合図した。

――それもそうだな。

わたしが外角球を要求すると彼はうなずき、振りかぶって、ぶんと投げてきた。しかし、コースが甘くなり真ん中に入ったように思えた。打者はすかさず強打し、球は高々と外野の頭を越えた。金属バットは当たると飛ぶのである。

走者二人が戻り二点取り返された。

この後も、打たれ続け、結局五点取られてゲームは振り出しに戻ってしまった。時刻は午前十時、目標のコールドゲームは夢のまた夢になりつつあった。

試合は相変わらず、味方打線の活躍でポカスカ点が入り、また、ポカスカ打たれて点を取られる展開が続き、七回まで戦い十八対十七で辛くも勝つことが出来た。課長は嬉しそうな顔でビールを飲みながら手を振って敢闘をたたえてくれていた。

「おい、村西。今日はすまなかったな」

「いえ」

完投の疲れと、デートがフイになった空虚感で少し元気がないように見える。少なくとも勝ち投手の態度ではない。わたしは、ベンチに戻り缶ビールをもらってきて彼に渡した。

「ありがとうございます」

「どうだ、もう、昼過ぎだし、みんなと一緒に祝賀会に出るか？」

近くの焼き肉屋で祝賀会の予約を入れてあった。もちろん、負けた場合は反省会と名前を変えるだけであったのだが。

「あ！」

彼が急に声を上げた。

「どうした？」

応援席に誰か来ているようだった。社員の家族ばっかりだから誰か知り合いでもいるのかと思った。その中から二十歳くらいの女性が帽子を押さえながら近づいてきた。

小柄で感じのよい娘さんだ。

「あれ、来てくれてたの？」

と、彼は彼女に聞いていた。今日のソフトボール大会のことは伝えていなかったらしい。まあ、職場の親睦行事だから当然といえば当然なのかも知れなかった。

「うん。最初から見てたよ。格好良かったじゃない！」

女性は嬉しそうに村西の腕にしがみついた。

「いや、最初から打たれっぱなしだったし、かっこうわるいところを見られちゃったな」

彼は恥ずかしそうに、そうつぶやき、指先で鼻の下をこすった。

わたしは、彼の肩を叩いた。

「おい、君は祝賀会に出なくてもいいから。ゆっくりしなさい」

「え？ でも」

「いいから」

わたしは、二人だけにしておいて、祝賀会に行く皆の集団に戻っていった。了

紺屋の白袴

紺屋の白袴

神様は乗り越えられない試練は与えない。

という言葉はあるものの、日常生活ではときとして突拍子もないタイミングで試練が訪れるものである。

それは突然やって来た。課長から、「君、これを担当してくれ」と命じられたのだ。

わたしは当時、不動産管理サービスの会社に勤めており、その中で清掃部門のハウスクリーニングを担当しており、受注活動として従来から新聞の折り込み広告やポスティング（直接家々のポストに投函する）を広告手段として行ってきていた。

しかし、この方法は会社の知名度が高いとは言えない条件では、効率的とは言えず、広告費がかなり大きなコストとなる。そこで、インターネット上での広告、つまり、ホームページを作って集客に応用できないかというのが、課長からわたしに下された命であった。

なぜ、わたしに白羽の矢が立ったのかは定かではない。そのときの職場においてパソコンは得意な方であったが、ホームページの作成に必要なＨＴＭＬタグや、ＣＧＩなどの知識などなく、自分でやるには何か他社のホームページを参考にしながら調べていかなければならなかったくらいだ。そこからわたしの奮闘が始まった。

「市販のホームページ作成ソフトを使って作ろうと思うのですが？」

わたしは一応、課長に断りを入れておいた。

「君の判断に任せるよ。ただし、出来たら一度見せてくれ」

「もちろんです」

ただ、今回の命令は単にホームページを作れという単純な意味ではなく、言葉の裏には、集客率を上げろという冷徹で明確な意図があるのをうすうす感じてはいた。

早速電気店のパソコン売り場に行き、一番売れているというホームページ作成ソフトを買い求め、自分の会社のパソコンにインストールした。使い方は、取扱説明書と首っ引きで一週間がかりで習得し、ようやく表紙ページに社名だけ入れるところまでこぎ着けた。

課長は作業している私の後ろからのぞき込み、「ふうん、中々、早いじゃないか。期待しているよ」と声を掛けてくれた。

しかし、そこからが一苦労だった。字の大きさは簡単に設定できたが、他社のホームページのように文字を右に寄せたり、左に寄せたり、あるいは両側に配置したりがうまく出来ない。

「そういう場合は、『表』の機能を使ってください」

電話に出たソフトウェア会社のサポート担当者はアドバイスしてくれた。『表』を作ってその中に文字や図を配置して、『表』の線幅をゼロに設定する。そうすれば、ページの中に自在に配置出来るということらしかった。

これで何とか、自社の概要と、サービス内容を記載したホームページを作成することが出来た。自分では立派なページのつもりだった。

が、これを見た課長の顔には少しばかり失望の色が浮かんでいた。期待していた息子の学校の成績表を見て愕然とした様な場面を想像してもらえればわかると思う。

「何となく素人っぽいな。大丈夫か？」

「そうでしょうか？ 他社のホームページも似たようなレベルだと思いますが」

「ううん、そうだねえ」

すっきりしないまま、このままデータをインターネット上にアップした。これで世界中のパソコンから閲覧することが可能となった。わたしは、閲覧数を示すアクセスカウンターの（件数を示す）数字が増えるのを期待し、わくわくする思いで帰宅した。

約一ヶ月が経過し、わたしは課長に咎められた。

「ホームページはどんな具合だい？」

「ええ、アクセス数は千回ほどでまずまずです」

それが多いのか少ないのか、わたしにもよくわからなかった。

「それは結構なことだが、閲覧の数自体には何の意味もないんだよ。要は何か問い合わせがあったか、ひいては受注に結びつく何かがあったかが問題なんだよ」

「それを言われると、……」

確かに問い合わせのメール書式を載せていたが、今のところ何の反響もなかった。

やはり、素人っぽいホームページだと怪しげな会社に思われてしまうのだろうか。それに、会社の知名度がそれほど高くないのも一因だろう。このままでは、むしろ、新聞の折り込み広告の方が効果は高いといえる。

「話は変わるんだが、知り合いにＷＥＢデザイナーがいるんで、ホームページのデザインを依頼してみたらどうだろうか？」

「プロに頼むんですか？」

――最初からそうすればよかったのに。と、わたしは心の中で文句を言った。

「とりあえず見積もりを取って、費用対効果を考えに入れて検討してみてくれ」

「わかりました」

わたしは早速、課長に聞いた電話番号に架けてみた。三宮にある小さなデザインオフィスだった。社長がメインになって作業し、数人のスタッフを使っている。ホームページの話をするとすぐに打ち合わせに来てくれた。

「ホームページのデザインで大切なのは、何が言いたいのかをはっきりさせること、ですよ」

社長はそう言った。

ＨＴＭＬタグやＣＧＩといった技術も必要であるが、ホームページのセンスに求められるのは、何が一番言いたいのか、そして、それが一番大きく示されているかだという。そう力説され、わたしはただ「はあ、はあ」とうなずくばかりだった。確かに素人っぽい以前に、自分の作はただ漫然と文字を羅列するだけで、強調すべき文言がなかったように思えた。

「全部で十ページの構成ですね？」と社長。

「ええ」

「デザインはわたくしどもでまるっきり変えてしまってもよろしいですね？」

「お任せします」

内容はわたしの作ったホームページの文章だが、構成、デザインはごっそり変える必要があるという。向こうはデザインの専門家なのでわたしはすべて任せることにした。

次の日、ＦＡＸで見積書が届いた。

決して安い値段ではないが、折り込み広告と比較すればそれほど高いとも言えない微妙な金額だった。

「高いなあ。おい」

課長はため息をついた。

「折り込み広告二回分弱です。どうしましょうか？」

「費用対効果なんだよな。これで集客できるならいいんだがな」

「そうですねえ。やってみましょうよ」

それから、担当デザイナーとの打ち合わせが始まった。

「ハウスクリーニングの作業をしている写真などはありますか？」

そんなリクエストもあった。なければ、スタジオで撮影しなければならず、これまた費用がかかる。これには、実際の当社の作業写真を使ってもらいページに貼り付けてもらった。

作業は着々と進行した。さすがにプロのデザイナーの手に掛かると、素人っぽかったホームページが本格的なもの、つまり、いかすサイトに早変わりしていった。

「やっぱり、違うなあ」

課長からの賞賛の言葉を得て、データをインターネット上にアップロードした。再び世界中のパソコンから閲覧可能になったのだ。

それからの一ヶ月、今度は客からの問い合わせなどもちらほらではあるが、来るようになり、少しずつではあるが効果が出ているのが実感として得られた。

そして、ある日ついにハウスクリーニングの依頼がやってきた。ホームページを見たお客さんからの注文であった。

「やったなあ！ 作った甲斐があるというものだ。よくやった」

「ありがとうございます」

課長も褒めてくれたし、わたしも嬉しかった。

早速、デザインオフィスの社長にも伝えた。先方も一緒に喜んでくれた。

それから、週を追うごとにアクセスは増え続け、それに比例するように問い合わせも注文も徐々にではあるが増えていった。

「ほう、やるじゃないか」

と、課長はほめてくれた。

「やはり、餅は餅屋ですねえ。素人のデザインではこうは行きませんよ」

わたしはふと先方のデザインオフィスのことが気になった。あちらも自前のホームページを持っているのだ。わたしは名刺にあったアドレスをパソコンに入力し、見てみた。

「おや？」

ホームページの制作を受注しているはずの会社にしては恐ろしく簡素なデザインで、しかも、未完成状態だった。――おそらく受注をこなすのに手一杯で、自社のホームページにまで手が回らないのだろうと解釈した。

わたしの見ている画面を課長が後ろから見ていた。

「紺屋の白袴だな」

「ええ」

わたしはうなずいた。了

作家のタマゴ

作家のタマゴ

「ああ、もうやめたっ！」

わたしは、書きかけの原稿用紙をくしゃくしゃに丸め、二メートル先のゴミ箱に向かって投げ捨てた。それだけでは気は修まらない。手元にあった鉛筆をへし折り、これも、ゴミ箱に向かってたたきつけた。

こうも気が立っているのは、これも手元にある季刊文芸誌「メフィストフェレス」のせいだった。こいつも一緒にゴミ箱に向かって投げつけたが、的は外れてふすまに当たり、大きな音がした。どすん！

五年ほど前から、春夏秋冬と各季ごとに小説原稿を応募しているのだが、一向に入選にならない。悪いのは誰でもない、自分の筆力のなさ、発想の貧困さがすべての元凶なのだ。どうにもならないことに腹を立て、どうにかしようとあがいている。

しかし、考えてみれば五年にわたって、年に四回も応募しているのだから、合計二十作だった。入選レベルの作品は、講評のページで取り上げられるのだが、選外の作品は巻末に題名と一行コメントだけが掲載される。

最初のうちは、読んでコメントがもらえるということだけが嬉しかったのだが、人間誰しも欲が出てくるものである。段々と入選が欲しくなってきて、創作にも力が入る。力が入った作品には愛着が芽生えて、けなされると腹が立つようになる。そうして、今回、今までで最も力と愛情を注いだ作品を投稿したのだが、例によって巻末の一行コメントで「駄作です」と酷評されてしまったのだ。

いや、これでは酷評とは言えまい。こんなくらいのコメントなら本文を読まなくたって書こうと思えば書けると思う。でも、まともな神経ではあるまい。これで「メフィストフェレス」誌も一読者を失うのかも知れないのだから。

わたしはここ数年、作家になるべくアルバイト生活をしながら、この雑誌以外にも小説を投稿しながら出版社からのお声が掛かるのを待つということをしていたが、とうとう今回でその根気も何もかも尽き果ててしまった。

少なくとも自分ではそう感じた。

しかし、小説家になるのを諦めたら、つなぎでしかないアルバイトを続けてお茶を濁す生活から卒業する必要に駆られてきた。とはいえ、社会人として数年のブランクがある今、そうそう再就職先に当てがあるわけでもないし、しばらく、インターネットの職業紹介サイトに自分の（恥ずかしい）履歴書を掲載して企業からのお声が掛かるのを待つことにした。

ハローワークにでも行ってみようかと思っていた矢先、清掃会社を経営している弟から、仕事を手伝ってもらえないかという声がかかった。とはいえ、清掃業界のことなど何も知らず、機械の使い方も知らないわたしに出来ることなど、あまりない。

ワープロを使った文書作成やホームページの管理など出来そうなことから、取り敢えずやってみることにした。事務仕事なら得意であるし、文章を書くのは本業に近いと言える。また、空いた時間は小説を書くのに使ってもいいという好条件だった。

いつまでも、こうしたモラトリアムな人生を送っていいとは思っていなかったが、新たな局面にさしかからない限り、自分から動いてどうこうなるわけではない。

三ヶ月ほど経過し、わたしは完全に事務員と化していた。

事務所の掃除をし、コーヒーが切れていたら買いに行き、ＯＡ機器のメンテナンスをしたり、電話番をする。合間に小説を書いていいことになっていたが、あまりの現実生活のリズム感に小説のリズムがついて行かず、書けなくなっていた。

こうして段々と、小説を書く日常から、会社員らしきものへと生活が変化していった。

そんなある日、ハウスクリーニングの業務指示書のファックスを整理していると、見覚えのある顧客名が目についた。「大川洋一」というベストセラー作家の名前とまるきり同じ名前なのだ。

――確か、芦屋に住んでいると聞いたことがある。

この顧客の住所も芦屋市内であった。もしや、と思い、スタッフに聞いてみたが、初めて行くところでどんな人か知らないし、まして、個人情報保護の厳しいこのご時世で、顧客名簿からとやかく追求するようなまねは出来ないという。

それもそうであった。

「あの、邪魔でなかったら一緒に連れて行ってもらえませんか？」

わたしは思わず口にした。いろんな文芸誌の巻頭カラーページに顔を出しているので顔は何となく知っていたし、飼っている犬の名前や近くの図書館のことなど、エッセイで読んだこともあった。本人なら、……

「駄目！」

と、言うスタッフにくっついてわたしは作業服を着てクルマに乗り込んだ。

クルマの止まった所は住宅地の中でも一際大きな邸宅の前であった。がっしりした門に頑丈そうな扉が行く手を阻む。スタッフは気楽そうにインターホンを押し、用件を告げると、すぐに中に通してくれた。

われわれは、一階台所のキッチンとレンジフードのクリーニングをするのが役目である。当の作家先生は、じゃあよろしくと言い、さっさと二階の執筆部屋にこもってしまわれた。

――何とか話してみたいなあ。

わたしはそんな思いが頭をもたげつつ、レンジフードを解体しているスタッフを横目に見ながら、キッチンのシンクをスポンジで磨いていた。

そのときである。とんとんとんと、階段を下りる足跡がして、先生がコーヒーを飲みに台所に入ってきた。自分でコーヒーメーカーのケトルからカップに注いでフレッシュを入れ、スプーンでかき混ぜた。そして、そのまままた二階に上がろうとしたとき、わたしは、好奇心に駆られたまま、上気した顔になっていただろう、そのままの状態で先生に声をかけてしまった。

「あの、大川先生でいらっしゃいますよね」

先生は返事をしなかった。清掃スタッフからそんなことを言われて、何を言っているのか意味が瞬時に取れなかったようだ。わたしは慌てて言葉を継ぎ足した。

「わたし、……先生の作品のファンなんです。デビュー作から全部読んでいます」

うそではなかった。自分自身小説家もどきの生活をしていたときに、大川作品に大いに触発され、似たような作風の作品を生産していた時期があったのも事実だ。

「そう、……それはありがとう」

話はそこで途切れそうになった。

「じ、実はわたしも小説を書いているんです」

「そう」

あまり興味がないという風に、スプーンでカップをかき混ぜながら、返事をした。

「わたしの作品を読んでもらえないでしょうか？」

「はあ？」

いけない、これ以上喋ると相手を怒らせてしまう。普段は鈍いわたしの第六感はそう告げていた。

「君の作品なら出版社に送りたまえ。何なら紹介してあげるよ」

先生は面倒くさげにそう言って、二階に上がってしまった。確かに、出版社に送るべきなのだが、一素人の小説原稿などいちいち相手にしてもらえないのだ。だから、ベストセラー作家として名の通っている先生に読んでもらいたかったのだが、読みが甘かった。

そして、作業完了後、一緒に行ったスタッフにわたしは叱られた。

嫌なことは忘れるに限る。

わたしは次の日から、また、事務所での仕事に没頭するようになった。会社のホームページも心機一転綺麗なものに作り直したり、チラシのデザインを考えたり、出来ることを一生懸命やっていた。

大川先生邸のハウスクリーニングが終わってから一ヶ月経った頃、事務所にわたし宛の電話があった。文芸誌を出している桜田出版の編集長からだった。

「大川先生の紹介だから断れなくて電話したんですが、原稿はお持ちですか？」

「はい、もちろんです」

どうやら、大川先生の紹介してあげるという言葉はリップサービスに終わらず、本当に編集長に口をきいてくれた様だった。よほどのことがないと、断れないくらいの力関係があるみたいだった。

わたしは、電話で短くやりとりし、自信のあった作品を一つ選んで、先方の指定するフォーマットで原稿を印刷して、書留速達で桜田出版に送付した。

しばらくして、担当の編集者から連絡があり、短編小説を次号に単発で載せてもよいという返事をいただいた。わたしは飛び上がるほどの喜びをぐっと押さえ込み、電話口でにやりと微笑むにとどめた。何せまだ、わたしは清掃会社の事務員なのだから。

掲載された短編小説は、割と読者受けがよかったようで、その次の号にも載せることが

決定され、徐々にではあるが、文筆業のわたしの生活に占める割合が増えつつあった。目標は単行本の出版であるが、担当編集者に言わせれば、まだまだ先という。

でも、書ければいい。そんな書き始めた頃の純粋な気持ちがまた取り戻せた気がする。こんな生活が永遠に続けばいいのにと望む今日この頃である。了

２０２X年

２０１X年

今年五月に何年か前と同様に、季節外れのインフルエンザが流行し、街ゆく人々が全員立体マスクを着用しているという異様な風景を目にしたことは記憶に新しい。普通、インフルエンザは、冬の病気であり、しかも、今回は豚から人へ感染した起源を持ち、強力な伝染力を持つ厄介な疫病でもあった。当初は弱毒性で重症化しにくいという見解もあったものの、世界的流行で多数の死者を出している。事態の進行に予断を許さない状況に代わりはなかった。

当時、わたしはインフルエンザワクチンを製造している製薬会社に、原料となる発育鶏卵（受精してから孵化するまでの卵）を納入している東西物産という商社に勤めていた。

夏に一旦収まるであろう新型インフルエンザが秋以降に再び勢力を盛り返すという予測の下、新型インフルエンザ用ワクチンを大量に製造するために、契約養鶏農家から卵を調達するのがわたしの仕事だった。

インフルエンザウィルスは生きた細胞の中でしか増殖しない。そこで発育鶏卵の細胞の中に植え付けて培養し、これを精製したものを薬品で不活化（無害化）処理してワクチンとし、人体に注射することでインフルエンザウィルスに対する免疫を作り出す。欠点としては卵アレルギーのある人には使えないことだ。

海外では犬の細胞を使って培養する方式もあるそう（これだと卵アレルギーには影響されない）だが、日本ではもっぱら鶏卵によっている。

問題はこのワクチンの製造に約六ヶ月も要することだ。

通常、季節性インフルエンザの流行は十二月から一月に集中するので、これに合わせて鶏卵の調達も六月頃からとなる。

今回はこの季節性インフルエンザ用の鶏卵を新型インフルエンザ用に振り向けたことで、季節性インフルエンザ用の鶏卵が足りなくなるおそれが生じていた。

六月末になり、わたしは会社の方針に基づき、鶏卵を契約養鶏場から調達し、製薬会社に納入した。調達作業中は書類の山に囲まれて忙しく働いていたが、納入がすめば一段落で穏やかな日々を送っていた。

そんな、とある昼休み、わたしはのんきに食堂でお昼を食べていた。A定食で鶏の唐揚げに味噌汁がついていた。

「ワクチンが出来るのって、秋以降じゃない？ 出来るまではどうしたらいいんだろうね？」

食堂でわたしは隣にいた同僚に話しかけられた。

「そうだねえ、抗インフルエンザ薬を処方してもらうしかないんじゃないか？ でも、新型インフルエンザにかかっているのは若い人ばかりみたいだよ」

「じゃあ、われわれは大丈夫か。あはは」

そんなのんきなことを言って笑っていた。確かに、新聞を見る限り中年男性の重症患者は少ないようだった。

そんな中、のんきに味噌汁を飲んでいると急遽、携帯電話で課長からの呼び出しが掛かった。よほどの重要案件らしい。

わたしは慌てて電話を切って、飲みかけの味噌汁とともにトレイをカウンターへ返して小走りに職場に戻った。

「何か緊急事態でしょうか？」

課長の机の上には走り書きしたメモが乱雑に置かれていた。几帳面な人なので、この乱雑さがただならぬ事態を物語っていた。

「中国地方の養鶏場で鳥インフルエンザが発生したらしい。詳しい情報は入っていないんだが、今後の情報に注意してくれ」

「うちの契約養鶏場がその中に入っていたのですか？」

「それもわからない。これから調べてくれないか」

「わかりました」

確かに、ただならぬ事態だった。鳥インフルエンザは強毒性の疫病で、感染力もきわめて強い。半径十キロ圏内の養鶏場はアウトだろう。わたしは自社の契約養鶏場がその中に入っていないことを望むばかりだった。

わたしは岡山県の山間部にあるいくつかの養鶏場に電話し、社長と直接話して無事を確かめた。だが、まだ、油断は出来ない。

何年前だったか忘れたが、高速道路が無料になってから物流のスピードが速まり、養鶏場の近くの道路を通ったトラックなどのタイヤに着いた鶏の糞で、またたくまに日本全国に広まってしまったことがあったのだ。抜本的な対策を何か講じなければ、ワクチン製造が止まってしまうのも時間の問題だったのだ。

一週間もすると、鳥インフルエンザの発生した鶏舎では鶏の処分がはじまり、ここを中心として半径十キロ圏内に出入りする車両の消毒も徹底されるようになった。しかし、カラスなど、空から鶏舎を出入りするものは隔離しようがない。当社の契約養鶏場も危なくなってきた。

そんな折、わたしは課長に呼ばれて、発育鶏卵の卸先である製薬会社について行った。

先方は資材課長さんが出てきた。

「鶏卵の調達具合の件なのですが、支障はありませんか？」と心配そうな顔で尋ねられた。

「今のところ、うちと契約している養鶏場に支障はありません。ですが、……」

「実は厚生労働省から内々に指示を受けていて、鳥インフルエンザ用のワクチンの増産も同時に出来ないかということを検討しなければならなくなったのですよ」

「鶏の？」

「ええ、卵を産んでくれる鶏を守らなければ、卵を使うワクチンの製造も止まってしまう。そう考えて、ワクチン製造ラインの一部を鶏用に回す可能性もあるということです」

思ってもみない提案だった。かわいい鶏たちを守るためにはそれしかない。しかし、そんなことをすれば、九月・十月以降に再度流行がおそれられている新型インフルエンザ用のワクチンの製造に支障が出てしまう。ただでさえ、日本の人口分（一億二千万人分）にはほど遠い六千万人分の量しか調達できないのだ。まさに、ニワトリが先かタマゴが先かという議論になりそうだった。

結局、会社の経営陣と製薬会社が話し合いを持ち、鳥インフルエンザ用のワクチンの製造には鶏卵をまわさない。つまり、人間用を優先するという方針が固まり覚え書きがかわされた。

そして、例年に比べて涼しい夏が過ぎ九月も末になる頃、予想通り新型インフルエンザの蔓延が小中学校を中心に広がりを見せ始め、その頃になると、インフルエンザワクチンの先行製造版が供給できるようになっていた。

「やれやれだね」

課長はそう言って、わたし達の作業チームをねぎらった。

しかし、安心は一時の間に過ぎなかった。カレンダーが十月を示す頃になり、突然、おもわぬニュースが舞い込んできた。

「鳥インフルエンザが、また発生したらしい。今度は関東だ」

わたしは情報収集を命じられた。

インターネットと契約養鶏場からの情報を総合すると埼玉の方らしかった。鶏から鶏へ感染するので鶏舎を隔離出来れば被害は最小限に抑えられる。が、まもなくして東京で人間の患者が鳥インフルエンザに感染したというニュースが入ってきた。

インフルエンザウィルスは突然変異を起こしやすく、鳥や動物の病気でも人間に感染する可能性はあった。ワクチンの開発には時間がかかるだろう。

またしても、製薬会社の資材課長から呼び出しが掛かった。

発育鶏卵の注文の大幅な追加だった。

「社の方針が変わりました。致死性の高い鳥インフルエンザ用ワクチンを大量に確保しなければなりません。ご協力をお願いします」

彼は最初から低姿勢になっていた。よほど、事態が切迫しているのは新聞の記事を読んだだけでも十分に推測が出来た。しかし、である。

「申し訳ありません。健康な鶏は今や貴重品になりつつあります。一旦鳥インフルエンザが発生すると、鶏舎の鶏をすべて処分しなければならないのです」

ことここに至ってニワトリが先かタマゴが先かの議論を蒸し返すことになってしまった。

「先ほどの議論を蒸し返すことは致しません。鶏のことより、人間の安全を守るのが製薬会社の仕事です。何とかお願いします」

わたしはそう、拝み倒されてしまった。

そうは、言われたものの発育鶏卵というのは雄鳥と雌鳥を交尾させて得られる受精卵を

使ったもので、普通の養鶏場の無精卵とは訳が違う。健康な鶏でなければ役に立たないのだ。こうも、鳥インフルエンザが鶏と人間の間に蔓延してしまってはもはや打つ手はなかった。

わたしは、仕方なく、努力はしてみますと、うなずいたものの、答えは最初からわかっていた。健康の砦を鶏の卵に依存している以上、鶏を最初に守らなければならなかったのだ。了

愛・ラブ・ガン

愛・ラブ・ガン

僕は、欲求不満の趣味多き十八歳の浪人生だった。

ある日、インターネット仲間から好きだったアイドルのＰＶ（プロモーションビデオ、――本編を売り出すための広告用ビデオソフト）を手に入れた。以前から僕らはアイドルの平田綾花《あやか》のファンだった。

ＤＶＤプレイヤーに掛けてソフトを再生すると、軽やかなメロディーとともに彼女の歌声が、ヘッドホン越しに聞こえてきて、僕は上機嫌になって、いつのまにか音楽に合わせて手のひらで膝をラップしていた。

彼女はポップな服装で、腰にガンベルトを着け、歌の途中の間奏の部分で、腰を振りながら拳銃を抜き、両手で構えて、画面に向かって「どきゅん！」と口ずさみながらダンスする。彼女に魅せられている僕には刺激が強すぎる。本当に心臓に弾丸が突き刺さったようだった。

僕は早速、インターネットの掲示板「５ちゃんねる」に平田綾花ＰＶの感想を書き込んだ。

「平田綾花サイコー！」

だが、ネット上の住民はそう思っている人ばかりでもないらしい。平田綾花が嫌いな人も結構多いのだ。ここでは平田ファンに対してアンチ平田と呼んでおく。

このＰＶ作品が「いい！」という意見が八割方を占める中、アンチの意見は「平凡」だとか「歌が下手」とか「ワンパターンな発声」だとか書き込んできたが、ものの数ではない。おおむね彼女に好意的な書き込みが優勢だった。

しかし、この流れも、「平田はＰＶで実銃を使った。これって銃刀法違反じゃね？」

などという書き込みが加わったとき、掲示板の反応は一気にすさまじくなり、アンチは尻馬に乗って平田を罵り、平田ファンはこれに対する反論をどうにか探して、そんなことはないと打ち消しに翻弄された。本当にそんなことがあるのか？ 確かに彼女の拳銃のシーンはリアルだったのだが。

――おいおい。

僕はにわかには信じられなかった。彼女のイメージはあくまでも、純真・ピュアなものであり、実銃、拳銃、ガン、ピストルという単語とは確かに無縁であった。それなのに、今回の作品で敢えて拳銃を使った意図がはかりかねた。まあ、「愛・ラブ・ガン」という曲のイメージで使ったにしては軽々しいが、それほど、深く考えていなかったのかも知れない。

だが、実際に、本物の銃を撮影に使ったとしたら大問題になる。昨今は何でもありの芸能界ではあるが、彼女に限ってそんな黒い噂とは無縁でいてもらいたい。

そう願うのは僕だけではなかった。同じく浪人しながら、アイドルの追っかけをしている吉田君もその一人だ。彼は、高価なビデオ機材を持っていて、自分で映像作品の編集が出来るくらいだ。今回は彼に見解を求める気になった。

「そうだねえ。調べてみようか」

彼はそう言い、僕が提供したＰＶの入ったＤＶＤをプレイヤーにセットし、再生した。彼のプレイヤーは必要な箇所で、コマ送り再生が出来るようになっている。

このＰＶは全部で五分三十秒の作品で、問題の拳銃の部分は四分四十秒の地点になっているとされている。

「この部分がそうだね」

彼は画面で拳銃を振り向けながらダンスを踊っている平田綾花を指さした。

「止めるよ」

カチリと、リモコンのスイッチを押し、ダイヤルを回して振り向ける前の状態に巻き戻した。

「でも、誰が本物の拳銃だと言ったんだい？」

「さあ、……でも、ネットの掲示板のカキコミなんだ。５ちゃんねるって知っているだろう？」

「ああ、……だが、彼女の所属している事務所は大手のプロダクションだよ。そんなスキャンダルになるようなことさせるわけがないじゃないか」

「だから、彼女の無実を証明したいんだよ。一ファンとして」

「わかったよ」

もう一度、一コマ一コマ再生し、まずは拳銃の種類を特定しようと彼女の手元を拡大してもらった。そして、その形状からスイス製の自動拳銃ＳＩＧ・ＳＡＵＥＲ・Ｐ２２０《シグ・ザウアー》だとわかった。アメリカでもコルト・ガバメントと並んで人気のある拳銃の一つだった。アイドルオタク以上に武器マニアでもある吉田君にはすぐにわかるようだった。

「問題は、これがモデルガンか本物の拳銃かということだよ」

「そうだ」

「もう少し画像を振ってみよう。こちらに銃口が向いている絵が欲しいね」

ダイヤルを行ったり戻したりしていると、丁度、銃口がこちらに向いている絵があった。実際にはその直後に彼女のダンスに切り替わってしまうので、見た目には気がつかないだろう。

拳銃を正面からのぞくと、左回り、もしくは右回りの螺旋状の溝《ライフリング》が切ってあるのがわかる。

この拳銃の場合六条の溝が右回りに切ってあるのがかすかに画像からは読み取れた。確かに本物の拳銃のようである。また、おもちゃのエアガンの場合内径六ミリの真鍮のパイプが入っているのでそれはそれですぐにわかる。画面からは、この拳銃と同じ九ミリ口径であることがわかった。

「おいおい、これは本物かも知れんぜ」

「あ、.....ああ」

僕は、うろたえた。アンチたちが指摘していた実銃説を決定的に裏付ける証拠がこのビデオ映像の中に隠されていたのだ。

「このことは黙っていよう」

二人の間には暗黙のうちに、彼女を擁護する雰囲気が醸成されつつあった。僕はその日以来、掲示板には彼女のことは賞賛もせず、否定もせずと言う立場を貫き通した。

しばらくして、情勢は一変した。

吉田君と同じような技術を持つ人がアンチの中にもいて、正確に四分四十秒のスキャンダルを大々的にかき立てたのだ。

――彼女は実銃を東京のスタジオで使い、撮影を行った。銃刀法違反であり取り締まるべきである、と。

僕たち、平田ファンはあわてた。彼女にそんなスキャンダルは似合わないし、何より、この事件が元で、彼女の姿が公の場から消えてしまうことを恐れたのだ。

アンチ達の攻撃は続いた。細かくコマを分析し、拳銃の種類や弾丸の種類。そして、本

編には本当に発砲するシーンが入っているぞとまで、いう噂が流れた。僕は頭を抱え込んだ。

最初の騒ぎとなったＰＶの配布から一ヶ月後、騒ぎの元となったＤＶＤ本編が発売の日となった。僕たちファンだけでなく、アンチの人たちも手に入れようとＣＤショップの前に並んだ。僕は当日の朝からだったが、列はずっと遠くまで続いていて、聞くところによると前の晩から並んでいる人もいたようだった。

ようやく買えたのは昼過ぎになってからだった。初回限定版特典付きで、ポスターももらうことが出来、僕と吉田君は喜んで家に帰った。

問題の拳銃のシーンだが、やはり、本編にも入っていた。

こちらはハイビジョン映像で、よりくっきりと銃身内径の溝が読み取ることが出来たのだ。

「本当に彼女は実銃を使ったんだろうか？」

僕は救いを吉田に求めた。

「もうはっきりしているさ。間違いないよ」

愕然とする思いで、何度も彼女の歌声を聞いていた。

なぜ、彼女はそんなスキャンダラスなことをしたのだろうか？ 答えは、初回限定版についていたメイキング映像の中に入っていた。彼女がどこかの射撃場で、嬉しそうに射撃練習をする映像が撮られてた。スライドを引っ張り、弾丸を装填し、的に向かって照準を合わせ、引き金を引く。その反動できゃっと言いながら、銃身が跳ね上げられていた。

「あ、そうか！」

吉田君は急に素っ頓狂な声を上げた。

「ああ、なるほど」

僕も急に合点が行った。このＰＶには全く使われていないが、メイキング映像によると撮影はアメリカで行われた様だった。銃の使用も合法的なもので納得がいった。

もしかしたら、最初からスキャンダルを起こすことを想定に入れて、実銃の噂を利用したのかも知れなかった。

本来なら僕たちのような熱烈なファンしか買わない彼女のＤＶＤが、アンチたちのような連中にも売れたのだ。しかも、前の晩から行列を作らせてまでだ。このことを考えると、最初から彼女のプロダクションがこのスキャンダルもどきを逆に利用して、売り上げ増を目指したとしか考えられなかった。

「今時の芸能界は何でもありだな」

吉田君はビデオデッキのジョグダイヤルを指でいじりながら、ぼそりとつぶやいた。

「ああ」

僕は静かにうなずいた。それでも、彼女のファンは辞められない。若者の悲しさだった。了

トイレの落書き

トイレの落書き

ある冬のどんよりとした空の下、わたしは神戸の事務所から自動車で広島にある営業所への出張を命じられていた。早朝、まだ薄暗い中、誰もいない事務所でバンのキーを借り出し、そのまま阪神高速に乗って山陽自動車道を目指した。車のヘッドライトが行く先を照らしてくれるが、冬の暗さはそれ以上に光を吸い込んでしまうかのようで、視界は狭く、心細さだけが募ってくる。

ジャンクションを過ぎ、山陽自動車道下り線中国方面に入る頃にはようやく空が白み始めてきた。

わたしは一服しようと三木のサービスエリアへ向けてハンドルを左に切った。駐車スペースには数台の車が止まっているだけで、広々としている。そして、左右が開いたスペースにバンを滑り込ませるとバンのエンジンを切り、小走りにトイレへと急いだ。夕べからお腹の辺りがしくしくとし、用を足したかったのを我慢していたのだ。

男子トイレの入口付近で、立ち止まっている親子らしき二人連れが目に入った。いや、男の子が阪神タイガースの帽子をかぶっているので、たまたまわたしの関心を惹いたに過ぎない。

しかし、よくよくみると、大人の男が何となくではあるが、人相が悪いのと、少年がかわいそうなくらいおびえていたのだ。――車の中で粗相して叱られたのかな？

二人の関係がただの親子関係ではなさそうに思えたものの、どちらにしても、他人事である。わたしは自分の用を足しに中へと急いだ。

運良く、入口に近い方から四番目の洋式トイレが空きになっていた。混んでいる場合には奥の方まで空いているものを探しに行かなければならないときがあるものだ。今日は時間が早いせいもあり助かったと思った。

用をすませて、ふと目を前の壁に向けると、落書きが一杯してあった。

マナー違反であることは言うまでもないことだが、中にはユーモアにあふれた落書きもある。わたしは気の利いた文句を見つけたときには手帳につけておくことにしていた。

しかし、だ。この日の落書きは卑猥なものばかりが目につき、早いこと消さないと不愉快なものばかりだった。

「タヌキのおなかは大きい」なんだこりゃ？

一見意味のない落書きが何故かわたしの心をとらえた。それに、他のふざけた卑猥な落書きと異なり、字が子供みたいで、かつ、丁寧だった。

わたしの入選基準には達しないが手帳にメモしておいた。三木サービスエリアにて、と。

トイレから出ると、喫茶コーナーへ行き、紙コップのお茶を飲んだ後、そろそろ事務所の始業時間になるのを見計らい、わたしがスケジュール通り出張先に向かっていることを電話で伝えた。

「道は混んでなかったですか？」

事務の女性が気遣ってくれた。

「ええ、時間が早いですからね。このままのペースで行くと午前中には間に合いそうですよ」

「じゃあ、安全運転して下さいね」

「ええ、ありがとう」

わたしは再び、バンに乗り込みエンジンを掛けた。

走行車線に戻ると、走っている自動車の数が増えてきたのに気づいた。そろそろ、通勤時間帯にぶつかるし、交通量の多い区間でもある姫路を通過する。反対車線はすでに混雑を見せていた。

またしてもお腹がしくしくとした。

一般道ならどこか薬局かドラッグストアを見つけて正露丸でも買い求めるところだが、あいにく、高速道路は広島インターチェンジまでの約三百キロの間降りる予定はないのだ。どこかに薬局のあるサービスエリアはないだろうか？ わたしは道路標識を眺めたが、フォークとナイフのマーク（食堂）を示すものしか見つからない。

仕方なしに、次のサービスエリアである竜野西で走行車線から降りた。

駐車場は八割方埋まっていて、朝食を取る長距離トラックのドライバーや観光バスの乗客などであふれていた。

わたしはいそいそとトイレへと急いだ。――あれ？

ここでも、さっきみた阪神タイガースの帽子をかぶった男の子がいた。あのときの人相の悪い男と一緒である。しかし、二人の関係など、わたしにはどうでもよかった。

男子トイレに飛び込むと、大の方はあらかたふさがっていたが、入口から四番目の洋式トイレが空いていた。もしかしたらあの男の子が入っていたのかも知れないと思った。

ふうっ。

用を足した後、ふと、目を上げると壁に落書きがいっぱいあった。例に漏れず、卑猥なものが多いが、仕事への不満。仲間の悪口など。いわば匿名の掲示板のようなものだ。

――さっきと同じ筆跡だ。

たぬきがどうのとか書いていた同じ筆跡で、「スケベ親父死ね」と書いてあった。わたしは少し気になった。たぬきと親父になにか関連性のようなものがあるような気がしてきたのだ。

わたしは尻を拭き、ズボンを上げると、ドアを開けて外に出た。

休憩時間を取った後、わたしは再びバンを運転し始めた。

車の流れはなだらかだった。追い越し車線を猛スピードで走り抜けていく乗用車を横目で見ながら、こちらはゆっくりと走行車線で時速八十キロあまりをキープする。燃費にもいいし、第一、パトカーにつかまらずにすむので安全だ。

この区間はアップダウンが激しく、また、山を切り開いた箇所の土砂崩れ防止用のコンクリート壁か、そうでない箇所も防音壁で覆われ、見晴らしはちっともよくない。

ラジオの放送も関西圏から外れるにつれ、電波が弱くなりとぎれとぎれになると、わたしは段々退屈してきた。

吉備サービスエリアに到着し、わたしは喫茶コーナーでお茶を飲んだ。ガラスの自動ドア越しに見たことのあるワゴン車が止まっていた。三木でも竜野西でも一緒だった。きっとあの阪神タイガースの帽子の男の子たちが乗っている車に違いない。ワゴン車には前面以外黒のシールドが貼られていて中が見えないようになっている。ますます怪しさが募っていった。

見ていると、男に連れられて、少年がワゴン車の後部ドアから押し込められているのが見えた。

わたしは気になり男子トイレの洋式トイレを見に行った。

同じ筆跡の落書きがないか？ 新たなメッセージを教えてくれと。

一つ一つドアを開けて行ったら、やはり、四番目の洋式トイレの目の高さにメッセージがあった。「ケツを蹴り上げてやる」

わたしはしばし考え込んだ。あの少年には何か事情があるに違いない。もしかしたら、あの男に気づかれないようにメッセージを残しているのかも知れなかった。だとしたら、タヌキにも親父にも、はたまた、ケツにも直接の意味はないはずだ。わたしは手帳を広げ、他のメッセージと並べてみた。

「あっ！」

最初の一文字を並べてみると、「タ、ス、ケ」となる。もし、次のサービスエリアで「テ」で始まる落書きが残されていれば、確実に少年は誘拐事件か何かに巻き込まれて、助けを求めていることになる。

わたしは腹がしくしくするのを我慢して、あわててバンに戻り、彼らのワゴン車の後を追うことにした。

高速道路本線は混んできた。

わたしは追い越し車線に移動し、スピードを上げた。エンジンは轟音を上げ始め、速度計がぶるぶると震えながら上がっていった。ときどき、猛速度で飛ばす、外国製セダンに追いつかれパッシングされたが、気にせず飛ばし続けた。

十分ほどで少年の乗ったワゴン車に追いついた。わたしは気づかれないよう、一台の乗用車を挟んで、その後ろについた。

ワゴン車は福山サービスエリアに着いた。しばらく見ていると、男が運転席から出てきて、後部座席の少年を引きずり下ろした。たぶん、トイレに行かせてとせがんだのだろう。わたしも、バンのエンジンを切り彼らをつけて行った。

わたしは小用をするふりをし、彼らの行動を監視した。少年が洋式トイレに入っている間、男はずっと外で逃げないように見張っていた。もはや、誘拐に間違いないと確信した。

少年がトイレから出た後、わたしは、洋式トイレを調べた。壁には「テメエの母ちゃん

でべそ」という落書きがあった。これで「タ、ス、ケ、テ」というメッセージの完成だった。わたしは警察の高速隊に電話で通報した。了

懸賞生活

懸賞生活

新聞や雑誌の広告欄に書いてある懸賞応募葉書を出したことは一度や二度ではない。出すたびごとに、もし当たったらいいなと思いをはせるのだが、実際に当たったことは未だにない。本当に当たっている人がいるのだろうかと疑り深くなっているくらいである。

それに比べて、「もれなく当たる」とか、シールを集めるともらえる類のものもある。こちらにもこまめに応募している。全員に当たるとわかっていても、ある日、突然に宅配便がやってきて賞品を置いて帰ることがあると気分がいいものである。

また、一等当選でなくても、二等賞、……四等賞くらいまであり、そのくらいになるともはや全員もれなくとなるのだが、それくらいでも気分はいいものだ。さらにたまに、本当にたまにではあるが三等くらいが当たることもあるのだ。

ある日、新聞を読んでいると、自動車会社の広告が出ていて、一名様にハイブリッドカーが当たるというキャンペーンをやっていた。

「おい、お母さん。ハイブリッドカーが当たるんだってさ」

わたしは側で家事をしていた妻に語りかけた。

「そんなの、自動車販売会社が、カタログを送りつけるデータを集めるだけって聞いたことあるわよ。当たりっこないない」

彼女はこちらを一瞥することもなく家事を続けた。

「馬鹿を言うなよ。誰かには当たるんだ。今度は俺かも知れないじゃないか」

うちにはクルマはなかった。わたしは電車通勤だし、妻は自転車を使っている。一応、車庫のついた中古住宅に住んでいるが、その車庫は粗大ゴミ置き場と化している。もったいない話だが、使いもしないクルマを買おうという発想はそもそもなかったのだ。

見れば見るほど、わたしはこのクルマを気に入った。流麗なフォルム。キレイなボディ・カラー。シックな内装。燃費のよいエンジンに、操作性の良さそうなハンドルとメーター類の配置。わたしは心の中でこのクルマをドライブし、郊外の森の中の国道をモーター音とエンジン音を響かせながらどこまでも止まることなく走り続ける中で、流れるような景色を思い浮かべた。わたしは自分に酔っていた。

「ちょっと、どいてくれない？ クリーナーかけるから」

妻は掃除機を片手にわたしの肩をつつき、わたしの意識を郊外の国道から狭い散らかった部屋の中へと一気に引き戻した。

「ふん！」

夢のないやつだと思い、哀れみのまなざしで彼女の背中を見つめながら、わたしは新聞を片手に台所へ移動した。テーブルの上を片付け、新聞紙を広げ、わたしは二、三歩歩いて、マグカップを手に取りコーヒーメーカから注いだ。

懸賞はハイブリッドカーだけではなかった。信楽への旅行が当たるという旅行会社の広告もめざとく見つけてチェックしておいた。いや、チェックするまでもない。これは葉書にクイズの答えを書いて送るだけだ。途中に旅館でごちそうがある日帰りバスツアーだった。

「おーい、信楽で有名なものって何だっけ？」

わたしは、掃除機をかけている妻に怒鳴った。彼女はがーっという音を一旦止めた。

「タヌキじゃないの？」

不思議なものを見るような目でわたしを見た。

「それくらい知っているさ。聞いてみただけ」

わたしは、信楽名物の答えとして、タヌキの置物と書き、ボールペンのキャップをはめた。後は投函するだけだ。

次の日、わたしは駅前の郵便ポストにハイブリッドカーの夢のこもった葉書と一緒に投函した。

金曜日のこと。わたしは友人に飲みに誘われた。

「電車なんだろう？ たまにはつきあえよ」

そう言われ、わたしは立ち飲み屋について行った。

串カツをつまみにビールを飲むと一週間の疲れを少しの間だけだが忘れさせてくれる気がする。特に仕事の愚痴をぼやくでもなかったのだが、つい、ツキのなさを口にしたとき、彼の唇にかすかに笑みがこぼれた。何か言いたげだった。

「そうだね」と彼は笑った。

「何だよ、意味ありげな笑いをこぼしやがって。言ってしまえよ。気持ちが悪いぜ」

わたしがそう言うと、彼は四柱推 (しちゅうすい) 命 (めい) の話をし、人の運勢は生まれついた年月日と時間に支配されていると言い出した。

「はぁ？」

「つまり、君の場合、こうしたツキの類には恵まれていないのさ。だから、全員当たる場合をのぞいては絶対に当たらないようになっているんだ。過去の記憶をたぐっても思い当たる節はないかい？」

そう言えば、幼稚園の入学の抽選や公団住宅の抽選にはことごとく外れてきたし、宝くじに至っては末等三百円しか当たったことがない。彼の指摘にわたしはびびった。

「そういう君は、……あ、そうか」

彼はくじ運だけはめっぽう強く、社内の年末お歳暮分配会の抽選でも一番いいものを引き当てていたし、社宅も一番新しいところに当たっている。

「もしかして、ハイブリッドカーの抽選にも応募したんじゃないだろうな？」

「まあね、……実をいうと悩みがあるんだ」

「何だよ？」

彼はビールのジョッキをぐいっと空け、ぷはあっとため息をついた。深刻そうな悩みには見えなかった。ため息の深さの割に瞳は輝いている。ついている男の証明だ。

「実はさ。当たったんだよ。そのハイブリッドカーに」

「えぇ！」

ショックだった。発表はない。しかし、発表は発送でもって代えさせていただきますというのが定款だった。ということは、わたしは外れということだった。

「よかったじゃないか」

わたしは落胆の色を隠すためにつとめて明るく賞賛の声をかけた。

「それがねぇ、よくもないんだよ」

彼の話によると、すでにクルマを一台所有していて駐車場を借りなければならないし、自動車税の負担も重荷になるので出来れば、売却してお金だけ欲しいという。でも、抽選の規定によると、賞品の譲渡、売却は禁止されていて、本人がナンバー登録しなければ品物を渡さないことになっていた。

「じゃあ、あきらめるのかい？」

わたしはにっこりと彼に微笑んだ。

「そんなことしたら、ツキの神様が自分から離れていってしまうようで怖いんだよ」

「そんなの迷信だろう？」

「いや、ツキに関しては自分は昔から自信がある。この運を自分のものにしたらまた新たな運が開けるんだ。そこで相談なんだが、……」

彼は自信に満ちて断言し、言葉を続けた。わたしはこっくりとうなずいた。

「このクルマを俺の名義のまま君にリースするってのはどうだろう？ 税金とガソリン代はもちろん君持ちだ。それだけでいい。悪い話じゃないだろう？」

「そ、そうだな」

ランニングコストである自動車税の支払いとガソリン代だけでいいという彼の条件をわたしはあっさりと飲んだ。それに外れ続きのわたしの人生の中で一つくらい当たりがあってもいいじゃないか。

土曜日、わたしは妻をけしかけ、二人がかりで車庫の整理を行った。

大きなものは業者に頼んで粗大ゴミとして引き取ってもらい、大きなゴミがなくなった後はキレイに掃き清めた。新車がいつ来てもいいように。

やがて、時間になり大きなトラックが家の前に止まった。しかし、それを見たとき、少し変だと思った。いくら軽量に作られているハイブリッドカーにしてもトラックに乗るほど小さくはない。それに、トラックの横には宅配業者の社名が書かれてあった。

「ご主人ですか？」

業者は降りてきて、キレイになった車庫の中でタバコを吹かしているわたしに声をかけた。

「そうですよ」

「お荷物が届いています」

業者がトラックから降ろそうとしたのは、ひと抱えほどの大きさの包みだった。開けてみると信楽焼のタヌキの置物だった。背丈は三十センチほどだろうか？

「なんだこりゃ？」

「あなたが応募したんじゃないの、ほら」

妻は新聞の切り抜きを見せた。信楽の里への日帰りバスツアーが一等賞でタヌキは三等賞だった。

そして、肝心のハイブリッドカーは来なかった。友人の知り合いに仕事でクルマが必要な人がいてそちらにまわされてしまったのだ。

「いや、本当にすまない」

彼は両手を合わせて謝ってくれた。

わたしは責める気にはならなかった。元々ツキがないのを本当に証明してくれただけだったからだ。

ハイブリッドカーが入るはずだった車庫には現在、信楽焼のタヌキが鎮座ましましている。了

忘れ物

忘れ物

電車やバスに乗り込んで座席に座ったとき、前に座っていた人が何かを残しているということはよくあることである。それが雑誌や新聞だとしばらくの間の暇つぶしになることもあるが本だったら趣味が合わなければ手にも取らない。まして、駅員に届けなければならないようなものだと、かかわるのが面倒なのでそんな席は避けて選ぶものだ。

その日、たまたま仕事で姫路に出かける用事があり、わたしは新開地から姫路行き特急に乗り込んだ。二人がけの席で半分は進行方向、残りの半分は反対方向に向いて座る構造になっている。後ろ向きに走るのは気分が悪くなるたちなので、姫路方面を向いている前の方の席に座った。

座ってから、ふと、お尻に違和感を覚え、手で探るとシートの隙間にカメラが落ち込んでいるのに気がついた。

厚さ一センチ程度の薄型の形状で座席のクッションの隙間に潜り込んでいたらしい。見てみると三インチ液晶画面に十二倍光学ズームと高そうな機種で五万円はするだろうと思われた。誰が忘れていったのだろう？ わたしは気になりながらそれを手に取った。

「すみません。ちょっとだけ詰めてもらえますか？」

考えにふけっているのを遮り、一人のおばあさんがわたしの横に腰掛けようとした。わたしは椅子の上に置いていたビジネスバッグを膝の上に移した。

「すみませんねえ、どっこいしょ」

とおばあさんは笑顔を見せ、席に着いた。

わたしは手にしたカメラを元に戻せなくなってしまい、そのままカメラを吟味するふりをして、別に盗んでなんかいませんよという自分自身への言い訳をした。もちろん、おばあさんはそのカメラがわたしのものでないことなど知るよしもないだろう。

がたたん、がたたん、……電車は走り続けた。

須磨浦公園を過ぎ、舞子でおばあさんは電車を降りた。わたしは左側に見える海を見ながら退屈しのぎをしていたが、それでも段々と手持ちぶさたになってきた。

またぞろ、好奇心が頭をもたげ、取扱説明書もないのに、さっき拾ったカメラをいじり始めた。スイッチの位置は大体どこのメーカーも同じだ。メニューから再生を選んでボタンを押すと、このカメラの持ち主が写したらしい写真が表示された。三インチと大きな液晶画面なので何が写っているか大体はわかる。

一枚目の写真はどこかの家の門の前で小さな男の子がネクタイを締め、ブレザーと半ズボン姿で写っている姿であった。慶事の記念に撮られたものに違いない。二枚目にはその母親と思われる若くて綺麗な女性が、これも白いスーツ姿で並んで写っているのがあった。

――ははあ、これはこの母親が息子の小学校の入学式か何かの記念で撮ったに違いない、と、思った。

こういうものは、持ち主に取り思い出はカメラ本体以上に貴重なものである。是が非でも返してあげなければならない。だが、これだけでは、誰が落としたのかわからない。せめて、どこの小学校なのか、それだけ突き止めれば後はその学校宛に届ければ、持ち主に返してもらえるのではないかと想いは飛躍した。

がたたん、と電車は揺れた。線路の切り替え部分でがたがたと揺れ、明石駅にさしかかった。わたしはふと、気になり、ここで一旦電車を降りることにした。この電車は新開地と姫路を往復しているのだから、前に乗っていた乗客はどこで乗ったかわからない。だが、小学校の風景が何となく明石ではないかという感じがしたのだ。あくまでも直感だ。

駅のベンチで腰掛けて、自動販売機のコーヒーを飲みながら、順繰りに写真を確認していった。――思った通りだ。

何枚目かに、小学校の正門で写したものがあったのだ。

「どこの小学校かな？」

肝心の看板の前には、〇〇小学校平成〇〇年度入学式という立て看板が立てかけられ、そこにあったはずの〇〇という文字は笑顔の母親の手に持つバッグで遮られ、読み取ることが出来ない。ヒントは背景にある桜の木くらいだった。おそらく地元の人に聞けばわかるかも知れない。しかし、明石市内には小学校などいくつもあるだろうし、それに、明石市内ではないかも知れなかった。

落とし主に何の義理もないのに、どうして、こんなことに時間を費やすのか、自分でもわからなかった。ただ、写真に写っていた女性が若くて綺麗だったということしか、理由としては考えられない。

わたしはさらに、腰を据えて調べるために駅を途中下車し、構内にある喫茶店に入り、携帯していたパソコンにカメラの画像を取り込んで細かく調べることにした。一見何の変哲もない桜の花の写真にも手がかりはあるというものだ。

確かにレンズは高級らしく、桜の薄いピンクの花びらが鮮明にくっきりと写し出されていた。しかも、バックをぼかしたものと、バックと一緒のものと何種類もの桜が写っている。

「カメラの性能がいいのか、カメラマンの腕がいいのか？」

わたしはコーヒーを飲みながらつぶやいた。

バックをぼかすには焦点深度を浅くする必要があり、マニュアルカメラの時代なら絞りを開けて撮るとこういう取り方が出来る。どうやら、このデジタルカメラにはそういう撮り方が出来る機能があるということだった。

「よほど、使いこなしていたんだな」

ぶつぶつとつぶやくわたしの横をウェイトレスが不審そうな顔をして通り過ぎていった。しかし、使い込んでいたにしてはカメラは最新機種であり、やはり、慣れた人が取扱説明書を読み込んで設定をしたに違いない。この写真の若い女性はカメラが趣味の人なのだろうかと想像した。

「ああ、すみません、この写真にある小学校に見覚えはありませんか？」

わたしは通り過ぎようとしたウェイトレスに声を掛けた。

「さあ、……」彼女は小首をかしげた。が、しばらくして思い出したように、手を打った。「ああ、そう言えば、この先の小学校の正門の桜じゃないかしら、多分そうだと思います」

偶然にも、わたしの直感は当たっていた。

「ありがとう」

わたしは鞄を肩に掛けて、そそくさとその場を後にした。

駅前のロータリーはバス乗り場だった。明石城を左手に見ながらなだらかに上っている坂道を進み、住宅街へと入って行った。写真で見たことのある風景が何カ所かわたしの目の前に広がった。風景に導かれるまま、小学校へと歩いていく。

ふと、奥まった家に目を取られ、わたしは歩みを止めた。あの家だ！

カメラの液晶画面でもう一度確認した。男の子と若いお母さんが家の前で写っているのは、この家に間違いはなかった。

わたしは、なぜか心が高揚していた。そして、インターホンを押した。

――はーい。

スピーカー越しに聞こえてきたのは、年配の女性の声だった。わたしは、電車の中で拾ったデジタルカメラの件、そして、写り込んでいた少年と母親、この家のことを手短に伝えた。

「少々お待ちくださいませ」

インターホンでは話が通じなかったらしく、声の主は扉を開け、玄関から出てきた。当然怪訝そうな表情を浮かべている。わたしは鞄からデジタルカメラを取り出し、これこれと指をさした。

「あら！」

急に女性の表情が崩れた。

「それ、どこに？」

わたしはもう一度、インターホン越しに説明したことを繰り返した。

「この写真は大切なものではないかと思って、お届けに来たんですよ」

――それに、写真に写っていた若い女性にも興味があった。

「娘と、孫の小学校の入学式の写真ですのよ。どこでなくしたのかわからなくて困っていたんです。どうもありがとうございました」

どうやら、カメラはこの女性のものらしかった。

ちなみに、初孫が生まれてからカメラに凝り出し、カルチャースクールでも撮影術を学び、かなり扱いには慣れているということだった。相当の腕前だとわたしが判断したのは誤りではなかった。

「こちらの若い女性はお孫さんのお母さんですか？」

「ええ、……ですが、古い写真で十年前のですよ。孫ももう高校生です」

――十年前だとすると、と考えるとわたしはがっかりした。

意味もなくがっかりし、とぼとぼと駅への道のりを歩いていると、背広の内ポケットに入れてある携帯電話の着信音がぶうんと鳴った。出てみると、姫路の取引先からだった。

「午後一時からのお約束でしたよね？ 何をしているんですか？ 一体！」

わたしは自分の用事をすっかり忘れていた。了

テロリスト入門

テロリスト入門

わたしは四十三歳の駆け出しのテロリストだった。

社会の閉塞感、希薄な人間関係、将来の人生打開への希望の喪失、破壊衝動、どういったらいいのだろうか、適当な言葉が見つからないが、だからこそ、希望を求めてインターネットの情報に依存していったのかも知れない。そこには一種の解放感があった。

そんな中である日、ふと見つけたホームページに目が釘付けとなった。

海外のサイトなのだが、工作員募集と書いてあったのだ。――もちろん英語で。

わたしはすぐにその場でホームページから名前と住所を入力し応募した。しばらくして国際郵便で訳のわからないテスト問題を送ってきた。化学と物理に関する高校生程度の問題だった。英語で書かれている点を除けばだ。とにもかくにも問題を解いて、返送すると、どうやら工作員の採用基準をクリアしたらしく採用の通知が来た。一応、これで国際テロ組織の一員となった。

組織には結構潤沢な資金があるらしく、「潜伏」している間もちゃんと手当が支給された。毎月決まった額のお金が銀行口座に振り込まれ、無職だったわたしには都合のいいアルバイトとなった。もっとも、組織の目指すところに従って、現実に日本でテロを起こせば重罪になり、安穏な生活とは永遠におさらばとなるだろう、しかし、放っておいても安穏な生活には手が届かないのだ。

最初の一週間、組織からの指示に従って、近くの交番や、生活圏の近くにある大きな警察署の動向を探って、電子メールで本部に報告すればよかった。交番に所属している警官は十名で常時いるのはそのうち五名であること、交替制勤務となっているなど、普段気づかないようなことに気づくなど新鮮な面もあった。もちろん、警備の手薄な時間や、何かあっても対応できないタイミングなどをつかむのが組織の目的だということはうすうす感じ取れた。

わたしにとっては、公園と街中を観察しながら散歩していればいい、そんな気楽な生活が続いていた。電子メールでの報告のほかには、たまに、やってくる国際郵便の冊子を受け取り、テロのやり方などの講習を自分で受けて、レポートを提出する。まるでテロリスト養成の通信教育のようだが、テキストをこなすうちに、思想的にも段々と染まっていった。

テキストによると、何よりも潜伏する工作員となるためには、当局に目をつけられてはならない、と同時に近所の人に怪しまれることがあってもならない。わたしは、ごく普通の中年男を演じるために、与えられた経費のうちから定期券を買い、毎日決まった時間に図書館に出かけ、決まった時間に帰宅した。二ヶ月目からは、さらにそれらしく見えるように、背広も一着買い求めた。

こうして、徐々にではあるが、わたしは潜伏工作員として訓練を受けていった。

三ヶ月ほど経ったある日、とうとう本部から、爆破テロを起こすよう指示を受けた。警察署もしくは公園の側の交番が望ましいという。

具体的には、液体爆弾をペットボトルに入れて、タイマー式の起爆装置を入れる。というものだった。装置の作り方は本部の専門家からの手紙に外国語で書かれていた。

わたしは辞書を引き引き、薬局で過酸化水素水を買い、ホームセンターで洗剤と有機溶剤を買いに回り、アパートの一室で合成し、かろうじて、素人ながら言われたとおりの液体爆弾を作り上げた。過酸化物系の爆薬だ。

起爆装置は、カメラのストロボでボッと刺激を与えることで液体が一気に反応するらしい。それをデジタル時計のアラームの電極に接続した。

ただし一個しかないため、効果を試すことが出来ない。本当にこんなものが爆発するのだろうか？ 一抹の不安はあったが、本部の専門家は間違いないという。わたしは信じて、公園脇の交番に設置することにし、起爆当日を待った。

朝、暗いうちに置きだし、公園前交番の裏手にペットボトルを置き、簡易起爆装置からの配線を目立たないように、横の植え込みに紛れさせた。タイマーを八時ちょうどにセットする。そして、わたしは現場を離れ、ジョギングする人のふりをしつつ、あたりをうろついた。爆発しても不安だったし、しなくても不安だった。もし、爆弾が不発だったらわたしは組織をクビになるだろう。

七時半頃を過ぎると、公園横のゴミステーションにゴミ袋を捨てに来る人が増え始めた。あいにくと今日は缶・瓶・ペットボトルの収集日だった。ゴミ収集車が来るのは確か八時頃だったはずだ。わたしは爆弾の被害が一般人にも及ぶのではないかと、気が気ではなかった。とっとと、ぼんと爆発して交番の壁だけ焦がして終わりにして欲しい、そんなことを祈りながら人々の通り過ぎるのを待った。

見ていると、青い指定のポリ袋にはペットボトルや空き缶などがぎっしりとつまっていた。中には、明らかに、空き缶以外の金属くずなども詰め込んでいる人もいるようだった。わたしが自治会長なら一言いってやるところだが、あいにくとこちらはそんな身分ではないのだ。

腕時計が八時を示し、回収車が時間ちょうどにやって来た。

収集員が威勢よく車から飛び降り、置いてある袋を軍手をはめた手でぐいとつかんで、ぽいぽいと収集口に投げ入れていく。投げ込まれたポリ袋はゲートの金属板で押しつぶされながら奥へ奥へと詰め込まれていった。

作業が始まって三十秒ほど経った頃、収集車で異変が起こった。

ゲート付近から白い煙がもうもうと吹き出した。収集車の中で火災が起こったのだ。運転手は慌てて、火災を消すために、ゲートを操作し、収集物を道路上に戻し始めた。まき散らされたゴミの中に、火を吹き上げている金属管が認められた。空き缶だと思ったのはよくよく見ればカセットコンロのガスボンベだったのだ。中身が残ったまま廃棄しようとしたらしい、どうも非常識な人がいるものだ。

道路上に投げ出されたゴミの中のボンベは炎を上げて燃え上がった。高さは三メートルほどにもなっただろうか。作業員は慌てながらも、収集車に備え付けの消火器で消そうと、消化剤を噴射した。しかし、小型の消火器ではなすすべもなく、炎はますます燃えさかる。

どかん、どかん、と、他にもボンベがあったらしく、火は次々に引火し、空気中の酸素を含んで爆発するように燃えさかった。

「これだけじゃ、あかん。交番行って借りてきて！」

「よっしゃ！」

作業員の一人が近くの交番――わたしが爆弾を仕掛けた所――に消火器を借りに走った。それだけでは足りない。もう立派な大火災だ。公園の前の広い道路というのが、たった一つの救いだった。家の密集している箇所のゴミステーションだったら、大火災を招き、惨事になりかねないところだった。――ガスボンベを廃棄するときは底に穴を開けて圧を抜いてからポリ袋に入れなければならないのはこのためだ。

交番の巡査も赤い消火器を持ち、駆けつけてきた。必死に、消化剤を噴射し、炎と戦うが、所詮は焼け石に水だった。

まもなく、交番の巡査から知らせが入ったらしく、消防車二台と、道路警備用のパトカー三台がやって来て、辺りは騒然となった。

消火器で消すには炎が大きすぎた。

消防士は付近の消火栓から取水し、放水銃を使い、盛大に鎮火をはじめた。

この時点で道路一帯に広がったガスボンベの炎は放水の勢いで一時ビルの三階まで、立ち上ったが、さすがに、水の威力は大したもので段々とその勢いを減じていった。

わたしはそのとき、すでに野次馬の一人となり、身を乗り出して交通整理をする巡査の邪魔となっていた。

「下がってください。下がって！」

他の連中の中には、携帯電話のカメラで撮影している人もいた。

八時半頃になると、すっかり、鎮火し、ゴミ収集車の作業員たちは応援を呼び、すっかりゴミが散らかり放題になってしまった道路の清掃をはじめた。そして消防車とパトカーは、役目を終え引き上げていった。

こうした事件は犯罪にはならないのだろうか？ わたしは自分のしたことは棚に上げ、少しだけ義憤を覚えた。

清掃員は道路をきれいに掃き清め、燃えたボンベや、空き缶、割れたビン類を拾い集めた。掃き清めたあと、彼らも引き上げ、巡査も引き上げていった。何事もなかったかのように。

さて、時計を見るとタイマー設定した時刻の八時をとうに過ぎていた。わたしの爆弾はどうなったのだろう？ これだけの惨状を目の前にすると流石に爆弾テロなどと遊び半分にやることが恐ろしくなってきたのだ。本当に爆発すればあんなガスボンベの比ではないはずだ。

おそるおそる交番の裏をのぞきにいった。見るとペットボトルはそのままの状態で置かれてあり、猫がおしっこをかけていた。了

チューリップの花言葉

チューリップの花言葉

十の努力で百の成果を上げられる人もいるかと思えば、百の努力で十の成果しか上げられない人もいる。わたしはどちらかというと、後者の方だった。当時わたしの勤めている工務店では住宅リフォームの拡販を行っていた。

比較的大きな工務店であったので、「親方日の丸」的なところもあったのだが、営業マンの給与体系はほとんどが基本給プラス歩合制を採っていたので、成果の上がらないものにとってはそっくりそのまま生活を直撃する職場でもあった。

そのわたしと同じようにセールスに回っている先輩の中に月間百件以上の商談をまとめている優秀な男がいた。――どこが、どう違うのだろう？ わたしは彼にそれとなく商売繁盛の秘訣を聞き出そうとしたが、ただにこにことするだけで何も教えてはくれなかった。それはそうだろう、成績がそのまま生活に直結するのだ。そう簡単に人に教えてくれるものではないことは理解できた。

そんなある日、わたしの叔母の住んでいるうちにたまたまそうとは知らず、彼がセールスに訪れたと聞いた。

「これあんたの会社でしょ？」

叔母はわたしに名刺を見せてくれた。確かにあの彼のものだった。

「なあ、叔母ちゃん。彼はどんなセールス、いや、話をして行ったんや？」

わたしはなれなれしいとは思ったが、聞かずには、トップセールスマンの秘密を知ることは出来ないと思い、単刀直入に聞いてみた。

「そらそら、それが悪い癖や。あんたみたいに目的を直接果たそう思うたらあかんのやで。この人の話を見習うとええわ」

「そんな、意地悪せんと教えてえな。な」

わたしは、土産に持って行った、叔母の好きな甘いもの、「御座候」を鞄の中から取りだし目の前に置いた。叔母はにこりと笑い、いそいそと席を立ち、お茶を入れてくれた。

「その人な、……」

叔母の話によると、意外にも彼は、リフォームの話などは何もせず、叔母の話だけ聞いて、帰って行ったという。

「そんなあほな。あの人、うちのトップセールスマンなんやで。そんな何も売り込まんと商売になれへんやんか」

「だから、それがあんたの悪い癖や。せっかく、頼もう思うても、あんたが勝手に決めてごり押ししたんでは、何か裏がありそうで頼まれへんいうもんや」

「そんなもんかなあ」

「そうや」

叔母の家は昭和四十九年築の、この近辺でもかなり古い住宅の部類に入っている。探せば屋根の葺き替えや、外壁の塗装の劣化、床下材の腐朽箇所の補修などいくらでも手を入れる箇所は見つかる。もちろん、全部に手を掛ければ数百万円規模の工事になるだろうから、いくつかメニューを作って予算の範囲内に収まるようにしてあげなければならない。

「なあ、叔母ちゃん。この家をリフォームするとしたら、いくらくらいまで出せる？」

「あかん、あかん。うちはお金あれへんで」

仮定の質問だったが、叔母はわたしのごり押しに辟易していたらしく、言い出した途端にえらい剣幕で断りを入れてきた。

「別に売り込まへんて。この家やったら、屋根とか、床下とか、壁とかいじるところなら一杯あるやんって言いたかったんや。それだけ」

「ふうん、……まあ、信用しといたるわ」

叔母はそう言うと、わたしの持ってきた御座候をひとつ手に取りほおばると、お茶を一口飲んだ。そして、ひとしきり小豆の種類と餡の美味しさについて講釈を垂れた。わたしは、ふんふん、そんなもんかいなと内容はいちいち聞いていなかったが、相づちを打っておいた。

「そやそや、この間うちにきた、お宅のセールスマンの人、花の種を置いていったで」

「花の種？」

わたしが応接間の窓から庭に目をやると、確かに色んな花が植木鉢やプランターに植え込まれていた。まだ季節柄咲いてはいないが、緑の芽が出てそのうち咲けばきれいになりそうな雰囲気はしていた。

「そやさかい、こっちもお茶出して世間話して、それで帰らはったわ」

「へえ……世間話？」

「ああ、さっき、あんたが言うた、天井裏から水が出たり、床下がかびとったり言うようなことも話してしもうたわ」

わたしはやられたと思った。

花の種を、見事に話の種にして、現在の住居に関する問題点の洗い出しに使うなど、プロのセールスマンのやることだと思った。それに引き替え、自分のやり方はあまりにお粗末すぎた。これでは、成績に差の出ることは当然だった。きっと、今回叔母に漏らした住居の問題点と対策方法と予算を資料にまとめて次回には、実際のセールス活動に移

るに相違なかった。

この後、何軒か古そうな家を訪問して回ったが、わたしの意識はすでに目先のセールスにはなく、何か話の種、しかも、将来的にお客さんの信用を得られるものは何かということに集中していた。

「どうも、失礼します」

最後の一軒をお邪魔したとき、携帯電話に着信履歴が表示されているのに気がついた。古くから付き合いのある園芸業者からだった。花の種の話を聞き、すぐに園芸業者から知らせが来るなど天啓に違いないと、わたしは通話ボタンをプッシュした。

「忙しそうでんな」

相手は羨ましそうに言った。普段なら皮肉に聞こえるところだが、今日は違う。

「いいえ、貧乏暇なしというやつですわ。何ぞ用事でしたか？」

「ああ、……あんたにこんなこと頼んでいいのかわからんねんけど……」

「ええ、いいですよ」

「チューリップの球根はいらんか」

「チューリップですか？」

「せや。一杯あるねん」

聞けば、注文に応じて大量に仕入れたのはいいが、納品予定先が倒産してしまい、引き取り手がなくなってしまったということらしかった。粗品としては縁起でもないといいたいところだが、これも何かの縁だろう。

これから、春になれば温度に応じて芽が出て来るので、早いところ処分してしまいたいらしい。安くするので全数引き取ってもらえないかと言うことだった。

わたしは、この話に「縁」を感じ取った。そもそもチューリップの花言葉は「愛」である。これを飛び込みセールスの時にお客さんに配り、話の種にすれば、花の種より強力な販売促進ツールになるのは目に見えていた。ティッシュを配るより遙かに気が利いているし、第一、花をもらって喜ばない人はいないだろう。

が、販促ツールの購入には営業課長の決裁がいる。とりあえず話を保留し、わたしは急いで営業所に舞い戻った。

これも縁があったのだろうか、課長に販促品に球根を使う話をすると、すぐに承諾され、わたしは園芸業者にすぐにチューリップ千株分の球根を持ってくるよう依頼した。

次の日から、わたしは、彼がやったように、まずチューリップの球根を配るところから商売を始めることにした。

ただ、配るだけであるから、お客さんのガードは自然と低くなる。

そして、彼のように、うまく世間話の段階にまで詰め寄ることが出来るようになった。もちろん、現在の住居の状態を見計らいながらのことであるから、お客さんも少しは意識している。屋根の老朽化や床下の傷みなど、ガードが下がれば、向こうから細かい不満点など聞かせてくれるようになった。

「最近、床がぎしぎし、音を立てるようになったんや」

とか、「天井にシミが浮かんできたが、雨漏りのせいだろうか？」とか、お客さんは自分の家屋の不具合を工務店の営業社員であるわたしに話してくれる。

わたしは、その度、工務部の技術者を連れ、詳細な対処方法と、見積もりを作っては持って行くようになった。

――あと一息だ。

そうだ、もう一息で実際の営業目標である、工事受注に繋がりそうな感触があった。確かな手応えを感じる。

が、肝心なところで、他の業者に取られてしまったり、お客さんの気が変わってしまったりし、中々、わたしの成績には繋がってくれなかった。

――何もかも、トップセールスマンの彼の真似をしているのに、今までのやり方のどこが間違っていたのだろう？ わたしは、どうしても、その違いがわからなかった。

そうこうするうち、一度様子を聞かせてと言う叔母のところに挨拶しに行くと、玄関脇のポッドに球根が植えられていて、チューリップの黄色のつぼみがついていた。

「それ、あんたにもらったやつよ」

叔母はにこにこして言った。

「花言葉は愛だから、商売が繁盛すると思ったんだけどな」

「でも、黄色のチューリップの花言葉は、むくわれない愛よ」

わたしは愕然とした。そう言われれば配ったチューリップは全部黄色の花をつけていた。了

枯渴

枯渇

二〇一X年の夏のある日、我が家の水道の出が悪くなった。息子の秀彦は文句を言いながら風呂場から出てきた。シャワーの湯が途中でとまり、風呂桶の湯で頭を洗ったという。

「別にいいじゃないか」

わたしだって、風呂桶の湯で身体も頭もすすいでいるのだ。

秀彦は「汚いじゃないか」と意外な文句を言った。

「家族が入るだけなのにどういう神経をしているんだ！」と、叱りつけた。

しばらくして、妻の真理が「あなた、水が出ないのよ」と文句を言いにきた。

「何だって？」

ここへ来てようやく、事態の深刻さに気がつき、重たい腰を上げることにした。

わたしは、工業団地にあるアルミ缶を製造するメーカーに勤めるサラリーマンだった。技術者ではあるが水道の不具合などは専門外だった。電話台の下にあるイエローページをめくり「水回り一一〇番」という水道サービスを探し、そこに頼んでみてもらった。担当者は水道の根元にあるバルブなどを開閉したが、特に不具合はなさそうであった。

「配管の故障ではないですね。水圧が来ていませんよ。ほら」

彼はバルブを開けたが、水はちょろちょろとしか出なかった。

しばらくするうちに、水が出ないのはうちだけではないことがわかった。

わたしの所に、町の自治会長から電話がかかった。

「小原さん。大変ですぞ。町の水道ポンプが故障したようです。すぐにみんなに招集をかけて下さい」

「ええ！ ポンプですか？」

この町は、遠く離れた山から流れ込む伏流水を、地下百メートルの井戸からポンプで吸い上げて水源としている。水道ポンプが故障したということはこの町全部の水道が出なくなるということだった。夏前に一通りのメンテナンスをしていて、そのときには特に異常は見られず、安心してこの夏を乗り切るつもりであったのだ。

わたしは水道担当理事をしている都合で会長から苦情めいた電話を受けてしまったが、故障などとはにわかには信じがたい出来事だったし、本当だとしたら運の悪い出来事だといえた。回り持ちの理事会で判子を集め、緊急に検査の予算を取り、ポンプメーカーに検査を依頼した。

検査の結果、モーターの故障や揚水ポンプの羽根の摩耗ではなく、水位が異常に低下してしまっていることが判明した。水源の枯渇だった。さらに、キングファイルに綴じ込まれた水質等のデータシートで、ここ数年の水位を調べると、町の近くに出来た工業団地の進出時期と重なっていることがわかった。工場が多くなるにつれ水位が低下しているのだ。工場は多量の工業用水を必要とするから、稼働している工場の数が増えるにつれ、限られた水資源の奪い合いになり、自然と水位が低下していったものと思われた。

わたしは以上の事実のみを自治会長に報告した。結論としては井戸をもっと深くまで掘り下げるか、工場の取水をもう少し遠慮してもらうよう要望を出すかしないといけないのだが、一理事の立場でそこまでいうことははばかられた。

「小原さん、問題は深刻ですぞ。わかっておられますか？」

「ええ、とにかく早急に対策を打たないことには、……まだ夏も長いですし」

「では、とにかく一刻も早く問題にしましょう。住民総会を招集します。いいですね」

「はい」

わたしは自治会長名で、書類を作り、住民総会を招集した。総会といっても、書類での委任状を集めるだけである。だが、多数決ですべてが決せられるから、形式だけといっても無視できない重みがあるのだ。ほぼ一週間程度で内容が周知徹底され、委任状をとりまとめた。

「総論賛成・各論反対」がおおよその結論だった。

水資源の確保は絶対に必要で、工業団地の取水制限を求めるのは賛成だったが、だからといって、どの工場に何割の取水制限を求めるのかについては議事がまとまらなかった。

住民も今回は関心が高く、委任状より出席する人の方が多かった。各自、工業団地に何らかの関係を持っており、自分の会社が取水制限を掛けられるのは困る。景気が悪くなる。工場の稼働率が下がると雇用が心配などと各自好き勝手な意見を言い出したのだ。

そして、結論として現在の百メートルの井戸の横の同じ敷地内に三百メートル規模の深い井戸を掘る案が検討された。費用はかかるが、各戸の水の心配もなくなるし、工場に対する要求も出さずにすむしと、無難な選択のように思えたのだ。

――しかし、である。

自治会長が、工場団地への取水制限申し入れ案に拘泥した。

事情は簡単である。定年退職し、年金だけで生活している彼に取り、工場の操業を心配する必要性などこれっぽっちもなかったのである。それに、追随するように、定年世代の同調者が続出した。その数は住民全体の三割、いや、出席者の半数以上に増えてきた。団塊世代の強みである。

「小原さん、問題は深刻ですぞ。わかっておられますかな？」

わたしは、彼らに取り囲まれた。

「え、ええ、……ですが」

わたしだって、自治会の理事だけしていればいいのであれば、こういう苦情があることを申し入れて、取水制限に協力してもらうよう談判しにいくのは別にやぶさかではなかった。むしろ、学生時代から環境問題には積極的だったし、こういう運動はむしろ好きな方だ。

が、わたしもアルミ缶メーカーに勤めている以上、変なことは言い出しにくいし、その先頭にわたしが立っていることがばれたら、このご時世、リストラの対象者リストに真っ先に乗せられてしまうに違いない。

「会長。ここはひとつ、取水制限を工場団地に申し入れるか、三百メートル井戸を掘削するかの選択を臨時総会で決めたらいかがでしょうか？」

「小原さん。問題は深刻ですぞ。そんな事務手続きを経ているうちに我々が干上がってしまうじゃないですか？ それとも何ですか。ペットボトルの水で風呂に入れとでもいうおつもりですかな？」

「そんな、大げさな。みんなの総意まとめるだけですよ。一週間もあればまとまりますよ。ね？」

わたしは、「井戸掘削案」の委任状をとりまとめ、こっちの法案を採択されるよう、団塊の世代以外の中間層の票を集めに回ることにした。工場に勤めているが、忙しくて総会に出られない階層の人たちだ。

工場勤務の人の中にも協力してくれる人がいた。大多数の人は忙しくて時間がとれないということを言い訳に協力を拒んだ。

そして、次回の臨時総会前日までにぎりぎりの差で過半数を確保した。

「それでは、本総会は新井戸掘削案を採決いたしました」

会長は悔しそうな顔でそう議事を終了させた。

八月になり、水位の低下から断水日が増えるにつれ、住民からの苦情が相次ぐようにな

り、三百メートル井戸の掘削工事が急務となった。相変わらず、工場団地の取水制限申し入れ案は誰も持ち出さなかった。

積極的賛成者は少ないものの、ポンプ設備の修繕積立金などを取り崩す格好で予算を確保し、緊急に井戸を掘り下げることになった。現在のポンプ小屋の敷地内で掘削工事がはじまった。

三百メートルの井戸からは、以前とは比較にならないくらいの水量の水が湧き出してきた。

「これで安心だ」

そんな声が聞こえる頃、わたしの長く苦しい夏は終わった。

息子もよろこんでシャワーを浴び始めた。

その頃、世界的に株価が下がり始め、九月末には大暴落となった。

その余波は日本の片田舎の工業団地にまで波及し、受注が急激に低下しはじめ、各工場では在庫を増やさないために生産調整をし始めた。

工業団地の稼働率が下がって来始め、とうとう休止するところまで現れた。そして、とまった。

経済が沈滞するようになり、水をくみ上げる工場がどんどん停まっていくと、それに反比例するように井戸の水位が上昇してきた。

そして、古い井戸も以前のように豊かな水量を供給するようになった。了

忘れ物

忘れ物

「桜の季節だね。お花見行きたいね」

年度初めの最初の木曜日、庶務の里佳は僕を花見に誘った。

彼女とは付き合い始めて三週間ほどだった。期末の忙しいときに僕の仕事をあれこれ世話を焼き、いそいそと手伝ってくれたのがそのきっかけだった。

「コピー取ってあげる」

そう、恩着せがましく僕の資料を引ったくり、コピー室にこもり正確に部数通り焼き増しし、几帳面に左端をダブルクリップで綴じてくれた。そんな、献身的な援助もあり僕は自分の仕事に専念することが出来、そのおかげで課長にほめられたという次第だった。

そのほめ言葉も課長から直接聞いた訳ではない。

女子社員特有の情報網で、庶務の里佳から伝え聞いたのだ。そのときの彼女の誇らしげな顔は忘れられない。「黒田君、今付き合っている人いるの？」と、一段落したときに訊いてきた。

遠回しな告白だと、いくら鈍い僕でもすぐに気がついた。入社年度は彼女の方が三年早く、年も一個上だった。年上の彼女、ということに少し引っかかりはしたが、そう悪くなかった。何しろ、部内で一二をあらそう美人だったし、小柄で清楚、お嫁にしたい人ナンバーワンのランキングを常に争っていたのだ。へぼな男子社員の中での話だが。

「僕はフリーですよ」と、顔を真っ赤にして答えた。

「今度、どっか、遊びに行かない？」

そう、彼女と約束してしまった。「いいですよ」と。

そうして、色んな所に遊びに行った。遊園地に水族館、映画にカラオケ。段々と親密になり二人の距離は縮まってきた。僕は彼女のことが本気で好きになった。

「本気で付き合ってもらえないかな」

と、ついに僕の方から切り出してしまったのだ。

「いいよ」

彼女は気さくに返事した。

僕は花見に誘われたとき、去年の課の行事を思い出した。人混みと騒音、酔っぱらいにげろはき。ビールの空き缶に焼きそばの空きからであふれかえったゴミ箱。そんなのを想像し、とてもではないが、清楚な彼女にはふさわしくないと判断した。

「そんなところに行ったって、楽しくないよ。人混みが一杯で疲れるだけだよ」

「そんなことないよ。だって調べてあるんだから」

と、インターネットで調べた明石城公園の桜の写真を見せてくれた。

広々した原っぱの周囲にきれいに桜の花が咲き誇り、そこを散策する人々の姿が映し出されていた。人混みや酔っぱらいとは無縁の写真だった。

「まあ、そういうことなら……」

「やった。じゃあ、クルマは黒田君が借りてよね」

僕は渋々、会社近くのレンタカーに連絡し予約を入れた。弁当は彼女が作ってくれるそうだ。ドライブを兼ねているからビールなどはなしである。トヨタのプリウスが借りられそうなのでそれにした。

当日、僕は彼女のうちに迎えに行った。よそ行きみたいなワンピースにカーデガンを羽織った彼女はきれいだった。手に提げたバスケットにはお弁当と思われる物体が入っていた。

僕は助手席のドアを開けてあげ、彼女をエスコートした。

「ありがとう」

彼女は脚をそろえて上品に腰掛けた。

レンタカーでなく自分の車ならもっといいのに、と思った。プリウスはエンジン音も立てず、静かに走り出した。

一時間くらいで明石城公園についた。僕らは駐車場にプリウスをとめると早速、広場へと歩いていった。

そこは、人人人……、まさに人で埋め尽くされていた。桜の木の下には、青いビニルシートが敷き詰められ、その上では大勢の観客が弁当を食べ、酒を飲み、そしてカラオケで歌っていた。最悪だった。

「だから嫌だって言ったんだよ」

僕は一気に不機嫌になり、何の罪もない彼女に当たった。慣れないドライブの疲れもあったのかも知れない。それに、彼女は弁当を作ってきてはいたが、下に敷く敷物を持って来ていなかった。

「また、忘れ物したのかよ。いい加減にしろよ！」

「そんな言い方しないの」

仕方なしに僕はプリウスの中に何か使えるものはないかと探すことにした。後部ハッチを開けて、新聞紙などの余計なものを取り除くと、青いビニルシートがあった。

「お、前に使った人が忘れていったのかも知れない」

「本当！ ついているわね」

僕は喜び、それを持ち広場に戻った。あまりいい場所は残されていない。それでも辛うじて桜が見られて、そこそこ二人分くらいは座れるスペースを見つけた。

「ここにしようぜ」

「うん」

彼女が反対側を持ち、二人でビニルシートを広げた。

「うわっ！」二人は同時に叫んだ。

青いビニルシートの真ん中が汚れていたのだ。

「きっと、前に使った奴がここで吐いたんだな。それで持って帰らなかったんだ。忘れ物にしては出来すぎと思ったよ」

「あはは、馬鹿じゃないの！」

彼女は、甲高い声を上げて笑い転げた。了

院長先生

院長先生

暑い夏のある日、わたしは体調を崩し、この街でも大きな医療機関であるみどり病院の内科に診察を受けに行った。問診の時にわたしは症状を訴えた。

「ときどき、腹の奥の方がちくちくと痛むんです。しかも、激痛で我慢が出来ないほど」

そう言うと医師はわたしのシャツをまくり上げてお腹の上から手でなぞった。

「ベッドの上に仰向けになってシャツをまくっていてください」

先生は、わたしの腹を押したりもんだりしながら、様子を確かめた。「少し黄疸が出ていますね。この状態で発熱すると生命に関わります。……看護師さん、採血の準備と、内視鏡室の予約を入れてください。大至急で」

「はい」

横にいた看護師の女性は、手早く内線電話を掛けて内視鏡室の空き情報を確かめた。三十分後に使えるという返事が返ってきたようだ。わたしはそのまま半ば強制的に入院することになった。血液検査の結果からも、肝臓の機能障害の疑いが濃かったからである。

内視鏡検査の結果、胆石によって胆管の閉塞を引き起こしていてそれが、肝臓の機能障害の原因になっていた。

内視鏡を飲み込むときにのどにかけられた部分麻酔のせいでしばらくは、眠気がし、意識がもうろうとしていて、病室に入ったことを認識できないでいた。

ふと気づくと、ここがこの病院の五階の病室で部屋には自分を入れて三人だということがわかった。一つのスペースは空いていた。

食事の時間になると、妙に目がさえた。

別に食べたいわけではない。点滴にブドウ糖が入っているらしく、空腹感があまりわいてこないのだ。でも、食事というと他の患者さんには、楽しみの時間らしく看護師さんが持って来てくれるのを嬉しそうに受け取り、冗談を言ったりとそれぞれ、入院ライフを満喫しているようなのだ。わたしは一人疎外感を味わっていた。

それに引き替え、わたしはというと、鼻からチューブを通されそれが胃から十二指腸を経由し胆管まで伸びていた。内視鏡でそこまで挿入したらしい。麻酔から覚めたとき、自分のつばを飲み込むのにもチューブが鼻に引っかかる感触がし、とてもではないが、食事の時間ほどむなしいものはなかった。

「出来れば、感染予防の観点からも、経口食の方がいいんですがね」

巡回に来た、先生はそう言った。そりゃあ、口から食べる食事の方が、栄養価は高いし、雑菌の感染を気にしなければならない点滴に比べて衛生管理に気を配らなくていいし、と、利点は多かった。しかし、とてもではないがそんなことは出来ない。鼻からのどまでチューブを挿入された状態で水を飲むことを想像してもらいたい。美味しいとかそう言う次元を通り越し、苦行ですらあるだろう。

「じゃあ、もう少し点滴を続けますね。肝機能が正常に戻ったら、外科に転科して手術で胆管を切開することになると思います」

先生の言うことはわたしを落胆させることばかりだった。

外科手術となると一ヶ月かそこら、入院生活は長引くであろう。再就職の決まった矢先に長期入院など、ついてないことと言えば、考え得る限り最悪のものだった。しかし、先生の言うとおり、生命に関わると言われれば、はいそうですかと言わざるを得ない。命あっての物種である。

朝七時に起床した後、七時半に朝食、八時過ぎから、担当医師が順に回診し、その後は完

全な自由時間となる。もちろん、勝手に外出できないから、院内だけの自由である。テレビを見たり、ある人は、朝刊を頼んでいた。これは有料だ。

薬のせいか、どうだかわからないが、とにかく暇に感じる。

テレビなどもあまりおもしろくは感じなかった。特にワイドショーはくだらなく感じてしまう。こうした隔離空間にいると、外部の世界を賑わしている話題になど関心がなくなってしまうのかも知れなかった。だからかもしれない。それに反して、主人公の意識に完全に感情移入してしまうドラマや映画などはおもしろく感じた。普段なら絶対に見ないような幼稚な筋書きのドラマにすら、ほんのひとときの間のめり込むことが出来た。

ある時、転機が訪れた。

八時の毎朝の回診の後、八十歳くらいのおじいさん先生が回ってきたのだ。筋張った手で、わたしのまるまる太った腕から脈を取り、口を覗き、目をペンライトで照射して、ふむふむと相づちを打っていった。

「少し黄疸が出ていますね。まだ、かかりそうです。お大事に」

そう言って、隣の人に移っていった。

部屋の三人を診察すると部屋を出て行った。

「あの人見たことないな？」

誰ともなしに疑問を口にした。わたしは入院三日目だから知らなかったが、一ヶ月前から入院している斜め前のベッドの人が、これまで見たことのない人だという。転勤してきたにしてはえらく年寄りだった。

「ひょっとしたら、院長先生なのではないでしょうか？」

わたしがそう言うと、隣のベッドの男がせせら笑った。

「院長はもっと若いで。それに外科の先生や。内科やあれへん」

「そうなんですか？」

「そうや、それに、看護師をいつも四、五人引き連れて歩いてはるわ」

「へえ」

――じゃあ、何者だったんだ？

わたしは疑問に思った。

脈を取られたときの、柔和な笑顔が、そのおじいさんをベテランの医師のように思わせていた。男の言うように看護師は一人もついてきてはいなかったし、器具と言えば、聴診器だけという簡素さだった。でも、医師でもないのに朝の回診に加わる必要性が見つからない。わたしの頭の中では十分に院長先生に足る存在になっていた。

その夜、急に同室者が増えた。

ばたばたと、看護師さんが出入りし、わたしの向かいのスペースを整理すると、点滴につながれた見るからに重症そうな患者がベッドに乗せられたまま運び込まれてきた。麻酔が効いているのか、意識もなかった。我々の好奇の目からそらすように、看護師はさっとカーテンを閉めた。しばらくして、内科の小川先生が来て、しばらく様子を見ていたが、十二時を過ぎる頃になると、わたしはいつの間にか眠りに落ちていた。

翌朝、向かいのベッドの男は、目を覚ましていた。

食事は、わたしと同じように点滴だけの栄養補給のようである。従って、他の二人が何やら美味しそうな病院食（実際には美味しくないことが分かるのはもっと後になってからのことだ）を食べているのを羨ましそうに見つめていた。

「どうも、虻川蜂夫といいます。肝臓癌らしいんですわ」

その男は自己紹介した。不思議と病院では、名前と病名を自己紹介の時に述べる人がいる。癌というと、いかにも自慢げで、単なる胆石で入院しているわたしは思わず引いてしまった。

「じゃあ、手術なさるんですね？」

「そうでっせ。でも、手術して摘出してしまうのが一番ええんでっしゃろけど、今ひとつ、お腹を切られることに抵抗がありますねん。怖わおますやろ？」

「え、ええ」

確かに今のところ、内科的治療だけに専念しているわたしにとり、今日明日のことではなかったが、何週間か後になり、肝臓の具合がよくなれば、内視鏡手術にせよ開腹手術にせよお腹を開かなければならなくなるのだ。虻川という男と状況は変わらない。

喋っていると、小川先生が朝の回診に訪れた。

「山田さん、もうすぐ手術出来ますよ。もう一息です。頑張りましょう」

カルテを見ながらそう言った。

わたしは少し恐ろしくなった。

「先生、手術で後遺症とか、または、手術中に死んでしもたりゆうことはないんでっしゃろか？」

「ほとんど大丈夫です。ただし、パーセントとしては幾分かありますよ。どんなことにも完全というのはないというのと同じです」

先生の気安い一言がわたしの心にずしんと響いた。

わたしの不安感はますます高まり、手術を回避したい一心に染まってしまった。

その朝も、院長先生が回ってきた。

柔和な笑顔でわたしの脈を取り、聴診器を胸と背中にあてると、うんうんとうなずき、大丈夫ですよと太鼓判を押した。何の根拠もない診断だが不思議と安心感があった。

「やっぱり手術には危険性が伴うんでしょうか？」

「あなたは大丈夫ですよ。しっかりして」

はっきりと断言した。

その後、わたしも虻川氏も無事に退院することが出来たのだが、退院に際して挨拶しに行ったときに、看護師長などに聞いても、その院長先生の正体はまったくわからなかった。了

カゴに入った三匹のアライグマ

カゴに入った三匹のアライグマ

トメ子は二十三歳の時に農家に嫁入りし、四十年間、文句一つ言わずに暮らしてきた。姑が生きている間は、しょっちゅう叱られ通しでいつもピリピリとしていた。それに加えて、夫は何も言わない人で、いいところもあるのだが、やはり、姑に対しては守ってもらいたいと思ったことは一度や二度ではなかった。そして子供である。三人の息子がいるが、どれも、親の言うことを聞かないで、勝手気ままに過ごしている。いい加減結婚して農業を継いでくれればいいのにと思うものの、中々いいようにはいかないものだ。

でも、そんな不足は、そのうち何とも思わなくなってきた。年を取ったせいもあるのかも知れない。長年、田舎で過ごすうちに、物事はなるようにしかならないと、達観するようになってきたのだ。

動物もそうだ。最初のうち、畑にアオダイショウが出てきたら悲鳴を上げ、鶏小屋で飼っている鶏がイタチか何かに食べられたときにもいちいちショックを受けていたものだが、そのうち、日常茶飯事となり何とも思わなくなった。今では畳の上にムカデが這っていても、庭先に蝮が出てきてもそう驚かなくなった。

今年の夏はいつもの年より暑く、梅雨もあんまり雨が降らず、作物にとっては厳しい年であった。秋の収穫時を待たなくても、四十年も農家の主婦をしていれば、今年の家計が厳しくなるのは予想がついた。

「そのくらいなんとかせい！ 主婦を何年やっているんや」

夫はそういうことしか言わない人だった。トメ子は気が塞いだ。なんとかせいと言われても、米価は下がる一方だし、野菜は高騰するだろうが、不作では何ともならない。裏の畑にトメ子が植えているナスビだけでも何とかならないだろうか？ トメ子はそれとなく期待を抱いた。もちろん、わずかなナスビだけでは家計の足しになど到底ならないこ

となど端 (はな) からわかっている。でも、少々傷があっても、直売所に持って行けばすぐに現金になるのだ。

裏の畑に出てみると、小さな黒い物体が蠢 (うごめ) いているのが目についた。思わずぎょっとして夫を呼ぼうかと、身構えた。

よくよく見てみると小さなアライグマの親子だった。トメ子が植えていた大切なナスビを小さな両手でつかみ、美味しそうに食べていた。そのとき、腹が立つどころか心の底から嬉しさがこみ上げてきた。今まで夫や息子達だって、トメ子の料理を美味しそうに食べたことなどなかったのだ。もっとも、トメ子だって義務として作っているに過ぎなかったのだが。今、自分の丹誠込めて作ったナスビをこんなに美味しそうに食べているアライグマが心底いとおしく思えた。

トメ子は家に戻り、テーブルの上からリンゴを持ってきて、アライグマの前にひょいひょいとかざしてやった。

「さあ、お食べ。ほらほら」

最初のうち、おっかなびっくりだったアライグマの母親はおずおずと手を出し、ぱっと引ったくるようにしてリンゴを手に取るとぱっと、トメ子から離れていった。そして、安全な距離を保ち、そこでリンゴを食べ出した。親子でリンゴを食べる姿が何とも言えず可愛らしい。

それからも、アライグマは毎日のようにやって来て、トメ子に餌をねだるようになった。そんなアライグマが可愛くなり、トメ子もその事に、日常生活でついすさみがちな心を癒される様になっていった。

よくよく見ていると、アライグマは餌を食べるときに、水でバシャバシャと洗うような仕草をする。

「だからアライグマというんだかねえ」

トメ子は返事をするはずのないアライグマの親子に語りかけた。

そのうち、トメ子の畑で取れた作物を直売所で売ることはどうでもよくなってきた。

ある日、夫が農協からの知らせを受け取って帰ってきた。

「おい、うちに害獣は出とるか？」

「ガイジュウ？ 何それ？」

トメ子は何のことかわからない顔で夫に聞き返した。夫が聞いてきた所によると、何でも、今年になりイノシシやシカが民家の近くにまで出没し、庭先の柿の木やら、果ては畑の作物を荒らすようになり、県内の被害総額は億単位に上っているという。

「それで、うちの近所ではアライグマが出とるそうや。捕獲せなあかんねん。ワナを仕掛けるにはどこがええやろ？」

「捕獲って、捕まったらどないなるん。かわいそうやん？」

「そら、害獣やからな。保健所に行って殺処分されるに決まっとるやろう」

それを聞き、トメ子は真っ青になった。あの可愛いアライグマの親子が捕まって殺処分になるなど聞くだけでもかわいそうだし、今や、彼らの存在がトメ子に取り心の拠り所にもなっていたのだ。

「お父ちゃん、やめてよ。うちの被害額なんて、それこそわたしのへそくり分くらいやし、そんなことで殺生なんかしとうないわ」

「そんなんいうたかて、村で決めたことや。うちだけ従わんと、……仮に他の所に出ていた害獣が全部うちに逃げ込んでみいや、大変なことになるやないか」

夫に押し切られる形になり、次の日、軽トラックに乗せられて、アライグマ捕獲用の大きなカゴが運び込まれ、裏庭に設置された。中には餌になる果物が金具に引っかけられ、それに釣られて入ってきたアライグマが餌に手を触れるとガシャンと扉が閉まる仕掛けになっている。このカゴが裏の畑の入り口の所に、無造作に仕掛けられた。トメ子は胸

を締め付けられる思いで成り行きを見守った。

「すぐにかかるで」

「そやそや、今年は山に餌が少ないらしいからな」

息子達はそんなことをいいながら、汗をふきふき、母屋へと戻っていった。トメ子は忌まわしいものを見る目で、ワナとなるカゴを見つめていた。――入っちゃ駄目だよ。アライグマさん。心からそう願った。

何とか、ワナが作動しないようにする手はないものだろうか。そんなことを考えた。餌を取っても、ふたが閉じないようにすればいいわけである。ふたの所を針金か何かで縛り付けておくのはどうだろう？ でも、そんなことがばれたら、自分が夫に叱られてしまう。それはそれで怖かった。

次の朝、皆が起き出す前にトメ子は目が覚めた。虫の知らせというやつである。寝間着から普段着に着替えて、作業靴を履いて裏の畑に出て行くと、作物の葉は朝露をあびてしっとりとしていた。ズボンの裾を朝露でぬらしながら、カゴを仕掛けてある柿の木の根元に行くと、中で蠢いている黒い動物の姿を認めることが出来た。アライグマだった。

案の定というべきか。見事に夫の目論見通りワナに掛かっていた。それも、親子いっぺんに、大きいのが一匹と小さいのが二匹、合計三匹がカゴの中に入って出られないでいる。餌のリンゴはちゃんと食べていたようだった。

トメ子の心は痛んだ。

――こっそり逃がしたらええやんか。そやけど、……

すでに、アライグマはあちこちの畑を荒らし回り害獣として駆除対象になっていた。自分がそれに協力的でないばかりか、捕まえたものを逃がしたと知れたら、夫が怒るのは目に見えていたし、この村でも白い目で見られるのも容易に予想できた。

「あかん、……やっぱりかわいそうや」

みすみす保健所送りになる目の前のアライグマの親子がやっぱりかわいそうになり、トメ子はカゴの扉に手を掛けた。がしゃん、と、音を立てて扉が開くと、警戒感からかアライグマはカゴの奥へと待避し、背を低くしてふうっと息を吐いた。

「さ、はよ逃げ。命がなくなるんやで。さ、おいで」

トメ子は手招きしてアライグマをカゴから追い出そうとした。

五分か十分くらいかかったであろうか。ようやく、アライグマはカゴから出て、一目散に裏山の方角に駆け、去っていった。後には餌のないカゴだけが残された。このままでは、餌だけ取って逃げていったみたいだった。少し不自然だった。餌を取れば、バネ仕掛けで扉が閉まる構造になっているのだ。トメ子は台所に行き、リンゴを二つに切って来て、また、カゴの中の鈎に引っかけた。この夜の間に、何も来なかったかのように装った。

六時頃、夫が起きてきて、昨日の成果を確かめに裏の畑に出て行った。

「あかんなあ、何にも掛かってへんかったわ」

と、心底残念そうに言った。

次の日も、トメ子はあのアライグマが掛かっていないか、気がかりでならなかった。頭のいい動物であることは、農作物の被害から明らかであったが、人間の知恵以上のものがあるかというと、少し疑問が残る。

朝、早めに起きて畑に行くと、昨日と同じようにアライグマが三匹ワナに掛かっていた。トメ子は昨日と同じように扉を開けて逃がしてあげようとした。が、アライグマは警戒心をゆるめずに隅っこに行き、ふうっとこちらを威嚇する。

ふと、トメ子は後ろを振り返ると、夫が怖い顔をしてにらんでいた。

「お前、何してんねや！」

「あ、お父ちゃん」

その日、トメ子はこってりと叱られた。了

毒蛇

毒蛇

トメ子は農家に嫁いで四十年になる。夫は優しい人で、力仕事は全部自分で引き受け、気の強い姑からも始終かばってくれたし、美味しいものは一番にトメ子に食べさせるなどしてくれる、文句のつけようのない伴侶だった。それに三人の子供にも恵まれ、今ではみんな独立して家庭を築いている。そろそろ、年中休みのない農作業が体に堪える年齢にはなったが、そのことを取り立てて不満に思ったことはなかった。

田舎のことであるから、周囲の農家との付き合いなど苦手なこともあったし、農作業の合間に出てくる蛇やムカデなどにもびくつきながらこれまで何とかやってきた。唯一文句をつけるとするならば、夫の趣味である「蝮酒」である。どんなものかというと、畑や藪の中で見つけた蝮を生きたまま焼酎の中に入れて浸け込んだものである。ちなみに田舎ではマムシではなくハメとも呼ばれる。

舅もやっていたから、古いものでは五十年ほど前からのも浸け込んであり、居間の棚の上には何十本もの一升瓶が生物標本の様な感じで並んでいた。

「おう、また、畑におったで」

夫が嬉しそうな顔で麻袋を手に母屋に戻ってきた。そろそろお昼の時間であった。

「何やのそれ？」

トメ子は嫌な予感にさいなまれつつ、夫の手にある麻袋をみた。それにはたっぷりとした質感があり、なおかつうようよと蠢いているようにも見えた。

「畑におったんや。危うく気づかんところやったわ。危ない危ない」

夫はそう言って赤黒く日に焼けた顔に深い皺を際立たせた表情になった。心底嬉しいときにはいつもこういう顔つきになる。彼は袋の中から器用に中身をつまみ上げた。袋の中に入っていたのは長さ六十センチほどで、頭部が小さく、太短い体型が特徴の蝮だった。茶色の身体に焦げ茶色の銭形模様が禍々しいイメージと威圧感を見るものに与える。蝮はトメ子の顔を本当に蛇のような冷たい目でにらみつけ、ちろちろと灰色の舌で威嚇した。トメ子もこれを見ただけで、顔から血の気が引いていくのを感じた。ああ、嫌だ嫌だ。

蝮酒自体の作り方は簡単である。

一升瓶の中で、二週間ほど餌なしで飼い、内臓に貯まったフンをはき出させ、しかる後、水できれいに洗い、上から焼酎を注いで浸け込むのだ。蝮は生命力が強いのか、二週間餌なしでも結構平気なようである。

夫は嬉々としてこの作業をこなしていき、コレクションのように並んでいる棚の隅っこに新しい一本を付け加えた。ちなみに、時々は飲んでいることもあるようなのだが、本当は美味しいことなどなく、知人に見せて自慢するだけのために集めているだけのような気がする。

そんなある日、八月の暑い日の午後のこと、昼ご飯の洗い物を片付けて、テレビの連続ドラマを見てから午睡を取ろうと居間に行くときに、違和感がした。いつもと同じ風景なのにどこかがおかしいのである。いつもと同じ台所。冷蔵庫に流し台。テーブルにチェア、安っぽいクッションとマット。冷蔵庫の上には白木で出来た神棚があり、隣り合う居間の棚には見たくもない蝮酒の「コレクション」が並んでいる。確かにいつもと同じ風景だった。いつもと！

「あっ！」

トメ子は一瞬息をのんだ。

この間増えたはずの一本の一升瓶のふたが下に落ちていたのだ。焼酎の量も幾分減っていた。それに、中にいたはずの蝮がいなくなっている。

「え、うそ、どこに？」

トメ子はヒヤリとした視線を感じた。ぎーっと、この部屋のどこかに潜んでいるハ虫類特有の冷たい目がにらみつける。

「ちょっと、お父ちゃん！ 大変！」

「何や、騒々しい」

すでにこっくりこっくりと午睡タイムに入っていたのをたたき起こされ、夫は不機嫌そうな声で台所に入ってきた。

「あ、あれ」トメ子は震えながら棚を指さした。「蝮がおらん。どこへやったん？」

「あ、ほんまや。逃げたんやろか？」

彼はぽりぽりと白髪頭をかいた。トメ子が詰め寄るもんだから、仕方なしに辺りを探しているという感じである。まったく誠意というものが感じられなかった。

「ちょっと、真剣に探して。もし、お父ちゃんのおらん時に台所に出てきたらどないしようもあれへんやんか！」

田舎の農家の母屋のことである。通気性がいいこととは裏腹に、これまでにも、アオダイショウやムカデが入ってきた経験があった。その度ごとに大声を上げて、夫に助けを求めている。屋根裏にはコウモリやフクロウまで巣をしていた。トメ子はそんなもの大嫌いなものだから、その度ごとに文句を言った。共存共栄していけばいいのであるが、生理的に受け付けないものはしょうがない。

「まあ、そのうち見つかるわい。出てきたら手え出したらあかんで、すぐにわしに言い」

「もう！」

しばらくの間、食器棚の隙間や冷蔵庫の裏側などを探していたが、そのうち夫もあきらめて午睡に戻ってしまった。

トメ子も午後からの農作業に備えて、少しでも昼寝をしておこうと思ったが、目をつぶると頭の上に蝮が落ちてくる気がして、眠ろうにも眠れなかった。

十五分の短い午睡の後、トメ子と夫はそれぞれ出かけた。トメ子は畑の草取りをしなければならない。ゴム長とゴム手をはめて歩いて草むらと化している畑に入っていった。

夏場の畑は放っておくと、肥やしが効いているせいか作物の倍も三倍も雑草が茂ってくる。トメ子はゴム手をはめた手で、ごっそりごっそりと草取りをはじめた。

――ああ、腰が痛くなってくるわ。ときどき、手足を伸ばし、こりをほぐす。

トマトの枝をよけて雑草をごっそりと引き抜いたとき、こちらを見つめている視線に気づいた。蛇のように冷たい目だった。

視線の主はぎいいっとにらみつけ、威嚇しながら灰色の舌をちろちろと出した。

「きゃあ！」

トメ子は思わず手をひっこめたが、それより先に蝮はぐんとジャンプし、飛びかかってきた。がぶり。

ゴム手の先がちくりと痛んだ。

「あ、痛い、痛たた」

蝮は平然としてうねうねと体をくねらせ、草むらの中へと帰って行った。まるで、焼酎漬けにされた恨みを込めたかのような一撃だった。咬まれた右腕は付け根の所から見る見る腫れていった。

――はっと気づくと、蝮はどこにもいなかった、どうやら夢の中のことらしかった。

急いで起き上がり、咬まれた指を見た。

うっすらと型がついているが、咬まれた形跡はなかった。ほっとした。

「お父ちゃん。お父ちゃん」

トメ子はまだ寝息を立てている夫の肩を揺すった。彼はぐずずずといびきをかいていた。

起こすのを諦め、忍び足で台所に向かって歩き出した。手には殺虫剤とはえたたきを持っていた。蝮に効くのかどうかは問題ではない。素手で立ち向かう勇気がない以上、何か手にしないと不安だった。あの蝮は確実に台所か居間のどこかに潜んでいるのだ。今もじっと息を押し殺し、トメ子達に復讐する機会を窺っているはずだ。あの冷たい蛇みたいな目、一度にらまれたらどうにも動きようがなかった。普段はすばしこいネズミや蛙も、反撃の隙を与えずに飲まれてしまうのだ。それほど威嚇の効果は凄まじいものがあった。

棚の下の床に顔を近づけ、焼酎の滴った跡がないか確かめてみた。

入れてすぐのものだから、きついアルコール臭がするはずだ。微かにトメ子の鼻に感知することが出来た。ずるずると、這いながら一升瓶のふたを持ち上げて、ぬるりとアルコールを滴り落としながら瓶から脱け出す蝮の姿が想像できた。

そして、ぼたりと床の上に落ちてきたのだ。しゅるしゅるしゅると蛇行しながら流しの下辺りに潜り込んだかも知れない。トメ子は視線をその先に走らせた。

流しの下には、配管と洗剤が詰め込んであった。恐る恐る扉を開けた。何もいなかった。念のため、洗剤のボトルをのけてみる。ここにもいなかった。

「おい、何してんねや？」

背後から夫の声がした。トメ子のガタゴトいう音に目を覚まされたようだった。見るからに不機嫌そうだ。

「蝮探してんの。不安で寝られへんやんか」と、トメ子は文句を言った。

あの蝮を見つけて駆除してしまわない限り、おちおち家事も出来ないどころか、睡眠も

取れないのだ。文句をいうと、夫は一緒になりそこら辺をまた探し始めた。

二人が一生懸命、床板に這いつくばっていたとき、蝮は天井の梁にまといつき、ちろちろと灰色の舌をちらつかせていた。蝮はぎいいっと二人を威嚇した。トメ子は震え上がって夫の腕にしがみついた。了

死神の頼み事

死神の頼み事

病院では毎日誰かに、お迎えが来て、悲しみも冷めやらぬうちに、葬儀社の熾烈な営業合戦が、ご遺族の目の届かない範囲で繰り広げられる。この業界には、競争入札というものは存在しないから、ほとんどの場合、一番最初にお迎えが来たことを嗅ぎ付けた者の勝ちということになる。しかし、昨今では、生前から葬儀費用を積み立てて、あらかじめお通夜から、葬式、初七日までの一式をコースで遺言ならぬ「予約」なさっているお年寄りも増えている模様である。

しかし、わたしの属している会社は旧態依然として、病院の集中治療室（ＩＣＵ）などに犯人を見張る刑事さながら、張り込んでお亡くなりになるその瞬間に営業を掛けるということを繰り返していた。

その二十四時間戦っている、営業マンの中でも、わたしが優秀な実績を残しているのは、「死に神」と友達だからだ。死に神がどんな姿をしているかというと、一言では言いにくい。ごく普通のおっさんであり、おばはんであり、その時々により姿を変えて、病院内、いや、出没範囲は病院とは限らないのだが、まさに、神出鬼没に現れたりする。その気配を感じることが出来たとき、わたしは初めての客（ご遺族）から受注（お葬式のご依頼）したのだ。

死に神は、死ぬ瞬間に現れることもあれば、かなり前から出没することもある。

医師から、「余命三ヶ月ですなあ」と告げられたときには、大抵、背後に死に神が立っていて、患者の肩に手を掛けているものだ。そして、医師より正確に亡くなる日を当ててくれる。魂をあの世へお連れするのが彼の仕事なのだから、これは正確きわまりない。

そんな訳で、わたしは楽をして、どんどん仕事を取り、営業所の中でもトップクラスになっていた。末は営業所長の椅子が待っていたと周りの皆が思っていたに違いない。

転機が訪れたのは、今年の八月だった。

夏場に急に体調を崩したりしてお亡くなりになるお年寄りは結構多いものだ。わたしも、他の社員と同様、連日のように営業に回り、毎日のようにお葬式に従事していた。

ある日、営業所の所長から、「山田君、少し顔色が悪いんじゃないのか？ 無理をしてはいかんよ。暑いから無理をしないようにね」

「はい、でも、仕事が楽しくて」

「そうは言っても、君が幽霊になってもらっては困る。早めに病院に行って検査をしてもらってきなさい。仕事時間中に行ってもいいから」

そこまで言われては、病院に行かない訳にもいかなかった。

でも、普段、営業で回っている病院には行きにくいものだ。普段は行かない、隣の市の病院に電車で出かけることにした。普段は会社の名前の入ったバンで移動しているから、電車に乗るのも久しぶりだった。二十四時間態勢の辛さが今さらながら、身にしみてきた。

その病院でも、あちこちの病室で死に神に肩をつかまれている人を見かけた。これはお年寄りに限らない。免許取り立ての若い人や、一見健康そうなサラリーマン、皆、何らかの病気を抱えていた。

でも、今日は、仕事で来たのではない。わたしは、初診受付で、健康診断の申し込みをした。

「どこか、お悪いところがおありですか？」

受付嬢は前もって聞いておこうと、問診票も差し出した。最近眠れないとか、体が重たいとか、頭痛がするとか色々自覚症状が書いてあり、まるをつけるようになっていた。わたしは思い当たるふしのある項目にまるをつけ、保険証と一緒に提出した。

最初は検査部に行くよう指示を受け、採血されたり、心電図を取られたり、胸部Ｘ線写真を撮られたりし、その後、しばらく待つように言われた。

普段は、あちこち走り回っていて慌ただしい毎日を送っているせいで、急にすることもなく待たされると、所在なさげに、待合いに置いてある新聞か週刊誌でも読むしか時間のつぶし方が見つからなかった。子供は泣いているし、年寄りは咳き込んでいるし、どうしようもなく、居場所のなさを感じさせる場所だった。よっぽど、いつものお葬式の現場の方がましだと思った。

間もなく内科に呼ばれた。

「えーと、山田悟 (さとる) さんでしたね。おかけ下さい。ここのところ、……」医師は首に提げていた眼鏡を掛けた。わたしのさっき書いた自覚症状を記した問診票を手にしていた。そこには、さっき、いつも体がだるいとか、肩が重く感じるとか書いていた。「血液検査では肝臓が悪いですね。いつ頃からそんな症状が出ていましたか？」と尋ねた。

「さあ、ここ半年ほどのことだと思います。ちょうど仕事に慣れて、……」

いや、実を言うと、死に神と友達になってからだった。仕事が取れるのはいいことだったが、体がやけに重たく感じ始めたのだ。しかし、そんなことを医師に言うわけにはいかない。

「いけませんね、今日は帰す訳にはいきませんぞ。入院してもらいます」

「ちょっと待ってください。そんなに悪いんですか？ それに、仕事があるんです」

「仕事？ あなた、自分の命と仕事とどっちが大事ですか？」

そりゃあ、どっちも大事だ。が、医師を前にして、答えられなかった。正直なところ。

「具体的にどういう病気なんですか？ 会社に報告する手前、何か病名を告げないと」

「一言で言うと、肝機能障害です。他に多臓器不全もあります。夕方にでも、細胞を検査

して悪性腫瘍でないか確かめないと危険なことになりますよ」

「ええ？」

ちょっと検査してもらって、そのまま帰るつもりが大変なことになってしまった。会社のクルマで来なくてよかったと、つまらないことを考えたが、それどころではなかった。

おい、死に神よ、俺の寿命はどうなっているんだ？

夜、消灯時間が過ぎ、看護師が各部屋の電灯を消して回った。明かりは廊下の非常灯だけになり、本も読めなくなった。

ふと、枕元を見ると老人の姿になった死に神が姿を現した。

「おい、大変なことになったぞ！ どうしてくれるんだ」

「ふふふ、お前さんはこの病気では死なんよ。高度先端医療とかで治癒するんじゃ」

「本当か？」

「まあ、明日の医師の診断を聞いてみな」

死に神の言うことは本当だった。次の日の医師の説明では、肝臓癌であることが告げられ、手術で切除することは困難だが、粒子線照射という高度先端医療を用いれば、生存率が格段に高まるという。わたしは、一息ついた思いだった。

「先生、是非お願いします」

「ただ、一つだけ問題点があって、現在、健康保険が適用されないのですよ」

「いくらくらい掛かるんです？」

「入院期間が三ヶ月くらいで、費用は五百万程度とお考え下さい」

わたしは、死に神の予言が本当に「死に神」のようだと思った。五百万円も貯金はなかっ

たし、……あるいは、退職金の前借りという方法もあったかも知れない。いや、もし、助かったとして、何年で返済するかという問題もあった。返しきるより先にぽっくり逝ってしまったら、それこそ、何をしていることやらわからない。

その晩、わたしは出てきた死に神に問い詰めた。

「俺があんたの姿が見えると言うことは、実は俺の寿命は、そう長くないと言うことなんじゃないのか？」

「ふぉふぉふぉ、……それは言えない。友人として」

すっとぼけた返事をした死に神の顔には明らかに嘘だと書いてあった。

「後、三ヶ月かそこらじゃないのか？ ええ？」

「そ、それは、……」

死に神は明らかに狼狽していた。

「どういうことだよ？ 癌は治癒すると昨日言ったよな？」

「あ、ああ」

「じゃあ、俺はどうなって死ぬんだ？」

「誰にも言うなよ。退院してすぐに、クルマの事故で、……」

「ああ！」

わたしは、気が動転した。だったら、高度先端医療など受けたって意味がない。五百万円という金で、遊ぶだけ遊んで、それで死んだ方がはるかにましだった。

「なあ、死に神が人生の成り行きを変えることは許されないんだよ。先端医療、何とか受けてくれよ。友達じゃないか？」

わたしは、「友達」の頼み事に少し心が揺らいだ。運命だとわかっていても、生きてみる

かと。了

冬眠から目覚めた朝

冬眠から目覚めた朝

ふと目覚めたとき、窓からきれいな桜並木が見えた。

わたしが入院していた西中央病院の中庭に植えてあったものだ。

横を見ると、ハイカラなデザインのバイタルメータが置いてあり、血圧、脈拍などが表示されている。中央の看護ルームでも監視できるようになっていて、わたしが目覚めたことは向こう側でもすぐにわかる様になっていた。

しばらくして、若い医師がやって来た。柄物のカッターシャツにシックな色のネクタイを結び、その上から白衣を羽織っていた。後ろには看護師が一人控えていた。

「山田さん、……気分はどうですか？」

「ええ、いいですよ。まだ体は動きませんが」

そう答えると、医師はわたしの右手に手を添えて脈を取った。そして、わたしに記憶障害がないか、特に念入りに調べた。

「あなたが五十年間眠り続けていた理由を覚えていますか？」

「はい、……悪性リンパ腫という難病を克服するのに、未来の最新の医療を受けるべく、冷凍睡眠装置に入ったのです。その当時、多分五十年後には確実に治癒しうる病気になっているであろうからと、当時の主治医の先生と相談して決めたのです。冷凍睡眠装置はまだ治験の段階だったけれども、わたしは、悪性リンパ腫で死ぬより、この装置の未来にかけたのです。それだけははっきりと覚えています」

わたしがぺらぺらと喋る間、医師は満足げにうなずいていた。確か、同意書にサインしたものが残っているはずだった。彼の後ろに付き従っていた看護師が分厚いファイルを持っていて、ある書類のページを開いて見せた。すっかり時代を経て黄ばんでしまった同意書用紙だった。

「いいでしょう、あなたは、五十年間冬眠していたのです。しばらくは運動神経も筋力も元通りと言うわけにはいきません。徐々に回復するので様子を見ましょう」

そう言って、点滴を確認し、病室から去っていった。

わたしはまだ自分の力で、体を起こすことは出来なかった。目に入るものだけ見ても、冬眠に入った五十年前とは何もかもデザインが異なっていた。そりゃあそうだろう、病院の設備など三年ほどご無沙汰していただけで、新しい機器がどんどん導入されたのだ。あの時代は少子高齢化、福祉化がさけばれてかまびすしかった。医療や福祉に膨大な国家予算がつぎ込まれた時代でもあったのだ。冷凍冬眠という医療とは言えない医療行為が考え出されたのもそんな時代の落とし子だったに相違ない。

やがて一週間も経つと末梢神経の先にまで力がよみがえってきた。まるで氷に閉ざされた新芽が春になり、表土から出てくるように。わたしはわずかな力を指先にかけて、電動ベッドで上体を起こしたり、自動車いすでトイレに行ったり出来るようになった。これらの機器には、指先の力の掛け具合が半導体素子を通して、モーターを動かす回路に結びついているらしく、自分の頭で考えたように動き回ることが出来た。昔だったら、まだ、介護なしには排便すら出来ないような体力であっても、これらの機器を利用して病院の同じフロア内であればどこにでも行くことが出来た。

何せ、暇である。

先生の診察時間が終わると、わたしはこの自動車いすに乗り、日光にあふれた談話室に行き、新聞や雑誌を手に取るようになった。最初は、これらの刊行物が紙でないことにとまどった。新聞というのは一枚一枚紙をめくりながら読むものだという認識であったから、Ａ４サイズの液晶パネルに文字データが入った真新しい媒体は最初は取っつきにくかった。

新聞記事はここ十年分くらいのバックナンバーも読むことが出来た。

わたしは暇なときに最新の記事と共に、過去の出来事を知るべく、新聞各紙を比較しながら世の中の移り変わりを把握していった。

「ここで調べ物をされると迷惑なんですけどね」

と、うるさそうな六十過ぎぐらいのおじいさんが、読書スペースにやってきて、わたしに、一人で液晶パネルを占領していることに文句をつけた。液晶パネルは五台ほど置いてあったが、どれも利用者がいた。見たところ、十分から二十分くらいで交代しているようだった。

「ああ、気づかなくてすみません。どうぞ」

わたしは素直に謝った。しかし、一見年長に見えたそのおじいさんだが、よく考えれば、わたしは三十五歳プラス五十年だから、わたしの方が年長なのだ。素直に謝って損したと思った。

それから、三週間ほどが経過し、わたしは主治医の谷先生から精密検査を進められた。

「体力は順調に回復しているようですね。いいことです。一度、患部も含めて検査したいのです。……というのは、冷凍冬眠していた間、リンパ腫も凍結状態にあったわけですが、山田さんの回復にあわせて癌細胞も活発化してくるのです」

「治るんですよね？」

それが一番の関心事だった。寿命を縮める思いで冷凍カプセルに入ったときの恐怖感も、癌が治ればと言う願いから何とか押さえ込んだのだ。ここに来て何ともならないという返事だけは聞きたくなかった。

「現在の技術では生存率は八十パーセントです。重粒子線照射でもって悪性腫瘍を重点的に焼き切ります」

「はい？」

五十年も冬眠して八十パーセントという数値は少し小さい気がした。風邪みたいなものですよ、と、そんな答を期待していただけに、失望感の方が大きかった。これでは、残りの二十パーセントの方に入ってしまったらどうなるのだろう？

「とにかく一度検査しましょう。いいですね？」

「はい、お願いします」

とにもかくにも、まずは検査からだ。

病室の中にロック付きの私物入れがあり、その中に、わたしは着替えや小銭入れの類を入れていた。しかし、五十年も経っているため、布はぼろぼろになり、小銭もさび付き、全てのものが用をなさなくなっていた。

わたしは、少し元気になった体で、自動車いすに乗り一階にある売店に行った。

ここは、品物だけは五十年前とは異なって見たことのないデザインのものばかりだったが、ジュースや牛乳、下着に歯ブラシなど入院に必要なものは何でもそろうようになっていた。

ここで、わたしはふと、商品につけられた値札を見て驚いた。

缶コーヒー一本に「一万エン」という。しかも、円ではなくカタカナでエンとなっている。売店の人に聞いても、怪訝な顔をされるだけだった。

わたしは取り敢えず、広間に舞い戻り、新聞のバックナンバーを調べた。

この不思議な空間に何が起こったのか、自分なりに調べなければ気が済まなかった。

事件はちょうど三十年前に起こっていた。

ふくれあがった国債残高を一掃するために政府が紙幣を大量に増発し、その後スーパーインフレが起こっていた。それまでの円は紙くずと化し、新たに一千万円を一エンとするデノミが行われた。その後、三十年の間に物価は上昇し、缶コーヒー一本が一万エンするにいたったというのが事の真相らしかった。

わたしは段々と心配になってきた。

元々、わたしは高度医療保障対応の保険に入っていた。今のところその会社が倒産したという情報は入っていない。だが、五十年前に一千万円までの保証だったのだ。当時としてはそのくらいあれば、大抵の高度医療が受けられるとされていたのだ。その夜、お金の心配をし始めると一睡も出来なくなった。

次の日の朝、看護師がわたしを迎えに来た。

「山田さん、ご気分はいかがですか？」

彼女の日本語には少し訛りがあった。ネームプレートにはナタリア・ロドリゲスとあった。そう言えば、これまで何人もの看護師が交代勤務に就いていたが、一度として日本人看護師には当たらなかった。

彼女はわたしをベッドごと検査室に運び込んでくれた。目の前にあるのは、大きな白いカプセルでこの中に入ると丸ごと検査することが出来るそうだ。しばらくすると、検査が終わったらしく担当の谷先生がやって来た。

「腫瘍の位置は五十年前のままのようですね。すぐに重粒子線治療に移りましょう」

「あの先生？ 治療にはどのくらいの費用がかかるんでしょうか？」

「はい？」

わたしは、先生に保険のことを正直に話した。

「ああ、ご心配なさらないで下さい。現在では健康保険が適用されるのですよ」

わたしは心底ほっとした。「健康保険には入ってますよね？」

「あ！」

この五十年間、健康保険料を納付していなかった。了

目からウロコ

目からウロコ

暮れも押し詰まった十二月十四日の夕方になり、田舎で農業を営んでいる叔母から電話があった。何でも、叔父が所属している釣りクラブから船を出して釣りに行き、鯛とシマアジを一杯釣ってきたそうで、そのお裾分けと言うことだった。

わたしが、受話器の送話口を右手で押さえ、妻の顔を見ると嬉しそうに、うん、うんとうなずいた。もらえと言うことらしい。しかし、である。鯛など、これまでスーパーの魚売り場で短冊状に加工されたものや、正月の焼き鯛などあらかじめ調理されたものしかお目に掛かったことがなかったのだ。叔母の口ぶりでは、四十センチほどもある大鯛だという。わたしは一抹の不安に駆られた。

「叔母ちゃん、ありがとう」

「ほな、息子に届けさすわ。待っとき」

そう言って、電話が切れた。

叔母の家は田舎とはいえ、わたしの住んでいる郊外のニュータウンともクルマで二十分ほどしか離れていない。しばらくして、従兄弟が大きな段ボール箱を持って来てくれた。

「鯛なんてすごいなあ。釣るの大変やろう？」

わたしは、彼に聞いた。

「いや、沖合の生け簀に放し飼いにしてあるらしいんや。船から簡単に釣れるらしいで。よう知らんけど。あはは」

そう言って、快活な笑みを浮かべた。彼は最近結婚したばかりで、早く帰りたそうだった。あまり引き留めるのも何なので、簡単にお礼だけ言い、その段ボール箱を受け取った。そのとき、ずっしりとした重みを感じた。鯛が二尾に、アジが二尾のはずだった。お正月の焼き鯛は軽いものしか経験がない。この鯛が途方もなく大きなもののように感じられた。

ぶるん、と、彼はエンジンを掛け、窓越しに手を振ると、ウィンカーを出し、メイン通りへとクルマを向け、行ってしまった。

さて、これからが問題である。

段ボールを開けると、ビニール袋に入ったずっしりとした鯛とシマアジが入っている。わたしは恐る恐る右手をつっこみ、鯛のしっぽ辺りをつかんで、持ち上げようとしたが、脂でぬるりと滑ってもちあがらない。あまり力を入れると身が崩れるのではないかと躊躇したが、鯛は身が固いと思い直し、ぐいと力を入れてつかみ、一気に持ち上げた。

目の前に現れたのは、釣りたての淡いピンク色の身をした真鯛だった。

「わぁ、すごい。大きい！」

妻ははしゃいだ。「これ、お刺身にでも出来るんとちゃうかしら」

――誰がするんだよ？ と、わたしは思った。

すでに、わたしの左手は鯛のぬめりでべとべとになっていた。身はたっぷりとついている。それだけ脂がのっているということだった。美味しいに決まっていた。このままでは作業にならないので、一旦石けんで手を洗おうとしたが、それだけではぬめりは落ちなかった。何だろう？ クルマのワックスで汚れたときの感触に似ていた。あれも、石けんなどでは簡単に落ちない。ただひたすらこするしかないのだ。工場に置いてある強力な洗剤なら割と簡単に落ちるかも知れないなと想像を巡らしているとき、妻が背後から声を掛けた。

「ねえ、これ全部さばけるのん？」

「誰が？」

「あなたしかいないでしょ？」

「おいおい」

結局、わたしは、鯛をさばくことにした。このままではガスコンロの魚焼き器にも入らないので、ウロコを取り、内臓を取り出し、切り身の状態にまでさばかないことにはどうしようもない。

まな板を取り出し、流しの上に設置し、濡れた布巾を滑り止めにしてその上に、水を一通り流して、鯛を置いた。流石に三十センチ級の鯛だった。見るものに威圧感さえ感じさせる。わたしは鯛の身を押さえるときに、鯛の生命感に押し返される気さえした。

包丁を手に取ろうとし、少し違和感を覚えた。

「おい、この包丁でさばくんか？」

「あれ、わたし、お魚さばいたことがないから……」

魚をさばくには出刃包丁、刺身にするなら柳刃包丁と昔から相場が決まっている。手にしていたのはいつも使っている刃のちびた文化包丁だった。こんなものでは、鯛の皮を貫き通すことすら出来はしない。

わたしは、台所の流しの下にある物入れの中を探した。色々、ごっちゃになって入っているが、アイディアグッズの類ばかりで肝心の出刃包丁が見つからない。取り敢えず鯛のウロコを取らなければならないので、妻には周りに古新聞を広げておくように頼み、わたしは、あまり使わない物入れの工具箱の中を探すことにした。

古い新聞紙と、黄ばんだ油紙にぐるぐる巻にされ、厳重に紐で縛ってある包みが出てき、その中から、昔、父が使っていたと思われる真っ赤にさびた出刃包丁のセットが出て来た。

「うわぁ、こりゃひどい。研がなきゃ」

「電動の研ぎ器ならあるわよ」

妻は流しの下から、昔、通販で買った回転砥石の電動刃物研ぎ器を取り出した。コンセントをつなぎスイッチを入れるとグイーンと音がし、その回転する砥石に刃物部分を当てると見る間に金属の輝きを取り戻す。あっという間に、さびた出刃包丁は切れ味鋭い業物 (わざもの) へと変貌を遂げた。ついでに柳刃包丁も研いでおく。

まずは、ウロコを落とす作業からだ。鯛のウロコは大きくしかも硬い。透明でプラスティックの円盤のようだ。食べるときに残っていると一気に興ざめになるほどの障害物となる。わたしは頭の部分をしっかりと左手で押さえ、出刃包丁の刃をしっぽの方から頭の方に向けて滑らせ、ごしごしとウロコをはがし始めた。バリバリ、バリバリ、という音がして周りにウロコがはじけ飛んでいく。わたしは、身を押さえた。むにゅっとした感触が、うちで飼っている愛犬の背中の柔らかさと似ていることに気づき、にやりとした。どちらも脂と身がたっぷりということだ。もっとも、愛犬の方は何も知らずに庭でうろうろしながら、夕方の散歩と晩ご飯を待っている。

つまらないことを考えていたせいか、わたしは、汗が額から落ちてきたのを左手の袖で拭こうとし、顔を左袖でぬぐおうとした。そのときである。腕まくりしていた手首についていたウロコが目に入ってしまった。

「あ痛た！」

慌てて、水道で両手を洗い、目をこすろうとした。その瞬間、左目にしていたコンタクトレンズを下に落としてしまった。

「うわぁ、最悪や。コンタクトを落としてしもうた。お前探してくれ」

「えー！ 何やっているのん。不器用な人やね。まだ半身も終わってないやん！」

つまらないことで、夫婦げんかまで始まってしまった。

「それに、ウロコだらけで、わたし、近づかれへんやん」

彼女は冷たい言い方をした。それにムッと来たわたしは、もう、カチンとなり、包丁を片手に作業を再開した。こうなったら意地でも鯛をきれいにさばいて、後で彼女にねっちりと嫌みを言ってやるのだ。

わたしはむにゅっとした半身に手を掛け、出刃包丁の刃先でバリバリとウロコを落とした。これが終わると鯛の身を裏返し、今度は反対面のウロコを落とす。段々と慣れてきた。そして、内臓を取り出すために、えらに指をかけ、包丁の切っ先を腹に突き立てた。腹の皮は厚く、強靱だった。出刃包丁とはいえ、簡単には突き抜けない。わたしの不器用な包丁さばきなどたやすく押し戻されてしまうほどで、まるでタイヤのゴムに定規を押しつけているような感覚だった。

押して駄目なら、……少し方法を変え、斜め上方から体重を掛けるように刃先を押しつけると、ぶすり、という音と共に刃先が腹の中に入っていった。そして、ちびた刃で引き切るように、そこから後ろに引いていった。内臓は思っていたのと全然異なり、ほとんどが脂肪の固まりだった。

「養殖物ってこういうものなんか……」

確かに脂がのっているが、運動不足で餌ばかり食べているのだろう。内臓脂肪は人間のメタボとそう変わらない。指先と出刃包丁の刃先で脂肪とわずかな内臓を掻き出した。ときどき、釣り針をかんでいるときがあるので注意しつつ、残った腸と卵巣を引っ張り出した。ここまでで三十分かかった。もう、意地である。一気にやってしまおうと思った。

次に身を三枚におろし、皮を剥き、柳刃包丁で刺身状に加工した。

「あなた、やるやない。すごーい！」

彼女は嬉しそうに声を上げた。

その割に、わたしの周りに敷き詰めてあるウロコの飛び散った新聞紙の近くには入ってこない。あくまでも、美味しい鯛の刺身だけ食べようという魂胆が見え見えだった。

「俺のコンタクトを探してくれないか？」

すでに、足元も周りも鯛のウロコが散乱してどれがウロコで、どれがコンタクトレンズなのか区別がつかなくなってきていた。

「あ、これかも？」

彼女が拾って、コンタクトを落として左目がよく見えないわたしに手渡してくれた。わたしは、礼も言わずに洗面所に行き、純水でレンズをよく洗って、左目に装着した。

「うわ！」急に辺りが白濁して見えた。彼女が手渡したのは鯛のウロコだった。了

パンドラの箱を開けてみれば

パンドラの箱を開けてみたら

二月の山道は寂しく、まだ木々の根元の日陰の部分には雪が残っていた。

わたしは、折り重なった落ち葉を踏みしめるように、ガサガサと音を立てて山道を進んでいった。時折、枯れ枝がわたしの腕や、顔に当たり、もうどうでもいいことなのに、血が出ていないか、手でこすって確かめた。

山頂が近づくにつれ、傾斜は厳しくなり、わたしは一歩、歩むごとに息が切れた。

「はあ、はあ」

吐く息は白く、空気がやけにきれいだった。こんなに澄み切っていたのかと改めて感動した。気分は晴れ晴れ、……してもよさそうなものだったが、山から見える荘厳きわまりない景色とは裏腹に、わたしの気分は鬱の極致にあった。

この半年にわたしを襲った事態――解雇、失業、一文無し、住所不定無職の肩書き、そして、ハローワーク通いと面接、断りの電話、絶望の日々。そして、これ以上あがいても、もうどうにもならないと達観するに至った。

それで、何のためにこの山を登っているかというと、別に悟りの境地を得ようとか人生をやり直そうとか、前向きなものではなかった。ただ、人目に付かず、首をつるのに枝ぶりのいい木がないかと、きょろきょろ探している間に、こんな山頂まで来てしまった次第である。

頂上は広く、周りの景色が見渡せるくらいの広場になっていた。

わたしは、リュックの中から、この山に登る前に、最後の食事にと思って買っておいた菓子パンを取り出した。

ふと、この菓子パンを買ったとき、パン屋のおばあさんから、心配そうな目で見られたことが気になった。

「はい、お釣り。あんた、まだ若いんだから、……早まったことしちゃいけないよ。ああ、ごめんなさい。余計なこと言ってしまって」

そう言われたとき、わたしは動揺した。なぜ、わたしがこれから自殺を考えているとわかってしまったのだろうか？ もし、今日の夕方になっても、わたしが山を下りてこなかったら、あのおばあさんは警察に通報するだろうか？

そして、その男（わたし）がそのまま自殺したことを知ったとしたら、そのおばあさんはどんなにか傷つくだろうか？

様々な思いが頭の中を巡った。

そんな悩みも一瞬でおさらばだ。

わたしは、深呼吸し、頂上に生えていた松の木に目をやった。太さもわたしの胴回りくらいあるし、枝も十分に太く、わたしの体重の支えられそうに見えた。もっとも、これまで何をやってもうまく行かなかった人生だ。いざとなると、ロープに体重をかけた瞬間、枝がぼきっと折れ、下に落っこちるかも知れなかった。わたしは、下に石がないか確かめた。

「おや？」

わたしは、手探りで落ち葉を払いのけたとき、その場所だけ少しこんもりと盛り上がっているのに気づいた。何かが下に埋まっているかの様だった。

「何だろう？」

どうせ、何も予定もないし、日が暮れた方が都合がいい。暇つぶしにわたしはその場所を掘り始めた。手頃な枝を拾ってきて、ざっくざっくと土を掘っていく。葉っぱの下は

腐葉土層で、柔らかいからすぐに掘り尽くした。その下は硬い土が固まっている。わたしはその棒きれを振り上げ、地面に突き刺すようにがっがっと食い込ませた。

何度目か突き下ろしたとき、土とは違う何かが埋もれているのを確信した。

わたしは、それを傷つけないように周りの土を掘っていった。

やがて、姿を現したのは石で出来た四角い箱だった。ふたと思われる四角い板には、何やら魔術めいた呪文のような文字が書かれた封印がしてあった。長い年月、この地に埋もれていたと考えられるのに、その封印は朽ちることもなく、水にふやけることもなく、この箱を何者かから守っているかのように見えた。

――開けてくれ。

天から声がした。少なくともわたしにはそう聞こえた。

「開けてくれだって？ 一体何が入っているというんだ？」

声はそれっきり聞こえなかった。

わたしは辺りをきょろきょろと見回した。気にせず封印に手を触れたとき、一陣の風がびゅうっと吹いた。あ！ と、思う間もなく封印ははがれた。そして、ひょろひょろと宙を舞い、山の麓へと消えていった。

わたしは、まるで見えない何かに導かれるまま、ふたに指をかけ、思い切り力をこめて持ち上げた。ずっしりとした重みはまるで金属製であるかのようだった。側に投げ捨てる。中をのぞき込んでみると、もやもやと、としか言いようのないものが詰まっていた。形があるようでいて、いざ形容しようとすると、まるっきり訳がわからなくなる。「混沌(カオス)」という言葉が一番ぴったりくるかも知れない。その混沌はゆらゆらと宙に浮かび、そして、人の形に変わっていった。

――悪魔？

「その通りだ、若造」

悪魔はわたしの意志を読み取ったかのように応答した。そう思うと、段々と悪魔の様な

形に変容してきた。いかなる形を取ることが可能なようだ。

「この世界に出られたのは久しぶりだ。二千年ぶりかな。礼を言うぞ」

「いいえ、どういたしまして。ところであなたは一体どなたです？」

悪魔はわたしの間抜けな質問は、無視して、山の頂上周りを二、三周、自由を楽しむかのように飛び回った。そして、思いっきり背伸びをし、（そのように見えた）口を開き、大きな雄叫びを上げた。

「ああ、気分がいい。お前はどうだ？」

「わたしですか？ 最低ですよ」

「ほほう、その言葉は、わしが大好きな言葉だ」

しょげかえるわたしをまるで悪魔のようにあざけった。そして、にやりと笑みを浮かべた。その瞬間、わたしの背筋にぞくりと悪寒が走った。まさか、この場で命を取られるのではあるまいか。さっきまで、ここで首をつることを考えていたのに、怖じ気づいてしまうほどの禍々しい笑みだった。

「この箱から出してくれた礼に、一つだけ願いを叶えてやろう。何でも言ってみよ」

と、悪魔にしては親切なことを言った。わたしは、少しだけ救われた気持ちだった。しかし、突然の申し出にわたしは何も思いつかなかった。一つだけである。仕事も欲しいし、住むところも欲しい（先日、住んでいたアパートを追い出されたばかりだった）、食事、着るもの、いやいや、自動車だって。

いや、これらを全て叶えるものがひとつだけある。お金だ。

「げ、げ、現金でもいいですか？」

わたしは、おそるおそる悪魔に質問した。

「何だ、そんなことか、欲のないやつだな」

悪魔は馬鹿にしたような目でわたしを見た。

「じゃ、じゃあ、い、い、一億円！」

「たったそれだけ？」

もっと、欲張っていいのか？ わたしは、浮き足だった。

「じゃあ、じゃあ、……一億、……ドル！」

一気にレートが上がったが、悪魔は平気な顔で、手のひらに緑色の紙を出現させた。

「ほれ、受け取れ。じゃあな」

その紙は、わたしの銀行預金通帳だった。悪魔はぱっと空高く舞い上がり、一陣の風と共に姿を消してしまった。一気に緊張がなくなり、わたしは脚から力が抜け、その場にへたり込んだ。

手にしていた通帳を開くと、確かに一億ドル分、八十億円が入金されていた。わたしの心はまるで宝くじを引き当てた老人の様な気分だった。

山を下りるときの足取りは軽かった。天狗さながら、段差を飛び越え、着地し、また飛び上がって、道行く人に「こんにちは！」と威勢のいい挨拶をした。こんなに前向きな気分になったのは、何年ぶりだろう。たかが通帳に記入された十桁のアラビア数字がこんなにも気分を高揚させるなど、まるで、いや、本当の悪魔のなせる技だった。

下界に下りてからと言うもの、わたしの気前はよくなった。

以前追い出されたアパートの隣の土地を買って、大きな家を建て、外車を買い、家の中の内装にも凝った。ソファやベッドはヨーロッパ製、高価なオーディオ製品やハイビジョンテレビ、そして、弾かないのにグランドピアノまで据え付けた。そのうち、習えばいいやと思った。

そんな、豪勢な暮らしが半年ほど続いただろうか。

ふと、テレビや新聞から、政情不安のニュースがしきりに伝わってくるようになった。しかも、世界中同時にである。日本でもあちこちで雇用を訴える暴動が起こり、政府の無策もあり、スーパーインフレ状態に陥った。物価は上昇の限りを尽くし、やがて、発効したデノミにより、わたしの持っていた八十億円は紙くずとなってしまった。

パンドラの悪魔は今日も世界中で混乱を引き起こしているようだった。了

「五時四十六分の時計」

「五時四十六分の時計」

神戸の市街地を一歩入った商店街や、小学校に五時四十六分で止まった時計がモニュメントとして置かれている。平成七年一月十七日に震災に遭遇した人々にとっては忘れえぬ、時刻であるが、当時を知らぬ人、地方にいたり、それ以後生まれた人にとっては余り馴染みのない時計である。

今年、大学を卒業した浩二にとっても、思い出深き時計であった。別に浩二の家族や親戚が震災の被害にあったわけではない。これを見ながら、少年時代から、学生時代まですごしたお陰で、時計の仕組みに興味を持ったからである。子供の頃は「何故、あの時間で止まっているの？」と言う問いに対して、大人は皆、あの震災の話をしてくれるのだが、その実感のない浩二に取っては、そんなことより、時計の中身がどうなっているかを知りたかった。

機械好きの少年として成長し、大学では機械工学科で機械設計を学んだ。そして、この春から、長野県諏訪市の時計メーカーに就職した。すでに、学生時代に少年時代の疑問に答えうる知識はあったが、時計は知れば知るほど、のめり込むに十分な興味の対象となっていた。就職先のメーカーでは新入社員寮に入り、職場との往復が彼の全世界となった。唯一の外部との接点は神戸の女子大にいる二個年下のガールフレンドの由佳である、彼女とは学生時代のサークル活動で知り合い、浩二が長野県に行ってからも、毎晩電話で話をしている。

今日も仕事が終わるとケータイにメールが入っていた。浩二はそれを見ると由佳に電話を掛けてみた。「よう、やっと仕事が終わった」

「仕事って言っても、まだ教育期間なんでしょ。何かやらせてもらってるの？」

「いいや、工具磨き位かな」

「でも、最初から設計なんてさせてくれる訳ないじゃない」

「そりゃそうだ。でも、教育の最後の教程では自分の引いた時計図面の加工と組み立てをやらされるんだ。それの精度がちゃんと出たら卒業だ。次の春からは工場勤務か、設計室勤務かわからないけど、一応新作時計にも関与させてもらえそうなんだ」

「じゃーあ、その卒業時計、あたしにくれない？」

「何するの？」と、浩二が聞いた。

「そんな冷たい言い方しないでよ、浩二との思い出の品にするの」

「え、由佳どっか行っちゃうのか？」

「まだ決まったわけじゃないけど、もう神戸に就職先なんてないじゃない。商社もなければ、出版社もない。あるのはハローワークと市役所だけ、でも、公務員試験なんて通るはずないしね」

「そうだな、神戸市内で探す方が難しいか？」

「うん、デパートの売り子さんならあるんだけど、四年制の女子大じゃこれも難しい」

「わかったよ、由佳にプレゼントするよ、どんなのがいい？」

時計の構造は百年前から、原理は二百五十年前から変わっていない。変えるとすれば、デザインだけだ。

「カルティエ見たいのがいいな……でも、そんなんだったら本物のカルティエがいいに決まってるよね。やっぱり浩二にしか作れない、しっかりした時計がいいよ」

「難しいな。まあ勉強してみる、そっちは卒業まではまだ、二年あるんだろ」

「あるけど、三年生の春休みから、就職活動するから、そんなに余裕はないよ。今は、それだけ活動したって、卒業までに決まらない人だっているんだから」

「じゃあ、上京するの？」

「分かんないけど、最後はそうするかも、出版社が希望なんだ」

卒業時計をプレゼントすることになり、次の日から、教育を受ける姿勢が変わった。それまでは、時計の構造はこうですよ、と言われるままにノートを取り、部品作りの実習をしていたのが、由佳のために、一生物の時計を作る気になったからだ。

機械式時計は、ぜんまいからの動力を輪列と言う四枚の歯車で増速し、脱進機と呼ばれるブレーキとリリースを兼ねた碇型の金具で、ぜんまいからの動力にブレーキをかけながら小出しにする、これにより一秒間に四コマ乃至八コマ進む、これを秒針の動力に使用し、今度はその動きを時計表面の文字盤の下にある歯車の列、日の裏装置と呼ばれるもので、六十秒で一分長針を進め、さらに六十分で一時間短針を進める働きをする、同様に日付や曜日なども同じ様に歯車で動かされる。

高級時計では、この各歯車の芯は、人工サファイアやルビーの宝石軸受けを使い磨耗を減らす工夫がなされる。

浩二は由佳の為に、各歯車の厚みを少し増し軸径を増し、宝石軸受けを採用した。同時に、毎日巻くリューズの直径を少し太くした。ここが一番傷むからである。そして、時計の顔である文字盤は、シルバー地にバーインデックスをあしらった。ベルトは、貴金属を使いたかったが、実習教官の許可は得られなかったので、革にした。

これで、図面を出し、教官の添削を受けた。

「大分進歩したね」

「そうですか？」

「今までのものとは次元が違う。誰かにつけてもらいたいと言う情熱が感じられる」

図星だった。優秀な設計者は図面を見ただけで、描いた人の考えまでわかると言う。

「確かに、各歯車もしっかりしているし、宝石軸受けを多用している。一生使ってもらいたいと言うつもりだろう、違うか？」

「その通りです。駄目でしょうか？」

「だが、実習は遊びじゃない。コスト意識も大切だ。これを高級時計のラインアップにのせるんなら話は別だが、この程度の製品ではのせられない」

「何故でしょう」

「時計師になってみたらすぐに分かるよ」

教官はそれ以上教えてくれなかった。

「そう言うわけで、歯車とリユーズの工夫はこのまま採用していい。だが、宝石軸受けはそんなには使えない。一万円程度の時計と考えてくれ。十七個が精一杯だ。それ以下に抑えろ。それから、ベルトだが、貴金属のを使いたそうな顔をしているな」

「いえ、そんな……」

「まあいい、余分のがあるから、プラチナめっきのやつを分けてやる。これで、製作にかかっていいよ」

初めて図面がＯＫをもらった。

浩二はその日、神戸の由佳に電話をした。

「おい、やっと時計の図面がＯＫが出た。由佳のおかげだ」

「どうしてあたし？」

「いや、これまでと違い誰かにつけてもらいたいと言う情熱を、教官が感じたんだって。向こうもそれを待っていたみたいなんだ」

「あ、じゃあ、あたしが言った、思い出の品にするって言ってたの？」

「そう」

「ねえ、どんなの？ 教えて？」

浩二は今まで暖めてきたコンセプトを由佳に話した。コスト面で、宝石軸受けの個数は減らしたが、ベルトは特別に余っているものを使わせてもらうことにしたと言った。

「へぇー、じゃあ一生使える時計なの？」

「ああ、毎朝、ぜんまいを巻かないといけないがな」

「でも、そう言うのっていいかも。愛着がわきそう。それで、文字盤にはかわいいイラストか何か入るの？」

「いや、シルバー地にバーインデックスだ。シンプルなモデルだよ。」

「あんまりかわいくなさそう」

「女子大生卒業したら、そんなにかわいいのなんか出来ないだろう。それに、一生使って欲しいし」

「そうね、分かった、期待してるね。」

「おう、任せとけ」

と言ったものの、ここからが、浩二の真の試練だった。時計の図面自体はさして難しいものでもない。単なる歯車の列だからだ。これを精度よく組み合わせていくのが、職人の職人たる所以なのだ。もちろん、この教習を終えた後、どこに配属されるかは、この教習での、本人適性を見て決められる。

スイスでは、こう言った事は国家ぐるみで行われており、公立時計スクールを出たら、公的資格を得て好きな時計会社に就職出来るが、これはこれで、時計スクール自体が狭き門なので、どちらがいいとも決められない。だが、機械式時計の分野では、スイス製が圧倒的強さを見せている。歴史と伝統があるのも理由の一つだが、時計職人のレベルの

高さが、これを底辺から支えている。もちろん日本の時計産業も負けてはいない。一九六〇代にクォーツ時計を出してから、一気に世界レベルにのし上がった。電気式時計は、ぜんまいの変わりに、水晶発信子からの信号を元に動く電磁石やモーターを動力にしている。脱進機を持たないことは、機械式と大きく異なるが、それ以降の文字盤の裏の歯車列は同じである。

製作実習に入ってから、浩二の苦悩は続いた。歯車の加工は時計専用の旋盤を用いるのだが、大学の実習でやったより遥かに小さな歯車を加工するのに四苦八苦した。だが、これをおろそかにすると精度が出ない。脱進機やテンプは支給品を使わせてくれた、新人には作れないためである。これらを組み合わせ、ようやく、部品が揃った。後は、宝石軸受けを所定の場所に取り付け、ネジ止めする。が、ピンセットでつまみメガネにクリップ止めした時計専用ルーペで覗きながら、作業したが、目線とピンセットの先が合わない。一個、力を入れ過ぎてピョンと飛んでいった。

教官に言ったら、自分の責任で探せと言われた。懐中電灯片手に作業場の床をルーペ片手に探し始めた。大体、探しているときには出てこない。あきらめて、一個軸受けをへらそうと思ったとき、床にきらりと光る軸受けを見つけた。ラッキーだった。そして、機械だけ組上げた状態で、教官に見せに行った。

「なかなかよく出来てるね」

と言って、標準時計と比べて精度を測り始めた。「まだ調整不足だ。この調子だと一日五分以上狂うぞ、やり直せ」

「はい」

この調整は歩度調整と言い、テンプのバネで微調整する。二日がかりで、一日十五秒以内に調整した。教官も褒めてくれた。

「よくやったね。ケースに入れて、リューズをつけて、全体像を見てごらん。感動すると思うから」

「はい」

浩二は早速、用意してあった、ケースに機械を収め、リューズを取り付け、プラチナめっきのバンドをつけた。

いかにも質実剛健と言った感じで、女性には少し、ごついかもしれないが、活発な性格の由佳には丁度よいと思った。

教官のところに持っていくときに、

「アッ」浩二は時計を床に落としてしまった。

真っ青になる浩二を尻目に、教官は平気な顔をしている。

「あの頑丈な歯車なら、影響ないだろう」

言葉通り、時計は正確なときを刻み続けた。

浩二は気になっていた、震災モニュメントの時計について、教官に聞いてみた。

「確かに、ぜんまいや輪列が壊れることはないが、日の裏装置は比較的壊れ易い。だが、余程の衝撃がないと壊れない。電気式時計も同じだが、こちらは電池が外れたりと言う理由も考えられる。何にしても、あの地震の衝撃の大きさを物語るもの以外の何者でもないだろう」

それを聞いて、あの震災モニュメントの意味を悟った。

由佳には、自分で作った時計をプレゼントしたが、予想以上に喜んでもらった。浩二は、結局設計部に配属が決まった。あのモニュメントには申し訳ないが、止まらない時計を目指している。了

散る桜と去る桜

散る桜と去る桜

毎年四月になると街のあちこちで、ソメイヨシノが咲き誇り、入学式のシーズンを連想させる。誇らしげに大学の入学式に臨む学生がいる一方で、来年の捲土重来を期して、予備校の門をくぐる生徒もいる。

青山浩二も、一年間予備校に通って今年こそはと希望大学に挑んだのだが、惜しくも落ちてしまった。もっとも、惜しかったのかどうかは試験委員の先生にしかわからない。それでまた今年も、親の嫌味に耐えながら予備校の入学手続きを済ませた。つまり二浪である。

四月当初は大学生も予備校生も大体同じ時間帯にバスや電車で通学する。学生がいなくなるのは講義が一巡してサボっていい科目とサボれない科目が分かってからで、五月からはほぼ時間帯が変わってくる。真面目に授業を受け続けるのは予備校生だけであろう。

浩二は、去年も高校の同級だった奴らが楽しげに電車通学する光景を横目で見ながら、予備校に通った。そして、来年こそは自分も大学生になるんだという意識を強めたのだが、彼らが大学をサボりだし、浩二の目の前から消えると急にホッとした気分になった。これがいけなかった。

今年は、一級下だったやつらが楽しげに大学に電車通学している。女の子と楽しそうに冗談を言い合いながら余裕をかましているのを見て、嫌になった。そんなことを気にしている間に数学の定理や英語の単語を一つでも覚えればいいのだが、多感な青春期である。そう割り切れるものではなかった。

予備校に着くと、各自のクラスの教室に行き時間割通りの授業を受ける。高校生と違うのは、唯一、受験に関係ない科目がないと言うことだけだ。内容自体は高校より少しレ

ベルが高いが、高校を卒業して入ったものばかりだから当たり前だ。しかも、浩二の様に二度目の授業ともなると、何で最初に合格出来なかったんだろうと言う雑念ばかりが湧いてくる。だから、浩二も授業の途中からは真面目に聞いていなかった。授業と授業の合間にある休み時間にも、真面目な生徒は友人とさっきの問題について議論しているが、浩二の場合友人も今年の春に大学に行ってしまい、ここでは浮いていた。

だが、浮いていると思っているのは浩二だけで実際には、浩二と同じ二浪のものもいれば、三浪のものもいる。お互い出身校も違うので知らないだけだ。女の子も中にはいるが、ほとんどは、理系志望の一浪組だ。女子の浪人は就職で不利なので、ほとんどは私立か短大に入ってしまい、ここにいるのは少数派ではある。だが、予備校生という身分上、大学生のように楽しげにお喋りするというわけにも行かない。

浩二は、そうして一日の授業が終わると帰途につく。が、今日は教務課の前を通り過ぎようとすると、事務の女性が呼び止めた。

「青山君」

「はい、何ですか？」

「あなた、三月の模試の結果を取りに来てなかったでしょう？」

三月の模試など、今更どうでもいいと、浩二は思った。浩二はすっとぼけた。

「そんなのありましたっけ？」

「これを忘れるようじゃ、来年も危ないわよ」

と生意気なことを言って、渡してくれた。今年、本命の大学を受験する前に受けた模試の結果だった。大学入試に集中してあの頃は予備校をサボっていた。模試の結果を見たら、本命大学どころか、滑り止めすら受かりそうにない成績だった。

「青山君、先生に相談した方がいいんじゃない？ 顔色変わってるよ」

言われなくても分かっていた。浩二はこの生意気な事務員の名札を見た、佐々木めぐみと書いてあった。年はあんまり変わらないような気がする。

「佐々木さん、この内容見たんですか？」

「見たんですかって言われても、別に封もしてないから見る気がなくても見えるわよ」

浩二は腹が立ったので、そのまま帰ってしまった。

帰りの電車に揺られながら、この模試の結果について考えた。去年あれだけ勉強したつもりだったが、一回目の挑戦である高三の時の成績より落ちていることに気が付いた。何でだろうと、悩みが深まった。

浪人生のほとんどは気付いていないが、通常受験成績は高三の時がピークで、それ以降は下降線をたどる。予備校に行ったりして勉強しても現状維持が精一杯なのが大多数なのだ。それで、浩二みたいに授業を真面目に受けていないとたちどころに落ちてしまう。だからこそ、勉強量が多いはずの浪人生を尻目に現役受験生が多数合格出来るのだ。問題は浩二がこのことにいつ気付くかだった。だからこそ、佐々木めぐみは心配して声を掛けたのだ。

次の日、浩二は教務課に寄り、佐々木めぐみに聞いてみた。

「昨日何であんなこと言ったんですか？」

「わたしも経験があるから、教育学部を目指したんだけど、結局失敗して短大に行ったの、それで、予備校の事務員をしてる訳なんだけど」

「それって、勉強しても無駄ってことですか？」

「違うわよ、年齢が変わると同じことしてても駄目なの、記憶力が落ちてきてるでしょ。その代わり理解力は伸びてくる。でも受験に必要なのは記憶力が九割よね。それで心配したの。あなた、わたしとあんまり年変わらないでしょ」

浩二は言われたとおりだと思った。確かに十八歳の時と比べて二十歳の記憶力は若干落ちてきている。

「佐々木さんはどうしてそんなことに詳しいんですか？」

「教育学部に行く夢は破れたけど、短大に行ってる間も勉強したの」

「一浪して再チャレンジしなかったんですか？」

「正直迷ったわ。でも、女子の浪人は就職がないって言われてあきらめたの」

「僕はどうすればいいと思いますか？」

「先生に相談してみてよ。独自のカリキュラムを考えないといけないと思う。進路指導の先生なら過去の例にも詳しいかも」

なんだか佐々木さんがいい人に思えてきた。そのアドバイスに従って進路指導の教官に相談に行った。

「あの、大塚先生、進路と勉強方法で相談なんですが」

「ああ、君、今年も駄目だったの？」

「はい」

「そんなにサボってた訳じゃないのにねえ。」

「もちろんです」

「確かに時間がたつにつれて段々不利になるのは否めないよ。それに併せて勉強方法を変えた方がいいかもしれないね」

「どうすればいいでしょう」

「まず、記憶力では若い奴にかなわなくなる。だからと言って、今の入試制度では暗記をおろそかには出来ない。理解力も大事だが、そんなのは大学院にでも進めばの話だ。だから、出来るだけ記憶力を落とさない訓練を毎日時間を決めて取り組んだらどうだろう」

「でも数学なんか考えて出来る問題もありますが」

「実際にそんなことしたら、試験時間が足りなくなるよ。数学は解法のパターンを覚える方が先だよ」

浩二はここまで言われて、引き下がった。だが、もう後がない。言われる通りにやるしかなかった。

遅くまで話をしたせいか、帰りは佐々木さんと同じ電車になった。

「あら、青山君。相談には行ったの？」

「はい、ですが、暗記力を鍛える訓練をせよと言われました」

「ふーん、本当は理解力が育ってくるからそれを伸ばした方がいいんだけど、入試は時間との勝負だからね。暗記しかないのよね」

「あ、あの、佐々木さん、次の乗換駅でお茶しませんか？」

「あは、デートに誘ったつもり？」

「いえ、そんなんじゃ……」

「……いいわよ」

三宮駅で乗り換えずに二人は駅を降りた。近くの喫茶店に入った。

「あ、あの、佐々木さん」

「なあに？」

「コーヒーでいいですか？」

「あはっ、緊張してる。いいわよ」

と、からかわれていた。浩二は女性を誘ったのは初めてだった。大学に行っていればそんなこと日常茶飯事だったのだろうが、高校を出てから女の子と接点がない。高校時代もあまり女の子と話したことがなかった。

「あの、佐々木さんどうして教育学部なんか目指したんですか？」

「まあ、教師志望だったからだけど、小学校の時あこがれの先生がいたんだ。女の先生だけどね。かっこよくて」

「僕はそういう風な目標は全然ないんです。偏差値リストから目標大学を選んで……その割に二度も失敗しましたけど」

「ふーん、でも目標があったからって、ない実力が発揮されるわけでもないしね。そう言うのもいいんじゃない」

「いいって、どういう意味ですか？」

「まだ、今の段階じゃ何がよくて何が向いていないかなんて分からないでしょ。だから入れる大学に入ってそこで、人生の目標を探すのもありだと思うよ」

「でも、言われる通り偏差値がこのまま記憶力が落ちると共に、下がっていったら益々入れる大学がなくなります」

「心配しなくってもどこでもあるわよ。青山君、国立の理系にこだわってるから難しいんでしょ。私立でもいいじゃない。それに文系に変わるのもいいと思うよ」

「なんか、佐々木さん大胆ですね。僕はそこまで割り切れません」

佐々木めぐみはコーヒーをスプーンでかき混ぜながらつぶやいた。

「あたし、七月で派遣期間が終わるの」

「え？ 佐々木さん派遣社員だったんですか？」

「驚くことないでしょ。今時、正社員雇っている会社なんてないわよ。あの予備校だって進路指導の先生以外は大学院生のアルバイトでしょ」

「そうですが」

「だから、予備校の事務員がこんなこと言っちゃいけないんだけど、いい大学に入って、いい会社に入って、退職金の計算まで出来る時代は終わったの。だから、青山君もあんまり大学に期待しない方がいいよ。自分で考えて動かなきゃ」

「そんな、正社員がいなくなったら会社はどうなるんですか？」

「どうもならないわよ。アルバイトで困ることある？ 困るのはアルバイト本人だけよ。あたしも次の派遣先が決まってないから不安と言えば不安なんだけどね」

「でも、佐々木さん、短大だったからじゃないですか？」

「四大でも一緒よ、年を食うだけさらに不利になるかもね。小学校の教員の採用もないし、犯罪が増えてるから警官の採用だけは多いけどね」と笑いながら話した。

浩二は彼女の何となく投げやりな態度が、将来に対する不安からであることは分かった。しかし、他人事ではなかった、自分も二浪して大学を出たって就職先があるとは限らない。バブルの頃ならあっただろうが、今だと苦しいだろう。今年の桜は散ってしまったが、四年後同じ思いでいると考えるとやりきれなかった。

「なんか資格とってそれを生かした方がいいかもね」と佐々木めぐみは言った。

浩二は返事はしなかったが、現在の制度崩壊を考えながら、彼女を駅のホームまで見送った。了

妖怪奇譚

妖怪奇譚

わたしはその当時ある種の妖怪に取り憑かれているような感じだった。

何をしてもうまく行かず、なすことやること全てが空回りし、いやそれ以上に裏目に出ることさえ多かった。一生懸命に仕事に打ち込んだかと思えば、その数ヶ月後には身体を壊して休職し、やがて自主退職すると云った具合に全く社会の歯車と自分の努力とが噛み合っていなかった。

一年前から再び定職に就いてはいたが、あらゆる障害が降りかかり中々流れに乗れないとでも云おうか、しかも病欠が多く収入は少なかった。そうは言っても食って行かなくてはならない。そのため、それを補うべく自宅でできる内職を考えた。

わたしには特段、優れた能力はなかったのだが、先日から何となく始めた水彩画が妙に自分に合っていた。別に今までそういう修行をしたことは一切ない。あえて云うなら中学、高校の美術の時間に少しだけ習った程度のものである。それがやってみると意外と好評で応募したビジュアル系雑誌のイラストに採用してもらえるようになったのだ。

画風はというと、ポップなものはなく、深夜にわたしが描く絵はグロテスクで子供が見たら泣き出しそうな変な作品が多かった。

――妖怪に似ているな。自分ではそう感じることもあったほどだ。

とにかく毎晩、夜中の三時までわたしは絵を描き続けた。

「山田先生の絵は妖怪画ですね」と、担当者に評されたこともある。

「静物画のつもりなんですけどね」

わたしはどこをどう見たらこれが妖怪に見えるのか不思議に思った。ただの猫のぬいぐるみがグロテスクな妖怪に変貌するその過程がわたしの中のどこかの器官で行われているらしく、無意識のうちにどんどん作風はグロテスクに染まっていった。

ただ一つ言えるのは、仕事の終わる夕方六時から夜中の三時まで絵を描き続けているにも拘わらず、暮らし向きが一向に向上しないことだった。別に原稿料が安いわけではなかったし、高価な画材を使っているわけでもなかった。ただし入った収入はみなその絵に絡んだ事象に消えていくのだ。猫を描いたら、野良猫のえさ代に余計な出費がかさんだりとか云った具合である。

――お前さん、ひょっとして貧乏神なのかい？

わたしは絵に描いた「妖怪」に問いかけた。

そのとき絵の中の妖怪の目がぎょろりと動きこちらを見た。わたしは背筋に冷たいものを感じ思わず後ずさりした。背中はすぐに安っぽいベニヤ板の壁がぶつかった。逃げ場はなかった。わたしは描いた紙をくるくると巻き、紐でくくって筒に入れ、神社でもらった家内安全のお札を糊で貼り付けた。

――これはただごとではないぞ。

もはや、貧乏神に取り憑かれていることは確実だった。貧乏を楽しむだけならいい。その上、生命まで取られることがあっては大変なことになる。そう思ったのだ。

翌日、いの一番でタウンページで探し当てた高名な祈祷師に電話をしてその絵を持ち、駆けつけた。

「ふうむ」

祈祷師の先生は絵を見ながらため息をついた。「この絵は、あなたの願望をそのまま表したものですぞ。わかりますかな？」

「いいえ。絵は好きですが、貧乏神は嫌いなんです」

「あなたの深層心理はそうは思っていないようです。貧乏を心から愛しておられる。いっそこのまま絵を描き続けてはどうですかな？」

ぶるぶるぶるとわたしは首を横に振った。とんでもない話だった。絵を描いているのは貧乏から逃れるためであり、絵を描くことで貧乏になるのなら本末転倒もいいところだった。が、貧乏神に取り憑かれているわけではなく、自分の深層心理の表れであるなら、そう恐れることもなさそうであり少し安心した。

そのとき絵の中の貧乏神の姿が変わった。まるで手を合わせるように懇願していた。

「あなたはわたし自身なのです。あなたからわたしが離れたらこれまで通り絵を描くことが出来なくなります」と絵の中の貧乏神は告げた。

「え？」

わたしは祈祷師の先生の顔を見た。

「山田さん。ですから、あなたに取り憑いているのではなくあなた自身が貧乏神様の一部なのですよ。このまま絵を描きなされ」

そんなお告げを聞いてわたしはとぼとぼと絵を入れた筒を持ち家路に着いていた。今日も一日会社を休んでしまったし、一体何をしているのだろう、疑問に思った。そして、絵の中の貧乏神に少し同情心が沸いてきた。

わたしは一晩中葛藤した。

このまま貧乏を取るか、絵を取るかの選択だった。

一晩悩んで、わたしは生き甲斐となった絵を取ることにした。

その日から入れ替わり立ち替わり、色んな妖怪がわたしの前に現れては消えた。妖怪百科なる俗な書物に登場するような有名な妖怪もいれば、名も知れぬ奇っ怪な姿をしたものもいた。ただ、いずれの妖怪もわたしに害を及ぼそうというものはなく、出自を問う

たときに、全てわたしの中から生まれ出でたるものと告げた。

「おいおい、いい加減にしてくれよ。俺の頭の中は妖怪だらけっていうのかい？」

わたしは誰ともなくつぶやいた。

「お呼びですかい？」

絵の具と絵皿の間からもやもやと霧が立ち上りその間から、この間の貧乏神が姿を現した。どうやら、これが、この妖怪たちの親玉らしかった。

「別に呼んではいないさ。でもお前さんたちいつも俺の頭の中にいるのかい？」

わたしは疑問を投げかけた。

「あの祈祷師の先生の仰るとおりですよ。私どもはあなたの意識の中から生み出された存在なのです。絵を描き続ける限り存在し続けます」

「では、俺が筆を折ったり、あるいは、……寿命が来てぽっくり逝ったらどうなるんだい」

「そのときには、別の宿主を捜します。妖怪を書き続ける人はいつの時代もどこかにいるのです。その人のお力を借りる次第ですよ」

わたしは腕を頭の後ろに組んで身体をのけぞらせた。妖怪どもに囲まれて肩が凝って仕方がなかった。思いっきり背をそらすと胸骨がぽきぽきと音を立てて気持ちがよかった。妖怪たちの相手をするのにはなれてきた。これはこれで代え難い体験であるし、これといって健康的被害はないということになっているから放置しても問題ないどころか、絵を描く上で味方になる存在なのだ。

ただ、問題はわたしの暮らし向きだ。

今の職場はときどき、執筆がたたって体調を崩し、一月に一、二回は休んでいる。そろそろ上司から引導を渡される可能性があった。それに給料は欠勤がある分ひどく安いのだ。

絵でそれを穴埋めするはずが、貧乏神のおかげで絵に関しては完全に赤字である。プラスになるのは生き甲斐としての絵画という意味においてのみである。

「貧乏神よ。俺の生活は何とかならないか？」

「そう言われましても、取り憑いた人を貧乏にするのが私どもの仕事ですから」

貧乏神は殊勝な表情で返事した。

そんなある日、わたしは上司に呼ばれた。

「山田君。今の会社の業績が厳しいことはよく知っているね。そこで整理解雇の話が出てきている。正式には労働組合との折衝後ということになるが、君の仕事ぶりを見ていると真剣さが足りないのはわかるだろう。覚悟しておいてくれたまえ」

がびーんとわたしは思った。ついに来た。前々から覚悟はしていたが、こんなに早く来るとは思わなかった。

その夜わたしは貧乏神に相談した。

「あなたの気持ちはよくわかります。でも私どもは他人を不幸にすることだけで、あなたに幸運をもたらすことは出来ないのです」

「それは知っているよ。ただ、……うちの会社のライバル社の社長にしばらく取り憑くことは出来ないだろうか？」

我ながら悪魔のような手段だと思った。

「それには、あなたの絵が必要です。社長の絵を描くか、わたしの絵を社長のオフィスに飾らさせるかして下さい。そうすれば効力を発揮できます」

いすれにせよ、大した問題ではない。わたしは貧乏神の絵を、例のビジュアル系雑誌の紹介で寄贈させてもらった。元の会社の名前は出さずにである。そして、記者がその絵と一緒に写る社長の姿を写真に収めた。

しばらくして、その会社の業績は悪化の一途をたどり、わたしの解雇はなくなった。

でもこのことで貧乏神が絵師だけのものではなく、社会一般に広がるきっかけになったみたいで、正にパンドラの悪魔を世の中に放ったと云うべきであった。まあ、わたしとしては貧乏な仲間が増える程度の被害でしかなかったが。了

金庫破り

金庫破り

七月の中学校の教室。外では蝉が鳴いている。その中で一人午後まで残され、沙知絵は補習の課題をやらされていた。苦手な数学の証明問題である。

試験はとっくに終わり、皆夏休みモードで浮かれていたが、補習に呼び出された生徒だけは浮かない顔をしていた。だが、それも午前中だけだ。沙知絵は午前中に課題を片付けることも出来ずに、出来るまでやりなさいと教師に指示され、冷房も切られた教室で泣きそうな顔で訳の分かっていない問題に取り組んでいた。

教室の扉が開き、男子生徒が入ってきた。思わず先生が、もう帰ってもいいと言いに来たのだろうかと一瞬期待したのだが、がっかりした。彼は何か忘れ物を取りに来た様子で、自分の席の引き出しから財布を取り出すと、そのまま帰ろうとした。

「あの」

と、沙知絵は珍しく声を掛けた。男子生徒は前からちょっと気があった沖田君だった。不良だが成績は沙知絵より十倍はいい、と言うより学年トップだった。そんなに勉強しているようには見えないし、授業中も他の男子生徒とふざけているだけだ。

「何か用？」

と、聞かれた。用事はあったのだが、うまく言えない。実はこの課題を手伝って欲しかったのだ、一人では百年かかっても出来そうな気がしなかった。

「沖田君て数学得意なの？」

「いいや」

つれなかった。

「でも、いつも一番じゃない」

「ああ、テストの話か、あれには.....」

沖田君は言いかけてやめた。

「何よ、言いかけてやめないでよ」

「お前秘密は守れるか？」

「事柄にもよるけど、うん」

「ならついてこい」

沙知絵は課題を放り出してついて行った。行き先は職員室だった。もう構内の見回りで誰もいないのを確かめると沖田君は慣れた手つきで扉を開け忍び込んだ。そうして教頭の席の後ろにある金庫にたどり着くと、ポケットから聴診器を取り出し、ダイアルの部分に当てると、注意深く音を聴きながらダイアルを回した、カチカチカチという音しか聞こえないが、聴診器の向こうではピンの音が聞こえるらしい。そうして何度か左右に回すと、ガチャンと扉が開いた。

「こうやると中にテストの問題用紙が入ってる。前は、テストの三日前にはあったのに、最近じゃセンコもサボってるのか、一日前にならないと問題用紙が手に入らない」

「えー、そんなことしてたの？」

「でなきゃ満点なんて取れないよ。お前もやってみたら？」

冗談ではなかった。犯罪じゃないかと思った。それに金庫破りなんて簡単な技ではない。

ふと、廊下で足音がした。見回りの教師が帰ってきたのだ。沙知絵は慌てた。扉がガラッと開くと、沖田君は金庫の中に滑り込むように消えていって、金庫の扉はバタンと閉まった。沙知絵はそっちの方が驚いた。

「おい、何をしている？」

教師が問いかけた。

「あの、居残り補習が出来なくて」

訳の分からない言い訳をした。

「はあ？　もしかして数学のテストのやつか？」

「はい」

「今日もうはいいから、家でやって明日の朝持って来なさい。いいね？」

「はい」

「ここは鍵を閉めるから、出て行きなさい」

「はい」

沙知絵は動揺した。金庫の中に沖田君がいることを知らせなければ、と思った。金庫は中からは開けられない。このまま一晩いたら空気が無くなって死んでしまうだろう。だが、金庫の暗証番号は教頭先生しか知らないはずだ。今日はもういないから。消防のレスキュー隊を呼ばなければならないのだろうか？　と、沙知絵は色々考えた。

だが、沖田君の行為は犯罪だ。金庫を開けたことなど、教師に言うことは出来なかった。

沙知絵の今までの人生の中で、と言っても十四歳だが、こんなに悩んだことはなかった。そうだ、教師が帰った後、学校の外の公衆電話から消防に電話しようと思いついた。

それまで沖田君我慢してねと、心の中で祈りながら、階段を上がり自分のさっきまでいた教室に戻った。

沙知絵は愕然とした。

沖田君がにやにやしながら、机の上に座って待っていた。

「センコに怒られなかった？」と沖田君は聞いた。

「別に、でも沖田君どうやって金庫から抜け出したの？」

「え？ お前本当に俺が金庫に入ったと思ったの？」

「あたし本気で心配したんだよ。このまま空気が無くなって死んじゃうんじゃないかって」

沙知絵は涙ながらに訴えた。

「そりゃ、悪かったな、でもお前手品とかイリュージョンとか見たことないの？ 初歩的なマジックだぜ。」

「どういうこと？」

「種を明かしたらマジックにならないじゃないか」

「それはそうだけど」

ーーひょっとして入ると見せかけて、どこかに姿をくらませたのか？ 沙知絵は怒る気も失せた。さっきまでの必死の覚悟がどこかへ行ってしまうと急に現実に返った。

「あー、数学の課題が全然出来てないの」

「そうみたいだな」

「もう、責任とってよ」

「しょうがねえな」

と言いながら、ロッカーの中からファイルを取り出した。色んな試験の答案例がファイルされている。

「何なのこれ」

「今までのカンニングの成果だよ。全部分類してファイルにしてるんだ。二回も三回もカンニングするなんて馬鹿みたいだろ。」

沖田君は不正行為をするにしても徹底的に合理化していた。沙知絵は半ばあきれながら、尊敬しつつあった。

「あ、ホントだ同じ問題がある。ラッキー」

「ラッキーなんじゃなくて、お前の課題自身がこれまでの試験から出題されていると言うことだろ。もっと考えろよ」

「そうなんだ」

今日は素直だった。せっせと答を写す、その沙知絵の横で沖田君は話し出した。

「まあ確かに最初に解法を見つけたやつはえらいと思うよ。ドイツのガウスだったっけ、一から百まで足せと言われて、いちいち計算するのが馬鹿馬鹿しいと、数列の公式を導き出したんだ。後から聞いたら馬鹿みたいだけど、言われなきゃ絶対に気付かないもんな。偉いよ、ほんとに」

「でも金庫破りなんてどうやって思いついたの？」

「俺が思いついたんじゃないよ。アメリカの物理学者ファインマンの自伝を読んでたら若い頃、いたずらで研究所の金庫の鍵を破る話が載ってたんだ。それで試しにやったら開いたもんで、有効利用している。でも、この方法は旧式の鍵にしか使えない」

「じゃあもっと腕を磨くの？」

沙知絵はせっせと答を写しながら話を続けた。

「俺、努力するの嫌いなんだ。でも、しょうもないことに力を注ぐのは大好きだ。だから分からない。だって、せっかく金庫を開けて試験問題を手に入れても、そこからまた解かないといけないんだぜ」

「そうよね、それも尊敬する」

喋りながらであったが、何とか写し終えた。後は明日職員室に持って行くだけだ。沙知絵は沖田君に礼を言って帰ろうと思ったが、このままじゃ何か悪いような気がした。

「ねえ、何かお礼しなくちゃね、」

「じゃあ、胸触らせて、」

沙知絵は顔が赤くなった。そんなこといけないと思いつつも沖田君ならいいかなと迷った。そんな沙知絵の思いをよそに、

「冗談だよ、本気にするなよ、馬鹿」

そう言って姿をくらませた。沙知絵はちょっとふくれた。

沙知絵は家に帰ってからも何だか沖田君のことが気になってベッドの上で、ぼーっとしていた。夕食時間になってニュースを見ていた母が、

「大変、あんたの学校に泥棒が入ったみたいよ。」

と沙知絵に知らせに来た。沙知絵は驚いてニュースを見に行った。短いニュースだったが確かに自分が夕方までいた中学校だった。

――中学校の職員室に侵入者があり通りすがりの人に取り押さえられました。今のところ、建造物侵入で取調中の模様です。

と言っていた。

沙知絵はまさか沖田君が捕まったのかと、心配になった。学校の連絡簿で彼の家に電話しても誰も出なかった。沙知絵は中学校目指して飛び出していった。

遠い道のりだったが走りに走った。現場に着くとまだパトカーが赤色灯を回していて、事後処理をしていた。大きな警察車両の中に犯人がいるらしく野次馬が集まっていた。沙知絵は、警察車両の中の沖田君に連絡を取ろうと思ったが手段が思いつかなかった。のぞき込もうとして警官に叱られそうになったとき、不意に襟首をつかまれ後ろに引っ張られた。

振り向くと沖田君が立っていた。

「あれ、捕まったのは沖田君じゃなかったの？」

「馬鹿、俺が捕まるもんか」

どこまでも、強気な男だ、と、思った。

「もう、いつか大けがするよ、無茶ばかりして」

「無茶はおまえの方だ。俺は通りがかりに犯人を取り押さえるのを手伝っただけだ」

「そうだったの？」

どこまでも要領のいい男だった。自分も少しは見習わなくてはと思った。了

にわか占い師

にわか占い師

暑い一日だった。

わたしは、呉服屋を営んでいる友人に頼まれ、新作展示会にやって来ていた。別に着物を着る習慣もなければ、興味があるわけでもなかったし、その上、欲しい気も買う気も全くなかった。

が、最初から彼は商談ブースにわたしを引きずり込んだ。高そうな生地が目の前に広がった。

「なあ、頼むよ。お金は後でいいからさ」

「おいおい、困るよ」

お金がないのは本当のことで、それに、着物を買って帰ると妻から何と言われるかわからなかった。しかし、この友人には昔から何かと世話になっている。若い頃立ち上げた清掃会社がうまくいくようになったのは、彼が商店街組合加盟店舗の清掃を一手にわたしの会社に回してくれたからだったのだ。そんなこんなで、わたしは拝み倒され、断り切れずに白い麻の着流しと藤色の羽織を一セット持って帰る羽目になった。もう最初から用意されていたようで、寸法もわたしにぴったりと合わせてあった。

「でもなあ、女房がなんて言うか……」

「まあまあ、着たら似合うと思うよ」

彼は手際よく、わたしの服を脱がせ、着物を着せた。角帯をしめて羽織を羽織るとそれなりに様になっている。

わたしは鏡の前で半身になり、自分の姿を確かめた。中々よく似合っている、と自分でも思えた。下腹部が出ているのも、着物の場合は貫禄が出て見え、プラスに働くものだ。でも、何となく落語家の様に見えなくもない。しかし、彼はにんまりと微笑んだ。

「よく似合うじゃないか。よかったよ」

「そうかい？」

「展示会が終わったら一杯おごるよ。一緒に行こうよ。な」

そんなわけで、店が終わるまでわたしは、展示会場でマネキンの様に着物姿でうろうろして過ごした。わたしは展示してある着物や、反物の間に紛れ、客と目が合えばにっこりし、愛想を振りまいていた。——自分は、一体、何をやっているのだろう？ ときどき、疑問に思ったりした。

展示会が終わってから、彼は後片付けを番頭たちに任せて、わたしを店から連れ出してくれた。着物姿の友人と一緒に歩いていると、まるで落語家とその付き人に見えはしないかという恥ずかしさが先にたち、彼のように慣れた足取りで堂々とは歩けなかった。

そして、五分ほど歩き、連れて行かれたのは駅前商店街の裏通りに新しく出来た小料理屋だった。料理も美味しく、酒もうまかった。友人はわたしのおかげで顔が立ったと、感謝しているらしく、しきりに杯を進め、わたしにお酒を飲ませ続けた。

「ふうっ」

「まだいいじゃないか。まだまだ行けるんだろう？」

友人はとことん酒を勧めた。わたしは腕時計で時間を確かめた。いけない、そろそろ最終電車が気になり始めた。

「最終電車かい？ いいじゃないか。車で送るよ」

「だめだよ。君も飲んでいるじゃないか。今は厳しいんだよ」

改正道路交通法では同乗者でも、運転手が飲酒しているのを知っていれば責任を問われ

ることになっている。着物を買わされた上に罰金まで払わされるのはまっぴらごめんであった。

そんなわけで、店の勘定は友人が持ち、わたしは彼とそこで別れた。

「じゃあな。気をつけて帰れよ！」

「ああ、どうもありがとう」

外の空気はまだ蒸し暑かった。冷房の効いた店内から出ると、むっとする空気がのどと肺を直撃し、酔いが脳髄まで回ってきた。目の前の歩道の輪郭がねじれ、ぼやけ、そして、二重に見えた。明らかに酔っていた。

わたしは歩道の端っこビル側を人にぶつからないように遠慮がちに歩いていた。

気分が悪くなり、何故かそこにあった白い机の横にあるパイプいすに腰掛けて深呼吸した。はぁー、はぁー。

しばらくすると、意識がしゃんとし、行き交う人々の表情が読み取れる位に回復してきた。腕時計を見た。——まだ間に合う。

そのとき、ピンクのワンピースの上から黒のコートを羽織った二十代くらいの若い女性が、机の対面に腰掛けてきた。わたしはいすに座り直し、背筋をぴんと伸ばした。

「見てもらっていいですか？」と、彼女は言った。

いきなりそんなことを言われても、わたしには事態が把握できなかった。女性は机の上に手のひらを開いていた。その横には大きな黒い縁の虫眼鏡が置いてあった。誰のものかはわからないが、わたしはそれを手に取り女性の手のひらのしわを観察した。

手相占いには一時期凝ったことがあった。もちろん、自分の商売がうまくいくように願ってのことである。が、仕事がうまくいっているときには運勢がいいものに見え、うまくいっていないときには運勢も悪く見えるものだ。目の錯覚といえばその通りなのだ。

だが、女性の結婚線（感情線の上にあるしわ）が下の方にあるのに気がついた。これは、婚期が遅いということを示す、と言われている（一説によると）。

「恋愛問題で悩んでいますね？」

わたしは思わず、初対面の女性にそんなことを口走ってしまった。

女性の顔に一瞬狼狽が走り、こくりとうなずいた。

「やっぱり、わかるんですね？」

何となく、であるが、女性は身の上話を始めた。わたしは酔いのせいもりあり、うん、うんと相づちを打ちながら話を聞き続けた。

彼女は短大を出てから現在勤めているデパートの店員になり、ほとんど男性とつきあったことがないまま今年三十歳になるらしかった。結婚したい希望があるのだが、全然出会いがないという。

「誰か好きな人はいないのかい？」

わたしがそう聞くと、彼女はちょっと下を向いて、指先を見つめた。

「誰か好きな人がいるけど、意識してしまって告白できない状態とか？」

「ええ、そうなんです。……わたしどうすればいいんでしょう？」

「そうだねえ」

わたしは彼女の顔を見た。色白で、髪は自然な黒でまじめそうな娘さんだ。相手もたぶんまじめな人なのだろうと想像した。恋愛は勢いのあるうちに行ってしまった方がいい、と、酔っぱらったわたしはけしかけようとした。

が、しかし、運命線を読み取り、ことは慎重にしなければいけない、という冷静な自分の内なる声も聞こえてきた。でも、どうしてこんなことをしているんだろう？

「迷いがあるなら、それは、やめておきなさいという啓示が出ているのかも知れません」

そう言って、彼女の左手を握りしめた。割と冷ややかで柔らかかった。

手のひらを虫眼鏡で観察していくと、運命線が彼女の場合、線状ではなく、より紐のように細かい線がたくさん集まって出来ていることに気づいた。これは神経質な性格を表している、そうだ (一説によると)。

「その相手の人はおおらかな性格でしょう？」

「あ、.....そう言えばそうです。やっぱり」

「あなたはどちらかといえば神経質なタイプですね」

「そ、.....そう言えばそうです。やっぱり合わないんでしょうか？」

そんなことはないと思った。神経質な人同士だと、しょっちゅう反発し合うものだし、互いに異なる性格の方が、足りないところを補い合ってうまくいくことが多いものだ。と、冷静な自分の声はささやいた。が、わたしはやはり酔っていた。

「ううむ。結婚線から言うと、あなたの場合、もう少し先になるでしょう。今の相手の方とは、一緒にいると段々と大雑把なところが目に余るようになり、相手はあなたのことが神経質すぎると思うようになるでしょう。やめておいた方が吉と出ていますよ」

「本当ですか？」

彼女は泣きそうな顔になっていた。

「でも、心配することはありません。三年後にはきっといい人が現れますよ」

悲しそうな顔で席を立つ彼女の姿をぼんやりとしか覚えていなかった。わたしは酔いがまわり、机に手をつき、よろよろと立ち上がり、ビルのそばまで歩くと、そこを背にして座り込んだ。

「大丈夫ですかな？」

着物姿の老人がわたしの肩に手をやった。

「ええ、少し酔っただけのようですから。あのいすはあなたのものだったのですか？」

「はい。毎週日曜日にここで辻占いをしているのですよ。ちょっと、手洗いに行っていた間にあんたがここでよろめいていたので、心配して声を掛けたのですよ」

わたしは、老人に礼を言い、肩を貸してもらって立ち上がった。

机をみると、その上には「手相」と書かれた札が掛かってあった。どうやら、わたしは占い師だと思われていたらしかった。

人の恋路を邪魔してしまった様であった。了

ペルシャ猫

ペルシャ猫

我が家に猫が迷い込んだ。

首輪もないし、面倒を見てもいいかなと思い餌をやろうとしたが、見向きもされなかった。品の良さそうなふさふさした毛と、短い足がご愛敬で顔も可愛い。わたしはすっかり気に入り。昼間、この子と遊んでいた。

夕方になり主人が帰ってくると、すぐに珍客がいるのに気付いた。

「おい、何だよこれ、買ったのか？」

「買うわけないじゃない、迷い込んできたのよ」

「ふーん、首輪もしていないし、捨て猫にしては豪華そうだし、第一きれいだな」

猫は自分で舐めてきれいにするから、余り汚い猫は側溝に住んでいる野良猫以外に見たことがなかった。

「ねえ、飼ってもいいでしょ？」

とおねだりしてみたが、結婚して早十年、そんな手は通じなかった。

「駄目だよ、色々えさ代もかかるし、病院にも連れて行かないといけないし、物要りなんだよ、明日お引き取り願えよ」

「もー」

次の朝、猫にミルクでもやろうと、探したがいなかった。

餌も食べない……こんなもの食えるかと言う態度だった……し、その割りにまるまる太って毛艶もいい猫だった。そのことを不思議に思っていた。

自治会の仕事で公園の掃除に出掛けたとき、近所の奥さんが教えてくれた。

「あら、お宅も？ あの猫ちゃんあちこちの家を気の向くままに、出没するみたいよ。高級食材のマグロ缶を与えているのは、四丁目の大下さんだと思うわ。病院には隣の佐々木さんが連れて行ってる見たい。中野さんは、何してるの？」

——可愛がっただけ、しかも、わたしの善意は無視された。

「まあ、可愛がってるだけかな」

「あら、それが一番いいわ、あはは」

猫の話をしていると、他の奥さん方も話の輪に入ってきた。それこそ、午前中はうちで体操しているとか、午後の散歩はうちだとか、皆自分の所有物の様に話すので、わたしも少し意地になった。

その日も午後になると猫がやってきた。中野家の猫と言うことで勝手にナカちゃんと呼んで、相手をしていた。携帯電話のカメラでナカちゃんを撮り、友人に、猫がやって来てなついていることと、ナカちゃんの写真をつけてメールで送った。彼女も猫好きな女性だった。すぐに返事が来た。

——写真の猫って、ペルシャ猫じゃないですか？ 高いんだよ。

そんなメールが届いた。わたしは一瞬だけナカちゃんを見た。

確かに瞳はブルーで気品があるし、鼻は低く、毛並みもいい。でも、ペルシャ猫がどの位高いものか知らなかった。

午後の買い物ついでに、足を延ばしペットショップに行ってみた。子猫が一杯いたが、ペルシャと書かれたものはなかった。

わたしは店員に、携帯電話の写真を見せながら尋ねた。

「あのー」

「はい、子猫をお探しですか？」

「いいえ、いま飼ってる猫の種類が知りたいんですが、これで分かりますか？」

その店員はわたしの携帯電話の画面を見ながら、しばらく考え込み、カタログと照合した。

「この写真一枚だけですか？」

「ええ」

「断定するには少し、手掛かりが少ないのですが、ペルシャ猫かその雑種かのどちらかでしょう」

「雑種？」

「ええ、本来は高価な種類なのでブリーダー（繁殖業者）が厳格に管理していますが、個人宅で勝手に繁殖させる例があり、その場合本来の特性と変わってきます。ただ、この顔つきからすると純血種と思います」

「因みに、おいくら位する猫なんですか？」

「そうですね、繁殖用だと十万から十五万円、ペット用だと八万円くらいです。細かい違いはやはり、毛並みと瞳の美しさ、全体のバランスで上下します」

「そーだったんですか」

わたしはあのナカちゃんが、高価な猫であることを知り自分の猫にする気になった。ペットショップで可愛い鈴の付いた首輪を買った。

買い物を済ませ、家に帰るとナカちゃんは次の家に食事に行ったらしく、もう出ていった後のようだった。わたしは他の誰かがそれに気付いて先に首輪をつけないか、心配だった。しかし、これまでのナカちゃんの行動パターンから、次に中野家に来るのは明日の昼過ぎのはずだった。

主人が帰ってくると、今日のことを報告した。ナカちゃんを呼び寄せる手だてはないか、そう言う相談だった。

「お前、馬鹿じゃないか、元々野良猫だったんだろ、雑種に決まっているよ」

「でも、もしペルシャ猫だったらどうするのよ？」

「まあ、可能性はなきにしもあらずだが、取られた後で分かったら悔しいよな。おびき寄せて監禁して、ペットショップか動物病院で見てもらうか」

「うんうん」

「まずは、ナカちゃんとやらをおびき出さなければならない」

「どうするのよ」

「昔から猫に鰹節と決まっている。マタタビでもいいらしいがな」

「鰹節ね、すぐ用意する。それでどうするの？」

「庭に罠を仕掛ける」

「そんなの可哀想よ、明日来たときに首輪をつけるわ」

わたしは、長いこと使っていない鰹節を探した。昔は鰹節を削ってだしを取ったものだが、化学調味料に加え、だし汁を売っている状況では、余り使わなくなった。母から貰ったものだが、もう刃先も錆びていて鰹を削れそうにはない。このさび付きを見て自分の家事が段々手抜きになっていることを反省した。

そこから、ところどころ黴びている鰹節を取り出し布巾で拭いてきれいにし、猫寄せに使った。

その日の夜のうちに鰹節を仕掛け、猫が入ると箱の扉が閉まる罠を主人が作った。それを庭先に仕掛けておいた。

次の日、ナカちゃんは、罠に掛からず我が家にやってきた。そんな罠などお見通しといった顔をしている。わたしは何となく後ろめたさはあったが、ナカちゃんを抱きしめ、用意してあった首輪をつけようとした。

チリン、

鈴の音がした。

よく見るとナカちゃんにはすでに首輪がしてあり、可愛い鈴が付いていた。

――え、持ち主っていたの？ それとも先を越されたの？

自分のしていることが間抜けに思えてきた。

近所の奥さんと話していると、ペルシャ猫の話になった。

「あの猫ちゃんペルシャらしいですね」

「ああ、みんなそう言っているわね。でも病院に連れて行った佐々木さんの話だと、ペルシャ猫の血は引いてるけど雑種らしいわよ」

「そうなんですか。それと、今日、うちに来たとき首輪がしてあったんですが」

「まあ、先に自分のものにしようという魂胆ね。そう言う人は嫌い」

――自分がやらなくてよかった。

「でも、猫の首に鈴をつける話があるじゃない」

「え、ああ、童話ね、知ってるけど」

「まあ、今回は佐々木さんの勇み足で見逃してあげるわ。話は変わるけど、自治会にひと

りうるさいおばさんがいるじゃない、あのおばさんに鈴でもつけられないかしら？」

――おばさんと言っても、あんたもおばさんよ。

「あの人……無理でしょう。うるさいだけあって、理論武装も完璧だし猫みたいにうまくいかないわよ」

「まあでも一回やってみてよ」

そう言われ、わたしは猫は諦め、そのおばさん、斉藤さんという人だが、首に鈴をつけることにした。具体的には味方の振りをしてお近づきになり、携帯電話のメールで今後の活動を把握することである。

斉藤さんの家を訪れるとわたしは恐る恐るインターホンを押した。しばらくすると返事があり、わたしは……特に用件もなかったが……中に入れて貰った。家の中は、うるさい人と言う評判通り几帳面さを絵に描いたように整理整頓が行き届いていた。この家の応接間には小型のコピー機までおいていて、わたしは少々とまどった。そんなわたしの顔を見て斉藤さんは、言い訳めいたように説明した。

「コピー機はね、最初はコンビニでやってたんだけど面倒だし結構高いでしょ、それでレンタルしてるの」

そこまで必要なほど自治会執行部とやり合っているのだ。孤軍奮闘ぶりがうかがわれた。いや、孤軍ではない、支持者が結構多いのだ。もはやわたしもその中の一人にされてしまっている。猫のためだと諦めた。

斉藤さんはそんなわたしを尻目に、早速、自治会を批判したビラの印刷を続けた。

「あなたも自治会のやり方に批判があるの？」

「あ、はい、そうです」

「ふーん、仲間は多い方がいいわ。数は力なり、政権与党みたいで余り好きじゃないけど、手伝ってもらえるなら大歓迎よ」

そうして、斉藤さんに取り入り、メールアドレスを手に入れた。

その話が自治会長に伝わり、しばらくスパイ活動をしてくれないかと頼まれた。

「ペルシャ猫の件を解決してくれるならいいですよ」

そう言うと、自治会長は佐々木さんに、所有者のない猫を勝手に自分のものにするのはよくないと、説得してくれた。佐々木さんも渋々、ペルシャ猫の首輪を外し、元の通り活動させた。

また毎日、猫が散歩するようになった。了

剣豪

剣豪

「あなた様のお名前は？」

「上泉伊勢守信綱じゃ」

「はぁ」

精神科医の佐藤はあんぐりと口を開けた。

一週間前、右半身麻痺の老人が頭を打って意識を失い、東都医科大附属病院救急センターに搬送された。患者は目の前にいる、泉千代治、八十四歳だ。昨日意識が戻ったと思ったら右半身の麻痺がなくなり、その上怪しげなことを口にしだしたため、救急病棟は精神科部長の佐藤浩三教授に応援を求めた。

上泉伊勢守と言うと、昔の剣豪小説でおなじみの名前だ。

「あの、上泉先生とおっしゃると、あの柳生石舟齋に新陰流を伝授したという先生でございますか？」

佐藤は、馬鹿丁寧語を使った。

「さようじゃ」

まるで、恐山のいたこの様だった。別人格が現れるのはときどき目にしたことがあるが、右半身麻痺まで治っている。佐藤は看護師に聞いた。

「佐々木君、昨日の様子は……看護日誌に書いてあるけど本当？」

「ええ、信じられないんですけど」

看護日誌には箸で飛んでいるハエを捕らえたとあった。

「どうして、患者さん、いや、上泉先生に箸なんか渡したの？」

「スプーンで食べさせようとしたら、無礼者とお怒りになったので」

「そう、筋金入りだね」

「初歩の初歩じゃ、それ位出来ぬと無刀取りを会得できぬ」

「左様でございますか」

佐藤も困り果てた、自分を別の人間と思いこむ症状は、痴呆症もそうだが、精神病でもままあることだ。しかし、右半身麻痺の運動神経障害まで直り、なお、常人を越えたものを会得してしまうような例は今まで見たことがなかった。きつねつきなど、症例としてはないことはない、その一種と考えてしまえばいいのか判断に困った末、この老人の家族に会ってみることにした。無理に治療して元の右半身麻痺の痴呆老人にしてしまうことは却ってよくないと思ったからだ。

午後になり、患者の長男の信蔵氏とその嫁である容子さんが訪れた。佐藤は、上泉伊勢守は立ち会わせずに家族とだけ話しをした。本人がいると非常に厄介になる。そう判断したのだ。

「それで、先生、父の具合はどうなんでしょうか、意識が戻ったとしか聞いていないのですが、心配なんですよ」

「わかります、少しお話しを聞きたかったのでこうして別室にお招きしたのです」

「お話し、と、言いますと……あの、どういうことでしょう？」

「少し様子がおかしいのです、あ、いや、これは頭を強打された方にはよくあるのですが、そう言った症状とも、少し、ええ、少しだけ違いまして、それで普段の生活や若い頃のことなどお聞きしたく思いまして」

信蔵氏は、天井を向き考え込んだ。何か思い出そうとしているのか、それとも、父の身に起こったことを予想しようとしているのか、佐藤には判断が付きかねた。

「そうですね、若いとき……わたしが小さかった頃にはよく、釣りに行っていました。それから、普段の生活ですが、脳梗塞で倒れる前は毎日欠かさず散歩をしていました。一時間くらい掛けて、町中歩いていた様です。倒れてからは病院でのリハビリと家ではベッドの上で寝たきりで、何もしていません。先週倒れたときも、トイレなのか他に目的があったのか、不自由な身体で勝手に起きだして……それで気が付いたら廊下に倒れていたんです」

「そうですか、大変でしたね、つかぬ事をお聞きしますが、先生、いや、千代治さんは剣道かその他の武道の経験はおありですか？」

「武道ですか？ さあ、聞いたことがありませんが、大正生まれだから、小さい頃にチャンバラごっこくらいはしたことがあるとは思いますが、本格的なもの、はないと思います」

「上泉伊勢守と言う方は御存知ですか」

「はぁ？ かみ……大名の名前ですか？」

この年代では知らなかったようだ。昭和初期の剣豪小説ではおなじみだったはずだから、千代治氏は知っている可能性はあったが、息子の信蔵氏は知らなかった。

「正確には知りませんが、戦国時代の剣豪で、新陰流の創始者、柳生石舟齋に無刀取りを伝授したとされる人物です」

「はぁ、それが父と何の関係があるのですか？」

「千代治さんは気が付いてから自分がその人物と思いこんでいます」

「まさかぁ、ははは、え、頭を打ったせいですか？」

「よく解らないんです、呆けて自分を別の人物と思いこむことも珍しいことではないし、精神病でもそうです。珍しくはありません。ただ、不思議なことに右半身麻痺が治って

いるのです。いや、それ以上ですね、常人を越えた運動神経を会得しています」

「それは結構なことなんですが、結局何が問題なのですか？」

やはり話しただけでは事情は飲み込めない様だった。

「今申し上げたとおり、自分のことを上泉伊勢守と思いこんでいる。それで、しばらく様子を見る間、その様に接してあげて欲しいのです」

「はぁ、その、なんとかの守とは、偉い人だったんですか？」

「偉いとか偉くないとかではなく、剣豪です。それだけです」

「でも、剣豪なんて人と付き合ったことがないんですが、どうすればいいんでしょう」

「では、殿様待遇をして下さい。食べ物の好みは病院食だけで不明ですが、一応何でも食べられるようです」

「あれ、そばアレルギーの気があったのですが」

「それでは、それも治ったようですね、気持ちの準備が出来たら一度お会いになってみて下さい」

佐藤医師は信蔵氏と容子さんを病室に案内した。

「お父さん大丈夫か？」

「無礼者、さわるでない」

「ちょっと何を言い出すんだよ」

佐藤医師は信蔵氏の袖を引っ張り、下手に出るよう言い含めた。呆けてるからしょうがないかという態度で信三氏はやむなく従った。

「先生、ご気分はいかがでございますか」

「うむ、悪くない」

信蔵氏と容子さんは佐藤医師を振り向いた。佐藤医師はうなずいた。そう、こんな感じなんですと目で合図した。

「では、父、いえ、先生を連れて帰っていいんでしょうか？」

「ええ、あなたの心の準備さえ出来ればいつでもいいですよ」

即刻退院が決まった。上泉伊勢守先生は機嫌がよかったもののタクシーにも乗ろうとせず、信蔵氏を困らせた。輿みたいなものに乗るのは、公家のすることだと言い張った。

「まあ、まあ、泉さん、歩いて帰れない距離でもないし、そのまま歩いたらどうです、そのうち先生がお疲れになったらタクシーに乗ったらいいじゃないですか」

佐藤医師はそんな無責任な妥協案を口にした。

「左様、足は歩くためにある。生きているうちは歩きなさい」

「そうですか」

容子さんは病院の支払いを終え後から、ここに来たが、舅の言うことを聞いて十キロの道程を歩く気がないらしく、信蔵氏と伊勢守先生を放って先に帰ってしまった。信蔵氏は伊勢守先生の威勢の良さに連れられそのまま歩いて行ってしまった。

流石に滅多にない症例でもあり佐藤医師は仕事を終えると、帰宅途中に泉宅に立ち寄った。一応患者の療養具合を確かめておかなければならない。

「泉さんどうですか、お父さんの具合は？」

「お父さん？ 先生と呼ばないと無視するんです。元気になったのはいいんですが、本当に父なんでしょうか？」

「変わったことでも？」

「ええ、夕方から木刀の素振りをした後、書見台を出せと言って、……そんなものあるわけないから、わたしがまな板とすりこぎを釘でくっつけて作ったんですが、何やら難しそうな本を出してきて読み出すんです」

「ほぉ」

「老眼まで治ったんでしょうか？」

「そんな馬鹿な……でもありそうですね、内容は把握してるんですか」

「聞いたら怒られましたよ、無礼者って」

佐藤医師はそれだけ聞いて、帰宅した。この分では信蔵氏が困るだけで問題は起こっていない。しかし、どうして上泉伊勢守なのかが、理解できなかった。剣豪に憧れていたのか、それともこの人物に何か思い入れがあったのか、わずかな入院記録だけではヒントがなかった。

上泉伊勢守は本物だった。次の週、佐藤医師は信蔵氏からの電話を受けて警察署に駆けつけた。自宅近所の郵便局にナイフを持った若い男が強盗に入り、たまたま散歩中の伊勢守がこの男を素手で取り押さえたという話しだった。目撃者の話しでは、ナイフを振りかざす男に対し微動だにせずふわりと、ナイフを突き出した手首の上に自分の手を添えたかと思うと、男の身体が宙に舞い地面に落ちた。受け身を知らなかった若者は頭から落ち、脳しんとうを起こして病院に送られたらしかった。

その事情聴取で警察官を混乱させ、精神科医の佐藤医師が呼ばれたのだ。警官を無礼者呼ばわりする伊勢守をなだめ、佐藤医師が事情を説明した。泉千代治が自分を剣豪と思いこんでいること、若者を投げた技が、伊勢守の無刀取りであることを説明した。

やがて若者が病院で強盗を認め、伊勢守は警察署で表彰状をもらうことになった。

その後、地元警察で剣道などを教えていたが、三ヶ月後、伊勢守は脳卒中で倒れ、今度は眠るように亡くなってしまった。ただ、以前と違い、警察署や郵便局、近所の人など、大勢の人が葬儀に詰めかけた。剣豪だけではないその人徳を慕われたかのような最期

だった。

千代治氏の遺品を整理していたらこんなものが出て来たと、佐藤医師の元に信蔵氏から連絡があった。昭和初期の小説で柳生石舟齋を描いたもので、長年愛読していたらしくすり切れていた。その中に一枚のしおりが挟んであるページがあった。特にお気に入りの場面らしく、穴があくほど見ると言う例え通り、ページに穴があいていた。

柳生石舟齋（宗厳）に無刀取りを伝授する上泉伊勢守信綱（秀綱）の姿が生き生きと描かれていた。一生憧れ、叶わなかった夢を、最後だけ神様が与えてくれたようだった。了

恐怖の携帯メール

恐怖の携帯メール

六月の晴れた水曜日。午後になるといっそう蒸し暑くなりいらいら感が増した。

「あんたがやったんでしょ！」

と、尚美は恫喝的な声で沙知絵を責めた。彼女は中学校の男子の前ではおしとやかで優等生ぶっているが、裏ではいつも、いじめっこの先頭に立っていた。とにかく弱いものいじめをするのが大好きなのだ。ある種の劣等感の裏返しだったのかも知れない。

沙知絵は尚美と同級生だった。いつの世もいじめる者がいればいじめられる者がいる、特に性格には問題ないと思うのに、沙知絵はクラス中の女子からいじめを受けていた。運の悪いことに今日の体育の時間、尚美の財布がなくなり、その時たまたま体育の授業を見学していた沙知絵に疑いの目が向けられた。教師の仲裁で一旦は収まったかに見えたが、放課後、尚美は沙知絵を街でも余り人気のない、学校裏にある溜池の柳の木の下に連れ込んだ。ここは外部から見えない所だった。

「もう、何黙ってるのよ？ 黙ってたら許してもらえると思ったら大間違いなんだからね！」

「あたしじゃない……」

そう言う沙知絵の目からは涙がこぼれてきた。男子生徒ならそれで許したかも知れなかったが尚美には逆効果だった。彼女の怒りはますますエスカレートしていった。沙知絵も運が悪かった。

「あんた、身の潔白を明かしたいんならここで服を脱いでみなよ」

「え」

沙知絵の身体が震えた。こんな所で裸になんかなれるわけがないし、かといっていつもの様に泣いて、男子生徒の仲裁を仰ぐことも出来なかった。完全に逃げ場がなかった。

「ごめんなさい」

沙知絵にはそう言うしかなかった。それを聞いた尚美はにやっと笑った。

「ふーん、認めるんだ。そう」

「ごめんなさい」

ごめんなさいとしか言わない沙知絵の頬を尚美は思いっきり張り飛ばした。沙知絵は初めて表立った暴力を受け呆然とした。相手の尚美の心は快感に満ちている様に見えた。無抵抗の沙知絵をしばらくなぶりものにした後、結局、嫌がる沙知絵の上着とベストとスカートをはぎ取り、尚美は服を入念に検査したが、目的の財布は出てこなかった。もともと、最初から沙知絵はやってはいなかった。その間、沙知絵は脚を抱きかかえたまま子犬のようにうちふるえていた。やがて、尚美こっちをみたとき、ふと目があった。

「何よ、その目は、ずいぶん反抗的じゃない。全然反省なんかしてないみたいね」

最初から何もしていないのだから、反省などしていないに決まっていた。だが、尚美はますますエスカレートし、沙知絵の髪の毛を引っ張り回した。

ブラウス一丁のまま土まみれになった沙知絵を放っておいて、暴力に飽きた尚美は家に帰った。

財布がどうなったのかついぞ知ることはなかった。

次の日、沙知絵が教室の自分の席に座っていると、尚美は謝りもせず、沙知絵を睨み付けた。沙知絵は下を向いてふるえていた。今日はどんなにいじめられるか、想像しただけで帰りたくなった。

一限目の授業中、沙知絵が当てられて英語の訳を読んだ後、座ろうとしたら椅子の上に押

しピンがあった、古典的ないじめの方法でそんなモノに引っ掛かるようないじめられっ子初心者ではなかったが、そんなモノお見通しよ、と言う態度が後でリンチに結びつくことは学習済みだった。沙知絵はあきらめてその上に座った。

やっぱり痛かった。

「きゃっ」と言って、飛び上がり机の上の物を派手に落とした。

「キャハハハ」

と、残酷な笑いが起こった。もうこんな時には泣くしかない。経験上、それが一番いい選択だった。そこにクシャクシャに丸めたメモが飛んできた。

『泣いても駄目だよ！』と書いてあった。沙知絵は一瞬パニックになった。自分の行動パターンを封じようとしている、そう感じた。

「おい、どうしたんだ？」

と、教師が聞いた。沙知絵は居たたまれずに、教室を飛び出した。

飛び出していく沙知絵の姿を、尚美はにやっと笑ってみていた。飛び出して行ったって、次の授業に出る気があるなら、どうせまた戻ってこなければならない。トイレに引きこもって時間をつぶしているんだろう、そう思った。

尚美の予想通り、沙知絵は女子トイレの便座に座って泣いていた。どうして自分ばかり毎日いじめられるんだ。何も悪いことをしていないのに！ そう思うと余計に涙が止まらなかった。その瞬間沙知絵のブレザーのポケットの携帯電話の着信メロディーが鳴った。驚いて、携帯を開くとメールが入っていた。尚美からだ。何だろうと恐る恐る内容を見ると、柳の下でブラウス一丁で横たわっている女の子の写真があった。

「何これ？」

沙知絵はこのメールの意味がすぐにはわからなかった。画面をスクロールするとブラウスの裾がめくれ上がりパンティまで見えている女の子の写真が十枚くらいあった。そこまで見て昨日撮られたんだと気付いた。殴る蹴るの暴力を受けたがその時にいつの間に

か携帯のカメラで撮ったらしい。メッセージが付いていた。

『これあんたの恥ずかしい写真だよ。クラスの男子に送信したら喜ぶだろうね。嫌だったら次の休み時間焼却炉の裏に来い』

沙知絵は最悪の相手に、最悪のものを撮られてしまった気がした。昨日、力ずくでも抵抗すればよかった。おそらく、この先ずっと恐喝のネタにされるだろう。沙知絵はまた涙が出て来た。だが、休み時間に尚美の所に行くことはしなかった、どうせこれをネタに言うことを聞けと言うに決まっている、どうせいじめられるんだ、と腹をくくった。

その日の放課後、尚美のグループの女子に取り囲まれた。

「ずいぶんと舐めた真似をしてくれんじゃんよ」

「そ、そんなことしてません」

「じゃあ、どうして人に待ちぼうけを食わせるようなことするのよ」

と言って、沙知絵の肩を突き飛ばした。沙知絵は軽く後ろにこけ、さあ、どうとでもしてくれと言わんばかりの態勢になった。案の定、皆から蹴りを入れられ、苦しい思いをしただけだった。

足を引きずりながら帰った。

家に帰り、自分の部屋にこもると一人で泣いた。

ふとパソコンを見ると一通のメールが届いていた。沙知絵はまた、尚美からかと恐る恐るメールを開いた。変な通信販売のダイレクトメールだった。

「なになに、呪いの携帯メール、恨み晴らします、どんな相手でもＯＫ」

今の沙知絵にとっては、のどから手が出そうな話だった。これで、尚美達のグループや、美香達のグループも全員いなくなったらどんなにか幸せだろう。だが、お金を払って買うには少し怪しげだったし、呪いのメールで彼女たちが消えてくれるとも思えなかった。だが、自分の携帯に入った、尚美からの自分の恥ずかしい写真を見る度に悔しさがこみ

上げ、つい注文してしまった。支払いは親のカードだ。

商品はすぐに届いた。次の日学校を休んでいると、昼頃、宅配便が来た。

「岡本沙知絵様、使い方、恨みのある人のフルネームと誕生日を入れてね、よろしく！」

こんな、メッセージが入っていた。箱を開けると普通の携帯の様だが、画面がおかしい。相手の名前と誕生日を入れて、送信ボタンを押すと、自動的に呪いが掛かるらしい。完了すると、赤いボタンが青に変わる。実に分かり易かった、怪しげな点さえ除けば。

早速、クラスの山田尚美の名前を入れて送信した。

次の日、学校に行くと尚美の姿がなかった。誰も様子を知っている人はいない、だが、昼過ぎにうわさ話で伝わってきた。昨日、尚美は不良学生に輪姦されて自殺したらしかった。

「うわっ、これ効くじゃない！」

沙知絵はほくそ笑んだ。そして、渡辺美香、早川弥生、川島真理.....といじめっ子グループの名前を入力してドンドン送信した。

その日の夕方、美香と弥生はダンプに轢かれて即死、真理は川に流され溺死と効果は恐ろしいほどだった。

報復はこれで終わる予定だった。いじめっ子は全て排除した。

だが、次の体育の時間、沙知絵はもう安全なはずが、体育館の倉庫でマットに挟まれぐるぐる巻きにされて閉じこめられた。犯人は今までいじめには消極的だった、玲子と麻衣のグループだった。尚美たちがいなくなって自分たちの番が回ってきたとばかりに沙知絵を攻撃し続けた。バスケットの試合では肘で腹部を殴られ気絶しそうになるし、最後は足を引っかけられて転んでおでこを打った。あざが残った。

昼休み、沙知絵は怒り心頭で、玲子と麻衣のグループ全員の名前を入力し送信した。

昼からの授業もノートを破かれたり教科書に落書きされたりと、され放題の沙知絵だったが、もう少しの我慢と頑張っていた。

その日の帰り道、玲子は不良の車に拉致されて翌日山奥でコンクリート詰めになって見付かり、麻衣は何故か知らないが列車に飛び込んでバラバラになった。そのグループの女子も、自殺したり、交通事故に遭ったりで、次の日まで生きている人はいなかった。

「これで、安心だわ」

沙知絵は少し、気を緩め、次の日学校に行くと、また、椅子の上に画鋲があった。今度は沙知絵も強気だった。

「誰よ、こんなことしたの？」

「あたしよ、文句ある？」

綾子のグループが沙知絵を取り巻いた。これには沙知絵も驚いた。最初、沙知絵がいじめに遭うまでは綾子が尚美にいびられていたのだ。あんな目にあっても人の痛みがわからないらしかった。だが、それ以上に、何故、沙知絵にいじめが集中するかも、そろそろ疑問に思い始めていた。――何？ 結局あたしが悪いの？ そんなわけないじゃない。

昼休みに綾子のグループの女子にリンチに遭ってから、沙知絵はトイレに隠れて、順番に彼女たちの名前を入力して送信していった。――こういう性格だからいじめられるのだろうか。でもこれは正当な行為よ。

その日の帰り道、綾子たちの歩く歩道に、飲酒運転のダンプカーが突っ込んで綾子の首を切断し首はどこかに行ってしまった。他の女子もバラバラ死体で見付かった。

その血まみれの光景を、五百メートル後方から眺めていた沙知絵は、にんまりと笑った。

これで、女子からのいじめはなくなった。クラスで女子は岡本沙知絵ただ一人になって

しまったからだ。

次の日、男子生徒からのいじめがはじまった。了

時計職人

時計職人

街を歩いていて時計を見ると、さっきから時間が全然進んでいないのに気が付いた。いつも着けている手巻きの機械式時計だ。朝ゼンマイを一杯まで巻くと二日間動くのだが毎日の習慣で朝出かける前に巻くことにしている。電池式のクォーツ時計の方が精度はいいのは知っているが海外出張も多く、海外にいるときに電池が切れると、時計専用のボタン電池など手に入らないだろうと考え、昔からこのスタイルを通してきた。手巻きなら世界中どこに行っても関係ないからだ。

だが、休みの日に止まるとは想定外だった。どうやら故障らしい、振っても秒針が動かない。しょうがないので商店街の中になる時計店に入ってみた。「いらっしゃいませ」と元気よく迎えてくれる。だが、いいのはそこまでだった。時計の修理というとあまりいい顔をしない。使い捨ての時代、わざわざ修理までして使う人などいないよと、店員の顔に書いてあった。

「ちょっと見てくれない？」

「すみません。多分オーバーホールが必要なのでメーカー送りになります」

メーカー送りと言ってもスイス製の時計だ。まさか、スイスまで送るのだろうか、疑問に思って聞いてみた。一応日本国内にメンテナンス工場を持っているらしいが、もし壊れていたら本気でスイスに送るつもりらしかった。そんなことをしたら何週間掛かるか分からない。

「何日くらいかかるの？」

「通常のオーバーホールですと二週間ですが、部品が壊れていたら、スイス本社に送るので数ヶ月か半年くらいは待ってもらわないと。新しいのはいかがですか？」

その一言で、この店に出すのはやめた。以前行ったことのある時計屋に持って行った。しかし、ここも同じ答えが返ってきた。だが事情も説明してくれた。要は機械式時計を扱える職人が国内に少なくなってしまったのが最大の原因らしい。それで、大手メーカーの数少ない職人に頼るので順番待ちになり、時間が掛かるそうだ。とは言っても、こちらもその順番に割り込めるほどの有名人ではない。

以前アンティーク時計を整備してもらった、アンティーク店に寄ってみた。すると、近くに看板は出していないが時計職人がいるという。

「どうして看板を出してないの？」

「いや、本人は時計屋をやってたんですけど、不景気で廃業して、今は時計の修理だけ請け負っているんですよ。だから、我々の業界だけの商売で個人で行っても受け付けないと思います」

「頼むから紹介してよ」

ちょっと強引かなと思ったが、そこの主人も時計好きらしく電話で連絡してくれ、そこまでの地図を書いてくれた。意外と近い場所だったが、マンションの一室で作業していて探すのには時間が掛かった。行ってみると完全に個人の家だ。

断られたら、あのアンティークショップの名前を出そうとインターホンを押した。意外と愛想よく迎えてくれた。中に入ると修理を頼まれているらしくばらした時計が、箱に入って順番を待っているようだった。

「どの時計ですか？」

「ああ、これなんだけど」

「御主人、この時計のメンテナンスはされてますか？」

「いや、一回も」

実際壊れたことはなかったし、時計屋に見てもらうのも初めてだった。

「少なくとも三年に一回はばらして油を差さないと駄目ですよ」と言いながら、専用工具で裏蓋を開けた。ピンセットでちょんちょんとつつきまわした。

「ゼンマイが切れてますね。このメーカのゼンマイがいるけど……代用品でよければ探して取り付けられますが、そうするとメーカー保証が今後効かなくなります」

そう言われて、わたしは少し迷った。だが、どうせ修理に何ヶ月もかかるメーカー保証などあってもごめんだと思った。

「ある部品で結構です。これいつも使ってるんでないと困るんです」と、御主人に頼んだ。

「わかりました」と言って、ゼンマイばかり入っている箱を開け、サイズの合うのを探し出した。外国製のものは大体メーカーごとに規格があるそうだ。だが、同じメーカーのが出て来てもサイズが合わないか、あってもメーカーが違うかで中々見つからなかった。

そうこうしているうちに、高校生らしき女の子が入ってきた。

「ただいま」と言って店に入った。

「おう、ゼンマイを探してくれ」と御主人が言った。どうやら親子らしい。女の子は別の箱を探し出し、簡単に目的のゼンマイを見つけ出した。

「お父さんあったわよ」

「おう、それだ。お前交換してみるか？」と娘に言った、わたしは少し不安になった。「あの大丈夫なんですか？」

御主人は笑いながら「まあ、未熟者だけど手巻きの時計なら教科書レベルだから、大丈夫ですよ。ついでに部品の洗浄もやっときましょう。こいつなら、高校卒業後、時計の専門学校に行くらしいんで、大丈夫ですよ」

不安だったが、任せてみた。女の子は時計のバンドを外し、機械をバイスに固定すると、

器用にねじを外し、順に並べていった。そして歯車を最後までばらすと、一個一個油洗浄し、今度はシンナーで油を除去した。

「油を取っちゃうの？」

「はい、こんなに付いていたら、精度は出ません、針の先ほどの潤滑油を後で差します」

「ああ、そう」なんか邪魔をしたようだった。

女の子はさっき見つけたゼンマイを専用のラジオペンチのような器具で固定し、中が空洞になっている歯車に嵌め込んだ。

「このゼンマイに手の脂が付くと錆びて切れてしまうんです」と説明してくれた。

今度は、ばらした部品を、順番に時計に組み込んでいった。

一通り組み込むと、女の子は軽く時計を振ってみた、そして耳に近づけ動作するのを確認した。

「うん、よし。お父さん、これでいい？」

御主人は、バイスに挟んだ時計を受け取ると、ルーペを挟んだめがねを通してじっと、部品の一個一個を確かめた。寸分の狂いも許さないといった感じだ。

「お客さん、この時計の元の精度はどのくらいでしたか？」

「え？」そんなこと意識したことなかった。だが、時刻調整などしなくても電車に乗るのに差し支えない程度だった。この御主人にそう伝えた。御主人はにやっと笑い、「確かに手巻きの機械式時計を使う方はあまり精度を気にしておられませんが、今の状態だと一日三十秒が一杯一杯でしょう」

「前もそんなモンだったかな？」

「いや、もっとよかったはずです。いい時計なんだからもっと大切に扱ってやって下さ

い」と言って、女の子にその時計を渡した。

「あたしがもう少し精度を詰めてみます」

「あ、そこまでしなくても」

だが、女の子の熱心なひたいを見て、適当でいいとは言えなくなってしまった。標準時計と比べながらテンプの緩急針を何度も調整している。少し調整しては十分ほど見て、誤差が少しでもあるとまた調整する。結局三十分かかって調整を終えた、御主人の話だと普通は一週間もらって調整するそうだ。

女の子は、父親の了解を得て最終組み立てに入った。リューズを取り付けネジ止めし、針の先に潤滑油をつけ、ギアの受けにちょんと付け、また時計を振って調子を見、裏ぶたを閉めて、またバンドをつけた。

こうして、時間は掛かったが見事に時計は蘇った。

御主人に聞いてみると、昔はメーカーから修理要領書が出ていて、クォーツ式時計でも時計屋で修理を任されていたのが、十年くらい前から、針や文字盤と機械が一体のユニットになり丸ごとメーカーで交換する様になったという。馬鹿馬鹿しくて時計屋なんてやっていられなくなって廃業したのが本音だそうだ。

「今の時計ってそんなに使い捨てになってるんですか？」と聞いた。

「そうですよ。もう街の時計屋なんてりませんよ。バンドの調整くらいですよ」

確かにそんな感じだった。もう用は済んだので料金を聞いたら、素人の調整なので部品代だけで良いという。女の子もにっこり笑っていた。別に仕事でやったという感じではなかった。ゼンマイの代金だけ払って、女の子に聞いてみた。

「将来は時計師になるの？」

「時計師なんてスイスの職人だけですよ」

「そうなの？」

「だから、専門学校出ても趣味の範囲かな。スイスだったら、自分で時計を創作して、個人作家として売り出してる人もいるんですよ。」

何かもったいないような気がした。御主人は娘なので、適当に仕事を手伝ってお嫁に行ってもらえればいいと言っている。この仕事を誰かに継いでもらおうとは考えていないと言った。

「もったいないですね」

「時代の流れですよ。消えていった仕事は時計屋だけじゃありません」

それもそうかと思った。だが、次にこの時計が壊れたらそれこそ、もう見てもらえない。新たに買った方が良いのかなと思いながら、そこをおいとました。

そのまま電車に乗り、家に帰りかけたのだが、三駅ほど過ぎたところで、本来街に出かけた用事を思い出した。

注文していた本を取りに来たのだ。面倒だが、また電車を乗り換え元の駅に戻った。

時計を見ると今度はちゃんと動いている。

商店街を歩きながら、二番目に入った時計屋で、さっきの時計が直ったことを知らせてあげた。店主は感心していた。

「今頃、機械式時計を見る人がいたんですねえ」

「マンションの一室で個人的に修理だけ請け負ってる職人さんらしいんだけど。見てもらってよかった。でも、自分の代で終わるつもりらしいんだ。次に壊れたときに困るな」

「その時は新しいのを買って下さい」

「考えとくよ」

その足で本屋に行った。ビジネス書のコーナーに行き、店員を捕まえた。

「あの、注文の本が入ったって電話をもらったんだけど」

「あのお名前を頂けますか？」

名前を告げると、伝票を挟んだ本を棚から出して来てくれた。こちらの店も全てコンピューター管理になっている。昔の本屋が懐かしい。しばらく待たされた後、本を渡されレジに並ぶよう言われた。インターネットで買った方が早いし決済も便利なことは分かっていたが、いつも敢えて、この昔ながらの方法をとっている。みんながインターネットで買い出したら、本が一杯並んでいる本屋が街から消えてしまいそうな気がするからだ。

やっと用が済んだので、また、電車に乗り帰途に付いた。了

年賀状シーズンの一風景

年賀状シーズンの一風景

毎年年末の足音が聞こえてくると、年賀状の準備をしなくてはならない。昔から、裏面は僕の仕事であり、小学生の頃は彫刻刀を駆使し、干支の版画を彫って刷ったりしたものである。もっとも最近ではパソコンと高性能のプリンターが身近なものになり、もっぱら葉書印刷ソフトを駆使して裏面の干支の模様からお安いご用となり、さらには表の宛名書きまで請け負うようになってしまっていた。

我が家では父の方針で、何事も、早め早めということで、例に漏れず年賀状も十二月上旬の早い時期には刷り上がっているという具合で、ひょっこり相手から喪中欠礼の知らせでも来ようものなら、大いにがっかりさせられる。

そうこうして、来年度、――卯年の年賀状を刷り上げて後は出すだけという準備も整ったある日、叔母がさらの年賀葉書を抱えてやって来た。買い物ついでに寄っただけと言うが、こちらが本命だったに違いない。

「いきなりで悪いんやけど、うちの分も刷ってくれへん？」

「別にええけど、そんなに大したものはでけへんで」

僕は謙遜しておいた。

叔母の家には、まだ新しいパソコンと、高画質のプリンターがあり家でも葉書の印刷くらい出来るはずなのだ。それにも拘わらずうちに持ってくるのは使い方に習熟していないということに他ならない。それを言うと、長男（僕には従兄弟に当たる）が現在パソコン教室に通っていて、間もなくこうしたことも出来るようにはなる予定、ということらしかった。

僕は簡単に、あまり時間を掛けずにこの仕事をかたづけてしまおうと、卯のイラストを何枚かＡ４用紙にプリントし、どれがいいか選んでもらうことにした。文章は「謹賀新年」や「初春」くらいしか選びようがないので後から絵に合わせて決めればいい。

「うーん、こっちの卯の方がええかなあ？ そやけど……」

中々、決まらなかった。「もっと、個性のあるのがええなあ」

――それは無理な要求だ。

パソコン用の年賀状印刷ソフトについているイラストには数に限りがあり、その中でもよさげなものは誰しも使うもので、要するに年賀状をやりとりする相手と同じ絵柄だった、ということはままあることなのだ。

「おばちゃん、それは無理やで」

個性的、個性的……。個性的とはいえ、よくある孫の写真を載せてあるのも野暮ったくて嫌だという。

叔母はさらにバッグの中からデジタルカメラを取り出した。僕は写真印刷をやる気かと身構えた。

「この間旅行に行ったときの写真が入っているねん。綺麗な写真があったらつこてみて」

「はあ」

実際のところ、デジカメ写真を使うのは面倒くさかった。写真をそのまま印刷するだけならどうということはないのだが、新年の挨拶と文章、住所などを入れなければならず、そのためには写真をある程度のサイズや枠、明度や色合いを加工したりしなければならなかったのだ。

その上、――あんまり、顔が写っているのは恥ずかしいから嫌やで、とも言われた。

僕はデジカメのメモリーカードをパソコンのカードリーダに差し込んで、写された写真を閲覧していった。彦根城やどこかの川岸、橋、花が写っている。干支とは関係ないが、風景写真ならそれなりに使えそうだ。

「おばちゃん。この川をバックに二人で写っている写真はどうかな？」

「そやなあ。それがええわ、それにして」

と、ＯＫをもらい、グラフィックソフトで写真の周囲――いろんなものが写り込んでいる部分を切り取り、綺麗なところだけを取り出した。さらにリクエスト通り縮小して本人の顔は言われなければわからない程度まで小さくした。

これなら、個性という点では世界に二つとない（本人が写っているのだから）し、年賀状のイラストとしても申し分ないものだ。

また、写真が入ったことでデザイン自身も大分見栄えのよいものになった。

「わぁ、きれいになったやん。これで頼むわ」

叔母も喜んでくれた。これで、印刷作業に入る。

プリンターのスイッチを入れて、パソコンの画面上で印刷ボタンをクリックすると、ガチャッと動き始めた。葉書が途中で詰まったりしなければ放っておいても印刷してくれる。その間に、僕は宛名書きをするための住所録の入力を始めた。年賀状ソフトでは郵便番号を入れると町名まで入力してくれるのでそんなに労力は掛からない。三十分もかからずに作業は終了した。

「わぁ、簡単に出来るんやなあ。それにきれいやわ」

簡単に見えたのは、単に僕の手際がよかったからで、面倒な作業は、それこそ、手書きで作成するのと大差ない。字のきれいな人なら、よほどその方が気が利いているというものだ。ただ、パソコンで書く場合、住所録は来年も同じものが使えるという利点がある。

叔母は、お礼にと言い、僕に封筒をくれた。中をのぞいてみるとそごうの商品券が入っていた。三千円の収入だった。

いざ使おうとして見て気づいたのは、意外とデパートの商品券というのは使い道がないということだった。三千円という価格帯で欲しいものが見つからないのだ。ネクタイやシャツなど、普段いるようなものはスーパーの衣料品コーナーならあるのだが、デパートでは中々いいのが見つからない。デパ地下の食料品店で、豪華お総菜を買って一度だけ贅沢してみるという手もあるが、何だかもったいない。

とある店の前で僕は立ち止まった。

そこには、豚肉のかたまりを何時間も掛けて燻し上げて作ったと思われる高級ハムを売っていた。飴色に輝くつややかな表面は食欲をそそり、そのまま食べても美味しそうである。

僕は値段を眺めた。五千八百円とあった。三千円の商品券に、二千八百円足さなければならない。出せない金額ではないが、その義務はなかった。今晩のおかずの代金をどうして僕が支払わなくてはならないのだ。

「すみません。試食させてもっらてもいい？」

白髪交じりの上品そうなおばあさんが店員に話しかけた。

「ええ、どうぞ。お歳暮に、お年賀にふさわしい逸品でございます」

白衣を着たハム店の店員が爪楊枝に刺した、ハムの一切れをおばあさんに渡した。おばあさんはそれを口に放り入れ、もぐもぐと入れ歯でかんで味わった。僕はそれを見て、無性に食べたくなった。

「すみません、僕にも下さい」

店員は僕にも、爪楊枝に刺したハムをくれた。僕はもぐもぐと口の中でかみしめた。時間を掛けて熟成したハムには豚肉のうまみが凝縮されていた。燻蒸には桜のチップが使われているらしい。香ばしいかおりが口の中から鼻腔へと広がった。

「これ一つ下さい」

僕は大胆な決断をした。

今晩のおかずに五千八百円のハムである。しかも、そのうち二千八百円は僕のおこずかいから拠出されるのだ。厳密に言うならば、最初の三千円の商品券だって、僕が年賀状を刷るという小さな「労働」の対価であるから、これもお小遣いからと言えた。つまり、全部、出す義務はないお金だということだ。

しかし、それを置いても買うだけの価値はあると思った。こんなに美味しいハムは生まれて初めてであるし、この機会を逃せば、高級ハムを買うなんて贅沢をする機会はないと思ったのだ。

僕は商品券と千円札で代金を支払い、お釣りをもらって財布にしまった。

「のし紙はどうされますか？」

「あ、ええと」

自分用にこんなものをこの時期に買う人は少ないらしく、他の人はお年賀とかお歳暮とか何かのし紙に書いてもらっているようだった。僕は自分自身の労働の対価として、「御礼」と書いてもらった。名前は自分のフルネームだ。どうせ家に着いたら包装紙ごとゴミになってしまう可能性があるが、とにかく、こうでもしないことには、自腹で今日のおかずを買う羽目になった、自分自身への言い訳が出来ないと思った。

バスに乗り、二十分掛けて家に帰ってくると、家の前に軽トラが止まっていた。田舎の叔母のクルマだった。何か届け物があるとき、この軽トラを使っている。

今日は三十日、ちょうど、お餅をついたとかで、鏡餅と正月用の丸餅を持って来てくれていた。その他、野菜が少々。おばあちゃんと、母は大喜びで話が弾んでいた。

「いつも色んなもの持って来てくれて助かるわあ。何かお返しせんとなあ。うち、なんもないし」

「姉ちゃん、別にええって。気にせんといて」

「ああ、こんなところにハムがあるわ。もらいもんやけど」

「ええ、ほんまにええのん？ ハムはうちの息子が大好物なんよ」

僕のハムは叔母の所へ再び帰って行った。了

結婚行進曲

結婚行進曲

わたしは当時結婚式場で働いていた。音楽の専門学校を出てその道に進もうとしていたのだが、実際には芽が出ることもなく、アルバイトをしていた結婚式場でシンセサイザーの演奏をするのが仕事になった。シンセサイザーとは鍵盤だけで出来た楽器で音は電子的に合成してピアノから弦楽器まで何の音でも出せる。本来、結婚式場ならパイプオルガンが正統派なのだろうが、ここでは安くあげるためにこの楽器を使っていた。普段はオルガンの音で結婚行進曲を弾くことが多い。そして、式が始まるとあらかじめ打ち合わせてあった、新郎新婦の好きな曲をアレンジして弾くのだ。これは、音を自在にコントロールできるので、ロックからジャズ、今流行の曲に至るまで、クラッシック調やオルガンで荘厳な弾き方で自由にこなせる。

しかし、最近はｉＰｏｄ結婚式と称して、新郎新婦の友人があらかじめセットした曲を順番に流す装置が売れていて、これを使う人が増えてきた。わたしにとっては生活を脅かすものであった。いずれは、もう来なくていいよと言われる日が来るに違いない、そう思っていた。

今日も天気のよい日曜日で、午前と午後に披露宴があり、わたしは張り切ってシンセサイザーを演奏した。

終わった後、支配人が呼びに来た。

「なんですか？」

「うん、ちょっと」

呼ばれて、応接室に向かうと九十歳くらいのおじいさんが座っていた。支配人はそのおじいさんにわたしのことを紹介した。

支配人の説明では、このおじいさんが結婚七十年記念にパーティーをしたいと言うことだった。わたしはすごい人だなと思ったが、話しを伺った。

「記念になるように、世界で一つの式にしたいんだ。それで、演奏してもらう曲も、売っているものではなくて、特製の行進曲を作って欲しいのだ」

「そう言われても、わたしは単なる演奏家です。せっかくのパーティーにふさわしい曲など作れません」と、謙虚に断ろうとした。が、おじいさんはわたしのいいわけを封じた。

「何でしたら、わたしが手伝います。このパーティがおそらく僕たちの最後の記念日になるでしょう。それに、もし次のが来たとしてもそれを認識できるかわかりません。それで思い出深い曲を作って欲しいのです。わたしは、若い頃、と言っても六十歳までですが、ピアノを趣味で弾いていました」

おじいさんは、そう言ってシンセサイザーのキーボードを触った。最初、オルガンの音が出たのにはびっくりしていたが、わたしがピアノの音に直すと、おじいさんは軽いタッチで文部省唱歌を何曲か演奏した。年の割に音感ははっきりしていて鍵盤も一度も間違えなかった。

「イメージとしてはこの様な曲を希望です」

わたしは正直難しいと思った。今流行の曲を少し変えるくらいなら簡単だが、文部省唱歌は長年親しまれてきた、しかも、有名作曲家による名曲中の名曲である。下手にいじろうものならたちまちそのイメージは崩れるだろう。

だが、支配人は、この記念パーティと演奏で多額の収入が見込めるので多いに乗り気だった。もしわたしが首を横に振ればたちまち首になっただろう。

「もし、イメージが湧かなければ一度我が家に来ませんか？ 妻に会えばきっといい曲のイメージが湧いてくるでしょう」

「そうですねえ」

と渋るわたしを支配人は強引にせき立てた。わたしも断る理由がなくこのおじいさんに付いていった。このおじいさんの家は山の手の大きな洋館だった。大きな木の扉にライオンの形の呼び出しが付いていて、飾りではなくおじいさんが、とんとんと鳴らすとこの家のお手伝いさんらしき女性が開けてくれた。

「あの、結婚式場の音楽係です。今度の記念パーティの作曲の為に来ました」

「ご苦労様です」と、上品な口ぶりで挨拶してくれた。

中に入ると、そこは大きなロビーになっていて、たまにパーティなどに使っているらしくグランドピアノが置いてあった。しばらくピアノを眺めていると、おじいさんの娘さんくらいの年の、それでも六十歳半ばのご婦人が出て来た。

「どうも、このたびは父のわがままを聞いて頂いて済みません」

と、申し訳なさそうに挨拶してくれた。申し訳ないと言ってもこちらは仕事なのだ。

「あの、それで、ご結婚七十年と言うことで行進曲の作曲を頼まれたのですが、普段、結婚行進曲しか弾かないもので、イメージが湧かないのです。それで、参考にと言うことでまかり越しました」

「あら、そうですの、じゃあ、このピアノは父の銀婚式のパーティで買いましたの、その時はここで、何だったかしら弾いてもらったのよね？」

ピアノはよく見るとスタインウェイの高級品だった。側に、犬の剥製が置いてあった。

「これはね、当時父が可愛がっていた愛犬なんだけど、可哀想に死んでしまったの、それで、剥製にしておいてあるの」

「はぁ、よほど可愛がっておられたのですね」

何となく不気味な剥製の犬だった。

おじいさんは、更に次の間にわたしを案内した。扉を開けると、そこには大きな大理石の彫刻が置いてあった。何かの女神像かと思っておじいさんに尋ねた。

「これは、金婚式のときの記念に作った、妻をイメージしたものだ」

「このときは何か演奏したのですか？」

「管弦楽団を呼んで、金婚式という曲を作曲してもらって演奏したんだ」

「はぁ、ところで横にある剥製はなんですか？」

「あれは、剥製ではない。蝋人形だ。息子が先に死んでしまったので、作ってもらったんだ。妻が余りに悲しむものだからな」

わたしはおじいさんの記念好きと、何でも標本にしてしまうこの趣味に、嫌気が差し始めていた。そんなわたしの心の内を見透かしたように、おじいさんはわたしに話しかけた。

「何かインスピレーションが湧きましたかな？」

「はぁ、いいえ、その、……圧倒されるばかりで、どうしてわたしのシンセサイザーなどお選びになったのですか？」

「いつも、人を祝福する音楽を演奏している。そう言う人に今回は任せたいのです」

「では、文字通り結婚行進曲そのものを採用なされてはいかがでしょう」

わたしは、内心面倒に感じてきた。

「それも良いかもしれません、ですが、それでは世界に一つのものにはなりません」

だが、わたしはインスピレーションどころか更に思考能力が落ちていくのを感じた。ぼうっとしているとあの剥製の仲間入りさせられそうだ。

そして、次の間に通されたとき、おじいさんの妻と称する婦人にお目に掛かったのだが、まるで生きた感じがしなかった。ひからびた身体を車いすの上に載せ、全く生気が感じられないのだ。もしかして蝋人形かなと思ったくらいだった。

「さあ、もういいだろう」

おじいさんは、見せるのはそこまでと言わんばかりに、わたしを部屋の外に連れ出した。

「あの、失礼ですが、あのご婦人はやはり蝋人形ですか？」

「馬鹿者、わたしの妻だ。もう、余り先は長くないのだ」

「それは失礼しました」

そうは言ったものの、明らかに人間ではなかった。蝋人形でなかったら剥製だ。わたしは恐ろしくなり余計なことは言わずにまっすぐに帰宅した。

家に帰ってからが大仕事だった。作曲しなければならないのだが、あの、気持ちの悪い洋館から帰った後、何も思いつかなかった。

一晩考え、わたしは、結婚行進曲を元に文部省唱歌風に演奏し、なんだか威勢のいい曲になったので、少しおとなしめに直してこれを楽譜に直しておじいさんに郵送した。しばらくして返事が来た。大変、気に入ってもらえたようだった。わたしは他に流す曲も文部省唱歌をクラッシック風にアレンジし、おじいさんの洋館をもう一度訪れロビーのスタインウェイのピアノで一度、通して演奏してみた。そうして、おじいさんの満足そうな顔で、了承がもらえたと思った。

さて、おじいさんの結婚七十周年記念パーティーの、当日わたしは朝早くから会場に控えてシンセサイザーの音あわせをしていた。会場係は、絨毯の掃除や、テーブルの配置、テーブルクロスと忙しそうに準備していた。一番前はおじいさんと、おばあさんの位置である。

この式の豪華さに比べ、出席者は少なかった。あの洋館に住んでいる家族だけ、と思わ

れた。この広い式場に十名ばかりの出席者と二十人近いスタッフ、どう見てもアンバランスだった。以前は管弦楽団を呼んだと言っていたが、そんなもの呼んだらもっとアンバランスになっただろう。

いざ、式が始まるとわたしは演奏に集中した。

途中でおばあさんが気になってしょうがなかった。やはり生きているようには見えなかった。蝋人形、剥製、それでなければミイラしか考えられない。少しも動かないし、完全に車いすの上で干からびて固まっているように見えた。

あの、標本好きのおじいさんのことだ、この式が終わったら、わたしの弾いていたシンセサイザーを持ち帰り、七十周年と書いた看板の部屋に飾り、このおばあさんのミイラと共に飾っておく気ではないか、と、そんなことを思い始めた。

だが、家族の人はまるでおばあさんが生きているかのように振る舞っていた。おばあさんが車いすでおじいさんに押されて来ると、皆が握手したり、抱擁したりしている。わたしは気味が悪くなってきた。この人達にはあのおばあさんが生きている様に見えているのだろうか。

もう、わたしにはどうでもよかった、後一曲演奏すればわたしの仕事は終わりだ。最後の一曲は心を込めて演奏し、この、七十周年記念パーティーは盛況のうちに終わった。

わたしが行方不明になったのは、このパーティーが終わり皆が帰っていく最中のことだった。

一ヶ月後、わたしは山の上の洋館の、結婚七十周年記念パーティーと書かれた看板の部屋の中でホルマリン漬けになっていた。同じ部屋にはシンセサイザーも飾ってあった。

おじいさんは、ときどき、車いすのおばあさんを連れてきては、これは、あのときのパーティーの演奏者だよ、そう言って、わたしを指さした。

「あれが、結婚七十周年の曲を書いてくれた音楽家だよ」

だが、おばあさんはやはりこの世のものではなかった。死んでから数十年経つと思われ、肌はミイラのように乾いてひび割れ、指が何本か紛失していた。今日も、ここへ来たとき、ポロリと小指が落ちた。おじいさんは、大切そうにそれを拾いポケットにしまうと、今度は金婚式の部屋に向かっていった。了

ファミリー・ビジネス

ファミリィ・ビジネス

消防司令センターのホットラインが鳴った。司令の小坂雄二がワンベルで素早く受話器を取った。

「はい、消防司令センターです。火事ですか救急車ですか？」

相手はあわあわとしどろもどろに話していた。ここは一一九番通報の窓口なのだ。

「あの、交通事故です。わたしのトラックとバイクがぶつかって、青年が倒れていますすぐに救急車をお願いします」

電話はその事故を起こしたトラックの運転手らしかった。

「あなたに怪我はないんですね？」

「は、はい。青年だけです」

「場所を教えてください」

「えーと、小磯駅前の県道をまっすぐ西に十キロほど走ったところです」

「分かりました、救急車一台を派遣します」

小坂雄二は、内線で救急隊員に出動を命じた。とは言え、人口五千人の小磯町には救急車は一台しかない。出動を命じてから、けが人の状態を詳しく聞き取る。

「それから、怪我人の容態を教えてください」

「あの、頭から血を流して、意識がありません」

小坂雄二は少し迷って警察に事故の連絡と、救急隊員に無線で町内に二カ所ある病院のうち、兄の経営している小坂診療所に行くよう指示した。

この小坂診療所は、ほとんど助からない患者の搬送先に使用している。院長の小坂恵一は、患者には無愛想だが御遺体には丁寧だ。ペンライトで瞳孔反応を調べ、脈がないのを確かめると、嬉しそうに死亡診断書を作成する。

もっとも、小坂雄二にはここに搬送することに抵抗感らしきものはあった。だが、ここ以外では小磯町立病院しかなく、ここで手に負えなければ救急搬送で一時間以上掛かる武蔵市の市民病院に搬送するしかなかった。町立病院でも頭蓋骨開頭など出来る医師も施設もなく、重症患者は一時間かけて武蔵市民病院に運ぶしかなかった。だが、この途中で亡くなってしまう場合が多いので、最初から小坂診療所に運んでも文句を言われた試しがなかった。

医師の小坂恵一の話では、患者さんの死亡診断書を書いた後、御自宅までの寝台車の手配を希望があれば……そんなこと普段から考えている人はいない……紹介すると言って、雄二の下の弟が経営している平和祭典に依頼した。弟の小坂晋三は商売熱心ですぐに寝台車で駆けつけ、清拭の済んだ御遺体を御自宅まで移送した、らしかった。

因みにここの葬儀社の寝台車は母の寿江が運転している。専務兼運転手で年を取ってから二種免許を取った頑張り屋さんだ。

そして、弟の小坂晋三は遺族の方に、宗派や檀家になっているお寺はないかと聞いたが、今時、そんなにお寺とお付き合いしている人は少なかった。

それで、父、小坂恵泰が和尚をしている高安寺……真言宗だが何でも見ている、この町で唯一のお寺……で葬儀を引き受けたと、そう言っていた。

小坂雄二は、消防隊上がりで町の消防司令センターに雇用されている。司令と言ってもセンターの人員は交代を含めて二人、救急車が一台と消防車が三台しかない。人口五千人の小さな町だった。

夕方になり交代要員が来たときに言われた。

「小坂司令は家族で仕事が出来ていいですね」

――余計なお世話だ。

そう思っても顔には出さない。

「ああ、ファミリィ・ビジネスだよ。いいだろう」

「ええ、うらやましいです、みんな仕事で家族がバラバラになっているのに」

「そうだな」

だがこの田舎にある小磯町だが、いつしか住民……中にはうるさい人もいる……から苦情が出始めた。小坂ファミリィのやっていることは独占禁止法に抵触するのではないか。議会で問題にするよう、声を荒げる人がいた。

この町の町議会は十人からなり、町長の小平剛三は恵泰和尚の小学校の同級生で、選挙の時には町のほとんどが檀家になっているので、大いに協力していた。だから町長も余り恵泰に意見することもなかった。

だが、今回の住民派の動きはいつもと違っていた。人の生き死にに関することに、司令の雄二が、兄の病院に搬送指示すること自体が問題だと言うのだ。

確かに助かる患者なら町立病院に搬送するのが適切だったが、脳挫傷で重症の患者など、町立病院で助かる訳がなく……開頭手術の出来る脳外科担当の医者すらいない……そんなことを考えること自体がおかしいと雄二は思った。

ある日、町議会でとうとうこの問題が議題に上がり、恵泰和尚の証人喚問が決定された。恵泰和尚の味方は小平剛三町長と、北見たかし町議会議員、四方山鶴子町議会議員の三名だけだった。残りの八名は一人が入院中で、七名が住民派の圧力に負けた感じでこの決定に賛成票を入れたそうだ。

雄二は心配して勤務が明けると、高安寺の父親に会いに行った。意気消沈しているかと心配したのだが、恵泰和尚は議会などいつでも入れ替えられると豪語する有様で、全然心配していなかった。

小平町長も心配して町役場の公用車のクラウンで駆けつけてくれていた。雄二の上司に当たる人なので、丁寧にお辞儀して挨拶したが、向こうは選挙で大口取り纏め票の持ち主の息子と言うことで消防司令センターの責任者と言う扱いは受けなかった。

雄二のいるところで二人は話し合っていた。聞いていいのか分からなかったが、席を外せとも言われなかったのでそのまま聞いていた。

「恵泰さん、今度の告発は本気ですよ」

「今までもあったじゃないか、大したことはないよ、町長こそ議会対策をしっかり頼みますぞ」

「そうは言ってもねえ、独占禁止法と来たもんだ、これは前代未聞だよ。お寺はここしかないからやむを得ないと言えるが病院は小坂診療所と小磯町立病院と二箇所ある。だから問題なんだ。かといってあんたの息子さんを守るのに町立病院をつぶしたんじゃわしも困る。前立腺肥大で通院中じゃからな」

「町長、今からそんなこと言っていては長生きは出来んぞ、お大師さんの名を称えて乗り切りましょうぞ」

さすが真言宗の和尚さんだと雄二は感心して聞いていた。

次の日にも、小坂雄二が司令センターで勤務していると、ホットラインが鳴った。いつもの要領で受話器を取り、火事か救急車かを確かめた。

「怪我人なんです」

「場所と人数と容態を教えてください」

「あの、六丁目六七八番地の木原といいます、お父さんが植木の剪定をしていたんです」

「あの、手短にお願いします」

「そうしたら大きなスズメバチの巣があって、びっくりしたのなんの」

「ですから、手短に……刺されたんですか？」

「はい、刺されたショックで脚立から落ちて頭を打って……」

「救急車は今、搬送中で終わり次第、そちらに向かいますので二十分ばかりお待ち下さい。容態が悪ければ、タクシーの使用もご考慮下さい」

さっき出動した救急車がまだ帰っていなかった。町立病院への搬送で時間を取られているに違いない。雄二はハチの毒と頭部打撲が心配だった。ハチだけなら兄の病院で手当てできるが、頭部打撲は町立病院で診てもらった方がいいと考えた。

しばらくすると出動中の救急車から無線で連絡が入ってきた。無事町立病院に搬送し終えたと言っていた。小坂雄二は次の出動先と搬送先を指示した。司令の仕事はこれで終わりだ。

次の日、とうとう町議会の証人喚問の日を迎えた。いらいらする兄弟たちを尻目に恵泰は悠々としていた。心配しながらも皆それぞれの仕事に向かった。

この日は救急車の出動は不思議となかった。

「こんな日もあるんだねえ」

と、軽口を叩いていると、ホットラインが鳴った。

「そら、言わんこっちゃない」

雄二が受話器を取りしばらく話していたが、急に顔つきが変わった。額に脂汗が流れ、顔色も青くなった。患者は恵泰和尚だった。バスの運転手からの通報で最終の小磯駅前に

ついても眠ったまま起きない客がいて意識がないのに気付いたと言った。雄二は一台しかない救急車に出動を命じたが、次の指示に迷った。いつもなら脳卒中の患者は兄の診療所に回している。自分の父の時だけ町立病院など指示を変えたら、それこそ家族ぐるみの葬式ビジネスだと認めてしまうことになる。

だが、兄の診療所に送り込むのは、そのままお葬式を意味し、息子としては出来る選択ではなかった。

十分して救急隊員から連絡が入った。

「小坂司令、こちら救急隊、患者は六十八歳男性、意識レベル百（反応なし）、脈は百、血圧一四〇の一一〇と少し高めです」

「脳挫傷の可能性が疑われる……」

「司令、どっちに運びますか？」

雄二は応えられなかった。だが、返事を保留できない。転んで脳に損傷を起こしたか、脳卒中かは救急隊員では識別できなかった。散々悩んだ末、別の電話で隣にある武蔵市の市民病院救急処置室に受け入れを要請し、受諾された。町長には後で謝っておかなければならない。この町の町立病院でも開頭手術など出来っこないのだ。

「救急車、武蔵市民病院に搬送せよ、許可は得た」

「了解です」

救急隊員は、雄二の決断を予期していたようだった。いつも、彼らも不審に思っていたのだ、だが、小さな町の中なので何も言わなかっただけだ。

一時間の道程を、救急車はぶっ飛ばし、市民病院に患者の恵泰を運び込んだ。

そこで手術を受け恵泰は一命を取り留めたが、半身不随の後遺症が残った。母がその面倒を見ているがお寺が空っぽだった。

この無断で管轄外の病院に患者を搬送したことで、雄二は責任を取る形で辞職した。住民団体もそれで納得したようで一応なりをひそめた。この小坂一家のビジネスさえなくなれば文句はなかったのだ。

雄二は半身不随で動けない父の姿を見て、お寺を継ぐ決心をした。了

路上ライブ

路上ライブ

その日は仕事がかなり遅くなり、普段とは帰宅ルートを変え、午後十一時頃に私鉄に乗り換えるために、駅と駅の間のロータリーを横切って歩いた。丁度いい具合に広場になっていて楽器を持った今時の若者グループが、好き勝手に騒音をまき散らし、演奏という名の自己満足の世界にのめり込んでいた。わたしは、それを横目で見ながら、電車に乗るために足早に通り過ぎようとした。

その時、一人だけ、たった一人バイオリンを弾いている若者がいるのに気づいた。

「へえ、珍しいな」

そう思って、歩調をゆるめた。同じことを他の人も感じたらしく何人かは足を止め、その演奏に聞き入っていた。曲名はよく知らないがどこかで聞いたことがある。そんな懐かしい感じのする音楽だった。

誰かが、彼の楽器ケースにお金を入れようとするのと彼は手で断った。

二、三曲弾き終わると彼は、休憩なのか横に移動し、ロックの聞こえないところで一人静かに、タバコを吸い始めた。わたしは興味を持ち、彼に話しかけた。

「君、いつも弾いてるの？」

「ええ、この曜日のこの時間帯にいつもいますよ」

「何か、懐かしいような感じの曲だね」

「はは、分かりましたか？ モーツァルトを現代風にアレンジしたんです」

「さっき、おひねりを受け取らなかったよね、何か理由はあるの？」

聞けば、市の条例で路上での無許可営業行為が禁止項目に上がっていて、警官が恣意的に適用するのを警戒しているという。

「ええ？ だって、無許可営業って悪質商法のことじゃないか」

「じゃあ、悪質商法の定義って何ですか。取り締まる側からしたら区別はないですよね。だから無許可の営業行為全般が網にかかるんです」

確かに、定義と言われると難しかった。営業とは不特定の者から財物を交付せしめる行為、とでもいうしかない。

その青年は、警察に徹底的な不信感を持っていた。だから、タバコの吸い殻もけっして路上に捨てたりしないし、座り込んだりもしない。これらは全て軽犯罪法違反だという。

「ある日、突然警官に手錠をはめられて、連れて行かれることを想像してください。恐ろしくて何も出来ません」

「それでは、どうして君はそんな危険を冒してまで、こんな所でバイオリンを弾いているの？」

「ええ、やはり、レッスンルームの中だけでは世界が狭くなるし、一般の人の反応が欲しかったんです。誰もいないところで、一人で演奏して誰も拍手もしてくれない。無視ならいいですよ。でも、何の反響もないところで表現する苦しさは、やった者でないと分かりません」

「なるほどね」

次の日、何となく昨日のバイオリンの青年が気になり用事もないのに、仕事場を遅く出た。同じ様な時間帯に同じルートを通った。やはり、同じ場所で、バイオリンを弾いていた。相変わらず、心に染み渡る音色だった。演奏を終えて帰り支度をする青年に、わたしは声を掛けた。

「いつもながらいいね。音大を出てるの？」

「ああ、昨日の方でしたか？ はい、ですが音大ではピアノ科だったんです。バイオリンは趣味でして」

「へえ、趣味でも大したもんだよ」

「もし、……よかったら少し弾いてみませんか？」

「えー、僕がかい？ 無理だよ譜面も読めないのに」

「大丈夫です。わたしが左手を添えて弦を押さえるので、あなたは、弓だけ弾いて下さい。それで演奏できます。」

わたしは、言われるままにバイオリンを構え、彼がわたしの後ろに立ってわたしの左手の上から弦を押さえた。

「さあ、弾いてみて下さい」

わたしは、おもむろに弓をひいた。

綺麗な、演奏に包まれた。モーツァルトのバイオリン協奏曲だった。わたしは単に弓を左右に振り回すだけだったが、彼が、巧みに左手で弦を押さえ、見事な演奏になった。段々と周りに人が集まってきた。

わたしは少し恥ずかしくなった。だが、演奏が終わると万雷の拍手が湧き上がった。恥ずかしさと共にわたしはすっかり舞い上がってしまった。

「もう一曲弾いてみましょう。今度は弓を小刻みにテンポよく弾いてみて下さい」

と、小声でつぶやいた。わたしも大勢の聴衆の前で後には引けなかった。わたしは、一礼して演奏なるものを始めた。今度は弓をキュッキュッと小刻みに弾いた。後ろの彼の演奏は、最近はやりのポップスだった。バイオリンはクラッシック専用だと思っていた

らこんな曲も弾けるのかと新しい発見だった。今度は、若者が集まってきた。髪の毛を赤く染めた様な連中が尊敬の眼差しでわたしを見ている。

「最後です、力強く！」

と、彼は指示し、左手の操作が大きくなった。わたしも弓を弾く力をぐんと強くした。それに合わせて聴衆の身体が音楽に合わせて動き出し。最高潮に達したところで、演奏が終わった。かっこよかった。

万雷の拍手の中、わたしは、その青年と引き上げた。

近くのラーメン屋で、軽くビールと餃子を頼み、青年と話しをしようとした。

「何だか、君のおかげで僕までミュージシャンになったようで気持ちよかったよ。ありがとう」

「いいえ、ああいう演奏の仕方もあるんです。それに、決まった曲だけじゃなく、客の雰囲気に合わせた即興演奏とか、それは、その場で作曲するんです。譜面を書かないので後には残らないんですが」

「ふーん、奥が深いんだね」

と言って、わたしは、青年のグラスにビールを注いだ。青年は礼を言ってビールに口をつけた。青年は、バイオリンについて話し始めた。

「もともと、ピアノもバイオリンもヨーロッパルネッサンス期がその起源なんです。最終的に今の形式になったのが、十八世紀です。そんなに歴史のあるものではありません。」

「でも、老舗の製品て、ピアノもバイオリンも高いよね？」

「そうですね、ピアノはスタインウェイが最高とされていますが、バイオリンは十八世紀のイタリアのストラディバリウスの作品が最高でこれを越える名器はないと言うのが通説なんです。日本なら重要文化財に指定されてしまいそうですが、一流の演奏家は使っているようです」

「へぇ、すごいのがあるんだね。日本刀で言えば正宗の名刀と言うところかい？」

「まあ、そんなところです」

「でも、音にそんなに違いがあるのかい？ 弘法筆を選ばずと言う言葉もあるが」

「それが、初心者のうちは大した差はないんですが、極めるに従って名器が必要になるんです。現に弘法大師も用途によって中国から取り寄せた筆を使い分けていたそうですよ」

「そうなの？」

「はい、わたしも、趣味でバイオリンに手を出したときには、五万くらいのを使っていたんですが、今日使っていたのは二百万円のイタリア製です。音が違うでしょう？」

青年は目を輝かせた。

「いや、わたしには理解できなかった。何が違うのかな、やはり材料？」

「バイオリンについては、ニスと言われています。ニスが板の湿度による変化を防ぎ、いつも最高の音を維持してくれる。ストラディバリウスもそのニスの調合は秘密にしていてこの研究だけでもテーマになるくらいです。現に三百年もバイオリン本体を守ってきたんですから」

「なるほどねえ、実は僕も習いたくなったんだけど。どこか、バイオリンを教えてくれるところはないかい？」

青年は音大の先輩がバイオリン教室をやっていると言って、新宿のビルにある教室を紹介してくれた。最初のうちは、初心者教本を見ながら、教室にあるバイオリンを借りて練習を始めた。

青年の言うとおり、ドレミファソ、とぎこちなく弾いているうちはどのバイオリンを借りても同じだったが、段々と上達し、クラッシックに手が届くレベルになると、教室の何本かのバイオリンの中でもお気に入りと、そうでないのが出て来た。音が違うのだ。

久々に、仕事の遅い日があり、また、駅のロータリーを歩いてみると、また、青年がバイオリンを弾いていた。わたしはしばらく聞いていたが、タバコ休憩の時にまた話しかけた。

「いい先生を紹介してくれたお陰で大分上達したよ。しかも楽しいし」

「そうでしょう、音楽は楽しむものです。どうです、また、弾いてみませんか？」

わたしは、また弾いてみたい誘惑にさらされた。

「あのさ、教室に何本かあるバイオリンにも音のいいのがあるんだ。それを他の生徒に取られると、一日損した気分になるんだ。」

「ははは、わかります。音大時代僕もそう思いましたから、楽器との相性と、それから、やはり、名器とそうでないのがあって、上達すると分かるようになるんですよ。逆に分からないようだと素質がないと言うことです。何なら、マイ・バイオリンを買ったらいかがです」

青年はそんなことを言い出した。

上達に合わせて買い換えていくのが理想だが、専門家になるのでなければもったいないので、最初にある程度のレベルのバイオリンを買ったらどうかと言う。

「どんなのがいいだろう？」

「そうですね、おじさん、将来趣味でも地元の交響楽団に顔を出す気はありますか？」

「そうだねえ、出られればいいね。でも、どうだろう」

「個人で弾くか、こうして路上ライブなら、二十万の国産品でも十分上等です。交響楽団に入るか音大生レベルなら二百万以上のものをお勧めします。」

「あのバイオリン教室の生徒用のものはあれはどの位のレベルなの？」

「あれは、先輩が上達に合わせて買い換えていったものを教材にしているんです。今、本人はプロの演奏家ですので、一千万の楽器を使ってますが、あそこにあるのは、下は十万円から上は数百万と言うことでしょう。おじさんが気に入ったのはどの楽器かは分かりませんが」

それで、あのバイオリン教室の楽器に音のいいのとそうでないのとが混じっている理由が分かったと同時に、あの音のいいバイオリンが数百万円の品ではないかと思った。

後日、二百万のバイオリンを買う気で、紹介された楽器店に行くと青年がいた。

「いらっしゃい」

ここの店員をしていた。了

フェア・プレイ精神

フェア・プレイ精神

わたしの住んでいる共和国ではスモーという競技が盛んだった。

東洋の日本国にも大相撲という競技があるが、あれとはまた別物と考えて頂きたい。

スモーの競技は二人の選手が丸い土俵の上で向き合い、体を組んで技を掛け、背中を地面につけられた方が負けになる。東西のリーグ戦で各リーグ十五名ずつが所属する。選手はスモー協会によって厳格に格付けされランキング一位から三十位までに分けられ、三十位の選手は二部リーグと呼ばれる格下のリーグの上位選手と入れ替え戦を行い、戦績がふるわなければ二部リーグに落ちてしまうのだ。

皆がランキング一位を目指しているのには、一つには故郷を背負って立つ選手としての名誉もさることながら、年俸一〇〇万ドルという破格の待遇もその理由であろう。その上、ケーブルテレビでのコマーシャル出演料や、スモー選手名鑑の出演料など副収入にも事欠かない。これが三部リーグの駆け出しの選手では年俸三千ドルに過ぎないのだから、誰しもライバルを蹴落としてでも上に這い上がりたくなるのは人情と言えよう。

そして勝負はそうしたランキングに直結するシステムとなっている。

勝ち数割る試合数で勝率が千分の一まで計算され、一つでも多い方とランキングが上になるのだ。もう、何が何でも勝ちに行かなければ話にならない。

真剣なのは選手だけではない。

審判もその評価対象だ。

審判には常にビデオ判定とインターネット判定がつきまとい、日本の相撲でいう物言い

がいつでもつけられるようになっていて、差し違えのないことが審判の成績となる。審判にも格式があるのだが、下手をするとこの格式までランクダウンしてしまう。だから、選手以上に土俵の床面ギリギリまで顔を近づけて、勝負の行く末を最後の再度まで見切る。そんなハードな仕事でもあり、だからこそ、選手達からの尊敬を集めているのだ。

スモーの勝負は技と体力のぶつかり合いであるが、実はそれだけではない。

試合前の情報戦も重要なファクターだ。指を痛めていて組み手が弱いとか、内臓を悪くしていて腰の粘りがないとか、あらゆる情報が試合前になると入ってくる。

ここで、一つだけ禁じ手があった。

金を出して試合相手の情報を買う行為である。

これは我が共和国伝統の騎士道精神に由来していた不文律であった。

明日、九勝五敗で迎えた最終試合で、わたしは宿命のライバルであるアラシヤマと対戦することになっていた。この時点でランキング十五位だったわたしは、このリーグ戦を十勝で終えることでランキングを一つ上がることが出来た。

アラシヤマとは実力はほぼ互角というところで、過去の戦績は十五勝十五敗だった。このまま行けば、まさしく一か八かという感じだった。しかし、万が一負けて九勝六敗だとランキングが一つ落ちてしまう。

わたしは付き人のフセハタに相談した。

「何か知らないか？」

「アラシヤマのことですか。さあ、最近絶好調ですからねえ。今期もすでに九勝上げていますよ」

「そんなことはわかっているよ。ひじとか腰とか、……とにかくそんな噂を知らないか？」

禁じ手であると知っていて、わたしは遠回しに彼に頼みたかったのだ。フセハタはとぼけた風を装って、うわさ話の域の話ばかりをする。それ以上は情報収集できないのだ。

――いや、待てよ。金で情報を買うんでなければいいんだよな？

「おい、鍼灸師の先生を今晩予約入れておいてくれないか？」

わたしは突如ひらめいた。

仮に鍼灸師の先生から情報を得たとして、情報料を払わなければ、情報を金で買ったことにはならない。そうだ、いいことを考えついた。払うのはあくまでもわたしの痛めている左肘の痛みの治療費だけだ。それがいつもの二倍だろうがそれは鍼灸師と患者の間の話であってスモー協会の知るところではない。そうだ、それがいい。そうしよう。

わたしは一人ほくそ笑んだ。

夜八時になり、稽古場から宿舎に戻らず、わたしはフセハタの用意したクルマに乗り込んだ。行き先は言わずと知れたジムと提携していた鍼灸院だった。わたし達は単に先生と呼んでいた。

わたしはいつものように診察台の上に上がり横になった。

先生は品定めする肉屋のようにわたしの筋肉をむにむにとつかんで、その感触から筋の違い目を観察していった。

「相変わらず左肘の故障が長引いてますね」と先生は言った。

「ええ、利き腕だけに痛いんですよ。早く治さなければ」

「しばらく安静にしていたらすぐに治るんですけどね」

「そうは行きません。ワンシーズンも休んだら、ランキングが落ちるどころか、二部リーグにまで落ちてしまいます」

「自分の体と、ランキングとどっちが大事ですか？」

「それは.....」

スモー選手に取り、ランキングと試合ほど大事なものはなかった。スモー選手の体調管理を商売にしているなら、答えなくともわかるはずだ。

先生はわたしをうつぶせに寝かせ、左肘をぐいっと背中側にねじり体重を掛けて筋をのばした。何度かその動作を繰り返した。

「鍼を一本刺しますよ」

「ええ」

ホルダーを肘の関節に当て、鍼を指先でとんとんと叩くと、筋と筋の間にあるつぼに吸い込まれるように鍼が入っていった。痛みがすうっとひいていく感じがした。

「ふうっ、楽になりましたよ。ときに先生」

わたしは、ここにアラシヤマも通っていることを知っていた。

「何でしょう？」

「アラシヤマの調子はどうですか？」

「調子？ あなたの方がよくご存じでしょう」

「そう言う意味ではなく、.....どこかに故障を抱えているのでしょう？」

わたしが単刀直入に聞くと先生は言葉を濁した。

「カコガワさん。あなたもご存じの通り、我々鍼灸師にも守秘義務というのがあるんですよ。それに、情報収集は禁じ手じゃないですか？」

そう言われ、わたしは言葉に窮した。至極もっともな意見だった。

「いや、先生。確かにそうです。先生をそそのかして情報収集しようだなんて、考えが間

違っていました。どうぞ何も聞かなかったことにしてください」

「そうです。そうです。スモー選手はそうでないと」

先生は嬉しそうな笑みを浮かべ、うなずき、わたしの凝った背中をほぐしはじめた。

やがて気持ちよくなったわたしはそのまま軽い眠りに落ちていった。

次の日、予定通りアラシヤマとの対戦が待っていた。

二人が土俵に上がり、向き合い一礼をする。審判が「前へ」の指示をする。わたしは、左肘の怪我を悟られないよう、大きく腕を振って、前へ進み一礼をした。却ってわざとらしかったかも知れない。

スモーはハーフパンツの上にベルトを腰に巻いている。

クラウチングスタート形式で試合は始まった。

両者が向き合い、少しでも有利な体勢で相手と組みたいのはどちらも同じだ。アラシヤマは巧みな足裁きでわたしの左を刺されないように、回り込んだ。

足裁きには定評があった。わたしは一歩半踏み込み、アラシヤマのベルトを左手で捕まえた。これで、左右の動きは封じた。

「ふんす」

アラシヤマは気合いを入れてふりほどこうとし、わたしの左手の上手から右手を重ねてきた。左を切ろうという魂胆だ。しかし、その隙に今度はわたしの右腕が彼のベルトを捕らえ、左四つの構えになった。

わたしは、痛む左ひじに力をこめ、すくい投げの態勢に持って行った。が、外された。彼が、わたしの左肘にワザと体重を載せたせいで、思い切り痛みが走り、技が途中で切れてしまった。

――どうしてわたしの左肘の故障を知っているのだ？

考えられるとすると、付き人のフセハタから漏れたが、まさかと思ったが、鍼灸師の先生が金で買収されたかであった。一旦切れてしまった左でもう一度相手のベルトを狙ったが、逆に相手の右手に捕らえられてしまった。そして、じわじわと左肘の痛いところを突いてきた。最悪だった。

残るは利き手でない右手から繰り出す技でしとめるしかない。

無理とは思ったが、右手で奥ベルトを取り、すくい投げに持ち込んだ。相手は耐えた。が、十秒も持たなかった。左腰に故障があるのだ。そう持ちはしない。すくい投げが決まった。

審判は、アラシヤマの背中が土俵上に着いたことを宣言した。わたしは、フェア・プレイだけで勝ちを収めたことに満足し、これ以上の競技生活は無理と判断し、引退を表明した。了

隣の不幸

隣の不幸

「あなた、明日と明後日お隣のお手伝いに行くんだけどいいかしら？」

と、妻が話しかけてきた。聞いてみると隣のご主人が亡くなったそうで、よくよく聞くと、内緒なのだが、と前置きして、自殺だったと言った。内緒という割には結構、近所中に知られているようだった。そんなこと普通は家庭内の重要機密事項なのにと不思議に思った。

「どうしてそんなことまで話が広がっているの？」

聞けば、何年も前から病気を患い、治る見込みもない上に治療費が一家の収入を遙かに上回り、それまでの蓄えもなくなり結局何のために生きているのか分からないと、亡くなる数週間前から漏らしていて、隣の奥さんは誰かれにそれを悩みとして相談していたと言う。わたしはその話しを聞いて、沈痛な思いがした。

サラリーマンとして同じことになればと思ったからだ。現にわたしの勤めていた職場でも、以前、身体を壊しそのまま休職し、傷病手当をもらえる期間を過ぎても、復帰のめどが立たずに辞めていった人がいた。噂ではその後、自殺したとか、病死したとか言う情報が入ってきたのだが、退職後の死亡でもあり、会社からは誰も葬式にも行かなかったのだ。だから、参列者は近所のおばさん達だけだったはずだったのだ。

そんな訳で、今日と明日は妻は隣の手伝いに掛かりきりになった。夜は帰ってくるが、洗濯も掃除もしないと言うことだった。わたしは近所のことだからよく手伝う様に言って、会社に出かけた。たった、二日の不在だから大したことはあるまい、とタカをくくっていた。

会社に朝出勤するといつもの通り書類受けの中に処理すべき書類が山積みされていた。これをただひたすら、処理していくのだ。あるものは、商品の注文書を起こしたり、ある

ものは、品名と数量を確かめて、計算チェックをした後、決済印を押す。そんな繰り返しだ。そうしているうちに、お客さんからの電話が入る。居留守など出来ないから、丁寧に応対をする。そして、色々つまらない冗談にも付き合ったりするのだ。そんな、「妨害」があるために書類の処理は、定時間内にはできず、夜遅くまで掛かることがほとんどだった。

家に帰ると、妻の予告通り家の中の用事は、全くといっていいほどなされていなかった。

「あなた、お帰りなさい。散らかってるけどごめんねー」

「ああ、いいよ。どうだった？ お隣？」

「うん、結構、弔問客が多くて、大変だったわ」

「ええ？ 会社の人も来たの？」

「ううん、やっぱり、親戚の人と近所の人だけだったわ。明日はお葬式だからたぶん来ると思うんだけど。」

「過去の例から言うと多分誰も来ないと思うよ。」

「ええ？ 会社の人ってそんなに冷たいの？」

「会社っていったって、もう何年も前に辞めているんだろ？」

「そうらしいけど。……そうねえ」

次の日も、わたしは仕事が忙しく、帰りは深夜になった。

二日目も家の中は乱雑だった。思わず、声を上げそうになったが、お隣の葬式の手伝いに行っていたのだと思い直した。

「今日はどうだったの？」

「うん、あなたの言った通りよ。世間て冷たいのね」

「冷たいんじゃなくて、そんな余裕がないだけだよ」

「そうなの？」

わたしもふと、自分の身が心配になってきた。

「なあ、俺の保険なんかはどうなってる？」

「ああ、でも何よ急に？」

「いや、もし、ぽっくり逝ったときはいいんだけど、例えばさ……肝炎にでもなって長期に渡って高価な治療薬が必要になって治る見込みもなくなったら、どうなるのかなって」

「縁起でもないこと言わないでよ。確かに、今入っている保険じゃ、三大疾病時の治療費と、死亡時の一時金で家のローンと子供達の学費は心配ないわ。でも、それ以外の病気で長期療養となると、……でも、そんな保険てあるのかしら」

「ないだろ、やっぱり、首をくくるしかないのかな？」

「もう、やめてよ。」

そんなことを言っては見たが、まだ、真剣には考えていなかった。

次の日、主任が仕事中に倒れた。正確にはめまいを起こし、会社の医務室に担ぎ込まれただけだったが、そこで、公立病院で精密検査を受ける様に言われた。主任は、忙しいと文句を言いながらだったが、三日間、検査入院することになった。

昼休み、職場を代表して課長とわたしが、見舞いに行った。

「おう、どうだ」と課長が尋ねた。

「あ、課長すみません。お忙しいのに」

「いや、構わんよ。前から、顔色が悪いと思ってたんだ。まあ、ゆっくり検査してもらえよ」

「ええ、次は胃カメラなんです。仕事の方は大丈夫ですか？」

「気にしなくていいよ。何とかするから」

だが、検査結果は思わしくないものだった。肝機能障害の症状が出ており緊急入院となった。病名はまだはっきりしないが、速やかに休職手続きが取られて次の日から、主任の代行をわたしが勤めることになった。急に仕事が増えて、責任感を感じるとともに会社の冷たさをちょっぴり感じた。

最初の頃、週に一回、病院から病状が知らされた、本人以外秘密の書類だったが、管理職と言うことでわたしと課長だけが知ることが出来た。病気は肝炎から来る、肝機能障害で、全身の倦怠感や老廃物の堆積によるものだった。特効薬はインターフェロンの注射しかないが、かなりの副作用があり本人も苦しがっている様だった。わたしは毎週届くこの書類を見るのは辛かった。病状がどんどん悪化していくのが手に取る様に分かったからだ。

次の春、わたしはところてん人事で、主任に昇進した。今まで通りの仕事をこなすのと、八名の部下の管理であった。長いこと新入社員を採っていない関係で部下と言ってもベテランばかりだったので、管理上の問題は特になかった。

だが着任直後、会社の製品に欠陥が見つかり、一騒動が起こった。

わたしは、課長の特命を受け、メンバーのうち三人を専属にして今まで出荷した先を追跡することから始めた。顧客で事故になる前に、回収するなり、修理しなくてはならない。最初の一週間は二十四時間態勢で、製品の行方を追った。その成果は出て、製品のほとんどを回収することが出来た。もちろん、その後、残りのメンバーと営業部員とで謝罪におもむいた。だが、最後の五台の行方が依然として分からなかった。部品なのでどこかにストックされているのか、すでにどこかに使われているのかすら不明だった。

そうして一ヶ月が過ぎた頃、最悪の事態が起こった。工場で使われていたその部品の破損が原因で人身事故が起こってしまったのだ。先方への謝罪はもとより、当社の設計部に警察の捜索が入った。業務上過失傷害罪の疑いが生じたそうだった。大阪営業所には直接の影響はなかったが、また、家に帰れない日々が続いた。

途中で、メンバーの一人が過労で倒れ、ますます仕事が増えていった。こちらが倒れそ

うになると思ったくらいだ。栄養ドリンクを飲みながら皆頑張っていた。

だが、わたしもその頃、身体の異常を感じていた。

「柴山君、何か最近顔色が悪くないか？」

と、課長に言われた。他人から見ても、異常が分かるようなら少し危ないかなと、その時は気軽に考えていた。昼休みに会社の医務室に行くと、医師は胸をトントンと叩いて音を聴いた後、精密検査を勧めた。

「先生、このまま放っておくとどうなるんですか？」

「分からないから、精密検査を勧めているんです。最悪結核の可能性もあります」

――結核なんて過去の病気だと思っていた。もう絶滅したはずじゃなかったのか？ と思った。

「いえ、最近徐々にですが、また増加傾向にあるのです。それも、特効薬のストレプトマイシンが効かないタイプのものも報告されています。健康には十分気をつけてください」

そんなことは言われなくても分かっていた。

会社では、二人も抜けると業務に支障が出るので、主任代行が入り、派遣会社から応援を呼んでいた。自分が抜けてもその程度の影響かと、内心がっかりした。精密検査の結果、会社の医務室の指摘通りで、即時に入院させられた。法定伝染病なので、拒否できないらしかった。家に連絡すると妻が大騒ぎしながら、見舞いに来た。口に大きなマスクをつけている。本来なら、隔離病棟なのだ。仕方あるまいと思った。

「あなた、どういうこと？」

「さあ、わからない。過労がたたったのかな」

「じゃあ、労災が下りるの？」

「知らないよ。労働基準監督署で確かめてくれ。」

そう言うと、妻は医師に診断書を書いてもらい。大急ぎで行った様だった。

何故か、わたしが入院してから、妻は楽しそうだった。保険からいくら下りたとか、労災でいくらもらえたとか。流石に法定伝染病の威力ってすごいのね、と感心していた。

その妻のはしゃぎようとは裏腹に、こちらは、特効薬のストレプトマイシンが効かず他の抗生物質への切り替えがなされ、バンコマイシンなど強力な抗生物質が投与されたが、これもあまり効果はないようだった。医師は、内心さじを投げたような顔で告げに来た。

「抗生物質の効果があまり出ていません。古典的な治療で申し訳ないのですが、病巣の切除を考えています」

「ええ？ 肺を切るんですか？」

「はい、四分の三まで切り取っても命には別状ありません。あなたの場合。右肺と左肺の半分を切ろうと思うのですが、どうでしょうか。ただ、運動するのに支障が出ますが」

わたしはふと、ぽっくり逝くのと、長期にわたって働けない状態が続くのとを考えた。まだ、平均寿命まであと四十年以上ある。そこまでは生きられないだろうが、働けずに家でいるのも嫌だった。

「先生、抗生物質を続けてください。そのうち新薬も出るんでしょう？」

「今流行の病気ならそうですが、過去の病気ですからねぇ」

そう言いながら、手術の説得を諦めて出て行った。

しばらくして妻が見舞いに来た。前より服装が綺麗になっていた。それにバッグもブランドものだった。わたしはその点については追求しなかった。

「あなた、具合はどう？」

「まあまあかな。外科手術を勧められたんだが、断った」

「そう……ならいいけど。ううん、何でもない」と少し慌てた風になった。

妻は医師から、手術の意義を知らされていたようだった、と後で気付いた。彼女はわたしの死亡時一億円の保険に以前から内緒で入っていたようだった。了

幽霊マンション

幽霊マンション

わたしはその頃、とあるメーカーの大阪営業所に勤務していた。大手メーカーの子会社で化学プラントを納入した後のメンテナンス部品を供給したりする仕事である。あわよくば小規模な改造工事や、新規プラントの受注情報を得たりといったことが主な職務だった。だから、あちこちの化学工場や、その本社の調達部の担当者に、頻繁に電話したりメールしたりするのが昼間の仕事で、定時を過ぎてからは、夜遅くまで昼間取れた注文の社内の工場での手配処理を書類で行っていた。

事件は突然やって来た。仕事中、職場に掛かってきた一本の電話がことの発端だった。

「あの、北田様でいらっしゃいますか？」

わたしは、即座にセールスの電話だと直感した。ダイレクトに名前を指定してくることはないし、親しいお客さんなら、わたしを「様」付けで呼ぶことなどあり得ない。

「そうですが、セールスの電話なら迷惑ですので職場には掛けないでください」

わたしは、そう言って受話器を置こうとした。

「待ってください、セールスじゃないんです」

「じゃあ何ですか？」

「あの、不動産の運用をお勧めしているんです」

「はぁ？」

何のことか、分からなかった。

「あの、横浜にいい分譲マンションの物件があるんです」

横浜のマンション？ と聞いてわたしは、相手が冗談を言っているのかと思ったのだ。こちらは大阪の北千里に住んでいるし、会社も大阪市内だ。そんなことは電話番号を見たら分かるはずだ。これは冗談に違いない。わたしは、再び受話器を置こうとした。

「お待ち下さい、これは、お客様にマンションを購入いただいて、それを賃貸し、その家賃収入を運用益とするものです。是非一度ご検討願えないでしょうか？」

わたしは、色々な商売を考えつくものだなと、半ば感心しながら丁重に断り、受話器を置いた。今の自宅すらローンが大変なのに、マンションなど新たに買う余裕などあろうはずがなかった。

タバコを吸いに喫煙ルームに入り、休憩がてら同僚にその話しをしてみた。

「最近新手の商売が流行ってるのかな？」

「でも、詐欺に遭ったって話しも聞いたことあるぞ。行ってみたらそんなマンションは存在しなかったって」

「ふーん、そうなの？」

だが、一人だけ黙ってこの話しを聞いている男がいた。普段から無口な男だ。皆がタバコの火を消して、職場に戻った頃、その男はわたしに意外な話しを持ちかけてきた。

「北田さん、実は、僕は一度そのプランを計算してみたんですよ。一ヶ月の成果なんですけどね。皆には内緒ですよ」

「ああ、いいけど、どんなプランなの？」

「まず、住宅ローンの金利が今だと安いじゃないですか。一人じゃ厳しいけど、何人かで出し合って買うんです。それで、東京への通勤圏のマンションて結構高いんです。もちろん家賃も。それで、その家賃を……もちろん古くなれば下がっていきますが、これはプ

ラントの減価償却と同じ考えです。すると、今の自宅のローンをそれで返せるんですよ」

「えぇ？ じゃあ、債務なし状態と言うことかい？」

「まあぶっちゃけ、そう言う計算です。もちろん住宅ローンを二人で組むことは出来ませんが、一人で組んで、もう一人はその人からローンと同じ金利で借りた形式にするんです」

「なるほどねえ」

わたしは、その男のプランに興味を持った。確かにあの地域の賃貸マンションの相場は関西に比べ非常に高い。その利ざやを、こちらの自宅のローンの返済に充当しようと言うのだ。普通に考えてもまっとうな方法に思えた。

帰りの電車の中でも、ずっとそのことが気になった。このプランには隙はない、減価償却も計算に入っているし、家賃をきちんと納めてもらえればどこにも、不安要素はなかった。それに、今の自宅のローンが家計のかなりの重荷になっていたのも事実だ、だから、このプランに乗ってうまくしのげれば、と、その時は思っていた。

家に帰ると、妻の機嫌が悪かった。聞けばパートに行っている間に車を駐車場でこすられたらしい、夕方、自動車ディーラーに見積もってもらったら修理に十万円かかると言われたそうだ。

「ねえ、信じられる？ パートのお給料の二ヶ月分よ、何しに仕事に行ったのか分からない位よ。それに、駐車場の管理責任はないって言われたのよ」

確かに、通常の管理をしていた場合、管理人にはそれ以上の責任は問われない。子供達が駐車場で野球をするのを黙ってみていた位の過失がなければ駄目だ。

「まあ、大きな事故でないだけいいとしようじゃないか。車は直して置けよ」

「もう、でも動くんだからそのままでいいじゃない。ねえ？」

「だめだめ、傷ついたまま放っておくと、余計に傷付けられるんだよ」

家計を助けるために妻は、洋品店でパートの店員をしているが、確かに余り給料は高くない。子供の塾の月謝程度を補填しているに過ぎない。だが、そのために車に傷が入り、十万円もかかるのも痛かった。

「なあ、相談なんだけど？」

わたしは、妻に夕方のマンションのプランの話しをしてみた。最初は疑わしそうな目で見ていたが、緻密な計算と減価償却を盛り込んでいるという話に最後は飛びついた。

「なんか、よさそうね。住宅ローンの支払いがなくなるだけでも大きいじゃない？」

妻は、大乗り気だった。

わたしは次の日の、昼休み昨日の男に、もう少し具体的な話しを聞いてみた。

「あ、北田さん、大分乗り気ですね？」

「うん、うちも家計が厳しいんだ」

「どこも同じですよ。それで、物件なんですが、当然、東京の丸の内を通勤圏に絞ってますので、横浜で考えているんです。」

「へぇ？ もう何軒か候補はあるの？」

「ええ、新築予定のマンションは多いんですが、やはり、駅に近くてコンビニやスーパー、小学校に中学校、高校の進学に際しては学区制もあります。それで、三件ほどに絞り込んだんです。あとは、一度現物を見た方がいいと思うんですが。北田さん、あっちに出張の予定はありますか？」

「横浜か、根岸地区の巡回営業のときに行く機会があるかな？」

「じゃあ、わたしもそれに会わせますので、営業は午前中に済ませて、午後から物件を見に行きましょう。宿は同じ所にしましょう。」

とんとん拍子に話しは詰まってしまった。一週間後に横浜出張の届けを課長に提出した。あの男も隣の課だが同じく届けを出したようだった。

予定通り、次の週、わたしは横浜に行った。午前中、プラント工場を何カ所か顔を出して挨拶だけして、適当に仕事を済ませ、午後から、彼と合流して三件のマンション物件を回った。さすがによく調べてありどちらも甲乙つけがたかったが、最後に寄ったマンションが気になった。マンション自体は工事の最終段階だが、かなり売れているらしく彼が言うには、二十階と二十二階のいくつかしか残っていないらしかった。それに、実際見ることが出来るのはモデルルームになっている二階の一室だけだった。部屋に入ると、上品な感じの洋間で構成された作りだった。試しにフローリングの床の上にパチンコ玉を置いたがどちらかに転がることもなく、目の前の道路をダンプが通っても振動すら感じさせない。エレベータは有名電機メーカー製の高速機が四基据え付けられ、マンション自体も旧財閥系不動産会社の分譲で、品質に不安はなかった。

わたしは、ベランダに出てみた。北千里のマンションと違い、しっかりした作りで、しかも眺めも抜群だった。わたし自身このマンションをすっかり気に入ってしまったほどだ。学校も近いし、スーパーも駅も全てが十分以内の距離にあり、しかも駐車場も外車を余裕を持っておけるほど広々している。だが、わたしは値段が気になった。

「おい、価格は大丈夫なのか？」

「本当はすごく高いんだがな……事情があるんだ。」

聞けば、昔ここに古びたお寺があり墓場もあったと言う。だが、お寺が絶えてその後、何回か住宅に建て代わり、そのため、入居者に告知する義務もなく、それで一般価格は高いのだが、彼はその事実と、呪いの噂を入手しており、それで交渉して安く買えるという。

「本当に幽霊が出たりしないんだろうな？」

「そうだなあ、信じる人には壁の染みも幽霊に見え、信じない人には何でもない、それが幽霊だからなあ、まあ、怖がって出て行く分には、敷金・礼金が増えるからいいじゃないか。」

と、のんきなことを言い出した。だが、そうでないと家賃収入など、マンションのローンで消えてしまい、自宅のローンの充当にあてることは出来ない。それでわたしもこの「幽霊マンション」を購入する決心をした。彼がローンを組み、わたしが彼に借用書を作り、ローンの半額を彼に支払う約束をした。

大阪に帰って一ヶ月した頃、マンションの完成と早速、入居者の申し込みがあった。さすがに駅前徒歩五分で、閑静な環境、学校やスーパーへの近さがものを言った様だった。彼とわたしはその日、帰りに居酒屋に寄り、祝杯を挙げた。

しばらくしてマンションの管理人から、彼の元に電話が入った。

――入居者の会社員の方から、幽霊を見たって苦情が入ってるんですよ。どうしますか？

――そんな、非科学的な苦情をこっちに持ってこられても困ります。その人に何か思い当たることがあるから、何でもないことが幽霊に見えるんじゃないですか？

彼は、そう言って突っぱねた。管理人も入居者も、確かに苦情の持って行くところがなかった。新築マンションだし、その前は住宅だ。そうして、三年ほどの内に五組の家庭がそのマンションを借り、また出て行った。

わたしは、少し不審に思った。

「おい、あのマンション、入れ替わりが激しくないか？ 他の部屋はどうなっているんだ」

「他の部屋は分譲だから、三十年間はローンが終わるまで代われないだろう。でもどうなんだろうな？」

「一度、様子を見に行かないか？ 丁度今空いているだろう？」

「そうだなあ、余り行きたくないけど、少し様子を見に行った方がいいかなあ」

そんなことを言っている内に、数週間放置してしまった。

そして、適当な口実を作り出張のついでに様子を見に行った。二十階に上がり、わたしたちの部屋を見ると、ドアのロックが壊されていた。不審に思って中を捜索すると何者かが中に入り、カーテンレールで首を吊っていた。もう古い死体の様だった。

「おい、どうする？」

「もう賃貸できなくなる。おしまいだ」

どうやら、死者の魂に引っ張られるかの様にこの部屋に忍び込んだ様だったが、そんなことより、この部屋が賃貸に使えなくなることの方が心配だった。全面改装しないと、もう使えないだろう。だが、そんな予算はもはやなかった。彼が大胆な提案をした。

「これ、捨ててしまおうか？」

「捨てる？ でも、こんな人通りの多いところでどうやって運び出すんだ？」

確かに、廊下、エレベーター、前の通り、庭、ゴミ捨て場、二十四時間誰とも出会わない可能性はなかった。だからと言って、自殺が公になれば、賃貸計画自体が水の泡になり、われわれが今度は首を吊る番になりそうだった。

「壁の中だな」

と、彼はつぶやいた。わたしも即座にその意味を察した、ミイラ化した死体なら臭うことはないだろう。そうして、壁の石膏ボードを外し、ビニルでくるんだ死体を放り込み、新たに壁紙を貼って、元通りに戻した。それから、マンションの管理人に頼んで業者を呼んでもらい、壊された入り口の鍵の修理と中の清掃を依頼し、元の綺麗な部屋に戻った。

わたしたちはその日、試しにそこで一泊してみることにした。近所のスーパーで弁当とビールを買って飲み、リビングルームで仕事の愚痴をこぼしながら深夜まで起き、やがて知らない間に眠っていた。

朝起きて、彼に、何か変わったことはなかったかと聞いたが、彼もわたしと同様に普通に寝ていたそうだった。——幽霊は出なかったのだ。これで安心して新幹線で大阪に戻った。しばらくして入居者があり、また、元の状態に戻った。

またしばらく幽霊が出るの出ないのと、苦情があったが、彼がうまく突っぱね、礼金分を稼いでいた。例によって頻繁に入居者が変わった。

ある日管理人経由で、インターネット用光ケーブルの室内敷設の許可願いがあった。

――今の入居者の方が、インターネットの光回線を使いたいそうなんだけど、部屋の入り口まではケーブルが来ているんだけど室内工事がまだなんだ。やってもいいかな？

よく知らないわたしたちは、ただの室内配線と思って、

――いいんじゃないですか。

と許可してしまった。しばらくして光ケーブルの工事がはじまり、工事業者が「壁」の中を引っ張ってケーブルを各部屋に通していった。

次の日、わたしたちの職場に神奈川県警の刑事と名乗る男二人がやってきた。了

犯人なき犯行

犯人なき犯行

わたしが家に帰ったとき、玄関の鍵が開いていた。

――おかしいな。

もう誰か帰ってきたのかと、恐る恐るドアを開けると、おばあちゃんが頭から血を流して仰向けに倒れていた。玄関は血まみれだ。

わたしは慌ててておばあちゃんの身体を起こし、肩を揺すって呼びかけた。だが、首に手が触れたとき冷たくなっているのを感じてパニックに陥った。わたしは靴のまま玄関からリビングに上がり、台の上の電話機を手にすると、あわわと、声にならない声で一一九番通報した。

『はい、火事ですか、救急ですか？』

「えーと、えーと、おばあちゃんが倒れててですね……」

『じゃあ、救急車ですねすぐに急行します。ご住所は？』

「神戸市〇区〇〇町〇丁目〇の〇です、急いでお願いします」

『五分ほどで向かうと思います。患者さんの容態を教えてください』

「頭から血を流して倒れていたんです。身体を触ったら冷たくて……」

『え？ 亡くなっているんですか？』

「分かりませんよ、そんなこと！」

『じゃあ、体温不明、脈は？』

わたしはまた玄関まで戻り、おばあちゃんの手首を人差し指で軽く抑えた。ぴくりともしない。また、電話に戻り受話器を握った。

「あの、脈はないです」

『ああ、そうですか、……』

消防の司令室は無線で救急隊員に連絡を取り何か話し合っていたようだった。

『もしもし、あの、一応救急隊員がそこに行くまで何もしないで下さい』

「あの、どういう事でしょう？」

『その、事件の可能性があります。救急隊員が息があるのを確認したら病院へ搬送しますが、すでに息がないと分かったら警察に引き継ぎます』

電話をしている最中に、サイレンを近所中に響かせて、救急車が華々しく登場した。二名の救急隊員が、おばあちゃんの身体を調べ、すでに息がないことを確認、警察に連絡してすぐに交番の巡査が二人やって来た。救急車は警官の指示でしばらくとどまっていた。

「交番の巡査の鈴木です。あなたはここの御主人ですか？」

「はい、そうです」

「あなたが、外出から帰ったら、おばあちゃんが倒れていた、と、こういう事ですか？」

「はい、鍵も開いていたし、おかしいなと思ったんです」

その間警官の一人はおばあちゃんの頭の出血部分を救急隊員と一緒に調べていた。頭蓋骨が陥没しているとか、物騒なことが耳に入ってきた。

「御主人、このおばあちゃんはあなたの母親ですか？」

「はい」

「強盗に襲われた可能性があります、家の中を調べていいですか？」

「ええ」

断る理由がなかった。靴を脱いでビニールの袋を靴下の上から被せ、部屋に上がった。最初に入ったリビングで、引き出しが開けられ中身が散乱しているのが目に入った。

「御主人、ちょっといいですか？」

「何です？」

「この部屋が荒らされていますね、盗られたものなどすぐに分かりますか？」

引き出しが散乱しているのは、さっきわたしがおばあちゃんの保険証や、入院するなら判子などいるなと思って探し回って散らかしたのだ。しかし、救急隊員、警官、おばあちゃんの死体に囲まれ、この状況でそんなことは言えなくなった。

「さあ、特に裕福な家庭でもないので……そう言えば、判子がないなあ」

適当なことを言うと警官は過剰に反応した。

「その判子を使っている通帳はありますか？」

いよいよ、わたしも困った。確かに妻とわたしの預金通帳がその判子を使っている。わたしは警官を二階に案内し、寝室の引き出しを開けてみた。何故だか通帳がなかった。

「ありません」

「じゃあ、強盗の可能性がありますね、おばあちゃんは運悪くその強盗に出くわし、顔を見られたと思った犯人に殴られて倒れ、頭を打って亡くなられたのでしょう」

その後、警官は警察本部に連絡し指示を仰ぎ、遺体の司法解剖を大学病院に依頼し寝台車で搬送することになった。救急隊員はやっと解放されたとばかりに、毎度ありがとうございますと、いう感じで警官に敬礼し救急車は去っていった。

「御主人、これから、おばあちゃんの遺体は司法解剖に掛けられ、死因を特定し、犯人によるものと判明すれば強盗殺人事件として立件されます。ご遺体はしばらくこちらでお預かりしますが、法律に基づくものなのでご承知置き下さい」

「はあ」

更に一時間後、警察本部から鑑識班が到着し、さっきの警官は道路整理に回ってしまった。鑑識の制服を着た、鑑識員は手袋をはめドアの指紋や、引き出し、テーブル、部屋中の指紋を採取した。また別の鑑識員は玄関に広がったおばあちゃんの血痕から血液サンプルを採取していた。

「あの、御主人、この家に凶器となる……例えば工具などですね、どこかに置いてありますか？」

「階段下の物置に工具箱があります」

わたしが指さすと、鑑識員と刑事が一人その扉を開けた。中は整理されてなくグチャグチャにものが詰まっていた。工具箱はその下の方にあった。

「この下からハンマーなどを取り出したとは考えにくいな、他に置いてある場所は、外に物置などありませんか？」

「物置なら外にありますが鍵を掛けていると思います、でも、ここでこうしていていいのですか？」

わたしは余計なことを聞いてしまったと思った。

「いや、ここは我々だけですが、この家を中心に半径十キロの範囲で検問をしています。犯人は返り血を浴びていると思われますのですぐに捕まるでしょう。安心してください」

わたしは嫌な予感がした。もし誰かが間違って逮捕されたらどうしよう、そんなことが

頭に浮かんだ、それにしてもどうしておばあちゃんがあそこに倒れていたのか未だに分からない。

妻が買い物から帰ってきて、この、物々しい雰囲気に仰天した。

「あなた、何があったの？ 泥棒？」

「いや、お袋が倒れて亡くなったんだ。それに通帳がなくなってる」

「ああ、わたしがさっき銀行に行ってきたの、ここにあるわよ」

その瞬間わたしは妻の口を押さえて、黙っているように言った。今更そんなことを言い出すわけにもいかなかった。しかし、黙っているわけにも行かない。散々迷った末、通帳があったことを告げようと刑事に呼びかけた。

「御主人、さっき銀行の口座を凍結しましたが、十万ばかりおろされていたそうです」

――妻のおろした分だった。

「ですので、銀行から防犯カメラの記録を提出願い、すぐに解析します」

「あ、ああ、そう、ああそうですか、はあ、……」

もうどうしようもなかった。強盗殺人はどんどん既成事実化していった。多分銀行の防犯カメラを解析しても、妻の姿しかないはずだ。でもその前後に怪しい風体の男が顔を隠して写っていたらどうしよう、わたしの焦りは頂点に達しつつあった。

庭の足跡の石膏取りや、指紋を家族分採られて一旦警察が撤収した。妻と二人きりになり、今後のことを相談した。

「ねえ、あなた、お義母さんのお葬式なんだけど、どうするの？」

「そりゃ、やらないわけにも行かないだろ、岡山の伯父さんや、京都の叔母さんにも連絡しないといけないし、でも遺体がしばらく帰ってこないと言っていたな」

「何してるのよ」

「司法解剖で死因を検査するらしい、絞殺、撲殺、毒殺、自然死、もし殺人なら強盗殺人になるそうだ」

「えー、うそ、何盗られたのよ？」

「一応」とわたしは付け加えた。

「判子と通帳と申し出ている、それで犯行後、銀行で十万円が引き出された」

「うそぉ、引き出したのわたしでしょ。さっきおろしたところなのに、わたしが捕まったらどうするのよ、責任取ってよね！」

そう言われるとわたしも返す言葉がなかった。事態はどんどん悪い方に転がっていく。だがそれにあらがうすべはなかった。いや自ら放棄してしまったのだ。あのとき正直に話していれば、単なる変死で捜査終結になっていたに違いない。

次の日、昼頃、警察本部から電話があり、検死結果が出たと知らされた。頭蓋骨陥没によるもので、床で頭を打ったのか、犯人に鈍器で殴られたのかのいずれかだが、どちらにしても殺人罪に結びつくもので、遺体は修復後……多分明日以降……ご家族にお引き取り願うと連絡があった。

「ねえ、お義母さん心筋梗塞か何かで気絶してひっくり返ったんじゃないの？」

「俺もそう思う、だけど玄関のドアが開いていたんだ。誰か中にいたのかも知れないし、それは誰にも分からない」

「でも、盗られたものはないんでしょ？」

「家庭の平和を盗られた」

「もう、ふざけないでよ」

事件から二日後、遺体を受け取りに葬儀社に頼んだ寝台車で迎えに行った。頭蓋骨を調べた割には髪の毛で傷を隠してありきれいにしてくれていた。葬儀社の人が白装束を遺体に着せ、きれいに処理して白布でくるんで寝台にのせ、家に運んだ。

葬儀には母の兄弟、岡山の兄夫婦と京都の妹夫婦が来てくれ、それ以外はわたしの兄弟と二人の子供、そして近所の人たちだった。しめやかに執り行われいつの間にか、仏壇の中の人になってしまった。人間てあっけないものだなと、しみじみ思っていると、また警察から連絡が入った。

犯人が捕まった。

最悪の事態になったと思った。刑事の説明では銀行の防犯カメラからあの時間帯に映っていた中から前歴のあるものを重点的に捜査し、犯人の男が自供したという。

「彼は何を盗ったんですか？」

「通帳と判子、他にも台所にあった小銭を盗ったと自供しています、逃げようとしたらおばあちゃんが帰ってきたので、突き飛ばしたら玄関で転んで頭を強く打った様だった。そう言ってます」

嘘か本当か、いまとなっては確かめようがなかった。もし、警察で無理矢理自供させられたとしたら冤罪だが、彼の自供が嘘とも思えなかった。余りに具体的でこの家に侵入しなければできない自供だった。真相は分からない。了

職業選択の自由

職業選択の自由

今年も、就職戦線は厳しかった。

求人倍率は政府の指導もあってか決して悪いものではなかった。しかし、その内容は我々一般学生にとっては厳しかった。成績のよい学生には一人に十社から求人があるのに対し、成績の悪い学生には一社も来なかった。確かに平均すれば求人倍率は一・〇をわずかに上回っていたが、わたしにはその恩恵は回ってこなかった。

面接が二百社を越えたとき、わたしはふと、社会が悪いのではないかという一つの結論に達した。

憲法二十二条では居住の自由と共に、職業選択の自由が基本的人権として保障されているが、今となっては、それがそのまま貧乏の自由とも呼べる事態を引き起こしていた。

そして、……わたしは海を越え大陸にある、とある共和国に移住した。

労働者の天国。それが謳い文句だった。

この国では、職業選択の自由はなかった。が、その代わりに親の職業を自動的に継ぐことで、仕事が与えられ、厳しいノルマが地方委員から科せられてはいたが、それさえクリアしておけば後は、文句を言われることはなかった。怠け者に取っては住みづらい国だっただろうが、職を求めて彷徨 (さまよ) うことを考えれば、ここは天国だった。

わたしは、移住・帰化申請してすぐに労働局に行き、職をあてがってもらった。

「ふむ、……大学を出ておられるね。因みにこれまでの職歴は？」

役人は分厚い眼鏡越しにこちらを睨め付けた。

「は、学生時代にアルバイトを少し」

「アルバイト？ 何だねそれは？」

この国には学生アルバイトの概念はないようだった。

「すみません。正式な職に就いたことはないんです。大学では工業化学を専攻していました」

よくわかったような、わからないような顔で役人は書類に判子をポンとついて、手近にあったキングファイルを取り出した。

「現在空きがあるのは、彫刻職人と、パン職人、農業、……」

役人はいくつかの職を紹介してくれた。ただ、どれも、わたしの大学の専攻を生かせそうなものは一つもなかった。興味がありそうな職種で選ぶと、美術が好きなので彫刻職人など面白そうに思えた。

「やってみるかね？」

「はい、ぜひ」

わたしはこれまで受けてきた企業面接と同じような感覚で前向きな態度を表すように、大きな声で返事した。そして、その場で書類を作成してもらい、この国にある国立美術工房というところに配属が決まった。

工房に着くと、工房の責任者が迎えてくれた。貧相な体格の顔色の悪い男だった。

「君が今回配属になった人？」

「はい、日本から来ました。この国に将来を捧げるべく帰化した所であります」

「そう、……それはまた」

男は何か言いかけて止めた。

「わたしは彫刻職人になると聞いたのですが、研修とかあるんですか？」

「はあ？ まず、職人と言ってはいかん。彫刻家といいたまえ。それから、先輩彫刻家には先生と尊称をつけること。研修はない。元々父子相伝で教え込むのが正統なやり方なのだ。君の場合はわたしが技を伝授する」

どうやら、政府の職人扱いが芸術家気取りのこの人達の気には召さないらしかった。わたしは、郷に入りては郷に従えと、早速その場から、男のことを先生と呼んだ。彼は満足そうにわたしを工房の中に案内した。

しばらく、工房のある街で生活するうちに、こちらの国での仕組みが理解できてきた。

この国では職業選択の自由がなく、基本的にみな親の職業を世襲で継ぐようになっているのだが、それが出来ない人は労働局へ行き新しい職業を紹介してもらわなければならない。かといって文句のある人もいるだろうが、ほとんどは失業の恐れもなく安穏とした生活に満足しているようで、生産効率の悪いところもあるが、それなりに機能していた。

就職難に、失業問題。資本主義社会が抱える問題が、この国には一切存在しないのだ。わたしにはにわかには信じがたかったし、それなら、日本人は今まで何をそんなに苦労して苦労を背負い込んでいたのだろうと、哀れみの心さえ湧き上がる始末だった。

そして、一週間ほど経った頃、わたしに友人が出来た。

工房に大理石を収める業者の徒弟で、カカロフという男だった。よく酒を飲み、冗談を言って人を笑わせるのがうまかった。いい男ですぐに仲良くなったと言う次第だ。

「カコガワくん、君はどうしてこんな国に来たんだい。聞けば自由主義の国からわざわざやって来たということらしいじゃないか」

「君が思うほど、自由はいいことじゃないさ。基本的人権なんてくそくらえだ」

「ほう？」

彼は驚いた顔でうなずいた。

わたしはビールのカップを飲み干した。でも、自由にお代わりは出来なかった。代金は払わなければらないのだが、実質配給制で、一日当たりの消費量が、大人の男で中ジョッキで二杯までと決められていたのだ。まあ、それくらいなら健康にもいいしとわたしは簡単に受け入れた。

「しかしだよ。カコガワくん。麦の収穫高が減収になると、この配給量も変わってしまうんだぜ。自由主義なら金さえ出せば、いくらでも飲めるんだろう？」

――金さえ出せば。

わたしの頭の中に、日本での思い出がよみがえってきた。確かに金さえ出せば何でも手に入った。金を出して消費を楽しむと言うことは、その裏で、飢餓に苦しむ世界があることに目をつぶるということだった。

ああ、わたしは今まで何という罪深いことをしてきたのだろう？

次の日、先生はわたしに小さな彫像を任せてくれた。石のみと金槌を持ち、大理石に打ち付けて形を作っていく。こつこつと動物の彫像を一日掛けて作り上げた。

今、工房全体の作業としては、大統領の立像を製作中である。

国家創立七十周年の記念日に除幕式が行われる予定で、複数のベテラン彫刻家の手により製作が進んでいた。

わたしはまだそこに入ることを許されていなかった。

ベテラン彫刻家、その言葉にわたしはこの国を代表する偉大な芸術家のイメージを膨らませていた。どんな偉大な立像になるのだろう。もしかしたら、大統領本人より、生き生きとし、まるで生きた大理石と呼ばれるほどに完成度の高いものになるのに違いない。そう夢の中にまで出てきた。

誰もいないときにわたしはこっそりとその製作現場に忍び込んだ。除幕式まで待てなかったのだ。わたしの頭の中で、立像はミケランジェロもどこへやらの立派なイメージにできあがっていた。ところが案に相違して、その出来映えはひどかった。上野駅前の西郷さんの銅像の方がまだ写実的といえるほどの、ひどさだった。前衛芸術なのだろうか、わたしはわらにもすがる思いだった。誰かこの訳を説明して欲しい。

このままでは大統領の尊厳をそこなってしまう。そうなれば、工房長の責任も問われるだろうし、怒った大統領はこの工房を閉鎖し、彫刻職人全員を処刑してしまうかも知れない。流石にそこまでしなくても責任を取り解雇するくらいの処置はあるだろう。

わたしは、また再び、失業の心配をし始めた。この国には建前上失業者はいないから、失業保険などない。また、労働局の役人の前に立たねばならないのだろうか。

――また、君かね？ 勤まらなかったそうだな。次は何にする？ パン職人か？ それとも清掃人かね？ 何でもあるよ。

嫌みたらしく、そういう風に聞いてくるあの役人の顔を思い浮かべた。

わたしは不安を抱えたまま、自分に任された小さな動物の彫像を彫り続けた。聞けば大統領の立像の足元にポイントとして置かれるそうだった。それを聞き、わたしはもう駄目だと思った。確実に責任をかぶせられる。連座制があるかどうか知らなかったが、確実に責任を取らされると信じていた。

除幕式の日、わたしは銃殺を覚悟した。

大統領はにこにこして、みんなの前を歩いて、彫刻家の努力をねぎらった。

「うん、うん、よく出来ているよ。よくやってくれた」

わたしは我が目と耳を疑った。大統領は彫刻家の不手際を少しも責めなかった。

後で、工房長から聞いたところでは、世襲制の工房では大した作品は作れないことは大統領が一番よく知っているのだということだった。それに何より、大統領自身が世襲の三代目だということだった。わたしは何となく事情を理解した。彫刻の出来映えを否定

することは自らの世襲制の正当性を否定することになるであろうことを。了

ギア・チェンジ！

ギア・チェンジ！

アニメのイベントの仕事を終えて、声優の美里は会場から次の仕事先に向かうためＪＲ秋葉原駅へと急いでいた。今日の会場は五十人ほどの集まりだった。つい二、三年前までは日本武道館や埼玉スーパーアリーナを満員にするほどの観客動員数を誇っていたのに、段々と人気は下降し、今では往時の人気の余韻で辛うじて活動しているに過ぎない。

それでも、週に一本のラジオ番組を担当させてもらっていたのは有り難いことだった。これからそのラジオの収録へ向かう正にそのときだった。

突然誰かに行く手を阻まれ、美里は立ち止まってしまった。

――お願いしまーす！ という、突然の声で美里は我に返った。

側には小柄な茶色の髪をした少女が立っていた。年の頃は高校生くらいか、もう少し上かも知れない。美里は彼女の差し出した安っぽいチラシを受け取った。

その内容によると、どうやら駅前通で路上ライブをやるので聴衆を集めているらしかった。こんなことしなくてもここなら人通りが十分多いし、この秋葉原という土地柄、歌がうまければすぐに人垣が出来るだろうと思った。

美里は腕時計を見た。イベントに出ていたため、ファッション用に選んだ品物なのであんまり正確さは期待できる代物ではないが、午後六時にラジオプロデューサーの白石吾朗と打ち合わせがある以外に予定がなく、それまでかなり時間があることから、興味本位で彼女の歌を聴いてみることにした。別に本当にエンターテインメントとして期待していたわけではない。単なる気まぐれだった。

彼女が歩道上に用意していたのは、華奢なパイプ椅子と譜面台だけだった。彼女は肩からフォークギターを掛けていた。ここまでの段階ですでに数人の人垣が出来ていた。二十五、六歳から三十歳くらいと思われる男性客ばかりだった。

彼女は、ふてぶてしい態度で、今日はこれだけか、と言わんばかりの表情で周りを見渡すと、起立して一礼した。周りから儀礼的な拍手がパラパラと沸いた。数人は固定客がいるのかも知れないと思った。

美里は自分が歌を始めたいと、マネージャーに懇願したときのことを思い出した。

ある程度、声優としての地歩を固めつつあったものの、アニメの作中歌などが何枚か売れているに過ぎなかったレベルで、あの当時はどこのレコード会社も歌手としては相手にしてくれず、それで、事務所に所属したときから面倒を見てもらっているマネージャーの瀬川修二に相談したのだ。

――まずは路上ライブでもやってみて様子を見たらどうだろう？ 秋葉原ならアニメファンが多いだろうし、ある程度、君の味方になってくれる聴衆もいると思う。君なりに手応えがつかめたなら、それをビデオにとって売り込んでみようじゃないか。そのときは、僕が動くよ。と、彼は大人な判断を示してくれた。

そして、……最初は誰も聞いてくれなかったが、毎週日曜日の同じ時間帯に唄っているうちに、段々と聴衆が増えてきたのだ。後で知ったことだが、瀬川が歩行者天国でライブの宣伝のビラを配っていてくれたそうだった。それを他人から聞いたとき思わず涙がこぼれたのを覚えていた。

美里は目をつぶって彼女の歌を聴いた。

誰かのカバーソングではなく、自分で作詞したオリジナルソングの様だった。それなりに、作り手の想いが伝わってくる。ちらりと彼女のギターを見ると、一生懸命に左手を動かし、右手で弦をかき鳴らしていた。カポタストの位置が悪いのか、チューニングがずれているのがご愛敬だったが。

彼女は一曲歌い終わるごとに、譜面台をぱらりと一枚めくった。

――自分で作ったんなら、覚えなさいよ。と、少しいらっとさせるのもご愛敬だ。

四曲歌って、彼女のショーは終わった。

パラパラと拍手が沸いたが、お世辞にも盛大とは言えなかった。美里は周りに合わせて、一緒に手を叩いていた。聴衆はすぐに三々五々散っていき、美里だけが取り残された。こういうのは少し気まずいものだ。

「ありがとうございました。最後まで聞いてくださって！」

少女は譜面台を解体しながら、撤収作業の手を休めずに嬉しそうに美里に話しかけてきた。

「よかったよ。あなたが作ったの？」美里はお世辞を言った。

「はい、シンガーソングライターになるのが夢なんです」

「ふうん。そうなんだ」

美里はあまり手厳しくない程度に、プロとして音程のずれなど、二、三指摘すべき点を教えてあげた。このまま放置すると後々困るだろうと思ったからだ。少女は喜んでジーンズのポケットからメモ帳を取り出し、書き留めた。

「あの、ひょっとして声優の桑原さんですか？」

「あ、……うん。よくわかったね」

マスコミへの容姿の露出はそんなに多くない方だし、その上、今日はサングラスを掛けていた。地味な格好をしていたから誰にもわからないと思ったのだ。

「実はファンなんです。よかったらサインお願いできませんか？」

その少女はすっかり美里になついてしまった。

「いいけど、……あなたがサインをお願いされる側になりなさいね」

「てへ」

彼女は可愛らしく舌を出し、手で頭を叩く動作をした。

次の日、彼女は美里の所属する声優プロダクションの事務所に顔を出した。

マネージャーの瀬川が困った顔をしていた。どうやら押しかけ弟子になろうとしているらしい。こんなことはよくあるのだが、瀬川自身マネージャーとして、売れっ子芸能人の担当になったことがこれまでなかったので、慣れていないのだ。

「あの、昨日言われたことを直してデモテープにして持って来たんです。聞いてもらえたらそれだけでいいんです」

結構、根性のある子らしかった。

「いいわ、……瀬川さん、まだ時間があるでしょう？」

「ああ、あるけど、美里ちゃん、いいのかい？」

美里は仕方なさそうな顔で首肯した。彼女の持って来たＣＤを聞いてみると、確かにあのとき指摘した事柄だけはちゃんと直っている。しかし、それはそれ。直ってみると、今度は他の箇所が気になりだした。プロとしては使い物にならない。

でも、このまま追い返すにしては、彼女は愛嬌がありすぎた。

「ねえ、瀬川さん。わたしのラジオ番組で使ってみたら面白いかも」

美里はいたずら心を起こした。現在持っているラジオ番組で、毎回アニメ関係者のゲストを呼んでいるのだが、こうした歌手初心者を登場させても面白いのではないかと思ったのだ。

「本気 (マジ)？」

本当に彼女を使うにはラジオ放送のプロデューサーに許可を得なければならないが、そうした交渉ごとを行うのも瀬川の仕事の一つだった。いつもの通り、名の知れた人物を番組に使うなら、一言連絡するだけでＯＫがもらえるだろうが、今回はダメ元で掛け合っ

てみるしかないだろう。

「あの……いいんですか？ あたしで？」

「ああ、まだ名前聞いてなかったね」

瀬川は美里の顔を見た。美里も彼女の名前など知らないから首を横に振った。

「あたし、北川知夏といいます。十八歳、専門学校生です」

「よろしく、桑原美里よ」

美里はにっこり笑って彼女の手を握った。

彼女の舞台度胸は中々のものだった。

美里は最初、自分のトークの合間に彼女を入れて、いじろうと考えていたのだが、どうしたことか、話も振らないのに勝手に喋るし、それが聴取者にも受けたのだ。そして、リスナーからのリクエストメールも一気に増え、段々と美里のやることがなくなってきた。

それが面白くないのも事実である。

「美里ちゃん、ちょっといい？」

降板を告げられたのは次の週だった。

マネージャーの瀬川は出来る限り言葉をオブラートに包んではいたが、明らかに選手交代を告げるものだった。美里はショックを隠せなかった。このラジオ番組だけは声優千原美里としての最後の砦だったのだ。

「でもさ、いつまでもアイドルではいられないんじゃないかな？」

プロデューサーの白石は、こう諭し始めた。「いつかは後進を育てる立場に回らなければならないときもくるさ。そのときにまで大舞台にしがみついていたんでは後進の者が困るじゃないか？」

そして、美里は北川智夏を人気者にするために、新たに制作者としての道を模索することにした。作詞・作曲を通して北川を陰から支え、制作者としてもう一度一流になってやるのだと決心した。了

猛毒のおひたし

猛毒のおひたし

夕方、妻が夕食の準備をしているとドアホンが鳴り、彼女はエプロンで手を拭きながら、玄関に出て行った。しばらく戻ってこないところから、近所の奥さんかと思われた。

「お隣の奥さんだったわ。山菜を採りに行ったんですって。そのお裾分けを頂いたわ。わらびと二輪草だって」

「へえ」

わらびはよく聞くが、二輪草は初めてだった。花は見たことがあるが、若葉が食べられるとは初めて聞いた。隣の奥さんが言うには天ぷらにすると美味しいということらしい。しかし、我が家ではわたしが高脂血症のせいで近年天ぷらとかフライとかいう料理をしたことがなかった。天ぷら油の買い置きすらない。

「どうしたらいいかしら？」

妻は手を動かしながら訊いた。すでにわらびは水洗いして包丁が入れられている。こちらは大鍋に水を入れ、そこに丸ごと入れて浸け、重曹を入れてあく抜きする。その後、湯がいて食べやすい大きさに切ったらそれで終わりである。

わたしが口を出すまでもなく、すでにその作業の大半を終えつつあった。

問題は、二輪草だ。

――天ぷら、天ぷら……。

要は油を使うもの以外の料理を探し出せばよいのだ。わたしは、インターネットで料理

法を検索した。わらびの方はたちまち一千三百件のレシピがずららっと出てきたが、二輪草は流石に少なかった。ヒットしたのは三件のみ。

その中でおひたしというのが見つかった。これなら、わたしにも食べられそうだ。早速プリントして妻に渡した。

「おひたしねえ……」

何だか不満そうにつぶやいた。あんまり食べでのない調理法ではある。

「文句言うなよ。お前が受け取ったんだ。ちゃんと調理しないと失礼じゃないか」

「はいはい」

妻はわたしがプリントしたレシピ――写真も入った詳細なものだった――を元に、きれいに二輪草の葉っぱを水洗いし、大鍋に水を張り、そこにつけて火をつけた。さっと湯がいて水切りしたらそれで出来上がりである。好みに合わせて味付けしたらそれでよい。

出来映えは上々で、濃い緑色の二輪草は美味しそうなおひたしとなった。

夕食は焼き魚と、頂いた山菜のおひたしとわらびの佃煮、そして味噌汁と白いご飯だった。

出来たての山菜は少し苦みが効いて、独特の味わいがあり、ご飯が何杯でも食べられるくらい美味しく、それでなくともカロリー制限している身の上であったが二杯お代わりした。

「こんなに食べていいのかな？」

「いいわけないじゃない。これ以上は駄目よ」

妻はまるで飼い犬に聞かせるような口ぶりでわたしに言った。

わたしは、食事を終えると妻が出してくれたお茶を飲み、テレビのスイッチを入れた。

ニュース番組の途中のコマーシャルタイムになり、わたしは何となく、夕方自分でプリントした二輪草のレシピを手に取った。実際に料理したのは妻でありわたしは、おひたし、という文言しか目を通していなかったのだ。まあ、緑の葉とおひたしという文言とがあれば、それ以上の情報はもはや必要とはしない。それでも、コマーシャルタイムは余りに長く、しかも、退屈な内容だった。わたしは、しょうことなしにレシピを熟読した。

「水洗いし、花も含めて大鍋に入れ、三十秒ほど湯がいてざっと引き上げる。好みに応じて……」

それ以上は妻のやっていた料理と同じだった。が、何か違和感があった。いつもと何かが異なっていた。――何だろう。この違和感は。わたしの第六感は何かとんでもないことを見逃している、しかもそれが、生命に関わるような一大事につながっていることに警鐘を鳴らし続けていた。

わたしは、レシピをよくよく読んだ。そして、記事の最後に但し書きがあるのに、目がいった。

――二輪草の葉の形は、猛毒のトリカブトの葉と形状が似ているので、安易に山菜採りに出かけて採取しないこと。もし取った場合は、必ず専門家の判断を仰ぐこと。

トリカブト！

この一文字にわたしの目は釘付けとなった。果たして隣の奥さんは、山菜採りのエキスパートなのだろうか。それとも、たまたま二輪草が咲いている！ と喜んだだけで採取したのだろうか。後者だったらうかつには手を出せないことになる。

ええい、こんな心配はすでに時機を逸していた。わたしがそのトリカブトとやらのおひたしを食べてからすでに十五分は経過しているのだ。その上、お茶まで飲んでいた。お茶はまあ関係ないとしても、毒性が表れるまでどの位の時間がかかるのだろう。そんなに即効性の毒ではなかったと思う。

わたしは、またもや、インターネットでトリカブトのことを調べ始めた。

「あなた、いい加減にしなさいよ。隣の奥さんに失礼じゃないの！」

妻は何とか助かろうと努力しているわたしの後ろから罵声を浴びせた。だが、生命が懸かっているのだ。そんなくらいの妨害ではわたしの作業を止めることなどもはや出来ない。

わたしは、さっき食べたおひたしの残りを鍋から取り出し、箸で丹念に伸ばし、元の形を再現し始めた。

「もう、やめてよ。いい加減にして！」

「うるさい。黙ってろ！」

葉の形はインターネットで調べた中のヤマトリカブトに酷似していた。二輪草の可憐な花が今となっては毒花に見えてくる。

「お前、本当に二輪草なのか？ え？」

「ちょっと、食べ物に話しかけるのはやめて。壊れちゃいそう。もういや！」

妻は段々とヒステリックな反応を見せ始めた。

が、これは生命に関わることなのだ。

「もし、トリカブトだとしたら、お隣さんも食べてるはずよ。そうでしょ？ なのに何ともないみたいよ。そうでしょ？ 心配ないわ」

妻はそう言い、その場をとり繕おうとした。

「いや、うちの家族に恨みを抱いていたのかも知れない。だとしたら、俺だけに食べさせる気だったんだ。そうに違いない」

「いい加減にして！ あなたどうかしてる！」

「ああ、そうさ。いつだってどうかしてるよ。でもそうでもしなきゃ、この厳しいコンクリートジャングルでは生き延びられないぜ」

格好いい台詞を吐き、すでに食べてから三十分ほど経過していた。お腹がきゅるると鳴った。妻が皮肉げにわたしのお腹に目をやった。食欲があるなら、毒なんか食べてないでしょうと言わんばかりだった。

「トリカブトの毒ってどの位で効くんだろう？」

わたしはまたしても、インターネットで検索した。その結果、正確な効果は不明だった。しかし、事故の例では、即効性の毒で直ちに苦しみだし、その後病院に救急搬送されたが、そのまま心停止に陥り、死に至った例があるという。わたしは恐怖のどん底に陥った。

そのときである。救急車のサイレンと、――道を空けてください。救急車が通ります。という拡声器の声が近所の道に鳴り響いた。

「おいおい、誰だか知らないが、救急車を呼んだのかよ？」

「何だか近いわよ」

妻は、野次馬根性丸出しで、つっかけを履き表に出て救急車の行方を探索した。

「お隣のご主人みたい」

妻はぽつりと口にした。

「中毒症状を示したんですって。あの二輪草やっぱりやばかったのかも」

「おいおい、俺らも食べたんだぜ」

そう言って、わたしは腕時計を見た。食べてから約三十分。そのとき、わたしの額には脂汗がにじみ出していた。

「どうしたの？」

「少し寒気がする。関節も痛い。気分も悪い。……お前は何ともないのか？」

「あたしは、わらびしか食べなかったから」

隣の奥さんとご主人も多分同じような状況だったのだろう。それでご主人だけが救急車で運ばれたのだ。

しばらくして、近所のあちこちから救急車のサイレンの音が聞こえてきた。きっと、お裾分けした近所の家、皆の所で中毒症状が起こっているに違いない。わたしの意識もこの辺りからなくなり始めた。了

真夏の殺意

真夏の殺意

金曜日、仕事の後のホテルで不倫相手の彼女から妊娠を告げられた。僕は、取り乱すことなく、今の妻と別れること、彼女に結婚と子供を産んでいいことを約束した。彼女はうれしそうにベッドの中で「うん」と涙ぐみ、わたしの胸元に顔を埋めた。

もちろん、現実にそんなこと出来るわけがなかった。妻はわたしの上司である部長の一人娘だったし、仲人は現在の常務である。離婚など端から持ち出せるわけがなく、彼女がこの場で騒ぎを起こさないための方便に過ぎなかった。

そうして彼女を大人しくさせて置いて、わたしは彼女をわたしから遠ざける秘策を練った。

――自殺に見せかけて、富士の樹海で始末してしまおう。

短絡的になったわたしは、地図を調べた。

次の週、わたしは彼女をドライブに誘った。

脚の着かないように、友人名義でレンタカーを借り、河口湖を見に行くと称して彼女を助手席に乗せた。

「どうして、自分のＢＭＷを使わないの？」

彼女はわたしの行動をいぶかしんだ。

「ごめん。離婚交渉の結果、妻に譲ることにしたんだ」

わたしはあくまでも、弱い夫を演じてみせた。ここで気づかれたら何にもならない。

夕焼けを見ながら彼女は、「本当はわたしのこと飽きたんじゃないかとずっと心配していたの」といった。

「そんなことない。そんなはずないじゃないか。君のこと真剣に好きなんだ」

わたしは心にもないことを言った。内心神をも恐れぬ所行だと感じていたが、もはや後戻りは効かなかった。どうして、彼女から妊娠を告げられたときに、産むことは不可能だと言ってしまわなかったのだろう。その方が殺人よりはるかに罪が軽い様な気がした。いや、どちらも殺人には違いない。それに妻との間に溝が出来るのを心から恐れていた。(保身のために)

クルマはやがて、河口湖近くまで来た。

「あれ、こっちじゃないの？」

地図を膝の上にのせて、彼女は小首をかしげた。元々地図には弱い女だった。

「こっちの方が近道なんだ」

「そうなんだ」

わたしはわざとカーナビのついていない車種を選んでいた。道はあらかじめ何度も確かめていた。衛星写真で、密林の部分を探して、しかも死体も見つかりにくいと思われる箇所を探していた。

今朝家を出る前に、妻が嬉しそうな顔で、妊娠を告げた。(昨日、妊娠検査薬に反応があったらしい)。最悪だった。

クルマは山道に入り、未舗装道路になった。彼女は段々と不安な顔になった。

「ごめん、エンジンの調子が悪いや。あの洞窟の中で少し休もうか」

わたしは、ワザとエンジンのキーを切ったり入れたりしてエンコした風を装った。

「え？ あの、……でも、あなたのこと信じていいんだよね？」

わたしはうなずいた。そして片手でロープの入った革バッグを持ち、もう一方の手で彼女の肩を抱き、洞窟の中へと入っていった。了

カブトムシの中の妄想

カブトムシの中の妄想

わたしは、酷暑の中、カブトムシのぬいぐるみを着てチラシを配るアルバイトをしていた。

デパートの昆虫展の、ＰＲ活動だった。

アルバイトは７階催し物会場と、玄関前との二班に分けられていたが、くじ運の悪いわたしは、午後の一番暑い時間に外の番に回された。

でも、いいこともあった。ポニーテールにシュシュをつけた女の子と一緒になったのだ。彼女も同じく学生のアルバイトだった。

「お願いしまーす。昆虫展でーす！」

彼女は元気よく、声を掛けチラシを配った。

「暖房が効いているみたいだね」

わたしは彼女に声を掛けた。ミニスカートから伸びる細長い脚がきれいだった。（少なくともカブトムシの中の僕からはそこしか見えなかった）

「７階は冷房が効きすぎて寒かったわ。こっちの方がいいくらいよ」

「そんなもんかなあ」

「そうよ」

彼女は動きも、口の利き方もきりきりしていた。

わたしは、彼女の連絡先が知りたいと思った。でも、カブトムシの中からではそれ以上お近づきにはなれなかった。

「このアルバイトはまだ続けるの？」

「ううん、今日で終わり。あなたは？」

「僕はあと三日。最後の日までやるんだ。出来れば来てくれないかな」

「どういう意味？」

「いや、また会いたいなと思って」

「じゃあ、最終日また来るわ。お客さんとして」

「うん」

最終日、わたしは運良く７階催し物会場の整理を任された。こっちは冷房が効きすぎていて彼女の言うとおり寒いくらいだった。肝心の彼女の名前も聞けなかったし、顔もうろ覚えだった。だが、わたしには彼女がすぐにわかった。カブトムシの本を小脇に抱えた女性がいたのだ。彼女に他ならなかった。わたしは彼女に声を掛けた。了

戦略的獲得

戦略的獲得

わたしは冴えない三十五歳のプロ野球選手だった。

冴えない、という言葉は妥当ではないかも知れない。ある意味、特別な選手だった。というのも、過去何度も優勝パレードに参加した経験を持つ数少ない経歴の持ち主だったのだ。十八歳で最初の球団に入って以来、何度も球団を変わりその度、チームは勝ち星を上げ続け、いつもリーグ優勝をものにした。

かといって、わたしが優秀な選手であったかというと、それはそれ、別問題である。

主に外野手。今の球団では八番ライトを任せられていた。まあ、無難なポジションであるし、わたし自身、内野で鋭い打球を処理するより、外野の芝生の上で緩慢なフライをさばく方が性に合っていた。正に天職であるといえた。

わたしのプレイで観客を魅了するという訳でもなかったし、打撃が秀でている訳でもなかった。ただ単に試合に参加している九人の選手の一人に過ぎなった。他の誰でも変わりが効く。それは普通のごく普通のサラリーマンと何ら変わりはなかった。

打率は今季の前半で一割五分五厘、このままではいくら無難な選手とはいえ、少しやばいのではないかと少し不安に思えてきた所だった。

ちょうど、この日、試合前の守備練習をしているとコーチが渋い顔をしてやって来た。

「加古川。ちょっといいか？」

「はい。何でしょうか」

「今日の先発メンバーにはお前は入らないことになった。言っている意味がわかるな？」

――とうとう引導を渡されるときが来たと思った。

こうして先発メンバーから外れると、ベンチ入りして選手交代要員となる。そして、出番がなければ今季が終わった後で、別のチームとのトレード要員となるのだ。これまでにもそうして何度もチームを変わってきたのだ。が、しかし、もう自分の年齢を考えた。二十代ならどこのチームでも獲ってくれるが、三十代は少し厳しい。代打での起用が増えるからここ一発のチャンスに強くないと使い物にならないし、守備でも堅くないと困るのだ。わたしは、ここぞというときにエラーが多かった。

「とりあえずはベンチで代打に備えておいてくれ」

コーチはそういって他の選手の方に回っていった。わたしは内心ホッとすると共に、これからの自分の身の振り方に思いをはせ、ため息をついた。

「加古川さん、何をため息なんか付いているすんか？」

明るい顔で、後輩の小松島が訊いた。彼は脂ののりきったスラッガーで四番を負かされている有力選手だった。わたしの悩みなどまだ十年は感じなくてもいいだろう。

「俺にだって悩みはあるんだよ」

そういうと、彼は笑って打撃練習場に行ってしまった。

今日はわがレパルスと宿敵ギガンツとの第十五戦だった。彼も気合いが入っているし、他の選手にも闘志が感じられた。のんびりしているのはわたしだけだったし、それではいけないと内心思いつつも、やはり気合いは入らない。生来の性質なのだ。

午後六時、審判のプレイボールのかけ声と共に試合が始まった。

双方ともエースが先発登板し、中々点の入らない投手戦の様相を呈していた。もちろん、こんな試合ではベンチを温めているわたしにお呼びがかかろうはずはなかった。わたし

はベンチ裏にある練習場で素振りをして時間をつぶしていた。

同じく控え投手の一人である前島もキャッチャー相手に投げ込みを行っていた。ただわたしと異なるのは彼がいつでも投げられるようにと、臨戦態勢にあるのに対し、わたしの方は単なる時間つぶしに過ぎなかった点だ。

彼は思いきり振りかぶって腕をびゅんと振り下ろし剛球を投げ込んだ。バシイっというキャッチャーミットの音が鳴り響いた。何とも嫌みな音だった。わたしはただひたすら、ぶるんぶるんと素振りを続けていた。

転機は六回裏に訪れた。

前回の守りで右手の爪を割ってしまった小松島に代わってわたしに打席が回ってきたのだ。監督は期待しない目でわたしを見、そして行けとあごで合図した。場内アナウンスはわたしの打席を告げた。

わたしは滑り止めのスプレーをグリップに振りかけ、さっきまでやっていた素振りをぶるんぶるんと二度ほどし、打席に向かった。一応やる気を見せておかねばならない。

試合内容は全く把握していなかったが、四番打者の代打ということは、塁に走者が出ているということを意味していた。案の定、二塁に一人出ていた。長打が出れば、確実に本塁に戻ってこられる。わたしは軽くバットを振り、打席に入った。

「プレイ」

審判のかけ声でピッチャーがポジションに着いた。わたしは身構えた。

ピッチャーはギガンツ二人目の浅川に代わっていた。右の本格派で一四五キロのストレートが武器だ。ランナーを抱えているので、セットポジションから小さなフォームで外郭ギリギリを投げてきた。

「ストライク！」

早速、ストライクを取られてしまった。監督の方を見ると、とにかく振り抜けという指示が出た。ここは長打しかないのだ。いや、もしかしたら外野フライでも許されるかも知れない。ライト線にフライを上げたら二塁走者はタッチアップで三塁まで進めるだろう。

二球目は低めギリギリにストライクを取られてしまった。

監督の渋い顔がここからでもはっきりと見て取れた。わたしは監督に失望されることを何よりも恐れていた。こうして、プレイできるのも監督になにがしか期待されているからで、それがなくなればもうチームから駆逐されてしまう。

三球目は辛うじてバットを引っかけ、ボールをファールグランドに転がした。時間稼ぎである。ピッチャーは、死に損ないのロバを見るような目でわたしを見た。次でとどめを刺してやる。そう彼の目は語っていた。

そして、四球目。わたしは狙い通りの低めストレートを真っ正面に叩き返した。珠はピッチャーの足元を抜けた！

わたしは全力で一塁目指して走った。

左目でボールの行方を追っていった。ボールは勢いよくピッチャーの足元を抜けた後、セカンドの真っ正面に転がっていき、すっぽりと彼のグローブの中に収まり、そのままセカンドベースを踏まれてまず二塁ランナーがアウトになった。そして、間髪入れずに一塁に送球されわたしもアウトになった。ダブルプレーである。チャンスどころか面目も丸つぶれだった。

「ちっ」

ベンチに戻ったわたしに監督はそれだけを口にした。せめて厳しい叱責があればまだ救いになったかも知れない。三十五歳のチャンスにも弱い男にはもはやそれすら望めなかったのだ。

次の回、わたしの代わりに若い選手が四番に出た。

彼は六回裏のわたしの醜態を見ていただけに、緊張して打席にたち見事三塁打を放った。

そして、続く打者も連続ヒットを放ち見事試合はレパルスの勝ちとなった。こうなると、わたしの責任を問う声も当然小さくなった。

しかし、その試合以降、わたしの出番はなくなった。

もはや、監督にはわたしを使おうという意志はないらしく、ベンチ入りの指示は出すものの代打も代走もなにもなかった。ただ練習の時に外野手としてグランド入りし、試合が始まるとまたベンチに戻るという暮らしが続いた。

わたしは、試合に一生懸命になる他の選手たちを見ながら、何となく、もう今季でレパルスともお別れかなと、そこはかとない寂しさを感じていた。それはそうであろう。先発出場するほどの打率もなく、かといって、ピンチの時にヒットを打てる能力もないのである。監督の頭がまともなら放出するに決まっていた。問題はどこの球団が引き取るかだった。もしかしたらこれが潮時になるかも知れない。わたしはプロ野球選手としての限界を感じていた。そろそろ引退を考えなければならない年齢に達していたのだ。

今季が終わり本格的な契約更新シーズンが到来した。レパルスはまやもやリーグ優勝を果たし、主力選手はＭＶＰにも選ばれ、来季の年俸は大幅にアップしていった。

わたしはしょぼくれた顔で契約更新に望んだ。レパルスの経営陣相手にわたしは何を武器に交渉すればいいのだろう？ 守備、打撃、リーダーシップ、エンターテインメント性、あらゆる要素で他人に勝てる要素は一つもなかった。

「あなたには、来期もうちに残ってもらいますよ」

オーナーは開口一番そう言った。

「はい？」

わたしは思わず声を上げた。

オーナーはそれを不満の表れと取ったのかも知れない。慌てて言葉を取り繕った。

「いや、君がいると勝率が上がるんだ。プレイはしなくても他球団に獲られては困るからね」

――戦力ではなく戦略的獲得だった。了

一番になる才能

一番になる才能

わたしは田舎に古くからある家の長男として生まれた。一人っ子でもあったので過渡な期待を寄せられ、幼い頃から英才教育と称して色々な習い事を押しつけられた。英会話に算数塾、ピアノにバイオリン、水泳に器械体操と、それこそ毎日が忙しかった。そして、どの習い事にもそれなりの才能を見せ、同じ年の少年たちの中ではいつも一歩抜きんでていた。

父親と母親は「栴檀は双葉より芳し」と喜んでいたが、わたしは内心では不満であった。

わたしも子供心に、他の男の子たちと同じように遊びたかったし、こんな習い事に意味などあるのか疑問に思っていた。が、両親の叱咤激励もあり、学校が終わるやいなや習い事に通わされていた。

父親は「こんな小さな集団で一番になれないようでは、将来、世の中に出ていったときに皆を率いていくことは出来ないぞ」といつも口癖のようにいい、わたしがどんな習い事でも、もちろん学校の成績でもトップであることを要求し続けた。

かばってくれるはずの母親は息子の成績をアクセサリーか何かと勘違いしているような女で、競争に疲れたわたしの尻を叩き続けることに熱心さを発揮した。

そんな彼らの努力が無駄だったわけでは断じてない。わたしの成績は小学校では常にトップであり、器械体操の大会では県でもベストエイトに入るほどであり、水泳も、英会話で行われる弁論大会も常に上位に入っていた。

そんなわたしはいつしかクラスメイトたちにいつも一目置かれている存在となっていた。

わたしの周りにはいつも取り巻きがいた。優秀な生徒にはそれなりの友人が集まってくる。だが、そうした人間関係にはわたしは信用を寄せていなかった。もし自分の成績が地に落ちる事態があったら彼らは即座に離れていくだろう。そんな彼らの姿が容易に想像できたから彼らとの付き合いはほどほどにしていた。

それに対して、信用のおける友人はクラスの余り物である吉田君だけだった。彼は貧しい家の生まれでいつも汚い服を着ていて皆から嫌われていたが、不思議とわたしとだけは仲がよかった。学校帰りの駄菓子屋でわたしは彼にジュースとスナックをおごってやり、彼はわたしに子供の遊びを教えてくれるという相互補完性の関係を保っていた。もちろん、彼との交際は両親には絶対に内緒である。もし知れたら、あの母親が彼の家に苦情を言いに行くことは絶対に確実だった。

「なあ、涼ちゃん。ジュース飲みに行かへんか？」

いつも彼は学校帰りにわたしを誘いに来た。彼はわたしの成績など気にしないところがあり、それがわたしの唯一の息抜きになったのがよかったのかも知れない。もちろんジュースはわたしのおごりだったが、トップの成績を取ることで褒美として潤沢な小遣いを与えられているわたしに取り大した問題ではなかった。

いつもの駄菓子屋で瓶のジュースを二本買い、一本を彼に渡した。

彼はぐびびとうまそうに飲んだ。

「なあ、涼ちゃん。何でそんなに成績がええんや？」

と、うらやましそうに聞いた。

「別に。大したことあれへん……」

わたしは言葉を濁した。毎日、――現にこれからも家に帰ったら家庭教師の先生が待っているはずだった。一日六時間みっちり勉強をさせられるのだ。しかも、家庭教師は地元の国立大学法学部のトップクラスの成績の学生を父親が面接までして選定してあった。父親はわたしを将来、官僚か弁護士にするつもりのようだった。直接にはいわなかったが、家庭教師と父親との話をちらりと聞いたとき、そのような算段があることを匂わせる会話をしていたのを覚えている。

「吉田は将来何になるんや？ 考えとるんか？」

わたしは素朴な疑問を彼にぶつけた。全ての家庭の子供が親に将来を決められているのだろうかという、正に素朴な疑問だった。

「そうやなあ。夢やったらあるで」

彼は目標とは言えず、夢と表現した。

「何や？」

「電車の運転士や」

そういう彼の目は輝いていた。希望に燃えるそんな彼の姿勢に、わたしは心の中で嫉妬した。自分より劣るくせにちゃんと将来のビジョンを描いていることが許せなかった。

「運転士になるために何か勉強しているんか？」

「まだや。けど、駅名全部言えるで。新開地、湊川、長田、丸山、鵯越……」

彼はお経のように唱え始めた。

「あほか、駅名覚えたくらいでなれるもんか」

「なれへんか？」

「ああ、なれへん、なれへん」

わたしが頑なに否定すると彼は少し肩を落とした。

やがて、中学に入る頃になると吉田とも疎遠になった。わたしの周りには別の小学校から来た新しい友人が出来た。その中でもわたしの成績やスポーツの才能は抜きんでていたから、たちまち、頭角を現した。

優秀な家庭教師はわたしに最適な知識を植え付け、わたしはそれをただ知識として頭に

詰め込むことに専念し、その結果、学期末の試験では常に学年一位を取っていた。それ
ばかりではない、市内で行われる模擬試験でも常にトップクラスであったのだ。

「涼介、やるやないか。どんな勉強しているねん？」

クラスメイトたちは口々に訊いた。

「別に大したことやってる訳やあらへん。先生のいうことをそのまま覚えているだけや」

わたしは周りの間抜け面したクラスの男子生徒たちを見ながらそううそぶいた。

事実はそうではない。

その頃のわたしは、水泳はいうまでもなく、器械体操、陸上競技、柔道とあらゆるスポー
ツに手を出していて、その特訓でくたくたに疲れ果てており、それでもなお、両親はそ
の競技でトップであることをわたしに求め続けた。そして、わたしはそれに答えるため
にあらゆる努力を惜しまなかった。

そうしてくたくたになった身体にむち打って夜は七時から十二時過ぎまで勉強に励むの
である。段々と意識朦朧となり、やっている意味すらわからなくなっていった。

「涼介君は優秀な生徒だ」

家庭教師の大学生はそう言ってわたしをおだて、そして、知識を詰め込んだ。何となれ
ば、彼もわたしの両親からノルマを課せられており、わたしがトップの成績を維持する
ことを厳命されていたからである。かつまた、彼も家庭教師としてのプライドがあるみ
たいだった。それに答えるべく、わたしは時計の針が夜の十二時を過ぎても、嫌な態度
は見せられなかった。まるで、トップを維持するためのロボットのようだった。

そんな生活に異変が起こったのは中学三年生になった一学期末に行われた模擬試験だっ
た。高校入試に直結する重要な試験で、わたしは校内トップはもとより、市内で一位を
取るつもりだった。もちろんそのつもりはなくても両親からのプレッシャーはあった。

試験一週間後に張り出された順位表を見て、わたしは目を疑った。

「おいおい、なんや、今回のテストは？」

皆がざわついた。

大番狂わせの順位だった。今まで大して勉強していなかったはずの吉田がトップになっていたのだ。わたしは二位だった。信じられない想いだった。

「涼ちゃん」

吉田は向こうから声を掛けてきた。

「お、おめでとう。よかったやないか。頑張っとったんやなあ」

「俺、やりたいこと見つかってん。それで根性入れて勉強したんや」

「そうか」

わたしは家に帰り家庭教師の先生に報告した。彼も驚きを隠せない様子だった。そして今後の戦略を練った。吉田がどんな勉強方法を取ったかはわからない。だが、真っ黒だった顔が青白く感じられるほど変わっていたのだ。相当勉強したに違いなかった。かくなる上は睡眠時間を彼より削って勉強時間を増やすしかなかった。深夜と早朝を勉強時間に充てて、睡眠時間は五時間になった。

それでもなお、吉田が睡眠時間を四時間に切り詰めたと聞き、さらにこちらは三時間に減らして頑張った。

夏休み明けの実力試験の当日、わたしは柔道の朝練を終えた足で学校に行き試験を受けた。もう、疲労で意識朦朧となりふらふらになっていた。鉛筆を持とうとして気分が悪くなりそのまま倒れてしまった。

気がついたとき、わたしは保健室のベッドの上に横たえられていた。養護教諭はわたしが一日三時間も寝ていない事実を知ると顔色を変えた。

「山田君。どうしてそんな無茶をしたの！」

「先生にはわかりませんよ。とにかく時間が足りないんです。早く行かなきゃ」

起き上がろうとするわたしを彼女は押しとどめた。

「トップじゃないと駄目って？ 冗談じゃないわ。自分の身体とどっちが大事？ 二番じゃ駄目なの？」

父親のいうトップとは、成績のトップではなく人々の上に立つ人間という意味だ。

「二番？ 二番手には意味がないんですよ」

わたしは、軽蔑の眼差しで彼女を見下した。了

クールビズ

クールビズ

今年の夏は猛暑で、毎日うだるような日が続いていた。

巷では節電、節電とお経のように唱えていたが、わたしの職場である青野田町役場では高価な自家発電設備と太陽光発電設備のおかげで潤沢な電力を利用することが出来、普段からクーラーをガンガン掛けて、室温を十八度に設定してキンキンに冷やしていた。

本来なら、県や国の指導がありそうなものだが、熱波に見舞われた住民の避難先にもなっていたので、そんなに問題にはならなかったのかも知れない。

「いやあ、ここに来るとほっとしますよ」

「おかげさまで熱中症にならなくてすむし」

などという、そんな住民の声に後押しされるように、室内はいつも常冬の国のようにいつも冷え冷えしていた。エネルギー源はギラギラと照りつける太陽光であり、また、二酸化炭素の排出が少ないとされる燃料電池に送り込まれる都市ガスであった。

「いやあ、どんどんガスを使っていただいてありがとうございます」

そんなガス会社の声も、我が町の政策の後押しとなった。

役場にいつも折りたたみ式の将棋盤を持ってくるおじいさんもいた。町内に住む七十二歳の吉田さんという人だった。役場に書類を取りに来て、このまま帰るには暑いな、少し涼んで帰ろうかなという人を捕まえては夕方まで盤とにらめっこして、一日を楽しんでいた。別にお金を賭けているわけではないし、お年寄りのささやかな娯楽に、我々の役場が貢献している。そう考えれば罪の意識も薄らぐというものだった。

そんな優雅な生活に終止符を打ったのは、環境保護派の町長の誕生だった。

前の保守派の町長がセクハラ・スキャンダルのために任期を二年残して辞めてしまい、急遽行われた町長選挙では大した争点もないままセクハラとは縁のなさそうな真面目だけが取り柄の中西妖蔵氏が当選した。

彼は早速、改革に乗り出し、町役場の電力消費量八千キロワット、これに目をつけた。

当時、わたしは何の役職にも就いていない担当課長だったが、なにゆえか、町長に呼ばれた。

「青田さんでしたね。これからはエネルギー改革担当課長をやってもらいたいと思っているのですよ」

「エネルギー改革担当課長？ 何です、それは？」

わたしは間抜けな質問を返した。彼が標榜している環境保護が念頭にあれば、すぐに、この町が消費している都市ガスの消費を押さえようという目論見にたどり着くのは当然の帰結であった。

「現在の青野田町役場のエネルギー消費量は町の規模からして大きすぎます」

「はい……そうなんですか？」

町には地場産業である繊維・染め物業が盛んであり、また、前町長が誘致してきた液晶テレビの部品工場がたくさんあり、電気・水・ガスの消費量は住民だけしかいないベッドタウンなどと比較すると大きなものになっていた。「でも、それは地域の特質からしてやむを得ない事情と思いますが」

「そこでですよ！」

町長は一段と声が高くなった。「町役場が率先して省エネルギーに勤めるのです。まずは節電から、町民の見本となるべく実行に移しましょう。冷房の設定温度を下げ……隣の赤野田町は何度ですか？」

わたしは町長の問いに答えるべく手帳を繰った。近隣の市町村のデータは大体まとめてあった。

「二十八℃です」

「それでは二十九℃にしましょう」

理論的だと思っていた町長が意外にも、意地の張り合いのような数値を設定した。いかなる無理難題でも町長は選挙で選ばれた人、すなわち、民意の反映なのだ。一役人には逆らうことは出来なかった。

これまで、町役場では制服である作業服の下に白のカッターシャツとネクタイを着用していた。暑くても（実際暑くなどなかったが）町民に対するエチケットとして、長年の慣例だったのだ。前町長も保守派の代表みたいな人だったからこれを長年踏襲していた。

「服装はいかが致しましょう？」

わたしは恐る恐る尋ねた。今のままだと暑くて仕事にならないと思ったからだ。もう早速、エネルギー改革担当課長になりきっていた。

「さくっと改革しようじゃありませんか。青田課長」

「さくっと？」

「アロハシャツなどの軽装でよいことにしましょう。今日からでも実行に移しましょう。通達を出してください」

「わかりました」

わたしは、早速出してもらった、エネルギー改革担当課長の辞令を元に、庁舎内の冷房温度の設定に関する通達と、服装に関する緩和をプリントしてあちこちに張り出した。

庁舎内の反応は非難囂々の人とこの程度の被害は甘受してやるという態度の人と半々だった。外回りの多い人は日中暑い中、外出先から帰ってきて庁舎内が蒸し暑いと頭に来ただろうし、その反面、一日中、職場にいる人はアロハシャツが似合うかどうかは別にしてそれ以上の実害はなかったと言えた。

そして、発電に使用していたエネルギーのうち、燃料電池で消費していた都市ガスの分が目に見えて減っていき、とうとうガスの供給が止まってしまった。太陽光だけは止められないからである。

「青田課長さん。うちだって困りますよ。冬場はどうするんです？」

ガス会社からは苦情が来た。何せ、町内で一番の消費先が消費をやめたのである。しかも夏場だけ。

町民からも苦情が来た。

「家が暑いから役場に来て涼んでいたのに、これでは避難先がないじゃないか」

「熱中症になったらどうするんだ！」

そして、将棋盤の吉田さんも寂しそうな顔で文句を言いに来た。

「汗が目にしみて将棋が指せませんよ。課長さん、何とかしてください」

わたしは、そんな苦情が来る度に一々、なだめに回った。これでは、改革担当課長ではなく苦情担当課長もいいところだった。それに、一番悪いのは町長ではなく、その町長を選んだ町民にも責任があるのだ。そんな中、町長は省エネの成果が上がったと、近隣の市町村長会議で自慢して回っていた。

八月に入り、隣の赤野田町の町長が負けじと改革に乗り出した。

役場の設定温度を三十℃に上げ、職員の服装をＴシャツ・短パン解禁とし、これ以上ないほどの軽装にしたのだ。もはや、涼みに行くどころではない。わたしは、そんな心配より、その改革がうちの町長を刺激しないかを心配した。

「青田課長！ 何と言うことです。先を越されたじゃないですか？」

そんな問題ではないと思った。

「うちは、太陽光発電で十分まかなっています。これ以上の冷房温度の設定変更は無意味です」

「無意味などと言わないでください。役場は町の象徴なのです」

「そんな！」

「冷房温度を三十五℃にしましょう。服装は……当面今のままで様子を見ましょう」

「三十五℃？」

わたしは耳を疑った。三十五℃といえば猛暑日の外気温度である。そんな中で業務をこなすのは問題があるし、それに、来庁する町民の方々にも迷惑がかかると思ったのだ。しかし、流石に外気温度が三十五℃になることは早々あることではない。わたしは高を括っていた。

そんなある日、とうとう、将棋盤の吉田さんが、将棋を打っている最中倒れるという事態が発生した。わたしはそれを聞いたとき、まだ、そんなことをしていたのかと感じた。

そんなことをよそに町長は自ら庁舎内の気温のチェックを始めた。

「君、ここの温度は三十℃じゃないか？」

一々けちをつけて回った。

やけくそになった職員は暖房を入れてまで設定温度通りにした。流石に、町長も少し参ってきたのだろうか。段々と、赤い顔になることが多くなり、しきりに汗をぬぐう仕草が見られ始めた。町長室では上着を脱いで、ランニングシャツ一丁になることが多くなり、独り言も多くなった。

「もうそろそろやめにしませんか？」

わたしは赤野田町との休戦協定を申し出るつもりで提案したが、町長は勘違いした。

「よし、アロハシャツはやめにしよう。バミューダなんかはどうだろう？ そうだ海パン一丁でいいじゃないか。君ぃ。そうだ明日から水着にしよう」

この通達をやむなく回した後、実際に水着で登庁したのは町長だけだった。彼は次期選挙で落選した。了

アルバイト生活

アルバイト生活

わたしは、仕事にあぶれ、駅前のロータリーでしょぼくれた姿で座り込んでいた。

夕方になると家路を急ぐサラリーマンや学生さんの姿が疎ましく、また、彼らもわたしを疎ましそうな目で見つめている。少なくともわたしにはそう感じられた。

「君、何をしているんだい？」

一人の男が興味があるといわんばかりにわたしに問いかけた。まさか、薄汚れたシャツに、ジーンズ姿のわたしに声を掛けて来る人などいないと思いこんでいただけに意外な展開だと思った。よほど暇な人か、あるいは浮浪者を取りしまる係の人でもいるのかなと勘ぐった。

「別に」

わたしは率直に答えた。こうして、しょぼくれた姿になるまでには、色々と経緯があると言えばあるのだが、一々、男に説明するまでもないし、第一、そんなことに興味はないだろうと思ったのだ。

「仕事は？」

なおも問いかけてきた。

「今はしていないです」

「そう……」

男は満足そうにうなずいた。この時点でわたしは彼が何らかの慈善団体の人ではないか

と推定した。駅からの人通りは混雑を増していき、通りすがりの人々は、わたし達のやりとりを好奇に満ちた目でちらりと見、かといって関与する訳でもなく去っていった。わたしはやるせない気持ちにさせられた。

「仕事があるんだが……やってみないか？　もし、嫌でなければだけど」

「ええ？」

こんな所で仕事のオファーがあるとは思いもよらなかった。断る理由はもはやなかった。

「どんな仕事でしょう？」

「興味があるならついて来なさい」

男は駅を後に、歩き始めた。町を抜け、十五、六分ほど歩いたところに高い塀に囲まれ、石造りの鳥居がある神社が見えた。男はそこから中に入っていった。夕暮れの神社は何かもの悲しく、蝉時雨の音だけが響いていた。鬱蒼と茂る森。そして玉砂利を敷き詰めた参道の遙か向こうに、もう一つ鳥居が見え、さらに奥まった箇所に社殿があるように見えた。その脇にあるのは社務所だろう。

「あの？　あなたはここの人、いや、神主さんなのですか？」

わたしは恐る恐る尋ねた。

「いいや」

男は穏和な笑顔を見せた。「ここの社務所から境内の管理を、例えば植栽の剪定などを任されている会社の責任者なのだよ」

わたしは、ここでやっと男が自分を誘った理由を理解した。きっと、境内の掃除やなんかを、仕事にあぶれていそうなわたしに目をつけ、安い賃金でやらせようと考えたに違いないと思った。

男は森の中を進んでいった。参道はきれいに整備されていて、わたしたちの足音だけが響いていた。不意に男が立ち止まった。そして杉の木を指さした。「ほら、あれなのだ

よ」と、まるで蝉の抜け殻を見つけた子供のように声を上げた。わたしは薄暮の森の中の杉の木肌に目をこらした。茶色のささくれ立った肌に、何か色の変わった部分があった。丁度目の高さくらいだった。

「ほら、わからないかい？」

「はあ」

「わら人形だよ。こんなもの、一般の参拝客の目にとまると困る」

「なるほど」

「君にお願いしたいのは、これを朝六時までにきれいにすることなのだよ」

わたしは少し躊躇した。たかが、五寸釘で杉の木に打ち込まれたわら人形であり、呪いなど迷信だと決めつけてはいたが、何となく不気味であった。好んでそれらを掃除しようなど酔狂もいいところだと思った。

「日給一万円でどうだい？ 午前二時から六時までの勤務だ。いい条件だろう？」

男は魅力的なオファーを出した。深夜勤務で、不気味さの残る仕事ではあったものの、一日あたり一万円ももらえるのなら、衣食住をまかなうことが出来る。わたしの心はぐっと傾いた。

「少し聞いてもいいですか？」

「あ、ああ、なんだい？」

「この仕事は今まで誰かしたことがあるのですか？」

「そりゃあ、あんなもの、放置は出来ないからねえ。由緒ある神社なんだ。これまでにも担当者がいたよ。ああ、そうだ。道具一式あるから」

男はそう言って、事務所にわたしを連れて行き、釘抜き、ちりとり、ほうきなどを出してきた。

「あの、さっきの質問なんですが……」

「ああ、前任の担当者のことか」

能弁な男はここに来て急に言葉を濁した。聞くところによると、今までの担当者はみな原因不明の頭痛、腹痛を訴え辞めていったらしい。それでわたしは少しだけ怖じ気づいた。

「嫌なら別に断っていいんだよ。君じゃなくたって、やろうという人はいくらでもいるんだ。探すのが難しいだけでの話でね」

男は自信満々にそう言ってのけた。

「わかりました。やらせていただきます」

わたしは、一日一万円という報酬に目がくらんだ形でその仕事を引き受けた。

男は改めてこのアルバイトの説明をした。

まず、個人事業主の形で男の会社から下請けの形式を取ること。怪我などの保険は心配しなくていいこと。しかし、である。祟りに関しては労災など一切認められないと釘を刺された。わたしはそれに納得し、個人名で署名捺印し、一夏のアルバイトが始まった。

初日、午前二時にわたしは事務所に待機した。事務所は社殿近くの通路に面した所にあり、そこから、表通りまでの幅三百メートル、長さ八百メートルばかりのだだっ広い森がわたしの担当区域であった。朝まで巡回してわら人形が杉の木に打ち付けてあるのを見つけたら、誰にも見つからないよう、釘抜きで引っこ抜いて回収し、周りに散乱しているろうそくや幣紙《へいし》のちぎれたものをちりとりで掃き清める。ただそれだけだった。非公式の作業であるから、お祓いや厄払いなど一切ない。わたしはもちろん、そんなオカルトめいたことなど信じていなかったし、前の会社を解雇されたときから、神も仏も信じちゃいなかった。

懐中電灯で足元を照らしながら転ばないように落ち葉を踏みしめて歩いていった。時折上空を照らし、目の高さに異物がないか確かめる。

——丑三つ時って何時だっけ？

わたしはどうでもいい疑問を口にした。誰が聞いているともない言葉だった。それに、何の意味もない。現在進行形で森のどこかで誰かが誰かを呪って、わら人形に五寸釘を打ち込んでいるかも知れかなった。その呪いが自分に振り向けられるのだけは勘弁願いたかった。

初めてわら人形の実物を目にしたのは、アルバイト二日目の午前四時だった。

ふと、見上げた杉の古木に見事に人形の腹と頭に釘が打ち込まれていた。それを見たとき、心底ふるえが来て、身体が凍り付いたような気がした。工具袋を持った右手が動かなかった。

それでも三十分ばかりにらめっこしただろうか。わたしは、工具袋の中から釘抜きを取りだし、目の高さにあるわら人形に左手をかけ、右手で釘抜きを握った。釘に工具先端が触れたとき、後頭部を殴られるような感触を受けた。それは呪いそのものだった。

——誰がこんなことしたんだよう！

わたしは泣き出しそうになった。いや、実際に涙を流し、鼻からは鼻汁が垂れていた。それを軍手の甲で拭き拭き作業し、残ったゴミをほうきで掃き清めた。

呪われた作業ではあるがこれで日当一万円だ。もはや辞めるわけにはいかなかったのだ。

そんな仕事も二、三日すると慣れっこになった。わら人形を見つけて刺さっている五寸釘を（杉の木を傷めないように）丁寧に引き抜き回収し、周りに散乱している呪いグッズを掃き清める。多少、呪いの影響なのか、体調に影響が出始めたかなと感じてはいたものの、定収入があるという恵まれた環境が精神にもいい影響を与えていた。

ある日、午前二時に巡回に出てすぐのことだった。

呪いの儀式の最中の女性に出くわしてしまったのだ。マニュアルでは、当事者には声を掛けずに、なるべくかかわることなく、儀式が終わり次第速やかに、わら人形を撤去するという取り決めになっていた。

わたしは息を潜めて女性の行動を監視した。

なにやらぶつぶつ言いながら、渾身の力を込めて木槌を振り下ろし、五寸釘をわら人形に打ち込んでいる。その形相ははちまきに刺しているろうそくの明かりでかろうじて読み取れた。が、見るのではなかった。女性の表情は人間のそれではなく、物の怪が憑いているかと思われるほど禍々しく恐ろしかった。

わたしは、右手が震え、持っていた釘抜きを落としてしまった。――からん。

はっと、女性と目があった。

「見たな！」

その恐ろしい声色に、わたしは腰が抜けながら走ってその場から逃げた。あたふたと。それ以来、そのアルバイトは辞めてしまった。了

タヌキのお札

タヌキのお札

わたしは、職にあぶれ、川沿いの自転車道の車止めに腰掛けて、一日中川の流れに見入っていた。もう時間に追われることもないし、フォローしてくれる人もいなくなった。あるのは、会社員時代に作った借金と、今月分のアパートの家賃や食費をどうするかという切実な問題だけだった。

「あーあ」

どうして、仕事を失ってしまったのだろう。不景気のせいだけではないはずだ。自分の要領の悪さという不手際も責められてしかるべきだった。世の中には、百万人の失業者が出ても、ちゃんと職にありつく要領のいい奴もいるかと思えば、社長の気まぐれで（だけではないかも知れないが）失業する人間もいる。わたしは、間違いなく世界で一番要領の悪い人間だった。

ふと、河原を見ていると、何か得体の知れないものが浮き沈みしていた。

「何だろう？」

よくよく見てみると人間のようだった。白い肌に草とゴミがまとわりついて、浮いたり沈んだりしながら流れに沿って移動している。――いけない！ わたしは、上着を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、下着だけの格好になるとじゃぶじゃぶと川の流れの中に入っていった。
「おい、大丈夫か？ しっかりしろ！」

わたしは、彼（彼女）の水草まみれの胴体に腕を回し、反対の手で水をかき分けながら堤の上に戻ってきた。

「あ！」

よくよく見てみると、それは人間ではなく信楽焼のタヌキの置物だった。わたしの心の中に怒りの炎が湧き上がった。高さは四十センチほどのタヌキで、泥と水草が絡み、薄汚れていた。わたしはそれを持ち上げ、石畳にたたきつけようとした。と、そのときであった。

「た、助けて……」

「え？」

タヌキが口をきいたのである。あるいは化かされていたのかも知れない。だが、わたしの怒りはどこかへ吹き飛び、代わりに恐れに似た気持ちが脳裏を占めた。

「本当にタヌキなのか？」

「はい、助けていただいて感謝しています。お礼にといっては何ですが、出来る範囲のことでお役に立てるかと」

わたしは、取り敢えず今月必要な二十五万円何とかならないか相談してみることにした。みみっちい相談だと思われるかも知れないが、貧すれば鈍するという奴である。そのときのわたしにはそれ以上のタヌキの有効利用の方法が思い浮かばなかったのだ。

「人を化かすのがわたしの本分です。何とかしてみましょう」

タヌキは自信たっぷりにそう言ってのけた。「まずは木の葉を二十五枚集めてきてください。大きさは何とでもなります」

「よ、よし」

嫌な予感がしながらも、わたしは、河川敷に生えている灌木から木の葉をちぎってタヌキのもとへと持っていった。彼は手で十字を切り、えいっと気合いを込めると、目の前に散り散りになっていた木の葉が、銀行から下ろしたばかりの手の切れそうな新札二十五枚に変わっているではないか！ わたしは喜び、そして、驚いた。

この技がある限りわたしはこの世で無敵の存在になれるではないか。わたしはタヌキの

お腹を愛おしそうな目で見つめた。

二十五万円さえあれば、当面恐れるものは何もない。わたしは服を着ると、今の今まで逃げ回っていた借金取りと、アパートの大家のところへ行く気になった。

「旦那様」

タヌキはわたしのことをそう呼んだ。「木の葉のお札が通用するのは人間だけです。ＡＴＭや自動販売機には使えないので注意してください」

「お、おう、……大したことないんだな」

そう強がっていたが、重要なことだった。お金を払うには面と向かって支払う必要があるということだ。

そしてまずは二十万円の借金があるニコニコローンに出向いて行った。

アパートの家賃や生活費の補填に当てるために出来た借金だった。低所得ではもはや返せない借金だったが、タヌキ札のおかげで一括返済のめどが立った。

「いやあ、わざわざお持ちにならなくても、振り込みでもよかったのに」

ニコニコローンの窓口の女性はそう言って愛想笑いを浮かべた。そうはいかないのだ。目の前で勘定して早く金庫に入れてくれ。わたしはひたすらそれを願った。

ホッとする思いでニコニコローンを後にし、今度はアパートの大家さんに行った。こちらも現金でおそるおそる支払った。

大家のおじいさんは、胡散臭そうな目でわたしとお札とを見比べた。わたしの風体と新札という取り合わせが違和感ありありだったのかも知れない。指先をぺろりとなめ、四万五千円丁度そろっているのを確かめると、通い帳にはんこをぽんとついた。わたしは心底ホッとした。

そうして気に掛かる支払いを済ませてしまうと、急に気が大きくなり欲が出て、このタヌキを使って金儲けが出来ないかと考えた。

「タヌキさんよ。何かこう儲かる仕組みはないのかね？」

タヌキはちょこんと小首をかしげた。

「わたしの前の旦那様は不動産や高級外車を現金でお買い求めになっていましたね。それを半額くらいで売ってしまうんです。もったいない気がしますが利益率百パーセントの取引ですから誰も損はしません」

「おいおい、タヌキ札を受け取ったら困るじゃないのか？」

「古くなったお札は最終的には、日本銀行へ行き着いて、裁断処分されるんです。そのときになって木の葉が混入しているのに気付いても誰も困りません」

「そうか、そんなものか」

彼のアドバイスに従い、わたしも不動産や高級外車、宝飾品に手を出すことにした。とりあえず、今住んでいるアパートを引き払い、大金持ちにふさわしい住居を買い求めるために芦屋で一戸建を探した。

怪しまれるといけないので、日本語が不自由な振りをすると向こうが勝手に金満家の外国人が不動産を買い漁っているものと勘違いしてくれた。

一件買うと後は楽だった。

芦屋に住んでいる金満家の外国人。そんな肩書きで外車を乗り回し、それに飽きると、転売して儲けを出すことに専念した。

その間、タヌキは庭のクヌギの葉からせっせとタヌキ札を増刷してくれた。何せわたしは、彼に取り生命の恩人である。わたしは彼をこき使うことに何ら良心の呵責は起こらなかった。

いや、むしろ、住宅や高級外車を購入した売り主に同情を禁じ得なかったと言っていいだろう。もし、銀行のＡＴＭなんかに入れようものなら、木の葉であることがばれてしまう。偽札以上に始末に負えない代物だった。偽札なら警察が何とかしてくれるだろうが、木の葉では……ひらひらひら。舞い散る木の葉の前で茫然自失となる売り主の顔が目に浮かんだ。

だが、実際、芦屋の豪邸の取引価格ともなるとＡＴＭを使う人はいないらしく、ほとんどは銀行員が取りに来たり、もしくは持っていったりして、目の前で扇子のように広げて手で勘定してくれる。人間の行員には、タヌキ札は有効であった。

わたしはすっかり芦屋での裕福な生活に慣れ、元のすってんてんな時代の自分の姿を忘れ去っていた。掃除や炊事は家政婦さんがやってくれるし、クルマの運転は運転手さんがやってくれる。電球が切れたり、ヒューズが飛んだりしても自分で一々取り替える必要などなかった。唯一管理しなければならないのが、庭の信楽焼のタヌキの世話だった。

苔が付かないよう、朝起きるときれいに拭いてやり、時折、木の葉を集めてきて誰も見ていないところで、それを「現金化」する。実際、見られたらどんな言い訳が必要だっただろう。わたしにはもはや想像も付かなかった。

ある日、わたしの朝食を作ってくれている家政婦さんが、「近頃食料品もそうなんですけれど物価が何もかも上がりましたね」と言った。わたしは、タヌキ以外のことでは世間に無頓着だったので気がつかなかったが、新聞を改めて読むと、確かに消費者物価指数は上昇していた。

原因は明らかだった。

タヌキ札が大量に出回ったせいで、お札そのものの価値ががた落ちし、反比例するように物価が上昇していったのだ。これはこれでまずいことだった。

「日銀が金融緩和する十年も前からタヌキの金融緩和が始まっていたのですよ」

タヌキは得意そうに言った。わたしは再びタヌキを川に捨てに行った。了

まむし酒

まむし酒

「お父ちゃん！ また、こんなもん持ち込んで！」

トメ子は嘆息しながら夫のミツオに文句を言った。彼の趣味であるまむし酒を造るために、畑で捕まえたまむしを麻袋に入れて持って帰ってきて、母屋の台所の床に置いたのだ。トメ子の背筋に冷たいものが走った。

トメ子は農家に嫁いで四十年になる。三人の男の子にも恵まれ、今ではそれぞれが独立し、家の農業は長男が半分跡を継ぐ形で手伝ってくれている。嫁いだ当初は、口うるさい姑に悩まされたこともあったが、心優しいミツオがずっとかばってくれたものだった。その姑も十年前に身罷り、トメ子自身、心穏やかに田舎生活を満喫していた。唯一、不満があるとすれば、初夏から秋にかけて行われるミツオのまむし酒造りだった。

現に、台所の棚の上には、何年も前の焼酎に漬け込まれた哀れなまむしの姿がずらりと並んでいる。トメ子はそれを見るだけで虫唾が走ると言おうか、とにかく、少女時代まで町育ちで、まむしの姿に嫌悪感を抱くのであった。古いものはミツオが若い頃のものから、最近ではこの間つけ込んだ新しいものまで、数十本の一升瓶が並んでいた。たまに、気が向いたとき、精力剤と称して、おちょこに一杯飲んだりしている様だったが、その現場を見たが最後、ミツオ自身にまむしが乗り移った気がして、近寄るのも嫌なものだった。

息子は畑仕事でまむしに出くわすと、鎌で頭をちょん切り、用水路に捨てている様で、少なくとも家に持ち込むことなはない。

トメ子自身は畑仕事の際、まむしに何度も遭遇しているが、その度に悲鳴を上げて逃げ出し、まむしがどこかへ行ってしまうまで別の場所で作業しているという案配である。

農作業は、日が昇ると同時に始まり、農繁期である夏場は日が暮れても電灯の下で、働く。従って、寝不足気味であり、昼食後の連続テレビ小説を見た後の十数分の仮眠が欠かせない。

母屋の台所の隣の部屋で、ごろりと横になり、すぐに深い眠りに落ちる。

トメ子がうとうとし始めると熟睡しているつもりだったのに、夢を見た。

ミツオが一升瓶に詰めたまむしが頑張って、鎌首をもたげて蓋をぽろりと押しのけて、その後、するりと瓶の出口から脱出に成功し、ぽたりと棚から落ちて、そろりそろりと台所の床をのたくっている。そして、しゅーっと威嚇音を発しながら台所の隣の部屋で寝ているトメ子に襲いかかってきた。――きゃあ、咬まれる！ そう思った瞬間、目が覚めた。

いつもは、疲労から熟睡し、目覚めも爽やかなのに、今日に限って気分が悪かった。変な寝汗をかいていた。ああ、一体どうしたことだろう？

虫の知らせというのだろうか、気になって台所の上の棚を見に行くと、まむしを漬け込んだ焼酎の黄色く変色した瓶が並び、威容を誇っていた。その中の新しい一本を見ると、何と、夢の中で見たのと同じ、瓶の蓋が外れて棚の上に落ちていた。そして、床を見ると、焼酎のこぼれた跡があり、蛇がとぐろを巻いているような紋様がはっきりと残っていた。

――はっ！

トメ子は夢の細部を思い起こした。普通は、どんな悪夢も、覚めたらすぐに内容など忘れてしまうものだ。でも、今回に限り、まむしの茶色い太い胴体に銭形の紋様がついたのが、鎌首をもたげ、しゃーっと威嚇音を発してトメ子に向かってくる様子がはっきりと記憶に刻み込まれていた。

棚を見上げた。

まむしが入っていないではないか！

蓋の外れた瓶の中には、確かに空になり、入っていたまむしはどこかに消えてなくなっ

ていた。いや、消えてなくなるはずなどない。夫のミツオがしっかりと蓋をして、棚の上に安置したのだ。それに、焼酎を満たしたとき、まむしは溺れて窒息し、死んだはずだ。なのに、まむしの姿が認められないどころか、床にはこぼれた焼酎と、まむしが移動した形跡すら残っていた。

「お父ちゃん！ 起きて！ 早う！」

トメ子はまだ寝息を立てているミツオの肩を揺り動かし、必死に起こそうとした。

「何や？ まだ、十五分たっとらんやないか。もうちょっと休ませてくれや」

ミツオはそう言い、二度寝しようとした。

「お父ちゃん！ そうやないんよ。まむしがおらん様なっとる。何とかして！」

「ええ？ ほんまかいな」

ミツオは目をこすりながら、半分、夢心地と言った様子で半身を起こした。本心から言うとまだ、寝たりない、邪魔をするなと言わんばかりの態度だった。トメ子はいらついた。

「責任取って、探してよ。ほんまに。咬まれたらどうすんの？」

「探したかて、おれへんもんは、しょうがないやないか。逃げたんやろ」

――あかん。お父ちゃんは、まむしが出て来てもそれほど危機的状況には陥らへん。パニックになるのはあたしだけや。あたしが探さならちがあかへん。トメ子は半ばパニックになりながら、竹の棒を持ち、そこらをちょんちょんと突き回しながら、異物がないか探し始めた。

焼酎の跡は、台所の空気取り入れ窓の辺りで途絶えていた。夫の言う通り、逃げただけなのかも知れなかった。そのまま裏山に逃げ込んで二度と出てこないなら、別にそれはそれで、それに越したことはなかった。もっとも、山菜を採りに山に入らなければならないこともないではなかったのだが。

トメ子も、睡眠を妨げられて機嫌の悪そうな夫をこれ以上追求する気も失せてきた。

――まあ、ええか。蛇一匹で大騒ぎするなんて、農家の主婦失格や。

そう思い直し、午後の農作業の準備に掛かることにした。

午後一時半。トメ子は、激しい日射を防ぐための帽子をかぶり、顔を手ぬぐいで覆い、ゴム手袋にゴム長靴をして、歩いて畑に出た。この夏場の雨と日差しで、雑草が伸びに伸びている。農業は雑草との戦いである。全部抜くことは事実上不可能であるので、主要作物である夏野菜の周りに生えている雑草を抜く作業に集中する。中腰になり、豪快にむんずとつかみ、ごっそりと抜き、土を払って、隣の空いた畝に放り投げて行く。ごっそり、ぽい。ごっそり、ぽい。この作業は延々と日暮れまで続く。

雑草を抜き終わった畝を見ると、つやつやとした茄子がたわわに実っている本来の姿が現れた。

これに気をよくして、また、ごっそり、ぽい、ごっそり、ぽい。を繰り返す。

と、雑草の塊に手を伸ばしたとき、その指先にちくりという感触を味わって、思わず手を引っ込めた。あっ、痛っ！ そして、その先を見ると、茶色く、ふと短い生き物がそろそろと雑草の海の中に消えていくのが認められた。あ、あいつだ！ トメ子は直感した。

痛みを感じた左手のゴム手袋を外し、咬まれたらしいところを見ると、二つ黒い穴が付いていた。そして、痛みは急激に左腕、左半身へと広がっていった。じんじんと痛み、見る見るうちに、左手の甲は倍ほどに膨れあがり、膨張は左肘から二の腕へと広がりつつあった。

――もうあかん。トメ子は自力で何とかすることを諦めた。

持っていた携帯電話で、夫のミツオを呼び出した。泥で画面が汚れたが、そんなことを気にしている場合ではない。夫は田んぼで農薬を撒いている作業をしていたが、トメ子がまむしに咬まれたと言うと、放り出して飛んできた。

「お前、咬まれたんか？」

「お父ちゃん。あたしもうあかん！」

「今救急車を呼ぶからな。病院で血清打ってもらお」

やがて、救急車がやって来た。

しかし、救急車は取り敢えず急行してくれるだけである。トメ子の容体を見てから、携帯電話で受け入れ先病院を探し始めた。まむしの血清を持っている病院などそうはない。救急隊員はトメ子の左腕を縛る応急処置をして三十分掛けて、受け入れ病院を探し当てた。

トメ子には、三時間くらいに感じられた。

結局、隣町にある総合病院が受け入れてくれることになり、救急車で搬送された。

白衣を着た医師は、症状を見るなり、毒性のある動物の被害と診断してくれたものの、すぐに血清は打ってくれなかった。

「奥さん。咬まれたのはまむしで間違いないですか？ はっきりと見たんですか？」

疑い深げに訊いた。まむしの血清は、まむし以外の蛇の毒には効かないため、中々診断を下そうとしなかったのだ。

トメ子も、断言できるかと言われれば、否であった。茄子畑の雑草の中に消えていった、茶色く太短い蛇のようなものがまむしに見えたのが、昼間見た悪夢の影響を否定できなかったし、さらに言えば、ミツオが作っているまむし酒と、そこから逃げたまむしの行方が知れなかった影響があった。

さらに、白衣を着た医師から脅すように問い詰められれば、答え様がなかった。

「茶色い蛇でした」

と、心細げに答えた。

その結果、まむしの血清は打ってもらえず、汎用の解毒剤なるものが打たれ、経過観察のため、一日、入院することになった。

――やれやれ、とんだ一日になったわ。

トメ子は病院のベッドでやっと眠ることが出来た。朝起きたとき、ミツオが一晩中付いていてくれたらしく、農作業で荒れた手のひらで、トメ子の左手を握りながら居眠りしていた。トメ子は夫の愛情に感謝し、まむし酒のことは責めないことにした。了

目印

目印

わたしがまだ新入社員だった当時、携帯電話が今ほど普及しておらず、出張先などでの連絡手段は専ら緑の公衆電話だった。あらかじめ、テレホンカードを何枚も準備しておき、長距離通話に対応する。そのせいか、景品などでも図書カード以上にテレホンカードが多かった様に記憶している。

あるとき。

「おい、山田君。ちょっと」

課長がわたしに声を掛けてきた。何か面倒くさそうな仕事だと直感した。「何でしょうか？」

「プラントの改造工事案件だ。脱硝《だっしょう》設備の増設だ。君、専門だろう？」

「はあ、はい」

新入社員のＯＪＴ（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）で、わたしは、メインテーマにプラントの脱公害設備を選んでいた。そのせいもあったのだろう、課長は入社二年目の新人であるわたしに、実地工事で経験を積ませようと白羽の矢を立てた様だった。ちなみに、脱硝設備とは、燃料を燃やした後に発生する排気ガスの中の有害成分である一酸化窒素ＮＯの除去、あるいは、ＮＯの生成を低減する装置のことである。方式は色々あるが、どの方式を選ぶかは、予算との兼ね合いもあり、一設計者が決めるべきことではなかった。

それゆえ、現地へ赴き、お客さんの要望を聞き、あるいは、プラントの現場に出て調査し、いくつかの案を提言するのに、営業課員を介さねばならなかったのだ。値段交渉や、あるいは、価格提示をする権限が、設計課にはないからである。

しかしながら、今回の出張には、営業課員の同道はなかった。

あまりに、値段の低い工事ゆえ、面倒がられたというのが本音の所だろう。こういうことは往々にしてあるというのは、わたしは何年か経つまで実感できず、このときは人員のやりくりがつかないという営業の見え透いた言い訳を素直に信じていた。

その代わりに、お客さんと技術者との間に立つのが、商社の人であった。

わたしは、まだ慣れない外線電話を回し、お客先である全日本石油と我が社、丸星《まるぼし》工業との仲介役である西花《せいか》産業横浜支店に連絡を入れた。担当者は吉田と名乗るわたしと年の近い（声で判断する限りでは）男性であった。

「はいはい。話は御社の営業から伺ってますよ。先方は火曜日の十三時からが都合がいいそうです」

そう答えた。大抵の会社では、十二時から十三時まで昼休みである。だから、昼休み開け一番の十三時からの打ち合わせが丁度都合の付く時間であったということは、二年目のわたしにも容易に見当が付いた。

「それでは、わたしは、どうすればよいでしょう？」

わたしは、当日の判断を相手に任せようとした。

「そうですねえ。先方には駅から近いですから、十五分前に根岸駅改札前で待ち合わせすることにしましょう」

「はあ」

このとき、漠然とだが、何となく嫌な予感が頭をよぎった。なぜだかわからない。わからないなりに、第六感が働いたのだろうか。

「待ち合わせの目印はどうしましょうか？」

わたしは、念を押しておいた。万が一、はぐれるという事態が容易に予想出来たからだ。

「そうですねえ……」

相手は少し考え込んだ。いつも行っている、弊社の営業課員なら顔見知りだし、先方の資材担当者にも通じているし、こんな心配は毛ほどもしなくていいに違いない。しかし、わたしは、吉田氏と会うのも初めてなら、全日本石油の窓口である資材担当者と会うのも初めてだった。根岸駅で万が一にもはぐれてしまうと、客先へ行く前に計画が頓挫してしまうという会社員として恥ずかしい思いをしなくてはならないのだ。

「わたしは、グレーの背広を着て、黒の革鞄を持って、念のため西花産業の会社の封筒を小脇に抱えて待っています。それを目印にして待ち合わせしましょう。これでいいですか？」

グレーの背広？ 黒の革鞄？ 会社の封筒？ そんなありふれたものでは、昼の街中の駅では目印には到底ならないだろうと思った。

「あのー、……吉田さんは、何か目印になりそうな特徴はないですか？」

と、馬鹿な質問をしてしまった。まさかとは思ったが、岡田准一に似たイケメンですとか、そんな答えが返ってくるのを期待していた。

「いやぁ、……わたしは至って平凡な人間ですから、外見上特に目に付くところなんてないですよ。わたしの方からも山田さんを探すようにしますから、会社の封筒を目印にして山田さんもわたしを探してください」

「そうですか。では、当日はよろしくお願いします」

心許ない思いで電話を切り、わたしは震える手で受話器を戻した。十分経っていた。

それから、出張準備に取りかかった。

まずは、現在あるプラントの既設図面一式を取り揃えた。これだけでキングファイル一冊を優に超える。図面と実際のプラントは配管や計装品が異なっていたりするので、改造工事の見積もりには、図面との整合性のチェックが欠かせない。ずっしりとした手応えが、わたしの旅行鞄に追加された。次に、作業服と安全靴、ヘルメットに高所作業に備えての安全帯が加わる。旅行鞄にはさらに負荷が増え、重量は増し、大きさもぱんぱんになるほど膨れあがった。これを持って、時間帯によっては満員のバスや電車に乗らなければならないのだ。営業課員はタクシーチケットを持っているが、残念ながら社内の人間には一枚だってくれやしない。

そうしてから、出張届けを書き、いや、これも、行き先と出張目的を書くのだから、ある意味無駄な作業だと思う。だって、出張を命じたのはわたしの趣味からではなく、上司なのだから。

そして、新幹線の時間を時刻表とにらめっこし（当時インターネットは普及していなかった）現地に十二時半に着く様、新幹線指定席の申し込みを庶務の女性に頼んだ。

「おい、山田君。ちょっと」

また、課長がわたしを呼びつけた。

「何でしょう？」

わたしは、再びいそいそと課長の前に立った。

「何で往復新幹線なんだ？ 飛行機の回数券を使った方が安いんじゃないか？」

「そうなんですか？」

わたしは、庶務の女性の方をちらりと見た。彼女はそっと頷いた。と、同時に、街のバスセンターまでの満員バスと、そこから一時間かかる新広島空港までのリムジンバス、そして、一時間半の空の旅（これはこれで楽しいものがあったが）を思い浮かべた。飛行機は羽田空港からが面倒であった。空港からモノレールで浜松町へ移動し、そこからＪＲ東海道線で横浜まで出て、さらに根岸線に乗り換え、やっと根岸にたどり着く。新幹線なら新横浜から横浜まで移動し、そこから根岸線へ乗り換えで済むし、第一、飛行機のチェックインほど面倒なものはない。定刻に飛び込んで乗り込むということが出来ないし、多少時間を見て、一時間は無駄にすることになるし、空港から列車までのアクセスがどことも悪い。

わたしは、課長の思いつきに嫌そうな顔を浮かべたが、気付かれることなく受け流した。

「そうですね。飛行機の方が安い様なら……」

「そうしてくれ」

「はい」

わたしは、庶務の女性に飛行機のチケットをお願いし、引き下がった。これから、この重たい荷物をどうしよう？ 不安は募った。

当日十二時半。わたしはここまでの旅程で汗だくになって約束の根岸駅改札前に大きな荷物と共に降り立った。早速、グレーの背広に黒の革鞄の男を捜した。……と、いるではないか！ それも、一人や二人ではない。ざっと五、六人のグレーの背広のビジネスマンがタバコを吹かしながら人待ち顔で立っていた。

――あの人かな？

わたしは、その中の一人、三十歳代と思われる男に声を掛けた。

「失礼ですが西花産業の吉田様ですか？」

「いや、違います」

男は怪訝そうな顔でわたしを一瞥し、否定した。

「どうも失礼しました」

わたしは、もう一つの手懸かりである会社の封筒というのを思い出した。とはいうものの、みんな何某かの茶封筒を持っている。一体誰が吉田氏なのだ？

時計は十二時四十五分を示しつつあった。約束の十五分前だ。全日本石油は結構うちの会社には厳しい所であった。

――グレーの背広、グレーの背広！

わたしが辺りをきょろきょろしていると、ふと、声を掛けてくるおじさんがいた。

「丸星工業の山田さんですね？」

「あ、はい」

流石ベテラン商社員、手慣れたものだった。いかにもお上りさんであるわたしを一目で広島から出て来た丸星工業の山田であると見抜き、声を掛けてくれたのだ。

一点残念だったのは、彼に一目でわかる特徴があったのに、知らせてくれなかったということだった。彼は三十代にして頭が禿げていた。了

吸い取り石

吸い取り石

トメ子は農家に嫁いで四十年になる。ミツオは優しく、町育ちで田舎暮らしに慣れなかったトメ子のことを色々気遣ってくれるいい夫であった。口うるさい姑からも始終かばってくれ、何一つ文句のつけ様もないほどであった。今ではすっかり農家の主婦が板に付き、田舎暮らしにも何にも困らなくなっている。三人の息子たちも長男が農業を継いだ他、残りもそれぞれ独立し、思い惑うことも最早ない。

花卉《かき》農家をしていて、主に鉄砲百合を栽培している。お盆とお彼岸など、仏事が重なるときが農繁期となり、朝は日の出前から起き出し、夜は日付が変わるまで花の出荷に勤しむ生活が続く。そんな毎日も例年のことで、忙しくしているのが却って幸せというものだと、今では達観していた。

そんな九月のある日のこと。夜、うとうとと眠り掛けて腕の辺りに違和感を感じ、何となく目が冴え、それっきり眠れなくなった。その上、違和感を感じた二の腕がじんじんと痛んできた。とうとう目が覚めた。

「痛たた」

トメ子は布団をはねのけ半身を起こした。そして、電灯をつけた。ミツオも目を覚ました。

「何してんねん？ 今何時や思てるねん」

「お父ちゃん。何かに刺された！」

トメ子は主張した。

「南京虫でも出たんとちゃうか？ 布団長いこと干しとらんかったやろう？」

ミツオはトメ子の手抜き主婦ぶりを責めるような口調で言った。

「南京虫なんかとちゃう。すごく痛いねん」

トメ子は左二の腕をさすりながら答えた。実際、赤く腫れ、何かに咬まれた様な跡が残っていた。ミツオはと見ると、心配そうな顔をして何か思案している様だった。

「毒虫か……」

「ええっ、変なこと言わんとってや。心配で寝られへん様になるやんか！」

トメ子は、辺りを見回し、自分を咬んだものの正体を見極め様とした。布団をめくり、畳の表面をパンパンと叩いてみたりした。すると、かさかさと異音を響かせ、黒い虫が素早く蠢めくのを発見した。動きが速くて何なのかよく見極められない。ちゃぶ台の上にある老眼鏡を掛け、じっくりと観察した。うにょうにょと動く虫の正体はムカデだった。三センチくらいの大きさの小さなものだった。しかし、その黒い胴体に黄色い足と、鋭い触覚という威容に、トメ子はムカデの持つ特有の威圧感を覚え、たじろいだ。

ミツオが蠅叩きを持って来、ばしん、ばしんと何度もムカデに向かって叩きつけた。

ムカデは容易には動きを止めない。とにかくしぶとい虫である。

トメ子は、にじり足でその場を避難し、ミツオに対応を任せた。

三十秒ほどだっただろうか。時間は正確には覚えていない。トメ子には三十分にも感じられる長い長い時間だった。

「ふう、ようやく片付いたで」

ミツオも額の汗を手の甲でぬぐいながらトメ子に報告した。最早、彼も眠気が完全に飛んでしまい、しばらく寝付けそうにない様子だ。トメ子はいそいそと、古新聞を置いてある棚に行き、広告の紙を取って来てミツオに渡した。彼は二つにちぎれながらも、まだ、なおかつ動いているムカデの残骸を広告の紙ですくい、紙ごとくしゃくしゃと丸めて、ゴミ箱に放り込んだ。

トメ子は死んでなおかつ蠢いていたムカデが、ゴミ箱の中で息を吹き返し、再び眠る自分に逆襲してこないかと心配で頭の中が一杯になった。

「一寸ムカデや。心配あらへん。母屋の納戸に吸い取り石があるから……咬まれた所に貼り付けといたらええ。一晩経ったら毒も抜けるわ」

「吸い取り石？ 何それ」

「黒い碁石みたいな石や。毒を吸い取るねん。昔からあるヤツやから、大丈夫や」

「ほんまに？ 母屋の納戸？」

母屋には、長男夫婦が住んでいた。ちなみにトメ子たちは離れの日本間に住んでいる。

普段は夜は鍵が掛かっていた。長男を呼び起こして開けてもらわなければならない。夜の一時過ぎにどんどんと扉を叩くのは何だか情けない気がしたが、じんじんと痛みが回ってきた二の腕には替えられない。それに、明日も日の出から畑仕事が待っている。早く治療を済ませて睡眠を取らなければならない。そう考え、トメ子は上からカーデガンを羽織り、つっかけを履いて離れから母屋に行った。

どんどんどん。

トメ子は長男のエイゾウの住んでいる母屋の玄関の扉を叩いた。——早く早く。

「何やねん。お母ちゃん」

エイゾウは眠い目をこすりながら寝間着にスリッパのまま出て来た。疲れて寝ていた所を叩き起こされ、不機嫌極まりない顔つきである。

「納戸の中に、ほら、虫に刺されたときに使うあれ。ほら、何て言ったっけ？」

「ああ、何かあったな。それがどないしたんや？」

「ムカデに咬まれたんよ。段々腫れて痛んできて。朝まで持ちそうにないから、吸い取り石を借りに来たん」

「ああ」

エイゾウは吸い取り石に心当たりがあるらしく、合点がいった様子で、奥に引っ込んで行った。トメ子は一緒に玄関から中に入り、奥の納戸の所に付いて行った。エイゾウは古めかしい木で出来た薬箱の様なものを引っ張り出し、ふっと、息を吹きかけて埃を払い、箱を開けた。何やら期限の切れた様な昔の漢方薬みたいなのが所狭しと詰め込まれていた。その中から、エイゾウは「蛇頂石《じゃちょうせき》」と書かれた茶色味がかった紙の箱を取り出した。

「ほら、これ。吸い取り石ってこれのことやろう？」

「じゃ、蛇頂石？ ほんまに？」

取り出してみると、黒い墨の様な丸い小判型の石が出て来た。

使い方は？ というと、患部を水に濡らし、蛇頂石の平らな部分を押し当てると、毒気のある部分に限って蛇頂石は患部に密着。十分から二十分で毒気を完全に吸い取ると自然に離れ落ちる。咬まれたらなるべく早く使用することが肝要と、説明書きに書いてあった。

トメ子は「何か怪しげな石やなあ。ほんまに効くんかいな」と疑いの目を一緒に付いてきたミツオに向けた。それに、製造元こそ、有名な老舗鳩居堂《きゅうきょどう》だが、定価は「金五拾銭」と書いてあった。一体、いつ買ったのだろう？ 少なくとも五拾銭で買える様な時代だから昭和の初期以前に違いない。姑の若い頃に薬屋から買ったのだろうかと素朴な疑問を抱いた。

取り敢えず、トメ子はミツオに言われたとおり、患部を濡れたタオルで軽く拭いて湿らせると、ミツオが蛇頂石を貼り付けてくれた。

半信半疑だったが、最早従う他ない。

「なあ。これ、何で出来ているん？」

「そんなもん、知るかい。何ぞ薬効のある成分なんやろう。昔からあるんや」

さらに、毒を吸い出した後、水につけると、毒は泡となりぶくぶくと水の中に吹き出るという。何となく、信じられなかった。さらに、乾かすといつまでも使えるという。それで、昭和初期（と、思われる）から、今まで納戸の薬箱の中に温存されていたのだろうなと思った。

二十分経った。

もう時刻は二時前だ。

トメ子は大きな欠伸をした。段々、痛みが引いているのに気がついた。

と、その途端、蛇頂石が剥がれてぽろりと畳の上に落ちた。

「お、やった。毒が抜けたんや！」

ミツオが嬉しそうな声を上げた。長男のエイゾウはすでに寝床に戻っている。二人で抱き合って喜びを分かち合った。

試しに、蛇頂石を水を張った盥の中に落としてみた。

蛇頂石は水の中に沈み、そして、ぶくぶくと毒の泡を吹き出した。

「ああ、やっぱり」

ミツオはつぶやいた。

「咬まれとったんやわ。よかった。大事に至らんで」

「もう、遅いから、はよ寝よ。明日も早いで」

「うん」

次の朝、トメ子は五時に起きて、鋏を持ち、百合畑に出た。

朝、早いうちに百合を切ってしまわないと、日が昇ると暑くて仕事にならなくなるのである。そうして、切った百合を昼間、冷房を効かせた（とはいえ、人間のためではなく

百合の鮮度を保つためだ）作業場で、より分け作業をする。百合の花の付き具合、背の高さで等級を選別し、包装セロハンで包み、テープで留めて箱詰めする。そうして、農協に出荷するのだ。どちらかというと、こちらの作業の方が辛い方だ。

時折、トメ子は昨日ムカデに咬まれた左の二の腕をさすり、何ともないことを実感するのであった。それにしても、不思議な石があったものだ。それを何十年も前に買って薬箱にしまい込んでいた姑に少し感謝する思いであった。了

富士登山

富士登山

七月に入ったばかりの第一土曜日の朝早く。六時半にわたしは同僚の山仲間の冴子と新宿駅西口にある高速バスターミナルで待ち合わせていた。行き先は富士山の登山口に当たる「富士山五合目バス停」だ。本来なら地道に麓の一合目から徒歩で上がるのが正しいのだろうが、それは今では一部の修験者のみのルートになっているそうだ。一般の登山客は「吉田口」と呼ばれる登山道を五合目から登るのがポピュラーになっている。

わたしは、学生時代、陸上長距離で少しは頑張っていたせいもあり、体力には自信があったものの、登山に関してはまるっきり素人であった。そんなわたしが何故、富士山に登ろうと思い立ったのかというと、内心気のある冴子に誘われたからという不純な動機以外に思い当たらない。

冴子は、というと、彼女は高校時代はワンダー・フォーゲル部であちこちの山々を制覇し、大学時代は本格的な山岳部に所属していて相当な上級登山者であった。彼女に誘われるままに、あちこちの手近な山を一緒に登るうち、わたしのことを登山経験者だと誤解したらしく、今回の山開き（七月一日だ）に合わせて、七月最初のホリデーを富士登山に当てたという次第だった。手近な山々を巡るうちは、体力だけには自信があったわたしにも、取り立てて問題はなく、ただ、彼女の口にする登山用語にときどき、ついていけない時があったくらいのもので、本格的な登山と呼べる登山は正に今回が最初であった。

まあ、学生時代、長距離ランナーとして鳴らした経験から、体力に問題はないし、日本最高峰の山とはいえ、初心者でも登れるというガイドブックの謳い文句を素直に信じていた。

しばらくして、冴子がやって来た。

「おはよう、山田くん。流石に七月となると六時台でももう明るいわね」

「そうだね。……でも富士山に登るにしては、随分と軽装だね」

わたしは、冴子の軽そうなバックパックを見てそう言った。これまで、近郊の山に登るときでさえ結構な重装備をしていたのだ。それに比べるとまるでハイキングである。

「富士山って山小屋があちこちにあるし、必要なものは現地調達出来るから、そんなに構えなくていいわよ。必要なのは経験と体力だけよ」

「そんなものなのかい？」

「速い人だと、四時間半くらいで登れるわ。自信ある？」

「さあ、どうだか」

わたしは謙遜しておいた。三千メートル級の山に日帰り登山並みのスピードなら、確かに重装備では辛いだろう。冴子の勝ち誇った笑みに何だか、嫌な予感がしてきた。

そして六時四十分新宿発のバスに乗り込む。約二時間半の旅だ。

バスは結構、混んでいた。富士山が世界遺産登録されたばかりで、しかも、山開きすぐの週末とくれば、にわか登山客が増えても何の不思議もないだろう。わたしは、冴子と隣り合わせに座り、吉田口までの二時間半をつぶすことにした。

都内を走るうちはよかったのだが、高速に乗り、中央道に入る頃には、同じ様な高速道の景色を眺めるのにも飽きてきて、わたしは、荷物の中からコンビニエンスストアで買っておいた缶ビールを取り出し、プルタブを引き、プシュッという音と共に湧き上がってくる泡を口で吸い取った。

「あら、あきれた。もう飲んでるの？ 富士山五合目まで二時間もないわよ。アルコール抜けるの？」

「一本くらいいいだろう。それに、今回は俺はハンドルを握る予定はないんだし」

しかし、その一口が災いに転じたのを実感したのは、目的地に到着するのを待つまでもなかった。山梨県内に入り、富士スバルラインを淡々とバスが上っていくのに合わせ、わたしの酔いが予想以上に回ってきたのだ。一体何としたことだろう？ たかが、ビール一缶だ。いつもだったら、口を湿らす程度に過ぎない量だった。なのに、頭がくらくらし、酩酊状態になったのを実感した。

わたしは、左手首の腕時計プロトレックの気圧計を読んだ。七九〇ヘクトパスカルを示していた。結構な低気圧状態だ。飛行機の中で、アルコールがよく回ると言われるが、あれと同じ状況だった。標高は約二三〇〇メートル。登山口にしては高すぎた。今まで登ったどの山より高い位置にあった。

九時五分過ぎ。バスはほぼ定刻通り富士山五合目に到着した。

冴子はうきうきした様子で、網棚の自分のザックを下ろしていた。それに引き替え、わたしは、というと、幾分酔いは覚めたものの、乗り物酔いなのか、アルコールによるものなのかさえ定かではなく、気分は最悪であった。バスを降りて、高山病になるのを防ぐため、おおよそ一時間、辺りを散策し、体調を気圧に慣らすことにした。

「五合目で、二三〇五メートルもあるのね。昔の人は一合目から登ったんだから大した違いだわ。ねえ？」

「そ、そうだね。おかげで、早速、高山病みたいだ。頭がくらくらする」

「ちょ、ちょっと、大丈夫？ だからビールなんか飲むから体調を崩すのよ」

ビールだけではなかった。実際、これまで、登った山は全部千メートル級のものばかりで、これほどの高所にまで到達したのは初めての経験だった。山岳部で高峰を縦走した経験のある冴子とは雲泥の差があった。冴子はわたしのことを、まだ、学生時代陸上部で鳴らしたスポーツマンだと思いこんでいる。あいにく、山は初心者なのだ。

とりあえず、冴子はわたしを介抱し、売店の二階にある食堂まで案内してくれた。ここで、一服し、経過を見ることにした。

他にも客はいた。皆、この二三〇〇メートルの高度に身体を慣らすために、一時間ほど

時間をつぶす様子だった。

わたしが、すっかりしょげている間、冴子は今のうちにエネルギー補給、と、言わんばかりにラーメンを食べていた。そうだ、これから、エネルギーを消費するんだ。わたしも何か食べておかなくてはと思い、食欲のない時に食べられるカレーを食べようと、財布をザックの中から取り出し、券売機の所に歩いて行った。すでに標高が高いだけあり、カレーも高かった。しかし、この際、文句は言っていられない。ここで食事を摂っておかなければ、次のチャンスは山小屋にたどり着くまでないのだ。

美味しそうなカレーだったが、食欲は少しも湧かなかった。頭はくらくらし、頭痛もしてきた。本格的に高山病だった。

「どうする？ 中止にする？」

冴子はカレーを前に、食べるのを躊躇しているわたしに問いかけた。彼女にとっては、久々の本格的登山であり、折角の休日をこうしてここまで来ているのだ。わたしの体調不良のためだけに計画を頓挫させるのに忍びなかった。

「ううむ……」

なおも考え込む（その余裕もなかったが）わたしに、冴子は提案した。

「ね、ガイドブックによると乗馬で七合目まで行けるみたいよ。乗って行く？」

「馬で？」

確かに魅力的な提案であった。乗馬で七合目まで登るのならば、しばらく、休むことが出来そうだし、その時間で高度に身体を慣らすことも出来そうな気がした。

「冴子はどうするんだい？」

「え、あたし？ あたしは歩いて登るわよ。第一、高いし」

「それでは、男が廃るというものだよ。俺も歩いて登る」

「無理すると、登っても降りられなくなるわよ。そうなると、山岳救助隊のヘリコプターに乗る羽目になるわよ」

「ううむ……」

なおも決心がつかないわたしに、冴子は別の提案を持ちかけた。

「登山は諦めて、ハイキングに切り替えましょう。ここから、御庭《おにわ》へ出て、御中道《おなかみち》へ進んでいくと大沢崩れの直下に出るわ。そこまでだと、距離の割に高低差がないからハイキングにちょうどいいわ」

「申し訳ない」

「いいわよ。あたしだって、今まで他人に迷惑を掛けたことがないかって言われたら、そうとも言い切れないもの。それに、御中道だって富士山を満喫できるわ」

冴子は爽やかな笑顔でそう言った。

一時間たち、ある程度、二三〇〇メートルの高度に慣れてきたわたしは、冴子と連れ立って、ザックを背負い、売店を出て、富士山の周遊道路である御中道へと向かった。

「悪かったね」

わたしは素直に謝った。

「ううん。こんなことで、貴重な山仲間を減らしたくないもの」

彼女は率直に本音を述べた。

けれど、ここはここで、楽しめた。丁度、森林限界（樹木が生えるギリギリの高度）の小径を二人で景色を楽しみながら歩けたのだ。それに、ときどき、沢やガレ場に遭遇し、そういうとき、わたしは彼女の手を取り、エスコートした。彼女の手のひらが、やけに柔らかく感じた。

「また、二人で山登りしてもらえるかな？」

わたしは恐る恐る尋ねた。彼女はにやりと笑みをこぼした。

「いいよ……二人で」

わたしたちは付き合うことになった。了

お遍路さん

お遍路さん

七月の最終週、大学院修士課程一年の前期試験が終わった夜。わたしは新宿駅西口の高速バスターミナルで徳島行きのバスを待っていた。傷ついた心を癒すためとでも言ったらいいのだろうか。四国出身の学食のおばちゃんの勧めに従った形で、夏休みを使い、四国八十八カ所霊場を巡るお遍路に出ることにしたのだ。弘法大師空海が開いた八十八のお寺と二十の番外霊場を徒歩で巡る長い長い総延長一四〇〇キロの旅路である。

わたしは、登山用のザックに白衣《びゃくえ》と輪袈裟《わげさ》、山谷《さんや》袋をたたんで押し込み、納札《おさめふだ》と納経帳は別に入れ、また、登山用のシュラフ（寝袋）なども用意して野宿も可能な装備をしていた。白衣には徳島に着いてから着替えるつもりで、今はＴシャツとジーパン姿である。菅笠《すげがさ》と金剛杖《こんごうつえ》だけはザックには入らないので、手に持っていた。他人から見れば、何だこいつと思われそうな格好と言えなくもないだろう。

時折、わたしは、携帯電話の画面を確かめた。今回の四国行きを研究室の指導係の博士課程《ドクター・コース》の先輩には告げているが、指導教官の准教授の先生には何も言っていなかったのだ。夏休み一杯研究室を留守にするなど、普通ならあってはならないことだった。工学部の研究室では、通常、お盆の数日以外は休みなしに実験が行われ、四年生の卒業研究や、大学院生の学位論文を書くための研究が日夜続いている。そうした中、どうしても、心の中で踏ん切りの付かないことがあり、お遍路の旅に出たことには理由があった。でも、それが理由になるのか？ 自分で問いかけたとしたら、それすら、クエスチョンマークがつくだろう。自分自身がまるで見えていないというのが正直な所だった。

「あら、山田くん。本当にお遍路に出るのね？」

午後九時のうす暗闇の中から、そう、中年女性に声を掛けられ、振り向くと、学食のおばちゃんが立っていた。

「あ……、ええ、はい」

「四国へは行ったことあるの？」

「いえ、今回が初めてです。おばさんこそ、何でバスターミナルに？」

「急なお葬式が出来てね。親戚のおばあちゃんなんだけど」

「この度は……お悔やみ申し上げます」

「やだ。別に気にしなくてもいいわよ」

「どちらまで乗られるんですか？」

「高松まで」

わたしの行き先の徳島バスターミナルの方が早かった。先に降りることになりそうだ。

間もなく、コトバスエクスプレスが乗り場に入ってきた。乗客は荷物片手に続々と、車内に入っていく。わたしも、ザックを右肩に掛け、左手に菅笠と金剛杖を持ち、入り口からバスの中に入った。座席は四列で、偶然にも通路を隔てて、学食のおばちゃんと隣り合わせになった。

コトバスエクスプレスは東京ディズニーランド発のバスで、すでに何人かの乗客が乗り込んでいた。寝ている人もいたようだが、新宿西口で大勢乗り込んだものだから、目を覚まさせてしまったようだった。

「どっこいしょ」

おばちゃんは旅行鞄を一つ、前席の下のスペースに押し込み、足を伸ばした。わたしのザックは大きすぎ、通路にはみ出した。金剛杖と菅笠は前のシートにもたせかけた。

「ふう」

一応、荷物類を落ち着くところに落ち着かせると急に空腹になった。わたしは、コンビニエンスストアで買ってきたおにぎりとお茶をザックから取り出した。

「あら、今頃夕ご飯？ 不摂生は駄目よ」

おばちゃんはそう言った。午後八時を過ぎたら食べてはいけない主義らしい。もっとも、まだ、そんなことを気にする年齢ではなかった。九時だろうが、十二時を回ろうが、飲むときは飲んだし、食べるときはたらふく食べた。そんな生活が研究室に配属されてから常態化していた。

「それで、奈実ちゃんとは連絡取れたの？」

――ギクッ、とした。

「あ……いいえ。まだ」

彼女とは大学の四年間を通し、同じサークルでつきあっていた仲だった。何度もデートもしたし、彼女の部屋に泊まり込んだことも一度や二度ではない。

仲が急に冷え込んだと感じたのは今年のゴールデンウィーク辺りからだった。

彼女は大学を卒業と同時に大手メーカーに就職し、一般職として働き始め、どうやら、先輩社員に見初《みそ》められたらしかった。最初はもちろん、わたしもそんなことに気付かず、普通に彼女と付き合いを続けていた。それが、段々と、距離を感じるようになったのは、二人で食事に行く店の格式が上がり、飲みに行くときのお酒も学生時代のビールに焼酎から背伸びして高級ワインに変わり出したのを実感したときだった。単純なわたしは、彼女が社会人になり給料がもらえるようになったからだと、ただ漠然と考えていた。が、その考えが甘かったのに気付くのに時間は掛からなかった。

六月のある日曜日の夜、彼女からわたしの携帯電話にメールが入ったのだ。

――別れて欲しい。

ただそれだけの文面だった。

わたしはうろたえ、すぐに彼女の携帯に電話を入れたが、取ってもらえず、メールも無

視された。直接会って真意を確かめたいと思い、彼女の勤め先の近所まで行ったこともあったのだが、その直後、警察から「ストーカー規制法」に基づく警告を文書で受けてしまったのだ。もう救いようがない事態だった。

そして、共通の友人（女性）を通して、彼女が会社の先輩と付き合っているということを知らされた。

「だって、奈実が付き合っている相手は幹部候補生なんだよ。二十八歳にして年収六百万もあるんだよ。片や、月収五万円のアルバイトをしている大学院生。勝負になんないわよ。あきらめたら？」

友人はそう言った。わたしは一言も反論できなかった。

研究だって、順調とは言えない。このまま続けていたって、学会発表できるかどうかすら怪しいのだ。学会発表できなければ、修士の学位論文すら通らない可能性があるのだ。とにかく、今のわたしはあらゆる面でやばかったのだ。

――アルバイト削ったら？

と、指導係の先輩からも言われていたくらいだ。実験をやっても思った通りの結果が出ない。焦る。余計に訳がわからなくなる。基礎となる理論さえもが揺らいでくる。そんな研究地獄のまっただ中にいた。

このとき、唯一の支えは恋人である奈実の存在だけだった。その彼女すらわたしの元から遠ざかって行ってしまったのだ。その晩、わたしは、やけ酒に安い焼酎をがぶ飲みし、次の日、大学を欠席し、下宿でげえげえ吐いた。

そんな顔色で学食に顔を出したら、おばちゃんに見とがめられた。

「ちょっと、どうしたのよ？ 顔色悪いわよ。二日酔い？」

「え、ええ、まあ」

「何かあったの？」

わたしは、正直に自分の置かれた状況を説明した。おばちゃんは水を持ってきてくれ、時間を掛けてわたしの話を聞いてくれた。昼休み以外は学食は暇なのだ。時折訪れる研究の合間を縫って頭を切り換えに来る大学院生しかいない。

その中で、おばちゃんが高松出身だと聞いた。かの国にはお遍路さんなるものがあって、弘法大師空海の修行した跡を、たどりながらお寺を詣って回ると功徳があるというか、悩みなんかも癒やされるという。

「わたしも、結婚して子供が出来るまでＯＬしてたことがあるから、何となく奈実ちゃんの気持ちもわかるわあ」

「ええ？」

「だって、大学の狭い世界から急に社会という広い世界に飛び出したのよ。仕事の出来る優秀な先輩がいたら魅力的に見えるし、その人から交際を申し込まれたら舞い上がってしまったりもするじゃない？」

「おばさんも、社内結婚だったんですか？」

「うーん、近いかも。取引先企業の営業マンだったの。その当時は格好よく見えたわ」

「その当時はって……あはは」

「そうよね。結婚して二十年も経つと、一杯あらも見えて来るわよ」

わたしは、自動車のテールランプの光が流れていく真っ暗な高速道路の光景を見つめていた。奈実は多分、わたしの元には戻ってこないだろう。それに、実験だって、多分、うまく行かないに違いない。秋には先生から研究テーマの変更を迫られるだろう。そう考えながら、うとうととし、日付が変わる頃には、浅い眠りに落ちていた。まさに煩悩だらけの身の上だった。

次の朝六時に鳴門海峡を通過したバスは定刻通りに六時四十分、徳島バスターミナルに着いた。先に降りるわたしにおばちゃんは声を掛けてくれた。

「じゃあ、頑張るのよ。お遍路さん。お遍路さんは決して一人じゃないんだからね」

「え？」

「ほら、金剛杖にも同行二人《どうぎょうににん》と書いてあるでしょう。いつも御大師様と一緒という意味よ。頑張りなさいよ」

「はい」

わたしはおばちゃんと別れた後、バスターミナルの中でザックにしまってあった白衣に着替え、第一番札所「霊山寺《りょうぜんじ》」に向かって歩き始めた。了

晚秋

晩秋

「とっつあん、頼むよ。この通り」

電話口の向こうで、川向かいの村に住んでいる竹夫が両手をこすり合わせる様な声で嘆願した。利幸は、自分の年を考えた。もう、七十七歳。後期高齢者だ。自動車の免許も認知症検査に反発して返上してしまい単身では身動きが取れないでいる。町への日用品の買い出しはもっぱら長男の嫁の軽自動車のお世話になっているのが現状だ。

「そうは言ってもな。竹さん。俺ももう年なんや」

「そんなことないって、……昔からイノシシにかけては村一番やったやないか」

「そやったかな」

「そうや、間違いない。とっつあんに捕れんものは、誰にも捕れんわ」

聞くところによると、この夏からイノシシが山から出て来て、すっかり道が付いてしまったというのだろうか。度々、田んぼにも出没するようになり、この間など、稲刈り前の田んぼでイノシシが泥浴びをしたと言うことらしかった。泥浴びはイノシシの習性だ。ダニなどの寄生虫を落とすのと体温調節のために泥浴び、水浴びする姿が度々見受けられる。

「稲穂は全部なぎ倒されるわ。そうなったら、機械《コンバイン》は使えないわ。手で刈り取るのに何日無駄にしたかわかるか？」

竹夫は続けた。

「一週間はかかるやろな」

「せや。そんで、せっかく刈り取った米も、イノシシの臭いがして、売りモンにならん。出荷できひんのやで。もう、泣くに泣けんわ」

「そらひどいな。精米しても臭うんか？」

「せや、せやから……」

「そら、難儀なことやったな」

「他人事みたいなこと言わんといてえや。こっちは生活が懸かっているのや」

「せやかて、今更イノシシを退治したかて、効果はもうあらへんのと……」

「そんな問題やない。来年のこともあるんやで。イノシシにこの村に来たら怖いということを学習させんとならんのや。つまり、とっつあん。あんたの出番ちゅうわけや」

電話を切った後、利幸はため息をついた。そして、部屋の片隅にある、古びた錆だらけの鋼製銃器庫ロッカーを見つめた。ダイヤル錠のついた誰にも触ることの出来ない頑丈な鋼の箱《キャビネット》だった。

中に鍵付きチェーンを掛けられて入っているのは、長年愛用していた、ポンプアクション式散弾銃「レミントンＭ８７０」だ。十二番ゲージの散弾を三発装填することが出来、射撃姿勢を変えないで、そのまま狙いを定め続けられる猟に適した銃だった。

最後に撃ったのは丁度五年前の秋だった。

そのときも猟友会のメンバー五人と共に猟犬を引き連れて、山中を移動しながらイノシシを追っていた。村の面々に頼まれ、害獣のシカとイノシシを狙う猟だった。

一般に、狩猟は「一犬、二足、三鉄砲」と言われている。

猟犬は何より大切な存在で、飼い主に忠実に懐く様、子犬の頃から愛情を持って育て、大型獣を怖がることのない様、時折、おやつにイノシシやシカの骨付き肉を与えたりして恐怖心を克服させ、人には絶対かみつかない様、人には馴れさせ、また、銃声に怯えな

い様、定期的に射撃場に連れて行き、鉄砲の音にも馴れさせた。言うなれば、手間と人手の掛かったお姫様、お坊ちゃまである。

その大事な猟犬を誤射で殺《あや》めてしまったのだ。

丁度イノシシを追い込んで、猟犬が風上から回り込み、一斉に吠え立て、射撃手のいる方角に誘導している最中の出来事だった。藪の中を茶色い塊が高速で移動するのをいち早く発見した利幸は、目的のイノシシであると認識し、銃眼を覗き、狙いを定め、そして、安全装置を外し、引き金を引いた。

ずどーん。

大きな銃声が鳴り響いた。

仲間たちが、一斉に音のした方角目がけて集まってくる。無線は猟の成果を尋ねる声と状況報告で交錯した。

「やった！」

と、思ったが、違っていた。背高く生い茂る雑草をかき分け、獲物を確かめると件《くだん》のイノシシはいなかった。その代わり、変わり果てた姿になった仲間の猟犬「小鉄」が血を流して横たわっていた。即死だった。イノシシは別の射撃手の手で仕留められた。

「すまん」

利幸は何度も謝った。

「まあ、起こってしまったことはしょうがない。人身事故にならなかっただけ、ましというもんや」

仲間は、表面上、笑顔で許してくれた。しかし、そのことが却って利幸の重荷になった。

――もう、銃は持つまい。そう決心したのだ。それで、三年毎更新の狩猟免許も登録も、銃器所持免許の更新も行わなかった。そして、愛銃レミントンは銃器庫の中にしまわれ

たままになっていた。

ただ、猟犬「マルコ」を除いて。

マルコは雌の柴犬で、飼い主以外には懐きにくい狷介《けんかい》な性質の犬だった。それでも、敏捷で、持久力があり、シカでもイノシシでも恐れずに立ち向かっていく勇気を持っていた。猟に連れて行かないのが可愛そうなくらいだったが、利幸の決意は容易に揺らがなかった。

「くーん、くーん」

利幸が庭先に出る度、マルコは足元にまつわりついて来て、山に連れ出されることをせがんだ。「散歩で我慢してくれや」利幸はそう言ってマルコの頭をなでた。

「事件」のあったとき、マルコは丁度犬盛りの七歳だった。今では十二歳。そろそろ老齢犬の部類に入ってくる。しかし、食欲や散歩の時の動きを見ているとまだまだ猟犬は勤まりそうに思えた。

夕刻、マルコにせがまれ、利幸は散歩に出かけた。右手で首輪に掛けたリードを持ち、左手にエチケット袋を持つ。普通の愛犬家スタイルだった。歩くコースは田舎の農道で、時折、よその畑の畦道も通らせてもらうことがある。堅苦しい性格の利幸は、畦道とはいえ、犬の糞の後始末を怠ったことはなかった。それでなくとも、世間様の目は猟銃を握る人間には厳しいものだから、率先して、法規範を遵守する姿勢を見せておく必要があった。

橋を通り、川向かいの村に入ったとき、マルコがいきなり吠え始めた。

「なんや？ 雌犬でもおるんかいな」

仲の悪い犬との喧嘩も、犬を飼っていると何となくわかるものである。しかし、このときは様子が変だった。利幸は畦に上がり、畑の中を見渡した。と、何かが蠢《うごめ》いていた。サツマイモの茎を引きちぎり、地面を掘り返し、丸々と太った芋を茶色い生き物がまるで呑み込む様に食い荒らしていた。午前中、竹夫が言っていたイノシシだった。利幸は愕然とする思いだった。本来なら山の中でドングリなどを食べてひっそりと暮らしているはずの動物が、こうして、人間の社会にまで入り込んできて、しかも、我が物

顔で作物を荒らしているのだ。竹夫でなくても、怒りがこみ上げてきた。

利幸はマルコのリードを外し、「行け！」と命じた。敏捷なマルコは飛び出し、イノシシの周りを移動しながら、激しく吠え、威嚇した。イノシシは最初は我関せずという態度だったが、次第に、その本来持つ激しい気性をあらわにした。が、これは、猟犬マルコの作戦である。相手の関心をサツマイモからそらし、自分に向け、射撃手が用意するまで時間を稼ぐのだ。こんな所作がマルコの身体に染みついていた。

利幸は利幸で、慌てて、自宅に戻り、錆の浮いている銃器ロッカーを開け、愛用のレミントンを取り出し、動作を確認した。ポンプを引き、銃眼を目に当て、引き金を引く。がちんと言う撃鉄の落ちる音がするのを確かめると、次は弾薬の用意に意識が向いた。

本来なら銃砲店で、狩猟シーズン中に必要な弾薬量を計算して注文して購入しなければならないのだが、あいにくと、狩猟免許も銃器所持許可証も賞味期限切れだった。となれば、新たに銃砲店で購入することは出来ないのだ。

弾薬ロッカーを開け、カートリッジの入っていた箱をひっくり返し、使い残しはないかと探し回った。こうしている間も、マルコがイノシシと対峙している。

製造年月日が五年前の、十二番ゲージの散弾が三発だけ残っていた。これが利幸に与えられた唯一のチャンスだった。いや、チャンスではないかも知れない。山の中ならともかく、場所は村の中の畑なのだ。見つかれば狩猟法違反、銃刀法違反で即逮捕されるに違いない。しかし、自分がやらなければ誰がやるのだ？ 利幸は自分で自分に問うた。

決断は早かった。十秒だけ考え、利幸はレミントンをガンケースに入れて肩から掛け、靴を履いて飛び出していった。三発のカートリッジはポケットの中だ。

現場に戻ると、マルコがイノシシをまだ引き留めていた。かのイノシシはかなり興奮していた。絶好の射撃ポイントだった。イノシシの側方十五メートルの位置からの射撃だ。外しようがなかった。

利幸は、レミントンを構え、狙いを定めて引き金を引いた。がちん。という音だけが響

き渡った。不発だった。ポンプを引く。不発弾が排莢される。第二弾も不発だった。排莢する。第三弾。だーん。と言う音を立てて散弾が飛び散った。イノシシの肩の肉が飛び散り、ぶひーっという鳴き声を上げ、それでも、とぼとぼと歩き、そして倒れ込んだ。

利幸は額に浮かんだ冷や汗を手の甲でぬぐい、猟銃をケースにしまい、マルコを再びリードでつないだ。

イノシシ事件のことは公にならなかった。シシ肉は業者が喜んで引き取りに来て、畑の持ち主の竹夫も

多くを語らなかったからだ。了

カラフルボックス

カラフルボックス

わたしは、思い立った翌月会社を辞め、前から密かに準備していた喫茶店「カラフルボックス」の開業準備に取りかかった。物件はすでに駅近くの雑居ビルの一階に手頃な所を見つけていて、辞めたその日に賃貸借契約を取り交わした。後は、店舗の改装と開業に必要な器材の調達だった。

焙煎コーヒーにこだわった店にしたいと考えていた。夢は膨らむ。

元々、コーヒーにはうるさい方で、焙煎はじっくり、ミルは粗くもなく細かすぎず、ちょうどいい頃合いを見計らってサイホンで淹れる。家から会社までの往き道、そんな店を探したが、なかったので、自分がやればいいやと思った次第である。そんなわけで、半月あまりの工期で店の改装も終わり、秋の深まる十一月吉日。店は開業した。

スタッフは、最初、マスターのわたしだけのこぢんまりした店を目指す予定だったのだが、今時、カフェ流行の時代に、軽食の一品でも出せなければ店は流行らないと会社時代の友人から忠告を受け、飲食店で調理の経験のある二十代の女性をパートで雇うことにした。

「マスター！」

準備期間中に、パートの佳子が厨房の装備をチェックし注文をつけた。

「はいはい、何でしょう？」

「フライパンが一個しかありません。玉子用と他のもの用とは少なくとも分けるべきだと思います。玉子に匂いが移っちゃいます」

「そうなの？」

わたしは、開業前に、道具屋筋の専門店に走り、彼女の言う通りの器材を買いそろえる羽目になった。

営業時間も決めなければならない。通勤時間帯のサラリーマンを相手にする気でいたから、朝は六時半から店を開けコーヒーと軽食、お昼はランチ、そして夕方はコーヒーだけとし、七時に店を閉めることにした。アルコールは出さない。だからパートは朝から昼過ぎまでだ。

「ふぁああ」

開店準備のため五時半に出勤して来て、流石に若い佳子は大きな欠伸をした。

「コーヒーでも飲むかい？」

「あ、お願いします」

彼女がお客第一号になった。

わたしは、焙煎してあったブルーマウンテンをミルで粉末にし、サイホンの容器に入れた。そして、ミネラルウォーター（軟水）を下の容器に入れて、アルコールランプに火を灯す。やがて、ぶくぶくと熱せられた水は沸騰を始め、サイホン管を伝って上の容器に登っていく。この瞬間がコーヒーの好きなわたしにはたまらない時間だ。一杯になった容器をさじで均等になる様かき混ぜ、そして、アルコールランプに蓋をする。熱源を失った下の容器の圧力が弱まり、漆黒の液体がサイホン管を伝ってまた降りてくる。馥郁《ふくいく》たる香りが店内を漂った。

「いい香りですね」

「そうなんだよ。これがたまらなく好きでね。サラリーマン辞めてマスターになっちゃった」

容器から、コーヒーカップにゆっくりと注ぐ。そして、コーヒー皿に載せ、彼女の前に差し出した。

「美味しい！」

彼女は一口飲んで絶賛の声を上げた。それはそうだろう。喫茶店経営者としては初心者だが、コーヒーをサイホンで淹れることにかけては、この道三十年のベテランなのだ。高校生の時から自分で淹れていた。もっとも、当初は受験勉強対策で眠気に対抗するためカフェインを取ろうと思ってのことだった。いつの間にか、この香りが好きでたまらなくなっていた。

会社に入って、庶務の女性がたまにコーヒーを淹れてくれることがあったが、あまり美味しくはなかった。ちゃんとサイホンで淹れているのではなく、ドリップ式でしかも、作り置きしたものを保温器の上で常時熱せられる方式のものだったから、よく煮詰まっていて不味かった。もっとも、そんなことを言おうものなら、コピーを頼んでも取ってくれなくなったり、必要な電話を取り次いでもらえなくなると言う社内業務妨害をされる恐れがあったので、文句を言ったことは一度もなかった。

でも、今はもう違う。不味いものは不味いと、堂々と言えるのだ。言ったところで何も恐れるものはない。ただ、自分の責任が増すだけのことだ。

「でも、マスター。せっかく大企業におられたのに、よく辞めましたね。奥さんとか反対されなかったんですか？」

彼女はコーヒーカップをテーブルの上に戻し、痛い所を突いてきた。

「もめたよ」

「やっぱり？」

「そりゃあ……」

実は離婚寸前までの言い争いがあった。でも、勤めるのはわたし自身だし、一回しかない人生、どうせなら、好きなことに時間を費やす方がよかった。それで、結局、家庭内離婚みたいな感じで冷戦状態が続いている。もし、この喫茶店カラフルボックスが営業不振に陥ったら本当に離婚になるかも知れなかった。

毎日、嫌な同僚と顔をつきあわせ、悪いタイミングで仕事を押しつけてくる部長のご機嫌を伺い、女子社員共に愛敬を振りまきながら、自分自身の仕事だけはきっちり仕上げるという典型的なサラリーマンライフを送って来たのだ。こんなことは人生の無駄遣いだ。わたしの本心はそう叫んでいた。もう限界だったのだ。

「やっぱり最後は、こう……ばしっと決めたんですか？」

「いや、今度、ヌジャメナ支店に転勤の内示が出たと言ったんだ。家族同伴で」

「ヌ……、それ、どこですか？」

「詳しくは知らないし、口から出任せだよ。でも、そう言ったら、かみさんも、考え込んでしまったよ。あはは」

からんからん。とドアベルの音がし、初めての客が入ってきた。初老のサラリーマンらしき男性だった。客はカウンター席の端っこに座り、コートを脱ぎ、隣のスツールに掛けた。

わたしは、水とメニューを持って行った。

「いらっしゃいませ。カラフルボックスへようこそ」

「フレンチトーストとミルクティーをもらおうかな」

「は？」

ここは、焙煎コーヒー専門店のつもりだった。いきなり、ミルクティー。しかも、メニューにないフレンチトーストと来た。わたしはカチンと来た。サラリーマン時代を思い出した。もう帰ろうとしているのに、明日のプレゼン資料を作る素材を持ってこいと命じる部長の顔が頭に思い浮かんで消えた。ぶるん、ぶるん。もう、会社員ではないのだ。

わたしは一呼吸置き、厨房の方を見た。

佳子は両手で丸の合図を送ってきた。どうやら、レパートリーの中にあるらしい。

「かしこまりました」

彼女は器用だった。もし、彼女を雇わず、わたし一人でコーヒー専門店をやっていたかと思うと寒気がするくらい恐ろしい事態だった。たかがフレンチトーストと侮るなかれ、彼女のフレンチトーストは即席だったが見事なものだった。

ボールに玉子とミルク。砂糖を混ぜ合わせ、厚く切ったホテル食パンを漬け込み、味が染みこんだら、フライパンで焼き、丁度よい頃合いを見計らって、焦げ目をつけ、三角に切って皿に盛りつけ、上から生クリームを掛けた。どこからどう見ても、ホテルのフレンチトーストそのものだった。わたしは仕方ない顔で、ポットで紅茶を沸かした。

「お待ちどう様でした。フレンチトーストとミルクティーになります。熱いうちにお召し上がり下さい」

「ほう。メニューになくても言ってみるもんだな。実は前に行っていた店がなくなってしまって、朝の楽しみがなくなって困っていたんだよ」

「さようでございますか」

「ところで、カラフルボックスとはどういう意味だね？」

初老の男はフレンチトーストをナイフで切り、フォークに刺し、生クリームを絡《から》めて一口頬張ってから尋ねた。

「コーヒー豆の色からです。生豆、ライトロースト、シナモン、ミディアム、ハイ、シティ、フルシティ、フレンチ、イタリアンと、それぞれ煎り方によりカラフルなバリエーションになっております。それを楽しんでもらおうと作った店でございます。今度お越しの際は是非、当店のオリジナル・コーヒーをお召し上がり下さい」

「ふうん。やっぱりこだわりがあるんだな。よし、今度は頼むことにするよ」

「ありがとうございます」

その紳士はそれ以来、ちょくちょく来店してくれる様になったが、相変わらず注文はフレンチトーストとミルクティーだった。やはり、人の好みはそう簡単には変わらない様

だった。

ランチタイムになると、佳子は大活躍した。オムレツやカレーライスやハンバーグランチと言った、煩雑なメニューを次々とこなして行った。それが、どれも、客には好評で、最初、わたしが喫茶店の経営に慣れるまでいてもらうつもりのパートだったのだが。いつの間にかなくてはならない存在になり、正社員に昇格させた。

焙煎コーヒー専門店の看板の割にすっかり、ランチカフェの様になってしまったが、店の経営は安定しつつあった。これで、離婚は免れそうだった。了

総崩れ

総崩れ

前回の衆議院解散総選挙で、与党は総崩れとなり、末席を汚していたわたしも、議席を失い浪々の身となった。後援会の吉田会長に慰められ、残念会を催して頂き、捲土重来《けんどちょうらい》を期して、しばらくの間、会長の経営している経営コンサルタント会社の顧問として籍を置くこととなった。とはいうものの、実際は企業経営に関しては全くの素人であるわたしに出来る仕事などあろうはずはなく、専ら、椅子を温めているだけの閑職で、ただ献金を給与の形で受け取るためだけの形式的な職に過ぎなかった。

でも、それでは寝覚めが悪いと言うものだ。

そんな訳で。わたしは、コピー機のメンテナンスや給湯室の三角コーナーの清掃などを進んで行い、総務課の面々から少しは感謝されるかなと思っていたのだが、案に相違して、実際には社員からは煙たがられていることに気付くのに、そう、時間は掛からなかった。

「山田たけしってば、嫌みよね〜」

そんな声が給湯室から、わたしのいない間になされていた。

本来、給湯室は女子社員の憩いの場でもあり、単にお茶を淹れる場という訳でもなかったらしい。それに、コピー機のメンテナンスも、ちゃんと本来するべき業者と発注すべき部署の人間がいて、その仕事を取ってはいけない不文律の様なものがあるようだ。それ以外にもわたしの社内での行動には一々批判の的となっていた。

「山田先生。ちょっといいですかな？」

吉田社長がわたしの席にやって来た。その時、わたしは、カッターシャツの腕をまくり上げ、机の下の埃と格闘していた。わたしは、手の甲で額の汗をぬぐい、かがんだ姿勢のまま、はいと返事し、社長を見上げた。

「山田たけし後援会会長として言わせてもらいますぞ」

「はい？」

「先生を我が社の顧問に雇っているのは、何も雑用をしてもらうためではありません。そのことは分かっておられますか？」

「ええ、そりゃ、まあ」

「先生には次の選挙で勝ってもらわなければなりません。その間、無職では世間体が悪い。だから、取り敢えず……そう、取り敢えず、貧相かもしれないが当社の役員待遇でいてもらっている。それだけのことなんです」

「ええ、わかっています。次の選挙です」

「いや、わかっておられない！」

社長は一喝した。わたしは、心からびくりとした。日本民衆党の江坂幹事長に恫喝されたときのことを思い起こさせるくらいの迫力だった。

「先生に代議士をやって頂くのも、わたしの道楽なんかではありません。この国の経済を改革し、我々のビジネス展開を有利に持って行く。そのために先生には国政の場で活躍してもらわんといかんのですぞ」

そう言えば、前回の代議士時代。衆議院予算委員会で、質問に立つ機会が与えられたとき、その項目の中に、吉田社長からの要望が何点か含まれていて、政府委員から「前向きに検討する」旨の回答を得られたことがあった。その晩、東京の議員宿舎に電話が掛かってきて、予算質疑のテレビ中継を見ていたと思われる吉田社長から、大いにお褒めの言葉を頂いたことがあった。

「ですから、先生には次の衆議院総選挙では是非、兵庫十三区から出馬して、何としてでも、いや、どんな手を使ってでも当選してもらわにゃあ困るのですぞ」

当選してもらわなければ困る。その言葉に段々と辟易してきた。

兵庫十三区って、結構田舎のくせに新興住宅地が多く、従って、無党派層が多く、みんなに受けることを主張しないと票が集まりにくい傾向があった。わたしの性分とは百八十度異なるスタンスである。――大いに税金を削減し、公務員給与を削減し、その分を福祉、子育て支援に当てる。中小企業支援に当てる。そう言うのがわたしの信念だったのだが、いかんせん、ここにも、地方公務員宿舎が多数建っており、うっかり、公務員給与の削減などと口走ることも出来かねるし、子供の少ない地域でもあり、子育て支援がそうそう受けのいい主張にはならない事情もあった。

「吉田社長。浪々生活が四年も続くと、例え鋼の刃でも錆び付いてしまいます。そこで、二年後の参議院選挙に、比例代表ででも出させて頂こうかと思っているのですが、いかがでしょうか。後援会の方は？」

「ふむむ？」

吉田社長は一体この期に及んで何を言い出すのかと、意外な顔つきになった。

「先生は分かっておられないようですな。……いいですか。衆議院の小選挙区はいわば、メジャーリーグです。比例代表や参議院はマイナーリーグです。言わんとするところはわかるでしょう。政治的影響力というものを考えてみて下さい。いざ国会議員になってみても、その発言力がまるで違ってきますぞ。この前の国会の経済産業委員会副幹事に就任出来たのも、兵庫十三区から選出というバックボーンがあってこそのことなのですぞ。そこら辺の事情は、わたしが言うより、先生の方がよくご存じのはずだ」

「それは、まあ……」

確かに、法律を可決する本会議場では国会議員は皆等しく一人一票の投票権があるものの、実際に物事を決めるのは各委員会での議事であり、そこでの発言力は、確かに吉田社長が言う通り、メジャーリーグとマイナーリーグの見えない壁があることも、ある意味事実と言えた。

吉田社長と、わたし、山田たけしとの出会いは四年前に遡る。

父の山田謙三元議員の死去に伴い、地盤を継ぐべく国会議員になるため、会社員生活に

終止符を打ったわたしは、父の後援者だった吉田社長やその他大勢の人々に頭を下げ周り、選挙運動そのものを全面的に頼ったのだ。

無党派層の多い、この兵庫十三区で、父が死んだからすぐに、その息子が跡を継ぐなんて、そんなことは簡単ではなかった。この新興住宅地の抱える問題や、経済的な見返りを暗に提示し、選挙カーに乗ってだだっ広い選挙区で名前を連呼して回り、あちこちの集会に顔を出し、政策を演説して回る。その間、日本民衆党の公認候補の地位を認めてもらいに何度も上京し、江坂幹事長にようやく認められた。

そして、三年前の選挙。

後援会長は率先して選挙事務所を立ち上げ、ボランティアを社内からかき集めた。そして、わたしにお金の話を持ってきた。

「先生。供託金《きょうたくきん》の話です。今回は会社の交際費から出させていただきます。しかし、表向きの話、これは、後援会の会費から出したことにしておいて下さい。会社の経理上色々、不都合がありましてな」

「はい？」

わたしは、初めての選挙で、これからの政策と、選挙演説のことで頭が一杯でお金の心配など全然していなかったし、どのくらいのカネが必要かすら把握していなかった。

「供託金を収める必要があります。小選挙区だと三百万円です。もし、有効投票数の一割を割り込んでしまうと、没収されます。自信はおありでしょうな？」

「ぼ、没収？」

「言わば泡沫候補が乱立するのを防ぐ制度です。比例代表だと六百万、小選挙区だと三百万のカネを積み、没収点を下回ると、当落に拘わらず没収されてしまいます。つまり、それだけの財力と、集票力がなければ立候補出来ないと言う訳です」

「はあ」

実際には吉田社長が全額、社の（裏の）交際費などからの裏金と呼ばれる経理操作で捻出してくれたのであった。こうしたことは、父の代からも行われていた様だった。

そして、わたしは、六万五千票を獲得し、当選したわけだった。

選挙戦のことはよく覚えていないというのが、正直なところだった。人前に出ると緊張してしまい、何を喋ったのかよく覚えていなかったし、握手握手、名前の連呼連呼の連続で何が何やら、よく分からないうちに、（きっと、投票者もよく分からなかったに違いない）投票日を迎えてしまったのだ。

がくがくぶるぶるしながら、わたしたち選挙事務所の面々は、ＮＨＫのテレビ画面に釘付けとなった。開票率一パーセントで、当選を告げられたときには、喜びよりもむしろ唖然とする思いが強かった。

「ばんざーい！ ばんざーい！ ばんざーい！」

わたしは、吉田社長たちに囲まれ、支持者（社員たち）の前で万歳三唱した。その光景はＮＨＫ兵庫版のニュース映像に流れ、わたしは、ビデオ録画し、今も大切に保存している。

そして始まった永田町での慣れない政治家生活。でも、父のお陰か、ある程度の認知度はあった様で、江坂幹事長には何かと可愛がってもらえた。そこら辺が、他の一年生議員とは違っていた。その頃から、吉田社長は自社に有利になる様に政治に口出ししてくる様になった。まあ、それはそれでよかった。わたし自身、それほど、ポリシーがある方ではなかったからだ。社長との蜜月関係はそれからも続いて行った。

日本経済は？ と言うと、政府・与党の失政、失策が続き、失業率が上がりＧＤＰがダウンし、起死回生の解散総選挙を打ったが、各議員とも総崩れとなり、わたしも含め多くの仲間が落選した。

もう、選挙なんてこりごりだ。さりとて、選挙が最大の仕事。避けては通れない関門だった。と言う訳で、わたしは四年後の衆議院総選挙を目指して、選挙公約を日々練り上げている。了

※この作品はフィクションであり、作中に出てくる兵庫十三区は架空の選挙区です。

ハイブリッド自転車

ハイブリッド自転車

わたしは下町で鉄工所を経営していた。主に鉄鋼品、ステンレス製品の板金加工と溶接を生業としている。たまに町内の公園のジャングルジムや鉄棒、雲梯と言った遊具の修理をボランティアで引き受けたりしていた。錆びてちぎれてしまった梯子を溶接でつなぎ合わせるのはお手の物であった。作業は主に社長であるわたしと、唯一の従業員との二人だけでやっていた。経理などの庶務業務は家内が一手に引き受けてくれている。

ある時、古い友人が「こんな製品は作られへんかな？」と、妙な発明品の設計図（あるいは企画書とでも言うべきか？）を持ち込んできた。彼はこれまでにも、色んなアイディアを生み出し、当社に持ち込んできたことがあった。その中には、完全にアイディア倒れのものがほとんどであったが、百に一つくらいは画期的な発明品もあった。だから無碍には断れなかったのだ。

わたしは、工場の片隅に衝立で仕切ってある事務机に座り、老眼鏡を掛けた。

「どれどれ」

彼が示したのは、電動アシスト自転車の試作品らしき図面だった。

「電動アシスト自転車は画期的な製品や」

彼は力説の口調で話し始めた。いつも通りであった。自信満々に自分のアイディアを売り込むのである。これまでにも、何度もわたしの鉄工所で、鋼材をつなぎ合わせて彼のアイディアの実現化に協力し、その度、軽い失望感を味わわされてきたのであった。

「普通の自転車の欠点って何やと思う？」

彼は自慢げに問いかけた。それは、長い上り坂を、重たい荷物を積んで登り続けるのが

苦痛なことだ。他の欠点は雨の日に濡れる程度のことだったが、これはカッパを着込めば造作はない。

「そうや。長い上り坂。せやけど、電動アシストさえあれば、体力に自信がなくても、へっちゃらや。せやろ？」

「そうやな……」

わたしは、そろそろ、結論を聞きたいのを我慢して相づちを打った。もう、本来の仕事に戻らなければならない。午前中に十五分、午後に十五分のタバコ休憩を設定していて、その時間に彼の詰まらない相談に耳を傾けていた。わたしはタバコは吸わないが、従業員の男がタバコを吸っていた。彼がタバコを吸う間、わたしはインスタントコーヒーを飲んで、溶接作業で疲れた目と手を休めていたのである。

「しかし！」

彼の声のトーンが一オクターブ上がった。そろそろ、結論の様であった。

「電動アシスト自転車の最大の欠点は、夜の間中、バッテリーを家の中に持って入って、充電を続けなければならないということや。充電し忘れたらどうしようもあれへん。しかも！ せっかく充電しても、一時間も走らんうちに電力を使い切ってしまうことや」

「なるほど」

一時間も走らないうちに、とは、少しオーバーな表現だと思った。最新型の電動アシスト自転車なら二、三時間は余裕で走れるそうだ。

「電力を使い切ったバッテリーは、ただ重いだけの存在に成り下がる！ 抵抗にしかならへんのや」

「うん……せやな」

「せやから……ここで登場するのが、わいの発明や！」

「ほう！」

いい加減、話を打ち切りたくなり、わたしはおつきあいで感嘆の声を上げた。彼はそれに気をよくしたのか、持っていた別の紙を事務机の上に広げた。

彼の発明はとにかく突飛だ。

自動車でハイブリッドカーというのがあるが、あれと同じ発想で、走りながら発電機でバッテリーに充電し、その電力で上り坂のアシストを得ようと言うものだった。

「ほんまかいな？」

わたしは思わずつぶやいてしまった。彼に聞こえたと思った。

「計算上は確かや。.....これは当たるで」

彼は断言した。

「でも、普通の電動アシスト自転車とどう違うんや？ ああ、発電機を備えているんかいな.....」

「せや、せや。発電機。これをペダルを漕いでいるときに回して発電し、湧かした電力はバッテリーに蓄える。リチウムイオンバッテリーなら二、三日分の電力を蓄えられる。何なら、プラグ・イン・ハイブリッドにして家庭用電力も賄おうか」

プラグ・イン・ハイブリッドとは、コンセントからも充電でき、また、バッテリーからコンセントへも出力できるタイプのことである。自分で発電するのである、実際やるとなると体力的に大変だと思った。

「無茶や」

「そんなことあれへん、と、思うで」

彼は弱い調子で断言した。

わたしは、老眼鏡を少しずらして、動力部分の詳細図を眺めた。自転車のチェーンは動力モーターに巻き付けられ、同じく、クラッチを介して発電機にもつながっていた。自転車を漕ぐ動力の一部を発電に回し、発生した電力はバッテリーに蓄えられ、登りの際に、モーターへ供給される仕組みになっていた。計画は万全の様に思えた。

わたしの作業は、今ある電動アシスト自転車のフレームに、新たに発電機を取り付け、そこにチェーンを巻き付けることだった。溶接機があれば造作ないことだった。

材料となる電動アシスト自転車と発電機は彼がすぐに持ってきた。

わたしは、自ら溶接機を手に取り、自転車のフレームに、ばちばちっと火花を散らして溶接し、発電機を取り付けた。汚れついでにチェーンを取り付け、油を引いた。後は発電機に掛かる動力の入り切りを制御する電磁クラッチの取り付けだった。これも、図面通りなら造作なかった。フレームに取り付け板を溶接で取り付け、位置合わせをしてから、電動ドリルで穴を開け、ボルト二本で固定した。

「出来たがな！」

彼は、完成品を見て喜んだ。

わたしは、工場の壁に掛かっている時計を見た。彼のせいで今日の作業が大幅に遅れていた。元請けに納入しなければならない部品製造の仕事がたまっていたのだ。しかし、完成した自転車も気になった。

「乗ってみてみ」

わたしは、彼に試作品の具合を確かめる様、促した。

「お、おう」

彼は、自転車のサドルにまたがり、ぐいとペダルを漕いだ。

ぎぎっ、ぎぎっ、……ペダルを漕ぐと、チェーンが張り詰め、ギアが悲鳴を上げた。少し様子がおかしかった。

「大丈夫かいな？」

「自転車のペダルってこんなもんやったかいな？」

彼はそんなことを言い出した。

「ええ？」

わたしは、彼に運転を代わる様言い、自分で自転車にまたがった。工場内でペダルを二、三回漕ぐと、彼の違和感の原因がわかった。異様にペダルが重いのだ。

「上り坂どころやあれへん。平地すら満足に走られへんやないか。これ」

わたしがそう言うと、彼はがっくりと肩を落とした。

「でも、ハイブリッドカーと同じプログラムで発電するのやで」

「調べたんか？ そんなことまで？」

「ああ。間違いあらへん」

彼は、それらしき、発電機と電磁クラッチの制御プラグラムを書いた紙を見せた。確かに、いい加減な思いつきだけではなさそうだった。でも、これが事実とするならば、街中を多数走っているハイブリッドカーは、エンジンに大変な負荷を掛けながら走っていることになる。現に彼とわたしが体験した通りであった。チェーンが切れそうなほど張り詰め、ギアがぎいぎいと悲鳴を上げたのだ。

でも、確かに発電機の効率ってそんなにいいものではない。そんな発電機で湧かした電力を、自身の動力に使おうと考える方がどうかしていると思った。

「おい」

わたしは、もう、いい加減、本業に取り掛かる時間が来たと思い、彼に引導を渡した。

「ああ」

彼も何となくではあるが、分かっている様に思えてきた。

「発電するのは下り坂だけにしとかないかんかもな」

「そうかも知れん」

やっと彼も得心が行った様だった。しかし、このアイディアをボツにする気もなさそうだった。

「よっしゃ、また、プログラムを書き換えてみるわ。夜中にバッテリーを外さんでもええ電動アシスト自転車が出来たらきっと売れると思う」

やっぱりまだ懲りていない様子だった。

「自転車は持って帰ってくれよ」

わたしは、そのまま手ぶらで帰ろうとする彼に声を掛けた。

「ああ、今日はどうもありがとう。つきあわせてしもて」

「いいえ、どういたしまして」

彼は、ギアをぎいぎい鳴らしながら、その自転車に乗って帰って行った。了

完璧なイミテーション

完璧なイミテーション

「次はこれお願いします」

店長が、綺麗な紙箱に入った腕時計をバックヤードに持ち込んできた。高級時計ブランドのラレックスだった。

「ラレックスですね」

「ええ。お客様がお急ぎの様なので、優先で見てもらえますか？」

「わかりました」

わたしは、ブランド時計買取ショップの査定士をしていた。客が持ち込んで来た品物の年式や状態から買い取り価格を算出するのが主な仕事だった。この店に来てから、もう十年ほどが経過していた。すっかり慣れきった状態だ。

わたしは、ラレックスを箱から取り出すと、目の前の台に掛け、左目に時計用ルーペをはさみ、ベゼルからしげしげと見つめた。

ラレックス・クロノグラフ・デイトン、７８年式だった。クロノグラフ（ストップウォッチ）機能のついた高級機種だった。黒の文字盤が光り輝き、数字の書き込まれたベゼルは威圧感を辺りに放出しているかの様だ。特に７８年式は程度のいいモノはあまり出回っておらず、コレクターの間では高値で取引されていた。わたしは時計に息が掛からないよう気をつけてため息をついた。ベゼルに刻まれた速度計時用の時速４００キロを示す数字から零時位置の時速６０キロまで印字は綺麗についていた。これだけ古い年式にしては、傷も少なく状態は上の上といえる。

わたしは、機械《ムーブメント》の具合を確かめるべくリューズのロックを軽く回して外し、右手の人差し指と親指でつまんで巻き上げた。ジーッ、ジーッと言う軽い音を立てた。調子は絶好で寸分の狂いも感じられなかった。この年式のこの状態だと最高で百二十万の値がつけられるかも知れない。

そう思った瞬間、わたしの脳裏に嫌な記憶が甦った。

あれは十年前。わたしが、この仕事に就いたばかりの時だった。

新人だったわたしの元に、一個の綺麗な腕時計が持ち込まれた。

「これ、ラレックス。急いでくれるか？」

店長はわたしに、指示した。その当時のわたしは、仕事を早く覚え、効率よく、手際よくこなしていくのに必死だった。

「かしこまり、です。サブマリーンですね」

ラレックスのサブマリーンは水深三百メートル防水機能を持たせた潜水用ダイバーウォッチで、スポーツタイプを好むコレクターにも、そして、それ以外の顧客にも人気のモデルだった。わたしがこの職業に就く前からその存在は知っており、自分でも一台欲しいなあと思い、中古ブランドショップで買える値段の物を探し回ったことさえあった。

製造番号を調べるまでもなく、２００１年型で、当時売り出されてすぐのモデルだった。ベゼルとケースに数ヶ月間だろうか、使用感のある小傷があるのに気付いた。だが、このモデルの人気と最新モデルという点において、大きく買い取り価格を下げる要素ではないと思った。

最新モデルの特徴である、文字盤上のせり上がり部分の王冠模様の刻印といい、ベルトのバックルのしっかりした作りといい、わたし自身、お金があれば欲しいと思ったほどだ。

当時、仕事は一人単独で行っているのではなかった。

高額な商品の査定である。新人査定士一人に任せきりにするほど、ショップは甘いところではない。当然、この道十年以上の先輩査定士が監督でついていた。わたしは、最初

のうち、持ち込まれる腕時計全部を、その先輩の元に持って行っていた。ホメガ、ブライトニング、タグ・オイヤーなどなど。そして、数ヶ月経たないうちに、わたしの査定と先輩の出した結論とはそう違わなくなってきて……慣れというのは恐ろしい。わたしは、段々と、自分の仕事なのに先輩の手を煩わせて申し訳ないという気さえ起こって来始めた。

「慣れても、一年間は、俺の所に持ってこい。ええな？」

先輩は、そう、念を押してくれてさえいた。

なのに、とうとう、わたしは、禁を犯した。

査定待ちの、腕時計を一〇個も机の上に並べ、忙しそうに作業している先輩に、「これを見ていただけますか？」と、声を掛けるのが難しくなったのだ。それに、誰が見ても、最新式のラレックス・サブマリーンの程度上等のモノだった。もう、先輩に頼らなくても大丈夫だ。そう、わたしの心の中の悪魔はつぶやいた。

わたしは、先輩の査定を経ずに、三十五万の金額を伝票に書き込み、買取ブースにいた店長に伝えた。

「お、早いな。大丈夫かいな？」

「大丈夫ですよ。やだなあ」

「信用しとくで」

「はい」

結果は散々だった。

先輩はお客から買い取ったばかりのラレックス・サブマリーンを手に取り、リューズを巻き上げ、耳に当て音を聞き取ると即座に結論を下した。わたしにとり、衝撃の結果だった。

「これ、偽モンや。機械が正規品とちゃうで。ケースはよう出来とるが」

「は？」

「製造番号も入っとらんやろう。見てみ？」

わたしは、そう言われ、裏蓋を見かけてやめた。このラレックスは普通の時計と異なり、裏蓋に製造番号は入っていなかったのだ。時計バンドを外した十二時の箇所に型式番号、六時の位置に製造番号が入っている。わたしがバネ棒外しで、時計のケースに傷をつけない様に気をつけてバンドを外したところ、先輩の指摘通り、その位置に製造番号が入っていなかった。

「あ！」

「よう出来とるけど、偽物や。Ａクラスといった所やろうな。多分、アジアの工場で作られたんやろう。昔は粗雑な作りやったけど、最近のＡクラスは素人には見分けがつかんやろうな。嘆かわしいことやが」

わたしは、偽物、という言葉に足元からふるえが来た。アジア製の偽物なら、千円もしないだろうし、いや、千円もしないどころか、当局に見つかった時点で廃棄処分される代物だ。わたしは、最前、あれに三十五万円の査定価格をつけたばかりだった。

――やっぱり、忙しくしてても先輩に見せるべきだった。

わたしは激しく後悔の念に囚《とら》われた。

その時以来、わたしは自分の仕事に厳しくなったのだ。どんなに、急かされても、仕事が溜まっても決して査定時間を縮めたり、勝手に簡略化したりしない様になった。製造番号の刻印や、いや、最近では内部に至るまで本物そっくりの刻印までがなされた「スーパーＳクラス」の偽物すら出回っているのだ。わたしの審美眼は究極にまで高められ、注意度は最高になっていた。

「早くしてくださいよ」

店長がラレックス・クロノグラフ・デイトンの査定の催促にやって来た。

「ちょっと……あと十分待ってもらってもいいですか？　ちょっと気になるんです」

通常、アンティークモデルとされる７８年型には、Ｓクラスは存在しないと言われている。あっても、粗雑な作りのＡクラス、Ｂクラスの偽物だ。それは年式感を再現しづらいのと、古い型式だけに、それほど高価な儲けにはならないという事情もあってのことだ。しかし、７８年式だけは別だった。球数が少ないこともあり高額取引が行われている。アジアの偽物メーカーにとっては作る価値が十分にあるということだった。

わたしは、急かす店長を尻目に、ゆったりとした動作でバネ棒を外し、時計バンドを取り外した。そこにある刻印を確かめると確かにラレックスの製品だった。７８年型というのも間違いなさそうだった。――本物と判断してもよさそうだ。そう思える状況証拠は揃っている。しかし、製造番号の刻印すらコピーしている「スーパーＳクラス」の存在が頭から離れなかった。もし、わたしが査定を間違えれば、ショップに間違いなく百二十万の損害を与えることになる。それを考えると.....わたしの第六感は警鐘を鳴らし続けた。

またも、わたしは時計のリューズを巻き上げ、耳に当ててその動作音を聞いた。

いつものユーザーに訴えかけるかの様なあのラレックス特有の機械音が感じられなかった。少なくともわたしには、だ。しかし、これだけでは偽物と断定しうる要素にはなり得なかった。品物を持ち込んだお客に対し、「これは偽物です。当店では買い取り出来かねます」と宣言するのだ。それはそれなりに証拠が要った。

――どうする？

機械に違和感を感じる以上、機械を見てみる必要があった。裏蓋を開けてみないといけない。

しかし、買い取り前の品物をお客の承諾なしに裏蓋を開けるなど、普通は出来ないことだった。分解である。

わたしは、時計用万力《バイス》にラレックスを固定し、裏蓋開け《オープナー》で、裏蓋をこじ開けた。何回も見慣れたラレックスの機械が目に飛び込んできた。そこにはラレックスと、スイス製時計を示すジュネーブシールが刻印されていた。まるっきり本物だった。

「早くして下さい！」

店長が急かしに来た。分解してしまった時計の機械の偽物だという確証が得られない今、わたしは負けを覚悟した。完璧な偽物《イミテーション》だ。そして、伝票に百二十万の査定額を書き入れた。了

晴耕雨読

晴耕雨読

わたしはかつて、現役をリタイアしたら田舎に引っ越そうと考えていた。
しかし、それは具体的なものではなく、いや、具体的ではあった。一反ばかりの畑か田んぼのついた古民家を借り、自分で食べるのに必要な米・麦、野菜を自分自身の力で作ろうと考えていた。晴耕雨読の生活だ。夢は膨らむ。余った作物は農協の直販所へ持って行き、そこにも出荷できないものは知り合いに分けるのだ。ちなみに一反の田んぼというのは一年間の暮らしに必要な米を生産するのに必要な面積だという。一反は三百坪、約九九一・七平方メートルだ。都会の不動産の感覚では結構広い面積である。が、農業経営的には大したことないらしい。

わたしはインターネットで、地方への移住者募集の案内を探してみた。近頃、何カ所かの村々で、町の地域振興課や農協がタイアップして若い人の定住推進を目的とした募集事業をやっていた。

週末に見学会があるというので、ものは試しと、申し込んでみた。
日曜日の朝、わたしはクルマで二時間ばかり掛け、とある地方の町役場へとおもむいた。妻は興味半分で、わたしの案に乗るでもなく、また、反対するでもなくと言った態度を貫いていた。道すがら、助手席の彼女はわたしに缶コーヒーを勧めた。
「ねえ、本当に田舎に移住する気なの？」
「何だ、不満なのか？」
「そういう訳じゃないけど……田舎って、近所づきあいが難しいって言うじゃない？ あたし達に出来ると思うの？」
「ああ……」
確かに、そういう点で考えたことはなかった。今までだって地元自治会の集まりに参加することだって億劫と言えば億劫だったのだ。何年かに一度、必ず回ってくる幹事や理事の役割に関しては、わたしは名前だけで、仕事を理由にして面倒な仕事は全部、妻に任せきりになっていた。でも、田舎暮らしが始まればそうもいかないだろう。
地区の集まりに壮年会、婦人会、お寺の集まり、消防団、……。考えつくだけでも一杯あった。そういった集まりが農作業の合間にしょっちゅうあり、都会からの田舎への移

住者への足枷となっているといっても過言ではなかった。それに、プライバシーのなさでも色々問題があるといえばありそうだった。わたしは、どちらかというと、自分の世界を守りたいタイプの人間だった。こんなタイプにはあんまり田舎の農業ライフは向かないかも知れないなと、ハンドルを握りながら漫然と考えた。

やがて町役場に到着した。日曜日にもかかわらず出勤している地域振興課の職員が出迎えてくれた。他に客はいない様だった。
「山田さんですね？ お待ちしておりました」職員はそう言い、わたしに名刺を差し出した。「早速、現地を紹介しましょう」
そして、わたしたちは職員の運転で役場の軽ワゴン車に乗り込み、山合にある過疎の村に案内された。
「実は五年ほど前から、町からやって来て農業に取り組んで定住された方が居られるのですよ。後でご紹介しますね」
「そうなんですか」
わたしたち以前にこの村に定住している人がいると聞き、少し安心感が出ると共に、わたしの望む生活が、そう無謀なものではないことに太鼓判を押された、そんな気がした。

畦道の途中で職員は軽ワゴン車を停め、そこからは歩きになった。
「ここらは田ノ中地区というのですが、全盛期の昭和三十年代には二百人も人口があったのです。しかし、今では十世帯、人口十二人の限界集落と化しています」
「それはやりがいがありそうですねえ」
わたしは強がりな台詞を口にした。妻は何を言うのかとわたしを軽くにらみつけた。

そこで、職員から町の事情を聞いていると、一人の男が通りかかった、青い作業服に長靴姿で、右手には長い木の棒、左手に何かが入っていそうな麻袋を持っていた。木の棒には先端に丸い形の金具がついていた。わたしは、何に使うものなのか想像もつかなくて、その男の手元に視線を固めた。
「ああ、ちょうどいいです。紹介しましょう。五年前から田ノ中地区で農業を営み、定住されている中田さんです」
「中田です。よろしくお願いします」
紹介された男は礼儀正しく挨拶した。都会慣れしている風で、この地区の訛りは感じられなかった。わたしは少し安心度を高めた。しかし、農業をやっていると言う割に作業服には少し落ち葉がついている程度で、いわゆる泥まみれという風にはなっていなかった。
「何を作っておいでなのですか？」
わたしの素朴な疑問に、彼は直接答えず、町の職員が代わりに答えた。
「主にキウイフルーツとブルーベリーの栽培をされておいでです。ＰＣやタブレットを使って、ＩＴを活用した先鋭的な農業を営まれているのですよね」

「いやあ、そんな大したものではありません」

そして、職員は見学先を中田氏の畑に変更した。過疎のしょぼくれた田んぼを見て回るより、こっちの方がこれから農業に取り組もうとするわたしたちに役立つだろうと言うことであった。中田氏の畑はそこから八百メートルばかり離れた日当たりのよい場所にあった。大きなビニルハウスが三棟建ち、中は見えなかった。中田氏は荷物を地面に置き、大きな手でガラガラと扉を開け、わたしたちを案内してくれた。
中はキウイフルーツの木が植えられていた。ブルーベリーは隣の棟に整然と並んでいると言う。
農業というと泥臭いイメージがつきまとうが、彼に関してはそれは全く当たらなかった。ビニルハウスの床はシートで覆われ、中の気温や湿度は常に作物の生育に適したように保たれ、水やりや施肥は、土壌センサーで監視され、それはＰＣやタブレットを通してインターネットにつながり、東京にある農業コンサルタント会社によって、常に最適管理されているということだった。
「じゃあ、素人でも作物を作ることが出来るのですか？」
「いやあ、これだけだとまだ不十分ですよ。植物の生育は確かに最適化されていますが、実際の収穫となると、果実の見た目や味が重要となってきます。それには、どれだけ植物に愛情を注げるかに掛かってきます」
「なるほど、やっぱりそんなものなのですね」
彼は木になっているキウイを一個手でもぎ取り、わたしに手渡した。
「そのまま齧れます。甘いですよ」
わたしは、言われるままに齧った。甘酸っぱい果汁がわたしの口の中に広がった。中田氏は妻と職員にも食べるよう進めた。

ハウスを後にして、わたしたちは職員に案内され、古民家へ行った。
茅葺きの木造住宅だった。入り口を開けると大きな土間があり、その横は居間となっていた。日本間である。奥にも日本間が二部屋あり、土間の反対側が昔風の台所となっていた。
「いい感じですね」
わたしは、職員に感想をもらすと、彼も満足そうに頷いた。
「建って百五十年ほどになりますが、手を入れればまだまだ使えます。放っておけばこのまま朽ち果ててしまうので、誰かに使ってもらわなければ……もったいないですよね」
「そんなに古いのですか？ はあ……」
わたしは、年季の入った天井梁の太い柱を見上げた。長年のすすで黒くなり、見た目では五十年になるのか百年になるのかすら、見分けはつかなかった。確かに、ふすまや土壁など手を入れなければならない箇所は相当ありそうだった。風呂や水道の水回りもやり替えが必要だろう。晴耕雨読も大変そうだった。
「村には光回線が通ったのですよ。だから、インターネット環境には適しています。どうか前向きに検討下さい」

「そうですね」
わたしは、職員の言葉に前向きな返事をした。
突如、庭先から妻の叫び声が聞こえた。
わたしが走って見に行くと、そこには、長さ四十センチはあろうかと言うほどの蝮がいた。チロチロと舌を出し入れし、冷たい目でこちらを凝視していた。蝮特有の銭形模様の茶色い胴体が独特の威圧感を醸し出していた。
悲鳴を聞きつけた職員が出て来て、先端に金具のついた木の棒で器用に蝮の鎌首を押さえつけ、くるりと巻き取ると麻袋に入れてしまった。
「いやあ、この季節、蝮はよく出るのですよ」
彼は慣れた口調でそう言った。よくよく見るとさっき中田氏が持っていたのと同じタイプの木の棒だった。常備品になるほどよく出るということなのだろう。
しかし、わたしの背中には冷たい汗でビッショリとなっていた。何せ都会暮らしに慣れていて、蝮の処置などしたことがなかったのだ。
「ねえ、あなた。どうするの？」
「あ、ああ……」
帰りのクルマの中でわたしたちは少しく話し合ったが、すぐに無口になった。晴耕雨読の生活に魅力は感じたものの、大自然の力の前にあえなく自信は崩れ去りつつあった。
しかし、そんな中、ハンドルを握りしめながら、わたしはあのビニルハウスと古民家に思いを馳せていた。了

交差点

交差点

うららかな天気が続いた三月末日。わたしは朝五時に起き、旅の支度をしてクルマに乗り込んだ。今日は広島まで向かう長距離ドライブとなる予定だった。シートにどっかりと座り、普段はズボンの尻ポケットに入れている財布やハンカチも別の場所へ移しておく。長時間、お尻に異物があると座る姿勢が悪くなり、知らず知らずのうちに疲れの元となるためだ。
そして、シートベルトを着用し、エンジンを掛けた。ガソリンエンジンの軽快な音が車内に響き、すぐに静かになった。
――ピー、ピー！ ＥＴＣカードが挿入されていません。
賑やかしい電子音声が鳴り響いた。
わたしは、さっきしまった財布の中からＥＴＣカードを取り出し、機械の中に差し込んだ。

「さて……」
わたしは出発しようとした。
「待って！」
家の中から母が出て来てわたしを呼び止めた。手に何かを持っていた。紙バッグに入れたサンドイッチと紅茶の入ったボトルだった。
「途中で食べて。それから疲れたらちゃんと休むこと。いいわね」
「はいはい。……ありがとう」
「じゃ」

わたしはクルマのギアをドライブに入れて、アクセルを踏み込んだ。まだ朝早かった。ご近所の迷惑にならないよう音を立てずにそっと大通りに出た。街を出ると県道を通ってすぐに山陽自動車道のインターチェンジを目指して走った。神戸から広島までおよそ三時間半。ゆっくり走って四時間のドライブになる予定だ。
特段、急ぎの旅でもなかった。
三木東インターチェンジから高速に乗ると、時間的に空いているのだろう、比較的飛ばしているクルマが多く見受けられた。わたしは法定速度の百キロをキープし、左側の走行車線の流れに乗った。

エンジン音と、道路の継ぎ目に差し掛かったときにタイヤを通して入ってくる、がくん、がくんという音と、ざーっというロードノイズ。わたしの耳に入ってくる音はそれが全てだった。ラジオは聴かない。聴いていても、県境を越える頃には電波が届かなくなるためだ。もちろん、その地方地方でやっている番組もあり、それはそれで楽しめるのだが、今日はそんな気分ではなかったし、一々チューニングを合わせるのも面倒だった。
一時間おきにサービスエリアで休憩を取った。このサービスエリアでのひとときって結構楽しめる。各地方の名産品が売られているし、同じような少し疲れた感じのドライバーたちの憩いの場となっているのだ。名物に旨いものなし、と言っていた人もいるが、わたしはそんなことないと思っている。やっぱり、そこに行かなければ食べられない名物があるものだ。
一休みして県境を越えた頃だろうか？ 右側追い越し車線を猛烈な勢いでドイツ車が走り抜けた。――おいおい大丈夫か？ わたしは、他人事ながら心配した。パトカーに捕まるのもさることながら、事故を起こしたら大変なことになる。高速道路で怖く感じるくらい猛烈な速度って、実際に猛烈な速度である。何しろ遅い方の走行車線でも八十キロから百キロは出ているのだ。追い越し車線でその二割増し、さらにそこでも怖いくらいのスピードとなるともう、事故を起こしたら跡形もなく壊れてしまうだろう。
しばらく走っていると、前方が渋滞で止まってしまった。
「あれ？」
わたしは、ラジオをつけ道路情報にチャンネルを合わせた。文字通り渋滞が起こっていることを告げていた。
そして、ちっとも動かなくなった。
左脇の路側帯の狭いスペースを救急車とパトカーが数台走り抜けて行った。
「事故か……」
もしかしたらと頭をよぎったのはさっきの猛スピードのクルマだった。あのスピードで事故を起こせば、車体はくしゃくしゃの鉄くずと化し、人体も軽く引きちぎれてしまうだろう。救急車が数台と言うことはけが人が複数であるということを意味していた。
幸いと言っていいのかどうかわからないが、渋滞の末尾は次のインターチェンジのすぐ手前だった。わたしは、路側帯を走り、そこで高速道を下りることにした。
インターチェンジから一般道をしばらく走ると、瀬戸内を平行して走っている国道二号線に行き当たった。わたしはここで右折し、国道を走ることにした。
しかし、国道は高速から下りて来たクルマで混み合っていた。急な事故でそのまま高速を走るか、あるいは……という選択をした人ばかりである。要するに土地勘のない人が多いようで交差点ごとに団子状態になり、混雑は極まっていた。
もう、信号が赤から青に変わっても少しも動かない状態が続いた。わたしは、しびれを切らし、(急ぐ旅でもなかったのに) ハンドルを目的もないまま左に切った。国道と並行して空いている道を探すのだ。それしか考えつくことはなかった。
しかし、こういうシチュエーションでは皆も同じことを考えているのか、脇道ですら混雑の度合いは高まっていた。しかも、普段は交通量の少ない道と見えて、キャパシティ不足なのか、クルマであふれかえり動けない交差点が多かった。わたしは、混雑の感じられる道をことごとくパスして、海の方角を目指した。

やがて、埋め立て地にたどり着いた。
広大な工業用地のど真ん中を太い道路が一本貫通していた。
「これだ！」
わたしは心の中で喝采を挙げた。この道を走ることにし、ハンドルを切った。
そして、延々と長い道を走り続けた。どこまでも続いていた。果たしてこの道路でいいのだろうか？ この先通行止めではないだろうか？ また、国道に合流できるのだろうか？ 言われもせず、心の中で問い続けた。
遙か彼方は地平線まで見える広大な埋め立て地だった。本来なら工場群が立つのだろう。しかし、まだ立っていないのか、あるいは、その予定もないまま埋め立てだけ行われ、放置されてしまったのだろうか。だとしたらゴーストタウンだ。止めどもなく不安感に襲われた。
ふと、気がつくと一個の信号機が目に入った。赤信号だ。わたしはブレーキをゆっくり踏み込みクルマを停車させた。ここまで止まることなくだいぶんの長い距離を走り続けていたことに気付いた。辺りを見渡すと信号機以外何もなかった。
――なぜ、こんな所に信号があるのだろう？
わたしは素朴な疑問に襲われた。大抵、交通量が多く、自主的な譲り合いに頼っていたのでは渋滞を免れない場合か、あるいは、交通事故が多発しているか、そういった理由が必ずあるものだ。この場所については、見通しはいいし、他に走っているクルマもいなさそうだし、わたしには思いつかなかった。
それにしても、長い信号だった。三分経っても変わらなかった。他に後続車もなかったし、交差点を横切るクルマも一台もなかった。わたしはハンドルをつかむ指をカチカチならし、手持ち無沙汰にギアをドライブに入れたりニュートラルに入れたりを繰り返した。
――もしかして検知式信号だろうか？
わたしは、窓を開けて信号機から検知器が伸びていないか確認した。よく、検知範囲外に停車したがために検知されず、いつまでも信号が変わらないということもあったものだった。しかし、どうみても検知器の類もなくその手の信号機ではなさそうだ。押しボタン式だろうか？ わたしは、ドアを開けて外に出て、信号機の所に駆け寄ってみた。これも、付いていなかった。一体どうなっているのか、高速道路では事故渋滞に巻き込まれ、迂回しようとした国道でも渋滞に巻き込まれ、やっと、たどり着いた地元の道ではこんな訳のわからない信号機に行く手を阻まれている。特段急ぐ必要のない旅ではあったものの、今日一日まるまる掛けていいということではなかった。
――いっそ、赤信号を無視して行ってしまおうか。誰も通っていないし、誰も見ていない。このまま何食わぬ顔で通過してしまえばいいではないか。わたしの心の中の悪魔がそう囁いた。
わたしは決心を固め、クルマに乗り込み、辺りを何遍も見回してからアクセルをゆっくりと踏み込み、前進させた。
そろりそろりと交差点を横切った。側方に見える信号は青になっている。信号無視の現行犯だった。
そして、その場は切り抜け、また再び快適なドライブになった。
しばらく行くとこんな場所なのに道の駅があった。トイレと自販機と土産物の売り場が

あるだけの簡素な道の駅だった。
わたしはトイレをすませてから、売り場のおばあちゃんにさっきの交差点のことを尋ねた。
「あれはねえ……壊れているんじゃないんですよ。山手の方に工場があってね。埋め立て地が出来るまでは海岸縁 (べり) だったの。奥地になってからは、船みたいな大きな製品をトレーラーでゆっくり、ゆっくり運ぶようになったの。それであの信号は三十分以上青のままなの。もしかして無視したの？」
「いやあ」
わたしは左手で頭を掻いた。無視したとも言えず、それでいて、他人の居間に土足で踏み込んだ様な居心地の悪さを味わった。了

乳歯

乳歯

トメ子は農家に嫁いで四十年になる。都会生まれ、都会育ちで最初のうち、田舎暮らしに慣れなかったが、優しい夫と、三人の男の子に恵まれ、今ではすっかりいいおばあさんになっている。姑はきつい人だったけれど、夫がいつもかばってくれたのでそれほど不満はなく、五年前に見送ってからは、もうなんのわだかまりも残っていない。
その息子たちもすでにそれぞれ結婚して独立し、長男が農家の跡継ぎとして主な農作業を行っていた。トメ子としては、孫のお守りをしながら、長男の手作業に口出しするだけが生きがいとなっている。
身体は丈夫で至って健康だ。
六十五歳の誕生日を迎えて、お祝いに夫と町にお寿司を食べに行くことにした。
「わあ、お父ちゃん。二人で食べに行くなんて何年ぶりかしら」
トメ子は年甲斐もなくはしゃいだ。
「なに言うてんねん。先月も食べに行ったやないか」
夫はぶっきらぼうに答えた。口は悪いが、本心ではない。彼も町にお食事に出るのを内心楽しみにしているのは、もう、何年も付き合っているのだからよくわかっていた。

「いらっしゃい！」
寿司屋の店主が威勢よく出迎えてくれた。やっぱり、お寿司は威勢がよくなくてはならない。トメ子と夫はカウンターに隣り合わせに座った。
メニューを見て、おまかせコースを注文した。今日入った寿司ネタを厳選した十貫を店主が選んで出してくれる、ちょっと高いけど、ほんの少しだけ贅沢感を味わえるランチメニューだった。お吸い物までついている。

食べる端から、店主が次々と握っては置いてくれる。トメ子はそれを箸でつまんで口に放り込み、味わうように咀嚼した。
しかし、何だか、奥歯に違和感があった。何だかぐらつくような感じがして、よく噛めないのだ。特に歯ごたえのあるタコやハマチなどが食べられそうになく、夫の方に回した。それでホタテやトロ、ウニなどの柔らかいものばかり、それも夫の方の皿に手を伸ばしてまで食べた。

「おい。好き嫌いするなや」
夫がぼそりと咎めた。
「ええやん。たまのことやし」
トメ子は口答えしたものの、明らかにおかしい自分の奥歯に内心狼狽していた。――もしかしたら抜けるのではないか？ そんなそこはかとない恐怖心に囚われた。一度、そう思ってしまうと、もう、歯ごたえのあるもの、堅いものは食べられない。
でも、農作業の忙しい時間を縫って、歯医者にはずっと通っていた。「はちまるにまる運動」なるポスターが貼られている。八十歳になっても自分の歯を二十本は残そうという歯の衛生活動である。歯石や歯垢のクリーニングを定期的に行い、健康な歯茎を維持し、虫歯も予防する。そうして、年を取っても入れ歯にせず、自分の歯で生活の質（ＱＯＬ）を保つのだ。

この翌日、トメ子は急いで歯科医の予約を取った。
歯科医はトメ子を診察台に乗せ、口の中を見るなり、開口一番こう言った。
「あー、腫れてますね。もう駄目ですね」
「えー、嘘でしょう？ 毎月、歯のクリーニングに来ていたんですよ」
トメ子は口を開けたまま抗議した。
「そんなこと言っても……どうです？ 痛くないですか？」
歯科医は器具の先で奥歯の先端をちょんちょんとつついた。歯茎にずきりと響き、痛みが染みこんだ。トメ子の目から涙がこぼれそうになった。それほど痛かった。
「痛いです。……あの、どうなるんですか？」
「このまま抗生物質を打って、しばらく様子をご覧になるか、いっそこの機会ですから抜いておしまいになられるかですね」
彼はそう言い、マスク越しににやりと笑みをこぼした。
「様子をみます」
トメ子にはどうしても自分の歯を抜くという決心がつかなかった。

しかし、その日から、難儀した。奥歯に力が入らないから、噛みしめることが出来なくなったのだ。堅いものは勿論のこと、普段の生活でも力を入れるときにどうしても、歯を食いしばるシチュエーションってあるものである。そういうときに、力が入らなくなってしまったのだ。
食事も、歯が痛いので、パンをミルクに浸して口の中で舌でこねてから呑み込むか、粥をすするだけになった。急に痩せてしまい、友人から「おばあさんみたい」と言われてしまった。自分より年上の友人だけに言われたのがショックだった。
そして、ついに抜く決心をした。――どうせ、奥歯の二本か三本だ。外から見えはしない。

歯科医院ではまずレントゲンを撮られた。
「おや？」

歯科医は怪訝そうな顔でフィルムを蛍光灯に透かしてみた後、プロジェクターに掛けた。
「奥歯の下に、新たな歯が生えて来ていますね。奥さん、親知らずは？」
「はい、若いときに抜いたことがあります」
「ふうむ」
歯科医は考え込んだ。まるで珍しいものでも見るような目でレントゲン写真を吟味し、そして結果を告げた。
「医学的に断言は出来ないのですが、現に生えているものは仕方ありません」
「え？ ……何なのですか？ はっきりと仰って下さい」
「乳歯です。今の歯より小さいし、形状からいうと乳歯以外考えられません」
「ええっ？ まさか」
口ではそう言ったものの、トメ子は嬉しかった。六十五にして歯がぐらついて抜けてしまうと思ったら、新たに自分の歯が生えてきたのだ。飛び上がるほど嬉しかった。そして、ぎゅっと口を結んだ。
結局、今ある歯は、このまま置いておくと次に生える歯の邪魔になるというので、抜くことにし、その場で抜いてもらった。
「くちゅくちゅ、ぺっ」と、消毒薬で口をすすいでいると、歯科医が念のためと言ってさっきのレントゲン写真と診断書をくれた。もし、何かあったら、町の病院の口腔外科にかかるよう言われた。もはや、そんなことはどうでもよくなっていた。

しばらくの間、歯がないのは不便だった。
奥歯を二本抜いたのだ。ものをかみ切ることは前歯で出来たが、咀嚼しこなすことは奥歯が必要だ。トメ子はもう一つ前にある歯で注意しながらものを噛んだ。
毎朝、顔を洗い、歯を磨くとき、口をあーん、と開けて奥歯の位置をのぞき込んだ。乳歯は日に日に大きく育ってきた。
「早く大きくなあれ」
トメ子は鏡の中の自分の乳歯に向かって言葉を掛けた。毎日毎日。

やがて、三ヶ月ほどが経ち、乳歯は普通の大きさに育ってきた。でも、やっぱり乳歯だった。横にある大きな永久歯ほどには育たず、小さい可愛い歯だった。
それでも、鏡をのぞき込む度に、口をあんぐりと開け、奥まで覗き込み、そして、にんまりと笑みをこぼす。それを見た孫娘は「おばあちゃん、なんか変なの」と笑った。どう言われようとトメ子は嬉しいことには変わりはなかった。
そして、うまくものを噛むことが出来るようになってきた。

「お父ちゃん。お寿司でも食べにいかへん？」
今度はトメ子から夫を誘った。別にお寿司でなくてもかまわない。何か歯ごたえのあるものが食べたかったのだ。
「何や？ どないかしたんか？」
「わたし、歯が生えたん」

「はあ？」
夫は不思議そうな顔でトメ子の顔をのぞき込んだ。どうやら、呆けたと思われているようだった。トメ子は自分の口をあんぐりと開け、夫に自分に生えて来た可愛らしい乳歯を見せた。夫は少しびっくりした。

あのとき、食べられなかったタコやハマチを頼んでみた。今度は何でも噛める、食べられる。いや、もっと堅いものでも平気だ。
「おいおい、大丈夫かいな？」
横に座った夫は心配そうな顔で見た。トメ子は笑顔で返した。
「お父ちゃん。大丈夫やわ。もう、何でも食べられる」

食事が終わった後、トメ子は気前よく代金を支払った。しっかり食べた後とあっては、少々高くても気分がいいものだった。以前のように歯が抜けないか気を遣いながら恐る恐る食べるのとは訳が違う。

それから、十年後。
乳歯がぐらついてきてとうとう抜けてしまった。
永久歯が生えるのかと期待半分でいたが、それだけはとうとう生えなかった。現在は、部分入れ歯の注文中である。了

イナズマ運輸

イナズマ運輸

仕事場はいつも活気に満ちあふれていた。あちこちから怒声が飛び交い、電話の呼び出し音が鳴り響き、ファックスは文書を吐き出し続け、コピー機は発送伝票を打ち出し続けた。
ここイナズマ運輸は東京、大阪、福岡を拠点に全国翌日配達を謳い文句にしたトラック輸送を生業としていた。
午後一時までに集荷した品物はその日のうちにトラックに載せられ、午後二時には出車する。そうして、その日の深夜に物流ターミナルまで運ばれる。そして、翌日にはお客様の手元に届けられるのだ。
わたしの担当の運転手がはたして法定速度を守っているかどうかなんて、はっきり言って把握したことはなかった。

そんなある日のこと。午後二時を過ぎて、わたしはホッとする思いで一服するつもりで、喫煙ルームにタバコを吸いに行こうと腰を上げた。
「主任！ お客様からお電話です」
事務の女性から声を掛けられ、くわえかけていたタバコを箱の中に戻し、自分の席に戻った。電話機の内線ボタンを押し、受話器を取った。おばあさんからだった。
「すみませんねえ。いつも」
「はい？」
「突然で悪いんだけど、お荷物、届けていただけるかしら？」
「ええと、今の時間ですと、明後日のお届けになりますが。よろしいですか？」
「北九州市に住んでいる孫にイカナゴのくぎ煮を送ってあげたいのよ。明後日から海外に行くと言っているから、どうしても明日中に届けてもらいたいの」
わたしは、無理とは思ったが、住所と名前を伺った。
「あ！」
と、思った。
昔からご贔屓にしてもらっていた佃煮店の先代の奥さんだったことに気付いたのだ。

イナズマ運輸は、昔は田中運送と言い、大手運送会社の下請けの運送会社だった。それを現在の社長が跡を継いだときに、手広く商売を広げ、自社ブランドで個別運送業を立

ち上げたのだった。もちろん、下請けから自社ブランドに急に替えたと言っても、すぐにうまく行くとは限らない。当社も売り上げ不振、赤字経営に悩まされていた。
そんな折である。この奥さんのご主人が経営している明石の佃煮店が、全国にインターネット販売を手がけることになったからと言って、当社に仕事を振ってくれたのだった。春はイカナゴのくぎ煮、その他の季節は昆布の佃煮と、牛肉のそぼろ煮など手広く商売を広げ、一年中を通じて万遍なく仕事を回してくれた。そのお陰で、業績は徐々にではあったが、そこそこ持ち直し、インターネット販売ならイナズマ運輸と信用が築かれて行ったのだった。
固定客ほどありがたいものはない。
会社経営に関わっていると、そのことは身にしみてわかるようになる。たまに、わっと仕事の依頼が来ることもあるが、そういうときに、社員を働かせるのに、増員したりはしない。固定費が上がるからだ。一時のブームが過ぎ去れば、また、元の通りの暇な体制に戻ってしまう。大事なのは少なくても毎月毎日決まった量の仕事を割り振ってくれるお客様だ。その意味で、この奥さんは大事な顧客だった。
しかし、その佃煮店の経営はすでに息子さんの代に引き継がれていて、今も当社の大事な顧客の一つとなっているものの、奥さん自体に実権はなかった。所長はこの仕事を引き受けるだろうか？ そのことがひとつ気がかりだった。わたしは、イナズマ運輸発足当時からの営業社員だったから、この奥さんに対する恩義は忘れろと言われても忘れるものではなかったが、今の営業所長は当時の我が社の苦境など知らない世代だった。

「かしこまりました。明石から荷物を受け渡しで、明日中に北九州市ですね。伝票は用意いたしましょうか？」
わたしは、独断で配達の仕事を受けてしまった。所長に話せば断れと言われそうに思えたからだ。

すでに、トラックは倉庫から出車した後だった。わたしは腕時計を見て、少し迷った。行くなら自分しかいない。大型トラックは残っていなかった。壁に掛けられているキーを見て、軽トラックしかないのを見て、事務員に一言声を掛け、それを借り出した。
わたしは、使われていない軽トラックに乗り込み、エンジンを掛け、アクセルを軽くふかした。ぶおん、といううなり声を上げた。かつて、営業ドライバーとして各地を走り回っていたときの記憶が甦ってきた。まだ行けそうだ。
大阪営業所を出発し、佃煮店のある明石に向かった。時間的にはあまり余裕がない。すぐに阪神高速に乗り、一路西へと進路を取った。昼過ぎでもあり、道は比較的空いている方だったが、それでも、交通量は多かった。右車線から左車線に、また、左から右へと忙しく進路変更し、その度に、割り込まれた後続のクルマからクラクションを鳴らされた。
「ちっ」
わたしは、無視し、アクセルを踏み込む。

明石に着いたのは三時過ぎだった。
わたしは軽トラを止め、エンジンを切った。そしてドアを開け降り立ち、玄関先のインターホンを押した。
「はーい」
スピーカー越しに聞き覚えのある奥さんの声が聞こえた。先方も待ち構えていたらしく、すぐにつっかけを履き出て来てくれた。わたしは伝票を差し出し、荷物を受け取った。
「品名は？」
「イカナゴのくぎ煮と梅干し……孫娘がね、留学するの。もうわたしも年だし、会えないかも知れないかと思うと、向こうに行く前に是非とも食べてもらいたくてねえ」
「そんな、また、きっとお会いになりますよ」
「おほほ」
奥さんは笑ってごまかすように掌を目頭に当てた。

わたしは配送伝票の控えを奥さんに渡し、再び軽トラに乗り込んだ。そして、勢いよくエンジンを掛け走り出した。明日配達するためには、今日中に福岡営業所に持ち込む必要があった。高速道路を平均百キロで走破すれば何とか間に合う。わたしは頭の中のドライビングコンピューターで簡単に計算した。
明石から第二神明道路を西に進み、姫路から北上して山陽高速に乗った。そこからは、ただただ、我慢との戦いである。単調な道路が延々と何時間も続くのである。ボロの軽トラであるから、途中でエンコでもしたら元も子もない。回転数をなるべく低くして、左の走行レーンを一定速度で走り続けた。
やっぱり、軽は軽だけのことはある。一時間も一定速度で走っていると腰が痛くなってきた。途中、パーキングエリアやサービスエリアが一定距離ごとに設置されている。ドライバーが過渡に疲労しないように出来ているのだ。
わたしが岡山と広島の県境にあるサービスエリアに給油がてら入ると、同じようなトラックドライバーたちが休息を取っていた。
無料の紙コップのお茶を飲みながらドライバーたちの会話に耳を傾けていると、この先ほど行った辺りのトンネルで火災事故が発生しているという情報が飛び込んできた。
「本当ですか？」
わたしは彼らに割って入った。
「そうらしいな。俺らも消防無線で知ったところやさかい、詳しいことはわからんが」
一人はそう答えてくれた。
わたしは、次のインターチェンジで高速を下り、南下して高速と並行して走っている国道二号線に出た。瀬戸内海を左側に見て走る、のんびりした道筋だった。ドライブなら最高だろう。しかし、時間的に厳しいものがあった。わたしは十分おきに腕時計を見、そして、道路標識の案内板の示す住所地がちっとも変わらないことに苛立ちを募らせた。
誰だ、事故なんか起こすのは！ わたしは、見えない加害者に文句を言った。
二時間ばかり、国道を走り、福山市内から再び高速道路に戻った。
すでに、午後六時を回っていた。

交通量は多かった。飛ばすことも出来ず、前後、左右のクルマに囲まれて流れに乗らされる形でじいっとペースを守り走り続けた。
広島市を過ぎ、そして、今度は山間部に差し掛かった。上り坂では軽トラのエンジンがうなり声を上げ、下り坂ではブレーキが悲鳴を上げた。
そうして、山口県を過ぎ、下関を抜けると関門海峡をくぐり九州にたどり着いた。
イナズマ運輸の福岡支店にたどり着いたのは明日配送される荷物の仕分け作業が行われている、十二時過ぎ、まさにまっただ中だった。
「すみません。遅くなって。これもお願いします。明日の午前中必着で届けて下さい」
わたしは、担当者に何度も頭を下げ、頼み込んだ。
仮眠を取った後、翌日、大阪営業所に帰着すると、所長が渋い顔で呼び止めた。
「お前、どこ行っとったんや。まさか、荷物一つのために走り回ったんと違うやろうな？」
「一つです」
「ああん？ 何を運んだんや？」
「イナズマ運輸の信用です」
わたしは胸を張ってそう答えた。所長は伝票の控えをちらりと見て、それ以上の追求はしなかった。了

健康の価値

健康の価値

「こんにちは、ごめん下さい」
トメ子が家の離れで農産物の仕分け作業をしていると、玄関先で来客があった。インターホンもあるのだが、作業中は台所にはいないので、役に立っていない。ほとんどの客は、昼間作業をしている離れに直にやってくるのだ。
「はいはい」
トメ子は作業の手を休めて立ち上がった。ガラガラと音を立てるアルミサッシの引き戸を開けると、紺の背広姿のセールスマンと思しき男が立っていた。
「奥さんでいらっしゃいますか？」
「ええ、そうですよ」
「健康についてご関心はおありですか？ 是非とも説明を聞いていただきたいのです」
と、男は喋り始めた。この手のセールスは相手に隙を与えないことに特徴がある。反撃させないのだ。最初から徹頭徹尾喋り倒し、そして、詳細説明に引き釣り込もうとする。

男は「健康の価値」についての説明を始めた。

トメ子は町の生まれで高校を卒業してから、デパートの食品売り場に就職し、二十二歳の時に見合いで今の夫と出会い、農家に嫁いだ。もう、四十年ほど前のことである。今ではすっかり農家の主婦であった。でも、「健康の価値」については、ＯＬ時代に、どこかで聞いたことがあった。でも、あのときは健康の価値なんて少しも考えなかった。若さと健康は無尽蔵だった。いくら遅くまで遊んでもバテることもなかったし、いくら無茶をしても次の朝、ケロリとして何ともなかったのだ。「健康」なんかにお金と手間を掛けるなんて馬鹿馬鹿しい。そんなことを考える暇があったら、新しい遊びに興じてみる方がよっぽどよかった。当時、というか、実際、老いを感じるつい最近になるまで、自身の健康についてなど考えることもしなかった。
そんなときである。

職場で遅い昼休みを取っているとき、出入りの保険のおばさんがやって来て、熱心に終身保険を勧めてくれたのだ。何故か彼女たちは、トメ子たちの職場のスケジュールを正確に把握していて、いくら変則的なシフトを組んで、不規則な昼食となっても、必ず、食事を終えて一休みというタイミングで姿を現わした。

「ねえ、トメ子ちゃん。今入っておくと、ものすごくお得なのよ。年を取ったらそれこそもう入れないわ」
「でも……特に健康に問題もないし、病気にも掛かったことないし」
「だめだめ。そんな考えじゃ。病気になってからでは遅いの。健康な内に入っておかないと」
「健康な内ねえ……」
おばさんは大きな鞄の中からパンフレットと見積書を取り出し、トメ子に薦めた。
いわゆる、医療保険である。月々掛け金を払い込んでおいて、病気や怪我のときに一時金を受け取れる仕組みの保険である。その時は何とも思っていなかったが、若い健康なときに加入しておくと、月々の掛け金が格段に安いのだ。もちろん、六十歳までかけ続けるので長い目で見れば、結構な金額を払い込むことになり、もし、病気にもならなければはっきり言って無駄な出費である。
トメ子は逡巡した。
そしておばさんのあまりの押しの強さに根負けした形で加入した。

「健康の価値かあ……」
トメ子の口から独り言が漏れた。確かに、病気や怪我でもして入院しなければ全くの損である。いや、入院なんて考えるだけでも嫌だった。やっぱり、元気でつつがなく暮らすのが一番いいに決まっている。しかし、長い人生、一体何が起こるのか想像もつかないのが現実である。現に若いときには頑強極まりないと思っていた夫が、六十を過ぎてから糖尿病の症状で通院を始めたのだ。
これにはびっくりだった。そして、トメ子自身、健康診断のときに、医師から「少し危ないですよ。気をつけて下さい」と言われてもいた。そして、食事をたまのごちそうで肉を出していたのを、魚すら控えめにして、菜食中心に切り替えてしまったのだ。これはこれで、味気ない。朝から晩まで農作業に従事しているのだ。朝、日が昇ると共に畑に出て刈り取りをし、午前中は草むしり、そして午後からは出荷準備と選別作業、夕方には農協と道の駅に出荷し、それから深夜までまた明日の準備に勤しんでいた。
楽しみと言えば、たまにごちそうを食べに行くことくらいである。
病気はその唯一の楽しみすらこの質素な夫婦から取り上げようとしていた。こんなのってないと思っていた。

でも、もし、入院でもすることになれば、仕事に穴が空くことにもなるし、その間、収入が減ってしまう。やっぱり、保険って大事だなあと思うわけでもあった。

「例えば……例えばですよ」
トメ子が昔のことを思い起こしている間、セールスマンは喋り続けていた。「保険に入る代わりに、掛け金を払ったと思って貯金することも考えられます」
同じことを、四十年前の保険のおばさんも言っていた記憶が甦った。彼女も保険と貯金

とを比較説明した。もし、病気に掛かったり怪我に遭わなければ、貯金の方が遙かにお得だと。満期になれば、積み立てた元金に上乗せしてさらに利子も受け取れる。そして、当時は貯金の利子は今より遙かによく、十パーセントを上回っていた。十年預ければ元金が二倍になって返ってくる計算だ。
保険だと、悪くて掛け金が無駄になる掛け捨て型か、よくても満期時に一定額返ってくる満期受け取り型があった。しかし、どちらにしても、当時の貯金ほどの配当は見込めるものではなかったのだ。
「でもね、トメ子ちゃん」
おばさんは強調した。「もし、もしもよ。あなたが病気になって働けなくなって収入が減ってしまったら、その時になって、ああ、やっぱり保険に入っておけばよかったと思っても遅いのよ。……そう。もし、もしものときになって初めて価値が出ると言うものよ。それが保険なの。あなたはまだ若いから実感がないかも知れないけど、おばさんだって、若いときは無茶をしたものよ。それがもう今では……」
あの当時、おばさんといえばものすごく年上、という感覚だったが、今から思えばそんな年ではなかったと思う。せいぜい、三十代後半から四十代前半と行った所だっただろう。しかし、当時はそんな年になってまで働いている女性は少数派だったし、社会全体的に年齢構成が若めだったから、ものすごく年配の女性の言うことの様に感じていた。
何せ、平均寿命だって今ほど高くはなかったと思う。定年退職は五十歳。それをすぎたらご老人。六十歳はものすごいおじいさん、おばあさんのような扱いを受けていた。

――そんなに、健康に自信がなかったのだろうか？

トメ子はふと思い起こした。
自分が四十代の頃、確かに、それまでよりは体力の衰えはあった。急いで走れば息切れするようになったし、夜寝るのが遅くなったり、それにも関わらず朝目覚めるのが早くなったり、近いところが見づらくなったり、更年期障害に悩まされたりとかいうことはあった。しかし、病院に掛かりきりになり生活に支障が出るというほどのことはなかったし、もちろん、保険のお世話になることもなかったのだ。
それに、その時に入った保険だって、一度も使わずじまいだった。
使わなければ何だかもったいない気がした。
――ブルブルブル。トメ子はその考えを振り払った。
この年になり、入院なんて考えたくもないことだった。先年、同じ年代の友人が逝ったばかりだった。入院したからと言って、また元気になり退院出来る保証はどこにもなかった。いや、むしろ、寝台車で帰ってくる可能性の方が高いだろう。

男は、ぼうっとそんなことを考えていたトメ子の前で、まだ、延々と長い説明を続けていた。
「とにかく、とにかくですよ。八十歳まで加入可能な保険なのです。是非、ご検討下さい

ませんか？」
「そうねえ。保険は今入っているのがあるのよ。それで、怪我と病気の入院保障はあるのよねえ」
「では、長寿お祝い金つきのタイプもございます。こちらは、古希、喜寿、米寿、卒寿を迎える度にボーナスが出ますよ」
やっと、前向きな説明が出て来たと思った。健康で長生き出来るならそれはそれに越したことはない。病気の説明なんかもうこりごりだっただけに少し前向きな気分になった。それに、今となっては日常のこともそうであるが、何より孫の成人式までは元気でいたい。そんな気持ちが強かった。了

ブラック電話帳

ブラック電話帳

とある昼下がり、突如、平穏を破り、電話機がけたたましく鳴り響いた。
ナンバーディスプレイにしているので、友人・知人の番号は全部登録している。それ以外の番号から掛かってきたとき、呼び出し音だけがけたたましく鳴り響くように出来ていた。
わたしは、ディスプレイを眺めて番号を確かめた。あまり見覚えのない番号だった。
ふと、電話会社から配布されている電話帳くらいの厚みのある「不審番号簿」を手に取りページを繰ってみた。これには、番号順にどこの誰の番号であるかが記されていた。以前、「オレオレ詐欺」や迷惑な勧誘業者からの電話が問題になった２０ＸＸ年に電話会社と総務省が重たい腰を上げて、作り出したのがこの「不審番号簿」であった。巷ではこう呼ぶより、「ブラック電話帳」という方が有名になっている。とにかく、不審な電話が掛かり、当局の問い合わせ窓口に通報されると、その番号が登録され、そして、二ヶ月に一度更新され、そうして、電話番号簿ほどのある分厚い「不審番号簿」に記載される仕組みであった。

現に、「オレオレ詐欺」が二度、迷惑電話に関しては十数回、この「不審番号簿」により、事前に電話に出ることなく難を逃れていた。
ただ、注文をつけるとするならば、この「不審番号簿」が余りに分厚すぎるということだった。そのくらい迷惑電話や犯罪電話が多いということの裏返しであった。

電話の呼び出し音は続いていた。

この番号はまだ「不審番号簿」には登録されていないらしく、載っていなかった。わたしは意を決して受話器を取った。
「もしもし」
「山田さまのお電話でしょうか？」
「そうですが」
「東山電子機器販売の西と申します。このたびは……」

聞いたこともないメーカーのセールスの電話だった。取り敢えず名乗ってはいるものの、本当かどうかわからない。こういうとき、一旦電話を切り、折り返し電話を掛けると言うと慌てて電話を切ったりするものだ。
しかし、このときのセールスマンの話は聞いても損はないと思われる興味深いものだった。
「お客様は、迷惑電話にお困りと言うことはございませんか？」
「ええ、よく掛かってきますよ」
――あんたの様なのがね。と、心の中でつぶやいた。
「その度に不審番号簿を繰って、迷惑業者やあるいは犯罪電話であるか、いちいち確認しているのではないですか？」
「ええ、その通りです」
「当社の製品は電話線に取り付けるだけで、迷惑電話を自動的にブロックするというものです。この装置は当社のデータベースと結ばれ、常に最新のデータで更新され、新たに掛かってくる迷惑電話を九十九パーセントブロック出来ます」
「ほう。それは素晴らしい」
そう言えば、昔、同じようなコンセプトの装置が売り出されたことがあった。最初の内はよかった様だが、そのうち、ブロックすべき電話番号がうなぎ登りに増えに増え、メモリーがいっぱいになってしまって使えなくなってしまったのだ。そして、時代は昔に返り、紙の電話帳に戻ったという経緯があった。
「何件くらい登録出来るのですかね？」
わたしは買う気もないくせに聞いてみた。
「理論上、数億件も可能ですが、データベース自体は当社サーバーに置くので、お客様の設置機器への負担はありません。ご安心下さい」
セールスマンはすらすらと説明した。

確かに便利そうだ。二ヶ月に一度の「不審番号簿」の更新もいらなくなるし、第一、この分厚い電話帳をいちいち引かなくても済むというのが魅力的だった。一度試してみようか？ そんな思いがふと頭をもたげた。
問題は利用料金だった。
「ご利用者が多いため、一ヶ月三百六十円でご提供できます」という。
微妙な価格設定だった。
しかし、もうこれで不審な電話に惑わされなくて済む、という思いがむくむくと頭をもたげた。そのくらい、迷惑電話に悩まされていたのだ。

最初、うちの電話機にナンバーディスプレイをつけたのは、いつ、掛かってくるかわからない知り合いからの電話と、迷惑電話とを明確な基準でより分けるという目的があったからだ。しかし、気がつけば、登録していない番号からひっきりなしに電話が掛かる様になり、わからないから、一旦は出る様になってしまっていた。そして、やっぱり、出るのではなかったという迷惑電話だということに気付くのだった。

そうした状況の中、一筋の光明となったのは２０ＸＸ年の「不審番号簿」の導入だった。当初は薄い冊子で明らかに「オレオレ詐欺」として使用されている番号、迷惑電話として周知されている番号のみが掲載されていて、電話の呼び出し音が鳴り響いている間の数秒間にすばやく繰って調べて、出るか出ないか決める余裕があった。
それが段々と、件数が増えてきたのだ。迷惑業者は自社の番号が「不審番号簿」に載せられるや否や、新たに電話番号を登録したり、他社から買い取ったりしてこのシステムに対抗し続けた。
「不審番号簿」制度と迷惑業者、犯罪者の番号合戦はイタチごっこの様相を呈していた。彼らは、一旦相手になると、その情報を共有しているかの様に、代わる代わる違う業者から電話が掛かってきた。彼らの中に、そうした「カモ名簿」があるかの様だった。そして、多分、うちの番号もそうした「カモ」と見なされているのだろうなと思った。

「すみません。具体的に検討したいので資料を送ってもらえませんか？」
わたしは、この業者のセールスに負けた。
「ありがとうございます。住所は……でお間違いないでしょうか？」
セールスマンはわたしの住所をすらすらと電話機越しに述べた。
――待てよ。
わたしの第六感は警鐘を鳴らしていた。なぜ、彼はうちの住所を知っているのだ。それに、そもそも、電話番号だって。本来なら厳重に守られるべき個人情報のはずだ。もしかしたら、もっと個人的な情報、例えば家族構成や収入状況などについても知っているのではないか？ だとしたら、どこから漏れたのだ。段々と疑心暗鬼に陥っていった。
元々、こうした悩みは、この高度に情報化された社会において、垣根がなくなっている類の問題である。一社に何か申し込めば、その情報、何をいくらで何個購入したかなどは他社にも漏れていくものだ。
もっと遡れば、役所だって、電話会社だって怪しいものだ。

翌日、かの誠実なセールスマンはパンフレットを送ってきた。
何機種かのカタログと共に、迷惑電話がいかに私生活に被害を及ぼしているかを説明した読み物、そして、いかにして迷惑電話だけをブロックするのか、そのシステムの説明書が楽しげなイラスト入りで入っていた。
これだけを見れば、一も二もなくこのサービスに加入していたかも知れない。しかし、ここまで、うちの情報がダダ漏れ状態になっている現況を鑑みて、一から考えをやり直した。

わたしは、電話機の着信履歴を通知・非通知と着信・着信拒否番号ごとに整理した。
何と、驚いたことに……いや、驚くには値しないだろう。気付いてはいたが、その現実に目を向けないでいただけだった。着信の九十九パーセントが迷惑電話で占められていたのだった。

考えてみれば、普段の必要な通信、ちょっとあれ買ってきてとか、駅まで迎えに来てくれだとかいう連絡は携帯電話を使用していた。固定電話を使うのは、滅多に連絡を取らない遠い親戚の類だけだったのだ。

――固定電話って本当に必要なのだろうか？ という根本的な問題に行き当たってしまった。

言い換えればこの年に数件ある遠い親戚・知り合いだけのために固定電話を引いているようなものだからだ。その上、その通信の九十九パーセントを占める迷惑電話をブロックするためだけに、通信回線を利用したシステムを導入しようとしていたのだ。愚かさもここに極まれりだった。

そして、うちに掛かってきたあの電話の正体についても考えついた。どう考えても、電話会社から漏れている以外に情報の出所が思いつかなかったのだ。過去、詐欺に引っ掛かったこともないし、アンケートなんかに応じたこともない。どう考えてもうちの住所と電話番号が知られる道理がなかった。

そして……二、三日考えた挙げ句。わたしは、固定電話の解約を申し込んだ。了

ニワトリ

ニワトリ

トメ子は農家に嫁いで四十年になる。元々は町の生まれで畑仕事などしたことがなかった。二十二歳のとき現在の夫と見合いで結婚した。最初のうち、苦労も多かったが、夫は優しい人で、何かある度にきつかった姑たちからかばってくれ、助けられた。
今では息子が農業の跡を継ぎ、トメ子たちはお手伝い程度にしている。

そして、趣味でニワトリを飼っていた。
飼うと言っても、庭で放し飼いにしているだけである。夜はイタチやアライグマなどの動物に襲われたらいけないので、お父ちゃんの作ってくれたニワトリ小屋に入れているのだが、昼間は放置だ。
トリたちはそれぞれ、ミミズをついばんだり、毛虫をつついたりして過ごしている。庭と言っても塀も門もないから、トリたちにとってはどこからどこまでが自分たちの領分かわからないだろう。時折、餌を撒いたりするときに、トメ子の姿を見かけて近づいてくるので、彼らなりに、何となくではあるが領分というのが出来上がっているかも知れない。
飼っているトリはほとんど、九分九厘がオス鳥である。
オスばかりだから、可愛いけれど、卵は産まない。もっとも、その選別は完璧ではなく、ごくまれにメスも混じっていて、この群れの中ではモテモテの存在だ。そして、庭の片隅に卵を産んでいることもたまにあった。
でも、拾って料理に使おうとかいうのは、事実上、不可能だった。
卵が新鮮ならいい。しかし、見つけた卵は、たまたま見かけただけであり、いつどのトリが産んだのかはっきりしないものばかりだった。いつ産んだのかわからないのでは料理には使えない。割ってみて腐っていた、というのではしょうがないからだ。そんな訳で、卵は農協で買うものであり、ニワトリはやっぱり完全に趣味でしかない。

トリは十数羽いて、どの子がいつ来ていつ死んだのか、それも把握していない。
養鶏農家では、大量のヒヨコのメスを選別する。その時に廃棄物となるのがオスである。通常、そのまま産業廃棄物となってしまうのであるが、その話を聞いたとき、可哀想と思い、引き取ってきたのが始まりだった。

数年前のこと。長男が正式に跡を継ぎたいと言ったとき、トメ子たちには幾ばくかの戸惑いがあった。そんなに広い田畑を持っているわけではない。今は米作りとそれを補助する野菜作りとでやっているが、長男夫婦が食べていけるだけの余力があるのかと言えば、少し不安な点があった。
しかし、彼らの意志は固く、また、長男の嫁が町役場に勤めていることもあり、兼業農家として何とかやっていけるのではないかということで話は落ち着いた。
そのとき、トメ子は、知り合いが養鶏農家をやっていることから、自分たちも庭をつぶして、そんなに大規模でなくてもよいから、養鶏でも出来ないかと思案したのだ。
そして、実際に知り合いの所に見学にも行った。

卵は物価の優等生と呼ばれている。実際、卵一個の価格は昭和三十年代からほとんど変わっていないのだ。それに対して物価は上がっているから、もうけは下がってきているそうだった。それで、独自の餌を与えたり、飼育法を考案したりして、独自ブランドを築いていかなければ、価格を上げることは出来ない。
「トメ子はん、なんぞいい方法はないかいな？」
奥さんはそう言って笑った。
ここでは、大きな飼育舎を五棟建てて、その中にケージを一杯に敷き詰め、数万羽のニワトリを飼育していた。卵一日数万個である。これでも、利益を上げるのには苦しく、もっと規模を大きくするか、出来れば先ほど話したように「独自ブランド」が欲しいと言うことであった。

「タマ子さん、餌やりや水やりはどうするん？」
トメ子は目の前に広がるケージ一杯のニワトリたちの威容に圧倒されながら、質問した。
「全部、自動よ」
「へええ」
見ているとパイプから水が一定時間おきに出て、餌も別のパイプから空気で圧送されてきていた。この設備費だけでも大変そうだ。
「それにね。最近、カラスや野鳥からの伝染病も怖いの。……ほら、鳥インフルエンザとか」
「ああ」
確かに、毎年のように季節になると新聞紙面を賑わしている話題でもあった。気付くのが遅れて周囲に感染を広げてしまえば、それだけで過失に問われるという厳しいものがあった。それで、この養鶏場ではトリ舎の空気取り入れ口にフィルターを設置し、外からカラスや野鳥が入り込んだり、糞が紛れ込んだりしないようになっているということであった。

「ふうん。大層なもんなんやね。知らんかったわ」
トメ子はそこまで深く考えたこともなかった。ただ、庭に野菜の苗を植えることの延長線上でトリの飼育を考えついただけのことだったからだ。
「こっちがヒヨコ」
「うわー」
狭く仕切られた区画にメスのヒヨコがすし詰めにされ、互いに突いたり突かれたりしながら、地面に落ちた餌をついばんでいた。密度が異様に高い以外に自然な姿はここで最後となるそうだった。
これ以降、数週間で成鳥となり、ケージに入れられ卵を産み続けるのだ。
「卵一つ取っても大変なんやね。どのくらい産み続けるのん？」
「八ヶ月くらいかなあ」
それが過ぎると卵の生産効率が落ちるのでガスで殺処分されるそうだった。
「ええ！ 八ヶ月？」
たったそれだけしか卵を生産しないのであれば、さっきのヒヨコたちへの非人道的な待遇も理解出来た。それにさっき餌をもらっていたヒヨコって……
「全部メスよ」
奥さんはそう言った。卵から孵化したあと、判別士という専門職が来て、肛門の位置を見てオスかメスかをより分けるのだそうだった。そして、オスは価値がないので、そのままより分けた手でポリバケツの中に放り込まれる。成鳥と違い、ガスも使わず、生きたまま産業廃棄物となるそうだった。
「安い卵ってこうやって出来てたんやね」
「あかんあかん。トメ子はん。感傷的になってたら、農家もそうやけど、やっていかれへんよ」
奥さんは衝撃を受けたばかりのトメ子にそんなことを言った。確かにそうである。野菜を育てるのだって、効率的に育てなければならないから、生育の悪そうな苗は小さい内に間引いて、生育のよい苗に肥料が集中するようにしているし、どんな製品でも、弱者は存在するのである。普段、余りに間引きやそうした作業に慣れてしまっていた。

「選別したメスは、この後大切に育てられるん？」
トメ子は幾ばくかの希望を込めて尋ねた。
「さっきの餌場に入れるん。その前に、突き合って傷つけ合うから、熱線トリマーでくちばしの先を焼き切るねん」
「ええ！」
トメ子がケージを見ると確かにトリたちはうわくちばしの先端を切り欠かれていた。そして、これには、無痛麻酔の類など一切ないことを告げられた。
ここまで聞いて、トメ子は庭先の一部でトリを飼おうと考えたことの余りの浅はかさに我ながらあきれ果ててしまった。
普段、スーパーで買う卵は、価格の優等生と言うだけあり、安い。でも、この安さが、もはや、工業製品並みの品質管理の下で生み出された製品であることにも思い知るに至った。

でも、自分には同じことは出来そうになかった。
生き物を殺す。自分が生きるため、食べるため、生活するためではあったものの、自ら手を下して産業廃棄物に出したり殺処分したりする勇気はちっとも湧いてこなかった。それどころか、あのヒヨコたちが可哀想でならなかった。

「ごめん。タマ子さん。わたしには出来そうにないわ」
「あはは。そんなこと最初からわかってる。だから、見せてあげたんや。ライバル企業に工場を見せるあほがおるかいな。あんたのとこでは養鶏舎の面積が足りひんわ」

彼女は最初から何もかもわかっていて、トメ子に見せたということだった。
トメ子はオスのヒヨコを何羽か、引き取ることにした。せめて寿命まで生かせておいてやりたい。そう思ってのことだった。それから数年、この「趣味」は続いている。了

抜け道

抜け道

わたしは、毎日、山間部にある住宅地から渋滞した地方幹線である県道をくぐり抜け、二時間かけて海縁にある会社に通勤していた。
途中、交通量の多い交差点を何度も通り、主要国道である２号線と２５０号線を南北に横切らなければならない。
信号機に頻繁に引っ掛かり、大きな交差点では一度で通過できず、何十分も待たされる。そしてそれを会社に着くまで何度も繰り返すのだ。
従って会社に着く頃には、くたびれてすっかり腰が痛くなり、肩も凝り、全身は疲労困憊状態だった。
当然、集中力もないし、上司には叱られっぱなしの日々が続いていた。

ある日、家を出てすぐの県道を走っているとき、民家と民家の間に、細い道があることに気付いた。たまたま、わたしは、目の前のクルマのブレーキランプに反応してストップした。信号を待っている間、この道の先をきょろきょろと見定めた。――もしかして、会社の近くまで抜けているのではなかろうかと。

「しかし、こんな所に、道なんてあったっけ？ 今まで全然気がつかなかった」

カーナビの地図でそのルートを確かめると、行き止まりではない感じがした。何となく行けそうな気がして、わたしは、おもむろにハンドルを切り、その道へ入っていった。道幅は車体のサイズぎりぎりという細さで、対向車が来たら一巻の終わりだった。もし向こうからクルマが来れば、退避スペースまで、もう、数百メートルはバックしなければならなくなるだろう。

民家の軒先をかすめながら進んでいった。よその庭先を通ったり、あるいは洗濯物がルーフとこすれ合いそうになったりした。でも、構わず徐行しつつもクルマを進めた。

そして、その道は案の定、行き止まりなんかではなく、本来進むべき国道の空いている部分と合流した。これはラッキーである。せっかく抜け道を通っても合流地点が渋滞していたのでは、また、入れてもらうのに時間と気をつかわなければならない。道が入り組んでいたので長く感じたが、実際には十数分しか経っていなかった。
その日は驚くほど早く会社に到着することが出来た。

次の日、わたしはゆっくり家を出た。もしかしたら、時間帯によっては通れなくなっているかも知れない。しかし、あの行程なら、迂回してもたかが知れている。そして、始業時間ぴったりに職場に到着することが出来た。
わたしは、達成感にあふれていた。
これほどの喜びがあっただろうか。ほんのちょっとした気まぐれから、一日のうちの朝の貴重な一時間を節約することが出来たのである。

毎日、その抜け道を通って通勤するようになった。

二時間掛かっていたのが四十分で着くのだ。こんなにいいことがあろうか。節約した時間で、わたしは、朝の睡眠時間を余分にとり、職場でコーヒーを沸かして飲み、そして、文庫本を読むことが出来る様になった。人生が少し有意義に変わった瞬間とも言えた。

「山田くん、近頃冴えているねえ」と課長にも褒められる始末だ。

時間的余裕は、人格まで引き上げてくれたかのようだった。

帰り道だってそうだ。定時に仕事を終え、一斉に退社すると道が混んで、ちょっとやそっとでは幹線道路に出られないことが多かった。一時間残業をこなして時間をつぶした方が、まだ時間が有意義に使えるというものだ。明日するはずだった作業を今日中にこなし、未来の業務を少しでも楽にする。

新たな抜け道は、帰り道の時間をも短縮することが出来た。わたしは、抜け道を通ることで稼いだ一時間二十分、往復で二時間四十分を新たな仕事に振り向けることにした。自分自身、効率的になるし、何より上司からの評価が上がった。

何もかもいいことづくしだった。

「山田さん、最近、どうしたんですか？ 人が変わった様ですよ」

同僚にそう言われた。「いやね。……」と、思わず口走りそうになった。いけないいけない。人に知られないからこその抜け道なのだ。一人に話し、それが広がって、みんなが我先に通るようになってしまったら、もう、抜け道ではなくなる。それに、あの道は狭くてクルマ一台がいいところだった。
元々通っていた通勤経路の一つにしか過ぎなくなってくる。そんなものだ。

それ以来、わたしは、他人にこの道のことを知られやしないかとビクビクするようになった。

朝はもちろんのこと、帰りもあの道に入ったことを他人に悟られ、後をつけられたら一巻の終わりだ。その男ないし女はたちまちのうちに誰彼構わず、言いふらすことだろう。場合によっては、ブログやネットの掲示板に書き込んでまで言いふらそうとするかも知れなかった。情報提供者は「神」と呼ばれる世界のことである。油断は出来なかった。

わたしは、気をつけながら毎日ハンドルを握る。しょっちゅう、バックミラーを確かめ、後続車が後をつけていないか気にするようになった。

ある日、一台の黒のセダンが後ろについた。
会社を出てから、国道沿いの道をずっとついてきた。わたしは、もしやと思った。
「この道を知られてはならない」
いつもと違う道に変更し、このセダンを撒くことを考えた。
「でも、待てよ。もしかしたら、途中にある民家の住民というだけなのかも知れない。そこまで考えるのはやり過ぎだ」
そうも思った。
わたしが、右折するとセダンもしっかり右折してついてくる。
わたしはコの字状に左折、右折、左折を繰り返して撒こうと試みた。でも、やっぱり、しっかりとついてくるのだ。
もはや、間違いないだろう。こいつは、わたしだけの抜け道を知ろうと、後をつけているのだ。そうに違いない。
わたしは、アクセルを少しだけ踏み込み、ペースを速めた。住宅密集地でスピードを上げるのは、危険な行為だ。それは百も承知の上だった。スピードメーターは時速六十キロを指していた。セダンは、やや引き離されたものの、やっぱりちゃんとついてくる。
わたしは、焦った。
交差点を何度も右左折を繰り返し、振り切った、つもりだった。なのに……

まだついてくるではないか！

わたしは、アクセルを底まで踏み込んだ。もうスピード違反もいいところだった。こんな狭い路地で数十キロも出すなんて危険もいいところだ。

そんなことがあって以来、わたしは、幹線道路を走っている最中からバックミラーを気にするようになった。
もう、抜け道を走る喜びなんてどこかに飛んで行ってしまった。

知られてはならない。その一点に凝り固まっていた。

その日、わたしは、その抜け道をわざと通らなかった。黒のセダンはいまいましげに、わたしの後をついて、混んだ幹線道路を走り続けた。ざまあみろというのだ。抜け道は自分で見つけなければならないものだ。人から教わった道。そんなものはもはや抜け道ではあり得ないのだ。
そして、黒のセダンはわたしの住んでいる住宅地の一つ手前の交差点を曲がり、どこかへ行ってしまった。あきらめたのか、元々、その町の住人で、わたしと同じ会社に勤めていたのだろう。
わたしは、それ以来、抜け道を通ろうかどうしようか、迷うようになってしまった。
いや、あの黒のセダンの影に怯えるようになってしまったのだ。

長いこと通らなくなり数年が経った。あの細い路地は舗装工事がなされ、広々した新しい県道となり、多くのクルマでごった返すようになってしまった。
わたしは、諦めきれず、その道は通らず、横目で、住宅と住宅の間に細い路地はないかと探しながら渋滞待ちをしている。了

容疑者X

容疑者X

「被告人Xは、明確な殺意を持って、公共の公園内にて花火十発を打ち上げ、公園に人を集めしめ、その帰途において将棋倒し状態を誘発させ、被害者Aを圧死せしめた。……罪状、殺人罪。刑法一九九条」
淡々と読み上げられたのは裁判冒頭における起訴状の中身だった。

今年の七月最後の日曜日に、わたしの住むZ町の公園でちょっとした騒ぎがあった。誰かが個人にしては大きな花火をたくさん打ち上げ、大勢の人だかりが出来ていたのだ。花火自体はそんなに時間が掛かるものでもない。わたしは、夕食後にどこからか、ぼんぼんという音が数回聞こえただけで、取り立てて変わったことなど何もなかった。

それからしばらくして、町内に救急車とパトカーのサイレンの音が鳴り響いた。
後で知ったところによると、花火の見物客同士で事故があり、けが人が出た模様だった。そして死者が出た、と、ニュースに出た。後日、その遺族は、花火を主催した男を警察に告発した。
わたしは、K市にある地方裁判所刑事部の判事をしていた関係で、この事件に関わることになった。

検察官は当初、市民からの告発があったにも拘わらず、容疑不十分だとして容疑者Xを不起訴にしたが、市民から構成される地方検察審議会はこれに異議をとなえ、強制起訴となった。
検察官役弁護士は容疑者Xを殺人罪で起訴した。

わたしはこの判決をどうしようか悩んでいた。問題は裁判員たちにこの事件の論点を説明し、適正な判決と刑を決めてもらわなければならない。裁判員制度施行当初こそ、市民感覚の判決は支持されてはいたものの、あまりに感情的になりすぎるきらいがあり、昨今では上級審では、判決がくつがえることもままあった。

わたしは、起訴状に添えられた裁判資料の中にあるいくつかの論点を裁判員たちの目の前のホワイトボードに書き出していった。

まずＡさんを背後から押したのは、被告人Ｘとは全く無関係のＹである。

Ｙは、たまたま、近所の住民Ｂから、その日、花火の打ち上げがあると聞き、それを見に行こうと公園に出掛け、十発の花火全てを鑑賞し、終わったことを告げる拡声器のアナウンスを聞いたため帰途についた。公園の出口は狭く一カ所しかなかったため、混み合い、さっさと家路につこうという観客たちでごった返していた。
Ｙは、さらに、その後ろにいたＺに押されたと証言している。Ｚは自身も誰かに押されたのか、はたまた、自分で転んだのか、全く思い出せないと証言していた。
これが、事件の直後に警察が混み合った現場で聴取した事実関係であった。
裁判では直接的な証拠に基づいて得られた心証によって判決が決められる。わたしは、集まった八人の裁判員たちにそう説明した。

裁判員の一人は疑問の声を上げた。
「そもそも、被告人Ｘが花火を打ち上げたのは何故だったのですかねえ？ 裁判長」
それが問題だった。警察の初期の捜査ではそこらが明らかになっていない。
その説明がなされたのは、容疑者Ｘが起訴され、被告人Ｘに呼び名が変わり、検察官役の弁護士が詳細な捜査を行って以降のことであった。その聴取事項によると……。

――被告人Ｘは、個人的に被害者Ａに恨みを抱いており、こうなることを予見していたと自白している。具体的には老後の資金として貯めていた金を貸したものの、いつまで経っても返してもらえないという、金銭の貸借を巡るトラブルがあったというものだった。動機としては不自然なものではない。
「こうなることを予見していた」と証言していると言うことは、つまり、被告人Ｘは、起訴事実を全て認め、被害者Ａに明確な殺意を抱いて犯行に及んだと認めたということになる。
殺人の事実があり、容疑者も犯行を認めている以上、何らかの判決を下さなければならない。

果たして、被告人Ｘが花火を十発公園で打ち上げることと、被害者Ａの死亡に何らかの関連性があるのか。そこが最大の論点だった。

さらに裁判資料を見ると被告人Ｘとこれに関わった人間の普段の関係性についても、詳

細に書き込まれていた。
被告人Xは、被害者Aを背後から押したYの普段の性格のこともよく知っていて、一番先にやって来て、一番にいい席で花火を鑑賞し、そして、一番に最初に帰ろうとすることは、手に取るように予見出来たという。
そして、被害者Aは、用心深い性格で、道が見物終わりの人で混む前に帰ろうと先に歩いていることも予想の範囲内だった。
とどめは、「これで花火は打ち止めだ」という、拡声器の放送だった。
これで公園に集まっていた人は一気に帰途についたという。

「風が吹けば桶屋が儲かる」という諺がある。

しかし、刑事裁判では、風が吹くことと桶屋が利益を上げることの間に、明確な因果関係が認められなければ有罪とは出来ない。この諺は一見もっともらしいが、重大な欠陥を有しているのだ。風が吹いたからと言って、目の悪い人が増えるとは限らない点である。

今回の花火と、被害者Aの圧死との因果関係はどうなんだろう？

被告人Xが花火を打ち上げたからと言って、将棋倒しが起こるほどの人が集まるとは限らない点が一つ挙げられるだろう。
では、花火の本数と動員人数のデータはあるのか？ これは、過去の花火大会の観覧者数から大体推定出来るであろう。打ち上げ花火十発なら、百人程度の動員が可能性として考えられた。あの広くはない公園なら多すぎる人数だ。

ならば、被告人Xに花火を打ち終えたときに、将棋倒しが起こることを予見出来たか？という点についても考えなければならない。明確な殺意の立証だ。

普通、イベント物での将棋倒しを防ぐために、小さな花火をダミーで打ち上げたり、コンサート等では小さなイベントを行ったりして客が一斉に帰らないように工夫されている場合が多い。今回は、この措置を行うどころか、逆に拡声器で終了を告げ、帰ることに拍車をかけた。この点、被告人Xの想定通りに物事が運ぶとすれば、明確な殺意があると言えるだろう。

決め手は被害者Aの妻Cの証言だった。被害者の妻Cは被害者Aに多額の保険金５千万を掛けていると証言した。それを被告人Xへの返済の一部に当てる予定だったと言う。
そして、被告人Xが前もってこの計画を立てていることを聞かされ、被害者Aが花火に行き、そして、終わったら真っ先に帰る様、告げたのだというのだ。

これで、裁判員たちの心証は一気に被告人Ｘによる計画殺人に傾いた。

この時点で、議論が暴走し始めたと判断し、わたしは、裁判員たちに冷静になるよう勧告した。どう考えても、被告人Ｘは単に花火を打ち上げただけであり、被害者Ａの死亡とは直接の因果関係はないのだと。
「風が吹けば桶屋が儲かる」式の判決などわたしの公判で出すわけにはいかなかった。判事としての経歴に傷がつくというものだ。
しかし、裁判員八名はすっかり、検察官役弁護士の意識誘導に惑わされ、それに沿った形での意見がまとめられ、被告人Ｘの有罪が決められた。
そして量刑も求刑通り懲役七年に処することが決定された。

判決の当日。わたしは、裁判官席でその文章を読み上げた。被告人Ｘは満足げに頷き、にっこりと微笑んだ。元々、起訴事実を認めていた。これは彼の被害者Ａに対する復讐劇の一部分だったのだ。

わたしは、判決文を読み上げた後、彼に説諭した。殺人罪がいかに重大な罪であるか。そして、二度とやってはいけないということを。もちろん、彼は二度とこんなことはしないであろうことはわかっていた。わたしは、この判決に異議があるときは控訴できることを、声を強めて彼に告知した。

しかし、彼は控訴しなかった。

そして……刑は確定したのだった。了

真夜中のこびとたち

真夜中のこびとたち

年末の差し詰まった時期、仕事以外にも公私ともに様々な用件がわたしを責め立てるようにやって来た。
わたしは当時、下町にある小さな工務店の技術担当者をしていた。営業担当者が取ってきた様々な工事に関する見積もり計算、図面の作成、必要に応じては現場に赴いての採寸作業や、カタログを取り寄せての図面上での配置チェック、原材料の資材調達などやることに垣根などなく何でもやる必要があり、一旦仕事が走り始めると忙しいなどと言っておられない現場でもあった。
とにかく、次の日に営業担当者がお客さんの所に見積書を持って行くまでに、工事のあらかたのアウトラインを決め、わざと寸法を入れない図面を持たせていくのである。作業は時間との勝負だった。
いつの頃からだっただろう。若いときには不死身だと信じていた頑強な体力が衰え、ああ休みたいと日々思うようになってきていた。

「山田課長。今日も残業かいな？」
社長が帰り際、わたしに声をかけた。飲みに誘うとき以外には珍しいことである。ちなみにわたしはこの工務店では課長の肩書きだ。肩書きだけで部下がいるわけでもないし、管理職でもない。そう主張したところで労働組合もないのだから、別に威張ることなど何一つない。
「ええ、灘区の一戸建ての内装工事の図面を仕上げなければならないんです」
わたしは、左腕の時計を見た。入社十年目を迎えたときに自分で自分にご褒美で贈ったグランド・セイコーだった。デザインが上品で、正確で壊れないのがいいと思っている。その時針が午後十時を示していた。
「ほな、明日の朝までっちゃあ大変やな。日が変わらんうちに帰りや」
「ええ、努力します」
わたしは、社長を見送った後、誰もいなくなった事務所で大きく欠伸をし、少しだけ雄叫びを上げてみた。うおぉー、と。少しくらいならこの下町のことだ。誰も気にしやしない。昼間っからあちこちにお酒を召していらっしゃる方があちこちにいるところだ。

台所のシンクなどの図面寸法をカタログから抜き出し、自分の図面に落とし込んでいく。わたしはコーヒーを飲みながら、眠い目をこすりながら一個一個当てはめていった。寸法が合わなければ別の型番のシンクを探してくるだけのことだ。単純且つ緻密な作業が要求された。
いくらコーヒーを飲んでいても、眠くなるのは人情だった。
しかも、昼間はこの工事 (予定) 現場に入り込んで、採寸などの作業を行っている。疲れはピークに達していた。

気がつくと居眠りしていた。いけないと思いわたしは席を立ち、給湯室の流しに行き、顔を洗った。でも、そんなことくらいではここ数日、いや、数ヶ月もたまりにたまった疲れは毛ほども落ちなかった。
わたしは、再度机に向かった。そして、船をこぐようにゆうらりゆらりと頭を揺らし、図面が記憶の彼方へと飛んでいった。

次の朝。目が覚めたのは八時十五分のことだった。
気がつくと、営業部員の朝礼の声がし、職人たちのラジオ体操の音が耳に入ってきた。わたしは顔が青くなるのを感じた。しまった。寝過ごしてしまった。
図面の上によだれが垂れていないか確認し、何事も……いや、何事もないどころか、図面は完璧に出来ていた。しかも、わたしがやっていない箇所まで完璧に作成されていた。誰がやったのだろう。字と線を見ると確かにわたしもものに相違なかった。もしかしたら、昔話にあるように夜中にこびとが出てきて、代わりに仕事を片付けてくれたのだろうか。そんな気がした。

全くその記憶はわたしの脳みそから欠落していた。
もしかしたら、初期の認知症かも知れない。わたしは仕事上のちょんぼよりもそっちの方を恐れた。齢四十五にして認知症とは笑い事ではすまされない。こんな仕事に没頭するあまり認知症になったのでは泣くに泣けないだろう。
「山田課長。資料は出来てますか？」
営業担当者が聞きに来た。
彼はわたしの用意した仕様書と図面を引ったくるように持って行き、複写すると原紙を返してきた。
「いやあ、短い時間しかなかったけど、助かりましたわ。さすが山田課長ですね」
そう、彼は嬉しそうに礼を述べた。

わたしは、昼間の休み時間を利用して市内の神経内科クリニックをこっそりと訪れた。
「ふむ、……そうしたことは度々ありましたか？」
「何か睡眠薬、向精神薬の服用はありませんでしたか？」

「他にも何か重要なことを忘れてすっぽかしたことはありますか？」
医師は、いくつかの問いをわたしに投げかけた。
睡眠不足で、短期間の記憶障害が起こったものという診断だった。診断書を書きましょうかという医師の申し出をわたしは断った。そんなことで仕事を休むわけにはいかないし、重大な病でなければそんなに問題にすべきではないと考えたのだ。
わたしは、こびとが夜中に出てきて仕事を手伝ってくれただけと自分で自分に納得させた。
いや、そればかりではない。面倒な仕事、難しい仕事になるとあえて自分を睡眠不足に追い込み、こびとに仕事を押しつける技を身につけるまでになった。

午後十一時を過ぎるまで仕事をしていると、うつらうつらしてくる。――こびとさん出てきて下さいな。そうして、製図用シャーペンを握り、意識を統一する。わたしは段々と眠くなりついには睡眠状態に陥る。するとこびとの出番というわけだった。
こびとの仕事は丁寧で完璧だった。
字はテンプレートを使ったかのように正確無比だったし、線はＣＡＤを使ったかのようにまっすぐで細い太いがなかった。寸法は一度足りとて間違ったことはない。

「あなたの潜在意識の中に、そうした部分があるのかも知れませんね。職歴は長いのですか？」
医師はそう訊いた。
「ええ、もう二十五年ほどになります」
「ずっと今の仕事を？」
「はい、これしか能がないもので」
「いやいや、それだけ無意識のうちに出来るなんてある意味大したものですよ。あなたは睡眠状態の中で仕事をし、その記憶が何らかの条件で欠落してしまっているのです。睡眠薬の種類によっては睡眠前の意識が欠落する副作用を持った種類のものもありますが、そうしたクスリを服用されていないのであれば逆に安定剤か何かを使えばよいかも知れませんね」
「そうですか」
こびとが出てこなくなるのはある意味寂しい思いがしたが、あんまり自分の知らないところで仕事をされるのも困ったものである。わたしは医師の指導の元、安定剤を昼間少量だけ服用することにした。
次の日からこびとは反抗的になった。
同じように夜中仕事をしていると、眠気が襲って来、それに耐えながら頑張って製図しているとついに眠りに落ちてしまった。
驚いたのは次の日の朝だった。いつもなら、きれいに仕上がっているはずの図面に落書きがしてあったのだ。今度こそわたしは真っ青になった。

「山田さん。図面はどうなりましたか？」
営業担当者は責めるような目でわたしを見た。こんな落書きを見せるわけにも行かず、わたしはとっさにごまかした。
「カタログデータが揃わなくてまだなんです。もう一日待って下さい。すみません」
普段なら下げない頭を、わたしは下げた。
一体どうしたことだろう。昨日安定剤を飲んだだけだ。記憶障害がなくなるはずだから、こんなことになるはずはなかったのだ。
いや、もしかしたら本当にこびとが出てきて仕事をしていたのだろうか。わたしがスムーズに睡眠したものだから怒って悪さをしたのかも？ しかし、こんなことは医師には相談できなかった。いい年をした四十五歳の男が、夜中に出てくる仕事を手伝ってくれるこびとの話などしたら、記憶障害どころか本当に頭がおかしいのではないかと疑われるに違いない。わたしは自縄自縛に陥った。

その晩、久々に早めに帰宅したわたしは夢を見た。働き者のこびとが出てきて、仕事を手伝ってくれる夢と、怠け者のこびとが出てきて仕事をぶち壊してくれる夢だった。わたしははたと思い当たった。
あの安定剤を飲むのをやめよう。
そして、もっとゆったりとした気分で仕事に取り組もう。そうしたら、こびとが出てくるのは夢の世界と現実世界がつながった状態なのだから。
こびとには夢の世界だけで頑張ってもらおう。そう心に誓った。それ以来、わたしはいかに仕事が山積しようが残業はしないことにした。却って能率が上がった気がしている。了

タイムマシンに乗って

タイムマシンに乗って

わたしは当時子供向けの雑誌の制作に携わっていた。タイムマシンや空飛ぶ宇宙船、はたまた見えない戦闘機のような心躍らせる科学記事を書いたり、立体パズルのようなモノや簡単な回路で構成されるラジオのように頭を使う付録を安価で調達できるようあちこち手配したり、そういった仕事だった。
四十歳になってしばらくの時だった。
「青野さん。健康診断の通知が来ていますよ」
わたしと同年代の庶務の女性が、総務課からまわってきた、通知書を手渡してくれた。もとより、こんな小さな出版社では医務室などないので、外部に委託している総合病院に診察を受けに行ってこなければならなかった。わたしは、三十歳の時にも一度行っていたので、「ああ、またか（無駄なことを）」と思っただけだった。

自慢ではないが、小さな頃からブルドーザー並みに頑健な身体の持ち主だった。これまで、病気は風邪一つ引いたことがなく、横の席で誰かが悪性のインフルエンザにかかって唾が飛んでこようが、平気の平左であった。だから、わざわざ、会社の費用でもって健康診断に行くなど、このご時世、「モッタイナイ」の精神である。行かずに放置しようかとも思ったが、このときはなぜか、虫の知らせだろうか、自分で適当に行ったことにしておこうという気にはならなかったのである。

時期的には丁度お盆の前の週だった。総合病院の中庭のプラタナスの並木ではミンミンゼミが鈴なりになり、みーん、みーんと大合唱を上げていた。うるさいことこの上ないが、これこそ夏の風物詩である。蝉が鳴かなくなったら地球の汚染が進んでいると言うことで、それはそれで心配である。
わたしは受付で、会社の健康診断であることを告げると、事務的な口調の、これまたわたしと同い年くらいの女性は、まず、問診票を書くことをわたしに命じた。
「まず、そこの機械で血圧を測ってください」
彼女は通路の脇にある、腕を入れる大きなわっかのついた、テーブル状の機械を指さした。わたしは言われるがままに、腕まくりをし、機械の中に腕を突っ込み、アナウンス通りに深呼吸をしてスタートボタンを押した。

血圧は八〇の一一〇、と、まずまずの数値をスーパーのレシートのような紙切れに印刷した。これを持って、内科の診察室へと案内された。

医師はまるで、テスト問題に仕掛けてあったわな（引っかけ問題）に引っ掛かった学生を見つけたかのような態度で、血液検査の結果に釘付けになった。
「青野さん。最近身体がだるいとか、尿の色がおかしいとか自覚症状はありませんでしたか？」
そう言われれば、昔のようにブルドーザー並みにというわけにはいかなかった。せいぜい、小型フォークリフトくらいのパワーしか出せないし、徹夜明けの時など、辛いのも事実だった。だが、自覚症状はそれくらいであり、精密機械の故障をメーカー送りにする様なほどに医者に掛かるほどのものではなかった。ましてや、尿の色は.....いや、待てよ。
「そういえば、たまに茶褐色めいた色の尿が出たことがあります」
医師の目は、宝物を見つけた小学生のように輝いた。
「ＣＴを撮ってみましょう。肝機能障害です。何か異変がある可能性があります」
医師は言葉を選んで言ったが、明らかに悪性腫瘍の存在を示唆していた。わたしは、びくびくしながら、病院の診察衣に着替えた。

夕方五時頃まで待たされ、わたしは、自動調理器の上の鮭の様にＣＴのベッドの上に横たわった。Ｘ線で身体の輪切り写真を撮っていく機械である。肝臓に腫瘍があればたちどころに白い影となって現れるのだ。ホンの気分転換のつもりでやって来た健康診断の結果がとんでもないことになってしまったと、わたしは、今日この病院に来たことを悔やんだ。
仮に腫瘍でないとしても放置しておいて構わないし、腫瘍だったとしても、わたしは放置する気でいた。今さら治らない病気をつつき回し、分解した時計を組み立てられずに困っている子供のようにああでもない、こうでもないと議論を重ねるのは時間の無駄でありごめん被りたかった。
それでなくても、残りの人生を有意義に過ごしたいと考えているわたしである。

ＣＴ検査はすぐに終わった。立ち会いの医師の指示するところで何枚か写真を撮って、それでお仕舞いという簡便さだった。だが、医師の表情は言いたいことをそのまま率直に言えないと物語っているように曇っていた。
「青野さん。後でカンファレンスルームにおいで下さい」

そこから先は決まっていた。末期ガンの告知である。肝臓に他から転移したガンがあちこちに出来ており、手の施しようがないこと。
「もし、治療をお考えでしたら、先端医療になるのですが、重粒子線治療といって、粒子線をガン細胞に当てて焼き切る方法。それから、ｉＰＳ細胞を使って自身の肝細胞を再

生するという方法があります」
「見込みはあるのですか？」
「現代の医学ではどちらも１００パーセントではありませんが、期待は持てます」
医師の言葉の行間を読み取ると、三割が助かればいい方という感じであった。

わたしは、治療を断り、元の職場に復帰した。だが、もう、以前のように頑健な身体ではないという強迫観念がわたしを押しつぶそうとし、身体ほど強くはないわたしの精神は民衆の蜂起により陥落寸前のバスティーユの牢獄のようにほぼ崩壊し掛かっていた。

そんな折、子供向け雑誌の記事にタイムマシンの特集を組むことになった。あらかたは今まで書いてきたことの焼き直しだ。（毎年子供は成長していくので内容は同じでも商売が成り立ったのである）
「お！」
「青野君。どうしたんだい？」
編集長がわたしが変な声を上げるもので尋ねてきた。
「このタイムマシンって、実用化されるのですかね？」
「うん、アメリカのベンチャー企業が専用の空港まで作って宇宙にロケットを飛ばすらしいよ。あの映画『猿の惑星』みたく、帰ってきたらとんでもなく時間が経過していた、そんな感じじゃないかな。アインシュタインの相対性理論では、光速に近い速度で飛ぶ物体の時間の進み方は遅れるだろう？」
「そうでしたね。僕も乗ってみようかな」
「あはは」

編集長は笑ったが、わたしは本気だった。現在でも三割ほどしか助からない、わたしの身体の中の時限爆弾のような悪性腫瘍を治してもらうには未来の病院、最先端の医療しかない。
わたしは、インターネットで調べ、資料を取り寄せた。乗船に必要なチケットは約千六百万円。時間は下りてみないとわからない、まさに、ミステリーツアーと呼べる旅だった。実際には地球を周回する軌道で、何かあれば着陸させるという安全性も強調されていた。チケット代が気になった。と、同時に未来の先端医療も魅力である。

わたしは、上司に退職金の前借りを申し出た。
「事情が事情ならしょうがないなあ」
と、不治の病に理解を示してくれた。その上、先端医療保障対応の保険も紹介してくれた。八十歳まで加入可能なもので、先端医療特約一千万円がついていた。

翌年、わたしは機上の人となった。
ロケットの中は意外と住みやすく、中で、筋力が衰えないよう運動を心がけた。

光速の九十パーセントの速度で飛ぶ機体の中で、わたしは時折不安に駆られた。もし、隕石とぶつかったら、とか、部品が外れて飛んでいったらとか。よくもまあ、子供向け雑誌にタイムマシンなどといい加減なことを書いていたものだと内心、反省もした。

ロケットは三ヶ月飛行し、やがて、高度を下げ大気圏に突入した。久々の大地だった。
ここ地球上の時間では、飛んでいる間に、もう、六十年が経過していた。

わたしはすぐさま病院に駆け込んだ。
診察した内科医は、三ヶ月前と同じ診断をし、判でついたような同じ治療計画をわたしに示してくれた。
「あなたの場合、腫瘍の転移が進んでますので、肝臓を摘出し、ｉＰＳ細胞を使って作ったあなたの肝臓を移植するのがベストでしょう。何、簡単な手術ですよ」
六十年前と違って、まるで虫垂炎を切るかのごとく簡単なレベルの治療になっていたようだった。
わたしは手術費用を確保するため、加入していた保険会社に電話してみた。
「あの、保険は適用されるのですか？」
「生年月日をお知らせ下さい」
わたしは、自分の生年月日を告げた。
「申し訳ありません。今年で一〇五歳におなりになりますね。四十五歳から今年の分までの保険料が支払われておりませんので対応いたしかねます」
わたしの目の前は真っ暗になった。了

遺品

遺品

乱雑に工事されたでこぼこのアスファルトの道を、わたしと親方が乗った二トントラックは進み続けた。
「おう、そこ左」
親方は地図を見ながら道案内をした。もちろん初めて訪れる場所で土地勘も全くない。わたしはただ事故を起こして工程が伸びないよう気をつけてハンドルを操作した。がたん、がたたん、と固いタイヤは路面の凹凸を感じ取りハンドルさばきに影響した。
八月の熱い太陽が、じりじりと照りつけ、ダッシュボードをフライパンにしていた。
「このアパートちゃうかな。そや、ここや」
親方の一言でわたしはトラックを止め、駐車できるようスペースを探した。築五十年は経っているだろう古びたアパートがそこにはあった。トタン葺きの屋根に同じくトタン壁。雨の筋が幾筋も入り、所々錆びて穴が開いている。そこからゴキブリだろうか、黒い虫がしゅるしゅると出入りしていた。

わたしの仕事は清掃会社のアルバイトである。依頼のあったアパートの一室の清掃、今回に限っては家具、その他一切を粗大ゴミとして処分してしまうことを依頼主から請けていた。依頼主はこのアパートの住人ではなかった。このアパートに住んでいたのは、九十歳になる独居のお婆さんで、亡くなって数週間後に遺体で発見されたそうだ。痛ましい話だが、アパートは明け渡さなければならない。そこで、東京に住む遠縁の男性が遺産相続の形で荷物の一切の所有権を得て、それで、わたしたち清掃業者に荷物の処分と部屋の現状復帰（清掃）とを依頼してきたのである。
「きょうび、こんなモンなんでしょうか？」
「何がや？」
「独居老人が亡くなって、相続人が立ち会いもせずに遺品の処分を決めることです」
「あほか、そんなこと気にしとったら仕事になれへんがな。気にせんと燃えるゴミと粗大ゴミとにわけたらええだけや」
「はい」
この市では、ゴミの処分場は燃えるゴミと燃えないゴミ、粗大ゴミとに分別されていた。

衣服や下着などの燃えるゴミは市指定の袋に入れてゴミに出し、タンスや食器、水屋など大型のゴミは産業廃棄物としてこの二トントラックに積み込み産業廃棄物処理場に持ち込む。昔はまとめて産業廃棄物だったそうだが、近年分別がうるさくなっている。

アパートの二階の左から二番目の部屋がそうだった。
親方は遺族の遠縁の男から預かったキーを差し込み、錆び付いているのか動きが悪いのを無理にこじ開けた。ぎぎぃ。部屋の中からはすえた臭いが鼻をついて出てきた。長い間誰にも気付かれることなく遺体は畳の上にあったままだったという。人間の血液は生きている間は身体中を巡っているが死んだら重力に任せて下にたまり、そのうち、皮膚から染み出して外部に流れ出るという。
部屋の間取りはキッチンと奥の六畳の和室一間の簡素なものだった。が、和室を見たときわたしは思わずふるえが来て、嘔吐感を催した。
人の形になった血液の痕が黒いシミとなって、畳に残っていたのだ。お婆さんは布団から立ち上がり薬でも取りに行こうとしたのだろうか、その最中意識を失って倒れ、そのまま帰らぬ人となったかのようだった。
何ヶ月かその状態のまま放置され、近所の人からの異臭というのか、苦情が来て警察が調べ、ようやくお婆さんの死に気付いたという次第だった。

「おい、片付けるで」
親方は、まず燃えるゴミの袋を五十枚入りの袋ごと床面に置いた。
タンスを下から順に開けて、洋服や下着など燃えるゴミを分別して放り込んでいく。親しい人がいれば形見分けとして分けてあげられそうな新しいものも中にはあった。しかし、ここではもはや全てが処分場行きのゴミである。
と、下着を詰め込んだ中から、ポーチが出てきた。
わたしは、中に何か入っているのに気付き、作業の手を休めて開いてみた。ずっしりした重みのある封筒と預金通帳、印鑑がまとめて置いてあった。封筒の中にはきれいな新札で百万円が入っていた。
「親方！」
「何や、手ぇ休めんと口をきけ」
「そうやないんです。お金が！」
わたしは百万円の封を解き、扇状に広げて親方に見せた。
「役得やな。もうとけ。ワシと折半にせいや」
全く悪びれる風もなく親方は平然とわたしに言った。「こういう仕事しとると、位牌や遺骨の他に年寄りの最後のよりどころとなる現金が見つかることもままあるんや。でも、遺族の男が全部処分せえと言うんやから、言葉通り処分するだけや」とうそぶいた。
「はい」
わたしは、黒ずんだ畳の向こう側にあるくしゃくしゃの布団に目をやった。窓の外では鳩とカラスがえさをついばんでいた。やりきれない思いだった。いくら遠縁だと言って

も、こうした場に立ち会ってお婆さんの最後に思いを馳せるべきなのではないのか。

作業はどんどんと進んだ。
こちらの道具といえば、簡単な掃除道具と二トントラックだけである。タンスはばらけないように紐で縛って荷台に乗せ、簡素な仏壇（お爺さんのものと思われる）も、蓋をして固縛してこれも荷台に乗せた。位牌や仏像なども全部産業廃棄物処分場送りである。布団は丸めて紐で縛って、荷台に乗せた。燃えるゴミの袋に入らなかった。

作業が終わるとわたしは、大量に出た燃えるゴミの袋を、トラックの荷台に持っていった。処分場がそれぞれ異なるので、分けて積まないと後で大変なことになる。
階段を上がり、部屋に入ると親方が畳のシミについて渋い顔をしていた。血液のシミなど特殊清掃の部類になるが簡単に消えるものでもない。親方は畳ごと剥がしてトラックに積むよう指示した。これも粗大ゴミだ。後で家主が新しい畳と入れ替えることになるんだろう。
実際、お昼ご飯も食べずに（食べる食欲もなかったが）この作業を繰り返し、ようやく、畳の間はきれいになってきた。
夕方三時になり、親方は一応の見切りをつけた。と、いうのも、ゴミ処理場の受付時間が四時までであったからだ。
部屋はわたしたちが来たとき、くしゃくしゃの布団と仏壇、タンス、台所の食器類があったのだが、今あるのは、２Ｋの部屋だけになっていた。その後きれいに掃除機とぞうきんがけをした。
「ほな帰えろか」
親方はわたしの肩をぽんと叩いた。いつもと異なり少し上機嫌なのはタンスの中に入っていた百万円のせいだろうと分析した。通帳はどうするのだろう？
「あほう。他人の通帳なんか下ろしてみい。手が後ろに回るで」
親方は現実的な意見を述べた。現金なら足がつかないからいいらしい。
「遺族の方に送るのですか？」
「何一つ送らなくていい。と、先方は言うとったが、そうもいかんやろうな」

わたしは、二トントラックに戻り、積み込んだ家具類に荷造り用ロープを掛けていった。途中で落とすと厄介なことになる。きちんと固縛し、なおかつほどきやすいかけ方をこの仕事を始めたときに親方に何度も仕込まれた。今では目をつぶってでも出来る。
走り出してしばらくし、親方はあの通帳のことを言い出した。
「やっぱり惜しいな。定期で六百万もあるで」
「でも、死んだら口座は凍結されるんでしょう？」
「せや。凍結解除できるのは正規の遺産相続人だけや」
「だったら、諦めた方が」
「せやから、惜しいな言うてるねん」

普段の帰り道は冗談の多い人だったが、今回については冗談ではないようだった。会社の経理が火の車であることもわたしは感づいていた。あの現金百万円すら全部自分で取りたいような雰囲気だった。
「あの、親方。わたしとの折半ですけど。あれって、会社の金じゃないですか。わたしの取り分はいいですよ」自分はバイト代だけで十分だと思った。
「そうか」
親方は嬉しそうに返事した。

この話には後日談があった。
お婆さんの生前の遺言書が公証人役場から見つかり、タンスの中の現金と通帳は遺族の遠縁の男に相続させると、書いてあったのだ。だが、お爺さんとお婆さんの位牌とお墓のお祀りもすることという条件も一筆してあった。親戚の男からは現金の件は何も言ってこなかった。了

原稿プロセッサ

原稿プロセッサ

「あぁ、もう！ やってらんないよ！」
そんな叫び声が、職場のあちこちの書類の山と山の狭間から聞こえてくるのは、もう、日常茶飯事だった。
とにかく原稿が多すぎる。
当社主催の小説新人賞の応募要項が文芸誌に掲載される度に、大量の応募原稿が編集部に送られてきた。
北は北海道稚内から、南は沖縄県西表島まで、地域色が出たものからそうでないものも多士済々であった。しかし、本当に多士済々であれば言うことはない。そうした原稿は出版社に取り宝である。宝の山に埋もれるのは嬉しい悲鳴であった。しかし、そういかない事情があったのだ。

そして。

「原稿プロセッサ」という画期的なソフトが開発され、当社にも導入された。
わたしは、会社のシステム部員として、このソフトの販売会社から来た指導員にレクチャーを受け、早速、編集部の実働部隊にそれらを稼働させるべく教育を行なった。

さて、次からの新人賞応募の要項を変更しなければならない。
これまではＡ４用紙に４０字４０行で印刷させていたが、これからはデジタル応募に切り替わる。原稿のデジタル化に伴い、応募も郵送からメール添付ファイルでもいいことに変更された。
逆にこの新たなシステムを稼働させる以上は、全員もれなくテキストファイルで送ってもらわなければならない。さもないと、ワープロで打ち出した印刷原稿を、再度キーボードからコンピュータに入力しなければならないのだ。

システムが実際に稼働すると、古くからいる編集部員の中からは、その機能を疑問視する声と、効果を期待する声が相半ばした。

と、言うのも、原稿の一次審査に当たる通称「下読み」と呼ばれる審査要員の評判が応募者からも編集者からも悪く、この存在が応募者の質の低下と本数の減少に悩み始めていたからだ。どうせ、最終選考まで残らず、審査委員の先生には直接読んでもらえない、と、影では悪口を言われ、一部の不届き者による二重投稿や原稿の使い回しが横行していたのだ。二重投稿した者の中には、出版社ごとにどういう評価の違いがあったかなどをインターネットの掲示板に実況中継している輩もいた。

また、そうした無駄な応募原稿による編集者のチェック作業量のかさ上げで、出版社はさらなる「下読み」の増員を余儀なくされ、審査能力の低下にも拍車が掛かっていた。文芸図書出版部の部長職にある人から、システム部に相談を受けたとき、これは人工知能ＡＩしかない！ と色めき立ったものだった。人手を掛けず、コンピュータプログラムによるチェック作業なら、処理に時間は掛かるものの、反対に見れば、処理に掛けるコンピュータの台数を増やし、稼働時間を伸ばしていくらでも原稿の本数を処理することが出来たのだ。

もう「下読み」に頼らなくていい。人工知能が二重投稿や、他誌への応募作の改稿原稿を見抜き、はたまた、字の間違い、日本語文法・人物・舞台設定のブレや物語の評価に至るまですみやかにこなしてくれる優れものだった。

ソフトは原稿を「文法、語彙、構成、ストーリー、そしてマル秘だったが、レベル」とで評価してくれる。五段階か十段階かは設定で選ぶことが出来る。小説のレベルを機械で判断するのはいかがなモノか？ その一点については、古参編集者から異論が続出した。確かに、それ以外の項目はワープロソフトのチェック機能があるくらいで、機械化した方が効率的に思えたが、小説のレベルって、言うなれば、芸術性に関する類のものである。これだけは、機械に任せては駄目だ。と、彼らは譲らなかった。

「山田さん。いくら部長肝いりのシステムだからと言って、これだけは譲れませんよ。ここを譲ったが最後、人間の編集部員の存在価値が失われてしまいます。だって、そうでしょう？ 文章はワープロで書き、コンピュータがそれをチェックする。そこまでは譲れるとして、文芸はあくまで芸術です。芸術性を判断するには、やっぱり人間ですよ。……そう、書き手と作り手、読み手の人間性のぶつかり合いなのです！」

わたしは、試しに手元にあった応募原稿を入力してみた。パソコンの画面上で処理中の

マークが点滅し、しばらく保留になった。老編集者とわたしは、固唾をのんで行方を見守った。

結果は「文法３、語彙３、構成１、ストーリー１、レベル１」と、最低な評価になった。
――本当なのか？
編集部内に緊迫感が走った。
わたしは、その原稿をパソコンの画面に表示させ、じっくりと、普段よりも三倍くらいの時間をかけて熟読玩味してみた。確かに、一応もっともらしい日本語を書き連ねてはいるものの、ストーリーはありきたりの、語彙にも乏しい「屑」原稿だった。
こんなものを選んだことには後悔したが、このソフトの正当性が証明された形になった。これで、これ以上の「屑」原稿の相手をしなくてもよくなる。と、編集部の中堅・若手は沸き立った。そしてその老編集者は肩を落とした。

このシステムを本格的に稼働させることで、人間の編集者を「屑」原稿から解放し、本当に「よい」原稿につきあわせることが出来る。「原稿プロセッサ」で「屑」原稿を徹底的に排除し、まともな原稿だけを相手にすることが出来る様になる。そう確信したのだった。
よりよい原稿を求め、わたしたちは新たな才能の発掘に努められる。そう思った。
この「原稿プロセッサ」で、レベル５の作品をいくつか「発見」することが出来た。何千通の原稿の山の中からである。今までだったら何十人もの「下読み」を投入しても到底不可能な所業だった。
実際に、そのレベル５に相当した新人作家の本を大々的に出版しもした。成果はある程度出た。
「山田さん」
老編集者はシステム部に挨拶に来た。もう、定年まで間がないことだし、これをきっかけに、退職することにしたらしかった。
「若田さん。何も今おやめにならなくても……」
わたしは、老編集者を引き留めようとし、しかし、これも時代の流れなのだと思い直した。
「原稿プロセッサはわたしには扱えません」
そう言った。
「いや、そんなに難しいものではないと思いますが……」
「そういう意味ではないのです。魂を込めた作品をコンピュータがはじいてしまうことが耐えられないのですよ。下読み制度も問題でしたが、彼らは人間です」
「それはそうですが……そうですか」
そして老編集者は会社を去って行った。

「レベル５」の小説は割と売れ行きがよい様だった。文芸部長がシステム部にわざわざお礼を伝えに来たほどだったから、よっぽど、会社の業績に貢献したものと思われた。今

まで何十人というスタッフがかかり切りになっていた作業をパソコン数台で、数十時間処理することで置き換えられたのだ。これ以上効率のよいパソコンの使い方って今までなかったのだ。

数ヶ月たち、売れ行きの流れが変わったと知らされた。わたしは読書市場の動きを、密かに調査した。
人間の読者に代わって人工知能が読書し、要約だけを読者に簡潔に知らせるシステムが、我々の知らない間に出来上がっていたのだった。

そしてインターネット世代の新しい作家たちも、人工知能を使った小説プロセッサで、「レベル５」に判定される作品を効率よく編み出し始めていた。テーマだけ設定し、原稿枚数を指示すれば自動で小説を書き上げてくれるものだ。

ストーリーを小説プロセッサで、小説化し、それを出版社が本にする。読者はそれらを飛ばし読みし、要約だけを短時間で得られるようになっていた。もう、ストーリーを楽しむことも言葉遊びの海に溺れることもない。淡泊な世界だった。

そして、個人作家から小説のエッセンスだけ供給し、読者が要約だけを得る新たな市場が出来上がり、もはや、出版社は不要になっていた。不要なのはそれだけではない。小説作家も小説読者も市場からかき消えたのだった。
わたしは、失業し、あの老編集者の別れの言葉を思い起こしていた。了

エスピオナージ

エスピオナージ

わたしは、先日から悩みを抱えていた。
この春から労働組合の専従職員となった中堅社員の旭健太郎という若者から、組合内部の情報を密かに提供したいという申し出があったのだ。
組合専従というのは、元の職場を離脱して、労働組合の職員になってしまうことである。会社からの賃金は支払われないので、組合員がそれぞれ負担している組合費から賃金が支給される。ちなみに、一時的に組合に顔を出した様な体裁を取り、会社からの賃金を受け取りながら、組合活動に専念するケースもある。これは、違法行為で一時期「ヤミ専従」と呼ばれたこともあった。

今回のケースは少し異なっていた。
折からのコスト削減政策でもって、人員は削減傾向にあり、従って、労働組合に加盟すべき社員の総数も減ってきていた。組合は確実にその影響力を減少させて来ていた。かつては、労組の後援でもって、市議会議員やひいては市長まで出すことが出来たのに、今では、他企業の労組と組んで、辛うじて候補者一人の後援に回らざるを得ない状況になっていた。
しかしながら、構成員が減ってきたとはいえ、立派な労働組合である。会社の労務担当者に取ってはそれなりに影響力のある存在ではあった。
さて、企業内組合なので、社員は自動的に組合に加入させられる。課長以上に昇進すると経営側と見なされ、組合からは離脱する制度になっていた。そして、若手社員からも組合委員として短時間であるが組合活動に参加することもある。これを面倒なことと受け取るか、労働者の義務として真剣に考えているか。それは、まあ、人それぞれであったと思う。

旭はわたしに、内々に接触してきた。
「川島部長。勤務時間外に内々に時間を取っていただけないでしょうか？」
簡単な業務連絡メールだった。少し不審に思った。わたしは、労務担当部長をしていた関係で、労働組合との折衝の矢面に立つことが多かったので、彼が労働組合の勤務になじめないから外してくれと言って来たのか、はたまた、何か当社の労務管理に問題が起

こっていて、正式に労組から問題提起する前に内々に知らせておきたい、そんな意図があるのではないかと勘繰った。

とはいえ、「内々に」と彼のメールにはあった。
組合活動に関することなのか、それすら書かれていない。まともに受け取るかどうか、判断基準のボーダーライン上にあった。わたしは、一抹の不安を覚えつつも、部下には漏らさず、密かに彼の接触を待つことにした。
次の日、携帯電話にメールが入った。
わたしは、それに応じて、会社のある場所から少し離れた元町の喫茶店で勤務時間後に会う約束を取り付けた。

ＪＲ元町駅内の喫茶店の前でわたしは、腕時計を見て時間を確かめた。
一杯飲むにはちょうどよい時間帯だった。しかし、夕食には少し早いし、軽食を取るには遅すぎる。話の内容はわからなかったので、コーヒー一杯で持たせるつもりだった。
わたしが店内に入ると、少し奥まったテーブルに彼は先に来ていた。

「川島部長。お呼び立てしてすみません」
「いや、いいんだよ。組合のために働いてもらっているのは、ひいては会社のために動いてもらっている様なものだからね」
わたしは、そう言いながらテーブルに着き、近づいてきたウェイトレスにコーヒーを頼んだ。
「それで、話があると言うことだったね」
「はい。実は、とんでもないことを耳にしてしまいまして。……それで、本来なら労務課長か誰かに報告を上げるべきと思ったのですが、ことがことだけに、話を外部に出すこともはばかられまして」
「ふうん。こんな場所ではまずかったかな？」
「いいえ。聞かれて困るのは会社の人間だけですから。ここなら、誰もいないでしょう。出張で使うのは神戸駅だし、新幹線を使うなら新神戸だし、元町駅を使うことはまずありませんからちょうどいいと思ったんです」

ウェイトレスがブレンドコーヒーを二つ、トレイに載せて持って来て、わたしたちの目の前に置き、「ごゆっくり」と言って下がって行った。わたしは、とりあえず、カップを手にして、香りを嗅いだ。モカとキリマンジャロの微かな香りが漂っていた。
「とんでもないことって、会社の経営に関わることかい？」
「はい」
彼はコーヒーに手をつけずに答えた。「元々、うちの労働組合は組合員から徴収している組合費で活動しています。ご存じですよね」

「うん」
「しかし、昨今の会社側の人員削減で、労組自体の存続が危うくなってきました。まあ、今まではあってもなくてもどうでもいいような組合だったから、それはそれでよかったんです」
正直、彼を含めて数名の専従職員を抱えるのが精一杯の所だろうと思われていた。しかし、現在抱えている労働問題は複雑である。長時間労働・サービス残業・持ち帰り仕事など、社会問題化している課題を当社も抱えていた。労働組合は労働者をそんな会社側の過酷な命令から守るための組織で元々からしてそうあるべきだったはずだ。しかし、先に述べた、組合の弱体化で、もはや労働者を守るどころか、自分たちの立場を守るのが精一杯の組織に落ちぶれていた。
「国際コミンテルン……存在はご存じですか？」
「何だって？」
わたしは、耳を疑った。かつて革命によって社会主義国家を次々と樹立していった国際組織の名を彼が挙げたからだった。しかし、９０年代の共産国家の崩壊で、組織自体がなくなったと聞いていた。
「そこから組合への活動資金供与が画策されています。委員長は乗り気なのです」
「そんなものに、組合が乗っ取られたら、労使協調関係が崩れてしまうじゃないか」
会社経営陣と労働組合が仲良く手を取り合って、高度経済成長を支えて来たのだ。会社あっての労働組合。労働者あっての会社経営と手を取り合うのは、いい意味で健全なことだと考えられていた。
「しかし、君。それが事実だとして、そんな重大事を労務担当部長に密告していいのかい？」
「もちろん、条件があります。この専従期間が終わったら、経歴上のブランクと見なさず、わたしを主任待遇で元の職場に戻して欲しいのです。それと、スパイ行為に対する対価は当然いただきます」
何とも厚かましいやつだった。しかし、そのくらいのことはしてもいいくらいの情報源になり得た。国際コミンテルンと張り合うには、尋常な手段ではやっていけないだろう。彼らの手の内を事前に知り、先手先手を打っていく。これしか切り抜ける方法はなかった。それでなくても、今の会社の労務管理に問題が多すぎたのだ。万が一、敵対的組合に取って代わられ、会社の問題点を全部指摘された場合、機能不全に陥ることは容易に想像が付いた。

コーヒーを一口飲んで、その苦みが舌の上に残った。普段なら、この苦みを楽しんでいるくせに、こんなとき、苦みは苦しみになってくる。
――そうだ。国際コミンテルンのやり口って？
わたしは、彼らのやり口を思い起こした。先輩管理職から戦後すぐだった当時の苦境を何度も耳にタコができるくらい聞かされていた。

経営内部にスパイを送り込み、内部情報を事前に察知する。というのも作戦の一つだった。
――もしや？ わたしは、目の前の若者、旭健太郎が本当に会社側のスパイになる気があるのか疑問を抱いた。いや、一抹の不安と言った方がいいかも知れない。試しに世間話を装っていくつかの質問を彼にぶつけてみた。
「君？ ご両親は健在かね？」
「いいえ。両親とも二年前に亡くなりました。事故でした」
「そう。お気の毒だったね。君の家族は？」
「まだ独身です。兄弟もいません」
恐れていた通り彼は失うものが何もない身の上だった。
わたしの彼に対する疑念は深まって行った。
――もし、わたしが彼の申し出を断れば、組織は彼がスパイになろうとしたことがバレたと考えるだろう。彼は組織で失脚する。いや、もし、彼が組合のスパイであることを承知の上で、わたしが彼を利用すればいいではないか。二重スパイというやつである。
わたしは、コーヒーをお代わりした。
「善処しよう」
わたしは、彼に返事した。心の中であっかんべえをしながら。

それ以来、彼は組合の内部情報をわたしの元にもたらす様になった。わたしはその都度、会社の機密交際費から、彼に報酬を渡した。もちろん、会社の対応状況も彼に教えてやった。組合と背後にいるコミンテルンに筒抜けなのを承知の上で、重大な結果をもたらさない様細心の注意を払ってのことだった。
こうして、再び、労使協調関係が築かれつつあった。薄氷の上にいる状況ではあったが。
そして、社内では、相変わらず社員の長時間労働が常態化しているのであった。了

北斎

北斎

わたしの元にその絵が持ち込まれたのは三月下旬の金曜日の午前中のことだった。男は紺のスーツを着こなし、凝った柄の赤いネクタイをきちんと締めていた。彼はアタッシュケースの中からプラスチックのクリアケースにしまわれた絵を机の上に出した。
「北斎ですね」
わたしは、カタログを見ることもなく答えた。
「そう思われるのですが、本物かどうかを鑑定してもらいたいのです。わたしのクライアントは海外のとある東洋美術の蒐集家で、日本の古美術である『ウキヨエ』を是非とも手に入れたいと考えているのです。それも、一級品を、です」
「レプリカなんかではなく、本物を？」
「ええ」
男は頷いた。
わたしが北斎と断定したのは、その特徴が絵に現れていたからだった。もう、浮世絵を扱って三十年にもなる。線の躍動感、色使いを見ただけで、誰のいつの作品かわかるようになっていた。
しかし、このとき、微かではあるが違和感があった。どこがどう変だとか言う訳ではない。絵の筆遣いは北斎のものであるし本物だと思った。落款はなかった。問題のない作品だと思うのに、何らかの理由で本人は納得がいかず判子を押さなかったのだろう。

持ち込まれたのは「諸国瀧廻り・東都葵ヶ岡の瀧」と呼ばれる葛飾北斎の江戸期・天保年間の作品だった。諸国瀧廻りシリーズは全部で八作からなり、この葵が岡はあの富嶽三十六景にも取り入れられている北斎の名品の一つだった。青色を基調にして躍動感あふれる瀧が湖をバックに描かれ、手前に人足が二人、奥に八人、そして番家が配置されている。

古来、絵の具は貴重品だった。
宝石や鉱石を粉末にして膠や糊で溶いて使用した。元々が宝石であるから、色によって高いものとそうでないものがあった。鮮やかな青は特に稀少性が高かった。スペインと南米で僅かにしか産出しないラピスラズリを粉末にして使用していたので、よほど裕福

なパトロンがつかないと画家も使用出来なかったのだ。だから、フェルメールは絵のサイズを小さくしたり、ルーベンスは安い青を使用したり、レンブラントは極力青を使用しないなどという例もあったのだ。因みにそのためにレンブラントの絵は褐色が多い構図となっているものが多いと言う。
これは日本画家も同じ事情を抱えていた。日本ではラピスラズリは採れないので群青や緑青と呼ばれる鉱物を粉末にして使用した。ただしこれはラピスラズリほど鮮やかな青は出ない。日本画の青・碧は淡い青である。

芸術界の転機はやはりヨーロッパで起こった。
産業革命である。化学工業が盛んになり、無機・有機化合物を利用し、様々な色合いの絵の具が安価に生産される様になり、一気にポピュラーな芸術表現手段となった。それまでその画家の秘伝だった絵の具の調合が不要になり、工業製品として絵の具が販売されるようになったのである。
もう、裕福なパトロンがつかなくても、誰でも絵を描くことが出来る様になったのだ。

工業生産の絵の具は江戸時代末期にドイツから清国を経由して日本にもたらされた。
北斎の使った鮮やかな青は、「プルシアンブルー」「紺青」と呼ばれたものである。成分はフェロシアン化鉄だ。北斎はこの色を効果的に用いその圧倒的な躍動感あふれる構図でもって迫力ある、かつ、気品のある作品を次々に産み出し、人々を魅了した。
北斎の浮世絵は一般には版画と呼ばれている。数枚の版木を使った多色刷りの版画である。江戸時代初期には線画に墨を乗せて刷っていたものが絵の具の普及によって多色刷りの導入が可能になり、出版物として市民に普及した。
この時代、浮世絵の生産は出版業となり、絵師、彫り師、摺師と分業化がなされた。北斎はその中の絵師である。しかし、卓越した才能を持ち、しかも、九十歳になるまで創作を続け、勢いが衰えることなくその生涯を終えたため、膨大な作品が残されている。
浮世絵の元となる絵から、版木を彫る。これには、山桜の古木が使われる。日本の版画では板目方向に使用されていた。

わたしは、預かった「瀧」の絵を見て、刷りむらから、版木と絵の具の種類を見極めた。確かに、山桜であることに間違いはなさそうだし、色も北斎の使用していた「紺青」だった。構図も線の躍動感も確かに彼の作品と見て間違いはなさそうだ。
しかし、何となく引っ掛かかるものがあった。第六感とも言えるもので、口頭でこうこうこういう事情があって贋作だと思いますとは言えないレベルの直感だ。

「この絵の出所はどこです？」
わたしは男に尋ねた。

「去年のことです。とある、としか申し上げられませんが、事業に失敗して自己破産した会社経営者がいました。管財人は家と有価証券、それから美術品を競売に掛けました。その美術品の一つがこの浮世絵なのです。これにはすぐに買い手がつきましたが、何分、海外の蒐集家であるため、これが贋作でないと言う保証が欲しいと言っています」
「なるほど。と、言いたい所なのですが、少し調べる時間を下さい」
「難しいのですか？」
「いえ、九十九パーセント本物だと思います。しかし、何かが引っ掛かるのです。その何かが何であるかはすみませんがわたしにもよくわかりません。すみません。時間を下さい」
わたしは、すみませんを繰り返し、この絵を少し調べて見ようと言う気になっていた。

日本画や西洋画といった絵画と異なり、浮世絵は出版物の一つである。大体、一つの版木に対して百部が刷られているものである。だから、同じものと言ってしまえば語弊があるが、この世に同じものが存在していた。
山桜の古木を小刀で彫って絵の具を塗り転写させたものである。だから、同じものと言っても何度目の転写かで微妙に線が異なるのも特徴だった。版木の強度はそこそこ保たれてはいるものの、やっぱり、木材である。何度も刷るうちに、細かい凸部は段々と擦り切れてくる。そうすると線から鋭さが消えるのである。
わたしは、客が帰った後、浮世絵をクリアケースから取り出し、紙質を調べ、そして、光に透かしてみた。何となく、その絵の製造工程が頭に浮かんできた。
――これは？
ふと、気付くことがあり、わたしは、そのひらめきの裏付けを取るため、元の持ち主の連絡先を教えてもらった。破産手続き中であり、管財人を通してすぐに住所地がわかった。
「ごめんください」
わたしは、老経営者のアパートの一室を訪れた。
はげ上がった頭に、ボロボロのシャツを着た八十間際と思われる男が一人で住んでいた。部屋の中には小さな卓袱台が一つと座布団が一つあるだけだった。
「お一人でお住まいですか？」
「女房には先立たれましてね。今は一人です」
「あなたから差し押さえられた浮世絵のことで少しお尋ねしたいことがあるのです」
そう言うと、老人はぴくりと眉を動かした。
「浮世絵はたくさんありましたよ」
「北斎の瀧のぶんと言えばおわかりでしょう？ あなたは、線の一本一本についてまで詳しく、いや、頭の中に今もあるはずです」
そういうと、老人は少し視線を左に向け、そして、上を向いた。観念したようだった。
「あんたは、わたしから全てを取り上げる気ですか？」
「いえ、真相だけ聞ければそれで満足です。あの絵の出所を聞きたいのです」
そういうと、老人は部屋の中にわたしを招き入れた。部屋の中には彼の趣味と思われる、彫刻道具が散らかっていた。版木に彫刻刀、絵の具にバレン。そして、和紙の束が置い

てあった。年賀状も版画を使用したらしく、今年の干支の絵が入った版木が置かれてあった。

「わたしは、昔、若かったときに北斎の版木をたまたまアンティークショップで見つけたのです。諸国瀧巡りシリーズの一つ、葵が岡の瀧でした。でも、全部が揃っていた訳ではありません。八枚のうち三枚しかありませんでした」

「残りの版木は、あなたが作った？」

「はい。……元の彫り師の真似をして作り上げました。江戸時代の彫り師に負けないという自負がありました」

「絵の具は確かに紺青の様でしたが？」

「同じものです」

――そういうことだったのか。わたしは違和感の元に合点が行った。絵の具のフェロシアン化鉄のシアンと鉄はこの一五〇年の間に劣化しているはずだった。この老人の使った何年か前なら、劣化はほとんどない。違和感の元はこの色があまりに鮮やか過ぎることからくるものだったのだ。

版木の半分は本物だが、残りは贋作。絵の具は最近のもの。とすれば、あの絵は贋作ということになる。わたしは、自分の第六感が冴えていたことに満足し、このアパートを後にした。報告すれば版木も差し押さえ対象になるだろう。しかし、このことは黙っておくことにした。男には贋作だったことだけ報告した。了

柿とメジロ

柿とメジロ

何年か前、近くの県道を工事のクルマや土砂を積んだダンプが数多く通り過ぎた時期があった。山を削り、トンネルを掘り、谷には橋を架け、そして裏山に新しい高速道路が出来た。部分開通した当初はあまり通るクルマも少なく、広々した片側三車線の道路の上で「野球が出来るんじゃない？」と、悪口を言ったものだった。折角の道路だったが、部分開通では乗ってもすぐに降りなければならない。高い高速料金を払ってまで乗る価値は、ほとんどの人に取り何も見出せなかったのだ。その結果、見ているとたまにびゅんと飛ばすクルマが一台きりという状態が続いたのだ。

そして、時が経ち、全面開通するとクルマの通行量は一気に増えた。既存の高速自動車道から分岐し、本州の最西端まで最短距離で行き着くことが出来る。新たな交通の流れが出来た。そして、便利になった新しい高速道路には乗る人も増え、それに比例してそこから降りる人も増えた。インターチェンジに接する周辺の県道にもクルマがあふれることとなった。

県道に新たな道の駅が出来たのはそんな時代のことだった。

先日、田舎のおばから熟れた柿をもらった。

「柿がたくさん余ったんだけど、要る？」

「本当？ 助かるわ」

と、母が答え、肥料のマークが入ったビニル袋一杯の柿をもらったのだった。

大きな農家で、家の前に池があり、その端に柿の木がなっていて、秋になると橙色の実がたくさん鈴なりになるのだ。それをもいでかつては食べたりしていた。

そのまま出荷出来そうなほどに甘い柿なのだが、大きさや見た目に規格外ということもあり、農協には出荷出来ず、そのままうちにくれていたのだ。

しかし、数年前に道の駅が出来てから、規格外でも出品できることになり、あまりうちには回ってこなくなっていた。収入に変えられるものなら何でも出品する。それが基本的スタンスだったようだ。

一般ドライバーにとって道の駅は見るだけでも楽しい場所だ。一応、地元農家からの出品が多いが、手作りなら何でもいいらしく、農産物以外でも、漬け物やお総菜から手芸品まで数多く並んでいる。

そんな中、道の駅にも出せないレベルの規格外の品を届けてくれた。

見た目は橙色の表面に黒い斑模様があり、触った感じはぶよぶよと柔らかく、かなり熟している。そのうち何個かは本当にじゅくじゅくに熟していた。包丁を入れるまでもなく崩れてしまいそうだった。こんな柿が好きだと言う人も中にはいるだろう。甘い甘い秋の味覚である。

しかし、わたしは、むしろ固めの方が好みだった。羊羹くらいの歯ごたえで、甘みは控えめ。そんな熟す直前くらいのいい頃合いの柿が好きだった。

――そんなに柿が好きならスーパーで買ってきて食べればいい？

確かにスーパーで買ってくるなら、好みの柿を好きなだけ味わうことが出来るだろう。しかし、売っている柿は結構な値段がついている。言うなれば高級品だ。柿はあくまでも庶民の味である。高いお金を払ってまで食べる趣味はなかった。余り物をもらって、遠慮がちに感謝の言葉を述べて一口味わう。そんな果物の一つだった。夏なら規格外の夏みかんやスイカがこれに当たるだろうか。

このじゅくじゅくの柿は食べられそうになかった。

「庭に出しておけば、小鳥さんたちが食べるんじゃない？」

と、母は言った。我が家の庭のサザンカの花の咲く時期にときどき野鳥が飛んできてい

た。メジロにウグイス、ヒヨドリにスズメ。色んな野鳥が庭に飛んできていた。そして、ちょいちょいと器用に花に頭を突っ込み、蜜を吸うのだ。春にはウグイスも来たし、時折枝にとまり、いい声で鳴いてくれたりもした。最初から「ホーホケキョ」といい声で鳴くわけではないこともこのとき知った。

春先までは「ホーホー」とか、「ホーキョ、キョ」とか、不器用に鳴き、段々と練習を重ねるごとにうまく鳴くようになっていく。これは、他のトリとの競合によって向上していくものなのか、あるいは元々からのそういう本能なのかはよく知らない。

そこで小鳥にあげようと、熟し過ぎた柿を串に刺し、木の枝に引っ掛けて置いた。

何日かして、庭にメジロがやって来てついばんでいるのを見ることが出来た。

「おい、来てるぞ！」

「しっ、静かに。あーあ、逃げていった」

という、会話がよく続いた。

警戒心が強いのか、いや、むしろ強くないと自然では生きていけないのだろう。人に愛想のよい野鳥など聞いたことがない。とにかく、人の気配に敏感で窓越しに人の影が映った途端、さっと羽ばたいて逃げていった。

やがてそうこうするうちに、こちらも、観察のコツがわかり、メジロが逃げない頃合いをつかむことが出来た。隣の部屋からガラス窓越しに、そっと、見るだけにするのである。

メジロは枝にとまると、辺りを見て警戒心を振り払うことなく、用心しながらも、でも、柿の実が気になるのだろう、そっと、嘴をつけた。

その姿が何とも言えず可愛らしかった。

遠慮がちに辺りを見、ちょっと嘴をつけてはまた再び辺りを見渡す。やっぱり野鳥である。餌を食べるときが一番無防備になるのをわかってのことらしかった。天敵のカラスや鳶に襲われないよう、細心の注意を払っていた。

ある日、山にハイキングに出掛けた。

もっと、メジロたちはじめ、野鳥の生態を詳しく観察したい。そう思ってのことだった。

野鳥の会会員になったつもりでカメラに望遠レンズをつけて持って行った。あわよくば野鳥をカメラに収めようというつもりだった。

重いカメラをバッグに入れて肩からたすきに掛け、山道に入って行く。

昔は一、二時間歩いても終わらないくらいの森だったところだ。そして、森の中の小径を抜けていくと隣の市の境にある村に出た記憶があった。

しかし、そこはすでに切り開かれ、道の左側は公園とゴルフ練習場に姿を変え、別の一角の谷は建築廃材で埋め立てられ産廃処分場となっていた。もう、野生動物のすみかではなくなっていた。

「ええ？ いつの間に変わったんだよ？」

わたしは不満たらたらの口調で文句を言った。

「多分、ダンプが一杯走っていた時期があったじゃない？ あの頃だと思うわよ」

と、妻が答えた。

わたしは、山に野鳥の類が一羽も見かけないことに気がついた。すでにカラスでさえ撤退した感じだった。

「山に住めなくなったから、住宅地やうちの庭に野鳥が来ていたと言うのか？」

「多分、そんな感じじゃないかしら……」

わたしは、知らぬ間のこの二、三十年の間にすっかり開発が進み、森が失われ、山が山でなくなっていた事実に愕然とする思いだった。

わたしはメジロが、そしてその他の野鳥たちが、なぜ住宅地であるわたしの家の庭に来たのか、その身の上を慮った。野鳥たちは元の住処を人間の営みによって奪われてしまったのだ。

結局、望遠レンズつきの重たいカメラは使わずじまいだった。

産廃処分場やゴルフの練習場など、撮ってもしょうがない。わたしが望んでいたのは、山の緑の木々と、そこに飛び交う野鳥たちの可愛らしい姿だった。もっとも、素人のわたしの技術では、飛び交う小鳥たちをファインダーに捕らえることは可能だったかどうかわからない。

しかし、庭の木に飛んでくるメジロが柿を食べる姿をカメラに収めることが出来た。

わたしは、その中の一枚だけプリンターで写真用紙に印刷し、ことあるごとに人に見せることにした。非力なことこの上ないが、少しばかりの自然保護活動の一助になればと思ってのことである。

しかし、きょうび、メジロを知らない人もいた。

「このトリは何という種類ですか？」

「メジロってこんな色だったっけ」

「きれいに撮れましたね」

最後の一言はわたしには嬉しかったが、目的とするところではなかった。

そして、それ以来、庭の木の側に餌を置くことを忘れないようにしている。了

放屁

放屁

指揮者の合図で演奏が始まった。ノーカットで十五分のフレーズだった。わたしは、譜面を見つつ、指揮者の指示を見ながらバイオリンを演奏し続けた。使いこんで二十年になるニスの剥げたボロボロのバイオリンだった。もちろん、きれいな楽器も持ってはいた。映画のバックグランドミュージックの収録現場で、観客は監督とプロデューサー、音響監督だけであったので、見てくれは誰も気にしない。

そんな訳で、人目に触れない演奏のときは音が一番気に入っているこの楽器を専ら使用していた。

管弦楽器の総勢十六名の編成だった。バイオリンの他、ビオラとトランペット、チューバ、トロンボーンが数名いた。

映画本編ではヒロインが椅子に腰掛け、テーマである人生論を静かに語る、十五分間のノーカット映像が流れていた。独白は進み、音楽も静かに進行する。そして、山場。演奏は高らかに、燃えたぎるように奏でられた。トランペットの男は額から汗をかいていた。

独白が終わり、敵役の男が入ってくる。そしてヒロインは驚き立ち上がる。わたしはバイオリンの独奏を奏でた。

そのとき、わたしは不覚にも放屁してしまった。ーーブビッという音が微かにした。

取り直しだ。と、その時わたしは思った。十五分間ノーカットだ。また取り直しかよ。と言う、皆の不満げな顔が心に浮かんだ。

しかし、音響監督は何も気付かない風で、そのまま演奏を取り終えた。

「しばらくお待ちください」

スピーカーを通して、ミキサー室から指示を出してきた。皆は真剣な目つきでさっきの演奏の結果を待った。

「テイク十一、今のを採用します。皆さんから何かありますか？」

わたしは焦った。さっきの放屁がもしかしたらバイオリンにつけたピックアップマイクで音を拾っていないか。だとしたら、なぜ音響監督は何にも言わないのだ。怠慢ではないか。でも、これを採用すると言っている。そう言うからには、何も問題がなかったのだろう。それはしかし、演奏家としてはいと言えることではなかった。

わたしは、おずおずと右手を挙げようと、そろりそろりと、それでいて、辺りの雰囲気をくみ取りながら動き出した。でも言い出せなかった。いい大人が放屁したからと言って演奏をやり直せと言うのである。とてもではないが言い出せる雰囲気ではなかった。

そのときである。

トランペットの男がさっと挙手した。

「音が濁っていた気がするんです。もう一回いいでしょうか？」

周りがざわついた。もう、テイク十一である。通しで演奏して十五分もかかるのだ。それに、収録前のマイクテストにも同様の時間をかけ、一度演奏しているから、十二度目の演奏だった。彼の提案はさらにもう一度と言うものだった。

「いや、……いいですね。今の濁った感じが映画の雰囲気とマッチしている。監督はそう言っています」

「はい。わかりました」

監督がいいと言えばそれで作品としては完成したものとされてしまう。それがこの世界の掟だった。

わたしは、最後まで放屁について申し出ることは出来なかった。

そして、何週間か経過し、映画の編集が終わった。関係者向けの試写会が行なわれた。

一演奏家にしか過ぎないわたしが呼ばれることはなかったのだが、わたしは著しく不安だった。そして、無理を言い、音響監督のつてから試写会に潜り込ませてもらった。

ここには、主演俳優と主要キャスト、そして、監督やプロデューサーと言った映画を代表する面々が顔を連ねていた。わたしは、どうして、ただのバイオリニストがこんな所に紛れ込んでいるのだ？ と、言われるのを承知の上、いや、承知してはいなかった。誰何されるのを案じ、ニット帽で髪型を隠し、サングラスとマスクで顔を隠し、ジャケットの上からコートを羽織り全く体型もわからないようにし、さも、映画の原作者の関係者か誰かだと思われるような風を装って、前席右側のスピーカーの前に陣取った。

上映が始まると、わたしは軽く目をつぶり、スピーカーから流れてくる効果音とバックグランドミュージックに全神経を注ぎ込んだ。音符一つの狂いも見逃さない。普段の音響監督がそんな立場だったのだろう。その彼があの「事件」を見逃すなどあってはならないのだ。

そして、物語が進み、後半二十分に差し掛かり、例のヒロイン、女優の高島彩香の独白シーンになった。彼女の台詞の裏側で、音楽が効果的に場を盛り上げた。バイオリンの悲しげな響きが、この場面の緊迫感を嫌が応にも盛り上げてくれる。わたしは、ぎゅっと目をつぶった。この後すぐの瞬間のはずだった。

わたしの一世一代の大失態が画面の向こう側で大々的に披露されてしまう。

心臓が縮み上がるとはこのことだった。比喩ではなく、本気で縮み上がっていた。

そこに敵役の男が画面に入ってきた。ヒロインはびくっとして立ち上がった。動作に合わせ、バイオリンのキュッという音が重ね合わされていた。そのとき、微かにブビッという、本当に微かな音が……いや、本当に微かすぎ放屁してしまったわたし以外の誰にも聞き取れなかったに違いない、その音がマイクで拾われ、それが聞こえた、そんな気がした。

まるで彼女が咄嗟に立ち上がりその勢いで放屁してしまったかの様に。

試写会は何の問題もなく終了し、最後にプロジェクターの前で監督がヒロインの高島彩香から大きな花束を受け取り、そして、彼女と握手した。

「えー、この映画が素晴らしいものになったのは、ひとえに今この場にいらっしゃる皆様の、本当に皆様の力の賜であります。この場をお借りして御礼申し上げます」

と、言い、深々と頭を下げた。わあっという歓声と、割れんばかりの拍手で会場全体が覆われ、わたしの放屁問題はどこかに飛んで行ってしまった。

試写会の帰り道、わたしは、激しく動揺していた。この映画が全国で上映されたら？ 見に来るのはファンだけではない。ファンなら、細かいノイズなど気にせず、ヒロインの迫真の演技だけに気を取られるだろうが、アンチがいる。アンチは、ヒロインの化粧の濃い薄いや演技にケチをつけ、そして、そんなノイズに耳を澄ませ、そらみたことか、彼女が立ち上がりざま放屁したと見抜き、言いふらすだろう。そんな事態になってから、実はわたしでしたなどと、とてもではないが言い出せる訳がなかった。それでなくともわたしは気の小さい人間だ。そうでなかったら、映画の効果音演奏家などではなくソロバイオリニストとして堂々と人前で演奏する道を選んでいただろう。

もし、高島彩香のスキャンダルが表沙汰になれば……。わたしは、陰鬱な気分になった。もはや、遺書を残して飛び降り自殺を図るより他残された道はなかった。

わたしは音響監督にそれとなく打診してみた。あのテイク十一ではなく、その前の演奏、テイク十を採用することにして音源を差し替えてもらえないかと。

「どうして、テイク十はトランペットの音が高すぎるからって取り直しになったんじゃない？ あのペットの音じゃ、ヒロインの演技を台無しにしてしまうよ」

「で、では、テイク九は？」

「おいおい、変なこと言うね。テイク十一に何か問題でもあるのかい？」

彼は不審そうな顔になった。

「あ、いえ、いいえ。何も問題はありません。会心の演奏でした。でも……」

「何だい？ でもって？」

「あの、……そ、そう。トランペットの彼が言う通り、音が濁っていたじゃないですか？」

「ああ、あの件ね。あれは濁っていた方が演技の雰囲気にマッチするからって監督が選んだんだ。問題はないね」

「でも……」

「しつこいねえ。君。こっちも忙しいんだよ。君の演奏に満足がいかない気がしているんだろう？ その気持ちはうんとわかるよ。でも、それでこそプロの演奏家だ。百点じゃないからって、取りこぼした一点を気にするんだ。しかし、十六人の演奏全部が百点になることなんてありえない。九十点以上ならプロとして合格だよ」

「はあ……」

これ以上、押し切ることは出来なかった。

最大の問題は、ヒロインの高島彩香が立ち上がった瞬間に放屁の音が重なっている点だった。もし、交差点のクルマが行き交うシーンなら、何の問題もなかっただろう。しかし、場面は深閑とした日本家屋の和室での出来事のシーンだった。だからこそ、バイオリンの悲しげな音が効果的に響いていた。

わたしは最悪の事態を考えた。

そして、映画会社に手紙を書いた。

――映画「永遠の深閑」の上映を中止しろ。さもないと映画館で爆破テロを起こす。

世間は騒然となった。話題作だけに、話題性にも富んでいた。警察はものすごい勢いで捜査を開始し、使ったプリンターの購入者からわたしが割り出され、瞬く間に逮捕されてしまった。

警察でのわたしの供述は一切信用されなかった。了

完璧な喫茶店

完璧な喫茶店

わたしがたまたま今日淹れたコーヒーは、我ながら例えようもないほど、美味だった。

よい香りが部屋中に漂い、一口飲んだ後に口の中に広がる苦みと、そこはかとない酸味がわたしの味蕾と鼻腔を虜にした。コーヒーの香りは人生をより深い物にしてくれる。少なくともわたしはそう信じていた。

「この豆、こんなに美味しかったっけ？」

わたしは、一人つぶやく。こんなに美味しいなら、商売としてやっていけるのではないか。そんな妄想に取り憑かれてしまったのだった。

そして、さっき淹れたときのレシピをもう一度再現してみた。豆の種類、煎り方、挽き具合、さじの何分目だったか、水の種類、アルコールランプを灯すタイミング。そして、カップの温度と注ぎ方。

――我ながら完璧だった。こんなに美味しいコーヒーは飲んだことがない。そう確信したのだった。

その日以来、本業のサラリーマンの仕事が上の空になってしまった。

あのコーヒーをたくさんの人に飲んでもらいたい。そのために、喫茶店を開業することまで考えてついていたのだ。

――どのくらいお客さんが来れば商売として成り立つのだろう？

わたしは、計算用紙を取り出し、コーヒー一杯に掛かる費用とそれに載せる利益を出し、大体、街中の喫茶店のコーヒーってこのくらいの値段だなあと実感するに至ったのだった。

そして仕事の合間にあちこち歩き回って物件を探して、ついに三宮の雑居ビルの一階に場所を決め実際に開業するに至った。ここなら駅から近いし、時間つぶしにでも寄ってくれる客には事欠かないと思ったのだ。

最初に入ってきた初老の男性は、毅然とした表情をしていた。身なりはラフなようでいて、要所要所はきっちりまとめていた。シャツの胸元には小粋なループタイ、ジャケットにはどこのものかはわからないが銀色に光るバッジをつけ、手首には長年使い込まれたロレックス・デイトジャストが光っていた。

男性はわたしの顔をちらりと見ながらメニューに目を移し、「モカ・ブレンド」とだけ言った。

わたしは、にわかに緊張してきた。何度も練習したコーヒーだった。失敗のしようがない。レシピは完璧のはずだった。

おずおずとアルコールランプに火を灯し、水を入れた容器を加熱する。こぽこぽと泡を立てながら、サイホン管を昇って行く。わたしは、コーヒーを入れた容器に熱水が満たされるのを見計らい、棒でかき混ぜた。

そして、温めてあったカップに渾身のコーヒーを注ぎ入れた。

出来上がると震えそうになる手を押さえ、ソーサーの上に載せたカップを男性の前に差し出した。

男性はカップを手に取ると、顔に近づけ、軽く香りを嗅いだ。ふん、と、鼻から息を漏らした。

――どうだったのだろう？ 美味しいと思ってもらえたのだろうか？ わたしの不安は増

大した。

「エチオピアかね？」

男性はそれだけ口にした。

「左様でございます。エチオピア・モカにホンジュラスをブレンドしています」

わたしの鼓動は高まっていった。

男性はそれ以上、何も言わなかった。静かに残ったコーヒーをのどに流し込み、口の中で反響する苦みと香り、コクを楽しんでいるかのようにも見えた。その反面、どこか不満げにも見えたのだった。

どこが悪かったのだろう？ わたしは不安にさいなまれた。男性がカップを手にしている間中、苦悶の表情が出そうになるのをこらえた。

そして、飲み終えると男性は時計をちらりと見、席を立った。勘定を払い、ドアを開けると駅に向かって歩き出した。その後ろ姿をわたしはしばらくの間見つめていた。

客はこの男性だけではなかった。この後次から次へと客が入ってきた。まるで、最初の一杯の香りが他の人を誘い出したかの様だった。

しかし、どれだけ客が入ろうともわたしは満足出来なかった。一口飲んだだけでコーヒー豆の産地を当ててしまうほどのコーヒー通なのだ。あの男性の合格点をもらわなくては絶対に満足できなかった。他の客の評判に満足してしまうのは慢心だと言えた。

あの男性は一体どこの誰なのだろう？

次にその男性が来店したのはちょうど一ヶ月後の同じ曜日だった。

カランとドアベルの音がし、わたしは他の客の注文を取っている最中だったが、予感がして、咄嗟に振り向いたのだった。わたしは、その客の注文を大急ぎでこなし、慌てて水を持ち、男性の元に急いだ。

「いらっしゃいませ」

「モカ・ブレンドを」

「かしこまりました」

全く以前と同じだった。わたしは細心の注意を払い、レシピ通り、正確にコーヒーを淹れた。

男性の元にカップを運ぶと、懐かしそうな目になり、カップを両手で包み、そして一口味わった。

他の客が全員帰った後、店内は男性とわたしの二人きりになった。

「あの……お客様はもしかして、コーヒーの専門家なのですか？」

わたしは無礼を承知で話しかけた。

男性は、鋭い視線でわたしをにらみ、そして、ふっと笑顔を見せた。

「面白いことを聞く男だな。……話せば長くなるが」

「はい。構いませんが」

「君はよくても、わたしは忙しいんだ。また今度話す。お勘定を」

わたしは、男性の機嫌を損ねてしまったかと思った。もう来てくれなくなるのではないか？

しかし、男性は、毎月、決まった曜日に来店し、同じモカ･ブレンドを注文してくれた。

一言二言、話すうちに、断片的に男性の素性がわかったのだ。

何十年か前、定時制高校の頃に港湾労働のアルバイトをしていたそうだった。今のよう

なコンテナ船はなく、荷物はばら積みだったそうだ。岸から小舟、小舟から輸送船まで板を渡し、その上を重い荷物を持って人間が背負って運び込む。そんな仕事があったそうだった。その荷物の中に、エチオピアから運ばれたコーヒー豆の麻袋があり、毎日のように運んでは、仕事が終わると学校に通っていたという。

この荷物がどこかの旦那の嗜好品になるのは想像がついた。自分もいつか、この豆で作ったコーヒーを飲める身分になりたい。そう思って日々働き、そして勉強に励んだ。

麻袋は六十キロからの重さがあり、背負うと腰と肩にずっしりした荷重がかかった。そのせいなのかどうなのかわからないが、身長はそんなに伸びなくなったと言って、悲しげな表情を見せた。そう言ってはいるものの、男性は年齢相応の体格だった。傍目には決してわからない苦労。男性にはコンプレックスとなっていたのだろう。

「当時の高校生はみんな働きながらだったのですか？」

「そんな訳あるものか。学校に通うと言うこと自体が一つの贅沢だったのだよ。皆、義務教育を終えると働いていた。でも、わたしは将来やりたいことがあったから、苦労してまで働きながら高校を出たんだよ」

高校卒業後、東京の貿易会社に入り、世界中のコーヒー豆を扱う仕事に就いたそうだった。

そして、月に一度、東京から神戸に出張するのだという。たまたま駅前で見つけた喫茶店であのときのコーヒー豆を扱っていることを知ったのだった。味わいは今一つ完成度に欠けるものがあったが、コクと香りだけはその当時の思い出をよみがえらせるに十分なものだった。

「今では、神戸出張が楽しみの一つになっているんだよ。……ああ、ひとつ忠告しておこう。この豆はシティ・ローストが合うと思うよ」

男性はそう言い残し、店を後にした。わたしは、レシピを書き直した。完璧な喫茶店にするために。了

完璧な実家暮

收賄

収賄

――賄賂とは自分に都合のよいようにとりはからってもらう目的で公務員に贈る品物や金銭をいい、収賄とはその職務に関して便宜を図ることと引き替えに違法な報酬を受け取ることを言う。

わたしは町役場の係長をしていた。季節季節ごとに色んな業者が挨拶にやってくる。基本的に名刺を置いて帰るだけだが、中には菓子折や社名入りのカレンダーなどを置いて帰るものもいた。多額の金銭･物品は受け取ることは出来ない。しかし、少額のもの、金銭的価値のないものは挨拶代わりとして辛うじて認められてはいた。

その度に、わたしは仕方がないなと言う顔をしつつも受け取った。もちろん個人的にではなく所属している係として受け取るのであり、後でくじ引きをして当たった人が持ち帰るようにしていた。特定の個人に利益が向かない様にするための辛うじて取っていた制度だった。

そんな中しつこい業者もいた。

「頼みますよ係長さん」

その業者は何度も役場を訪れては、わたしに面会の約束を取り付け、貴重な時間を浪費させ、そして、自社の関わっている工事に便宜を図るよう依頼するのだった。

役場は町内で行なわれる各種工事の許認可権を持っている。最終的には部長が許可を出すのだが、その前に、係長が最初に判子をつかなければ、書類審査自体が進まないのだ。つまり、係長の判子が最初の関門になるわけだった。書類の不備や、記載事項の嘘偽り、工事内容の問題点を鋭く突き、全部が全部規則通りに進めようとすると、世の中の工事の８割９割は却下されてしまう。

どこかで、「見逃す」「手心を加える」という安全弁的なものが必要だった。係長のわたしが、明らかに問題点があるということ以外の所で、見逃してやらなければ、この町の経済は立ちゆかなくなってしまうだろう。

そんなわけで、「頼みますよ」と言われれば、どちらかというと、判子をつき易い方の役人だと言えた。

しかし、この業者の工事は明らかに、その過程で出る廃棄物の処理に問題があった。費用を極端に押さえてあった。人件費高騰の昨今、この安さで受注した工事など、きっと、途中で発生した廃棄物をどこかに不法投棄するに相違なかった。

町の経済は回さなければならない。町長はそう考えるだろうし、そう指示するだろう。しかし、町の環境も子々孫々にわたる重大な問題だった。明らかに、問題点のある工事申請など受け付けるわけには行かなかった。わたしは頑として許可印を押さなかった。

わたしは、前もって家族にもこの業者の名前と電話番号を告げておき、決して付け届けなど受け付けるのではないぞと念を押しておいた。

しかし、とうとう、業者がわたしの守ってきた一線を踏み越えてしまった。

子供が以前から欲しがっていた子犬を受け取ってしまったのだった。昼間に町内のペットショップから匿名でのプレゼントがあるといい、連れてきたという。わたしがそのペットショップに電話して確かめると、送り主は例の業者だった。やってしまった。

わたしは、居間に置かれたその贈り物を見た。

白いプラスチック製のケージに入れられた可愛い雌の柴犬だった。ペットショップで調べて見ると８万円相当だった。「挨拶代わり」の贈り物にしてはいささか高額過ぎるものだった。こんなもの受け取っては、大変なことになる。わたしはすぐさま持って来たペットショップにこれを引き取るよう頼むことにした。

電話を掛けようとするわたしの手を妻が引っ張った。

「あなた！」

返そうとしたが、すでに、生後三ヶ月を過ぎた子犬はペットショップでも商品価値がなく、殺処分の可能性もあると聞いたらしい。

「かわいそうよ。それに、こんなに可愛らしいし、あの子にも、もう懐いているのよ」

と言う。子犬のときは人見知りせず、誰にでも懐くものだ。しかし、妻の言うことにも一理あった。もし返して、そのまま売れずに残ったら……。今の段階で三ヶ月の大きさだった。これ以上月数が経つと段々人見知りし始めるし、柴犬は特にその傾向が強いと聞く。四ヶ月目で売れなかったらもう、妻の言う通り処分されてしまうだろう。子犬の可愛らしい所作を見るにつけ、わたしはすでに子犬の虜になってしまいつつあった。

「しょうがないな。俺だって殺処分には反対だよ」

「飼っていいの？」

息子が尋ねた。

「ああ。可愛がるんだぞ」

「うん！」

業者からの高額な贈り物を仕方なく受け取ってしまうはめになってしまった。生の食べ物と生き物だけは、まさに始末に困るもらい物だと言えた。

柴犬は日に日に成長し、知恵がつき身体も大きくなっていった。

大きくなるにつれ、わたしに懐き、段々と愛情が湧き上がり、家族の中でなくてはならない一員となった。

愛犬は家族同然だというが、その気持ちが今になって理解出来た。

業者はそんなわたしにつけ込むように、自社担当工事の認可をするよう求めてくる。

「ポチも大きくなったでしょう？」

担当者は猫なで声でわたしとの面会のアポを取っては日参した。犬の名前はポチではなかったが、わたしも、この段階で強気で拒絶することは出来なくなっていた。そして、渋々担当者と面会し、彼の望むとおりの返答を強いられることとなった。

そして、一旦は却下するが、柴犬のかわいさに負け、つい、認可してしまう。

六ヶ月ほど経ったとき、業者は廃棄物の処理で市民団体に告発され警察の捜査が行なわれた。規定違反が原因のものだった。監督官庁の責任者としてわたしも責任問題が持ち上がる。

「磯野君。ちょっと」

わたしは、渦中の役場の中で課長と部長に呼ばれた。わたしは、あの件だと覚悟した。認可を出したこと自体が問題だったし、それより何より、あの認可の舞台裏で高額の物品の受け渡しが行なわれていたのだ。それは、否定しようのない事実だった。しかし、その証拠となる愛犬も今や家族の一員だった。絵画や壷なら、密かに廃棄して後は知らぬ存ぜぬで通すこともあるいは可能だったかも知れない。

家では息子が毎朝毎晩、学校へ行く前と帰ってから、きちんと時間を決めて散歩させていた。それは、息子の情操教育に取りものすごく良い影響を与えていたと言っても過言ではない。

そして、市民オンブズマンは、どこから手に入れたのかは知らないが、業者の営業収支資料を手に入れ、使途不明金を見つけ、これが収賄に当たるのではないかと声を上げるのだった。手に入れた先は、こうなっては、業者営業部か経理部の内部告発しか考えられなかった。死なば諸共と言うやつである。役場の係長と課長のクビがかかるなら、自分たちも守ってもらえるかも知れないという論理が考えられた。

わたしは、家に帰り、柴犬の頭をなでた。「お前が悪いんじゃないよ。でも、もっと別の人にもらわれるべきだったかもな」とつぶやいた。犬はキラキラした目でわたしをみつ

め、そして、悲しげな声を一回だけ上げた。キュンと。

次の日の朝、柴犬は家から忽然と姿を消した。不思議なことにどこを探しても、全く見つからなかった。

野生動物に襲われたのか、外へ逃げ出してどこかに行ってしまったのか皆目見当がつかなかった。

幸いなことにこのことで収賄の唯一の証拠が消えてしまう。市民の追求も少し緩くなった。

そして上司の課長と局長はわたしをかばった。わたしが可愛くてかばったわけではない。部下の監督責任としていずれ自分にその刃が向けられることを事前に察知したからだった。

わたしは、携帯電話の待ち受け画面に入れていた柴犬の安否を気遣った。賢い犬だった。もしかしたらご主人様の危急を案じて見ずから身を引いたのかも知れなかった。

それ以来、わたしは、いかなる贈り物も受け取ることはなくなった。「お口汚しに」と饅頭とお茶を出されても、柴犬のことを思い出し、絶対に手を出すことはなかった。了

遭難

遭難

わたしは、山合を縫って走る地方の単線鉄道の無人駅前で客待ちをしていた。

この町でタクシーの運転手になって二十年ほどになる。

昔は、乗り合いバスも走っていたが、利用者の減少により廃止され、すでに十五年が経過していた。

その時は少ないながらもいる住民の生活の足がなくなるということで問題になり、町議会にまで陳情が行くほどだった。そして、それ以降、町役場と鉄道会社、タクシー会社が提携して地元のお年寄りのための足の確保という目的を達するために、交代でタクシーが一台、駅前に停まっていることになっていた。今日はわたしの番だったのだ。

わたしは時計の時刻を確かめた。三時間に一本の電車が到着する頃だった。いつもは一人か二人のお年寄りが降りてくる。大抵は町の病院に行った帰り道だ。

この日、一人の老婦人が客となった。白髪頭に白い服。そして顔色は青白く、頬はこけ、足元は頼りなかった。

わたしがドアを開けると老婦人は後席に座った。荷物は小さなバッグ一つだけ。どこかで見たことがある気がした。もしかしたら以前、乗せたことのある客だったのかも知れない。

「田ノ中地区まで」

と、老婦人は告げた。この辺で人間の住んでいる集落は田ノ中地区しかなく、しかも、範囲が広かった。長さ十キロの円で囲まれる山合の集落全体の総称だった。

わたしは、取り敢えずメーターを倒し、タクシーを出発させた。

大きな道から、狭い道へと入り込んでいく。「そこを左に、そこを右に」

と老婦人は後部席から道案内をした。わたしは、対向車が来るはずもないことを知っていたから、そのまま勢いよくタクシーを走らせた。

「ここを右に曲がってちょうだい」

鬱蒼と木々が茂る森の中で、老婦人は険しい方の道を指さした。

「え？」

峠に通じる道から、さらにそこを本当に道があるのかどうかわからない方角を指示したのだ。

わたしは、ごくりと唾を飲み込んだ。

「お客様。こちらは廃道になりますが.....」

もしかしたら、この老婦人はどこか呆けているのかも知れない。そこはかとない不安がわたしの頭をよぎった。わたしは、それとなく老婦人に注意を促した。このままままっすぐ進めば、寂しいところだが民家が何軒か建っていた。どうかそこのお婆さんの一人であって欲しい、そんな願望があった。

「そんなことないわ。わたしのおうちはこちらなの。行ってちょうだい」

老婦人はあくまでも強気でそう言い張った。根拠のない自信と強気な態度。間違いを絶対に認めない。もしかしたらと言うより、確かに軽い痴呆症を疑わせた。しかし、わたしは医者ではなかった。ローカル線の駅前常駐のタクシー運転手の一人にしか過ぎなかった。役割はお年寄りをおうちの玄関まで送り届けること。それだけだった。

「そうですか？」

どう見ても、先は通っていそうになかった。コンクリート舗装の路面は荒れてひび割れ、木の葉で覆われ、所々大きな石が散らばっている。倒木があったのが、土木事務所の手によって片付けられたのか、道路に掛かる部分だけ切断面を残して排除されてはいたが、路肩の木はそのままになっていた。このまま進めるのか疑問に思いつつもわたしはアクセルを細かく踏んだ。タクシーはそろりそろりと道を外れないように慎重に進んだ。コンクリートのひび割れた所を踏みつけたら崖下に一気に滑り落ちてしまうだろう。

クルマは５０メートルも行かないうちに停らざるを得なくなった。大きな岩石が幅員１・５メートルの道の真ん中にあり、完全に行く手を塞がれていた。

バックしなければならない。わたしは、窓を開け、後ろを確認しながら慎重にクルマを後退させた。ガサガサと倒木から伸びた枝や葉とタクシーのボディが擦れる音がした。――絶対に傷がつく。わたしはそう確信した。

何かの拍子にタイヤが小石に乗り上げた。わたしはステアリングのキックバックを予期し、握った手に力を込めた。

「あっ！」

わたしの努力も空しく前輪が小石を跳ね上げ、その反動でハンドルを取られた。わたしのすでに汗で脂ぎっていた右手をするりと抜け、ハンドルは回転した。と、同時に後輪の一部が斜面に乗りかかり、そのまま滑って車体は傾き、ズザザッと音を立てて崖下にずり落ちていった。

ガサガサ、ゴトン、と草と蔓で速度を抑え、倒木に乗り上げて上下に振動し、大きな木にぶつかり滑落は停まったが、その衝撃でわたしは気を失った。

※

「山田さん……。聞こえますか？ 山田さん」

どこからか、わたしの名を呼ぶ中年女性の声がした。誰だろう？ 聞いたことのない声だった。

彼女は白い制服を着た看護師だった。わたしが意識を戻したのを報告するために先生を呼びに行った様子だった。予感は当たり、しばらくして医師が現れ、ペンライトで瞳孔の動きを確かめ脈を取ると、わたしが正気に戻ったことを確信した様だった。

医師はふうっとため息をつき、わたしが事故を起こした直後から今までの事情を説明してくれた。

医師の説明によると、わたしは三日前にタクシーごと田ノ中地区郊外の山の斜面を滑り落ち、気を失っていたところを捜索に来た消防団員に発見され、救急搬送されたことを告げられた。鎖骨と肋骨を折り、さっきまで意識がなかったらしかった。

「お客様は……お客様はどうなりましたか？」

わたしは、事故検分に来た村の交番の巡査に尋ねた。

「いいえ、タクシーにはあなた一人だけでしたよ」

彼は不審そうな目つきでわたしに告げた。

「駅から、八十歳くらいの女性を乗せていたんです。あの落ちた所の上の道の先に家があると仰ってました」

「ええ？」

彼は肩につけた無線機で警察署と連絡を取った。

――ええ、客を乗せていたと証言していますが……ええ、ええ。ガチャッと無線を切った。

「女性の人相は？」

「ええと……髪は……」

わたしは説明しようと試み、たちまちしどろもどろになった。何故なのだろう？ あれほ

ど記憶に残っているのにいざ口にしようとした途端に、思考は支離滅裂になってしまう。

「白髪？ それとも黒かった？ 色は白かった？ それとも黒かった？」

「いや、待って下さい。思い出せないんです」

巡査の質問にわたしは一切答えられなかった。あの老婦人の存在感は頭の中に残っていたものの、人相や服装、持ち物の特徴など、具体的なことは何一つ答えられなかったのだ。

警察では壊れた車両の内･外部を撮影したドライブレコーダーも調べたが、乗っていたのは確かにわたし一人だけだったという。だったら、あの女性は一体何者だったのだ？

わたしは巡査からなぜあの道に入ったのか？ あの先に何があるのか知っていたのか？ 通行止めの道路標識を見なかったのか？ など、猜疑心に満ちた尋問をベッドの上で受けた。そして、わたしは、彼を納得させられる答えを一つとして述べることが出来なかった。わたし自身、あの老婦人さえ乗せなければあんな場所に行くつもりもなかったのだ。そして、通行止めの道路標識を見落とすなどあり得なかった。自分自身はもとより乗客を危険にさらすことになるからだ。

※

一ヶ月後、わたしの傷は癒え、元の仕事に復帰することが出来た。

そして、いつもの通り駅から民家までお年寄りを運ぶ毎日が続いた。

あるお年寄りから気になることを聞いた。

「そう言えば、あんたの落ちた道の先には確かに民家があったな」

そのおじいさんは言った。「八十くらいのおばあさんが一人で住んでいなさった。おばあさんは十年前に歩けなくなって町の特別養護老人ホームに入ったんだ。何でも一ヶ月前に亡くなったらしいよ」

「ええ？ そうなんですか」

わたしは、ミラー越しにおじいさんに返事した。

だとしたら、亡くなって自分の家に帰ろうとして駅からタクシーを拾ったのだろうか？

後日、非番の日にわたしは歩いてあの道を先まで進んでみた。何があるのか自分の目で確かめたかったからだ。

そこにあったのは朽ち果てて倒壊しかかった、木造の民家だった。庭には物干し竿が置いてあり、竿は腐って折れていた。了

おばあさんの背中

おばあさんの背中

わたしは五十代に差し掛かった電子制御機器メーカーの一主任だった。肩書きはあるものの実際に部下を持っていないただの平主任だ。実際の仕事に掛かっている社員たちの負担を減らすべく頻繁に起こるイレギュラーな仕事を主に任されていた。平たく言えばクレーム処理なんかの業務だ。

三月末の金曜日に、ある取引先のスーパーのシステム責任者を紹介された。当社でも扱っていた売り上げ管理システム。平たく言うとレジの制御に関して相談があるみたいだった。先方の、ある店舗の在庫管理をコンピュータで行なっているのだが、毎月毎月、日にちごとにレジの売り上げと商品在庫との差額が合わないということだった。

わたしは名刺交換を終えるや否や、データを見せてもらった。在庫から消えているのは一月は惣菜と菓子パンがそれぞれ三十一個で一一、九一八円。二月は二十八個ずつ、三月は三十一個ずつときっちりした値になっていた。――プログラムの誤作動《バグ》かも？ と、一瞬、レジの不具合を疑った。

横に座って聞いていた部長からは、「時間が自由に取れるのは君くらいのものだろう。対応してみたまえ」と、半分嫌味とも取れる言葉を賜り、その店舗の調査に赴くことになった。部長のコメントは絶対命令に等しいものだった。行って調べて対処せよ。そのままの命令だ。

実況見分を行なうため、わたしは店内に入り、カゴを取った。実際に買い物を行ない、システムに問題があるのか、それともそれ以外に犯人がいるのか、確かめるつもりだった。他のお客さんと同じ様に商品陳列棚を見てまわり、おもむろにいくつか、目に付いた商品を手に取りカゴの中に入れた。

そしてその陳列棚から外れ隣の列に入った。違う商品も手にしてみた。

カゴがいっぱいになった時点でわたしは完全自動化されている最新鋭の人工知能を実装されている無人レジに持ち込んだ。

レジの正面にある側面と底面が鏡になっている箱の中にカゴを入れると、赤いレーザー光が照射され、一瞬でカゴの中の商品につけられたバーコードを読み取った。そして、二、三秒して、画面にスーパーのロゴと店員の笑顔のイラストと共に値段が表示される。わたしは預かった電子マネーカードをポケットから取り出し、画面に接触させた。通常はこれで決済が完了する。

ちなみに、現在では色んな会社が電子マネーカードを発行している。あらかじめお金を充填しておき、買った金額だけ引き去られるのはどことも同じで、独自性を出すために出来るだけ他社も含め、色んな会社や場面で使える様になっているものが多い。有名所では鉄道会社のパスと一体になったものだろう。

このスーパーでは、猫のキャラクターを用い、決済時に「ニャオン」という猫の鳴き声がするので、「ニャオンカード」と呼ばれている。極々一般的なタイプのカードだった。

この猫の声がして決済が完了すると、画面横のプリンターからレシートが発行され、それを持って隣の台に進み、商品を自分でレジ袋（多くはエコバッグだ）に入れて商品を店から持って帰る。

この方式の特徴は、商品の陳列と返品や苦情処理以外に人間の手は一切掛からないということだった。

レジでは売り上げた商品のバーコードを読み取り、即座に店のサーバーコンピュータに商品情報が送られ、サラダオイルならサラダオイル。チョコレートならチョコレートが一個売れたと言うことが伝わるようになっている。

在庫の情報は完璧なはず。だったのだ。どうして在庫情報と売り上げにきっちりした金額が食い違うのかわたしは理解に苦しんだ。レジでは売り上げた金額を常時監視している。そして在庫も監視されている。この両者に果たして食い違うことがあろうはずがな

かった。

わたしは、店の袋詰めスペースではたと考え込んでしまった。

この店の商品を決済せずに持ち出すなど不可能だった。電子情報としては、である。もちろん、物理的に強奪してしまうことは不可能ではない。レジを通らずにむんずとつかんで誰に声を掛けられようとも振り返らずにその場をダッシュして逃げ去ってしまうことである。しかし、そんなことをしたら監視カメラに映像として証拠が残ってしまうし、顔写真が登録されれば文字通りのブラックリストに載り、このスーパーの系列全店舗に立ち入り禁止になってしまうだろうし、その前に警察に捕まってしまう可能性の方が高いと思われた。

現に、月に一万円近い金額の商品が陳列棚から消えてしまっているのである。

その謎を解くことがわたしに課された使命となった。

「どうしますかねえ？」

わたしは、真剣な顔で答えを待ち望んでいるシステム責任者の顔を見て言った。

「それを考えて欲しいのですよ」

「ふうむ。そうですねえ……」

ヒントは、全くない。いや、この店のここまで自動化された在庫情報と買い物決済システムにこそ何か問題があるだろうということは薄々察しが付いた。

このシステムの開発に、このスーパーは巨額の開発資金を投じていた。

数百億円の投資である。管理するコンピュータとその上で動作するソフトウェアの開発にそれだけ投資したのは、それを補ってなおあまりあるメリットがあったからだ。

ここ数年、高騰の一途をたどっている人件費と、それより問題があるのが熟練した人材の確保が困難になってきた点であった。

かつては、子育て中か、あるいは子育てを終えた主婦の手頃なアルバイトかパート労働だったのが、同一労働同一賃金を謳う野党勢力の押しで職場環境が変わってしまい、スーパーのレジという職種が本格的な労働環境となってしまっていた。気軽に応募する人からは敬遠されてしまい新たな人材確保が極めて困難になったのだ。そして、何より賃金の上昇とコスト低減の必要性が、折り合わなくなってしまった。

人工知能を応用したコンピュータレジの導入は避けて通れない道だったのだ。

論理的に抜け道はなかった。

完璧なレジシステムのはずだった。

アナログな犯人に対してはこちらもアナログに徹するほかはない。わたしは、その日の夕刻から、サングラスをして売り場の中を監視することにした。少しでも怪しげな客がいれば後をつけ、ちゃんとレジを通るか見届けた。

そして、店外にまで見届けるとまた店内の監視に戻るという作業を繰り返した。

わたしは、レジで五十人目の客を見届けた後、不審な行動をしているお婆さんの姿を認めた。

お婆さんはカゴをレジの中に入れ、支払い画面が出るとカードをぺたりと当て、「ニャオン」と猫の鳴き声がすると、そのままカゴを持って後ろの台にカゴを運んで行った。

わたしは違和感を覚えた。

レジは確かに「ニャオン」と鳴いた。しかし、レジのコンピュータ―画面は決済保留のままになっていたのだ。

「あ！」

そして、後ろに並んでいた客がカゴをレジの中に入れて次の決済に移っていった。

「もしもし、あなた！」

わたしはお婆さんに声を掛けた。

しかし、背中がびくっとした以外は何もなかった様子を装ってそのままカゴを抱えて逃げようとした。

「ちょっと！ 待って」

わたしはまだ事情がよくわかっていなかった。決済が終わらないのにコンピュータが「ニャオン」の鳴き声を出すことはありえなかった。どこにでもいそうなお婆さんに、何の落ち度もないニャオンの鳴き声。誰も不審にすら思わなかったに違いない。そして、わたしもそのカラクリはわからないでいた。

わたしはお婆さんの肩をつかんで警備員を呼んだ。

そして、バックヤードにお婆さんを連れて行った。彼女の手にしていたのは偽のニャオンカードだった。縁を押すとニャオンと泣き声を出すだけのカード。

警備員に取り囲まれた彼女の言い訳によると使い放題のマネーカードと言うものをネットオークションで買い、外国から送られて来たという。

そして、誰にも気付かれず、その後商品を店外に持ち出していた。人工知能による自動化を逆手に取った人間の勝利だった。年金が少なく生活費を補うために菓子パンと惣菜だけ持ち出ししたと言う。事情はわかったが、大変な事態になることが予想された。

こんなカードが出回ったのでは、他のスーパーでも同じことが起こっているに違いない。わたしは後を警備員に任せ、会社に報告書を送った。了

名刀

名刀

　ある暑い夏の夕暮れだった。夕食を取りながらテレビを見ていた。自宅近くの山林と鉄道会社の敷地の間にある草むらから死後何ヶ月かわからないくらいに傷んだ死体が見つかったとニュースになった。殺人事件や行方不明の死体のニュースなど取り立てて珍しいことではない。この物騒なご時世である。悲しいことに、毎日と言っていいほどありふれた日常茶飯事になっていた。しかし、平和な町である。こんな町の近郊で死体か見つかったなどという「非日常」的なことは今まで長らく住んでいて聞いたことはなかった。
「物騒な時代になったものだな……」
　とわたしは、テレビ画面にひょいと目をやり、アナウンサーの言葉を耳にしながらご飯に向き直った。
　そう言えば、何ヶ月か前に、うちにも強盗が入ったことがあったのだ。いや、正確に言えば窃盗犯が密かに忍び込み犯行の現場を妻に見られたので、居直り強盗に早変わりしたのだった。その時はわたしが武道の心得があったので撃退することが出来た。犯人は武器を持っていたが、重傷を負わされ、這々の体で入ってきたと思われる鍵の壊された窓から逃げ出し、そして、深夜の住宅街に姿を消した。

　しばらくして、N警察署の刑事さんが我が家を訪れた。
　その強盗に入られたときの状況をもう一度思い出して欲しいと言うことだった。妻だけでは記憶違いもあるだろうからとわたしが帰宅する頃合いを見計らってやって来た様だった。

「すみませんねえ。ご主人。あのときの犯人がいまだに行方知れずなのですよ」
　我が家に来た二人の刑事のうち、小柄な方が饒舌に、状況を説明しようとした。
「そうは言っても、もう何ヶ月も前のことですよ。いくら衝撃的な事件だったとしても、細かい点までは覚えてはいませんよ」
「そこを一つ、思い出して下さい。あなたは古武術。居合道をなされていた。それで自宅に置いていた日本刀で犯人を撃退した。それは間違いないですね？」

「ええ、犯人は刃渡り十八センチのサバイバルナイフを突きつけて来たので.....」
　わたしとしても不本意な結果に終わった結末をもう一度説明する羽目になった。

　居直り強盗となった犯人は大型のサバイバルナイフを持ち、わたしに突きかかってきたのだ。もちろん、いきなりではない。最初は妻を威嚇して生活費の入った封筒を取ろうとし、わたしが鞘《さや》に収めた日本刀を持って台所に現れたので、その戦力差に狼狽し、やけっぱちになって突きかかって来たのだ。ただわたしはそのとき刀を抜いてはいなかった。左手に鞘の部分を持ち、犯人から目をそらさずに鞘を寝間着の帯に差し、柄《つか》に右手を添えて右半身になり犯人の目をにらみつけたのだ。
　サバイバルナイフの切っ先が自身の三尺前に来たとき、わたしの身体は反射的に動いてしまった。
　即座に抜刀して振り下ろし、犯人の手首ごとナイフを床にたたき落としたのだった。

　これはその後の現場検証に来た警察官に何度も説明した。犯人は血を流しながら逃げ去り、後には血だらけの手首とナイフだけが残された。後日、担当になった検事さんから正当防衛が成立する旨の連絡があり、これ以降、わたしがこの事件に関与することはなかった。

　大きな遺留品があった割に捜査は難航した様だった。現場から指紋はいくらでも取れたが、この事件以降の犯人には右手がないという状態になり手懸かりにはならなかったのだ。

「いやね、ご主人。先日見つかった死体のことはご存じでしょうかね？」
　小柄な刑事は続けた。「死体の右手首がなかったのですよ.....」
「ええっ？」
　わたしは狼狽した。もしかして出血多量であの山林まで逃げ延びた後で死んだのだろうか？
「いやいや、ご主人のせいではありませんよ。死因はどうやら列車にはね飛ばされたせいの様でしたので」
「そうですか」
「もう一度、あの夜のことを思い出して欲しいのです。あなたは、どの角度で犯人の手首を切り落としましたか？」
　刑事はそんな問いをわたしに投げかけた。すでに、あの夜の事件の後、検事に何度も説明したことだった。ただ、刀をその重みに任せてそのまま落としただけだった。それだけで、犯人の肉もろとも骨さえ断ち切ったのだった。
「何度も切りつけたのではない。残された証拠はそう語っています。よっぽどご主人の腕がよいか、刀の切れ味がいいかですよ。その刀をもう一度見せてもらえますかね？」

刑事のリクエスト通りわたしは、床の間に飾ってあった刀、「備前長船二尺四寸」を差しだした。刑事はそれを鞘から抜くとしげしげと見つめた。刃こぼれ一つなく、また、血錆一つ浮かんではいなかった。
「名刀……ですな」
刑事はそうぽつりと漏らした。
「祖父が居合をしていたのです。形見の品でした。備前長船だとは聞いていますが、どれだけの価値があるのかはよく知らないのです。それに、わたしの習っている流派では型だけで実際に試し切りなど行ないませんし」
「それにしては、見事な切り口でしたよ。……居合を始めたのは、失礼ですがお祖父様の影響ですか？」
「はい、子供の頃から祖父が手ほどきしてくれました。小学校に上がったときに今の師範の父上に教えを受けたのです」
「なるほど」
刑事は刀身を息で曇らせないように気をつけて眺め、そして、不器用な手つきで鞘に収めた。「納得しました。いや、あなたの供述調書を読んで、本当に刀の重みだけで人の骨が断てるのか疑問に思っていたのです。力づくで何度も切りつけたのではないか？　殺意があったのではないか？　いくつか疑いましたが、この刀を拝見して納得出来ました」
「やっぱり、疑われていたのですか？」
殺意を持って攻撃していたとすれば、過剰防衛に問われるかもと内心不安だったのだ。
「いやご心配なく。あの事件に関しては検事の言う通り正当防衛が成立しています。あの死体の死因も轢死です。ただ、あの死体の手首が本当に一刀両断に断ち切られたのか、それだけ知りたかったのです。だとすると、死体の身元が判明しますから」

刑事が帰った後、わたしは、あの刀の来歴を調べ始めることにした。

わたしはお盆の長期休暇を利用し、本家へ赴いた。田舎の大きな家で、母屋の他には離れがひとつと、北西側に土蔵がひとつあった。祖父の出身の家であり、現在は祖父の兄の長男が跡を継いでいる。田んぼと畑があり、役場勤めをしながら兼業農家となっていた。
「おじさん。お久しぶりです」
と、縁側で休憩しているおじさんに声を掛けた。わたしは、手土産の菓子折を差し出し、お辞儀した。
「おお、才蔵か。懐かしいな。前に帰って来たときは学生だっただろう？」
「そんなにもなりませんよ」と、わたしは言い訳した。確かに、田舎の本家筋など、普通は葬式か法事くらいしか集まることはないものだった。「うちのお祖父さんの刀があったでしょう？　あれって、元々は本家の持ち物だったのですよね？」
「ああん？　刀？　ああ、そんなものもあったなあ」
おじさんは、遠い昔を思い出す様に顔をしかめた。「あれは平蔵さんが居合をやるって言うんで、うちの蔵から探し出して使っていたみたいだな。まだあるのか？」

　平蔵は祖父の名前だった。
「はい。今はわたしが居合に使っています。ものすごい切れ味ですね」
「あれはな……」
　おじさんは記憶を遠く少年時代にまで遡っているみたいに見えた。先祖伝来の刀である。謂われなども一緒に引き継がれていたはずだった。
「ときは戦国時代のこと……」おじさんは腕を組んだ。「ここら辺は農家の集落だった。そこに、戦に負けた集団が通りかかった。多分、落ち武者狩りがあったか、さもなくば、食料を提供して、そのお礼にもらったかどちらかだろう。その時からあるのがあの刀だ」

　――やはり、農家の持ち物なんかではなかったのだ。それに、実際に人の手首を切り落としておいて刃こぼれもせず、また、血錆ひとつ浮かばない。ものすごい名刀だった。いや、この分だと、戦場で、何人もの人の血を吸っている曰く付きの刀かも知れなかった。

「お祖父さんは、なぜあの刀を選んだのでしょう？」
「ああん。……でも、あのとき、平蔵さんは何かに取り憑かれた感じがあったなあ」
「取り憑かれた？」
「それで、あの一本を選んだんだ。あの一本を」
　そのとき、喋っているおじさんの影が二重に見えた。あの刀を取られた武士の未練みたいなものを、おじさんの口を借りて喋らせていた。そんな感じがした。しかし、あの刀は色んな人の手を渡り歩いている。そして、最後はおじいさんの手に渡るべくして渡ったのだ。あの名刀にふさわしい使い手に。

　わたしは、それ以来、いっそう、居合の稽古に励む様になった。了

ツキノワグマと老ハンターたち

ツキノワグマと老ハンターたち

H県の知事秘書室長のわたしは難題を抱えていた。

県内で今年になってからクマに襲われる人が続出し、農作物の被害も拡大の一途をたどりつつあったのだ。

県民からの陳情で、クマを駆除する方針を打ち出したのはよかったのだが、話が具体策に及ぶと急に尻すぼみになった。

駆除の担い手は、県内に活動拠点を持つ猟友会のメンバーなどである。

県が捕獲許可を出し、ハンターがシカやイノシシを狩るついでに、出くわしたクマを捕獲すればそれで済むものだと、最初、この場にいる人たちは皆そう思っていた。

「違うのですか？」

わたしは、もう大分高齢である会長さんに尋ねた。

「わたしを見て下さいよ、室長さん。今年で八十四になります。これでも、中堅メンバーなのですよ。言わんとするところはわかるでしょう？ 高齢化ですよ。高齢化。銃規制か何か知らないが、長い間、銃を悪者にしておいて、急に必要になったからと言って、はいそうですかと、若手ハンターが育ったりしないのですよ」

「それは、……それは十分に存じております。しかし、しかしですよ。今となっては銃器を扱えるのは猟友会の方々しかおられないのです」

わたしは、手帳を繰った。クマの狩猟許可は今から二十年前を最後に行なわれていなかった。個体数が少なく、絶滅の危機に瀕していたのと、やっぱり、会長さんの言うとおり、銃規制の動きが背後にあった。

「わたしもクマを撃ったことがあります。あのときはまだ若かったもんですよ。室長さん」

半分嫌味とも取れる発言だった。

手帳のページを繰るまでもなく、二十年以上前の話に違いなかった。会長がまだ六十代だった頃だろう。

もっとも、そんな時代でもクマを専門に狙っているハンターなどいなかった様だ。商品価値がまるでないからだ。せいぜい、毛皮を剥製にして孫たちへの自慢の品にするくらいのものである。今でこそジビエなどと称して野生動物の肉を食べる文化が芽生えてきてはいるものの、せいぜい、鹿肉かシシ肉、野鳥の類だ。肉も毛皮も使い道がない、ということは、わざわざ狩った訳ではない。一人一頭の狩猟枠があったから、シカを追って山奥に入り、偶然、クマと遭遇し、危険を感じて射殺に及んだというところだろう。

「問題の第二はそこなんですよ。室長さん」

会長は語気を強めた。「シカを追い、仕留めたと思って藪に入っていく。そしてまだ息があったからもう一発撃ってとどめを刺す。そのとき偶然、野生のクマやイノシシと遭遇したとしましょう。残りは何発あると思いますか？」

「え、えーと」

わたしは手元のファイルの銃刀法の情報を探した。

「散弾銃の最大装填数は三発。ライフル銃の装填数は五発です。獲物のシカに二発使ってしまったら、残りは散弾銃なら一発。ライフル銃なら三発となります。かつての熟練狩猟者なら対処出来たかも知れません。しかし、二十年以上の間、クマ猟は行なわれていないので、現役のハンターに経験者はほとんどいないのが実情です」

「ふうむ」

「もし、クマ猟経験のない者が、散弾銃に一発しか装填していない状態で、不意にクマと遭遇したとしましょう。クマを仕留められると思いますか？」

「そこを何とか……」

「無理なのです。ただでさえ危険なクマです。小傷を負わせて手負いになった状態になると普段の十倍は凶暴になります。わたしがアドバイスするとしたら、手を出さずに逃げろです」

「そんな」

「それが実情なのですよ」

会長さんは自嘲みたいな言い方でそう述べた。

係の男がすっと近づいてきて、わたしに素早くメモを手渡した。わたしは会長さんとの会話を続けながら、さっとメモを斜め読みした。

山間部に位置するＹ市の路上で、山から出て来たツキノワグマに住民が襲われたというニュースだった。続報は書いていない。わたしはついにこのときが来たかと心臓が縮み上がる思いがした。

「申し訳ありません。ちょっと中座させていただきます」

わたしは中腰になったまま会長さんに挨拶し、この部屋の外に出た。

「どういうことなんだ！」

わたしは係の男に問い詰めた。

「まだ続報が入ってきていないのです。１１９番通報があり、けが人が出ている模様です」

「警察へは？」

「すでに消防本部からＹ警察署の地域課へ連絡済みです。パトカーが８台出動した様です」

「手はないのか？」

「ありません。自衛隊に出動を要請していいでしょうか？」

これは知事の権限だった。この期に及んでは必要性がありそうだったが、クマの駆除に自衛隊の出動など全国でも例がなかった。

「今回は警察に頑張ってもらうとして、今後のこともあるのです。室長。戦略特区制度を使えませんか？」

「戦略特区だと？ 何が出来るんだ？」

「狩猟法の特例です。今問題になっているのは、狩猟者の経験不足となり手不足、そして、銃器の威力不足です」

全部が問題だった。

「もしも……ですが、クマの出没地域に限り、……例えば米軍で使っている自動小銃を使用出来るのなら、狩猟者の戦闘力と言っては語弊がありますが、余裕が違ってきます。でも、今の日本ではまず所持も使用も出来ません。でも、狩猟戦略特区として認められれば、H県内の山間部では抜群の威力を発揮できると思うんです」

「ふうむ……」

彼は、手にしていたファイルの中からアメリカの銃器メーカーのカタログを差し出した。もっとも米国でも一般販売はされていないという代物だ。Ｍ４自動小銃。２２口径で装弾数は２０発ないし３０発という優れものだった。しかも、自動で連続射撃が可能だった。今しがた会長さんが言っていた装填数の問題も狩猟者の経験不足も一気に補ってあまりある武器と言えた。これが使えるなら自分だって、クマと向き合っても勝てそうな気がする。

わたしは知事に、狩猟戦略特区の設定を進言した。もちろん、この区域だけの限定にしても、日本の国法をねじ曲げて運用出来るようにするのである。中央政府への根回しも必要だし、地元選出国会議員にも諮って、動いてもらわなければならない。

「君ぃ、ひとつよろしく頼むよ」

知事はわたしにそれらの作業を一任した。

そしてわたしは、国会議員団を県内に招き、農村部に案内して回ったのだ。そこでは、過疎化した村に数少ないお年寄り、それらを睥睨して、我が物顔で村落、農道を闊歩するイノシシやクマたちの姿を見るにつけ、議員たちの心証をつなぎ止めておくことが出来たのだった。

「これは……ひどいねえ」

「これほどまでとは」

議員たちが双眼鏡でマイクロバスの中から動物たちが作物を食い荒らす姿を見て嘆息して言ったのだ。

「どうか先生方。H県を、H県の農家を見捨てないで下さい。必要な装備さえあれば必ず、必ず、動物たちの侵入を食い止めることが出来るのです！」

わたしは、知事の後ろから声を張り上げるようにして訴えた。

やがて、狩猟戦略特区法案が国会を通り、アメリカの武器メーカーからＭ４自動小銃と弾薬を購入することが出来る様になった。

銃は無敵だった。

これまで、クマの怒れる姿に右往左往するばかりだった無力なハンターの老人たちは自動小銃を手に、立ち向かうことが出来る様になった。何せ３０連発の弾倉が着いているのだ。いくらでも撃つことが出来たし、一発でも当たれば即致命傷になった。さすがは軍用銃だった。

「いやあ、室長さん。やはり軍用銃の威力は大したもんですなあ」

猟友会の会長さんは銃を杖にしながら視察に行ったわたしに感想を漏らした。「いくら撃っても余裕がある。この余裕でクマでもイノシシでも屠ることが出来ますぞい」

猟友会の活躍で、野生動物による被害が激減したのは言うまでもなく、また、若い人が銃に興味を持ち始め、狩猟人口の若返りにも効果をみせていた。会長さんは「これでいつ引退してもいいですぞ」と嬉しそうに言った。

しかし、自動小銃の威力は別の側面も抱えていた。

大量の銃弾をばらまくことによって起こった林業への被害だった。銃弾の食い込んだ木材は商品にならなかった。わたしは次の週、林業組合の会長さんの陳情を受けた。了

オウムの独り言

オウムのヒトリゴト

その日、わたしは部下の調子のよい男から一杯誘われた。

金曜日だし、ビールか焼酎の炭酸割りか何か飲みたい気分でもあった。しかし、何かしら、早く家に帰らなくてはという気になり、部下の誘いを断った。

「主任。丸田君とは先週飲みに行ったと言うじゃないですか？」

「すまん。今日は妻から用事を頼まれていてね。この埋め合わせは必ずするから、勘弁してくれよ」

そう言い、駅前で彼とは別れ家路についた。

電車で三十分揺られた後、延々と続く坂道を登り切った場所に自宅があった。築二十五年の木造一戸建てだ。汗をふきふきわたしが家に帰ってくると門の灯りは消え、誰もいなかった。

――おかしいな。この時間に妻がいないはずはないのだが。

わたしは玄関から順番に灯りを点けて回り、最後に台所の電灯を点けた。

台所からは異臭がした。そして、ごろんとした異物が床の上に転がっていたのだった。

妻が倒れていた。わたしはハッと息をのみ、側に駆け寄り抱き起こしたが、すでに肌は冷たく、そして、腕には硬直した感触があった。もはや生きている気配はなかった。「おい！……おい！」わたしは現状を受け入れることが出来ず何度も妻の頬を掌で軽く叩くように触った。

やっぱり死んでいた。

妻を床に安置し、上からわたしの上着を掛けてやり、それから救急車か警察かに通報しなければならないと、ぼんやりした頭で考えた。まだ目の前に現れた唐突な現実を受け容れできないでいた。もし、まだ息があるか、温かければ間違いなく一一九番通報したであろう。しかし、もう死んでいるのは素人目にも確かだった。わたしは台所にあった電話機から受話器を手に取り、もったりとした手つきで指先で一一〇と押した。

通報から一五分ほど経った頃であろうか。インターホンの呼び出し音が鳴り、モニターを覗くと制服巡査がやって来たのがわかった。わたしは玄関先へ行き、つっかけに足を通してドアの鍵を解錠し、そしてドアを開け巡査を招き入れた。

巡査はまだ若い様だった。丁寧な態度で挨拶し、玄関で革靴を脱いできちんと揃えておいて、上へあがった。

彼は慣れた手つきで、遺体に掛かっていた上着をどけると首筋に指を当てて脈がないことを確かめた。ひとつひとつの動作が完璧にルーティーンとなっているみたいだった。

彼の見立てでも、妻は確かに死んでいた。

巡査は制服に付けていた無線機で警察署と連絡を取っていた。しばらくすると、背広姿の刑事と、鑑識の腕章をつけた別の制服の警察官がぞろぞろと家の中に入ってきた。門のところには黄色と黒のテープが貼り巡らされ、関係者以外立ち入り禁止となった。

刑事は四十代後半と思われる男で、死体の扱いには慣れている様で最小限の動作で死亡を確認すると死因の特定作業に入った。

「ご遺体の首には圧迫痕があり絞殺であることは明らかです」

と彼は言った。鑑識係員が死後硬直の度合いと直腸温度から死後八時間と推定時間を割り出した。

「ご主人はその時間帯はどこにおられましたか？」

「ええ？ わたしにそんなことを聞くのですか？」

「一応、関係者全員から聞くことになっていますので」

「会社にいました」

それは、会社の勤労課で問い合わせてもらえればすぐに証明してもらえることだった。電子式のタイムカードにわたしの出社時刻と退社時刻とが登録されているはずだ。そして、刑事は会社に電話で確かめると疑いを解いてくれた。

「ご主人。他に被害はありませんか？」

台所の茶箪笥の引き出しが開けられ、生活費の入った封筒が消えていることに気がついた。

強盗殺人事件になってしまった。

刑事は「他の部屋も拝見します」と言い、白い手袋をした手でリビングのドアを開けた。

そのとき、リビングにつるされた鳥かごのオウムが激しく連呼した。

「オトーサンガ、オカーサンヲ、コロシタ！ オトーサンガ……」

同じ台詞を何度も何度も激しく連呼した。さも犯行現場を目撃し、それを警察に訴えないことにはペットとしての価値がまるでないと言わんばかりの自己主張だった。あまりの生々しい発言にわたしはやってもいない罪に恐れおののいてしまった。足はがくがく震え、手もぶるぶるとなった。一緒にオウムを見ていた刑事はわたしに猜疑心に満ちた目を向けた。

「わ……わたしはやっていません。断じてやっていません」

「それは、証明出来ますかね？」

刑事は意地の悪い目をむけた。

「しょ……証明？ わたしがやっていないと言っているんですよ。これ以上確かなことはないでしょう？」

そうは言ったものの、強盗殺人犯が自分でやったと言う訳が（論理的にという意味で）なかったのだ。わたしは、自分で自分の弁護がいかに無意味なことであるかを再認識した。

結局、わたしは警察署まで任意同行を求められた。

その日は夜遅くまで取り調べが行なわれた。先ほどの刑事が主になり、何度も何度も、この日あったことを事細かく聞き取られ、言い間違いや記憶違いがあると、鋭くそこを根掘り葉掘り追求された。

――そうです。わたしは嘘つきです。わたしが無実と言ったのは全部嘘なのです。妻を殺し、封筒に入った現金を奪ったのはわたし以外にあり得ません。刑事はそれをわたしの口から言わせるためにありとあらゆる手管を弄してきた。一方、わたしの理性はまだギリギリの線上で耐えていた。やってもいない罪を認めるわけには行かない。そして、わたしは妻を愛していた。そんな妻を手に掛けるなど断じてありはしないと。

「ご主人。あなたに妻を殺す動機などないと言うが、先日、夫婦間で言い争いがあったという証言を近所の家から寄せられていますよ。そこら辺はどうなんです？」

刑事はまだ余裕の口調で問いただした。

わたしに逃げ場はなかった。確かにここのところ、夫婦間に溝が出来ていたのは事実だった。多少の言い争いはあった。しかし、全てにおいて完璧な夫婦など、結婚式当日の夫婦でもありはしないだろう。

「オトーサンガ、オカーサンヲ、コロシタ！」

「オトーサンガ、オカーサンヲ、コロシタ！」

ＩＣレコーダーに録音された音声を刑事が意地悪くわたしの目の前で再生した。何度も

激しく連呼するオウムに不自然なものを感じた。

「オウムが証言することってあるのですか？」

とわたしは刑事に尋ねた。すると彼も首をかしげた。

それに内容が不自然だった。わたし達夫婦には息子が一人だけいたが数年前に大学を出てからは地方で就職していて、今うちでわたしが「お父さん」とよばれることはすでになかった。わたしは妻のことを「おい」と呼び、妻はわたしには「ちょっと」ですませていた。オウムはわたしがお父さんとよばれている時代のことは知る由もないはずだった。

だから夫であるわたしを「オトーサン」と呼ぶはずがなかったのだ。

接見に来た弁護士を通じて取り調べに当たっている刑事にそう告げてもらった。

ＩＣレコーダーのオウムの声はよく聞いていると、「オトーサンガオカーサンヲコロシタ！」と叫ぶ間に小さな声で「ヨシヨシ」とも言っている。

きっと真犯人が捜査の攪乱のために現場に居合わせたオウムに教え込んだのではないか。

いくつかの疑問点が残されたため弁護士からの要請に従い捜査は任意のままとなり、わたしは深夜０時に一旦釈放された。しかし完全な無罪放免ではなく、家の前に覆面パトカーが停車し、私服の警官がわたしを二十四時間監視していると言うものだった。もちろん、わたしは自身の無実を信じていたので逃亡など考えも及ばなかった。

しばらくして別の窃盗事件で逮捕された男が、この事件の事実を自供したらしく、わたしの無実が確定した形となった。

犯人は通りすがりの無職の男だった。かつてペットショップで働いた経験があり鳥類の取り扱いには慣れていたと言う。

男の自供によると、留守中になっていた我が家に入り込み現金を物色していたが妻と鉢合わせになり強盗殺人に及んだそうだ。そして自分に疑惑の目が向かない様に鳥かごに

いたオウムに言葉を教え込んでその場を立ち去った。犯行は完璧だった。「よしよし」と言ってほめたのをのぞけば。了

絶望と花束

絶望と花束

わたしは、日本企業の電子技術者としてとある北の共和国に来ていた。

日本から共同出資して操業している工場で技術指導員といった仕事をしていた。工程を組んだり実際の作業を指示したり色んな作業が待っていた。

工場で働いている若者の中にカカロフという男がいた。仕事には熱心で、勤労部の定めた工場のノルマの達成度も人一倍高かったし、工場の管理職たちも現場のリーダーとして一目置いていたほどだった。

ただ、わたしの目にしたところ、彼は人種差別主義者のきらいがあった。

毎週末の金曜日の朝、彼は工場の正門前に立ち、数人の仲間とともにヘイトスピーチを行っていた。

「ヤングル人への福祉は税金の無駄遣いだ！」

だとか……。

「ヤングル人はハン族の雇用を奪っている！」

などと主張していた。

この国は九〇パーセントのハン族と五パーセントのヤングル人（と、彼らが呼称している部族）とその他の外国人という人口構成で成り立っていた。

わたしたち外国人から見たら、正直なところハン族とヤングル人の区別はつかなかった。カカロフが言うには、「奴らは浅黒い肌をしていてときに品位に欠ける振る舞いをする」のだそうだった。

この国には、子供に対する義務教育があったが、ヤングル人には適用されず、よって、彼らは文字が読めないし、数字の計算も出来ないものが多いらしかった。

だからかも知れないが、町のゴミ拾いやゴミ処分場での分別、屠殺された動物の遺骸の処理、墓地の墓堀りなどあまり人がやりたがらないであろう仕事はヤングル人と彼らが呼ぶ人たちが担当していた。雇用の格差というやつだった。

ある意味、ヤングル人は社会的弱者という存在と言えた。だから政府の福祉政策も当然のことと言えたし、雇用面でも少しは優遇枠を設けてやらなければならなかっただろう。さもなくば国連から人権弾圧国の認定を受けかねないご時世だった。

それが、ハン族の若者で、工場の底辺で働いているカカロフの気に召さなかったとしても、ある意味しょうがないことと言わなければならなかっただろう。

当局も社会のガス抜きという意味合いがあったのだろう。カカロフたち一部のある意味右翼的思想の若者たちのヘイトスピーチにある程度寛容な態度を見せていたし、その、当のヤングル人たちも大っぴらには反発はしていなかった。カカロフ以上に社会の底辺でおとなしく過ごしていたに違いない。

わたしはと言えば、その反対に裕福な外国人として特別扱いを受けていた。

この工場に派遣されている間は、都市部の高級ホテルをあてがわれ、通勤は高級リムジンを手配してくれていた。

その上、工場の労働者たちはそんなわたしに敬意を持って接してくれていた。

ある日、わたしは、朝のヘイトスピーチを終えたカカロフに声を掛けた。

彼は緊張の面持ちでわたしの機嫌を伺った。仕事のことで指摘があるのだろうか？ 勤務

態度のことだろうか？ それとも、政治思想に関することだろうか？ 彼がわたしの思惑を推し量る気持ちは十分理解していた。

わたしだって、自分の会社に帰り、もし、取締役くらいの偉い人から声を掛けられたら、何事が起こるのだろうかと身構えるに違いない。

「君はいつもあのスピーチをしているのかい？」

「はいっ。もう三ヶ月になります」

「ヤングル人が嫌いなのかい？」

「はいっ。彼らはこの国の、愛する祖国のガンであります」

「ヤングル人と言っても、元は同じ民族なのだろう？ 教育の機会が奪われただけで同族だとは思わないのかい？」

「そんなことはありません。現に顔つきや背丈が違うではないですか。彼らはハン族とは異なる民族なのです。国家が出来る以前にどこからか流れ着いてきた、流浪の民なのです。この共和国に居着いてしまったことがこの社会の悲劇なのです」

「ふうむ」

カカロフが完全にヤングル人を違う人種で流浪の民の末裔だと信じ込んでいる以上、わたしが多少の時間を割いて教え諭したとしても簡単に考えを変えるはずがないことはわたしにも予想はついた。人の考えを変えるなど、そう簡単には行かないのだ。もし、簡単なら世界の紛争の九割方は解決されてしまうだろう。

工場正門前のヘイトスピーチはそれからも、毎週金曜日の朝、繰り返された。

「ヤングル人は愛する祖国のガンであります」

「彼らを国内から強制送還しましょう！」

「ヤングル人は流れ者でたまたまこの国に居着いてしまったに過ぎないのですから」

わたしは、彼と目を合わさず、リムジンの後部座席に座ったまま正門を通り過ぎた。

歩いて通り過ぎるハン族の労働者たちは目に見えて賛同はしないものの、その反対に、反発もしなかった。静かな支持と言うやつだった。

それからしばらくし、わたしは任務を終えいったん日本に帰国した。

半年後、また、派遣が決まり、この工場にやってくると、ヘイトスピーチの集団の中にカカロフの姿が見えなかった。

――休みを取ったのだろうか？

わたしは不審に思った。あれほど強固にヤングル人が嫌いだった差別主義者の若者が休暇を取って活動に参加しないなど理解を超えていた。もしかしたら、考えを改めたのだろうか？

わたしは、リムジンを止めてもらい、車外に出て、ヘイトスピーチの仲間の一人に尋ねた。

「君。カカロフを知らないか？」

「ああ、彼なら辞めましたよ」

「辞めた？ 会社をかい？」

「ええ。そうです」

「どうして？ あんなに優秀だったのに」

「亡くなったんです」

「えぇ？ まだ若かっただろう。病気だったのかい？」

そう聞くと、その男は、集団から離れ、わたしを正門の陰に連れて行った。

男はうつむいて、少し肩をふるわせ、カカロフの身の上に起こったことをぽつりぽつりとちぎるように語った。

「カカロフの野郎、あなたが帰った後、考え方が過激化してしまって……ハン族純血主義を唱え始めたんですよ」

「純血主義？ なんだいそれは？」

「愛すべき共和国は純粋なハン族からだけで構成されるべきだって主張です。あ、もちろん、指導員殿の様な外国のお方は別です」

彼は慌てて、取り繕った。

「純血主義ねえ……」

わたしには眉唾だった。この国際化の進んだ現代社会に純粋な民族などあろうはずがない。人跡未踏の絶海の孤島にひっそり暮らしている部族がいるなら話は別だが。

「彼は戸籍謄本を取り寄せて、自身の純粋性を誇示しました」

「でも、それだけでは不十分だろう？」

「はい。仲間から祖先はどうだったのかと問われ、彼は数日掛けて四代前の曾祖父母の時代の戸籍を調べたんです」

「それはまあ、なんとも」

「はい、すると……彼自身、記載ミスだと主張したのですが、四代前の曾祖母がヤングル人だということが判明したのです」

「何だって？」

――皮肉もここに極まれりという思いだった。

それから、それ以来、彼は一人でいることが多くなり、仲間とも顔を合わせなくなり、自分の殻に閉じこもってしまったのだという。

「最後は、猟銃で自分の頭を撃ち抜いて自殺してしまいました。……指導員殿。笑い話にもならないでしょう？ ヤングル人排斥を訴えていた張本人にヤングルの血が混じっていたなんて。やつの気持ちもわかります。でも、実際にはヤングルとハン族の付き合いは千年にも及びます。歴史以前からのことなんです。誰しも戸籍を遡ってゆけば一人や二人、ヤングル人がいてもおかしくないんですよ」

「彼の墓は……彼の遺体はどうなったんだ？」

「自殺者の遺体は共同墓地には埋葬されないしきたりになっています。カカロフの遺体は町の外の墓地に運ばれました。墓標はありません。かわいそうですが」

彼の説明では、死体はヤングル人の人夫により墓穴が掘られ、埋葬されたという。なんとも皮肉な話だった。

「わたしたち仲間だけは……誰にも言わないで下さいよ。埋葬に立ち会ったんです。ヤングルのおばあさんが花を手向けてくれました」

彼はそう語った。了

狂った時計

狂った時計

H県のとある山合の町でわたしは暮らしていた。勤め先は町に一つしかない小さな会社。他に産業といえば、数キロ離れた漁港に漁船が持ち帰った海産物の加工場か、お年寄りがひっそりと営んでいる畑仕事しかないそんな町だった。

わたしはしがない生活用品の営業職をしていた。暮らしの中であれば便利、でも、なくても困らないという、そんな備品の注文を取ったり、その商品を届けたりという業務を担当していた。

もっとも、本社は大きいらしく、わたしは知らなかったのだが、東証一部上場で、神戸や大阪に大きな支店を構えているらしかった。

ここは神戸支店の管轄下にあった。

会社は時間に正確を期すために電波時計を採用していた。

日本では福島県と福岡県の二カ所にある標準電波塔からの電波を受信し、時刻を常に正確に保つ仕組みのものだった。

しかし、周囲を高い山の頂が位置し、電波の入り具合はあんまりよくなく、営業所長はこの会社を統轄する支店長に掛け合って、電波を増幅するブースターを会社の屋上に設置してもらっていた。

高い頂に位置する巨大アンテナで受信した標準電波を増幅し、会社の屋上で再び発信するという仕組みになっていた。

いうなれば、増幅する間のコンマ何秒かは誤差を含むことは言うまでもなかった。

ある、暇な午前中の出来事だった。

営業所の壁の時計が止まっていたのだ。

「おい、磯野君。電池！」

営業所長は威張って、備品倉庫の鍵をわたしに投げつけてきた。わたしはそれを左手で受け止めた。

しかし、時計は動いていた。

――これは？

時計が止まっているのではなかった。屋上にある電波ブースターが止まったのだ。

わたしは、にやりと笑みをこぼし、営業所長にそのことを指摘しようとしてやめた。

今なら……そう、今なら時間を自在に操れる。わたしはそう確信したのだ。

わたしは一人ほくそ笑み、屋上に行き、そして、山頂からの電波を中継している機械の蓋を開けた。

中には基盤がぎっしりつまり、そして、様々な色のＬＥＤが点滅していた。多分、どこも悪いところはないのだろう。電波を受信し、ちゃんと中継していた。ふと、見ると、部屋の時計に電波を送るケーブルが抜けているのに気付いた。

これを戻せば……全ては解決する。いやしてしまう。

わたしは、簡単に戻す気にはなれなかった。

この時計を２時間ばかり巻き戻せばどうなるだろう？

わたしはしばし逡巡した。今は午前１０時だった。２時間遅らせれば、これが８時になる。１２時からの昼休憩が２時間ばかり遅れるだけだ。それはそれで問題もあるだろう。

朝ごはんを食べずに出勤している人も多かったのだ。昼の休憩が何より楽しみという将棋指しの職員も少なからずいた。そんな人たちの楽しみを奪ってしまうのは少し問題があった。

いや、１時間の昼休憩には差し支えないはずだった。２時間休憩時間が遅れるだけだ。ちゃんと休憩は取り、１３時（本来は１５時）に仕事に復帰し、１７時まで（本来の１９時）仕事に専念する。これで問題はないはずだった。

隣の家からみたら、「今日は皆さん２時間もそろって残業ですか？」と思われるくらいのものだった。

わたしは、インジケータとボタンをいじり、２時間時計を遅らせた。

そして何食わぬ顔で職場に戻った。間もなく壁掛け「電波」時計は電波を受信し「正確」な時間を表示し始めた。

営業所長には、中継器の電池が切れていたので（そんな仕組みにはなっていなかったが）備品倉庫から補充したことを報告しておいた。

「ご苦労さん」

「いいえ」

１２時（本来の１４時）になり、めいめいが食事の支度をはじめた。お弁当の人は給湯室へ行きお茶を淹れて自分の席に持って戻り、食堂で食べる人は一階の食堂へと移動をはじめた。

わたしは一人会社を出た。さも仕事の配達があるといわんばかりの格好でだ。

そして、前から目をつけていた、商店街の隅にあるタバコ屋を訪れた。おばあさんが一人でタバコを売りながら、裏ではサラリーマン相手に給料日までの金貸しをしていたのだ。

給料日まで小遣いが足りないが、飲みに誘われてしまい、数日だけ借りるといった月給

取りにはありがたい金貸しばあさんだった。しかし、利息は高く十日で一割という、明らかに貸金業法に定める利息を大幅に超えていたが、便利だったので誰も問題にはしなかった。その分、おばあさんは儲けていたはずだった。

そして会社では先週、給料日を迎えたばかりだった。貸し付け金の回収を終えて、金庫には金がうなっているはずだ。

わたしは、タバコ屋への往き道と帰り道、そして、おばあさんと対峙したときの台詞。そして、顔を隠すためのストッキングのかぶり方。色々と頭の中でシミュレーションした。

おばあさんは、一人で店番をしていた。本来の１４時という一番サラリーマン客が来そうにない時間帯だった。

わたしは裏口の扉を開け、金を借りに来た客を装って入った。

「いらっしゃい。いくら貸そうか？」

「あるだけ出せ」

わたしは頭からストッキングをかぶり顔を見えないようにし、そして、鉛筆削りにしている肥後守のナイフでおばあさんを脅した。

「ちょっと、あんた。そんなことして！ すぐにつかまるで！ やめとき！」

おばあさんは口で抵抗した。

しかし、警察に通報するような通行人もいなかった。にらみ合いは続いたが、おばあさんはやがて観念し、手提げ金庫のダイヤルを回し、蓋を開け、中から札束を取りだした。数えようとするのをわたしはおばあさんの手元からもぎ取るようにして奪った。

後から数えてみると２０万くらいしかなかった。

おばあさんから２０万という金を奪い、何食わぬ顔で職場に戻り、平気な顔でお茶を飲み、そして１３時（本来の１５時）に仕事に戻った。

皆は１７時まで（本来の１９時）仕事をし、そして家路についた。

わたし一人が職場に残り、皆が帰った後、屋上に行き、中継器の時計を元の通りに戻しておいた。（本来の１９時半）

翌日、地元警察署から刑事が尋ねてきた。

「昨日の１４時から１５時の間、どこにいたかね？」

強面の刑事が職員一人一人に聞いて回った。

皆は、職場にいたか、配達に回っていたかどちらかを答えた。

わたしは「職場にいましたよ」と答えた。

それは営業所長が証言し裏付けしてくれた。何せ昨日はお昼やたらにお腹が空いたので、印象に残っていたのだ。犯人は背広を着て、頭からストッキングを被っていたはずだった。背広姿で仕事をしているのはこの会社以外には極少なかったのだ。

刑事は営業所長に向き直った。

「全員が１９時まで残業しているな。どうした事情だ？」

「ええ、そんなことはありませんよ。うちは１７時で切り上げています。昨日も全員退社し、店のシャッターを下ろしましたよ」

「ふうむ。この時計は正確かね？」

刑事は職場の壁に掛かっている時計を指さして言った。

「そりゃあ、もう、１０万年に１秒の誤差という正確さです。それは本社の総務部も太鼓判を押しているくらいです。まちがいありません」

「邪魔をしたな」

刑事は捨て台詞を残して帰ろうとした。「あ！ そうだ」

「何です？」

と、営業所長はずれたメガネを指先で直しながら尋ねた。

「この町では電波時計は使えないはずだ」

「ああ、それはですね……」

営業所長は饒舌に刑事に時計の仕組みを説明した。

「その中継器を見せてもらおうか」

「いいですよ。こちらです」

営業所長は階段を上がって行った。わたしも心配になりついていった。

刑事は鑑識に命じて中継器の蓋の指紋を採取した。

わたしの指紋が浮かんだ。了

ロボットと夢と希望

ロボットと夢と希望

昼夜を問わず、わたしは自身の作業場にこもり粘土で人の顔を作り続けた。このとき、わたしはひとかどの人形作家だった。主に造顔が専門だ。名はあまり知られていないけれど、作品は、知っている人が見れば、――ああ、あれだよ。と、言われるくらいのそこそこ知られているレベルの作家だった。ほぼ等身大の少女像が得意だった。粘土は形成した後、乾燥させて釉薬を塗り、窯で焼き、陶器の肌となった。その人形は多くの人々に愛蔵された。

五年ほど前、一人娘が亡くなってから、作風が変わったと人から言われたことがあった。わたしは死んだ彼女の風貌を再現し続けていたのだ。憂いを帯びた微妙な表情。にもかかわらず愛らしい笑顔。納得の出来るものを何度も何度も作っては壊し、作っては壊しして、ようやく、満足の行くものを作り上げた。もう、頭の中で理想とする女性像そのものといえた。ある意味、実際の娘の存在を遥に上回っていたかも知れない。

そして今日出来上がった顔は、どこからどう見ても、最高の出来だった。

美しくて愛嬌があり、誰からも愛される顔。表情が豊かで、どんなシチュエーションにでもマッチする表情。

これを型にして、シリコンを流し込んで柔らかい人形の頭部にする。そして、色を塗り自然な顔になるのを待った。

これは今密かに友人と取り組んでいるロボットの頭部になる予定だった。

ロボット技術者の男と共同作業で、ロボットの顔を作り込むのだ。

絶世の美女、いや、この世に生けるものを遥に凌駕する美を作り出す。もはや執念だった。

彼にもわたしの娘と同年代の一人娘がいて、アナウンサープロダクションのオーディションに何度もチャレンジした後に落ち、将来を悲観して自ら命を絶ったと言う過去があった。

わたしたちは、共同作業でアナウンサーの代りとなるロボットを作り、放送局に売り込みを掛ける予定だった。娘を面接で落とされた恨みを晴らす目的がなかったと言えば嘘になる。しかし、一人娘を失った悲しみは、わたしを理性という岸辺から狂気へと誘い、結果としてそれらの負い目を上回った。

わたしたちは男女の二十代のペアモデルを作り、放送局に持ち込んだ。

「二十四時間働けます。交代要員も要りません。そして代金と電気代以外に出演料も給料もは要らないのです。お得ですよ。放送局のコスト削減にぜひ採用を検討して下さい！」

とプロデューサーに売り込んた。

プロデューサーも最初は半信半疑だったが、実物のリアルさに触れて急に態度が変わった。わたしの自信作でもある。実在の人間以上の存在感を醸し出していたのだ。彼は恐る恐る番組に出してみるが、このロボットを人間のアナウンサーと勘違いした人たちから絶大な反響を受けることとなった。

中にはロボットであることすら気付かず、是非ともうちの嫁に、娘の婿にという、ご老人もいた。その段階で売り込みに一定の成果が出せたのだった。

そして、お昼のワイドショーのニュースタイムに、夕方のニュースに、深夜のニュースにアナウンサーロボットは大活躍した。いくら深夜になっても、表情は明るく朗らかで嫌味がなく、また、ニュース原稿は正確に読み、滑舌が良く訛りもない。ロボットはアナウンサーとしてうってつけの存在だった。

このロボットは他の放送局にも、少しずつ顔を変え、声色を変えて、売り込み、採用が進んで行き徐々に普及していった。

――この世からアナウンサーのオーディションなどなくしてやる。我々の意図は放送局の人的コスト削減という追い風に乗り、着々と進んでいった。

そんなある日、放送業界の内情に触れることとなった一人の女子大学生から抗議を受けた。

「どうしてあんなもの作り出したんですか！」

彼女は来春、採用予定だったアナウンサーの面接にまで合格していたらしかったが、最後の最後で、採用は取りやめになったそうだった。あのロボットのせいだというのは、別にプロデューサーに聞かなくてもわかった。

「わたしは、アナウンサーになるのが小さい頃からの夢だったんです！」

彼女は自分の都合だけを並べ立てた。彼女が一人採用されるごとに、別の一人の人生が踏みにじられるとは考えないのだろうか。わたしは皮肉げに、彼女には見えないようにふっと笑い飛ばした。その夢に命まで懸けていた女性が過去にいたのですよと言ってやりたかった。

やがて、人間のアナウンサーという職業は不要になった。

わたしの人形作家としての望みは達せられた。もう、アナウンサーを選ぶオーディションなんてなくていい。それに落ちて、将来を悲観する若者も二度と出さない。わたしは画面を見て確信を得た。

しかし、当初の目的は達成したものの、胸のつかえとなっていた娘の無念とはどこか違う気がし、心の安寧は得られなかった。ロボット技術者の彼も同じように思っているらしかった。

――どうしてあんなもの作り出したんですか！

というあの女子大学生の声が心に刺さっていた。彼女はあの後、どうしたのだろう？

アナウンサーとしては、もう採用の道はないはずだった。それでも、どこかで採用試験をやっているのではないか。たとえマイナーな放送局でもいいからとあちこち探し周っているかも知れない。そして、彼女はあちこちの局を転々とし、出口のない迷路を彷徨い続けているかも知れなかった。

わたしは、局のプロデューサー筋にそれとなく様子を伺ってみた。

「そうなんですよ。もう、アナウンサーの採用枠はないって言っているのに、毎年、応募書類を送ってくるんだよ。困っちゃうな」

彼はそう言い、タバコを吸いに部屋を出た。わたしはついていった。

プロデューサーも悩みを抱えていた。

視聴率が立ってなんぼである。それは理解出来る。その上で、スポンサーの紹介とかでの売り込みがある。――これこれこう言う学生がいるんだが、検討してもらえないか？そんな天からの声、まさに、天からの声が寄せられるのだそうだった。

それも、相手の顔を立ててやらなければならない。

「あの女の子さあ。本来なら有望株だったんだよね」

と、彼は本音を漏らした。

しかし、今となっては番組制作における人件費からは、新たなアナウンサーの採用など許されないという。

わたしは人形作家としてのプライドとは別に、娘を持つ父親として、違う道筋をすでに心の中に得ていた。あのやる気のある若い女の子に夢と希望を示してやってこその「大人」としての存在なのではないか。彼女、彼らの夢をコストと引き換えに潰してしまう。そのことに一番引っ掛かっていたことに気付いたのだ。

「あの？」

わたしは、プロデューサーに対してとっさに嘘をついた。「あのロボットの顔は特別なシリコン樹脂で出来ていて、千回微笑むと、頬にひびが入ることがあるのです。にっこりさせないで下さい」

「え？ えぇー！ 冗談はよして下さいよ」

プロデューサーはのけぞった。「で、でも修理出来るんだよね？」

「いやあ、難しいと思います。一つ一つの顔は手作りなのです。完全に同じものにはなりません。人間の顔がその日その日で異なるように、人形たちの表情にも日々の移ろいがあるのですよ」

プロデューサーはタバコを何度も吹かし、灰皿にこすりつけ、また新しいタバコを手にした。落ち着かない様子をあらわにしたのだった。今までの付き合いから、それが彼の戸惑いとそれから逃れたいという意志を表しているのだということは十分に理解出来た。現実逃避というやつである。厳しい予算には目を向けたくない。無能な部下の姿も見たくない。現実にそこに存在しているのに、である。

プロデューサーは迷いに迷ったのだろう。そして、予算をどうにかしたに違いない。

その週、あの女子大学生が急遽、ニュース番組に登板した。

すると、今までのニュース番組の「人形のような」笑みに飽きられたのか、人間らしいニュース作りに人気は上々だった。ロボットと違い、原稿を読み間違えることもあるし、タイミングをずらせてしまうこと、声が裏返ってしまうこともある。でも、人々はそうしたものも含めて、ニュース番組を楽しんでいるかのようだった。

わたしは、彼女がカメラの前で微笑んでニュース原稿を読み上げるのを見て、収録現場を後にした。了

N I C U

ＮＩＣＵ

深夜になり妻が息を引き取った。生まれたばかりの我が子を残して。

たったひとりの子供である赤ん坊は、新生児集中治療室（ＮＩＣＵ）で、人工呼吸器とチューブにつながれ、眠っていた。いや意識がなかったというのが正確な所だろう。

わたしは主治医から、妻の死因などの説明を受けていたのだが、実際、今までのこと、これからのことに心を奪われ、それどころではなかった。

「奥様は、この病院以外で……そう、この病院以外で不妊治療、例えば体外受精などを行なったことはおありですか？」

医師は真面目な顔でそんなことを尋ねた。

わたしには訳がわからなかった。妻は自然妊娠で自然分娩を行なっていた。分娩の途中で突然意識を失い、治療を施されるも容体が悪化し、この病院の集中治療室（ＩＣＵ）で蘇生措置が試みられたが、努力は功を奏さず、先ほど亡くなったのだ。

病室の中で、看護師たちが遺体から機器につながれたチューブや点滴、心電図端子などを取り払っている最中だった。

しばらくして問題の本質が明らかになった。

医師が言うには、わたしの血液型はＡ型、妻はＯ型。なのに、新生児の血液型はＢ型だという。

わたしは、茫然とする思いで、医師から検査シートを受け取った。

まさか、第三者の精子を用いて体外受精を行なったのだろうか。生前の彼女はそうした行動を一切見せなかった。こうして病院に駆けつける際に持ちだした保険証や診察券類の入ったビニルポーチの中にも、この病院以外の産婦人科のものは入っていなかった。従って、わたしに黙って不妊治療を行なったとは考えられなかった。

最初、結婚した当初は、子供はどうしようかという程度でしかなかった。

実際に何ヶ月か生活してみて「子供は作らないでおこう」と話し合いの末決めていたのだ。

ただ単に、生活が成り立たないから。という些細かつ重大な理由があった。

共稼ぎで、生活が成り立っていたし、一応、職場では出産、育児に関する休暇取得も認められてはいた。しかし、それは制度上だけの建前に過ぎず、実際には、会社は人事権を盾に取り、そうした長期休暇を取得する人員をどんどん辞めさせたり減給したりしていた。

そうした光景を目の当たりにしたわたしにはとても、これから二人で共稼ぎしながら子供を設けようなどという気にはならなかったのだ。

そして、結婚七年目に入った頃から、周囲に子供を持つ知り合いが出来。見ているうちに、実際、子供を持つことが可能なのではないか？ という結論に達したのだ。

「どうしようか？」

彼女は、そう、わたしに問いかけた。

「作ろうか」

「うん」

彼女はうなずいた。

そして、一年くらいは反応がなかった。もしかしたら自然妊娠を試みるには二人は時期

を逸していたのかも知れないと思い始めた。そんな矢先、彼女から生理が止まったという告白があり、二人してこの病院の産婦人科に来たのだった。彼女は妊娠していた。

わたしが妻と知り合ったのは、大学のサークルでだった。彼女はテニス部でわたしは写真部に属していた。ほとんど接点のない体育会系と文化部系だ。わたしが学園祭に出すために、アスリートの筋肉美を表現することを課題として与えられ、そして、許可をもらいテニスコートで被写体を探したのだ。レンズの中に飛び込んできたのが彼女だったというわけだ。実際、彼女の引き締まった脚と腹筋はきれいだった。

わたしは、彼女に一目惚れし、でも、不器用だったので、彼女を写真展示に招待することしか出来なかった。何度か展示会に招待した。何度目だっただろうか。彼女はわたしの写真を、いや、結局の所、レンズの性能を褒めてくれたのだった。そして、わたしは意を決して自分の気持ちを伝えたのだ。

「佐野さんって、今誰かつきあっている人はいるの？」

そのときの彼女は照れていた。

「別に……いないよ？ だから？」

だからどうだとは言い出すことが出来なかった。

それだけだった。そして直接的な返事はなかった。

彼女と再び出会ったのは大学を卒業した数ヶ月後だった。

わたしの就職した商社と彼女の就職先と取引があり、仕事で何度か、食事を共にした。そして、一年後のバレンタインデーにわたしから彼女に交際を申し込んだ。

仕事は面白くなかった。主に同じ係の者のしでかした失敗を謝って回るという、どこに生きがいを見いだしたらよいのか、人に聞かれても返答に困る様な仕事だった。チーフは「面白いことをしてお金を稼ごうなどと思うな。面白くないからこそ……そう、辛いからこそ、その代償として給料やボーナスがもらえるのだ」と常日頃から広言していた。

もっとも、彼の威勢のよい発言も、労働組合の委員の知る所となり、大っぴらには言わ

なくなった。しかし、その態度と仕事に対する姿勢は変わることはなかった。

当時のわたしにとり仕事で彼女に会いに行くことだけが唯一の息抜きであり、生きがいだった。彼女はわたしの人生そのものだった。

結婚を頭の隅に置いてからはわたしの人生は１８０度変わった。

他人のために頭を下げるのではなく、生活費を得るため、生活基盤を守るために自分のために頭を下げて回る様になった。皮肉にもそのことに気づき、わたしに指摘したのは取引先で働いていた彼女だった。

「山田くん。変わったね」

「え？ 何が？」

「何かポジティブになったよ」

彼女は常にわたしを見つめてくれていた。

その週末の仕事終わりに、わたしは彼女にプロポーズした。彼女は小さくうなずき、「うん。いいよ」と答えてくれた。わたしは天にまで昇る気持ちにさせられた。

そして数ヶ月後、彼女と結婚し、小さな式を挙げた。両親と友人数人と神父様だけのこぢんまりした式だった。

ウェディングドレス姿の彼女は天使の様だった。

彼女が天に召されてしまい、わたしは茫然とこれからのことに思いを馳せていた。まずはお葬式を出さなければならないだろう。誰を呼ぼうか、どのくらいの規模になるのだろう。役所へも届けを出さなければならない。

赤ん坊が生まれて初めて父親になる幸せな希望を抱いていた数時間前とは打って変わり、最悪な状況になったのを実感していた。

そして、肝心の赤ん坊である。

赤ん坊は治療台の上に据え付けられ、口には人工呼吸器のチューブが入れられ、両腕に点滴と胸から心電図を取る端子でつながれていた。生きられるのか、それとも、機械を止めたら死んでしまう状態なのかすら定かではなかった。もう藁をもつかむ気持ちだった。

「先生？ もう一度検査して下さい。子供の血液型があり得ないのです」

「念のため二度採血しました。結果は確実です。……ときどきあるのですよ。御主人に内緒で不妊治療に当たったというケースが。あなたは、奥様のそれとはない提案を仕事で忙しいからと非協力的な態度を取ったことはおありではないですか？」

医師は冷たくそう言った。

彼女の提案を無視するなどあり得なかった。心の底から愛していた。彼女が仕事を終える時間になると必ずメールを入れ、時間があれば会話を交わし、運がよければ駅の改札前で待ち合わせし、一緒に帰宅した。彼女とは二十四時間、三百六十五日ずっと一緒だった。

「えー！ 嘘。マジで？ 二十四時間三百六十五日ずっとなの？ そんなに拘束されたらまるでストーカーじゃん。あたしだったら耐えられないよ」

暗い廊下の片隅でひそひそ話をする声が聞こえてきた。

まるでわたしたちの関係を批判されているかの様にとらえられた。廊下の薄明かりの向こうがわに浮かんだのは妻の世話をしてくれた看護師の女性だった。多分、生前の妻から我々の夫婦関係のことを聞かされていたのかも知れなかった。

――だとしたら？

批判されているのはわたしのことではないか！ わたしは憮然とした。もしかしたら妻もわたしのことを拘束しすぎのうざったい相棒だと思っていたのではないだろうか。

はっとした。

そんなことはないはずだ。妻はわたしの全てを受け入れてくれていた。ストーカーなんかではなかったはずだ。あの赤ん坊の血液型は本当はA型でわたしと彼女の愛の結晶なのだ。あの医師は検査データのシートを取り違えているのだ。きっとそうに違いない。

わたしは、最後に妻の顔をもう一度見ようと病室を覗いた。

妻の顔は安らかで無垢だった。了

埋葬

埋葬

公園の花壇の一角に地面を掘り返したような跡が出来た。

その直後、近所の老人が一人行方不明になっていることが明らかになった。

町は大騒ぎになり、町内会や老人会にも動員がかかり、皆で手分けしてあちこち探し回る羽目になった。

町外れの藪の中をかき分け、小学校近くの池の底まで浚い、電車の線路脇の側溝も蓋を全部開けて中が調べられた。

しかし、老人の行方は依然としてわからなかった。捜査が難航した一つの理由は、老人がひとり暮らしだったことで、いつからいなくなったのか、普段どこを歩いていたのかなど一切手懸かりがなかったことだった。

わたしは老人から個人的に金を借りていた。会社の運転資金を一ヶ月、三ヶ月といった単位で用立ててもらっていた。借りては返すというやり方で、常時百万円くらいの借入額があった。

わたしの会社は何とか持っている程度で、ちょっとでも気を抜くと倒産する寸前だった。

資金に余裕は全くない。工事を請け負い、元請けから支払いを受けて社員に給与を支払い、資材の代金を振り込む。

もう一日のずれも許されなかった。

当座預金の口座から残高が消え、支払い不能となると一度目で監視対象となり、二度目の支払い不能で銀行は取引を停止する。お金は企業にとって血液みたいなものだ。例え他人から借金をしてでも、常に口座をプラスの状態にしておく必要に迫られていた。元々、自己資本に乏しかった。ほとんど借入金だけでこれまでやって来られたのが奇跡に近いほどだ。口座の残高がゼロを下回る。すなわち資金がショートすると会社は倒産となるのだ。

老人からお金を借り入れて何とかやって来られた会社だったが、転機が訪れた。

ある日、老人の一人娘が結婚することになったそうだった。

「すまんな。山田くん。急に入り用が出来てなあ」

聞けば三十五にしてやっと相手が見つかり、嫁がせるのだという。それもこの地方では知られた名家だった。

嫁入り道具や持参金に金がかかるわいと、嬉しそうな悲鳴を上げながら、わたしに対し、金の返済を迫った。老人にはわたしの会社の窮状など知るよしもなく、ただ単に、銀行に預けておいても利息も付かないし、それなら、わたしに貸し付けた方がお得だと、気楽に手持ちの資金を回してくれていたみたいな言い方だった。

わたしと老人との間の契約では支払い条件は明確ではなかった。あるとき払いの催促なしが原則となっていた。わたしは律儀に、いや、本心では律儀なんかではない。次の融資を円満なものにしてもらうために、きちっと期日を守って返済していた。返してはまた借りる。会社の運転資金なのだからある程度仕方のないことだ。

でも、もし、少しでも利益の出る仕事だったら、いつかは、負債額より資産額の方が大きくなり、お金を借りなくてもよくなる計算だったが、実際にはそううまくはいかなかった。とにかく会社はうまく行っていなかった。

「そういう訳で、金がいるんや。返してもらおか」

老人は笑いながらそう言った。わたしの会社を潰してしまえとか言う悪気はまったくなさそうだった。それだけに、断ることは出来そうになかったのだ。

わたしは窮地に立った。

今あるお金を引き上げられれば、今月の支払いは不能になる。倒産は免れなかった。

業者に代金を支払わないことや社員に給与を払わないことと、倒産することとどちらが罪が軽いだろうか？ わたしはしばし熟考した。

いや、いっそのこと……この老人が事務所に来たことは、他の誰にも知られていなかった。もし、今日の夜になって老人が家に帰らなかったら？ 一人娘は都会で離れて暮らしている。結婚資金を出してくれと頼むくらいだから、頻繁に連絡は取っているだろう。しかし、今日、明日発覚する恐れはなさそうだった。

「竹井さん」

わたしは、老人にソファで座っている様言い、金庫のある奥へと向かった。そして工具を収めてある棚から工事で使う太いビニルロープを取り出してきた。老人は何の疑いもなく、今日、貸したお金を耳を揃えて返してもらえると信じ込んでいる素振りだった。

お茶を飲んでいる老人の背後から、わたしは迫り、首にロープを掛け、全身の力を込めて絞り込んだ。

老人は「ぐぐぅ」という音を出し、首に食い込んだロープを何とかしようと、爪を立てて首筋を掻きむしった。

何十秒か経っただろうか。わたしには永遠の時に感じられるくらい長い時間だった。やがて老人は動かなくなった。

そして、老人の絞殺死体を前にして、わたしはしばし茫然となった。

困ったのが遺体の処理だった。

小さな遺体がソファの足元に横たわっていた。

早く隠さないと従業員が仕事先から帰って来る。人に見られたら一巻の終わりだった。

会社を潰さないために人を殺めたのに、社長が逮捕されて廃業となったのでは、何をしたことかわからなかった。

人を隠すには人の中。

大通りに面した公園の花壇に夜間に穴を掘った。作業員の格好をしていたから、夜間に穴を掘る行為にはどこにも違和感はなかった。

わたしは土建工事用のシャベルを使い、全身の力を込めて花壇の軟らかい土に突き刺した。ザックザックと土を掘り返した。しかし、楽に掘れたのは、最初の五十センチだけだった。下の方は堅い土の層が横たわっていた。ガツン、ガツンと何度もシャベルの刃先を突き立てた。額には玉の汗が浮かび、地面にぽたりぽたりと落ちていった。目に汗が入る。目に汗がしみてしょぼしょぼした。

日付が変わるくらいまで経っただろうか、ようやく一・五メートルの深さまで穴を掘ることが出来た。

わたしは会社の事務所まで戻り、そして、遺体を縄で固縛し、手押し車に乗せて公園まで運んだ。この間、遺体は硬直していて、床に横たわったときの姿そのままだった。

深め、大きめに穴を掘っておいてよかったと思った。

そして、ごろんと老人の遺体を穴の底に落とし入れた。

「ふうっ」

わたしはやっと人心地ついた気がした。後はもう土を掛けて元通りに戻すだけだ。

ざっざっざとシャベルで土をすくい、穴を埋めていった。

※

老人は行方不明扱いのままだった。消防団や自治会、老人会が中心となって辺り一帯が捜索された。道路の側溝やため池、電車の線路の脇など。しかし、どこを探しても老人の痕跡すら見つからなかった。

半年くらい経った頃だろうか。わたしが公園の様子を見に行ったとき、その姿を小さな子供が見ていた。

「おじちゃん。埋めた。宝物」

よく通る朗らかな声だった。わたしが忌まわしい犯罪の証拠を埋めたとは微塵も感じさせないものだった。――なぜ、この子はわたしに向かってそんなことを言うのだ？ わたしには訳がわからなかった。もしかしたらわたしの悪事の全てを夢の中で見たのかも知れなかった。

そこに、交番のお巡りさんが通りかかった。警察はまだ老人の行方を追っている。

お巡りさんは、子供に優しく問うた。

「おじちゃんは何をどこに埋めたのかな？」

「花壇！」

お巡りさんはわたしに向き直った。

「そう？ あなた、おじいさんがいなくなった事件をご存じですね？」

「いや、わたしは……その……」

たちまちしどろもどろにさせられた。

「ちょっと交番までご同行願いましょうか？」

幼児が告発した花壇の「宝物」には、その日のうちに、警察の捜索が入った。

わたしが苦労してシャベルで掘った穴などあっという間に掘り下げられてしまった。そして、白骨死体が出て来たのだ。

何故だかわからなかったのだが、捜査の途中で土器の破片が出て来た。

考古学者も捜査に加わり、土器の年代から出て来た白骨は縄文時代のものだという鑑定がおりた。わたしは釈放された。了

レトルトバナナ

レトルトバナナ

わたしはK市の市民サポート課の主任だった。

市民生活において出てくるありとあらゆる問題に対処する係で勤務していた。

「磯野君ちょっと」

課長から呼ばれた。聞く所によると市民マラソン大会を夏場に行なうらしく、そのサポートを行なうことになったらしかった。

通常のマラソン大会はもう十年も前から行なわれている、運動好きな市民のための一大イベントの一つだった。このK市の市民だけでなく近隣の市町村からも参加者が多く、活況を呈していた。

もちろん、企業や大学の陸上部に属する本格的なアスリートたちも多数参加する。彼らは市民ランナーたちの先頭で出走し、そして、タイムを競うのである。この大会のタイムも、来たるべきオリンピックの代表選考の参考データとして扱われていたことから、彼らの本気度も半端ないものだと言うことはもちろん、市民ランナーの中にも、「参加することに意義がある」という人たちとは別に、プロのランナーたちに一泡吹かせようと言う本格的な人たちもいた。

だからと言う訳でもないのだろうが、タイムも二時間を切る様な本格的な選手もいるかと思えば、仮装して走り、目立つことが目的の参加自体に意義があるという軽い参加者もいた。彼らのタイムは規定オーバーの六時間以上というものもいたが、市の世話係としては切り捨てるわけにも行かず、伴走するなり、救護車両を配置するなどして面倒を見なければならなかった。

「でも、課長。マラソン大会は秋の十月ではなかったですか？」

わたしは素朴な疑問を口にした。

「そうそう、そこなのだよ。今回に限り真夏の開催と決められてしまった。企画課の裁量だ」

「ええ？ どうしてまた。プロのランナーでも問題があるでしょうに、一般参加の市民ランナーには負荷が高すぎると思いますが」

「オリンピックだよ。磯野君。オリンピック陸上の本番は真夏の八月開催だ。その選考会も兼ねられているから、今回のマラソン大会も八月開催となったんだ。君、ひとつサポート役として尽力してくれたまえよ」

「はぁ」

わたしは、猛暑の中、体力もないのに勢いで参加し、十キロも走らないうちに熱中症でダウンする哀れなランナーの姿を思い浮かべた。もっとも、真夏の大会ともなれば、それに合わせて調整してきているはずのチーム所属の選手ですら完走率は百パーセントではないのだ。

もう体力に自信のない人は、参加を見送る様、警告するビラを配布することすら考えに浮かんだ。

しかし、市の上層部がそんなこと認める訳がなかった。

「全員参加型イベントにしよう！ いいかね。市民全員が参画する大会にしたいと思うんだ！」

どこからかやって来た市長は無責任にも自分の政治的スローガンをそのまま我々執行部に押しつけたのだった。

本格的なアスリートたちにはそれぞれ専門のコーチがつくだろう。そして、各補給ポイ

ントでスポーツドリンクや水などの補給をしてくれるから、こっちはさほど心配していなかった。さらに、トップタイムは二時間を切ろうというのだ。もぐもぐとおやつを提供しても見向きもされないに相違なかった。

これに反し、一般参加の仮装組は、お祭り気分で参加する。タイムは五時間以内なら上等なくらいで下は七時間近くになる。もっとも、五時間を切れなければ記録としては認定はされない。参加賞だけの「記憶」だけに残る本当のシルシだけのものに過ぎなかったのだ。

そして、実際参加してみて必要だと感じたのは、本格的な補給の必要性だった。

水やスポーツドリンクでイオン分を補うのはもちろんのこと、五時間もの肉体労働に匹敵するカロリーを補給してあげなければならない。これまでの例では、パンやチョコバーなどのお菓子、高カロリー食品、おにぎりにバナナなどのフルーツが開催記録に残っていた。

ただし、これは秋の大会だ。真夏の菓子パンやおにぎりは食中毒の原因になりやすいし、バナナなんかも優れものだが、炎天下ではすぐに傷んで真っ黒になってしまうだろう。

わたしは課長の承認を取り付け、専門家の知見に頼ることにした。

ここH県の誇るH県立大学の栄養学科と食物加工学科の研究者にアイディアを出すよう頼んだ。

バナナは栄養素が豊富で登山やサイクリング、マラソンでの補給食、行動食に適している。あの甘みだけでも、糖分の補給に十分であるし、甘みは運動における疲労を回復させてくれる。しかし、冬場はともかく、暑い季節になると、傷みやすく、青い果実も数時間単位で熟し、腐敗していく。

客員研究者でもあるロシアの登山家イワノフ氏はこう言ってバナナの効用を喧伝した。

「バナナは糖分の摂取に適していて、その上、繊維分、ビタミン類が豊富。行動食にちょうどよい」と絶賛した。

ちなみにロシアではバナナは採れない。フィリピンや台湾などの南国の果物だ。

その上、実際、生のバナナは収穫するや否やすぐに傷んでしまう。

皮は黒ずみ、実は取れたての時のフルーティーなものから、熟してカスカスの食感になりすぐに食べられなくなってしまう。

「何とか長期間保存出来ないものか？」

イワノフ氏はそう言った。大学の研究者への挑戦状とも取ることが出来た。

これを受けて食物加工学科の学生さんたちはレトルトのバナナを開発した。

アルミ真空パックに黄色いバナナが一本まるごと入っている。特殊な防腐液に浸されている。袋から出したそのままでも美味しそうな代物だった。

研究室で食べる試供品のチョコバナナは最高の味わいだった。

我ながらヒット商品だと思った。マラソンが終わった後、K市の特産品として売り出せるのではないか。そんな色気じみたものを頭に浮かべた。

色んな味のバナナの真空パックが開発され、最終的にバナナの素材の味をそのまま生かしたフルーティー味とバナナの周りをチョコでコーティングしたチョコバナナの二品が候補に残った。

わたしには恋人がいて、彼女は三十歳のアスリートだった。主な種目は市民マラソン。普段は一〇キロの部に出たりしているが、ときおりフルマラソンに参加するというハイレベルのランナーだった。小柄な体つきながら、ものすごいスピードでトップランナーに引けを取らずに四二・一九五キロを走破してのけるのだ。

マラソン競技では給水や、行動食の補給がなされる。

ほとんどの場合、走行中にも取りやすい栄養ドリンクが多いが、長時間のレースになると

バナナの様なカロリーを補給し簡易食料が提供される場合があった。単におやつと侮ることなかれだ。この補給カロリーでランナーは長時間運動を維持出来るし、場合によってはタイムにまで影響した。

彼女との出会いは学生時代に遡る。彼女は陸上部でわたしは同じ高校から進学し、彼女のことが密かに好きだったわたしは陸上部のマネージャーとなった。彼女のタイムや何かを管理する立場に置かれた。

そして、栄養学科に進んだのだ。周りは女子学生ばかりだった。

専攻科目として保存食の研究に従事した。それが性に合ったのか、教授に認められ、大学院に進む様言われた。

研究に打ち込み、論文を発表する傍ら、写真を趣味にする様になり、陸上競技場のアスリートたちの写真を撮り始めた。

写真は走るより楽だと言われることもあるが、とんでもない。いいポジションを取るためにランナーに合わせて移動しなければならないことは言うまでもなく、マラソンで言うと、スタート、中継地点、ゴールと何カ所も先回りしておかねばならないのだ。

そんなある中継地点で、彼ら、彼女らが補給食を摂っている場面に遭遇したわけだ。

その時以来、わたしは、自分で開発した補給食を彼女に食べてもらいたい。彼女の血肉の一部になりたい。そんな邪な心が浮かぶようになった。

そして、K市マラソン大会。

わたしは第三補給所で、学生さんたちに頼んで開発してもらったレトルトバナナをひとりひとり袋から出して、そのうちの一個をランナーである彼女に手渡した。

彼女は一口食べ、そして振り向き、グーサインをして笑顔を見せた。了

２００時間

２００時間

わたしはＫ市の海岸沿いに位置するＮＴ工業Ｋ事業所の勤労課長だった。主に社員の勤労環境を守ることで、会社の経営を縁の下で支える。そんな業務を行なう課を統括する立場だった。

十月のある日、工場における生産を管理している生産管理課の若手社員が出社してこなかったという。

自宅に連絡を入れてみると、昨日の夜間に帰宅してから胸を押さえて倒れたということだった。両親が慌てて救急車を呼び、自宅から三十分ほどの距離にある中央市民病院の救命救急センターに搬送されたらしかった。

ＤＯＡ（到着時心停止）の状態だった。医師たちは懸命の努力をして蘇生を試みたが、努力空しくそのまま心臓は二度と鼓動しなかった。

そして、そのまま死亡が宣告された。

翌日になり、わたしは会社側として何人かの葬儀委員を任命して、お通夜と葬儀のお手伝いをするとともに、そのこととは別個に原因を調査し始めた。

過労死だとは思いたくなかったが、もし、そうだとしたらこのご時世である。マスコミの餌食になってしまうのは目に見えていた。

家族は今のところ息子の死を穏便に処置したいみたいだった。

労働組合と会社との協定では一ヶ月の残業は十六時間以内と取り決められていた。

そして、一応、守られていた。

しかし、実際どうだったのか。

わたしは生産管理課へ赴いた。

こちらの課長は勤怠管理表をめくりながら答えた。

「労使協定の十六時間は守られているんだけどなあ」

わたしはそれを受け取って、彼の勤務実態を確かめた。一日当たり、一時間、二時間とつけてあり、月間トータルは労使協定での上限である十六時間に収まっていた。

いや、収まるように、一日の残業時間を抑えて記入していたに違いなかった。勤労課職員の勤務時間は厳密にわたしが管理していたが、他の課では管理表の数字と実態が合っているのかどうかなんてわからなかった。

機械工作部の生産管理の仕事は、設計から出てくる図面を元に、実際の作業に翻訳して、工場の各作業者、作業班に割り振っていくという業務だった。モノを持ち上げる、機械に据え付ける、削る、溶接する、組み立てるといった一連の作業を図面一枚を元にばらしていく。そんな仕事だった。

こう言う仕事は、得てして作業者と、注文してくる設計者との板挟みにあいやすい傾向にあるものだ。

わたしは設計部に赴き、最近半年間の作業量を尋ねて回った。

「いやあ、納期と予算が厳しくて.....」

と、スケジュール通りに図面を出さなかったことを暗に示していた。

確かに、昨今の人手不足のご時世である。作業が予定通りに進捗しなったという事態は容易に予期できた。

わたしは、設計課長に人材が足りていないのか聞くと、彼はこうも答えた。

「営業が安い値段で取ってくる仕事だよ。そんなに人手を掛けられるもんか」

そう嘯いた。

わたしは嘆息し、次の調査先である情報システム課に行った。

「亡くなった山田君の勤務実態が知りたい」

「そんなことうちに言われたって……」

「いや、そうじゃない。今頃は何をするにもパソコンじゃないか？ もし、彼が過勤時間を故意に隠蔽していたとしても、使っていたパソコンの使用履歴がわかるんじゃないかと思ってね」

「ああ、なるほど。わかるでしょうね。ですが、個人情報もいい所ですよ。あ、そうか、死んでしまったら個人情報じゃなくて、故人情報ですね！」

彼は笑えない冗談を言った。

そして、ここで管理している事業所全部の稼働情報を検索し、山田君のパソコンの使用状況を同定した。

「朝は七時半からログインされていますね。早い日だと六時半です」

「その日にログアウトしたのはいつになっているんだ？」

「日付が変わって、次の日の二時にログアウトしています」

わたしは一瞬青ざめた。この事実は朝の七時半から次の日の深夜二時まで勤務していたことを物語っていた。ざっと十八・五時間。お昼と夕方の休憩タイム一時間半を差し引いても十七時間だった。

更に、ログイン情報を確かめると、こんな日が毎日常態化していた。定時勤務の八時間

を除く過勤時間は九時間だ。二十日で一八〇時間。それに、土曜、日曜にもこれほどではないが、昼間出勤してきていた。これは全部が過勤時間と見なされる。十六時間掛ける四週で六十四時間。全部足すと二百四十四時間だった。もうすでに厚労省の定める過労死ラインを越えていた。

「おいおい、こんなことが常態化していたのか？ 他の社員にも蔓延しているのではないだろうな」

「うちは、各自の端末の管理だけです。労務管理はそれこそ勤労課の仕事ではないですか？」

彼は正論を堂々と述べた。

確かに、勤労課では、社員一人一人の勤務実態を監視しているつもりだった。今となっては過去形で語らねばならないだろう。

――このままではまずい。わたしはこれから遺族の元に挨拶に行く当の機械工作部の部長と生産管理課長とにインフォームした。超ハイパー級の過重労働の実態が明らかになりましたと。

「パソコンのスイッチを切り忘れただけだろう。裏で何かプログラムを走らせていたのではないのか」

部長は現状を認識せず、パソコンのせいにした。あくまでも、自分の部で過重労働が行なわれていなかったという前提で物事を考えていたようだった。

そして、亡くなった山田君のご両親と言い争いになったらしかった。会社は過重労働など認めないし、第一、実労働時間として公式に残されたデータは勤怠管理表の定時間勤務の八時間に加えて過勤時間が一時間乃至二時間程度だった。山田君には気の毒だったが、一、二時間の過勤の程度ではとてもではないが、彼の死因となった心筋梗塞の原因にはなり得なかったのだ。

「勤労課長さん。息子の！ 息子の生前残していた業務日誌があります！ どうか過重労働の実態を認めて下さい！」

山田君の父親がわたしにも食ってかかった。

――そんなものを残していたのか？

わたしは、父親から手帳サイズの業務日誌を受け取り、ページを繰った。

○月○日△△の件にて、溶接課の林田社員と打ち合わせ。図面の内容につき説明し、必要な工程を先方にて実施してもらうことの承諾を得る。

などと、細かな字で作業内容が詳細に記されていた。

「残念ですが。労災保険の申請には具体的なデータ。例えば何時に出社し、何時に退社したとか言うようなものが必要です。この作業日誌だけでは、……まあ、内容から推察することは出来るかも知れません。しかし、労働基準監督署が認めない場合には裁判となりますが、それに耐えうる資料とは到底思えません」

「そ、そんな。息子は会社に殺されたのですよ」

「山田さん。それは言い過ぎです。彼に健康上の問題があったのに気付かなかった過失は確かにあるかも知れませんが、しかし、それが直接彼の死因に結びついたとは言えないのですよ」

「そ、そんな……」

父親は肩を落とした。

父親の目的は労災保険で下りるお金ではないだろう。もし、彼に妻子があるなら話は別だ。残された遺族にとり唯一の補償金となるのだ。でも、山田君はまだ独身だった。もっとも、この際の遺族は父母となるが、こんな労災保険の金など欲しくはないだろう。彼らが欲しているのは唯一つ、山田君のこの世に生きた証だった。彼が生きてきた足跡と言えた。皮肉にも、この期に及んでは労災保険でしかなかったのだ。

労働審判、あるいは最悪の事態として裁判に耐えうる資料として、わたしは、情報システム課へのパソコン端末へのアクセス記録から立証は可能だと認識していた。

わたしはたった一つの証拠となるこのデータの隠蔽に心が痛んだ。

しかし、それを出すことは会社の利益に反することだった。わたしは、情報の封印を命じた。

そして自身の作業場に戻り、勤労体制の見直しを上司に上申した。二人目の山田君を出さないために。了

飲酒検問

飲酒検問

わたしは年末に髪を切りに出かけた。

行った先の理容室はものすごく混んでいた。出直そうか？ とも、一瞬思ったが、出直しても、そのときに空いている保証はどこにもなかった。わたしは意を決して順番を待つことにした。週刊誌でも読んでいれば、そのうち自分の番が回ってくるだろう。いつかは来るのだ。回ってこない順番だと言うのなら、また、話は別だ。それはそのとき違う対応を取ればよい。

しかし、これは、確実に……そう確実に順番が回ってくる「順番待ち」なのだ。気長でいなければ損なのだ。

わたしは気を取り直し、椅子の前にあるラックから新聞を取り出した。

やがて、それにも飽き、今度は人間観察を始めた。

おかしなモノで、長椅子に座って順番待ちをしているときはブスッとしていた人も自分の順番になると急に饒舌になる。そして職人が鋏で髪を切っている間、とりとめのない会話を続けるのだ。内容？ そんなものをここに求めてはいけないのだ。ほとんどが、家での親の介護の愚痴だとか、税金を収めたけど申告したら返ってきただとか、こうこうこういう健康法があって、実行したら血糖値がよくなったとか、それ単独で聞けばある意味、面白いかも知れなかった。

しかし、こっちは列の後ろの方で順番を待っている身だった。

そんな下らない話をしている暇があったら、さっさと鋏を動かして客の頭を刈ることに専念してもらいたい。

いや、職人さん自身、この仕事に飽き飽きしていて、もしかしたら、こう言った客との会話を楽しむためにこの理容室を開いているかも知れないではないか。

五十代に差し掛かった男性が椅子に座った。

「いつもの通りですか？」

職人がタオルとシートを巻きながら聞くと、男はいつもの通りで、と答えた。

ビニルのシートを前に掛け裾を軽く押さえると、職人は次の動作に入りさっとスプレーを掛け、チョキチョキと鋏を動かし、男の頭髪を裾から切りそろえ始めた。これだけはいつものルーティンワークだ。

ひとしきり、髪の裾を揃えると、いよいよ本丸へと突入だ。わたしもさっきから何度も目にしている腕時計に再度、再度目をやった。――早くしてくれ。俺は急いでいるんだ。今日は日曜日には違いないが、やることは山ほどある。今日はこれがすんだら、家に帰り、愛犬の散歩がわたしを待っていた。別にわたしが行く必要があるのか？ それを言われると反論は出来ない。仕事でよくすっぽかしているから、わたしでなくたっていいということだ。しかし、たまの日曜日の午後。わたしがいるときにまで誰かに頼むという訳には行かないではないか。

「先週、交番の前で飲酒検問があってなあ」

男は悠長に話を始めた。――正直なところ、金曜の深夜に駅前交番の前でやっている飲酒検問のことなどどうでもよかった。

とにかく男は暇だったのだ。さっきまではただ待つ側に立っていたが、もはや順番が来た以上、職人の手は彼のものである。普段、奥さんか子供にでもするような暇つぶしの題材を、この中でもっとも忙しいであろう職人に振ったのだ。

わたしの望みは、早くこの男の頭を刈り、わたしの順番、必ずしも次の次という訳ではなかったが、とにかく、一刻も早く散髪を終わらせ、きれいな頭になり、家に帰り、愛犬を散歩に連れて行くこと。これだけが至上命題だったのだ。

「そうでっか」

職人は、興味がないのはわかっていた。しかし、客と店の関係である。ものすごく興味を抱いて「そうでっか」と答えたに相違なかった。本当に、本当にどうでもいい話だ。

すると、その答えに気をよくした男は、ことの仔細を雄弁に語り始めた。

「いつも、この時間にやってまっしゃろ？ なあ？ そやからわし……」

――別の道を選んだんだのだろう？ とわたしは心の中でつぶやいた。

「一本東の道を通りましてん。これはうまいこと考えたなと自分でも思いましてん」

男は続けた。

「お巡りさんは馬鹿正直におんなじポイントで違反者を釣り上げようとしとるじゃないですか？」

「ええ、そうですね」

職人は髪を切る手を止めずに返事した。この点だけは流石にプロだ。

いかに逃れたかを、調子よく語った。

職人はあらかたの形を整えると、今度は鋏を持ち替え、細かな所を切り始めた。

――こんな男の細かい点など、もうどうでもよかった。もし、この男を黙らせることが出来たらもう少し気分も穏やかになっていたかも知れなかった。

チョキチョキ、チョキチョキ。

一瞬、鋏の音だけが店内に響いた。

「金曜日の夜中の十時過ぎからかなあ？ なあ？ そやろ」

男はなおも、誰も聞きたくもない話の本筋に戻って来た。

「へえ、そんな時間に検問ですか？ ご苦労なことですなあ」

職人はそう相づちを打った。本気でそんなことを思っている訳ではないだろう。わたしから見たら、単に男の口が締まらないから、黙れとも言う訳にも行かず、はいそうですかという意味で相づちとなったにすぎないのだ。

しかし、これに気をよくした男は調子に乗って喋り始めた。

「お客さん、ひげはどうなさいます？」

職人は聞いた。ひげくらいは剃るだろう。その間だけはこの男のお喋りも封印だ。まさか、カミソリを顔に当てられた状態で喋り続けるわけがなかった。

しばし、男は大人しくなり、わたしは週刊誌に目を落とした。芸能人のスキャンダルや政治の裏話。興味は引くものの、記事には見出し以上の価値はなかった。見かけ倒しとはこのことだなあと素朴に思った。週刊誌ではこの何十分かの時間つぶしに耐えうるだけの情報的価値は見出せなかったのだ。家から文庫本でも持ってくれたよかったなあ。わたしは用意を一応しつつも、出かけるときの荷物は出来る限り少なくすると言う普段の習慣を見直さなければならないなと思った。

また、男のお喋りが始まった。飲酒検問の続きだった。

「わし、どうしても飲みに誘われて断れんかってん。せやけど、あの時間に動いているバスもないし、クルマで行ってん」

「そんなときに限って検問てしているもんですなあ」

職人は相づちを打った。「あ、シャンプーしますか？」

「あ、ああ頼みまっさ」

職人は男の首にタオルを巻き、上からビニルのシートをかぶせ、排水口の上に頭を持って行った。これで男は完全に喋れなくなった。しゃーっとお湯を出し、業務用シャンプーを掛け、満身の力を込めて男の頭をゴシゴシとこすった。

「かゆい所はないですか？」

職人は聞いたが男は返事を出来ない。「大丈夫や」と、辛うじて返事が聞こえた。

シャンプーが終わると男は再び椅子上の人となった。

「せやさかい、わし、別の道を……」

がーっというドライヤーの音にかき消された。――そうそう、そうやって、飲酒検問をかいくぐったと言うのだろう。そんな自慢話など聞いても何の得にもならなかった。それより、男の話に影響されず、少しでも早く散髪をすませることが大事だった。

男は毒を吐き尽くしたのか、単に散髪したてのせいなのか、すがすがしい顔になり帰って行ったが、わたしの順番はまだだった。

次に順番が来た杖をついた老人は、よぼよぼだったが背筋はシャキッと伸びていた。店主との話を聞いていると、どうやら、元警察官だったそうだ。この老人の話も長くなりそうだった。

昭和十五年に招集を受けて当時満州や北支と呼ばれていた中国の戦地に出征し、満州で終戦を迎えたそうだった。どうやら九十代後半から百くらいと思われた。

「ただね。……戦争に負けたことだけが、国民の方々に申し訳なくてね。だって、あれだけ軍人に協力してくれて、それで勝てなかったなんて、ボクはね、あのときはあれほど悔しく、空しいことはなかったんです」

「そうだったんですか？ 大変でしたねえ」

職人は相づちを入れた。

「それでね。少しでも国民の皆様のお役に立とうと、警察官に志願したのですよ」

「そうですか。大変でしたねえ。もみあげはどうします？」

職人は喋りながらも決められた手順を次々こなして行った。

そして、老人は警察官時代に、いかに飲酒運転を取り締まったのか。昔話を始める。

「大事なのは一般市民の挙げ足を取るような取り締まりをすることではなく、そこに隠された。まあ、滅多にないのですが、重要犯罪を摘発することにあるのです」

「やっぱり、そんなものですか？」

職人はまたも鋏を使いながら相づちを打った。どうやらさっきの客の話など全く聞こえてもいなかった様だった。了

おばあさんポスト

おばあさんポスト

わたしは幼少時からしつけの厳しかった母親に反発し、地元の高校を卒業すると、家を出てアパートを借りて自活し始めた。母親はいわゆるシングルマザーだった。厳しかったのは一人でも何とかやっていける様、わたしのことを考えた末のことではないかと、後になって思うことがある。

自立後の生計はアルバイトを三つ掛け持ちして何とかやりくりした。

でも、一人暮らしはやはり寂しく、じき、ネットの出会い系サイトで知り合った男性と付き合い始めた。

男性は既婚者だった。最初に彼はそう宣言し、わたしとの関係は全て遊びだと釘を刺していた。

だから避妊には気をつけていた。しかし、間違いは起こるべくして起こるものだった。結婚できないはずの男性の子供を宿してしまったのだ。その人は地位も身分もお金もある人だった。自分は遊び、そう覚悟してつきあっていた。妊娠したのがわかったとき、その男性は気まぐれだったのだろう。「好きにしたらいい。ただし認知はしないし、養育費も出さない」と言われた。あまりに冷たい言い様だった。

暗に堕ろせと言われたのに等しいのだが、そのとき、自分は若かった。男性に一矢報いてやりたい一心で、出産直前まで時間を伸ばした。——もし出産したら男はどう出るのだ？ 交渉能力も何もないのに瀬戸際外交じみた真似を試みた自分がバカだった。

臨月になっても男からは何も引き出せなかった。

ただ、その後、何となく疎遠になり、ついに連絡が途絶えてしまった。それまで男のことを「しいさん」と読んでいたが、ついぞ本名を知ることはなかった。多分、であるが、シンイチとかシンノスケとかいう名前だったのだろう。気がつくと唯一の連絡手段だった電子メールのアカウントも削除されていた。

結果、堕胎も出産も出来なくなってしまった。いや、残された道は出産しかなかった。

そして、アパートの一室で一人っきりで出産した。

幸い、安産で、自分の命も助かり、赤ん坊の命も助かった。女の子だった。

小さな消えそうな声で泣く赤ん坊を手元に抱え、茫然となっていた。どうしよう。そんな折りのことである。ラジオで赤ちゃんポストが近所の病院に開設されたことを聞いていたことを思いだした。しかし、他人事の様に聞いていた。まさか、自分がそこのお世話になるとは夢想だにしなかったからだ。誰にも気取られぬ様に早朝その子をタオルケットでくるんでから抱いて、ポストに預けに行ったのだ。このとき赤ん坊は聞き分けがよく、にこにこして泣きもしなかった。唯の一度も。

病院に着き、ポストの窓口へ行き、そこにあった戸棚を開けると電灯がついた。向こう側に赤ちゃん用のベッドがあるのがわかった。看護師か誰かが控えている気配がした。こちらの顔は見えないようになっていた。手紙を添えることもあるいは可能だったかも知れない。こうこう名付けて下さいとかだ。しかし、手に負えない存在をとにかく他者に預けて自由になりたい。ただその一心だった。

ベッドの上に赤ん坊を捨て去る様に置き、そして、扉をそっと閉めると一目散に逃げ出した。

赤ん坊とはそれっきり、一度も合わなかったし、成長しただろう年頃だと思っていても、手紙も書かなかった。自分の中では何もなかったことにしていた。

それからのわたしの男性運は、まるで駄目だった。つきあう男性はみな自らを偽り、あるいは、自分を裏切り去って行った。何も残さず。

田舎から心配して出て来た母親に見合いを勧められ、とある男性と出会った。後の夫だった。見た目から性格までまるでタイプではなかったが、母親はこの男性とくっつく様強要した。わたしは嫌だったが不承不承婚姻届に判子をついた。

母親が強く進めた理由はじきに明らかになった。真面目で誠実。それ以外に取り柄はなかったと言えよう。

よく働く人で、稼いだ金は全部家庭に入れてくれた。

娘が生まれ、自分とは違う人生を歩ませようと、小学校から名門に入れた。そして、大学まで出してやり、今まで出会ったひどい男とはまるで違うタイプの男と見合いさせ、家庭をもたせた。

じきに孫も生まれた。

夫は孫を可愛がり、一家は幸せに満ちていた。

しかし、そんな幸せもかりそめのものだと気付くのに時間はかからなかった。

孫娘が小児ガンで亡くなったことがケチのつき始めだった。

夫が脳梗塞で倒れ、処置が悪かったのかそのまま死んでしまった。娘夫婦も時を同じくして病気になった。婿が心筋梗塞で倒れてそのまま帰らぬ人となり、同じ年の冬に娘も同じ病気で亡くなった。わたしは再び孤独になった。

自分が八〇歳になった頃だろうか。

社会は高齢化の一途をたどり、あちこちのアパートやマンションで独居老人の孤独死が連日のニュースを騒がせるようになった。

国会で、身寄りのない老人を行政が介護施設に収容出来るという法案が可決した。民生委員が定期的に地域の老人宅を訪問し、一人暮らしで介護が必要だと判断すると役所に通報し、親族の承認がなくても介護施設に収容するというものだった。

俗に「おばあさんポスト」と揶揄された。自然、夫に先立たれ、家族も親戚もいない老女ばかりが施設に収容されていった。

尋ねてきた民生委員が役所に通報するだけで、施設から保護委員がやって来て、連行する様に老人を施設に収めていったのだ。これはこれで、いいことだったのかも知れない。さもなければ、わたしは夫の残してくれたマンションの一室で孤独死を迎えていたかも知れなかった。

自分も、一人っきりで身のまわりの世話も出来なくなり、どうしようもなくなっている所を民生委員のおばさんが市に通報し、介護施設に収容されることとなった。総合病院鬼子母神会第一病院の「おばあさんポスト」だった。

そこにいたのは、亡くなった娘と同年齢くらいの大分年配の看護師だった。

彼女は暇になったのか、自分の身の上話を始める。

何と、彼女には親がなく、六〇年前に赤ちゃんポストに預けられた身の上だという。

そして、里子に出され、高校卒業までそこでお世話になったのだと。

二〇一八年七月三日にポストに預けられた。手懸かりが何もなかったため、行政によって仮の戸籍が作られ、苗字はは西区の区役所名、名前は七月三日という日付から取られた。西ななみと名乗ることになったと言う。

その日付を聞き、わたしは真っ青になった。

――ああ、あの子かも知れない！

わたしはそれとなく、看護師に何か手懸かりはなかったのか聞こうとした。手紙やお守りが添えられていなかったか。どこの病院だったか。

「詳しいことはわからないんですよ。里親のお母さんも亡くなってしまっていて、何も聞いていないんです」

「ご家族は？」

「娘がいたんですけど、中学生になる前に交通事故で……だから、わたしも孤独な身の上なんです」

――そんなことはない、わたしがいる。

「おばあちゃん。何だかわたしのおかあさんの様な気がするわ」

と、ななみは明るい笑顔で冗談を言った。わたしはお母さんと呼ばれたことにどきりとした。まだ、彼女が実の娘の様な気がしていた。いや、わたしも年だ。ぼけてきたんだ。だから、そんなことを考えるのだ。わたしは、意識の隅からそんな考えを振り払った。

でも、彼女に何も言い出せなかった。わたしは施設で出来た友達からお菓子などをもらうと、それはとっておき、ななみが自分の担当の順番になったときに、そっと手渡した。――夜食にお食べなさいと。

数年後、わたしは最期のときを迎えようとしていた。病床で傍らにななみがいてくれた。彼女は最後までわたしの手を握ってくれていた。了

老老介護

老老介護

わたしは東京にある大手メーカーの技術者をしていた。普段は決まり切った内容の書類を決まり切った相手にデート印をついて流すだけの退屈な日常だった。それでも、社内のこの部署にそこそこに優秀と思われる人材を何十名と配置しているのは、決まり切った内容ではない突発的な事故に対応するためだった。一旦、事故が起これば、休日返上、徹夜も辞さない態勢でことに当たるのだ。そして、二、三日後の生産ライン停止やプラント停止を乗り切り、再び何事もなかったかの様に機械類を復旧させてしまう。

いかに鮮やかなお手並みを披露するか。そこに、大卒エンジニアの存在価値が掛かっていると言っても過言ではなかった。

そして、突発的な事案にかかりきりになり、朝から立て続けに現地工場から問い合わせの電話が鳴り響き、ファックスが入り、その回答をするために、必死に技術計算に取り組むべく、パソコンに向き合っている、そんなときだった。

田舎の母から職場の電話に掛かってきた。

「お父さんの様子がおかしいの。一度帰ってきてくれないかしら？」

という。

それどころではないと言うのが正直な所だった。わたしは、届けられたファックスに目を通しながら、母にカラ返事をしていた。しかし、父の具合が悪いとなると、そうもしておられなかった。わたしが都会の企業に勤めるのは父が元気な内だけと言うことに、内々では決まっていた。実家には先祖代々受け継がれている田んぼと畑と山があった。

母一人では、到底面倒を見きれないだろう。もっとも、わたしが帰ったからと言って、すぐに後を継げる訳でもなかった。自ら進んで泥田に入り込み、泥のねっとりした感触を

楽しみ、足をヒルに吸われたりしたのは、すでに、子供の頃、二十年以上昔のことだった。現在ではどうしているのか、皆目見当もつかなかったが、多分、最新の農薬・化学肥料や農業機械に囲まれ、それなりにハイテク技術の恩恵にあずかっていても不思議ではないだろう。

わたしは長くなりそうな気配を感じ受話器を持ち直した。

「父さんのどこがおかしいんだい？ 母さん」

問い詰めると、どうやら認知症が疑われると言うことだった。

「最近ね、少し物忘れがひどくなって。……この間も、軽トラのキーをなくしたと言って、あちこち探し回ったことがあったのよ」

「クルマのキーぐらい、俺でもときどき、行方不明になるよ。大したことじゃないんだろう？」

そう言うと、母は膨れた。

「それが、どこにあったと思う？」

「さあ、戸棚の、普段とは違う引き出しとか？」

「ううん。ズボンのポケットに入れて持っていたの。……そうそう、この間なんか、何か探していると思ったら、メガネを探していたと言うのよ」

「あったのかい？」

「あるも何も、本人がかけていたのよ。あれには参ったわ」

「そうだなあ……」

「それにね、夕飯を食べたのに、その後、一時間して、自分はご飯を食べていないと言い出すのよ。わたし、テレビドラマの呆けた義父の面倒を見るお嫁さんを思い出しちゃったわ」

母はわたしの優柔不断さにとどめを刺す様にそう告げた。

わたしは、一度、故郷に戻るべきだろうかと考えた。父が痴呆老人になったとなれば、もう、東京でのキャリアなんかを考えている場合ではない。自分が故郷に帰り、田畑の後を継ぎ、それでもって、父の介護を看なくてはならなくなるだろう。一度、様子を見に帰るべきだろうかと思い至った。

でも、田舎は遠く、様子を見るためだけでも、二、三日のまとまった休暇が必要だった。

中国地方の山奥で新幹線で岡山まで三時間、そこからＪＲ在来線で四時間半、さらに路線バスに乗り一時間という距離だった。バス停からは十五分ほどだった。

移動にはどうしても一日を要した。わたしは急な帰省に躊躇する思いだった。それに、今起こっている仕事上の問題を片付けないことには、職場を離れる訳にもいかなかったのだ。でも、いくら忙しいと言っても、目の前に指し示された課題をこまめにこなしていけば、いつかは方がつく。いわば時間が解決してくれる種類の問題ではあったのだ。

「母さん。今丁度手が離せない仕事があってさ……すぐに帰郷すると言う訳にはいかないんだ。いつか折りをみて帰ろうとは思っていたんだ。それに、実家の農業もいつかは継がなければならないとは考えてもいたし」

「ううん。そんなに急いで帰るまでのこともないわ。仕事が忙しいなら、それはそれで結構なことよ。無理してまで帰ることはない。いつか時間が出来たらそのときでいいの。でも、覚えておいて。父さんも母さんも若くはないわ。いつまでもあなたを送り出したときのまま時間が止まっている訳ではないことだけ」

痛い所をつかれてしまった。近々でいいから帰らない訳にはいかなくなってしまった。

この日の問題はすぐには片付かなかった。

部品の強度不足が見つかり、それが、材料の品質管理によるものか、設計上のミスによるものか判断がつかなかったのだ。そうなると、問題は一気に複雑化する。単にその部

品を新しいものと交換するだけで全て方がつくことから、他の同材料を使用する全ての部品にまで問題が波及する恐れが出てきたのだ。

我々技術陣は、即座に結論を出すことはせず、部品の強度シミュレーションをエンジニアリング会社に依頼した。

「いやあ、富山さん。部品の形状が複雑ですので、入力には三日ばかり掛かると思いますよ。計算はすぐに出来ると思います。半日もあれば出力出来ると思います。結果はメールでいいでしょうかね？」

担当者はそんな暢気なことを言った。合計三日半もプラントが停止したままとなるのだ。その間の生産停止による会社の損害は優に億を超える規模に達し得た。

「一日稼働が遅れるごとに一億円が燃やされてしまうと想像してみてくださいな。一日以内で結果を下さい。いいですね」

「そんな無茶な！」

担当者は怒りをぶちまけた。普段から無理を通していることへの怒りだった。でも、通さなくてもいい無理など一つもなかった。彼らが職員を残業、深夜勤務させて掛かる手当類よりもさらに大きな損害を甘受しなければならなかったのだ。わたしは、それを経営者に納得させる自信はなかった。

「他のことはさておき、今回だけは無理を通させてもらいます。絶対にお願いします」

と、担当者に無理を通した。

そして、何日かして製造ラインの問題が片付いた。その部品だけの問題で単なる製造ミスによる強度不足であることが判明し、その部品を取り替えるだけですむことがわかったのだ。わたしは、技術部の責任者として工場の生産管理部門の担当者に報告書を上げた。

さて、これから、田舎に戻らなければならなかった。父が呆けている。母の苦労が偲ば

れた。

朝から支度をし、新幹線の自由席に乗り込み、延々と帰途についた。普段の出張だと、長崎まで行くとしてもこれほどの苦労は感じなかっただろう。家族の問題が深々と根ざしている。わたしの心は陰鬱だった。窓から見える景色も決してわたしの心を逸らせることはなかったし、車内販売のビールや弁当にも手を出さなかった。飲む気分ではなかったのだ。

岡山駅で在来線に乗り換え、津山まで各駅停車の電車に揺られ、降りてからはバスに乗った。

久々に見る故郷は何だか小さく見えた。あの山ってこんなに低かったっけ？ とか、川を渡る橋もこんなに狭かったっけ？ とか感じた。これでは、軽自動車一台が通るのが精一杯だった。

着替えの入ったボストンバッグを右手に持ち、東京で買った土産の菓子包みの入った紙袋を左手に提げ、バス停から坂道を上り、母の待つ家に帰った。

母は大層喜び、わたしを招き入れ、お茶を淹れるからと奥へと消えた。

そのタイミングを見計らった様に父がふすまを開けて出て来た。

「繁か？ よく帰って来てくれたな。実は前から母さんの様子がおかしいんだ」

と言う。先日の母からの電話があったので、少し話を聞いてみることにした。

「父さん。今日は、何月何日だっけ？」

「お母さんの旧姓は何だっけ？」

それとはなしに質問を投げかけてみた。どれも、一応はまともな返事だった。しかし、百点満点とは言いがたく、八割方まともという程度だった。認知症と言われれば、そうとも思えるし、大丈夫だと医師から太鼓判をつかれれば、それもそうだと思うだろう。

そして、父は「母が認知症なのではないか」と言い出したのだ。

もう、訳がわからない。お互いがお互いを疑っているのだ。

「夕方になっても飯を炊かないんだ。そして、それを言うと、すでに炊いて食べたじゃありませんかとわしを責めるんだ。テレビドラマで見るところの認知症老人の様なんだ。母さんのことだが、これ以上認知症が進んだら、わし一人では面倒は見きれないと思う。繁には悪いが、こっちに戻って来てくれないか？」

と、父は言った。わたしは故郷に戻ることを決めた。了

パガテサバティィ

パガテサバティ

わたしは関西に本社を持つ、とある大手の機械加工メーカーの技術者だった。最近民主化された北の共和国に招かれていた。新しく出来たばかりの共和国には外資を稼ぐ手段が乏しく、極度のインフレに見舞われ、人民の生活は困窮を深めていた。そのために、まずは産業を興さなくてはならない。日本にもその要請がなされ、経済協力の名の下に、何人かの技術者が派遣され、現地で工場を作り工員を養成することとなったのだ。

出向いた町でも、やはり、と言おうか、日本より以上に人々には娯楽が必要だった。この国のくたびれた経済情勢では人々の心の芯まですさんでしまい、道徳心の維持という、治安の根幹を揺るがしかねない事態になっていた。

娯楽と言えば、やはり、映画とスポーツが挙げられるのだが、長らくの共産主義独裁政権下で映画産業はすっかり衰退していた。国家の決めたあらすじに沿ってシナリオが書かれ、それを、公務員の俳優たちが演技をするという、誠にもって、面白さをどこに見いだせばよいのか、理解に苦しむ作品ばかりが上映される始末となっていた。

これも、近い将来、アメリカのハリウッド映画に取って代わられる日も近いかも知れない。しかし、外国映画の上映には放映権料が課される。これは外貨で支払わねばならず、当面の国家財政ではとても映画産業を擁護することにはほど遠かった。

となると、やっぱり、人々の関心はスポーツに集まった。

ここでも、伝統スポーツのチームがあり、隣町やその近郊ののチームと対戦するということが行われていた。人々は賑やかしく観戦し、大いに盛り上がっていた。そして、少年たちは将来の選手候補になるべく、日々体力作りに精出していた。

そこにわたしは招かれたのだ。招待したのは現地の工業委員会の参事をしている、カカロフ・バルザイロフという陽気な男だった。

「だんなはパガテサバティというスポーツをご存じですかい？」

「いや、見たことも聞いたこともないよ」

わたしがそう答えると、彼は失望した様な表情になった。

「いや、この国に来たからには、是非とも見て帰っていただきたい。これを見ずして共和国を知ったことにはなりませんぜ」

カカロフはそう強調した。

彼の説明によるとパガテサバティというスポーツは、筋肉ムキムキの男たち五人ずつのチームが互いに陣地を取り合うというものだった。ルールは全くわからない。カカロフはこのスポーツが大好きらしく、男たちが少し動く度に大きな歓声を上げた。

「どうですかい？ だんな。面白いでしょう？」

わたしは、全く訳がわからないままに愛想笑いを浮かべるとカカロフは機嫌をよくし、ますます、このスポーツの見所や面白さをまくし立てた。

わたしには、ただ、裸に近い筋肉マンが組み合っているだけの様にしか見えなかった。

この国の工場で農業用のエンジンを作ると言うプロジェクトが発足していた。

エンジンには高度な工作技術が必要である。これを一から作れるのは先進国の中でもごく一部の国に限られているのが現状だった。しかし、組立だけなら、この国の工員でも可能だと経済協力機構の上層部は判断した様だった。

一気筒五馬力のポンプの駆動に使われる様な簡素なエンジンである。ガソリンと潤滑油の混合燃料を使い、一日使っても壊れない優れものであった。

この生産技術を、当面は組立だけ、そして近い将来、部品もこの国で生産できる様にする。そういう壮大なビジョンがわたしたち技術者に示されていた。

ビジョンはわたしには、あまりに壮大すぎる様に思えた。

日本ですら、江戸時代末期に蒸気機関が導入され、最初は真似をしながら、段々、高出力、高効率のエンジンに発展してきたのだ。その歴史は有に一五〇年はあった。それを、ほんの十数年のスパンで発展させようと言うのは、いささか、やりすぎの感があった。

もっと、身の丈に合ったやり方もあるのではないか。

しかし、すでに、会社上層部はＯＫを出し、わたし本人の現地派遣が取り決められていた。

わたしが工事の様子を見るために、共和国を訪れる度に、案内人としてカカロフが随行してくれ、本職である工場の工事と配置の様子を見た後は、町へ繰り出すべく色んな料理店や居酒屋に案内してくれた。料理を食べて酒を飲んだ後は、この国唯一の娯楽であるスポーツの観戦に連れて行かれた。

なぜ、バガテサバティと言う奇妙としか言い様のないスポーツに人々があれほど熱狂するのか。わたしには、どこをどう見ても、その面白さというのに気付くことはなかった。

「カカロフくん。一体この競技ってどうなんだい？」

「旦那。勝ち組投票券は買いましたか？」

「なんだい？　それは」

「週末の五試合の勝ったチームを当てるくじがあるんですよ。それを買っているから観客は熱狂するんです。一等が当たれば一財産作ることも出来ます。でも、まだ当たった人に出会ったことはありませんがね。でも、そこに共和国人民の夢があるのではないでしょうかね」

このパガテサバティには大勢の人が賭けをしていた。と言っても、一口三〇〇ウィニーという少額のくじを買うだけのものだった。日本のｔｏｔｏと似ているだろう。

この国には外貨が乏しく、通貨の国際的価値は弱かった。

例えば、国産品である小麦粉とバターで作られたお菓子は一個一〇〇ウィニーで売られていて庶民でも手軽に買うことが出来た。その一方で、輸入品である缶コーラやタバコは一つ五〇〇〇ウィニーもした。お正月やクリスマスなどの行事でもなければ、滅多なことでは手が出ない高級品だった。

これは、国庫に外貨がないため、相対的にウィニーの通貨価値が下がってしまうことによるものだった。これを克服するためには、何としても工業製品である農業用エンジンを作って海外に輸出し、地道に外貨を稼ぐしか方策はなかったのだ。

やがて、工場が稼働し、第一陣のエンジンが出荷場にまとめられた。

カカロフはわたしに近づいて来て、言った。

「だんな。この通りです。審査を通してくれませんか？ この事業には一般庶民の願いとは別に大統領府の威信もかかっているのです。もし、審査に落ちたとなれば、大統領府のメンツも丸つぶれだし、何より、この事業に期待して、食べたいものも我慢している一般庶民が酷く失望するでしょう。どうかお願いします。この通りです」

普段は陽気なカカロフが、真剣な表情でそう言い、頭を下げた。

わたしが黙っていると、彼はわたしに紙片を握らせた。

「おい！」

わたしがお金だと思ったものは、パガテサバティの勝ち組投票券だった。あの三〇〇ウィニーの宝くじだった。

「実はチームの面々とはすでに手はずは整っているのです。旦那が審査を通すことを条件に、試合はその券に書かれたとおりに決することになっています。一等当選三億ウィニーの当選券なのです」

「おいおい……」

三億ウィニーと言われても、日本人のわたしに取っては紙切れに近い様な感覚しかなかった。これで何が買えると言うのだ。国産のお菓子なら山ほど買えるが、外国製品なら大した使い道は思い浮かばなかった。

「旦那。旦那の審査一つで、そのウィニーの価値が上がりも、下がりもするんですぜ。今夜一晩、ようっく考えてくだせえ」

カカロフはそう言って、その場を後にした。

わたしはホテルのベッドに腰掛け、外国製のウイスキーをグラスに注ぎ、ちびちびやりながら、この国の将来のことに思索を巡らした。

農業用エンジンと彼らは誇らしげに語っているが、実際には日本から輸出した機械部品をただ、現地の工場でマニュアル通りに組み立てているだけのことだった。本格的な工業立国とはまだまだほど遠いのが現実だ。もっとも、今回の経験を元に効率よくエンジンを組んだり、あるいは、自前のすぐれた技術者を養成し、エンジンをさらに発展させたものにしたら、この工業化も現実味を帯びてくるだろう。

もし工業化が成功すれば、そのときは、手に握らされた宝くじ三億ウィニーもひょっとしたら三億円の価値が生ずるかも知れなかった。

審査当日。わたしが恐れていた事態は起こらなかった。

日本から送られた高精度の部品を組み立てただけの作業に、審査で不合格になることはなかったのだ。わたしは、審査済みの検査印を押し、出荷許可証にサインした。カカロフはホッとした表情で、わたしのペンの先を見つめていた。わたしは奇しくも手にした当選金を共和国の赤十字基金に寄付した。了

葬儀社の女

葬儀社の女

わたしは街へ出た際、急に後頭部に激痛が走り、瞬間、身体の自由が利かなくなり、意識を喪って倒れてしまった。周囲にいた人が救急車を呼んでくれ、わたしは市民病院の救急外来に搬送された。くも膜下出血と診断され、脳外科で開頭手術を受けた。

気がつくと、身体は動けなくなり、目と耳だけは元の通りになっていた。わたしのベッドの周りに医師と看護師が入れ替わり立ち替わり、動き回ってくれているのがわかった。

症状が急性期から、安定期に移るとわたしはベッドのままＩＣＵから外科の病棟へと移された。

病棟での生活が始まる。――わたしは若かった頃、胆石で入院していたときのことを思い出していた。身体はもう何ともないのに、中々医師の退院許可が下りず、わたしは毎日を虚しく過ごしていた。もう、おやつを病院内の売店で買って食べるのが唯一の楽しみだった。しかし、長い人生から見ると、時間の浪費でしかなく、このことが後々生きてくるのだろうか。そうしなければ、本当にこの時間が人生の無駄遣いでしかなくなってしまう。そう考えていたことを思い出した。

病室の他の面々との挨拶もすませ、そこそこ、何をしているだとか、どんな病気で入院しているとか、情報交換を行ううちに、気の合う人とは仲良しになった。その人たちにも時折、見舞客がある。お菓子を持って来たり花を持って来てくれたりして慰めてくれる。そんな後には、こちらにもお菓子のお裾分けがあった。

平穏な入院生活の静寂が破られたのは今日の午後のことであった。

近くで携帯電話の呼び出し音がした。

まったく、非常識な奴がいるものだとわたしは視線を上げた。病院内では携帯電話は電源を切ることになっていた。それに普通はマナーモードに設定して他の人の睡眠を妨げない様にしているものだ。

病室の外の扉の向こう側からの音だとすぐに察しが付いた。わたしの神経は研ぎ澄まされ、身体が自由に動かなくなった分、過敏になっていた。

多分の話である。見た訳ではなかったが、廊下に置かれた長椅子に座っていた女がバッグの中から携帯電話を取り出し、少し場所を移動して喋り始めたのだ。これも非常識な話だった。少し場所を移動したからと言って、大きな声には違いはなかった。

「え？ お見送り？ はい、はい。Ｔ会館で。はい。かしこまりました。え？ 明日の十時。ちょっと待って下さい。……その時間は無理です。別件が入っています」

女は長々と大きな声で喋り始めた。しかも、お見送りの話と来た。まんま葬式の話ではないか。病院の入院病棟ではタブーの話題だった。それでなくとも、みんな生還することを望んでいるのだ。だからこそ、辛い手術やリハビリの困難を乗り越えてきたのだ。

このまま、お見送りをされたのではたまったものではなかった。

そんなわたしの願いも虚しく、女は延々と喋り続けた。

式の段取りや諸費用、枕元の装備品、花台の数。葬儀に必要な物品の段取りをし続けた。いい加減辞めて欲しいと思った。他の入院患者さんも顔をしかめていた。

わたしが健康な身体なら、つかつかと女の側に歩み寄り、ポンと肩を叩き、ここで電話してはいけないし、ましてや、大きな声で通話するなどマナー違反だと説教してやる所だった。しかし、わたしの身体はまだ自分の意志で自在に動かせるほどには回復していなかった。耳だけがよく冴えた。だから、聞きたくない会話だけが、やけに耳についたのだ。

女の会話の結果、お見送りは明後日の午後四時に決定された。

後は、ご遺族に宗教と宗派を確認し、お寺さんに連絡を取っていただくか、もし、決まっていなければ、葬儀社で提携している僧侶に来てもらうこととなった様だった。

「それで形式は？ ……はい、家族葬でよろしいですか？ ご家族は何人くらい集まられますか？ はい、十五名ほど。はい、では、それで会館と料理の方、手配させていただきます。……いいえ、こちらこそ、ご利用ありがとうございます。いえいえ、何も気を使わなくてもよろしいのですよ。全部、準備からお見送り、お骨挙げまでおまかせ下さい。喪主の方は最後のご挨拶だけ考えておいてください。他にすること？ いいえ、ご注文のコースで全て手配いたしますので、気になさらないで下さい」

女はメモに聞き取った項目を書き取った。

「お寺さんはどうなさいますか？ うちで手配することも出来ますが？」

電話の相手が何か迷っているみたいだった。

「はい……はい……はい。ではうちで手配と言うことで承りました。ご宗派は真言宗でよろしいですか？」

女は細部まで確認し、メモに書き入れていた。

女は何度もスマホを耳に当てたままお辞儀し、多分、この電話で葬儀の注文が全て完結したのだろう。ニコニコとした表情で通話を切った。

この女は一体、なぜ、この病院にいたのだろうか？ どこか悪くて診察に来ていたものとばかり思っていた。が、しかし、お葬式を受注すべく、亡くなりそうな患者さんを探しに来ていたものと考えられた。

多分、ここで亡くなる人を押えておけば、完璧だったろう。他社がまだ営業に動く前だし、取りこぼしは考えられなかった。元々、葬儀など、一般人には価格相場もわからないし、普通の人なら、どこに相談してよいのやら、全く知識のない問題だった。

電話の通話ボタンを押して、やっと電話を切った。こちらの病室では、次に誰が亡くな

るのだろうかと、縁起でもないことに話題が移っていた。

「前にそこの端のベッドにいた方、膵臓ガンだとわかった途端に、有名病院に転院したんですよ」

斜め前の男がそう言った。「ここで死にたくはないと言っておられたなあ」

「そ、そうなのですか？」

わたしは自分の症状と比較し、少し恐れを抱いた。でも、膵臓ガンの人はガンが見つかっただけで、まだ治療はしていない。それに対して、わたしは、嫌も応もなく、街中で倒れて搬送され、くも膜下出血で緊急開頭手術を受けたのだ。わたしに運命的なもの以外の選択肢はなかった。この病院では不安だからよその有名病院に、などとは言ってはおられなかったのだ。その点だけはわたしは運命に感謝した。

そんなことを思っていた次の日、わたしの容体が急変した。

血圧が六〇台にまで下がり、脈拍も弱くなった。わたしの意識は辛うじて保っていたものの、耳も目も利かなくなり、周りで何が起きているか、知るすべを喪った。

わたしはこれからどうなるのだろう？ いよいよ最期を迎え、あの世へ旅立つのだろうか。葬式も必要になってくるだろう。一体、いくらくらいかかるのだろう。確か、定期預金があったはずだった。妻か長男に暗証番号を知らせておくか、印鑑の置き場を教えなければ引き出せないという羽目になってしまう。

――家族葬？ そんなアイディアも浮かんだ。家族とごく親しい人だけが集まるこじんまりした葬儀だ。あれだと、三〇万円くらいからあるらしかった。

わたしは自分の病状のことより、死んだ後のことが気になった。

主治医が看護師に「点滴に強心剤を追加」する様指示を出した。枕元でバタバタとした気配が伝わって来た。ますます鼓動が弱まっていく。

「心臓マッサージ！」

医師がわたしの腹部に馬乗りになり、両手の拳を固めて心臓を圧迫した。そのことにより、却って気分が苦しくなった。

もう、一切の苦しみから解放されたい。そんな気分になった。わたしは、渾身の力を振り絞り、右手で心臓マッサージを続ける医師の手を押えた。

医師は付き添っていた妻の顔を見た気がした。

彼女はうなずいた。

「もう、これ以上苦しめないで下さい」

「よろしいのですか？」

「はい」

妻の一言で苦しかった心臓への圧迫はなくなった。

一時間ほどたち、わたしはいよいよ最期を迎え、意識は喪われた。しばらくして、身体が浮き上がった様な感触にとらわれ、気がつくと、わたしは意識だけの存在となり、病室の上から全体を見下ろす様な立場にいた。

とんとんと、病室の扉がノックされ一人の黒っぽい服を着た女性が現われた。看護師たちが、心電図や血圧計を外したりしているうちに、側にいた妻に声をかけ、挨拶していた。

「このたびは急なことで、ご遺族さまのご心痛には言葉もありません。衷心よりお悔やみを申し上げます。つきましては、わたくし、A葬儀社の三村と申します。お葬式一切を取り仕切らせていただきます。よろしくお願い申し上げます」

そう言って、顔を上げたとき、わたしはアッと思った。あのときの電話の女だった。了

仮想通貨

仮想通貨

ある、夏の暑い日だった。長いこと短歌を習っている先生から、通信アプリで、至急五万円分の仮想通貨のプリペイドカードである「ビットマイル」を購入して送ってくれないかとメッセージを送られた。

先生にはこの五年以上お世話になっていた。短歌以外にも、普段の人生相談や離婚したときの相談にも乗ってもらっていて、人生そのものの師匠と言える存在だった。

先生の頼みなら多少のことは引き受けなければならない。五万円はわたしに取り、いや、普通に考えても大金だろう。でも、至急の用件がすめば、すぐに返してくれると言う。

でも、どうやって送ればいいのだろう？ 書留郵便、レターパック、宅配便、様々な選択肢が脳裏をよぎった。現金にも等しいものだ。簡易な方法では駄目だろうと思った。

とりあえず、わたしは近所のコンビニエンスストアに走った。

レジの横の棚には仮想通貨のプリペイド（先払い）カードが並んでいた。三千円からあり、高額のものは五万円まであった。

とりあえず、五万円のものを指さし、レジの店員に「これを下さい」と頼んだ。

「すみません。高額のプリペイドカードについては用途をお尋ねすることになっているんです。いいですか？」

わたしは質問の意味がわからなかった。

「はあ」

「ビットマイルを何にご使用ですか？」

店員は予告した上でそんなことを尋ねた。

「あの？ こんなことを聞いてどうするんですか？ 客が欲しいと言うものを売るのが商売なのではないですか？」

わたしは気弱に反駁した。

「特殊詐欺……振り込め詐欺などですね。こうしたものの、送金の手口に最近よく利用されてしまっているのです。ですので、お客様がネット通販の代金支払いなどにご利用されるのであれば構わないのですが、相手から特別の理由もなく送る様指示されている場合、注意喚起を促すことになっているのです。失礼を承知の上で申し上げています。まことにすみません」

わたしは焦っていた。こんなことに時間を潰している場合ではない。先生が困っているのだ。一分一秒でも早く先生にビットマイルを届けなければならないのだ。

「いいから！ これを一枚下さい」

わたしは生活費として家の財布に入れていた五万円を差し出し、商品と交換する様強く言った。店員は、マニュアル通り警告したのだから、これ以上、客に逆らう理由もなかったらしく、後ろの棚から手提げ金庫を出し、それを開けてカードを取り出し、ＰＯＳでピッと読み取るとレジに金額が出た。そして、わたしの出した一万円札五枚を二度、手で数え受け取った。

「毎度ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

そう言って、お辞儀した。

ビットマイルの五万円のカードを手にした。

先生は大阪にお住まいだった。どうやって送ればいいのだろう。一分一秒を争う様な感じだった。普段は人からお金を借りたりと言ったみっともないと言うと語弊があるが、

そんなことを今の今まで一度もしたりしたことはなかった。もう、よっぽど焦っていたと思われた。

「早く届けなきゃ！」

わたしはつぶやき、先生に通話アプリでメッセージを送った。

――ビットマイルを購入しました。どこで渡しましょうか？ 持って行きましょうか？

今なら大阪の先生のお宅か、最寄りの駅まで行くことも可能だった。時間的にもそんなにかからない、緊急性の高さを考慮すると、電車で持って行くのが一番現実味があると思えた。

――わざわざお越しになる必要はありません。ビットマイルの裏面のシールをコインの縁でこすって剥がして下さい。

「えっ？」

わざわざ行かなくてもいいってどういうことだろう？ わたしはそのカラクリに気が付かなかった。そして、言われた通り、財布から一〇円玉を取り出し、カードの裏面のシールをゴシゴシとこすった。中から、一六桁の数字と英文字が現われた。これをメッセージで送ればよいのだろうか。そうすれば、大阪まで出向かなくても用は足せそうに思えた。先生は何と頭がよいのだろうか。そんなことに感心した。

――わざわざ、入力する必要はありません。写真を取って通信アプリで送って下さい。その方が入力ミスなどを防ぐことが出来ますから。

ああ、先生は何と頭がよいのだろう。それに、窮地に陥りながらも弟子のことを思ってくれる気配り。わたしはいい人を師匠に持ったものだと心から思った。

スマホでカード裏面の写真を撮り、先生のＩＤにメッセージの添付ファイルをつけようとしたのだが、うまく行かなかった。

――あれ、何でだろう？

先生は急いでおられる。こんな操作ミスのために待たせるのは無礼に当たる。とっとと、送信してしまわなければならない。わたしは、何度も送信ボタンを押し、その度にエラーメッセージがポップアップされ、うまく行かなかった。

「もうっ、なんでなのよっ！」

わたしは、スマホを地面に叩きつけたくなった。普段から機械に弱かったが、こんなに焦燥感に捕らわれるとは思いもよらなかった。

先生からは、――まだですか。急いでいるのです。と矢の催促のメッセージが届いた。わたしは、もうパニックになっていた。

わたしは、スマホのエラーメッセージの理由を探るべく、親しい友人に電話を掛けてみた。

「さあ、あたしも詳しくないから」

と、別の友人を紹介され、また、その人も別の人を紹介した。

散々、友人、知り合いと連絡を取った挙げ句、先生からの通信アプリを経由した送金依頼のメッセージは複数に行き渡っていることがわかった。

「どういうこと？ 先生は何か困っているの？」

「わたしもよくわからないのよ。でも、冷静に考えたら先生ってば、こんなメッセージを送る様な人じゃないし、もし、本気でお金が必要なら、自分で直接頭をさげて頼むわよね」

「えぇーっ！ 先生を疑うの？ それは言い過ぎなんじゃ」

わたしの本心は先生に不信を抱くことは許さなかった。先生の教えることは絶対正しい

ことであり、わたしたちはそれに従うことで、道は上達するのだ。

「でも、おかしくないかな。先生のお声は聞いた？」

「ううん、通信アプリのメッセージだけ」

「それっておかしいわ。先生なら絶対自分で電話してくるはずよ。そんな大事なことなら」

「そうなのかな……」

「一度、先生に電話してみなさいよ。そうしたら、疑問が全部晴れるじゃない。本当に五万円が必要ならそのときは、カードを郵送するか持って行くかすればいいし、何かの間違いなら、それはそれで、一件落着じゃない？」

「そうね。そうしてみる。でも、通信アプリのメッセージでエラーが出たのはどうしてなんだろう？ わからない？」

「きっと、写真の解像度が高すぎて容量オーバーしたんでしょう。カメラの解像度を最大にしてたんじゃないの？」

「え、カメラが関係していたの？」

「そうよ。載せられるファイルは五メガバイトまでって決まっているでしょう？ きっとそれをオーバーしたのよ。写真を粗くするか、小さくするかしてサイズを調整しなくちゃならないわ」

そう言われれば、わたしはこれまで、通信アプリに写真を添付したことはあったが、全てスマホ任せにしていたのだった。こんなルールが存在していたなんて始めて知った次第だった。

「ああ、なるほど」

わたしは、知っていたけど気がづかなかった風を装った。

しかし、直に電話することについては、先生の要請に疑問を抱いたと思われることが何より嫌だった。

今後、短歌を作って持って行ったときに嫌な顔をされるかも知れない。いや、先生はおおらかな人柄で、そんな人ではないから大丈夫だ。わたしは自分自身に言い聞かせた。長い時間をかけて逡巡した。その挙げ句、意を決して、先生に直接電話を掛けてみた。

「ああ、山田さん？……今、大変なことが起こっているんだよ。僕の通信アプリのＩＤが何者かに乗っ取られて、送金依頼のメッセージを友達登録している全員に送っているみたいなんだ。もし、僕から金を送ってくれと言うメッセージが来ても相手にしないでもらいたい。今全ての登録先の人に一軒一軒電話で知らせている最中なんだ」

先生はそう言った。

わたしは、力が抜け、その場にへたり込んだ。了

逆走車

逆走車

わたしはクルマに乗り快調に空いたハイウェーを走らせていた。エンジンは絶好調、燃費はまずまず、乗り心地も最高だった。道路上にはわたしの他に誰もいない。わたしは、意味もなくアクセルを踏んで加速したり、減速したり、右車線に移動したり、また元の車線に戻ったりして、ハンドルやサスペンションの具合を確かめた。加減速はスムーズでエンジンの快調さを示し、タイヤやサスペンションは異音を立てることなく調子は上々だった。

この高速に乗る前の一週間ほど海外のリゾート地に滞在していた。現地でもクルマに乗っていたが、乗り心地はやはり、国産の高級車には敵わない。わたしの愛車のプリメロに比べれば他のクルマはまるでバネの伸びきったポンコツと言えるだろう。

海外旅行と言うと、優雅に聞こえるかも知れない。

でも、そんないいものでもなかった。国内での仕事で出張した際に、たまたま遠隔地であったため飛行機で移動したことがあった。しかし、天候が悪く、何度も着陸をやり直した挙げ句に、着陸を諦めるという酷い目に遭ったのだった。別の空港に下ろされたわたしたちは、地元のホテルに宿泊し、翌日、別の便で帰途についた。航空会社は乗客に何度も詫び、謝罪を受け入れた客に対して、新たな航空券をくれたのだった。その航空会社の路線の中で、どこにでも行けるという、ちょっとだけ素敵なプレゼントだった。わたしは会社には黙ってそれをとっておき、夏の休暇にそれを利用して海外に出たのだった。

でも、やはり、祖国は素晴らしいと改めて感じた。道路はきれいに整備されているし、燃料が切れる前にサービスエリアで給油することが出来る。大したことがなさそうに見える、日常だったが、海外では簡単には得られない。道路があちこち陥没しているなんて当たり前になっているし、ガソリンスタンドも充電スタンドも数が足りていなかった。こんなにも便利なインフラが整っていたなんて、と、感じさせられた。

そして、今日。久々に愛車を走らせた。入ったハイウェーは空いていて、前を見ても、後ろを振り返っても、他にクルマはいなかった。誰もいない道路がこんなに気持ちのいいものだったなんて、今の今まで味わったことのない気分だった。

ハイウェーは山間部のインターチェンジから入り、都市部の上部を走り、そして海岸線沿いに隣の都市に行き着いていた。その気になれば、この国を横断して移動することも可能だった。料金は電子決済で自動的に徴収される。その際に、事故や工事、渋滞情報も走行車両と徴収システムとの間の無線通信でやり取りされる様になっていた。

例えば、あるクルマがどこそこで渋滞していたと言った情報を通信で、徴収システムに伝え、その情報を別の全く面識のないドライバーであっても伝えることが出来る様になっていた。だから、対向車線を見て「ああ、渋滞しているな」と思って、走行していても、その情報は無線通信でシステムに伝えられ、料金所を通る全車両と共有されるのだ。

誰がいつどこを通ったのか？

そう言った、プライバシーの問題も懸念されたが、今の所、大きな問題に発展することはなく、極めて順調に運用されていた。

空いた高速では、視線は遠くになりがちだ。

こんなときに限ってシカやイノシシの飛び出しと言った事故に遭遇するのだ。自然と視線が遠くなるのも、理にかなったことと言えた。

遠くに一台のクルマを発見した。

「乗用車かな？ 今日初めて他のクルマを見たぞ……」

わたしは一人でつぶやいた。どこのナンバーだろう？ 追いついて後ろに着くのも無粋な行為だと思った。気持ちよくドライブを楽しむには、適切な車間距離を保ち、そのためには、速度も合わせなければならない。

「！」

気がつくと前走車はあっと言う間もなくわたしのクルマに近づいて来た。後ろに向かって走っている？ そうとしか思えない。いや、近づいて来たクルマの外見を確かめられるくらい接近するとそのクルマはバックしているのではなく、こちらに前方を向けて突進してきているのだとわかった。

見ているとそのクルマは車線を逆走していた。同じ車線をこちらを向いて、時速一〇〇キロ近くで接近してきた。「うわわ」危ないやつがいるものだ。わたしはとっさの機転で右に急ハンドルを切り、難を逃れた。そして、かわすや否や、「馬鹿野郎！」と叫んで中指を立てた。相手の運転手も同じ挨拶を送って来た。腹が立つ。

そして、元通りの空いたハイウェーになった。

ハイウェーパトロールに連絡を入れた方がいいだろうか？ わたしはしばし逡巡した。あんなやつのために、一旦停止し、路側帯から携帯電話で電話を入れるなんて馬鹿みたいな気がした。

その日、妙なことに、同じ様な逆走車がときどきいたことだ。誰も通報しないのだろうか。

わたしは、重大事故になってはいけないと思い、携帯電話を助手席に置いた鞄の中から取り出し、ハイウェーパトロールの通報ダイヤルに掛けてみた。

「逆走車情報をありがとうございます。至急、隊員を向かわせますので、現在位置を知らせて下さい」

女性指令は丁寧な口調でそんなことを言った。

しかし、わたしは、自分の位置がわからなかった。どこにも、地名を表している表示板がなかったし、第一、標識自体一度も見かけなかった。「ワイルドカード」インターチェンジから二十分ほど走った所だと大体の見当でインフォームした。

「ワイルドカード・インターチェンジから二十分ほどの箇所ですね。至急パトロール隊員を向かわせます。危険ですので、あなたは路側帯などの安全な場所に退避していてくだ

さい」

この指令は、一見わたしのことを保護するかの様でいて、実際には逆走車の優先度が高いと言うこと告げていた。

「安全だって？ 冗談じゃない。逆走するやつが悪いのだ。そんな奴らに遠慮なんてするもんか」

わたしはハンドルを握り直し、携帯電話をポケットにしまい、アクセルを再び踏み込んだ。クルマは快調に加速し元の速度に復帰した。

しかし、逆走車は一台どころではなかった。次から次へとわたしに向かって突進してきた。まるで、日本の高速道路を逆走する認知症のおじいさんの様だった。

快適だった郊外のハイウェーも、都市に近づくにつれ交通量が増えてきた。と、同時に数多くの乗用車やトラックがわたしのクルマに向かって突進してきた。そして、目前で急ハンドルを切ってかわし、去り際にけたたましいクラクションを鳴らすのだった。

大型トレーラとぶつかる寸前、わたしは、追いついてきたハイウェーパトロールの白バイ警官に制止させられた。

白バイは赤色灯を回転させ、サイレンを短く鳴らし、わたしのクルマを路側帯の少し広くなっている箇所に停止させた。

どうしてだ？ 止めるなら、逆走するドライバーの方だろう。

「お宅で今日三台目ですよ」

白バイ警官はそう言った。

彼の説明でわたしは初めて知った。現在の法定走行レーンが左側ではなく右側だと言うことを。

「一週間も経つのにまだ知らないで走っているのに気付かないでいるんです。お宅もラジオもテレビもつけないタイプの人ですね？」

白バイ警官は帳面を出し、わたしのクルマのナンバーと停車させた地点の住所を記入し、わたしに免許証を出す様命令した。わたしは、まだ事態が飲み込めていなかった。わたしはちゃんと車線を守って法定速度内で走行していたのだ。

悪いのは逆走していた奴ではなかったのか？

白バイ警官は、わたしのわなわなと震える拳をどこに向けたらよいのやら、わからないままに差し出された免許証から住所と氏名を書き写した。

「じゃあ、違反だから。捺印か拇印をお願いしますね」

白バイ警官に言われるままに、わたしはインクに指をつけ、拇印を押した。

素直に従ったからだろうか。警官はしんみりとした口調でわたしの知らなかった事実を説明し始めた。

わたしが休暇で海外にでかけていたときに、この島は隣国の民主主義人民共和国の侵略を受けた。戦闘は三日ほどで終了し、速やかに降伏したそうだった。事実上、領土が併合されてしまい、「道路交通法」は、かの国の「安全運転法」に切り替わってしまったらしかった。かの国の走行レーンに従い自動車は左車線から右車線へと変わっていたのだった。わたしは交通違反の切符を切られたこと以上に、祖国が侵略されたことに気付かなかった自分の間抜けさを笑うしかなかった。了

転職と転職

転職と転職

わたしの勤めていた会社がとうとう先月倒産してしまった。

妻の反対を押し切って、昨年の秋に転職の決断を下しただけに、その事実を言い出すことが出来ないでいた。もし打ち明けたらどうなるだろう？ 何と言われるだろうか。

「そうら言わんこっちゃないわよ。だから、あのとき、わたしは反対したのよ。でも、あなた何て言った？ 社長の田中さんのことだから、絶対間違いない？ その間違いない人が会社を潰した訳？ 信じられないわ。実際、わたしは、最初からあの人のこと信用なんかしていなかったわ。だから、もう……」

延々と繰り返されるであろう妻の繰り言が怖かったのだ。

実の所、昨年の末頃から給料の遅配があった。最初のうち、三日待ってくれと言われ、はあ、はあとうなずく度に遅配はどんどん繰り返されていった。それが五日になり、八日になり、半月になり、とうとう、一ヶ月分が闇に消えたのだった。

一ヶ月分の給与が遅れたときには、そんな社長でも信用していた、さすがに楽天的なわたしでも真っ青になり、妻の顔を見るのが怖かった。この事実を隠蔽し、なかったことにするために、密かにカネを作ろうと、カードローンで現金を作り、家にはとりあえず給与相当額のお金を入れて辻褄を合わせていた。

妻に会社の経営が危ういと感づかれてはならなかったのだ。それでなくても、今の会社に変わったとき、変に借金されては困るという理由からクレジットカードを一枚しか持たせてもらえなかったのだ。

――情けない。ただただ情けなかった。こんな思いをするのも、給与を満足に支払わない社長のせいだった。でも、妻が最初から信用ならないと言うのを、社長の肩を持ち、無理に信用させたのは、他ならぬわたし自身だった。もはや、妻に愚痴をこぼすことすらはばかられた。

そんな訳で、家での食事の場でも、わたしは意図的に景気の良い話題ばかりを口にした。

「今度、五千万の商談があってさ」とか「今期の純利益は一億を超えそうなんだ。すごいよな、あの社長」とか……でも、わたしの目は妻の目を見ていなかった。もう、嘘八百であることは自分自身でわかっていた。人間って基本的に嘘をつくのがつらい様に出来ているものだと心底わかった。

そして自分自身に嘘をついていた。――経営はうまく行っている。会社の未来は明るいとさえ。

妻は何も知らない。

一応、平静を保っていて、彼女は毎朝、その日のお弁当を手渡してくれる。メニューは卵焼きに冷凍食材のときもあったが、でも、ちゃんと栄養のバランスを考えてくれていたのか、野菜が中心でちゃんと火の通ったものだった。わたしはそれを「当然の様な顔」で受け取ることに罪悪感に似たものを抱いていた。

会社はすでに潰れてなくなっていた。元あったビルの階には、不動産会社の手によって、「テナント募集中」の看板が貼り出されている。それを見ると、胸が張り裂けそうでいて、それ以上に情けない思いがした。

でも、新しく職を見つけるまでの間、妻の目を欺かなければならなかった。

当然の様な顔をして、朝六時に起き、顔を洗ってひげを剃り、トーストをほおばり、家を出て六時五十分の電車に乗って町まで出ていた。

そして、七時半から午後五時まで勤務しているフリをする。お小遣いは日に五百円まで。ささやかなサラリーマン生活だった。仕事の休憩時間に自販機で飲むコーヒーにつかっ

ていた。でも、これからは、無駄遣いしてはならないどころか、妻に倒産の事実を知られないように、給与分のカネを工面しなければならなかった。

わたしは毎日、妻の目を欺くために電車で町に出た。幸い会社支給の定期券が有効だったから電車には乗ることができた。しかし、あと三ヶ月の猶予しかない。それが過ぎたらどうしよう？ もういっそ打ち明けてしまって楽になろうか。わたしは、苦悩していた。

家を出て町に出ても、どこにも行く当てもなかった。失業保険は三ヶ月たたないともらえないし、新たに就職先も、わたしの年齢では、このご時世である、そんなにすぐには見つかるものでもなかった。

街をぶらぶらしていると、勤め人だったときには気にもとめなかった公園やロータリーの広場に集まるハトに目が行った。わたしが近づいても、気にもせず、逃げもしない。中にはわたしの靴先をつつこうとするのもいた。

少し腹が立ち、蹴ろうとしたらさすがに飛んで逃げていった。

町の役所の隣に図書館があった。

わたしは中に入って入り口の横に並んでいる新刊の表紙を眺めた。

――「こんな会社に転職するな。一〇の法則」。

こんな本もあった。中をパラパラとめくると、倒産した会社の経営者の特徴が見事なまでに、あの社長の人格と一致していた。でも「余計なお世話」だと思った。わたしはその本をそのまま書架に戻した。

本を借りては、フロアの自習スペースで一日中読みふけり、時間になるとカウンターへ返却し、また、電車に乗って家に帰って、空の弁当箱を妻に渡した。

「おかえり。最近、時間通りに帰って来るけど、残業とか出張とかはないの？」

妻は冷めた顔でそんなことを尋ねた。

わたしはどきっとした。明日からは多少時間を前後させなければならないなと思った。

そのうちである。図書館の司書の女性に顔を覚えられた。本を借りにカウンターへ行くたびに、一言二言かわすようになった。

「ひょっとして大学の先生ですか？」

と、わたしのことを誤解された。背広を着てネクタイを締めて、毎日、決まった時間、図書館に籠もるのだ。確かに、該当しそうな他の職種はあまりなさそうだった。それに、わたしは、時間をわざと浪費するために、難解な応用数学の書籍ばかり選んでいた。大学と大学院時代、工学科で応用数学には親しみがあったのだ。学位も取ったものの今の世の中で学歴ほど無駄なものはないなと、倒産した会社の社長にさえ言われたものだった。

わたしは、本を借りた。

「では、お借りします」

そう言って、カウンターを後にした。

フロアの自習スペースに行く前に、図書館の掲示板に見入っていた。色んな講座や勉強会の案内。ボランティアの募集。町を走るバスの廃業に反対する署名運動など、色んな案内が貼られていた。もし、わたしが真っ当なサラリーマンなら、興味を持って何か受講してみたいなと、思わせるものもいくつかあった。落語教室にフルート演奏会。

どれも楽しそうだったが、今のわたしの境遇でそんなものに参加している場合ではなかった。

ふと、気がつくと頭のてっぺんがはげて、残る髪も真っ白なご老人が後ろに立っていた。わたしは、邪魔になったのなかなと、お辞儀してその場を立ち去ろうとした。

「君……どこかの大学の教員かね？」

「え、いや、いいえ、違います」

「そんな本を持っているものだから。それも、よく見かけるね」

わたしは激しく動揺した。何気ない行動が第三者によって仔細に観察されていたことへの驚きだった。

「僕はね……今はH大学の数学科の講師をしているんだ。でも、来月定年でね。担当教授に誰か適切な後任者を紹介しなければならないんだ」

老人はずれたメガネを直しながらそう言った。いつ出来たのか知らないが、わたしにとっては聞いたこともない大学の名前だった。

「専攻は何なのですか？」

わたしは、期待感を持たずに尋ねた。

「君の持っている本と同じ、応用数学だよ。君、やってみないかい？」

老人はわたしに、講師の職を譲ってくれた。

「わたしは現在失業中の身でして……数学にも長らくご無沙汰なんです」

「そうなのかい？ でもその本が理解できるのだろう？ なら大丈夫だよ」

「あ、いや……そうですか。では、ありがたくお受けします！」

わたしはひょんなことから新しい職にありつくことができ、また、再び、サラリーマンに戻った。決まった時間に大学に行き、仕事をし、お弁当を食べて、決まった時間に帰宅し、そして、決まった日に給料を家に入れることが出来る様になった。

夏休み、わたしは図書館で再び老人と出会った。

「どうだい？」

「はい、ありがとうございます。人にものを教えるのは自分に合っているみたいです。仕事を紹介してくれてどうもありがとうございます」

わたしは、本心から老人に感謝の意を伝えた。

「なに、僕も二十年前に、失業して図書館で一日潰していたことがあってね。あのときは、深刻な不況だった。そのときに数学科の講師の職を紹介されたんだ。あのときほどホッとしたことはなかったよ。はっはっは」

老人はそう言って笑い、わたしの肩をポンと叩いて図書館から去って行った。了

高レベル廃棄物処分場

高レベル廃棄物処分場

わたしは職場から宿舎までの帰り道、いつもの県道で信号が赤になり、停止した。わたしの他には全く、完全に誰もいない道だった。停まる必要はあるのだろうか。少し疑問に囚われた。多分、無視しても何の問題もなかっただろう。

しかし、今やっている仕事の都合で、わたしを故意に陥れるために、その証拠を今か今かと待っている環境保護団体の目を恐れていた。少しの法令違反もできなかったのだ。

右手を見ていると、林の奥の暗がりで何かが蠢いているのが見えた。

――イノシシだろうか。こんな山の中だ。いてもおかしくはなかった。近くに民家があるではなし、警察に通報するほどの危険があるとも思えない。しかし、ヘッドライトで照らされた前方から目をそらして、数十秒経つと、暗闇に目がなれていた。

黒っぽいジャンパーを着た屈強そうな男が何かをしていた！

よくよく見ると、下には二十代くらいのブラウスを引きちぎられた女性が横たわり、その上にマスクをした大男がまたがっていたのだ。男は下半身だけ裸だった。まさに女性が襲われている真っ最中だった。女性はすでに持っていたバッグを奪われ、中を物色されたばかりのようで、辺りに化粧品や携帯電話が散乱していた。強盗強姦の現行犯だった。

わたしは、単なる技術者で、武道の心得もなければ、体力もなかった。行って男をねじり上げ、取り押さえるだけのスキルはまるでなく、女性を見殺しにするしかなかった。

でも、もし、ことを終えた後、男は口を封じるために女性を手にかけるのではないか。そんな妄想がわたしを突き動かした。わたしが……例え非力であっても、行って何とかしなければならないのではないだろうか？

クルマは白い会社のバンで、出張用のプラスチックでできた大型のスーツケースと、機密書類の入ったブリーフケース。それに、非合法組織のメンバーに機密書類を狙われたときのための「護身用スタンガン」があった。わたしはそれを手に取り、スイッチを入れた。

バチバチッという電撃の火花が短時間散った。

普通の護身用のスタンガンは電圧は高いものの、電流は小さく、使っても生命に別状ないようにできている。でも、これは、機密書類を守るために、威嚇だけで暴漢のやる気をそがせるだけの迫力を出すために、電圧も電流も高出力になっていた。革ジャンパーの上から当てても十分な威力を発揮する。

わたしが逡巡している間にも、女性はスカートを引きちぎられ、もう、限界に達していた。

わたしは、クルマをそこに停めたまま、スタンガンを片手に飛び出して行った。

「おい！ やめろ。やめるんだ！」

わたしは叫びながら、妨害者のことなどてんで意識にない男の首筋にスタンガンを押し当て、スイッチを押した。バチっという音がして、男はその場に崩れ落ちた。意識が飛んでいったみたいだった。

「大丈夫ですか？」

わたしは女性に尋ねた。そして、辺りに散らかった女性の持ち物を拾い歩き、男のジャンパーのポケットに入っていた現金を取り返してあげた。

女性は乱れた衣服を直しながら、半身を起こし「あなたは？」と答えた。男の仲間だという疑いがあるのも当然だろう。県道の交差点から、こんな林の奥に引きずり込まれたのだ。疑念はいくらあっても足りないということはない。

「この先の会社の社員です。通りすがりにあなたが襲われている所を発見しました」

「そうですか……どうもありがとうございます」

「家まで送ります。近くに民家もないようだし」

「いや、いいです。歩いて二十分ほどのところなので」

「そうですか？ わかりました。お気をつけて」

彼女の気持ちも痛いほどわかった。ここしばらくは、全ての男性のことなど信用できないだろう。それに、信号があると言うことは、近くに民家があってもおかしくはなかった。きっと、そこのうちのどこかの住民なのだろう。

女性は泥のついたスカートを払いながら立ち上がり、乱れたブラウスの裾を整えた。わたしは、会社の制服の上着を差し出した。

「何か着た方がいい。返さなくていいから、羽織って行きなさい」

「あ、でも……そうですか。ありがとうございます」

女性は何度も頭を下げ、そして、県道の方に立ち去っていった。

男は地面にうつ伏せになった状態で伸びていた。わたしは、この男がもう動かないことを確信していた。多分、あのスタンガンを直接首筋の皮膚に当てたショックで、心拍を停止させたに違いなかった。

男はすでに死んでいた。女性の手前、さっきこの男の逆腕を取り、押さえつけている最中から心拍も感じなかったし、それにこうしている間も、男の皮膚は段々、冷たくなってきた。

こともあろうに、女性を助けるために人を殺めてしまったのだ。スタンガンの電圧が高すぎたせいだろう。これは機密書類の輸送時に使うためのものだった。守るべきもののためには、人の生命も顧みない、非情な処置だった。いや、見た目だけで暴漢を威圧する、使ってはならない装備品だったのだ。

わたしは、原子力発電所から出る、「高レベル核廃棄物」の処分場の主任だった。

この男の死体を処分しなければならなかった。一旦バンに戻り大型のスーツケースを持ってきた。入っていた中身はバンの荷台にぶちまけた。とにかく時間との勝負だった。男が死後硬直を起こす前に押し込めなければならない。

わたしは苦労の末、男をボストンバッグの中に押し込めることに成功した。そしてフタを閉めてロックをかけた。暗証番号はわたししか知らない。でも、こじ開けようとすれば、例えば、バールかマイナスドライバーの大きなものを使えば、誰でも簡単に開けられる程度の鍵だった。

わたしは、「高レベル廃棄物処分場」に男の死体を隠すことを思いついた。一度、封印されてしまえば、十万年から数億年にわたって、完全に世間から隔離されてしまう場所だった。もう、二度と見つかることはないだろう。

夜遅く会社に戻ると、入り口で警備員はいぶかしんだ。勤務時間が終わったのに、スーツケースをゴロゴロ押して仕事場に戻ってきたのだ。

わたしは、ＩＤカードを示し、高圧的な態度で押し通した。

そして、地下一万メートルの深さに作られた、処分場にエレベータで下りていった。

もし、誰かに出会ったら何といってごまかそう？

不安はつのるばかりだ。

処分場は一万立方メートルの区画が千個作られてあった。原発十基から出る廃棄物の永久保管のためのスペースだった。わたしは、一番古い区画の扉を開けてスーツケースを運び入れた。放射線量計はマックスに触れていた。あまり長くいると自分も危ない。早くでなければ。わたしは焦れば焦るほど、額から出てくる汗で防護マスクの前が曇り、スーツケースの車輪がカタカタと今にも外れそうな音を立てるのにも不安を覚えた。

そして、ちょうどよいスペースを見つけて、スーツケースを収めた。「廃棄物」の処理容器と処理容器の合間で監視カメラからも見えない絶好の場所だった。

ここに、スーツケースを据え置くと、わたしは、線量計を確かめ、一目散に部屋の出口に走り、エレベータに乗って再び地上に出た。

「どうしたんですか？ そんなに慌てて？」

夜勤の係員がわたしの行動を訝しんで尋ねた。

「あ、いや……何でもないよ。何でも。たまたま一号区画の処理容器の蓋が開いているようにみえたから、確認しに下りたんだ。それだけだよ。でも、なんともなかった。目の錯覚だったよ」

「本当ですか？」

彼は疑い深げにわたしの目をみつめ尋ねたが、それ以上、疑うような点はなく、追求はそこでやんだ。

次の日から、わたしは通常通りの勤務をした。昨日の男のことも、新聞にも出ていなかった。多分、あの女性から訴えることもないように思えた。死体が出てこない限り、「完全犯罪」の成立は火を見るより明らかだった。

あの、処理区画はもう封鎖されているのだ。保管期限はある。それまで人類が繁栄しているなら、ひょっとしたら、そのうち、事件が発覚するかもしれないが、十万年前の殺人事件など、もはや、「時効」になるだろうと高を括っていた。

一〇年後、この地方を震度七の巨大地震が襲い、地面が割れて地下一万メートルの区画が地上にむき出しになった。

この「事件」は国会での野党の追及を呼び起こし、現地に専門家からなる調査団が入った。容器は横倒しになったりしていたが、廃棄物が漏れたりはしなかったそうだった。

しばらくして、県警の刑事二人がわたしの元を訪れた。了

諜報戦・エスピオナージ

諜報戦・エスピオナージ

我が国の外務省アジア局からの緊急情報が首相官邸に激震を走らせた。

北方に位置する隣国のロフア社会主義人民共和国の元首が急死し、その息子が後継者になったと言うのだ。

にわかには信じられない情報だったが、その真贋を断定するために、さらなる諜報活動が必要になった。

「この情報の信用度がどのくらいか？ 本当だとしたら我が国に影響はどのくらいあるのか？ もし本当だとして親子で政権を譲位できるのか？ 法的根拠は？」など、様々な検討事項が諜報を一手に握っているこちらアジア局ロフア係情報班に寄せられたのだった。

アジア局のロフア係のチーフであるわたしは、即座に現地にいる外交官からの情報をまとめた。

外交官たちは普段接触のある、ロフアの外務省当局の官僚たちに接触を図ったり、あるいは、ロフア大統領官邸の職員に直に接触しようとして、逮捕されるギリギリの所まで頑張っていた。しかし、どれも、大統領の死に関しても、その家族関係についてもはっきりと断定できる情報にはいまいち欠けていた。又聞きの又聞き。言い方は悪いが、どれも、その域を出ていなかったのだ。「断定」できる情報でなければこちらの情報も官邸に上げるわけにもいかなかった。

情報は輻輳していた。元首である大統領と、我が国の首相とは何度か首脳会談を行っており、その声や姿のデータがあった。

しかし、後継大統領を名乗る、その息子が本物なのかどうなのか、正確を極めるにはＤＮＡ鑑定をするしかないというのが大方の人間鑑定の専門家の意見だった。

「でも、本物であるかどうかなんて問題なのかい？」

と聞く、老獪な国会議員もいた。確かに、ロフア国内で権威さえ保証されるなら、「本物」であるかどうかなんて他国の人間に取ってはどうでもいいことと言えるだろう。

「本物でない場合、政権交代がスムーズに行かない場合が考えられます。先生」

わたしは答えた。もし、息子を名乗る人物が勝手に大統領府に入った場合、何かの拍子に、前大統領の側近者によってクーデターが引き起こされる可能性があった。

政権は極めて短命になり、その間の地方の混乱などが周辺諸国に伝播する恐れが十二分にあったのだ。

わたしは、共和国の国際政治大学に短期留学していた当時に引き抜いたエリート学生のことを思い浮かべた。もう三十年程前のことだ。アレクサンドル・コベレフという男で、学生時代一緒によく酒を酌み交わした仲だった。もっとも、酒代は全部わたし持ちだった。こうしたエリート学生は将来、国家の中枢を担うことを見越して、仲を深めておき、いざというときの情報チャンネルとなるであろうことを想定したものだった。だから、我が国の外務省は短期留学生に対しても十分すぎるほどの授業料と交際費を支給してくれていたのだ。

わたしは、国際電話でアレクサンドルに話を聞いてみた。が、つれない返事だった。

「我が国の報道官の発表したことが全てだよ。ホソヤくん。大統領は病死し、政権は後継者にスムーズに移行された。新しい政権の閣僚は今夜の記者会見で発表の予定だよ。顔ぶれくらいは教えてあげないでもないが……」

少しだけ、昔のつながりが生きていることを示唆されていた。

「サーシャ」

わたしはアレクサンドル・コベレフのことを愛称で呼んだ。

人情に訴える作戦だった。

「ホソヤ。何と呼ばれても、情報については報道官の発表以上のものはないよ。残念だが」

わたしは、言葉に窮して、学生時代の彼の弱みを書き連ねた手帳をパラパラとめくった。彼の父親は飲んだくれで、母親に暴力をふるっていた。国際人権団体が運営しているＤＶ夫から女性と子供を救うためのセーフハウスに母親をかくまう様手配したのはわたしだった。

しかし、このことを出しても、彼の口は閉ざされたままだった。

わたしは、留学生時代（といっても、人脈を広げるためだけのものだったから、現地での付き合いはいい方だったが、成績はギリギリ及第点と言う所だった）にあらゆる学生とつきあい、面倒を見、酒代・食事代を持ち、様々な「貸し」を作ってはノートに書き込んでいた。いちいち、覚えていられないくらいの分量があった。そのノートを今こそ使うときだった。

――彼の女癖の悪さの尻拭いをしたこともあったっけと、ページを繰った。

当時は全て、外務省の言いつけ通りにやっただけだったから、いちいち記憶にとどめておくことすらしなかったのだ。

「居酒屋の女給でマリアという女がいただろう。君の子を宿したことがあったね？」

わたしは、数十年前の記憶を呼び起こしていた。

「彼女には手切れ金を渡してきれいに別れたはずだ」

アレクサンドルは冷たく言い放った。

「あれからマリアは母子家庭のための保護施設に入り、密かに出産している。女の子だった」

「何だって？」

彼は、本当に何も知らされていない様子だった。声が慌てていて、微かにうわずっていた。

「子供はアリサという名前だ。元気なら二十九歳のはずだ。もしかしたら結婚していて子供もいるかも知れないな」

わたしが言うと、彼は絶句した。

「本当なのか？ だとしたら、君にはものすごい恩義があることになる。……知っているかも知れないが、わたしたち夫婦には子供がいない。だから、何というか、娘がいたという事実にひどく困惑を隠せないでいる」

わたしとしては、当時、外務省の指示に従い、エリート学生の弱みを握り、将来、出世して政権幹部になった時点で、その影響力を利用するだけのつもりだった。

あまり恩義に感じられても、少し、戸惑いを覚えた。

「大統領の息子を名乗る男が本物なのか、それだけが知りたいんだ。君に迷惑はかけない」

わたしは話を本題に戻した。

「……そのことだが、その事実は前大統領の奥様の他はわたししか知らないんだ。だから、もし外部に情報が流出したら、犯人は自動的にわたししかいなくなる。言っている意味はわかるか？」

もし、情報を外国人であるわたしに漏らしたことがわかると、彼は国家機密漏洩罪に問われる。彼の国の刑法では最高刑は死刑に値する重罪だった。しかし、こちらの法律では最高刑は懲役十年だった。だから、認識が軽かったのかも知れない。

「そういうことだったのか。情報は幾重にもオブラートに包んで外務大臣に上げるから、その心配は無用だと思う。直接の情報源は明らかにはしない。約束する」

「……いいだろう。前大統領は若い頃、戦略空軍で核兵器の管理将校をしておられた」

「それは知っている」

わたしは話の続きを促した。

「放射線量の高い場所に長時間いたために、子供のできない身体になってしまわれた」

「では、息子は偽物なのか？」

「いや、そうじゃない。前大統領は夫婦間で話し合い、乳児院から子供をもらい受け、養子にしたんだ。そして、英才教育を受けさせ、国家のリーダーにふさわしい男に育て上げた。だから、息子というのは本当だ。遺伝子上の親子ではないというだけのことだ。だが、このことは国内の派閥争いでは問題になるだろう。だから、機密事項になっている。君にもそれ相応の覚悟で情報を扱ってもらいたい」

「わかった。本当にありがとう。知らせてくれて」

「礼を言うのはわたしの方だ。娘がいたなんて今の今まで知りもしなかった」

しかし、アレクサンドルが娘と孫の顔を見ることはなかった。

わたしが、何重にもオブラートに包んで上司に情報を上げたにもかかわらず、信憑性がないという理由で、生の情報をそのまま大臣官房に上げてしまったのだ。

そして、この情報を外務大臣が大々的に発表してしまい、その結果として共和国の新大統領は失脚し、アレクサンドルは「国家の秘密を漏洩した罪」で逮捕され、処刑されてしまったのだ。わたしは、頭の軽い外務省上層部にそのまま情報を上げてしまった軽率さを心から悔いたのだった。

共和国では新大統領が失脚した後、政変が起こり、何人もの新大統領が生まれ、また、政

変で失脚を繰り返した。政治は乱れに乱れ、それだけだったら、我が国としては、対岸の火事にも等しい出来事だったが、こともあろうに、備蓄していた核兵器が周辺国と、テロリストの手に渡るという事態が起こった。

この一連の「事件」の後、わたしの上司はわたしに昇進の内示を出したが、わたしは話に乗る気にはなれず、退職届を書いた。了

小説家、小説を書く

小説家、小説を書く

わたしは大陸中央に位置するキンザニア共和国という発展途上国で神官をしていた。この国はトイ族、ザラ族、スー族、ニン族、テン族、ドー族が主要な民族で、これらに属さない二千数百もの部族からなっている。

一つ一つの部族は小さかったが、それぞれに固有の文化を持ち、かつ、それに誇りを持っていた。本来ならバラバラの国家になるはずだし、現に、古代文明の時代にはそれぞれがムラ国家を形成し、互いにいがみ合っていたと言われている。

独立国家共同体と言った、現在の国家を形成するに至ったのは、十八世紀から今世紀まで、植民地支配していた大英帝国の存在があったからに他ならない。

人々は互いに別の言語を話していたが、別のムラとのやり取りでは、英語が共通語として機能していた。

独自の文化を誇ってはいたものの、文字を持つ部族は一割にも満たなかった。三十年前までイギリスの植民地だったせいで英語が公用語になってはいたが、部族ごとの訛りは強く、単語を並べるだけで、満足に話せるものは少数派だった。識字率は公用語の英語で一パーセント未満に過ぎなかった。文字を持つ部族でも、それで読み書きが出来るのは、せいぜい、トイ族の神官だけという有様だった。

主な文字はトイ族にもたくさんある方言の中でもウラー州で使われるウラー語の文字を使う人口が一番多かった。

わたしは前の大統領が亡くなったお陰でもらうことが出来た服喪期間の休暇を生かして、前から書き上げたかった小説を完成させた。構想から一年越しのプロジェクトである。Ａ４用紙で三〇〇枚にもなる長編純文学作品だった。

わたしはそれを本の形にしたいと考え、この国唯一の出版機関である国営の印刷局に持ち込んだ。

「だんな。ウラー語の本なんて売れませんや。一体どこの誰が読めると言うんです？ 英語で書き直して下さい。こちらで挿絵をつけて絵本にして出版してみます」

書籍課長の男はずれたメガネを指先でちょいと直しながらそんなことを言った。そんなことを言われ、わたしは少し憮然とする思いだった。ウラー語こそ、わが民族の誇りではないのか？ でも、確かに一理はあった。ウラー語で出版したのでは、他の民族の手前、示しかつかないし、それに、識字率の問題が立ちはだかった。せいぜい、読めるのは数百人にもおよばないだろう。その中で純文学を読む人となるとさらに、減少が見込まれた。

しかし、英語と言うところに少し引っ掛かるものを覚えた。

もう植民地でも何でもない。共和国として独立してすでに三十年にもなろうとしているのだ。どうして、イギリスの言語に拘泥するのか。これを機会に民族の心意気を示すべきではないのか。

わたしは、忸怩たる思いだった。

その日から、……もう、服喪期間の休暇はなくなってしまっていた。夜になると、わたしは、書きあげた原稿をまたもや、書斎に持ち込み、辞書を引き引き、英語に翻訳をはじめた。

物語は文字の読めない部族で起こった悲恋を扱ったものだった。

主人公の青年は、想いを寄せる少女と接点を見出せずにいた。恋文だけが唯一の通信手段だった。文字を読めない人ばかりの村だった。もし、途中で読まれても内容は誰にもわからない。しかし、あの少女に、想いは伝わるのだろうか？ 青年は疑念を抱いた。それより以前に恋文があの少女の手元まで届いているのだろうか？

途中、何人もの下僕や老婆の手を経るのである。「いかがわしい」と、その一言でゴミとして竈の焚き付けに使われる可能性もあった。

実の所、この物語はわたしの実体験を元にしたものだった。神官は妻帯禁止で、結婚はできない。だから、好きになった少女とも永遠に結ばれることはなかった。神官の家は代々、養子を取るかして、幼少時から、儀式を覚え、式典のときに読み上げる祭文の作成のために、教養を積んできた。

トイ族の文字はもちろんのこと、古代文字まで暗記させられた。

その少女は、十三歳で隣村の放牧をしている男の家に嫁に行った。わたしは、祝福を授ける義父である神官の隣で、供え物を持ち、彼女の旅立ちを見送ったのだ。彼女の目は涼やかだった。どんな相手なのかまだ知らされてもいなかった。それを達観していたのが、正に悲恋だった。

英文に翻訳され、国の一パーセントを占める識字層に読まれる運びとなた。わたしは、印刷局の課長に恩義を感じた。

これまで自分の書いた文学作品が一目に触れるなど、これまで、一度たりとてありはしなかったのだから。

唯一の例外は神官として、式典の途中で読み上げるトイ語の祭文くらいのものだった。それすら、すでに、古代文字と言ってもいいほどの代物で、現役で意味を解する民など一パーセントの中でもさらに、教養のある知的階級に限られたのだ。

物語が評判になるにつけ、是非とも読みたいという便りが印刷局に届くようになったと課長は言っていた。

識字層のボランティアの青年がその役を買って出てくれ、高等教育機関の学生たちが、それぞれ「本」を携え、国中の村々を回ってくれた。

英語で講義する若者たちに、村人が怒り出した。

「文字が読めねえって、いつの時代の話だよ！ 俺っちだって英語くらいわかるんだぜ」

独自の文字を持たないくせに、文盲扱いされているところに突っかかられた。後で青年たちから、小説の朗読会の反応を聞き、わたしは、複雑な気持ちになった。

識字率の問題で、あの物語が村人たちのプライドをひどく傷つけてしまったことを。

いや、あの作品が起爆剤となり、村々の識字率を引き上げ、結果として皆の怒りをかったのだ。了

振り込み詐欺

振り込み詐欺

新聞の折り込み広告に販売店の注意喚起のチラシが入っていた。普段は、スーパーの特売品の価格を確かめるくらいで、それ以外のチラシになど目をやったこともなく、ほとんどのものは、折り込みの状態のまま資源ゴミの棚に押し込んでいた。そのチラシが次に日の目を見るのは、資源ゴミの回収日の朝くらいのものだった。

妙に目を引かれたのは、新聞販売店のチラシなのに、休刊日のお知らせや、特産品の斡旋などではなかったことからだった。

「何々……」

最近の犯罪手口で「集金詐欺」なるものがあるらしかった。新聞代の月々の集金を装って各戸を訪れ、集金人を騙り、家人から代金を騙し取るのだそうだった。

確かに、相手が誰であれ、例え初対面の人であっても新聞の集金だと言われれば、いつもの通りの金額を何の疑いもなく、そのまま差し出すに違いなかった。

それに、うちでも、大体、月初めになると、前月分の新聞代をお釣りがいらないように、お札と小銭をかき集めて一円単位で封筒に入れていた。集金人の女性は「いつも助かります」などと言っていた様に思う。

「おいおい、お母さん。冗談じゃないよ。こんな詐欺が流行っているのか？」

「どうしたの？」

と、妻が怪訝そうな顔で尋ねた。

「集金人を騙った詐欺だって。今月の集金はいつもの人だったか？」

「さあ、覚えていないわ。いつもは、四十歳くらいの女の人だけど、この間来たのは若い男の人だったわ」

「怪しいな、ちゃんと、販売店の人だと確かめたのか？」

「そんなこと言ったって……兵庫新聞ですって言って集金に来るんだから、それ以上は怪しまないわよ」

どうも、妻は引っ掛かったみたいだった。その月は二度集金に来た。二度目はいつもの中年女性だったから信用して渡した。でも、こんな詐欺に引っ掛かるのも悔しかった。

考えた末に、販売店の推奨する銀行の口座振替を利用することにした。

以前から言われていたが、そのときには集金に来る手間を省くためにこんなことを言ってるんじゃないか？ そんな疑念も持っていた。

企業におけるコスト削減には人件費を減らすのが最も効果的なのはよく知っていた。人間一人雇うのに、給料だけではすまないのだ。社会保険に厚生年金、本人負担も大きいが、雇用する側の負担も結構大きい。小さな店舗だったら、店長一人で全部こなしてしまうのは、こうした理由があるからだ。

集金詐欺なる手立てが流行っているとなると、それを防ぐには、必ず販売店の人間であることを二重三重にチェックすることだ。首からＩＤカードを提げていたって、信用は出来ない。そんなものは、ワープロとラミネート加工で簡単に作れてしまう昨今だ。

やはり、お金のことは金融機関に任せるに限るのだ。銀行振り替えにしたもらおう。と、言う結論に達したのだった。

そして、銀行に行き、そのチラシにあった販売店の名前を書き、口座番号を申込用紙に記入し、判子を押したら手続きは完了だった。実に簡単なものだった。これで、集金人

の仕事をひとつ奪うことになってしまったのは、少し気の毒な気がした。

こちらにとっても集金の手間を省くことになったのも、事実だった。集金の日になっても、インターホンの呼び出し音に気をつけておく必要もなくなった。期日が来れば、口座から、新聞販売店の口座に音を立てることもなく、振り替えられる。

集金人の相手をする手間も省くことが出来た。化粧をしていない妻に代わって門まで出て、何十何円の単位でお釣りのいらないように支払う。そんな気遣いも無用となった。銀行が間に入るのである。

ところが、新たな事実が明らかになった。

新たな特殊詐欺として、「集金が危険だと不安感をあおり、振り込みに変えるよう言ってくる手口」が明らかになったと言うのだ。警察の特殊詐欺担当部署からマスコミに大々的に発表されたときにはわたしは言葉を失った。

なんと、あのチラシ自体が詐欺グループの作った偽物だと言うのだ！ もう、何を信用してよいやらわからない世の中になっていた。

警察署が注意喚起のために自治会に連絡し、そして、至急のマークの入った回覧板が回ってきた。これこれのチラシで詐欺に注意とあるものは、それそのものが詐欺であり、銀行口座は犯人グループが使用しているものです。と、あった。

そして口座番号を見比べてみたら、うちが切り替えた振替口座が偽物だとわかったのだった。

詐欺グループの仕組んだことだった。あの折り込み広告も全部段取りのうちのことだった。

まさか、新聞配達の前に巧妙にチラシをばらまいておくなど想像だにしなかった。

わたしは、悔しくて、新聞販売店に怒鳴り込んだ。

店主はうなだれ、「申し訳ない」とつぶやくのみだった。

「申し訳ないですんだら、警察はいらねえ」

「もう、何を信用したらいいのか、さっぱりわからないのです。あの駅前にある銀行だって、実際、本物なのか、看板を掲げた詐欺師なのかすら区別がつかない世の中ですよ。はぁ」

とため息をつくのだった。了

司法通訳

司法通訳

当時、わたしは外大の助教をしていた。

大学院を出てから、幸い、研究室にポストの空きがあったのと、担当の教授に可愛がられていたせいもあった。研究室では、専門のフランス語の他、テーマとして少数民族と、言語の成り立ちを体系づけることを求められた。わたしは、面白そうなテーマだと思い、実際、少数民族に会いに現地に赴いたりもしたものだった。

その成果であるアフリカの少数民族の言語の調査結果で、昨年は論文もひとつ書き上げていた。そんな関係なのだろうか、ある日、裁判所の事務官を名乗る人物から電話があった。

ブルドゥ語の通訳が必要なのだという。

わたしの論文のひとつに、確かにブルドゥ語に関する記述があったのは確かだった。

「いやあ、わたしたちも、被告人が何を言っているのかよくわからないんですけどね。英語も通じないし、その他の言語も全く解さないんですよ。各国大使館に問い合わせたら、中央アフリカのブルドゥという部族の言語ではないかと言われましてね。日本中の外大に問い合わせたら、先生がその権威であられるとわかったのですよ」

「はぁ。なるほど」

犯人はアフリカ系アメリカ人で英語が話せない男だった。

容疑は強盗殺人罪だった。被害者は三人のお年寄りで金品を奪われた上で殺されたらしかった。

裁判が始まると、わたしは、引き立てられた被告人の脇に置かれたテーブル席に座り、裁判官と検察官、弁護人と彼の間に立ち、通訳を始めた。

壇上の一番高い席に裁判長の席があった。

「氏名、住所、職業を述べなさい」

裁判官が述べた。

わたしは、即座に訳し、被告人席の男に伝えた。

「ガガリエス、ポンタ、オクパ、トゥ？」

そう伝えると、男は気の抜けた顔になり、ボソボソと発言した。

「メヒ・ガギエス、ナー、ナー、エス」

「氏名はメヒ・ガギエス。住所不定、無職です」
　男の証言を通訳するのだが、わたしの知っているブルドゥ語とは違うと、途中で気がついた。何となくではあるが、わたしの発言が正確に彼に伝わっていない気がした。ニュアンスも異なっているかの様だった。

　男は何の容疑で裁判に掛けられているのか、……弁護士との打ち合わせも、言葉の壁でままならなかったと見え、よくはわかっていない様だった。
　裁判は彼を糾弾する検察官のペースで終始行われ、罪状認否、犯行の詳細、証拠の開示などが順序よく行われ、裁判官も通訳を頼んでよかったと言わんばかりの笑顔で、裁判を締めくくろうとしていた。
　わたしが男の顔を見ると、あまり緊張感がある様には見えなかった。もし、検察官の言う通り、求刑がなされ、それが裁判所に認めると、下手をすると極刑も免れないと思った。
　それなのに、あの平静さはなんなのだ。やはり、まったく事態を把握していない。そうとしか考えられなかった。

「被告人は、最後に何か意見はありますか？」
　裁判官は厳粛な面持ちで尋ねた。わたしは、即座に通訳した。
　彼はそれに答えた。
「バンバクトゥ、ポポラコス、ババパンドス。ハー」
　わたしは、彼の発する言葉がわからなかった。もう、明らかにわたしの研究していたブルドゥ語ではなかった。
「通訳官。通訳を述べてください。すぐに……被告人とは余分な会話をしないこと！」
「あ、は、はい」

　裁判官はわたしに意見を促した。
　しかし、わたしは何と言っていいのか、わからなかった。
　こんなとき、ドラマではああ言っていた。と、ぼんやりと頭の中に浮かんだ言葉を述べ、その場をごまかした。わたしは我が国におけるブルドゥ語のちょっとした権威なのだ。わたしの他にこの言語を解する日本人はいない。そう断言してもよかった。
「ああ、あ、う……」
　わたしは口をパクパクさせた。
「通訳官。聞こえません。もう一度」
「……かっとしてやった。こんなことになるとは思わなかった。今は反省している」
　わたしはこれだけ述べ、席に座り込んだ。
「そうですか。わかりました」
　裁判官はそれだけ述べると閉廷を命じた。

ところが次回の判決で、男に死刑が言い渡された。わたしは焦った。顔色を変えながら、男に通じないブルドゥ語で死刑が言い渡されたことを告げながら、わたしは、裁判官の言葉を待った。

裁判官は滔々と判決文を読み上げた。

「主文、被告人を死刑に処す。理由。……犯行は前もって凶器を用意するなどし、極めて用意周到であり、計画的になされたものであると判断せざるを得ない。反省していると言う割に、犯行がかっとなって行ったと言い訳していることは、反省の態度がまったくうかがえない。犯行の被害者が三人と多い上に、汲むべき事情は微塵もないこと。以上の理由から、極刑を避ける理由は全く見当たらない」

三人もの被害者がいることは、確かに刑罰が重大になることを意味していた。しかし、理由の後半はわたしの誤訳によるものだった。

わたしがあんなことを言わなければ、極刑にはならなかったかも知れない。

被告人の弁護人は、判決当日、即時に控訴し、裁判の場は高等裁判所に持ち込まれた。

そこで、初めて、男がブルドゥ語をも正確に解さないことが判明し、回り回った責任の所在はわたしの元にやってきた。

「通訳官はどうしてあんなことを言ったのですか？　わからないなら、わからないと言ったらよかったのですよ」

わたしは、被告人席で裁判官からそう言われた。誤訳の責任を問われての、偽計業務妨害と法廷侮辱罪の審判だった。ある程度の罰則が待っていた。

「わ、わたしは……」

「被告人ははっきりと発言する様に」

「は、はい。ついやってしまいました。こんなことになるとは思っていませんでした。今となっては反省しています」

発言の最中、わたしは、この間の被告人と全く同じことを口にしていることに気づいた。了

暗闇のかくれんぼ

暗闇のかくれんぼ

　家事でてんてこ舞いになっているわたしの側に娘のチカがやって来た。かくれんぼをしようと言う。普段から聞き分けのない子供だった。断れば、ぎゃーぎゃー泣きわめくのだ。そして、わたしの天敵となっている姑が来るのを待ち受けるのだ。孫の泣き声には一際敏感だった。
　家の奥から誰かが出てくる気配がした。――もしかして悟られた？
　わたしは、姑の嫌味を予想した。

「うん、いいよ」
「じゃあ、お母さんがオニね！」
　そう叫ぶや否や、チカはきびすを返し、どこかに走って行った。
　機嫌よく遊んでくれる。これはこれで喜ばしいことだった。誰も不機嫌な子供の姿など見たくもないものだ。しかし、家は田舎の一軒屋であり、周りは用水路と道路が取り囲み、裏の林には、毒虫が繁殖していた。一人にすること自体が心配の種になった。

　わたしは、姑には聞こえない様気をつけ、小さく叫んだ。
「もう、いいかあい？」
　そして、振り向こうとした。
「駄目！　　十まで数えてから！」
　チカは細かくルールを切った。でも、わがままなので、自分の順番が来たときには多分、守らないだろう。聞き分けのいい、素直な娘。よそのうちには、珍しくはない存在だ。なぜ、うちでは、そんな子に育たないのだろうか。教育している親が悪い？　　多分、そうなのだろう。わたし自身、子育てには自信がなかった。

「もう、いいかい！」
「まあだだよぉ！」
　わたしは、立木にもたれかかり、背後の動きに気をつけながら、声をかけた。そのうち、返事はしなくなった。
「いーち、にーい、さあん、……」
　わたしはチカに聞こえる様に大きな声でカウントダウンした。

しかし、いくら待っても、「もういいよう」と言う返事は聞こえてこなかった。わざと返事をしていないか、見つからない様居場所を偽装しているのか、それとも、返事が聞こえないくらい遠くに隠れてしまったかのいずれかだと思った。
それはそれで心配だった。

わたしは、探し出すことを決断し、裏の林に入って行った。蜘蛛が巣を張り、葉っぱには毛虫がついている。それらに触れない様、気をつけながら、あちこち視覚に入らない場所を点検して回った。
――おかしい？
いくら探しても、チカの姿は見当たらなかった。保育園の年中組。身長一メートル十センチ、体重二十八キロの小さな目標だったが、この小さな林の中で、木の葉に紛れてしまうほど小さくはなかった。せいぜい、頭隠して尻隠さずであるのを、クスリと笑いながらわざと時間をかけて「見つけてあげる」のがいつものパターンだった。

しかし、この日、いくら探しても見つかることはなかった。

夕方になり、わたしは、姑にその事実を告げて、厳しく叱責されるのを甘受した上で、交番のお巡りさんに失踪の届けを出した。
もう、自分たちだけでは事態を収拾出来ない。そう判断したのだ。

自動車の通る道路に出てしまったのだろうか。それとも、溝に落ちたのだろうか？
不安に苛まれた。お巡りさんは肩につけた無線機で警察署と連絡を取り、やがて、大勢の応援の警官と消防団の人たちが集まり、小さな女の子の捜索に当たってくれた。
藪の中や、池の底。古い井戸のあった場所。棒の先でつついて、いない場所を確認して行った。
大勢の努力も虚しく、目的物であるチカの姿を発見することは出来なかった。

その後、町では、ポスターが作成され、あちこちに貼られたが、情報は寄せられなかった。誰にも見られることなく、この小さな村から忽然と姿を消したのだった。
わたしは、すっかり憔悴してしまった。
姑は？　というと、なぜか、妙に落ち着き払っていた。何も責めなかったのが余計につらかった。

それから十数年後、姑は病床に伏した。お医者様の話では、元々心臓が悪かったみたいで、もうあまり長くはない様だから、無理を言っても聞いてあげるようにと言われた。
「お義母さん。……実際、チカのことなんですけど……何か知っているんじゃありませんか？」
姑は視線を動かすことなく、天井のシミの一点を見つめた。

「お義母さん？」
　数秒の間を置いて、姑は口を開いた。とはいえ、入れ歯を外しているから、発音はもどかしい。でも、何年もの付き合いだ。言っていることは理解できた。
「あなたがいけないんですよ。本当に」
「え？」
　弱り切った姑の最後の一撃の様な言葉にわたしは後頭部を殴られた様な感覚を覚えた。
「好き嫌いは多い、挨拶も出来ない、先生の言うことは聞かない。このままでは、将来が心配です。だから、田舎の姉に預けたの」
「えぇーっ！」
　わたしは、思いもよらなかった展開に事態を把握出来なかった。確かに、姑には姉妹があり、そのうちの一人が山形に嫁に行き、以来、あまり会うこともなくなっていたと聞いていた。確か、お茶とお花の師範をしているらしかった。しつけの問題で預けるには適しているかも知れなかった。
「では、あのかくれんぼのとき、連れ去ったのはお義母さんだったのですか？　一体どうやって」
「簡単でしたよ。お菓子で釣ってそのままタクシーで駅まで送ったの。姉には迎えに来てもらっていたわ」
「では。.....チカは元気なんですね？」
「ええ.....立派な娘に育っているわ」
「あぁ」と、わたしは安堵のため息を漏らした。
　次の日、姑のことは義妹に任せて、わたしたちは夫婦で山形のおばの家まで、チカに会いに出かけた。

　おばの家で十八歳に成長したチカは立派な娘に育ち、玄関先で正座して三つ指をついた。背筋もピンと伸び、姿勢がよく、その所作は見違える様だった。
「よぐござったなっす」
　と、方言も身に付いた様だった。了

魔女の宅急便

魔女の宅急便

――中世のヨーロッパでは、魔女は悪魔と契約を交わして得た能力で魔術・魔法を行う忌み嫌われた存在だった。人々は、魔女や魔女と思しき人物を見つけると、異端審問官に告発した。告発された魔女は、裁判にかけられ、有罪になると、処刑された。そのほとんどが火刑であったと言われている。

魔女は十三歳になったとき、一人で別の町に移動し、魔術だけで生活しなければならなかった。そう言う風習があったのだ。わたしにできるのは、箒 (ほうき) にまたがり、空を飛ぶことと黒猫と話をすることだけだった。当時、空を飛ぶなど人間に出来ることではなく、ものすごい能力ではあったものの、人目につかず、人の役に立つことは、案外難しかった。

そして何より、魔女であることが人々にバレないようにしなければならないことも、日常生活を困難にした。

そんな魔女たちは、わたしの知る限り、夜中にひっそりと営業しているものがほとんどだった。

場末の酒場近くの路地で占い師をしてみたり、さらに奥まった空き家で疫病に効く薬の調合などをしたりしていた。客がつくまでは大変だったそうだが、固定客がある程度つけば、それはそれなりに生きていくことが出来る程度には稼げたそうだった。

わたしは、新月の夜に箒にまたがって、この町にたどり着き、そして、呆けたおばあさんの住む家に居候させてもらえることになり、ここに新居を定めた。少し汚い屋根裏部屋だったが、一年間の辛抱だと思えば、少しくらいの不自由はしのげると言うものだった。

「おばあちゃん。何かわたしに出来そうな仕事はないかなあ？」

時折、甘えてみた。彼女はわたしのことを自分の孫か何かだと誤解していた。呆けていることにつけ込む様で気は重かったが、わたしに出来る選択肢は限られていた。亀の甲より年の劫と言う。彼女の経験から何かアドバイスがあるだろうと期待していた。

「ソフィーは何が得意なんだい？　裁縫、料理、洗濯、得意なことを生かせばいいじゃないか。わしが町長のところに掛け合ってみる」
「本当？」
「本当だとも。わしが嘘を言ったことがあったかい。ソフィー」
　彼女はわたしが幼くして亡くなった孫のソフィーだと勘違いしていた。恐らく死ぬまで誤解したままなのだろう。
「箒にまたがって空を飛ぶこと！」
　わたしは、彼女の呆けに甘えて、本当のことを言ってみた。
「おやおや、そんなことをしたら魔女と間違われて役人（異端審問官）に捕まってしまう。滅多なことを言うもんじゃないよ。でも、空が飛べたら……素晴らしいだろうね。わしも死ぬまでに一度大空を飛んでみたいものよ。ホホホ」

　結局、おばあさんからは、町の酒場の給仕の職を紹介してもらった。
　ここの経営者のペーターが若い頃、息子とつるんで遊んでいたと言う。おばあさんの頼みとあれば断れないみたいだった。そして、次の日から、わたしはこの酒場で働き出した。

　あるとき、酒場で客の帰った後でテーブルを拭いていたときに、マフィア風の男と出会った。ただ何となくそんな気がしただけだった。本当に組織と関係があるのか、その時にはわからなかった。
　ただ彼は、どうせ酔っ払っているから大丈夫だろうと、わたしが魔女であることの告白に少しも驚くことなく、また、教会や役人に訴え出ることもなかった。わたしは、次第に彼の組織と近しくなっていった。そして、時給の高い仕事を紹介してくれた。しかも、特技である空を飛ぶ能力を生かせるものだった。

　彼の組織はブラックな届け物を生業としていた。中身は違法薬物である麻薬だった。
　組織は資金源として麻薬の密売をして稼いでいた。買い手は町の不良から、商店の経営主、土地の所有者などあらゆる階層に浸透していた。
　近頃では大々的に手を広げていたものだから、市当局に目をつけられていたそうだ。
　それで、魔女を使った空飛ぶ宅配便にニーズが見出された。夜中に空を飛び、麻薬の包みを届け、代金を受け取り、リーダーに渡す。わたしには、時給一〇フランの賃金が支払われた。
　もし、荷物を届ける所を役人に摘発されても、魔女であることから処刑されて、背後関係が割れることすらないだろうというのが、リーダーの目論見だった。

　黄色い葉っぱをキセルの様な吸引器に詰めて火を点けて煙を吸った。客の男たちはそ

の煙で恍惚の表情になった。そして、一回の配達で一〇〇フランを受け取った。お金は依頼人に全て渡し、わたしの手元には一時間当たりの賃金一〇フランが残った。わたしは受け取ったお金を壷の中に入れて押入れの奥に貯めていった。

ある日の深夜、わたしは雌牛にまたがって、奇声を上げて踊る姿を住民に目撃され、通報された。夜中にそうするのは、魔女の習慣だった。意味などないとわかっていても、やめる訳には行かなかったのだ。大人しくしていれば、闇夜に乗じて見つからなかったかも知れない。しかし、呪文でもある奇声なくして行事は終わらない。わたしは、三日に一度の割で実行した。

翌日、役人に捕まったのはうちのおばあさんだった。認知症がすすみ、訳のわからないことを時折口にしている。それが、政権腐敗を指摘する内容で、即刻魔女裁判にかけられた。

自分ではなかったことにホッとする反面、何の罪もない、人の好いおばあさんを魔女の世界に巻き込んでしまったことに罪悪感を覚えた。

ちょっとだけ考えてわたしは、自己申告することにした。このままおばあさんが火刑に処されてはあまりに気の毒なことこの上ない。それに、おばあさんには、修行の上でもかなりお世話になっていたのだ。わたしは意を決して役人の前に進み出た。

「わたしが魔女です。おばあさんを解放してください」

申し出たところ、役人は「魔女が真実を告白するはずがない」と言い、相手にされることはなかった。了

ナマズの養殖

ナマズの養殖

長年、日本人の夏の風物詩であったウナギが食卓から姿を消しつつあった。

稚魚の乱獲、気候変動、……など色々原因は取り沙汰されてはいるものの、ウナギの生態そのものが未だにはっきりしない点が多々あり、明らかな理由は見つからなかった。

減ったウナギを再び増やすには、捕獲と食用に供されるのをしばらくの間、国際的に我慢しなければならないのが事実と言えた。

しかし、東アジア各国で、ウナギは様々な形態で食用にされている。

日本の蒲焼きやひつまぶし以外にも台湾料理、中華料理などにもあるのだ。

わたしは、長年大学の研究室で食用淡水魚の研究をしてきた。その関係もあってのことだろう。水産技術研究所の担当者から問い合わせを受けた。

「山田先生。ウナギの代用食って出来ませんかねえ。ずっとって訳ではないんです。漁獲量が回復するまでの四、五年いや、七、八年。漁を規制すればすぐに回復するとは思うんです。どうですか？」

「本当？」

わたしは懐疑の目を彼に向けた。

「この期間は流動的ですが、他の魚種については、例えば、鮎とか鮭などでは当たっていると言われています」

「ううむ、それって、元々養殖に適した種類だよね」

「ウナギは？」

「まだ、生態が明らかになっていない面も否定出来ないんだ。稚魚さえ手に入れば後の養殖は可能だけどね。どこで産卵され、幼生時代をどう過ごし、ある程度の大きさで太平洋を回遊するのはまだ、詳細はわかっていない」

「そうですか」

「ナマズでは駄目なのかい？」

「ええ、あんなもの、食べられたものじゃないでしょう」

「いや、料理次第だと思うよ。泥臭さを落とし、脂肪分をウナギ並に管理して成長させれば、うまく行けば代用食料となるんじゃないかな」

「本当ですか？　先生！」

わたしは、水槽で飼っているナマズの内、痩せてスリムな体型になっているものをすくい上げた。ナマズは解剖台の上でぴちぴちと跳ねた。

――これがウナギの代りになるのか。

わたしは解剖刀で腹を割き内臓を取り出し、身を開いた。しばらく冷水に浸してアクを取り、その間に、ガスバーナーに火を点け、網の代わりになるものを探して火の上にかざした。時折、金網が赤銅色に明滅した。

そこに、痩せたナマズを置くと、チリチリと皮が焦げて香ばしい匂いが漂った。担当者も「これは！」と言う表情になった。

脂身に火が通ると、ジュウっと音を立てて、火の上に落ち、さらに煙を立てた。ウナギ屋の前を通るときに感じるあれだった。

「山田先生！　一口食べてもよろしいですか？」

担当者はナマズの焼けるのを待ちかね、身を乗り出した。わたしは、彼にピンセットを手渡した。彼は、身をつまむと一口放り込んだ。くちゃくちゃと咀嚼し、そして、ペッと吐き出した。やっぱり、駄目みたいだった。

「やはり、品種改良が必要なみたいです。風味はいけると思うのですが、味がウナギとは全然違います」

「そう……」

わたしは、少しがっかりした。もっとも、元々ナマズなのだから、そのまんまでウナギの代わりになるとは思ってはいなかった。でも、手元で飼育していた手の掛かった作品をけなされたのと同じだった。気持ちとしてはやはり、面白くない。そして、そのとき、助手が駆け込んできた。

「山田先生。今、地震が起こったみたいです」

「地震？　何も感じなかったが……」

「震度一の弱震です」

「また、それか。オオカミ少年ではないのだから、一々報告しなくていいよ。避難が必要なものだけ言ってくれればいいんだ」

「はい……」

助手の男はしょげて出ていった。

「山田先生。ナマズの味なのですが、品種改良はどの程度かかりそうですか？」

「それは、君ぃ。予算次第だよ」

わたしは、右手親指と人さし指でわっかを作って、相手の目の前にかざした。

実験施設には全て優先順位が付けられている。重要な研究ほど、優先して使わせてもらえる仕組みになっている。さもなくては、どうでもいいことに、貴重な資材が投じら

れ、結果も出ないことに予算が振り分けられる事態になってしまうだろう。
「わかりました。取り敢えず五百万円は確保します。最優先でお願いします！」
　担当者はそう言い、深々と頭を下げた。

　彼がそう言うのなら、あのナマズは、吐き出されてしまったものの、脈はありそうだと言うことだった。それなりの評価だ。わたしは、水槽のナマズたちに熱い視線を送った。
　品種改良は別の品種の卵子と精子を掛け合わせて、より適した品種を産み出す方法と、遺伝子操作（ゲノム編集）で新しい品種を作り出す方法とがあった。ただ、この方法だと、食品として流通させるのに難があった。まだ、社会的認知度が低く、一般消費者に敬遠される恐れが十二分にあったのだ。
　そこで、わたしは、さらに別の水槽で飼育している別のナマズと交配させることにした。これでよりいっそうウナギに近い肉質となるであろうことは予想がついていた。

　三ヶ月後、新型ナマズは見てくれだけはウナギの様に細身になった。担当者がやってくると、水槽の中でうねうねと身をうねらせた。
「山田先生。ついに出来たのですね！」
　彼はすっかり、興奮していた。わたしは、水槽から一匹取り出すと、またもや調理し、バーナーに掛けて焼いてみた。ウナギの様な香ばしい匂いが漂った。
「おお！　　今回は食感もウナギそのものです。完璧ではないですか！」
　担当者は顔を紅潮させ、ウナギ味のナマズの出来映えを褒めちぎった。
　そして、次の瞬間、またもや地震が起こった。今度は体感出来るくらいの規模だった。
「おいおい。また地震か？」
　助手の男が駆け込んできた。
「山田先生。また地震です。学長はナマズの祟りではないかと言っておられます」
　ナマズは地震を起こすと伝えられていたが、本当に起こるのなら、使えなかった。了

遺伝子操作

遺伝子操作

遺伝子操作の技術が発展したのは二十世紀後半のことである。生命の基礎とも言える遺伝子ＤＮＡがアデニン、グアニン、シトシン、チミンの四つのタンパク質からなり、しかも、それらの組み合わせで、らせん構造を描いていると言う画期的な発見がなされてから、急速に進歩した。

この基本式、設計図とも呼べるものがあれば、どんな生命体でも合成できることになった。

生命と化学の境界線の学問領域である。

わたしが勤めている医療用器具の会社に、移植医を名乗る人物が訪れてきた。

「山田さん。日本の移植医療は遅れに遅れていますぞ！」

開口一番、そんなことを言った。わたしとしては、そんなに卑下するほど遅れているとは思っていなかった。ただ単に、臓器提供者（ドナー）の数が移植希望患者の数より極端に少なく、待ち時間が途方もなく長いだけで、技術力そのものは、この医師が言うほど危機的状況ではないと思っていた。

「例えば、三歳児の心臓移植ならどうします？」

彼は言った。確かに子供の臓器提供意思カードはなかったし、そもそも認められていなかった。希望者は募金を集めて渡米したりして海外で移植を行っているのが現状だった。

日本人の赤ちゃんが助かるために、外国へ行き、外国人の子供から臓器移植を受けることの是非も問われていた。

しかし、それは、政治の問題であり、技術の問題ではなかった。

それに……である。そんなに小さい子供をドナーにするなど、親の立場からみれば、とてもではないが、精神的に耐えられるものではないと思った。

「そこで相談なのですが、この会社では遺伝子操作を行う器材を作っているではありませんか」

「ええ、それが業務ですから」

「例えばですが、ブタの遺伝子を書き換えて、人間の臓器を作り出すことは出来ませんかね？」

「はい？」

　わたしは、ブタの飼育ゾーンで、人間の臓器を作り出すことが頭に浮かんだ。

　確かに不可能ではない。しかし、「倫理上の問題」が高い壁として立ちはだかっていた。神が作った生命に人間が勝手に手を入れていいのだろうか。

「でも、この技術で大勢の移植待ちの患者さんが助かるのですよ。あなたの小さな倫理観とどっちが重要ですか？　ええ？」

「ふむむ」

　現在、五万人からの重症患者さんに移植が必要で、その提供者（ドナー）が現われるのを待ち焦がれているそうだった。

「しかも、ドナーというのは、健康な臓器を持っている人でなくてはなりません。病気でボロボロの状態ではそもそも移植には適さないし、移植が成功したとしても、余寿命が期待出来ないからです。つまり、健康な人が脳死するのを待つしかないのです。これは、遺族からしてもつらいことです。朝、家を出ていった夫や子供さんが、事故に遭い、脳死状態になる。まだ、脈もあるし温かいのに、移植のドナーにならないかと勧めるのです。言われる方もつらいですし、勧める方もつらいのです。わかりますか？」

　わたしは、熱弁する医師に首肯して答えた。

　何だか、もうやらざるを得ないことになってしまっていた。会社の上司たちには、あらかじめ承諾を得ていると言った。成功すれば、会社の評価も株価も上がる。そう説得したらしかった。

　わたしは、彼から示された重症の心臓病患者さんのＤＮＡデータを受け取った。細胞を培養し、そのうち正常なものをブタの受精卵の遺伝子データに埋め込み、そのまま子宮に着床させるのだ。

　わたしは、顕微鏡下でこれらの作業を行い、ヒトの遺伝子を持ったブタを生み出した。

　ブタであれば、医療に限らず、何に使おうが、所有者の意志一つであった。しかし、遺伝子ＤＮＡはあくまでもヒトそのものだ。言うなればブタの姿をしたヒトだった。

　ブタは出荷され、あの医師のいる病院に運び込まれていった。

　わたしは、医療器材メーカーのエンジニアに過ぎず、実際の移植手術には無関係だったが、関わったものとして、最初の心臓移植手術には立ち会った。

　ブタからの移植とは言ったものの、実際には本人のＤＮＡを持っているので、拒絶反応などの類の不適合は一切起こらなかった。心臓の大きさも丁度よく収まり、手術は短時間で終了した。

「いやあ、実にきれいな臓器でしたよ。まるで生まれたての赤ん坊みたいでした」

　医師は手術後にそうコメントした。

「そりゃそうでしょう。生まれたての臓器ですから」

「これは、普通の人間の臓器と同じと考えていいんでしょうね？」

　そんなことを尋ねられた。

必要な臓器だけが取り出され、後は焼いて捨てられることになっていた。しかし、彼の情報では、心臓だけでなく、肝臓や腎臓、膵臓に眼球が取り出されて、別の患者に振り分けられるらしかった。

「ええ、聞いていませんよ。そんなことが倫理的に許されるのですか！」

「人聞きの悪いことを言わないで下さい。これは、ブタの臓器です。焼こうが煮ようがこちらの自由だと考えています。違いますか？」

「あ、ううう」

ブタの成長はヒトより遙かに早く、妊娠期間は１１４日だ。これだけあれば足りた。この手術の成功を受けて、保険適用外の治療にもかかわらず、希望者は押し寄せるかの様だった。

実際、わたしの実験室の手に余るほどの受注があり、この後、生産工場のラインに載せられ、大規模にブタが生産されることになった。そして会社は利益を上げ、株価も上がった。

工場からは臓器を抜かれたブタの死骸が産業廃棄物として、排出されることになった。本来ならば、人間の遺体と同様に丁重に供養しなければ罰が当たりそうな位である。

そして、これら一連の「医療ビジネス」に反対の旗を掲げる集団も現われた。

「お前たちは人間の皮をかぶったオニだ！」

もう、何の姿をした何者なのか、本来の姿など意味をなさなくなっていた。了

１３日の金曜日

１３日の金曜日

わたしの勤めていた会社が倒産し、急遽、人材派遣会社に籍を置くことになった。しばらくは事務所に常駐しながら、あちこちの企業に面接に行き、派遣先を探すことになった。この間、給与はかなり据え置かれる。派遣させられて初めていくらと言う条件だった。

今の家の住宅ローンは到底払えそうになかった。
そのため、日曜ごとに近くの町にある不動産業者を回り、適当な貸家を探したのだった。

今まで住んでいた家はちょっと大きかった。田舎だからと大きめの土地を買い、建ぺい率ギリギリまで建てたのだ。三十五年ローンだったが、会社の業績も当時はよかったし、ボーナス払いの月も生活に余裕があった。

大きな家だっただけに、数年住んでいるうち荷物が増えに増えた。子供の学習机は言うに及ばず、妻の趣味であるピアノも買った。電化製品も物置一杯あり、季節の替わり目に入れ替えるのも大変だった。だから急に引越しとなると簡単にはいかない。同じくらいの大きさの家でなければこれらの荷物を収容しようがなかったのだ。

何軒もの不動屋さんをハシゴして、家賃の高さに目もくらむ思いだった。そんなとき、ふと気になって入った古びた不動産屋さんでとある物件を紹介された。
「お宅の言う様な条件に合致するとなると、ここしかありませんや」
彼の指し示す物件の家賃は格段に安かった。以前住んでいた家と同じくらいのスペースがあるのに、月五万でいいと言う。敷金もなしだった。こんな破格の条件だとライバルも多いに違いない。しかし、他に誰も借り手がないみたいだった。

わたしたち家族は不動産屋に連れられて現地を見に行った。

家の周りを取り囲んでいる生け垣は鬱蒼と伸びるに任せたかの様に、かなり大きくなっていた。家本体は日当たりが悪そうに思えた。何だかじとじとしている感じだった。しかし、これは、入居前に植木屋さんが剪定してくれるそうだった。

門扉を開けて中に一歩入ると、足元に黒い猫がいた。わたしたちの侵入を喜んでいない様だった。毛を逆立てて、わたしたちを威嚇した。不動産屋がこれを棒きれで追い払った。

玄関の鍵を開けると、中から、むっとしたよどんだ空気が流れてきた。わたしは思わずむせかえり、ハンカチで口元を覆った。妻と娘を見ると同じ様にしていた。

「ささ、中へどうぞ」

玄関先には、見学者用と思しきスリッパが置かれてあった。わたしは、それに足を通した。

壁はすっかり変色し、所々、壁紙が剥がれて丸まっていた。下地にはカビが生え、黒い点々を作っていた。壁紙は元はホワイトだったのだろうか。全面が茶色に変色し、その上、あちこちに、薄茶色のシミがついていた。油汚れ？　血の跡？　まさかな。わたしは湧き上がってくる妄想を振り払った。

二階の洋室に入ると、ここだけ家具――子供机の様に見えた――が置かれていた。不動産屋の言うことには、これだけは撤去しようとしたのだが、どうしても部屋から出せなかったのだそうだった。

「部屋から出せない？　ではどうやって入れたのですか？」

わたしは食ってかかる様な口調になった。

「多分、大工さんが新築時に造ってくれたのと違いますか？」

と不動産屋は言った。一応筋は通っている。

わたしは胸騒ぎがして、引き出しを開けると日記帳が一冊残っていた。前の住民のものだろう。

９月６日金曜日、学校でＡ子ちゃんたちに取り囲まれ悪口を言われた。泣いてしまった。

９月９日月曜日、誰かわからないが、机に悪口が書いてあった。もう、転校したい。

９月１０日火曜日、お父さんの会社がうまくいき、都心に転校できることになった。嬉しい！

９月１２日木曜日、転校の話はなしになった。お父さんの機嫌が悪い。

９月１３日の金曜日。一階で激しい口論があり、ドタンバタンと家具の倒れる音がした。わたしが恐る恐る見に行くと、お父さんがお母さんに暴力をふるっていた。お母さんは床の上に横たわり、動かなくなった。ブラウスのボタンを見ていると、微かに上下

し、辛うじて息をしているのがわかった。その瞬間、お父さんはわたしの方を見た。次はわたしだ！

　わたしは階段を駆け上がり、子供部屋に入るとドアを閉めて鍵を掛けた。階段からドタドタと言う足音が迫ってきて、ドアの前で止まり、そして、どんどんとドアを叩く音が響いた。どうしよう。開けないと怒られる？　それとも開けじゃ駄目？　どうしたらいいの？　神様！　助けて下さい！　……。

　そこで日記は終わっていた。

　わたしは、パタリとページを閉じると、この家で過去に何があったのか、それはひょっとして惨劇ではなかったのか。思索をぐるぐると巡らせた。今となっては、この家の壁紙に所々ある壁のシミも血の跡に見えてくる。

「不動産屋さん。この物件の過去の事故ですが。告知義務があるのではないですか？」

「いや、何もありませんよ。……ええ、何にも」

　彼の口調は、語尾が震えていた。絶対に何かある。わたしはそう確信していた。

　でも、今のわたしに選択肢はなかった。この家で契約を決めた。

　後日、この家に住んでいたと言う当時中学生だった子に会うことが出来た。

　今は大学生でアルバイトをしているという。わたしの派遣先の会社に勤めていた。

「いやあ、サスペンス作家になりたくて……当時、あんなものを書き散らしていたんです。あはは」

　そう笑い飛ばした。

「そう。お母様はお元気かね？」

「は、え？」

　彼女の顔を見ると額に脂汗が浮かび、必死に言い訳を考えているみたいだった。

　やはり、あの惨劇はあったのか？　彼女の手首を見ると夏なのに長袖だった。了

お姉ちゃんのハムスター

お姉ちゃんのハムスター

　わたしには六つ年下の弟がいた。現在小学校の一年生である。夏休みも後半になり、宿題と呼べるほどの課題はまだないみたいだったが、形だけのものはあるみたいだった。しかし、簡単な提出物ほど意外と完成までに手間と暇が掛かるものなのだ。

　自分の経験から考えると、多分、理科研究系と絵日記系が面倒だと思う。八月三十一日の夜にまとめてやってしまうことが極めて困難なものだからだ。
「どうして、もっと早く言わないの！」
　と、お母さんの怒った顔が目に浮かぶ。

　毎日、ちょっとずつでもやっていれば、大したことのない作業量ですむものが、貯めてしまうと一気に重荷になるのだ。自分のときがそうだったから、今となってはよくわかると言うものだ。

　鼻歌を唄いながら、弟の机の横の棚を見ると、今のところ、全く手をつけられた形跡はないみたいだった。「あーあ」これは大変だ。

　現実に、弟の宿題はまだ全然手がつけられていなかった。絵日記帳は真っ新なままだ。
　まだ、夏休み最終日まで二週間ばかりある。わたしは一計を案じた。
「おいおい、弟よ」
「お姉ちゃん。なあに？」
「宿題まだ残っているんでしょう？　もし、今週中に最後まで片付けたら、お母さんに内緒で飼っているヒヨコを見せてあげる」
　と言った。
「えぇーっ！　うそ！　そんなのどこにいるの？」
　弟は瞳を輝かせて尋ねた。わたしは、自分の机の一番広い引き出しを指さし、「ここ、ここ」とばかりに、とんとんと叩いて見せた。
「うわ、まじで？」
「うん」

わたしは微笑んだ。こんな手に掛かるかどうかわからない。もし、夕飯のときに、本気でお母さんに聞いてみたりしたら、一巻の終わりだった。そのときには、逆にわたしが叱られる。――あんた何家の中で動物飼っているの！　いつ、どこで手に入れたの？
早く捨てて来なさい！　と、オニの様な形相で叫ぶに違いない。

しかし、弟はヒヨコ見たさに、それから一所懸命になった。夏休み前半の間、全く手がつけられていなかった絵日記帳や理科の観察ノートが文字で埋まりだした。難をつければ、鉛筆の文字だけで、色味が全くなかったことだ。まあ、それは、出来た時点でお母さんに一度見せ、そんな風に注文がつけられ、一部やり直しになるだろう。でも、最後の最後になり、お父さんまで動員してでの、一家大騒動ともなる宿題は片付いたも同然だった。
「お姉ちゃん。見せて！」
と、弟はお母さんに宿題を預けるや否や飛んで来た。
嘘だとは微塵も思っていなさそうだった。瞳はキラキラと期待で輝き、身を乗り出し、今にも出てくるであろうヒヨコに興味津々であった。

その反面、わたしは、当惑していた。
約束は約束である。形だけでも、ヒヨコに似せたものを見せなければ彼にしたって、収まりがつかないであろう。それでなくても、夏休み後半を興味の欠片もなかった宿題で潰してしまったのだから。
わたしは意を決して引き出しに指を掛け、深呼吸した。ガラガラ……開けて見ると、そこには、普段使っている文房具が所狭しと詰まっているだけであった。
「お姉ちゃん。ヒヨコは？」
「ごめん。逃げてしまったみたい。庭を探してみて」
「あ、うん。わかった」
弟はそれから一時間ばかり、庭の木々の間を探し回ったみたいだったが、もとより、ヒヨコなどいないのだ。それに元々いないのに、見つかる訳がなかった。わたしは心の中で舌を出し詫びた。

冬休み。
これは二週間しかない短い、しかし、貴重な休みだった。何せクリスマスとお正月がやってくるのだ。これでもう少し長ければ夏休み以上のフェスティバル到来と言った所になるだろう。弟は？　と見ると、相変わらずゲームをするか漫画を読むかしていて、一向に学校から出された課題に手をつけようとはしなかった。
「ちょっと、あんた。宿題は？　今度は夏休みほどの長い期間じゃないんだよ。早くしなさい」
「うーん、これ読んでから」

と、手にしていた月刊漫画誌を指し示した。
「ダメダメ。冬休みって元々短いんだよ。ぼーっとしていると終わっちゃうよ。まじで」
「でもなあ……」
またもや、やりたくなさそうな態度満々であった。

「じゃあさ。今週中に課題を片付けたら、お母さんに内緒で飼っているハムスターを見せてあげる」
「え、うそ、まじで。どこで飼っているの？」
「ここ、ここ」
わたしは、またもや机の一番広い引き出しの取っ手をポンポンと叩いた。
「すぐやる！」
弟は机に向かい、課題に取り組み始めた。
「できた！　お姉ちゃん。ハムスターは？」
「そう。出来たの？　じゃあ……」
わたしは、引き出しを開けた。元々ハムスターなんていないのだ。入っているはずもない。わたしは、心の中で騙したことを詫びながら、にっこり微笑んだ。
「ごめーん。逃げてしまったわ。部屋の隅を探してみて！」
「うん。わかった」
その後、弟は半時間ほど、部屋の隅々を探し回っていたが、やがて、それにも飽き、どこかへ行ってしまった。
さすがに、わたしは、二度も騙したことで、幼心を傷つけてしまったのではないかと心配になった。でも、ショックだったのはそれだけだったみたいで、夕食後は元気にテレビのバラエティー番組に興じていた。少し安心した。

それからも、休み期間やテスト前など、勉強しなくてはならなくなった頃会いを見計らい、わたしは、お母さんに内緒（内緒というのがミソである）で飼っている子猫や子犬などの小動物で弟のやる気を引き出すことに成功した。

ある夕方のこと、お父さんが会社の人からケージに入ったハムスターをもらってきて、うちで飼うことになった。世話係は、飼うことが念願だった弟が手を挙げて引き受けた。了

火星旅行

火星旅行

わたしは、火星探査衛星の製造会社のエンジニアだった。

機械の中に潜り込んで、電子基板の点検をしていると、背後で音がした。バタン、キュルキュルと電動ドライバーの作動音だった。わたしが、ペンライトで後方を照らすと、ちょうど、扉が閉められ、完全に封印されている所だった。

「出してくれ！　おい！」

わたしはフタを裏側からドンドンと叩いた。

しかし、気密度は一級品だった。ちょっとやそっとの衝撃は吸収してしまう構造になっていた。従って、中に残されたわたしの存在を知らせるすべはすでになく、わたしはロケットの打ち上げ場にまで連れて行かれ、そこで、「やあ」と、顔を出し、無様な顔をさらすことを恐れた。

これは、わたし個人にとっても、会社の管理部門にとっても、そしてロケットの打ち上げを計画した宇宙開発機構にとっても不名誉なことだった。それに、そんなことになれば、打ち上げスケジュールだって延期になってしまうだろう。

異物を挟み込んだままロケットを打ち上げたなどとニュースに流されれば、世界中の笑いものになるのは容易に想像がついた。

わたしはペンライトを点け、手元の計器類を確かめた。自分を呑み込んだままの人工衛星は工場の出荷場にいるみたいだった。非常用の電源をつなぎ、機外の状況を仔細にのぞき見た。

どうやら、出荷場では、機械の製造責任者と品質管理部門の責任者とが言い争っている様だった。多分、ではあるが、重量が計算値と合わないことを咎め立てているみたいだった。それはそうだろう。人工衛星の部品は〇・一グラムの単位で管理されている。現在の衛星本体の重量はわたしの体重と作業服、器材の分である七〇キログラムが加わっているはずだった。こんなに設計重量をオーバーしていれば、出荷を認める訳にもいかないだろう。

「まあいいか」

その一言で出荷が決まってしまった。

技術者としてありえない考え方だった。もっとも、スケジュールは時間刻みで管理されている。出荷が一時間も遅れるなら、それなりの言い訳が必要だ。

それに、ロケットの打ち上げ能力にも、そもそも、多少の余力があるみたいだった。一キログラム重いくらいのことで落ちたりはしないものだ。

ロケット発射センターの格納庫に到着したとき、わたしはトラックの荷台の上ですっかり、車酔いになっていた。わたしは計器を見て段々と上昇していくのを目の当たりにしていた。

「うわ！　うわ、うわわ……」

上昇速度と高度から考えて、ロケットの先端部分に組み込まれ、そして、ロケットが発射台に固定されているみたいだった。わたしはこれからどうなるだろう。

この火星探査機は、三年がかりで地球から火星へ飛び、火星の衛星軌道を周回しながらデータを収集し、また、三年がかりで地球へ戻ってくる。そんな計画になっていた。

人工衛星はいいとしよう。とにかくこれからの長い旅路を耐えられる設計になっている。しかし、生身のわたしはどうなるのだ？

わたしは、人工衛星内に余分なスペースがあることに気づいていた。何のためかは詳細に調べていなかったが、ここにある設計資料を読み解くと、宇宙飛行士用の居住スペースが設けられているみたいだった。

幸い、人類を火星に送り込むプロジェクトの実証試験が盛り込まれているらしく、酸素や食料を積み込み、人間の重さの人形を乗せているらしかった。わたしは、もがきながら、機械を壊さない様に、その居住スペースに移った。運がよければ三年後は火星に着くことが出来る。しかし、三年の宇宙飛行に人体が耐えられるか？　宇宙線による被曝量はどのくらいか？　三年も一人っきりで耐えられるか？　それらをこの人形で実験するらしかった。

わたしは居住スペースに入り、シートにベルトで固定されている人形を傍らに押しやると、自分でそこに座った。一人っきりとは言え、自分がこの宇宙船の船長であり、司令官であった。この船団（ではないが）を取り仕切るのに必要な情報は全て手元のパネルに表示される様になっていた。

必要なのは「外部とのコミュニケーション」を取るための装置だった。取り敢えず、地上の管制塔と連絡を取り合える無線機さえあればいい。大至急、わたしの窮状を知らせ、この発射台に据え付けられたロケットの先端から救助されることを望んでいた。

少なくとも発射時に掛かる重力の一〇倍の力をまともにくらう気は少しもなかったのだ。

「管制塔、管制塔。こちら火星探査機。聞こえますか？　どうぞ」

わたしは無線機のマイクを握り、懸命に呼びかけた。

「あれ……今誰か喋りましたか？　いいえ、はい、はい」

　無線機越しに管制塔内部での間抜けな会話が聞こえて来た。

　確かに、気持ちはわかる。本来、無人のはずの火星探査機なのだ。人形は乗せてはいるものの、それは宇宙線に耐えられるかどうかの実験のためであり、人形が一人で話すなどありえない。

「管制塔、管制塔……」

　わたしは同じ呼びかけのセリフを口にした。

　しかし、またもや、同じ様な反応だった。

「あれ？　おかしいなあ。音声信号が入るんですよ。発射台に誰かいますか？　混線かなあ？　おかしいなあ」

「ですから、……管制塔。聞こえますか？　こちら探査機」

「やっぱり、混線みたいですね。駄目だなあ、この無線機」

　駄目なのは管制塔の係官だった。わたしは現に探査機の居住区にいるし、発射台に据え付けられたロケットの先端にいた。これは事実であり、間違いではなかった。

「マスターキー入れますね」

　そんな会話が聞こえて来た。ロケットの主電源が入り、発射の秒読みが始まった。

「六〇、五九、……」

「待って、待って下さい」

「三、二、一、……発射！」

「パチパチパチ」という拍手がマイク越しに聞こえて来た。

　わたしは、三年間を掛けた火星旅行に出かけた。　了

凶悪犯罪者

凶悪犯罪者

　夕方のテレビニュースで事件があったことを知った。
「物騒になったもんだな。って、住所地はうちの近所じゃないか。大丈夫だったのか？」
「さあ、そう言えば、夕方頃にこの辺りをパトカーが何台か走っていたわね。捕まっているといいんだけど……。ニュースで続報は出てないの？」
「まだみたいだ。あちこち逃げ回っているんだろうな。けど続報はないみたいだ。捜査に進展がないんだろうな」
　わたしはテレビの画面から視線を移し、手元のグラスにビールを注いだ。炭酸の泡が立ち上り、コップの上部で泡の雲に紛れ込んだ。

　アナウンサーの言う限りでは、犯人は「河川敷を歩いていた女性に乱暴した上でロープで首を絞めて殺害し、持っていた現金の入った財布を奪って逃走」したらしかった。

　わたしの知る限り、最も凶悪な犯罪者だと思った。もし、裁判に庶民の声が反映されるなら、（その制度はあるのだが、最近では判決相場によらないものは、最高裁や高裁で差し戻しになっている）真っ先に「死刑」にふさわしいと思った。

　しかし、テレビ局の用意した犯人の写真を見て、わたしは驚いた。
　それは最近のものではない。犯人は三十代の男だと言っていた。写真は中学時代の卒業アルバムから抜粋したものの様だった。しかも、それはわたしのものだった。モザイクが掛かっているものの、写真の男の子の氏名は山田明男と薄くではあるが、本人なら読み取ることが出来、年齢だけ三十八歳と表示されていた。これだとまるっきりわたしがやったみたいだった。
　会社帰りに軽く……そんな冗談が頭をよぎった。冗談ではない。今まで真面目一筋に生きてきたのだ。そんな凶悪な犯罪とは無縁の世界だった。

　でも、三十八歳と言えば、年齢的にも中年と呼べる年代である。よくもそんな、まだ子供とも言えるほどの昔の写真を引っ張り出したものだと思ったが、よっぽどデータが

なかったのだろう。写真ではまだ幼さが残る、中学生男子の顔つきそのものだった。だからこそ、近所の方も指名手配されているのがわたしだとは誰も思わなかったのだろう。

しかし、このままでは成り行きで犯人にされかねない。わたしは少し迷って、テレビ局に電話を掛けた。――写真の男性（中学生）は自分であり、現在、普通にしていて犯人では絶対にないと言うつもりだった。

しかし、電話番号案内で示されたテレビ局の電話番号では、音声ガイダンスにつながり、なかなか担当者につながらなかった。

「どうなっているんだ？　これ」

わたしが妻に文句を言うと、彼女は肩をすくめた。近頃は人件費削減のあおりなのかどうなのかわからないが「最近のメーカーサポートセンターでも、みんなそうなのよ。自動音声ばかり」と答えた。

わたしは、面倒になり、受話器を置いた。

夜八時頃になり、家に二人連れの警官が訪ねてきた。交番のお巡りさんではなく、私服警官だった。ちらりと身分証を提示し、西署のものだと自己紹介した。

「あの時間、お宅は何をしていましたか？」

「仕事をしていました」

「本当に？」

「ええ」

「それを証明出来ますか？」

「……えっと、でも、わたしが仕事をしていたと言うのだから、これほど確かなことはないでしょう。違いますか？」

「第三者の証明がないのですか？」

などと問い詰められた。

やましいことはなかった。昼間は勤め先に詰めていて、今日は不幸にも外出などはしなかった。だから第三者の証明などはなかった。わたしはしどろもどろになり、反論出来なくなってきた。わたしをじわじわといじめた上で、警官二人は帰っていった。

そしてその後、テレビカメラを担いだ連中が押し寄せてきた。さっき電話をしても通じなかったテレビ局だった。レポーターと思しき中年男が無礼な仕草でわたしにマイクを向けて来た。

「あなたがやったんですか？」

などと失礼な質問を投げかけられた。

カッとなったわたしは、連中をドアから押しだし、塩をまいた。

「帰れ、帰れ、こんちくしょう！」

夜のニュースでそれを録画・編集した映像が流されていた。

一応、顔にはモザイクがかかっていたが、「出ていけお前ら！」と叫んでいる姿は、まるで凶悪犯罪者そのものだった。柄の悪い声、粗暴な振る舞い。酒が少し入っているとは言え、自分の姿だとは思えないほどだった。

――犯人（容疑者）は印象で作られる。

わたしはその事実を目の当たりにし、なおかつ、実感した。真実はどうでもいい。テレビカメラの前でどう振る舞い、どんな印象を相手に与えるか。犯人は後からどうとでも証拠と言う名の理由がつけられでっち上げられるのだ。しかも、簡単に。

案の定、その後、警察署へ任意同行を求められた。あのときの警官だった。取調室に警官とわたしだけになり、もう、わたし以外に犯人はあり得ないみたいな雰囲気が醸成されていた。

「どうして、あんなことをしたんだ？　　ああん」

「……太陽がまぶしかったから」

わたしは、取り調べの警官の質問にボソボソと答えた。まるで違う国に紛れ込んだ外国人の様な心境だった。どうして、自分が取り調べられなくてはならないのか。これから犯人として裁かれるのだろうかとか。裁判では何と答えようかとか。そんな考えが頭の中をぐるぐる回りながら、わたしの思考領域を占拠した。

後日、真犯人が警察署に出頭したらしかった。テレビの情報によると、やっぱりわたしの卒業した中学の同級生だった。矢田明男と、一字違いの友人だった。みんなの後ばかりくっついて、一緒に悪さだけする様な、大人しい生徒だった。

報道では警察署で撮られたと思しき、正面の白黒写真が写っていた。どうしても善人には見えない写真だ。これだけ見ると、もう、いっぱしの凶悪犯罪者だった。　了

子ども病院

子ども病院

市の定期検診でわたしは異常を宣告された。

肺に影があると言う。最悪の場合、命に関わる場合もあるらしかった。となると、どこの病院でもいい訳にはいかなかった。

わたしは、あちこちで、病院に掛かっている人から情報を集め、少しでもよい見立てをする医師を擁する所を探し求めた。でも、いつまで掛かってもよい訳でもない。もし、癌だったら、そうこうしている内に進行してしまうだろうし、気がついたときにはすでに手遅れになっている事態も想定され得た。

「町外れにある……ほれ、ほれ、何と言ったかな。名前は知らないんだけど、腕はいいって評判の病院があるよ」

と、わたしの窮状を知った老人が教えてくれた。名前がわからないのではあんまり、情報価値は低かったが、それでも、うちの町内にそんなに病院がある訳でもない。老人の言う病院がどこにあるのかは、何となく察しがついた。

人呼んで「子ども病院」。子どもを診る病院ではない。医師が皆子どもなのだった。果たして見立ては確かなのか？　治療は適切に行ってもらえるのか？　最初は不安だった。何せ、自分の孫みたいな子どもに診てもらうのである。誰だって、遊びでつきあうなら楽しいかも知れないが、命が掛かってのこと。子どもにお腹を切られて亡くなったのでは、悔やんでも悔やみきれないだろう。

しかし、町民の評判はすこぶるよかった。

市民病院で見過ごされていた、初期の癌を先生が脈を取っただけで指摘されたとか、呼吸音を聴いただけで、間質性肺炎と診断されたとか、子どもの遊びではないくらいの高度な医療を提供しているみたいだった。

わたしは意を決して、診断を受けに行ってみることにした。

バスでひと停留所。町の隣にその病院はあった。看板には「A町立子ども病院、外科・

内科・眼科・耳鼻科・産科・婦人科・歯科・口腔外科」と何でもあります、みたいな雰囲気だった。そんなに医師がいる訳でもないと聞いていた。でも、何でも診てくれると。不思議な病院だった。

白いコンクリートの建物で、新しくはないが、かといって、カビたり、塗装が剥げたりと言った経年劣化とも縁のないきれいさを保っていた。わたしは、建物のメンテナンスがきちんと定期的に行われていることに、安堵のため息を漏らした。もし、あちこち古びてお化け屋敷みたいだったら、入るのに躊躇の念を覚えただろう。

入って受付で保険証を示し、診察券を作ってもらった。ここには見た目が中学生くらいの女の子が勤めていた。医療事務なのだろうか。でも、驚くのはここからだった。

実際、診察室に呼ばれると、この病院の医師は皆、子どもの格好をしていた。例えて言うと、幼稚園の年長組さんか、小学校一年生くらいの背丈と風貌をしていた。

でも、医学知識は逆に市立病院の医師たちが子どもに見えるくらい確かなものであったし、手術の技術も手の器用さも大人の医師よりも優れていた。実際、子どもの様でいて、中身は大人。そんな気さえ起こってくる。

病院を訪れる患者は、子どもを連れたお母さんたちも多かったが、地域のお年寄りも多かった。手が小さいので、開腹手術も腹腔鏡手術なみに小さくすんだのだそうだった。

「山田さん。……市の健康診断で異常が出たと言うことでしたね」

子ども先生は可愛らしい手で検査シートを取り、ざっと目を通して所見を述べた。「看護師さん。ＣＴ室へ案内してください。山田さん。これから少し検査をします。いいですね？」

「はい。もしかしたら癌なのでしょうか？」

「可能性はあります。しかし、初期のものだと思います。そんなに心配しなくていいですよ」

子ども先生は聴診器で呼吸音を聴きながら述べた。

看護師さんも、子どもだった。わたしをＣＴ室に案内すると、そこから先を検査技師に引き継いだ。検査はすぐに終わった。

わたしは再び診察室に戻った。

「肺のここととここ。影が見えます。肺がんのステージ１です。すぐに切除すれば問題はないでしょう。どうなさいますか？　いくつかの選択肢はありますが、ボクは外科手術をお勧めします」

　子ども先生はそう言った。
「選択肢とは？」
「放射線治療、抗がん剤治療などです。体を切らなくてすむメリットはありますが、時間が掛かるでしょう。あなたの場合はまだ、初期の癌で、小さいですし、転移も見られません。切ってしまうのがベストだと思います」
「手術は先生が？」
「はい、ボクがやります。こんな子どもに切られるのは不安ですよね？　あはは。でも、心配しないで下さい。この手術はもう何百例も行っています。成功率は九十八パーセントですよ」
　わたしは、ごくりとツバを飲み込んだ。自分の命に関わる選択は初めての経験だった。もう少し、時間を掛けて考える方がいいのだろうか。別の医師によるセカンドオピニオンを求めた方がいいのだろうか。それとも、簡単そうだから、ここで切ってしまった方がいいのだろうか。わたしは逡巡した。
「少しの間なら、迷っていてもいいですよ。十分検討してみてください」
　子ども先生はそう言った。

　わたしはそれから家に帰り、三日ほど考えに考えた。――恐れることはないではないか。それはわかっていた。でも、体にメスを入れることが怖かったのだ。でも、これまで何百例もこなしてきたという先生の言葉を受け入れ、手術を受けることを決定したのだった。
　手術は思ったより簡単で、術後の容体も良好で、わたしはすぐに元気を取り戻した。

　なぜ、子どもの姿なのか？　回診に来た子ども先生は語った。
「僕たちは成長しない代わりに知識と技術を神様からいただいたのです。見た目は幼稚園児でも、実際には、僕は四十五歳。あっちの先生は五十歳なのです。定年？　そんなものはありません。長寿社会に対応していきます」
そうはっきりと述べたのだった。「医師を志したときの純粋な気持ち。それを忘れないためにいつまでも子どもの姿をしているのです」　了

放火魔ｖｓ消火器男

放火魔ｖｓ消火器男

わたしは従業員一〇人足らずの規模のエンジニアリング会社を経営していた。

主に、大手機械メーカーの下請けとなり、設計の補助作業である技術計算を行ったり、それを元にした機械部品の設計・製図を行ったりしていた。下請け企業であるから、元請けの景気がよくなれば必然的に忙しくなり、不景気になれば、少し遅れてこれも必然的に仕事がなくなる事態に見舞われた。

なぜ、こんな会社を興したのか？

話せば長くなる。

元々若い頃は、わたし自身、機械メーカーの設計エンジニアをしていたのだった。製品の設計をし、部品の手配をし、そして納期の管理まで行っていた。実際、納品された部品の検品に立ち会ったこともあるし、この会社で作った製品の納入にも立ち会った。

つまり、製造過程の上流から川下まで、すべてを把握する立場になり、もしかしたら、自分で会社を作り、そこに「自分で作った仕事」を全て流せば、彼らに支払っているエンジニアリング料を全て自分のものに出来るのではないかと言う妄想に囚われたのだ。

実際、会社を辞める前に、自分の作った計算依頼書や、製図指示書を自分の作ったエンジニアリング会社に発注したときには、インサイダー取引ではないかと勤労課や経理からクレームがあるのではないかとどきどきしていたものだった。

しかし、実際には、全体から見ればごくわずかな仕事でしかない案件に、クレームが来ることもなく、あっさり、済んでしまったのだった。結果として、仕事を予定通りこなし、納期通りに計算書や図面を納入し、翌月払いで賃金が支払われたときには、思わずガッツポーズになり、「やったー！」と叫んだほどだった。

しかし、よかったのはそこまでで、わたしが元の職場を辞めた途端に、仕事の流れが途絶えてしまったのだ。よくよく考えれば不思議でも何でもない。このようなエンジニアリング会社は星の数ほども存在し、そこに発注するには価格競争が存在し、そして、わたしのときの様に縁故やコネが存在したのだ。星の数ほどもある会社のひとつになり、受注金額は激減した。

これからは、せっせと営業活動に精を出し、仕事を取ってこなければならない。わたしは、内心、仕事のなくなる恐怖に囚われ、もしかしたら、どれだけ日参して営業しても仕事が取れないのではないかと言う思いにも囚われた。

「松川主任さん。お久しぶりです。山田です」
　わたしは、毎日、元の職場の主任クラスの人の内線電話にかけ続けた。少しでも知っている所に仕事を出す方が敷居が低いと思ったからだ。
「おお、山田くん。今何をしているんだい？」
　覚えていてくれれば、後は話しやすかった。こういうエンジニアリング会社を興して、メーカーから技術計算や設計製図を請け負っていると説明して回った。
　そして、少しずつではあるが、仕事を出してもらい、月々の帳尻を合わせていったのだった。

　月々の支払いが経営者としてのわたしの苦痛だった。人件費にコンピュータのレンタル費用、光熱費に会社の保険類。元請会社からの入金があれば、大きな顔をして支払うことが出来たが、仕事が断続し、入金の流れが途絶える月もある。そうしたとき、借金をしてでも支払う必要があった。

　わたしは段々と会社を興したことを後悔し始めていた。――どうして、元のメーカーを辞めてしまったのだろう。こんなお荷物を抱えてまで、これからどうやって生きていけばいいのだろう。経営者としてのわたしは失格だった。及第点に遙か及ばない劣等生だった。会社を処分するにしても、黒字の会社ならいくらでも買い手がつくが、万年赤字の会社では、誰も引き取り手はない。つまり、倒産、破産という道しか残されていなかったのだ。
　妻にはどうやって言い訳しよう？　　会社を辞めるとき、胸を張って自分の技術力がどこまで通用するか試してみたい！　　と、意気揚々だったのが、今でも後悔の種だった。
　破産するなら、個人保証しているわたしは、家や家財を差し押さえられてしまう。

　――どうしよう？　　わたしは逡巡した。一日中考え、次の日も一日中考えた。
「社長。次の作業を振って下さい」
　社員からはわたしの心の中などまるで気づかない風で仕事の割り振りを請うてきた。

　わたしは、ふと、机の上にある「保険会社」からの封書に目が行った。今会社の建物と家財に掛けている地震・火災保険の見直しの案内だった。掛け金を増やせば、より手厚い補償が受けられるとある。
　わたしは、漫然と社内を見渡した。とにかく書類と図面が多かった。それらは紙で出来ている。ディスクはプラスチックだ。そんな可燃物が多い職場なので、火災は要注意だった。それに、ただの紙ではない。設計製図がなされると一枚数十万円の価値になる

のだ。だから、火災保険には目一杯入っていた。

――でも、火災が起こらなければ、漫然と払っているだけの無駄金なんだよなあ。

わたしの心の中に悪魔が棲み着いた。

意図的に火を点け、会社を清算し、その上で保険金を受け取れたら！

言うことないではないか。わたしは心の中で喝采を上げた。まだ捕らぬ狸なのにだ。

わたしは密かに計画を実行に移した。

床下の電源や信号のケーブルを通しているラックに、着火剤とガソリンを染みこませた布きれを敷き詰め、タイマーで着火する様セットした。時間はお昼前の十一時四十五分に発火する様にした。

わたしは心が痛んだ。もし、火傷などの被害者が出たら？　もし、死者が出たら？　現住建造物放火である。死人が出たら、放火殺人になってしまう。まず、死刑は免れまい。わたしの逡巡は、お昼が近づくにつれ、嫌がおうにも増していった。

やはり、やめよう。

しかし、今さらやめるには、職員を退去させ、床下のパネルを剥がして着火装置をとめなければならない。そんな時間も機会もなかった。

着火時間になった。そのとき――玄関のドアが勢いよく開け放たれ、突然男が入って来た。そして、奇声を上げ「社長を出せ！」と叫び、持っていた消火器をぶちまけた。借金をしていた会社の取立て人だった。男と目と目が合い、今月の返済期限を過ぎていることに気がついた。

シュボッと燃え掛かった火は、そのまま鎮火されてしまった。

まもなく、大勢の警官が押し寄せた。了

テッポウ厳禁

テッポウ厳禁

わたしはカド番の大関だった。関脇時代に、横綱がケガで不在の場所で、全勝優勝を飾って、将来を嘱望された上で、鳴り物入りで昇進したのだった。

しかし、実際の両横綱がそろい踏みし、東西大関も場所入りし、その上、上位陣力士の調子も絶好調と言う場所では、いまいち持てる力を発揮することが出来ずに終わることが多かった。

それでも、辛うじて勝ち越しだけはキープし、大関のメンツを汚すようなことだけは、避けてきた。

それも、今は昔である。今場所は膝の故障が響き、場所が始まってすぐ、連続して三日間を休場してしまった。その間の相手には不戦勝をプレゼントする格好になってしまったが、わたしの膝の爆弾には替えられなかった。鍼を打っても、灸を据えても痛みは引かなかった。よって力は入らないし、込められない。膝をかばうことで、肩や腰、反対の足に負担が偏った。

それ以前から、わたしは格下力士には強いものの、格上力士には勝てないという、普通なら窮地に陥る状態になっていた。当たり前である。勝負はあらかじめ決められた順序で取られるのではない。その日の一番の結果をもって、同じ勝ち数・負け数の力士と当たるように組まれるのである。自然と、勝負は厳しくなっていった。

最初の内はまだいい。しかし、取り組みが進むにつれ、お互い、ここは負けられないという立場のもの同士が当たるのである。もっとも、無敗の横綱なら、誰と当たろうが、関係なしに精一杯の取り組みを見せればよかった。しかし、辛うじて勝ちを得ているわたしの様な力士にとってはこのシステムは痛し痒しだった。

格下の相手と取り組みが持たれれば楽勝になることの反面、格上の相手と当たれば、勝ちを得ることは極めて困難になる。そして、このまま千秋楽にまで勝ち越しを持ち越す様な体たらくでは、毎日が必死の戦いになることは火を見るよりも明らかであった。

相手も、同じ勝ち星、つまり、七勝七敗で最終日に掛かるのだ。あと一勝が欲しい。のどから手が出るほどに。勝負は……。わたしの膝は泣いていた。

入門以来の後援者である社長さんからも圧力が掛かっていた。
「藤ノ花くん。今場所こそは優勝してくれよ。また、前みたいに勢いのある一番を取ってくれないかなあ。がははは」
と言って、わたしの背中をぱーんと叩いた。
「いつも応援ありがとうございます。頑張ります」
「今場所はうちのお得意さんも招待しているんだ。懸賞も出すからね。頼むよ。君ぃ」
そんなことを言い、わたしに目一杯のプレッシャーを掛けて、控室から出ていった。確かに懸賞が掛けられたみたいだった。でも、懸賞が多いと、相手の本気度も上がるから、今のわたしに取ってはいい迷惑だ。

親方が心配そうな顔で様子を見に来た。
うちの部屋には、上位力士はわたししかいない。よって、この場所を負け越し、大関から陥落してしまうと、部屋の看板が寂しくなると同時に部屋の収入も減少する。
「おい、藤ノ花。膝の具合はどうだ。今日はやれるか？」
「はい。多分大丈夫です。頑張ります！」
わたしは気合いで返事した。正直、勝てるとは思えなかった。
「ちょっと四股踏んでみろ」
「はい」
わたしは、全体重を片足に掛けた。ズキンと鈍い痛みが神経を伝わり、身体中に響き渡った。「あつっ」かみしめた口元から苦痛の声が漏れた。
「おい、テーピングをまけ」
親方は弟子の一人に命じ、わたしの膝にグルグルとテープを巻き、圧迫を加えた。少し痛みがましになった。
「後は腰でカバーしろ。テッポウしてみろ」
わたしは白木の柱に手のひらをどすんと当て、体重を掛けゆっくりと押し込んだ。膝の具合は少しだけいいように感じた。
「どうだ。テーピングの具合は。もっと巻くか？」
「はい、もう少しきつくお願いします」
弟子はギュウッと力を込めて、わたしの膝にぐるりとテープを巻き、そして端を切った。もう痛覚を通り越し、感覚がなかった。
そして、もう一度テッポウをしてみた。微妙ではあるが、押し込む腰の角度と力のいれ具合で、痛みを感じない点があることに気づいた。
「そうだ。そのままもっとテッポウをしてみろ。その角度を身体に染みこませるんだ。もう一度！」
親方は発破を掛けた。わたしは、気の済むまでドシンドシンとテッポウをした。もう痛みは感じない。これで完璧だ。これで負けたら、それこそ、自分の実力のなさを思い知るしかなかった。
しかし、この腰の角度が少しでも狂うと、激痛が走ることにも気づいた。――どうしよう？　親方に言おうか。ええい、ままよ。

わたしは、もう一度テッポウをし、腰の角度を身体に覚え込ませた。

間もなく、呼び出しがあった。
「藤ノ花関。土俵下に入ってください」
「ああ、わかった」
わたしは、県立体育館の会場に向かった。観覧席下の廊下を歩き、会場の熱気を感じつつ、今日の幸運を祈りながら歩んでいった。

今日までの戦績は七勝七敗。この一番にわたしの相撲人生全てが掛かっていた。今回でもし落ちでもすれば、もう二度と大関に昇進することはないであろう。幕下には落ちることはないかも知れない。格下の相手なら滅多に負けはしなかった。しかし、大関に上がるためには、横綱や大関陣に勝ち、直近場所で三十五勝は挙げなければならなかった。格上の力士に弱いわたしには不可能と言っていい勝負だった。そんなチャンスは二度とは訪れないだろう。
廊下を歩きながら、腰の角度を確かめるべく、わたしは気合いを入れて柱を押した。テッポウである。

その途端、客席を支える鉄骨がガラガラと言う音を立てて崩れ、場内は騒然となった。頭から血を流している人や怪我人も出ている。みんながわたしの方をにらんでいた。何か悪いことでもしたのか？
足元に、鉄骨に貼ってあった「テッポウ厳禁」の文字が見えた。――ああ、やってしまった、と思った。その日の取組は中止となった。了

チタンカーメン

チタン・カーメン

　わたしは大学の材料工学の研究室で働いていた。主に金属と金属が混ざり合った合金と呼ばれる金属材料の成分や性質、結晶構造や強度などを分析するのが専門だった。今までに新素材と呼ばれる、これまで存在しなかった金属材料を発見したりして、論文も多数書き上げていた。

　わたしが研究室でいつもの様に、忙しく試験サンプルを測定していると、同じ大学で考古学の研究をしている男から奇妙なものを持ち込まれた。調べても奇妙なことだらけで、一向に的を射ない考察しか出てこないから、こちらで、専門家の意見を聞きたいと言うことだった。
　彼が言うには、現在、エジプトのとある谷で、遺跡の発掘をするプロジェクトに従事しているらしかった。
「すまないな。大きなものを持ち込んで。ケースはちょっと大きいんだが、中身は小さいんだ」
　と、彼は言い、この部屋に入るのに、ゴロゴロと音を立てて引っ張ってきたジュラルミンのケースをそうっと開けた。中には、さらに、布とビニルシートが何重にも被せられ、厳重に運ばれてきたのだと思わせる、貴重品が入っていた。

「これなんだが……」
　彼が上を覆っている布をはがすと、黄色みの掛かった褐色の金属の塊があった。人の頭部から胸部にかけて、形作ったと思われる姿をしていた。全長六十センチくらいの胸像だった。彼が言うには、発掘したミイラの頭部から胸部に掛けて、この金属のマスクで覆われていたそうだった。
　彼はわたしの目を見て尋ねた。
「これって何で出来ていると思う？」
　見た目、スポーツ用品なんかによく使われる軽量素材のチタン合金の様に見えた。
「ああ、チタンに見えるね。でも、人の姿のマスクなんて、悪趣味だよ。まるでツタンカーメン王の黄金のマスクみたいじゃないか」

わたしがそう言うと、彼は真剣な眼差しになった。
「ふうっ……。地層の深さによる解析から、紀元前一四〇〇年前から一五〇〇年前の出土品だと推定されている。でも、それならチタン合金なんかが使われているはずがない。今までの、この時代の出土品だと、黄金かそれ以外の金属加工品なら青銅くらいがいい所だ」
それ以外の金属素材は、時と共に錆びて朽ち果ててしまい、現在まで残らないのが実情だった。
「そうだよねえ。チタン合金が開発されたのは歴史的にはごく最近のことだからね」
わたしは、指先でこつこつとチタンのマスクの表面をつついた。
マスクの厚みは、どの場所も四ミリ程度。わたしがその縁を持ち、力をかけると、軽く持ち上げることが出来た。五百グラムほどしかなかった。だとしたら、比重は鉄鋼などと比べても極めて小さいことになる。彼の言うチタン合金説が力を得た。

「その、地層法とやらに、疑問は抱かなかったのかい？」
わたしは、眉間に皺を寄せて深刻そうに考え込んでいる彼に尋ねた。
「そうだね。問題点の一つはあると思う。よくあるのが、後代の盗掘者が地下を掘り進み、埋葬物の年代を変えてしまうパターンだ。深い地層ほど、古く鑑定されるのだが、その深さを変えられてしまうと、どうしようもなくなる。この方法の唯一の欠点だ。しかし、我々が、このマスクを発掘したとき、周りの地層に掘り返された痕跡はなかったし、これらの他の埋葬物にも、盗掘された後がなかったんだ。従って、現代の素材がこの王家の墓に持ち込まれたと考えるのは間違いだ」
「なるほどねえ。では、こちらで、少し調べさせていただこう。何かわかればいいのだが」

わたしが、このマスクの由来を科学的に調べることを引き受けると、彼は、肩の荷を下ろした様に口元から、軽く息を吐き出し、ニッコリ笑って、わたしの手を取った。
「もし、紀元前一四〇〇年前の遺跡にチタン合金が使われていたことが証明されたら、古代エジプト史における、一大ページェントだよ。でも、そんなことが可能なのか？　現代でもチタン合金の加工には、技術の粋が注がれているそうじゃないか。一体、古代エジプト人はどうやって、チタン合金でもって、王のマスクを作り上げたのだろう？　いやあ、ワクワクしてきたぞ。では、分析はよろしく頼んだよ」

検証を引き受けたわたしは、実験室にこもり、チタンのマスクを調べ始めた。そして、蛍光Ｘ線分析装置に掛け、その元素の組成を確認した。
分析装置の指し示す値は、「チタン、アルミニウム、バナジウム」からなる合金だった。十数年前から、ゴルフクラブのヘッドや眼鏡のフレーム、そして、軍用に用いられているチタン合金そのものだった。
しかし、微量に含まれていた放射性元素は、この金属が少なくとも百万年前から存在

していることを示していた。わたしは、両手を挙げ、首をひねった。

丹念に表面を調べると、このマスクに加工された痕がないことに気付いた。このマスクの素材は鋳造や鍛造、溶接加工されたものではない。とすると、大きな塊から、研石で磨き出されたものであると推定せざるを得なかった。

これだけの大きさの塊。……少なくとも一メートルの大きさの合金からなるものを、どこかから発見し、工房に運び込み、そして、何年もの歳月を掛けて、職人たちが、これを被せるミイラの大きさに合わせて、せっせと研磨したに違いない。

……本当にそんな大きなチタン合金の塊が山から掘り出されたのだろうか？

わたしは、別の計測シートに目をやった。データによると、合金の塊は均一な組成のものではなく、二つの異なった比重の物質がまだらに分布していた。異なる比重のものが混じり合うなど通常はありえない。重いものは底に沈み、軽いものは表面に浮かぶからだ。

――いや、重力がないとすれば？　そうだ、多分、地球上のものではあるまい。宇宙空間の中で、この塊は形成され、古代の空に舞う隕石となり、それは大勢の人出を掛けて探し出され、それを天からの授かり物として、王のミイラを覆うための素材にするために、人の手で磨いて形成されたのだ。

わたしは、マスクを見てつぶやいた。

「チタン・仮面《カーメン》か……」

正に、古代史のいたずらだった。了

IR

ＩＲ

わたしはお金に困っていた。

妻に内緒で、会社を辞めて立ち上げた介護サービス会社の経営がうまく行っていなかったのだ。

家の中では、サラリーマンの風を装っていた。朝六時に起床して、妻の作るトーストとスクランブルエッグを食べて、コーヒーの香りを楽しみ、七時前に家を出る習慣を続けていた。

地元の駅から通勤電車に乗り、本来の職場である三宮の手前、新開地で降りていた。

駅の階段を上り、坂道を少し上がった所にある雑居ビルの三階がわたしの砦だった。

「お弁当美味しくなかった？」

ある日、妻にそう言われ、わたしはどきっとした。

「そんなことなかったよ。いつもありがとう」

わたしは、洗い物をしている彼女の側に立ち、弁当箱をのぞき込んだ。「あっ！」と思った。元々嫌いだった、ゴボウの煮物が残っていた。

サラリーマンをしていたときは、昼休みに、給湯室の流しの三角コーナーに嫌いなものを全部捨て、軽く水で注いで家に帰っていたのだった。

雑居ビルの暗い照明で、仕切りにしている銀紙の陰に隠れて、ゴボウが何本か見逃されていたのだ。

「お小遣い、足りてるの？」

彼女は優しい声で、わたしの懐事情を尋ねた。

「あ、ああ。足りてる。何の問題もない」

「……そう」

彼女はわたしの、服装や仕草、鞄の底のレシートの類から、何かを悟った様だった。でも、はっきりとは言わなかった。わたしが、足りていないのに、足りていると強弁したためだ。

わたしの会社は、新規ビジネスを営んでいた。

出来るだけ手広く顧客を集め、きめ細やかな介護サービスを展開し、薄利多売で利益を出す目論見だった。人材は自前では持たず、固定費を軽減する手段を取った。人材派遣会社数社と提携を結び、仕事量の多寡に応じて、人員を派遣してもらう契約だった。

最初から、事業は行き詰まった。

介護の必要な人は、今の日本では大勢いた。しかし、それにきめ細やかに対応できる介護人材となると、そうはいなかったし、仕事の山谷が激しいと、簡単に派遣には応じてもらえないのだ。自然と、人員の時給は高く昇って行った。薄利多売のビジネスモデルはこの段階で崩壊していた。

介護の要請に、価格を高く設定しなければならないのだが、そんな会社は世の中に余るほどあるのだ。こんなちんけな会社に仕事を出そうと言う介護所など一つもなかった。

そして、派遣人員に支払うべき給与の額が増えていった。

これは、きめ細やかなサービスを要請する介護施設からもらう代金で賄うことが出来た。しかし、高額な時給である。差額を利益にすべきだったが、それはちっとも得られなかった。

前の会社を辞めたときの退職金を資本金と運転資金に充てていた。わたしがタバコを吸うのにも、必要なお金だ。会社を辞めたことは妻には話していない。だから、この資金がある限りはバレない嘘だった。

そんな折、派遣社員の一人から、A市の郊外に出来たカジノの話を聞いた。

「統合型リゾート施設と言ってですね。色んな娯楽施設があるんですよ。でも、そんなのは目じゃありません」

「ほう？　それって楽しいの？」

「いえ、目玉は中にある合法カジノなんです」

「カジノ？　合法？　大丈夫なのかい？」

「ええ、法律的には、政府のお墨付きのある施設なんです。カード賭博にルーレット。やっぱり、お金を賭けるからこそ、大の大人が楽しめるんですよ。社長もどうです？」

わたしの心は揺らいでいた。統合型リゾート施設ときれい事を言ったところで、所詮は賭博である。お金を賭けて、当たれば掛け金が倍になり、外れればすってんてんになる。わたしは、妻のために、最後の砦として、会社の資本金を置いていた。三百万ほどの、ささやかな隠し金だった。

この会社は間もなくつぶれるだろう。そのとき、家に帰り、正直に妻に真実を告げようと心に決めていた。

そんなある日、仕事上のトラブルが起こった。一人の不心得な介護職員が出先で、お年寄りのお金に手をつけたと先方から知らせがあった。

「真面目そうな人だしね。まだ若いし、将来があるだろうから……」

と、呼び出されたわたしにそんなことを言った。

「弁償すればいいですか？」

「そうだねえ。お年寄りにも家族がいるからねえ。弁償だけじゃ、足りないと思うな」

「示談金か何かですか？」

「そうだねえ。示談金か慰謝料の額については、僕も先方に聞いておくよ」

急に大金が入り用になった。運転資金はカツカツだから、資本金に手をつければ何とか、なるかと思えた。しかし、妻に真実を話すための最後の砦だ。これに手をつけずに何とか、事態を収拾出来ないか。

わたしは資本金を持ち、新しくできた統合型リゾート施設、通称ＩＲのカジノに行ってみた。

受付でＩＲ内部で使用される通貨に両替してもらう。一ＩＲドル＝一〇〇円と大損をしても、精神的なダメージを抑える工夫がしてあった。一万円でも、一〇〇ドルなのだ、わたしは、手にした通貨のチップをぎゅっと握りしめた。

全体を見渡し、ルーレットの台の前に立った。ディーラーがボールを転がし、赤と黒の番号のついたポケットに吸い込まれる。賭けていた色と番号でアタリと外れが決まった。

わたしは、一〇〇ドルだけ黒の一三番に賭けてみた。

ディーラーがルーレット盤を回しボールを投げた。

そして回転数が落ちると、ボールがポケットに吸い込まれる。黒の十三番に落ちた！

掛け金が三十六倍になった！　ディーラーがチップの山をわたしの手元に戻した。

わたしは、賭博で当てたときの快感に酔いしれた。もう、普通の仕事などやってはおれない。

わたしは次の日も、その次の日も、仕事を忘れ、妻のことも忘れ、カジノに通い続けた。二度と当たることはなかったのだが。了

小鳥

小鳥

わたしは脱サラして焼き鳥屋を営んでいた。

開業する前、わたしはサラリーマンをしていた。勤続１５年ほどの中堅職だった。

その大手商社に勤務している頃から、わたしは、いつか自立したいと考える様になった。もし、会社に退職届を出して、自由の身になったら、何をしよう。そんなことを考えながら、長い間、会社のために、あちこち頭を下げて回る仕事を続けていた。頭を下げるのは、二種類の行為からなる。人に物を頼むのと、ミスをして謝り回る場合だ。

その意味では、わたしは、他人の犯した失敗を謝って回る任務の人間だと言えた。

「こんなことをしていて、何になるのだろう？」

わたしは、仕事をしながら始終そんなことを考えていた。

もし、四十代で希望退職の募集があったらどうするだろう？　とか、いきなり、会社のわたしの部署の業績が悪化して、リストラされてしまったらどうなるのだ？　とか、考えた。

ただ、他人に頭を下げるだけの技能しかないわたしに、次の職が見つかるだろうか。

これが、退職届の決め手となった。

そう決めたとき、わたしは、一晩かかって、退職届を、入社祝いでもらった万年筆で書き上げた。「わたくしこと、一身上の都合にて.....」と。

でも、提出はしなかった。

提出した途端、わたしは失職し、たちまち路頭に迷うことになるのだ。取り敢えず、書き上げた退職届は、机の引き出しの一番下に隠しておき、次の仕事を探すまで出さないことにしたのだ。

わたしは、自分自身、客商売に向いていると思っていた。実際にそんなことをしたのは、過去、学生時代に居酒屋のアルバイト店員をしたことがあるくらいで、確固たる自信があった訳ではなかった。でも、焼き鳥屋を始めると思いつくと、たちまち心が軽やかになり、退職届を書いていたときの陰鬱な気分はどこへやら飛んで行ったのだ。

そして、脳内で密かに新しい商売の計画を立て、日曜になるごとに散歩を兼ねて、繁華街のビルなどを見て回った。どこが人の流れが多いだろうか。どんな店が入りやすいだろうかとか、考えながら歩いた。

やがて、頭の中で自分の店が出来上がると、妻の了承を得てから（希望退職が募られている。今の会社はやばいんだと嘘をついた）　念願の退職届を出し、自由の身となった。
退職金で、店の準備をし、開業すると最初のうち、客が寄りつかず、経営がきつかったが、そのうち、常連さんが出来、そうなると、口コミで客を増やしてくれたのか、次第に軌道に乗っていった。

ある日、その常連さんに、賭け麻雀に誘われた。学生時代から徹夜麻雀をよくしていて、腕前に自信はあったが、相手がお客さんだと言う意識が働いたのか、強く攻めきることが出来ず、かなりの回数を負けてしまった。金額は大したことのないものだったが、お客さんは奇妙な約束を持ち出してきた。何と、鶏肉ではなく野鳥が食べたいと言う。何でも、知り合いの食通の男から、野鳥こそが究極の鳥料理だとすり込まれたらしかった。
「賭け麻雀の支払いはいいから、是非とも頼むよ」
と、野鳥を食べさせる約束をさせられてしまった。

本人は、食通気取りだが、実際には、鶏肉だか、魚肉だか、酔っ払うと区別がつかないくらいのレベルだった。もし、わたしが野鳥の味を知っているなら、普通の鶏肉を、タレでそれ風にして、食べさせることで満足させられただろう。しかし、このときのわたしに、そこまでの知見はなかった。

あのとき、お客さんは麻雀をしながらも、缶ビールやチューハイなどを飲んでいたから、もしかしたら、酔った上での話で、野鳥を食わせろなどと言うことも、忘れ去っているかも知れないと思った。しかし、店に来る度、お客さんはわたしの顔を見て、にやりと笑い、手で鳥のポーズを作り、野鳥料理の催促をした。

わたしは、覚悟を決め、裏山に道具を持って行った。
餌となる果物と網である。いわゆるカスミ網と呼ばれるもので、野鳥がよく引っかかるものだった。しかし、これは狩猟法違反であり、見つかったら捕まる可能性もあり、わたしは、人目につかない様、用心して罠をかけた。
野鳥は根が臆病で、人や動物の動きに敏感である。数メートルまでは近づけても、こちらの姿を認めると、即座にさっと飛び去った。
「飛び去るのも、野鳥ゆえなのかなあ」
わたしは、野鳥の視覚に入らない様、注意しながら、一旦山から撤収した。

夕方、現場を見に行くと、網にはスズメが二羽、メジロが一羽かかっていた。

どちらも、とても可愛い小鳥だった。急いで店の調理場に戻り、わたしは、涙を飲んで、小鳥をさばいた。羽をむしるとき、小鳥の遺骸を弄ぶ様な気がして、チリチリとわたしの胸は痛んだ。

準備が出来ると、小鳥の遺骸を炭火にかけ、じりじりと焼いた。焼け具合を確かめるため、わたしは焼いている小鳥の臭いを嗅いだ。

そのとき、肉がものすごく生臭いことに気がついた。養鶏ではなく、野生独自の臭みが肉にはあった。「駄目だろうか？　駄目だろう」わたしは、自問自答した。これでは、客に食べさせることは出来ない。

わたしは、秘伝のタレと称して店に置いている、タレのツボに肉をつけ、そして、再び火に掛けた。もっとも、秘伝のタレと言うほど、長く店を構えている訳でもなかった。始めて三ヶ月の店でしかない。秘伝というのははったりだった。

お客さんは「うまいじゃないか」と、舌なめずりして、豪快に小鳥の肉を食べた。

わたしが濃いタレにつけ、三度焼いたせいで、もはや、何の肉かわからなかったのだろう。わたしは、内心、小鳥の命に手を合わせながら、残りの肉を男性に提供した。

「こんなにうまいなら、定番メニューに載せればいいじゃないか？　ええ？」

そんなことを言った。たった一回の狩猟でも、大変な想いをして捕獲してきたのだ。冷や冷やしている私の心の内など、まるで理解していなかった。

「そうですねえ」

と、わたしは考える振りをして次回から、ヒヨコを仕入れて焼き鳥にした。了

接待

接待

わたしは農機具メーカーの営業所員だった。

大口の顧客は農協の資材部だったが、それ以上に大事なのはやっぱり、実際に農機具を駆使して作物を育てている自営農家の方々だった。

昔は農協の指導にものすごい影響力がある時代もあったが、昨今、個別の農家が強くなり、彼らの信用を得なければ、トラクター一台すら売れなくなっている。

年が変わるごとに、新機種が発売され、それを個別の農家に売り込んでいく。高性能の農機具で、より多くの収穫を得てもらうのが、互いにウイン・ウインとなる条件だった。

営業にかかる機会は日々の中にあった。

いかに最新の機種、高性能の機種とは言え、やはり、機械である。泥が詰まったり、土で擦れることにより、部品が摩耗したり、メンテナンスが必要になるのだ。

日々のメンテナンス情報を集めると共に、シーズンオフには接待というものが必要となった。

普段、お客さんは田畑を耕し、あるいは山に入って植物を採集するという生活サイクルを送っている。何がいいだろうということで、営業所員の中で会議を持った。

「やはり、飲食でもてなすべきです」

「ゴルフはどうでしょう。もちろん、お客様に楽しんで勝ってもらうのが一番です」

色んなアイディアが出ては、上司に潰された。接待となると、それなりに費用がかかる。費用に見合った効果に直結していなければ、会社の営業上層部のＯＫが取りにくいと言うのが、上司の言い分だった。逆に言うと、多少費用がかかっても、製品の受注が見込めるなら、それもありと言うことだった。

「海釣りなんかどうでしょう？」

と若手の営業マンが考えついた。

農家の方々は普段、海になど行くことはない。山に囲まれた広いけれど、ある意味狭い世界に閉じこもっていらっしゃるわけで、そうした中、陸地と言えば小さな小島しか見えないくらいの海の真ん中にご招待して、思う存分、海釣りを楽しんでいただく。そうしたら、それが一番の娯楽になるのではないか？　彼はそう言った。

「それに、六十センチの鯛を釣り上げたときの快感と言ったらありません。そりゃあ、ものすごい、いい気分になります。それに、気分だけではないです。お土産として、高価な鯛を何匹もクーラーボックスに入れて持ち帰ることが出来るんです。御主人の気分も大事ですが、家を守っていらっしゃる奥様方にもいい気分を味わっていただくことが出来るのです。これに勝る接待はないと思います」

「海釣りねえ」

営業所員の間から二、三、疑問の声も上がるには上がった。

海釣り経験者の意見では、釣れるときは面白いほど釣れるが、釣れないときには、日がな一日中釣り糸を垂れていても何にも、……そう、それこそ、ゴミすらかからないときすらあるというのだ。

もっともな意見だった。

「釣れないときねえ……」

先ほど賛成に回った所員からため息が出た。

これは、ゴルフにしたって同じことが言える。いや、ありとあらゆるスポーツに関して言え、あるいは、パチンコ・スロット・競馬に競輪、競艇と言った賭け事。あらゆる娯楽に関しても言えた。当たりがないときのつらさだ。

興じている本人のつらさもさることながら、そこに誘い出した、営業所員のつらさも一入だ。接待に連れ出した人の横で傍観し、「出ませんねえ」と言いながらずうっと一日中つきあうのだ。こんなに居づらいことってないだろう。

ひとりの若い所員が発言した。

「仮に釣にお誘いするとして、魚が入れ食いになるトリックを考えつきました」

「おおぉ！」

周りからどよめきの声が上がった。

それはそうである。あらゆるスポーツで、勝ちがないときの弱点を、一気に挽回するほどのアイディアだった。それが可能ならばである。

「しばらくの間、餌を与えないというのではないだろうな？」

一人が、発言した。「そうしておけば、接待の日に、魚は餌に食らいつく。……しかし、だ。それでも、大漁の客と、坊主の客にわかれてしまう。解決策にはならない」

若手所員は反駁した。

「あらかじめダイバーが海に潜り、超音波発信器で魚を酔わせ、動きが鈍くなった所を捕まえて、そのまま、釣り客の釣り竿の先の針に引っ掛けると言うものです」

全く奇想天外なアイディアだった。

しかも、ダイバーは釣り客に怪しまれない様、引っ掛ける寸前に、糸をぐいぐいと二回引き、「当たり」が出たと誤信させるのが味噌だった。

もっとも、ベテランの釣り師でもない限り、いきなり大物が引っかかってもばれる恐れはなさそうだった。

トリックを実行するため、訓練を積んだダイバーを探すのがこの作戦の難点だった。

ダイバーは交代制として、生け簀の底で過ごしてもらう。空気ボンベの残量が、作戦時間の制限となった。空気がなくなれば、水中から避難してもらい、仲間と交代する。そして、超音波発信器で魚を集めて酔わせ、お客さんの垂れる糸に誘導してもらう。針にかけたら完了だった。

世の中は狭いもので、こうした接待釣りに従事したことがあるというダイバーを数人見つけることが出来た。潜水時間に制限があるので、出来るだけ大勢で、交代を頻繁にした方が、安全面で有効と言えた。

実際に、海の生け簀で、実演してもらい、うまく魚を針に刺せたダイバーを合格として採用した。

後は、接待当日まで、密かに準備し、大きな鯛を養殖している生け簀と、契約を結んだ。

接待当日、わたしたちは、山間部で農業を営んでいるお客さん十名を、海辺の生け簀へと招待した。皆、海釣りなど初めてのことだと口にした。

海釣り大会を実施し、計画通り、入れ食い状態になった。そして大きな鯛が次々と釣れることに、お客さんたちの心証が一気によくなった。

この接待のお陰で、農機具の契約が取れる様になり、ダイバーを雇った経費を上回る利益を出すことが出来た。了

アジの自販機

アジの自販機

　わたしは工場で機械工として働いていた。始業から終業時刻まで、ただひたすら自動車の部品を金属の塊から工具を使って削り出している。もう、三年ほどの間、同じ作業をしていた。正社員と同じ仕事だが、給与体系の異なる派遣社員だった。

　工場には夜勤があり、夜勤明けは、昼間一日が休みとなった。
　わたしは、趣味であるバイクでツーリングに出かけることが多かった。薄給ではあったものの、食事は会社の弁当と寮の朝夕ご飯を食べていて、生活費はほとんどかからなかったので、給与の大部分をバイクにかけていた。アメリカ製の大型バイクだった。
　三百万ほどしたであろうか。でも、買ってから五年以上になり、十分元は取れたと思っている。

　ある、夏の暑い晩、わたしは、ふらりと国道を北上し、早朝、日本海に面した漁港の町にたどり着いた。一晩中走り続けていたわたしは、空腹を覚え、漁師たちが使う食堂に入った。
「お客さん、始めてですか？」
　食堂のおばちゃんが尋ねた。
「ええ、バイクでツーリングをしていて、たまたまこの町に立ち寄ったんです」
「まあ、バイクで？　神戸から？　遠かったでしょう？」
　おばちゃんは、驚いた風で、話の続きを聞きたがった。わたしは、バイクとのなれそめの話や、交通取締、ガソリンの値段などの話をすると、おばちゃんは喜んだ。多分、よその町のことをあまり知らないと言った感じだった。
「この漁港はね。今の季節ならシマアジが一番よ。お刺身にする？」
「そんなに美味しいのですか？」
「そりゃもう、関西へ出荷したら高級魚よ」
「なるほど。ではそれをひとつ下さい。ご飯は多めで」
「はい。……アジ定食一丁！」
　と、大声で叫んで調理場に注文を伝え、奥に下がって行った。

テーブルにつき、回りを見ていると、大勢の客で賑わっていた。でも、この時間帯に入ってくるのは地元の漁師然とした男ばかりで、よそ者は多分、わたし一人みたいだった。

魚を捕り、船から水揚げすると、もう、今日の仕事は終わりみたいな感じだった。めいめいがビールを開け、コップに注ぎ、旨そうに口の周りに白いひげを作りながら、飲み干していた。

――明日の昼勤がなかったらなあ。とわたしは思った。魚も旨そうだし、休みが取れるなら、一泊して獲れ立ての魚をアテに、ビールを飲みたいものだ。しかし、今日はお昼いっぱいをかけて、神戸に戻り、明日の勤務に備えなければならなかった。

「お客さん。飲み物は？」

おばちゃんが料理を持って来て尋ねた。

「そうだなあ。ノンアルコールのビールはありますか？」

「はいよ。ノンアル一丁！」

おばちゃんは調理場に声を掛け、ノンアルコールのビールを持って来てくれた。アルコールは入っていないが、そこそこ、ビールに近い味がして、獲れ立てのシマアジの刺身の味を引き立てた。本当に美味しかった。歯ごたえがあり、味に深みがあると言うのだろうか。噛めば噛むほど、厚みのある刺身の旨みが舌の上にとろけた。

「これ、美味しいですねえ」

わたしは、素直に感想を漏らした。

「でしょう！　お客さん。何せ、獲れ立てだし、この時期のシマアジはもう一番よ」

そして、わたしは、シマアジの刺身をおかずにして、大盛りのご飯を平らげた。

「ふうっ……ごちそうさまでした」

わたしは、空になった器を前に手を合わせた。

「美味しかったでしょう？」

「ええ。とっても」

「また来てくださいね」

おばちゃんは、名残惜しそうに言った。

「また来ます。気が向いたらですけど」

そうなのだ。ツーリングは、気の向くまま、足のゆくままの旅なのだ。絶対にいついつ来るとか、予告は出来ないものだった。それでなくても、週末が休みのサラリーマンではなかった。昼勤二日に夜勤が一日と休日を繰り返す、派遣の部品加工者に過ぎなかった。今回みたいに初夏の週末に朝一番で日本海の漁港に来るなんて、幸運は、もう、九十九パーセントないと言っても過言ではないだろう。

でも、「また来ます」とわたしは言い、レジで食事代を支払い、食堂を後にした。

表に止めていたバイクにまたがり、キーを差し込み、スタートボタンを押すと、ブルルンとエンジンがかかった。気の向くままにどこへでも行けるのが一人旅の醍醐味ではあるが、来た道を正確にたどらないと、元の町には帰れなかった。神戸近辺の道は走り尽くしていたものの、兵庫県北部の国道は滅多に来たことがなく、もう一度同じ場所に

行くのは、もしかしたら、出来ない約束をしてしまったのかも知れなかった。

ツーリングは、ある意味、肉体労働だった。身体中の筋肉を使い、大型バイクを操り、曲がりくねった国道や県道を切り返しながら走るのだ。でも、精神的には、よい意味でストレスの発散になっていた。こんな趣味のひとつも持たなくては、工場での単調な勤務などいつか、嫌になると思っていた。

それから何度が、食堂にはたどり着いたものの、開店時間はとっくに過ぎていておばちゃんに会うことは出来ないと言ったことが続いた。わたしは店の表にある掲示板にチョークの文字で来たことだけ書いて伝えた。

その年の五月、またも、時間外に食堂にたどり着くと、今度は店の外に自動販売機みたいなものが置いてあった。

今時のジュースの自販機のような洒落たデザインのものではなく、昔の高速道路のパーキングエリアにあったみたいな、お金を入れて、蓋を開けて中身を取り出すと言う感じのタイプだった。

見ると、アジや〆サバ、タイやヒラメなどの刺身が入っていて、温度は冷蔵五度になっていた。

わたしは、「ああ、なるほど。待ってくれていたんだ」と思い、小銭入れを探して、五百円を入れ、シマアジの刺身を取り出した。パックの醤油とワサビもついていた。

あの日の早朝、漁師達に混じって食堂で食べたときの感動が、かすかに湧き上がってきた。一旅行者のためにこんなものを設置してくれたことに感謝の念を抱いた。

わたしは、また、店の横の黒板に備え付けのチョークで書き込んだ。

「また神戸から来ました。おばちゃん、ありがとうございました」　了

NG ワード辞書

ＮＧワード辞書

　冬の寒い朝だった。
　編集長は分厚い企画書を眺めながら、紙コップのコーヒーを一口飲んでわたしを呼びつけた。
「今度、新たに辞書の編纂をやろうと思っているんだ。何、大したものじゃない。極小規模の冊子みたいなものだ。それで、君に担当を任せようと思ってね」
　編集長は気軽にボールを投げるかのような口調で言った。
　辞書の編纂は、大手出版社でも、専門の部署を持ち、主幹となる学者の先生に監修を依頼して、何十年もかけて編まれるものである。現に書店に並んでいる国語辞典は数十年の歴史を持っているものだった。
「あの？　　どのような辞書でしょうか？」
「辞書は通常、日本語のあらゆる語彙を網羅して、その定義をまとめたものだ」
「そうですね」
　それに……現在では、その編纂努力に反比例するかのように、紙の辞書の売り上げは上がらず、使用目的は、もっぱら、パソコンのワープロソフトやスマホの変換機能に転用されたものが主流となっていた。今さら、我が社が本格的に参入しても、採用してもらえるかどうかすら怪しい代物と言えた。
「現代日本では、……日本語は使っていい言葉と、使ってはならない言葉とで成り立っていると言える」
「ＮＧワードですか？」
「そう。それだよ。……もし、ワープロやスマホで使おうとしたときに、自動的にＮＧワードを検出し、事前にメッセージをポップアップで出せるようになれば、ことのほか便利ではないかね？」
「なるほど」
　これは、あらゆる言語について言えた。人種差別や民族差別、障害者差別を意図した語彙はことごとく「言葉狩り」に遭い、出版が差し止められる事態を招きかねない。そんな意味でわたしは「なるほど」と相づちを打ったのだ。編集長は続けた。
「例えば、わたしの好きだったマンガの『ドカベン』、『釣りキチ三平』なんかは、差別用語だと言われ、現在ではアニメ化はおろか、再放送や増刷にも影響が出ている」
「ドカは『土方』を意味し、土木作業員の蔑称であり、キチは、『キチガイ』を意味し、精神障害者の蔑称になっているからですね？」

「その通りだ。そして、往年の名作番組の『ウルトラセブン、１２話』、『超人・バロムワン』も、再放送が御法度になっているのは知っているね？」
「何ででしたっけ？」
「不勉強はいけないよ。ウルトラセブンは被爆者を揶揄した表現から放送禁止になり、バロムワンは悪玉の首領のドルゲがドイツ人少年のいじめ問題につながるからと言う理由で放送されなくなったんだ」
「しれっと、放送してしまえば、それで済みそうな気もしますね」
「そうはいかない。例え冗談だったと言い張っても、そうした表現は暇を持てあましているネット住民の監査を受けるご時世なんだ。もう、どこであれ、誰であれ、一旦表現されてしまえば、言い逃れは効かないのだよ」
「なるほど」
　わたしは、メモ帳を開き、職業差別、障害者差別、人種差別を助長する語彙と、書き取った。

　編集長の言わんとするところは何となくわかった。使える言葉が大手出版社の辞書だとすれば、使えない、使ってはならない言葉を網羅したものを新たに発行しようとしていたのだ。それは、そんなに大規模な編纂作業にはならないだろうと、このときの両者は思っていた。そして、ページ数は一〇〇を上回ることはないだろうと高を括っていた。

　責任監修者として、専門の言語学者を立てなくていいのか。それだけが心に引っかかっていた。もし、出版した後で、「何だこれは？」とか、「誰が監修したのか？」とか、言われるのは目に見えていた。例え、放送局や出版社の担当者のお役に立ったとしても、そんなのは、社会の中で極一部のことであり、辞書ユーザーの大半は、自分では発信したりはしない、傍観者だと思ったのだ。
　ネットでの発言は、とみに過激化、深刻化の一途をたどり、ものによっては、悪口雑言を浴びせられ、傷つき、自ら命を絶つと言う痛ましい事態も招いていた。
　もし、事前に、誰か智慧のあるものからアドバイスを受けていれば、そこまで炎上はしなかっただろうと思われるケースもままあった。
　わたしは、そんな万人監視員時代に添えるように、なるべく多くの言葉を検討項目に入れ込んでいったのだった。
　語彙の採集には、ネットの掲示板やＳＮＳのコメント欄からも多く取り入れたものとなった。もっぱら、スマホの発言での、ＮＧワードを投稿する際の助言機能を持たせたものだったからだ。正規の書籍では、専門の校閲者がいて、使えない語彙を著者が意図せずに使用したとすれば、出版前にインフォームし、言葉の変更や別の表現になるよう勧告することが出来たので、あんまり、この辞書の恩恵にあずかることはないと判断したためだ。

調べて行くうち、ものすごい数の語彙が「不適当」な表現になっていることに気づかされる羽目となった。「こんなことを書き込めば、読者の反発を受ける」や「こんな言葉を投げかけられれば、言われた方は、心を病んでしまうだろう」とか、優しい人の視点で語彙を採用していったのだ。

そして、現代社会では、「言葉狩り」をする人による、障害者差別、人種差別を問題視する風潮が最近とみに増加しつつあった。

ネットの住民から有志を募ると、あっという間に、わたしのやろうとしていたＮＧワード辞書が出来上がりの格好を見せてきた。

最初、そんなにないだろうと、思っていた「不適切語彙」も、実際、ネットの監視によると、結構な分量になるらしく、その数五万語にも上った。小学生用の国語辞典を軽く上回る語彙数だ。そのひとつひとつにコメントがなされていた。「こうこう、こういう理由で差別につながる」などと言ったバックデータだった。

「おいおい。こんなにあったのか？　こんなのまで入れ込んでいったら、もう、日本語が国語として使用出来なくなるじゃないか？」

編集長は文句を付けた。しかし、どの語彙にもそれなりの、ＮＧワードとなる理由が付されていた。編集長は、原案となったわたしの原稿の束を見つめ、考え込んだ。そして、この企画を却下する判断をした。使えない言葉は、使えないことに意味があるのであり、大っぴらに出版すべきではないと言うのが、取って付けた理由だった。了

トンビにサンドイッチを攫われる

トンビにサンドイッチを攫われる

和高麻理は、女子大の一年生だった。前期日程を終え、山ほどある課題やレポートを出し、そして、試験月間を勉強に次ぐ勉強で乗り越えつつあった。ちょっとでも気を抜いて、友人とチャットや電話でのおしゃべりに興じてしまうと、簡単に数時間が経過してしまう。本当に時間がいくらあっても足りないくらいだった。やりたいことは山ほどあったし、やるべきことも山ほどあった。一日四十八時間くらいがちょうどいいとさえ思っていた。もっとも、本当にそうなったら、それはそれで体力が持ちそうにない。神様は一日をうまく二十四時間に分配して下さっていたのだ。

麻理は、馬にニンジンではないが、自身に、飴と鞭を用意していた。

そうでもしなければ、苦手科目の勉強に一日十時間もかけることは容易ではない。

飴は、いつも女子大に通う道すがらにある、高いパン屋のサンドイッチだった。一個九百円もし、普段のお小遣い状況では、毎日はおろか、月に一個も食べられない高級な食事だった。

いつかは……。

麻理は、勇気を出してそれを一個だけ買い、試験の成績発表の後で単位を獲得したのを噛みしめながら、海岸沿いの公園で、ひとりで食べることを想像しながら、普段の勉強を乗り越えてきた。

生ハムとフレッシュレタスのハーモニー。小エビのサンド。タマゴと手作りマヨネーズのオーケストラ。そう呼んでも過言ではないほどのクオリティがあった。逆にそれだけの至高の喜びを九百円で味わえると言うことは、いかにコストパフォーマンスに優れているか。誰に訊かなくても、リーズナブルかつ贅沢なひとときであった。

七月二十八日。本館掲示板前にたくさんの学生がたむろしていた。

試験の結果発表だった。正直、大学一年の前期で、受験時代より、いや、倍以上の勉強をさせられた想いだった。これで落ちていたら、もう、絶望なんて一言では言い表せない。本当の絶望があるとすれば、これが正にそのものだった。

ほとんどの教科は、努力の甲斐あって、「優」か「良」がつけられていた。「可」も合格の部類になるが、これはあまり取らない方がよいと言われている。就職試験のときに、マイナス評価を受けると噂されていた。

そして、試験で落ちた学生には、レポートを出すことで単位を受けることが出来る、一種の救済措置もあった。もう、卒業するのに必修単位が足りない。「可」でもなんでもいい。とにかく単位が欲しい。そんな学生はごまんといた。

そして、担当教官の部屋の扉をノックする。

教官は、にやりと笑い、「君もかい？」と声をかけてくれる。

一々説明しなくても、この時期に扉をノックする学生は九十九パーセント、その手の学生だった。もっとも、一年生であれば、無理してそんな真似をしなくても、二年、三年でもう一度か二度、チャレンジするチャンスを与えられている。

ただ……上級生と呼ばれる部類になり、一年生が大半を占める教室で、彼女たちに紛れ込み、講義を受けると言う、ある種屈辱的な仕打ちにも耐えなければならなかった。

そう考えたとき、この試験結果発表の機会にぜひ単位を受けたい。

同じ事を皆考えるものであった。

「残念だったねえ。……あと十五点。たった十五点で合格だったんだけどねえ」

教官は、意地悪そうでいて、すまなそうな顔つきで、成績簿を繰ってそう言った。麻理は頭を下げた。

「どうあっても、単位が必要なんです。来年や再来年に回したのでは、そのときに必要な講義が受けられなくなる可能性があるんです！」

と言う事情があった。出来れば四年生で卒論に取り掛かる前に全ての必修単位を揃えておきたいのは、学生皆の希望の光だった。

「そうかい？　では、レポートを出してもらおう。決まりなんでね」

「はい。それはもう……一生懸命書きます！」

教官は何冊かの参考書を提示し、それらの要旨を、レポート用紙二十枚にまとめるよう指示を出した。麻理は、参考書の題名を記されたコピー用紙を受け取った。多分、他にも同じような学生がいるはずだった。彼女たちと共同戦線を張り、一緒にレポートを書けば、効率がいいだろうと考えた。

そして、仲間はすぐに見つかった。大学の図書館で同じ本を探している学生と出くわしたからだった。

「あら？　あなたも」

同じ一年生や、二年生の学生もいた。彼女たちと友達になり、一緒にレポートを作成することになった。同じ本を一緒に読んだのでは効率が悪い。そこで、各自一冊ずつ読みこなし、要旨だけまとめて、仲間内で融通することになった。

麻理は一冊の歴史書を担当した。

仲間内での責任が生じ、それは少し負担に感じたが、皆でやること。手抜きは出来ない。他の人の迷惑になることだけは避けて、一生懸命読み込んだ。

幸い、レポートはすぐに出来た。受験生時代より勉強していたから、本を一冊読み込んで要旨をまとめるのに、それほどの苦痛は感じなかったのだ。それは皆が同じような感じであった。それぞれがまとめた要旨をまとめて、一通のレポートにする。日本語で

の、「ですます調」や「である調」という違いがあり、まとめる際に文体を統一する必要があったが、これ以上の文句は言えなかった。もしも、ひとりでやるとなると、図書館で一週間こもり、五・六冊の参考書を読み込まなければならなかったのだ。それを避けられただけでも、仲間を見つけた甲斐があったと言うものだ。

課題を出されて五日後に、麻理は教官にレポートを提出した。

「短い期間なのに、よくまとめてあるねえ」

と、嫌味とも取れる評価をいただいた。が、それはそれで終わってしまった。その代償としての「可」で単位をもらうことが出来たのだ。

麻理は、自分自身に課していた「ご褒美」を買うことにした。

通学途中のパン屋にあった高いサンドイッチだった。もう、考えるだけでも、よだれが出そうなほど、頭の中で、味と調理具合が膨らみ、期待感は満々であった。

そして、自分との約束どおり、高級サンドイッチを買い、ひとり、海べりの公園で食べようとした。そのとき、上空から一羽のトンビが舞い降りてきた。バサバサバサと羽音が頭の上で鳴り響いた。「きゃあ、助けて！」と、悲鳴を上げた。気づくと手にしていたサンドイッチはトンビに攫われていた。ああ、と麻理の目に涙が浮かんだ。きっとテスト明けの学生をカモにしているのだと気づいた。了

ウグイス

ウグイス

江戸時代末期の安政の頃。この村の庄屋は、村民による入れ札で決められていた。昔からの慣わしだった。庄屋はそれ自体、大きな利権を生んでいた。税金である穀物の農家からの取り立てと代官所への納入を一手に引き受けていたのだ。

出来高、出来映え、ランク付けに至るまで、あらゆる所に、庄屋の権限が及んでいた。あるいは、不心得なことをしようと思えば、何だって出来る。それほどの権限があるにもかかわらず、実行に移すものはいなかった。そんなことをすれば、たちまち悪い噂が立ち、次の入れ札で落選させられるからだ。

そして、生きているうちに、代官からの感状を与えられるという名誉も得ることが出来た。

この一事を取っても、農業一筋に生きてきた者に取り、憧れの仕事と言えた。

入れ札には、細かい決まりがあった。原則は村民のひとりにつき一票だ。ただし、実際には小作人などはひとりとは見なされず、地主階級でも、その持ちうる一票には格差があった。大体、所有する田畑の一町歩につき一票とされていることが多かった。

もちろん、それらの中には隣村まで、自分の土地以外の土を踏まずに移動出来るほどの大地主も中にはいた。そんな場合は総面積で票が割り振られた。それが一町歩につき一票の原則だった。

だから、平たくいえば、富裕層農家による、有力村民の互選で庄屋が決まる。そう言えばわかりやすいかも知れない。

もし所有する土地が細長く、曲がっていて算定が困難な場合には「ここととここは、二軒で一票」など、必ずしも公平でないルールが作用した。そのため、立候補するに当たっては、自分の地域がどこに相当するのか、有効な得票はいくらか、そして、肝心である民衆からの支持が得られるか。色んな検討項目があった。もっとも、立候補出来るほどの家は、もう、十分に周りの民衆と比較しても裕福であり、それだけ、入れ札にかまけて、農作業に手を抜くほどの余裕があったのは事実だ。

そして、一人で五票分も六票分も持っている家もあった。入れ札で優位に立つためには、こうした家々を重点的に集票しなければならなかった。

入れ札において、当時、贈り物として、小鳥のウグイスが珍重されていた。よい声で鳴く様、調教し、見栄えもよい鳥に価値があった。

ただし、ウグイスには、価格相場があり、安いのは一羽十五文からあるのだが、そんなものはきれいな声で鳴くことはないし、誰も喜ばなかった。人々を喜ばせるには、最低でも、一五〇〇文は出さなければならなかった。きれいなスタイルと、美しい鳴き声。

しかし、目的は集票である。出来るだけ、少ない出費で、票を集めなくては、本末転倒であることはいうまでもない。しかも、立候補者は自分だけではない。前任者がもう一度やりたいと言うこともあったし、新たに殖産に成功した者が、名誉を得たいと言う理由で立候補することもあった。

正直な話、相手の財力はどのくらいか？

仮に、入れ札のノウハウを知り尽くしているとして、これが、全てを制するファクターだと言えた。お互い、そんなことは内緒である。もっとも、入れ札の票を持っている民衆も、外見と主張で人を判断するしかない一面もあった。でも、ろくでもない奴が庄屋になると、後々、自分たちが苦労することになる。

収税や、農業指導などを行なうのだ。細かく、穀物の取れ高を監視され、今年の税率はいくらにしようと、庄屋が決めるのだ。領主の機嫌を損なわない程度に、税負担は軽い方がいいに決まっている。無能な輩がその任に当たると、余計な苦労を背負わされるのは目に見えていた。よって、入れ札に立候補しても、当選するのは、経理に明るく、しかも人望がある人間に限られていた。

そんなに変な人間が当選することが普通はなかった。

入れ札の開票は代官所の役人の立ち会いの元で行われる。公職であるから当然である。

その時点で、一切の作業は代官の責に帰すことになる。誰も異論は唱えられないし、唱えられるようなことをすれば、あるいは処罰されることもあった。

例のウグイスでは、御法度で定められた一羽一五〇〇文を上回る高級品を贈ったなどという場合。これは、明るみになった時点で欠格と見なされてしまう。

とはいえ、ウグイスのことである。同じ一五〇〇文でも、美しい声の小鳥もいれば、多少、見劣りするものもあったのだ。

代官所の役人は、嫌疑を抱けば、職権でもって、ウグイスを贈られた村民の自宅を捜索し、果たして、御法度に定められた金額以内のものであるかどうかを、事細かに詮議した。

三〇〇〇文や四五〇〇文のウグイスでも、業者が情報を漏らさなければ、不正のありなしを見極めることは困難だろうと、素人ならば思うに相違ない。

しかし、ウグイスを愛でるのは大名家もそうであるし、武士の一端を担う代官所の上・下流武士もそうであった。皆それぞれに、高い見識を持ち、「このウグイスならばいかほどか」を正確に見極めていた。業者からの領収書に惑わされることなく、捜査は厳密なものだった。

山田屋宗右衛門さんが立候補したときは、豪勢なものだった。

一〇〇〇文を上回るウグイスを大量に贈り、村民の歓心を一挙に集め、そして、次席に倍以上の大差をつけて当選した。

もちろん、代官所の役人も彼の行動に目を光らせていたから、入れ札の会場での吟味もひとかたならぬ厳しいものとなった。代官は、詮議した。実際にウグイスを鳴かせ、その音色を聞き分け、そして、自分で見積価格を算定した。結果、八割のウグイスで、御法度を二倍以上も上回ると結論づけ、この入れ札の結果を没収した。

宗右衛門さんは泣き叫んで抗議したものだ。

「お代官さま。わたしは自分の山でウグイスを飼い慣らし、調教してきれいな声を出させたのです。業者からの買い入れではありません。どうぞ、その点を加味して下さい！」

「申し開き、もっともである。自分で調教したのであれば、御法度には定めがない。しかし、これ以後、豪農の主《あるじ》が、ウグイスの調教にかまけるのは、けして喜ばしい事とは言えぬ。しかるに、その方、一日の三分の二をウグイスの世話に当てていたであろう。農家の本分を違えておるにつき、本、入れ札は没収し、当選者は次席の茅ノ輪屋亥ノ吉とする。これにて閉廷！」

代官が裁定を下し、入れ札の詮議は終了した。ウグイス。されどウグイスと、宗右衛門さんは肩を落とした。了

ハブ茶とハブ茶とハーブティー

ハブ茶とハブ茶とハーブティー

　久々に街に出かけようとして準備していたら、祖母から頼まれごとをされてしまった。
「ハブ茶を買ってきてくれないかしら？」
「ハブ茶？」
「センター街の一本南側の筋にお茶専門店があるのよ。そこで聞いたらわかるから。お金を渡しておくね」
　祖母はそう言い、わたしに、ティッシュペーパーでくるんだ紙幣を差し出した。わたしは、面倒くさいなと思いつつも、用事を引き受けて、祖母が出したお金をシャツの胸ポケットにしまった。友人と会う予定は午後六時からだった。それまで、一時間ほど街中をぶらぶらして時間をつぶす必要があった。「ついでにポイントカードも……」
　バスで西神中央まで出て、そこから、市営地下鉄に乗った。三宮までは約三十分の道のりだった。土曜日の夕方ともあり、街中は大勢の人でごった返していた。急いでも急がなくても、人の流れ以上の速度では移動出来ない。お祭りのような感じであった。

　センター街からひとつ南側と言われていた。
　わたしは、お茶の専門店を探しながら西に向かって歩いた。と、そこに、それらしい店舗があった。
　中を覗いて見ると、日本茶がメインで、奥側にそれ以外の色んな茶葉を置いていた。祖母のいうハブ茶とはどんなものなのか、ショーケースの中を探したがよくわからなかった。
「ハブ茶ってありますか？」
　わたしは店主に尋ねた。
「ありますよ。どこ産のものがいいですか？」
「色々あるんですか？」
「それはもう。うちは専門店ですからね。お客さんが飲まれるんですか？」
「いや、うちの祖母から頼まれたんです」
「ハブ茶というと、ハブソウの種子を乾燥させたものか、ロッカクソウから取り出したケツメイシという種子から取ったものがありますよ。ポイントカードか何かお持ちではないですか？」
「ああ、これ」
　わたしは、祖母から預かったポイントカードを店主に差し出した。

「ううん……これは、うちの店ではないですねえ。この先を少し行った所に健康食品販売店があります。そこのカードですよ。でも、ハブ茶の品揃えでしたら、うちの方が豊富ですよ。どうです。これを機にうちでお買い求めになっては？」

商魂たくましく店主は、こちらの商品を勧めてきた。正直、わたしにとっては、この店のハブ茶だろうが、この先の別の店のハブ茶だろうがどっちでもよかった。自分が飲むわけでもない。レシートと買い物袋の柄が違うだけの話だ。しかし、祖母のポイントカードの店がここことはそんなに離れていないことから、少しだけ遠回りしてみることにした。

店主の言った通り、健康食品販売店はすぐ近くにあった。わたしは、店の外から中を窺い、品揃えを素早く観察した。主に、滋養強壮と精力増進を謳った健康食品がメインを占めていた。

「あのう、このポイントカードのお店はこちらですよね？」

わたしは恐る恐る、奥にいた店主に声をかけた。ポイントカードを見た店主は相好を崩した。

「ええ、うちの店ですよ。何をお探しですか？」

「うちの祖母からハブ茶を頼まれたんです。こちらに置いていますか？」

「ちょっと、そのポイントカードを失礼します」

店主は、わたしの差し出したポイントカードのバーコードをスキャナで読み取り、買い物履歴らしきものをレジの液晶画面に表示させた。

「お客様……ハブ茶はハブ茶でも、乾燥ハブ粉末ですね」

「乾燥ハブ？」

「ええ、沖縄や奄美にいる毒蛇のハブです。そのハブを捕まえ、天日で乾かし粉末にします。ハブは生命力の強い生き物です。滋養強壮、精力増進にいいと言われていますよ。しかも、お客様は、上等の品をお買い求めでございます！」

「ええ？　毒蛇？」

わたしは信じられなかった。あの温厚な祖母が人の知らない所で、毒蛇を粉末にしたものをハブ茶と称して飲んでいる。すぐに電話して事の真相を確かめたかったが、あいにくと祖母は携帯電話を持っていなかった。しかも、家の電話は犯罪防止のために、携帯電話からの電話は受け着けないようになっていた。もう、家を出た時点で、確かめようのない事態に落ち込んでいた。

「ハブ茶ねえ……」

わたしは、店の中で、店主と腕を組み、考え込んでしまった。本当に祖母はそんなものを飲んでいるのだろうか。でも、年の割に……同じ年齢の女性と比べても、元気で矍鑠 (かくしゃく) としていた。それが生命力の強い毒蛇の乾燥粉末のせいだとしても、それなりの説得感があった。現に、そのポイントカードでの購買リストに同じ商品が並んでいた。数年前から、　ハブ茶を服用しているとみて間違いはなさそうだった。

わたしは、腕時計を見た。暇つぶしの買い物とはいえ、そろそろ、友人との約束の時間が迫っていた。早く、買うか買わないか、別の店を探すかしなければならなかった。

「お客さん。こちらの品物はどうです？」

店主は表面に毒蛇のイラストが入った、紙の箱を取り出し、わたしの目の前に置いた。何包入っているかよくわからないパッケージだったが、祖母から預かった五千円で賄え

る代物だった。これを買って帰り、祖母に渡そうか、五千円ならば、もし間違いだったとしても、月の小遣いから弁償できない額でもなかった。

　わたしは、それを一個、買い求めた。

「毎度ありがとうございます。今後ともご贔屓のほどよろしくお願いします」

　店主はそう言い、パッケージを包装紙でくるみ、買い物袋に入れて手渡してくれた。この買い物は正解なのか？　　疑問が膨らんでいった。

　六時から会ったのは、学生時代からの友人だった。懐かしさもあり終電まで飲み明かした。

　家に戻ったときは電灯は消えて皆寝静まっていた。わたしは、祖母の部屋の入り口に、ハブ茶の紙包みを置いておいた。酔っていたせいもあったのか、本当にそれでいいのか、確認することも頭の中から消えていた。

　次の朝、祖母はわたしに文句を言った。

「あのポイントカードのお店に行ったの？　　ハブ茶はハブ茶なんだけど、カモミールティーが欲しかったの！」

　それはハブ茶ではなくハーブティーだ。ポイントカードは祖父のものだったらしかった。祖母はふうっとため息をつき、大人になった孫がお使いひとつ満足にこなせなかったことを仏壇のおじいさんに報告していた。了

AI 棋士

ＡＩ棋士

人工知能の研究全盛である。過去、三度の流行があった。とはいえ、過去の研究は挫折の繰り返しで、日の目を見ないまま、廃れていった。そして、今回のピークは、コンピュータの処理能力が大幅に向上し、その「人工知能」という名前に負けないくらいのレベルに達していると言っても過言ではないだろう。

わたしは、電子機器メーカーの開発者だった。人間そっくりのロボットの開発者と共同で、高度な知能を持たせたヒト形ロボットを作り出した。スーツを着せ、座席に着かせれば、もう、ロボットともヒトとも見分けがつかないレベルであった。

高度な知能の実力を発揮させるために、わたしたちは色々意見交換をして、将棋の対局の場を選んだ。ただ、普通の作業をさせるだけでは、世界最先端のコンピュータの処理能力を生かし切れるとは言い難かったし、この分野でも、ヒトに負けないくらいの知能レベルを発揮して欲しいという開発者ならではの親心もあってのことだった。

ロボットは、その二つの目で将棋盤を認識し、相手が一手、一手打つのに対し、自分で次の手を考えて自らの指先で駒を動かし、試合を進める。思考にやや時間がかかっても、将棋なら自分の持ち時間以内であれば問題は生じない。この点、この競技は人工知能搭載ロボットには向いていた。

実際のプロ棋士との対戦では、ロボットは完全に自律動作をして、外部からのコントロールなしに動作することが出来た。わたしたち開発者は試合の中継をするマスコミに紛れ、中継記者の風体で会場に潜り込んでいた。誰もわたしたちの真の目的に気づくものはいなかった。時折、スマートホンを見る仕草をして、ロボットの人工知能の働き具合を確かめるにとどまった。

将棋では、一手打つのに、大体平均して八〇パターンの駒の動かし方があると言われている。パターンひとつごとに、詰みまでの手数を計算し、最も有利な手を打つことがプログラムされていた。

ただ、この方法だと、二手読むのに、六四〇〇パターンを計算し、三手読むのに五一万二〇〇〇パターンの計算が必要になる。上位棋士だと十手以上先を読む人もいる。十

手だと一〇七三京七四一八兆二四〇〇億パターンもの計算が必要となった。流石に最新のコンピュータチップを持ってしても、そんな計算をいちいちしていたのでは、持ち時間を大幅にオーバーしてしまう。

この計算を楽にするのが、「定跡」の存在だった。こういう譜面のときには、こう打つのが正解だという、決まり事みたいなものがあった。決まった打ち方を覚えるのもコンピュータの得意なやり方だった。

定跡と言っても、それなりに数は存在する。わたしたちは、過去の棋士同士の譜面を六〇〇〇〇試合分用意し、人工知能に「学習」させたのだった。もう、ほとんど、あらゆる場面に、打つ手を計算せずに指すことが可能になった。

「今度、プロとの試合が決まったよ」

上司はわたしに告げた。聞くところによると、将棋連盟の主催でプロ・アマ懇親会みたいなものが行われ、こちらはアマチュア選手として試合に臨めると言うことだった。

試合当日、ヒト形ロボットはスーツ姿で登場し、深くお辞儀をして、タイトル保持者の対戦者の向かいに正座した。そして、将棋の駒を並べていく。相手は小西七段。棋聖のタイトルを持っていた。三十歳でここの所負けなしの実力者だった。

ロボットは先手で指し、定跡通りに試合を進めた。

「中々、やるねえ。あのアマチュアさん」

将棋雑誌の記者はそんなことを言った。彼の目からしても、駒の動きに無駄がなく、指し手はプロ並みだと言うことだった。それはそうだろう。プロの試合を六〇〇〇〇もそらんじているのだ。将棋の世界ではアマチュアがプロに勝つことはまずあり得ない。しかし、小西七段は明らかに劣勢に立たされていた。まだ、序盤。素人目には、どちらが優勢とも判じ切れなかった。

お昼前、十一時半になる頃、小西七段の指し手に凡ミスが目立ち始めた。

――どうしたのだろう？

わたしは、ロボットの動きに注目した。まだ、詰みまでには、数十手の道のりがあった。気を抜けば負けてしまう。

役員さんが、棋士二人に近づいて来て尋ねた。

「お昼休みの昼食はいかがなされますか？」

わたしは、あっと思った。プロの棋士は試合時間が長いので、途中、昼食というものがあったのだ。コンピュータには不要の時間だった。

「今日はどうしましょうかね」

小西七段は扇子の先でおでこをかきながら、考えた。

うどん、丼、定食。色んな選択肢があるのだろう。慣れたものだった。その一方でロボットの動きが止まっていた。さもありなん。こんなときのやり取りは全くの未経験だった。相手の打ち手に応じて自らを律するのだ。もっとも有利な手になる様に。「うん。決まった。日の出食堂の親子丼にしましょう」

　扇子で膝を打ち、そう役員さんに依頼した。
「あなたはどうなさいます？」
　役員さんはロボットに向き直った。
「はて……」
　ロボットも扇子でおでこをかきながら、考え込んだ。
　頼んだ所で、それが食べられる訳ではなかった。動力源はバッテリーが供給する電力だけだった。口は喋るためのものであり、何か、不純物を口に含もうものなら、たちまち、スピーカーに異物が入り故障してしまう。
　わたしは焦った。
　コンピュータにとり、この質問は新しい概念だったのだ。プログラムされていないから、何時間考えても答えは出ない。
「ええと……ええと……」
　ロボットは口をパクパクさせ、何か言葉を発しようとしていた。
　もう、将棋の方は、どうなっているのかわからなかった。思考は停止し、役員さんの質問に全ての機能が注がれていた。親子丼、これに勝つもの。そんなものを表す数式など入ってはいなかった。

　やがてお昼休憩の時間になり、小西七段は別室へ移動し、頼んでおいた親子丼の蓋を取り、美味しそうな匂いをさせながら、もぐもぐと咀嚼し、呑み込んでいた。
　ロボットは完全に動きを停止していた。……そして午後になり、試合が始まっても、二度と動作しなかった。了

電動車いすマラソン

電動車いすマラソン

「もう一度、お日さまの下でスポーツがしてみたい」
　わたしは、週に一度やってくるケアマネージャーさんにそんなことを言った。忘れた頃になり、彼女はとあるメーカーの技術者を連れてやって来た。

　わたしは四〇代に差し掛かった頃、手足のしびれから始まり、身体中の筋肉が動かなくなる難病にかかった。病状は一進一退し、段々と仕事をすることが難しくなっていった。数年経ち、全身麻痺となり、ベッドと電動車いすの上でしか生きられない身の上となった。動かせるのは、もはや眼球とまぶただけ。でも、便利な世の中と言おうか、手元のタブレットがカメラでわたしの目の動きを読み取り、文章化したり、車いすの操作が出来たりした。
　タブレットでもって、うちにやってくる、介護士さんやケアマネージャーさんと会話することが可能だった。
　そんな折、ふと口にした言葉にケアマネージャーさんが反応したと言う訳だった。
「山田さん。スポーツが出来そうですよ！」
　ケアマネージャーさんは自信を込めてそう言った。
　聞くところによると、障害者スポーツ大会で、車いすマラソンというのがあるが、今年から新たに電動車いすの部門が出来たらしかった。クラスは、下肢麻痺の部門と、全身麻痺の部門があり、わたしは、全身麻痺部門で出場が可能だと言うことだった。
「わたしにも参加出来るのですか？」
「ええ。大丈夫ですよ。今回の大会は普段、運動をすることが出来ない人のために、設けられたものです。全身麻痺の方にも、スポーツが出来ることを世の中に知らしめたいのですよ」
　ケアマネージャーさんとメーカーの技術者はそう言った。「でも、……普段使いの電動車いすで出場しなければなりません。この車いすの走行可能距離は大体一〇キロから一五キロくらいなのです。……そこで、レース途中の給水所で、バッテリーを交換してみたいと考えています」
「バッテリー交換？」
　普段、電動車いすのお世話になっておきながら、それが、何を動力にして、どのように動いているかに関しては、全く頓着していなかった。少し恥ずかしいと思った。

「ええ、レース途中にですね……競技者が水分を補給している間の数十秒間に、フル充電したバッテリーに取り替えてしまおうと言う訳です。それは、もちろん、競技用の車いすと比べると手間暇がかかるものですが、そこは、メーカーとして何とかしたいと思っています。予定では、一〇キロおきにある給水所で三度取り替え、無事に四二・一九五キロを走破してもらいたいと思っています」

メーカーの技術者は自信満々の口調でそう述べた。

わたしは、太陽の下で、颯爽と走行する様を思い浮かべた。さぞかし気持ちがいいだろう。自分の足で地面を踏みしめたいのが本音だったが、この際、そこまで無理は出来ないだろうと思った。

「ぜひ、参加させてください。……四二・一九五キロですか？　楽しみです」

わたしは、ここまでの説明に納得し、参加表明した。ケアマネージャーさんと技術者は満足そうな顔でうなずいた。

次の日からわたしは、身体を鍛えるため……とは言え、そんなに大層なことは出来なかった。日光にさらされると、慣れていないときは、結構体力を消耗するものである。そう考えてのこと。一日のうち、何時間かを、車いすに乗り、庭先に出て、太陽の光を浴びるようにしたのだった。

わたしは少し日焼けした顔になり、ケアマネージャーさんからも、やる気を褒められた。もっとも、褒められた対象は、「やる気」だけで、日焼けしたからと言って、必ずしもマラソンに有利なことなど何一つない。

八月に入り、マラソン大会が行われた。

午前中に、健常者のフルマラソンとハーフマラソンが行われ、二時間遅れで車いすマラソン、そして、その一時間遅れで電動車いすマラソンが始まった。

パン！　と言う、号砲で電動車いすの面々が、おのおの、スイッチを入れ、軽いモーター音を残しながら、スタート地点を後にした。

バッテリーはフル充電で、モーターも点検仕立ての絶好調である。わたしは、眼球で視線を動かして、タブレットを経由して電動車いすを操作した。

頬に当たる八月の熱い空気。照りつける太陽。染み出す汗。わたしは、その瞬間、一端 (いっぱし) のスポーツマンになり切っていた。もっとも、他の参加者もそうだったかも知れない。そんなに視野が広い訳でないものの、周りから聞こえるモーターと車輪の音から、集団で走っていると言う感覚が伝わってくる。わたしも、遅れを取るまじきと、タブレットの「進む」ボタンを押し続けた。電動車いすはその期待に応えるべく、モーターをフル回転させていた。時速は約六キロ。そんなに早い訳ではないが、普段、病室とテラスの行き来くらいしかしたことがなかったので、結構なペースではあった。

給水ポイントが来た。わたしは、メーカーの人が準備したテーブルの前で車いすを停

止させ、鼻のチューブから水を入れてもらい、その間、バッテリーの交換を待った。かかること約一〇分。技術者たちは、電動ドライバーで蓋を開けて、中身を取り出し、充電仕立ての新しいバッテリーと取り替えてくれた。

「いいですよ。行ってください」

横から声がして、わたしは再び走行を始めた。

何キロ走った所だろう？　わたしは、ふと、お尻の下から、ほのかに白い煙が漂っていることに気がついた。何となく、温度も高い気がする。さっきの給水ポイントでは、技術者たちは何も言わなかった。わたしも、何も気づかなかった。そうなのだった。電動車いすで普段、一〇分以上の長距離を連続して走行したことがなかったのだ。もしかしたら、いっぺんに一〇キロも走行して、モーターや制御基板が過熱して、焼けてしまうかも知れないと思った。

そして、その心配は現実のものとなった。

発火して、タブレットに「警告」の文字が浮かんできたのだ！

大変だ。わたしは、走行を止めた。でもしばらくすると表示は消えた。再びスタートする。そんな感じで、二度目、三度目のバッテリー交換をすませてゴールラインにたどり着いた。完走は数台だけだったという。電動車椅子の性能が成否を分けた感じだった。いや、だからこそメーカーの人は会社の威信を掛けて、この競技の後押しをしてくれたのだろう。

「よく頑張りましたね」

と、技術者とケアマネージャーさんからお褒めの言葉をいただいた。

なんと、成績は全体の三位に入り、銅メダルがいただけると言うことだった。わたしは、多分、もう最後になるであろうこの競技で結果が残せたことに、この機会をいただいた神様に心からお礼を述べた。了

昆虫食ノススメ

昆虫食ノススメ

　わたしは職場で一種の食通として知られていた。
　少ない給料を、すべて食通めいたことに費やして、世界中の珍味を取り寄せたり、味わってみたりしていた。フォアグラやキャビアにトリュフ。香りだけで産地を言い当てることが出来る。そんな感じで、社内、色んな人から、もてなし料理のアドバイスを求められたりしていた。
　ある日、部長からお呼びがかかった。
「山田君。取引先の東京商事の会長さんが料亭で新作料理を食べる会というのを開催するみたいなんだ。君は食べ物には詳しいだろう？　当社の代表として、ひとつ、行ってみる気はないかね？」
「料亭で新作料理ですか？　面白そうですね。まだ、食べたことのないものなんて、ありますかねえ？」
　わたしは、すっとぼけながら、いい返事をした。

　食事会は、赤坂の重手 (おもて) 石亭 (なしてい) という古くからある料亭で行われた。
　他のお客さんは、どんな格好で来ているのだろう？　それだけを心配していた。わたしは、いつもの仕事着であるグレーの背広だった。と、同じ格好の人が来るではないか。ほとんどが、日本と商売をしている商社員らしい海外からの招待客みたいな感じだった。肌の色も違えば、民族衣装みたいな格好の人もいた。どうやら、日本人はわたしだけの様だった。

　全員がテーブルに着くと、会長の挨拶があった。
「ええ……食料は無限にある訳ではないことを、こんなにも多くの人に知ってもらえて、感無量の思いです。我が社は以前から、脱炭素社会の実現のために、食料資源の有効活用を進めて参りました。その成果を、本日、食事会の形で発表させていただきます。皆様、今日のお集まり、誠にありがとうございます！」
　そう言って、一礼すると、万雷の拍手が沸き起こった。わたしは、周囲の人に合わせてパチパチと気のない拍手を送った。
「脱炭素社会を支える要素として、食糧資源を支えている環境負荷について、説明はもはや必要ないかも知れませんが、初めての人もおられるようなので、簡単に述べさせていただきます」

会長はそう言って席につき、代わりに同社の部長クラスの人間に説明を任せた。彼は、大きな模造紙にグラフを書いたものを持ち出して会長の側の壁に掲げた。

「まずは、環境負荷というものについて説明いたしたいと存じます。……我々が普段口にしている牛肉。……牛肉を一キロ生産するためにはそれより遙かに多い、一一キロの大豆やトウモロコシなどの穀類を必要としています。豚なら七キロ、鶏肉なら四キロです。さらに悪いことに、全世界で生産される穀物のうち五〇パーセント以上がこうした家畜の飼育に用いられていることです。穀物の生産のための環境負荷も高いのに、それより高い負荷をかけているのが、日常生活における肉食なのです！　実はこれらの食習慣を見直すだけ、それだけで、全世界の飢えと貧困を克服することも可能なのです！」

部長はどこまで本気かわからないが、会長の視線を気にしつつ、そう断言した。わたしは、周りの人に合わせてうなずいておいた。多分、食糧不足が慢性化している国からおいでの人も多かったのかも知れない。彼らは、「全くその通りだ」などと発言していた。

「昆虫であれば、こうした環境負荷はものすごく低くなります。雑草を食べて育ったり、おからを餌にすることも可能です。昆虫一キロを生産するために、もはや穀類を消費することもなくなるのです！」と、部長が締めくくった。

料理は懐石形式で出された。器に関して言えばだ。

「まずは、イナゴの佃煮でございます」

女将 (おかみ) が扉の前で挨拶し、女中たちに料理を運ばせた。器と美しく盛り付けられた料理は食欲をそそり、その材料が昆虫であることをのぞけば、完璧な懐石料理だった。わたしは、テーブルの上にあった木のお箸を持ち、複雑な思いで、イナゴを一つ口に運んだ。イナゴの大地の恵みのような食感に、ほどよく味付けされ、カリカリという音を立てて飲み込むと、胃の中に吸い込まれていった。わたしは、今日、この場に来たことを後悔した。

元々、怪しげな催しものであった。あんな大企業の会長職にある人がわざわざ業界人に料理でもてなすのだ。普通の会食である訳がなかった。

でも、彼らの商売の活動地域を思い浮かべた。もう、世界中に支店を持ち、各国の要人との個人的交際を行っていた。中東、インドの手づかみで食べる料理や、同じ釜の飯を食うなんてことが当たり前に行われていた。わたしにとり、料理の世界は彼らに比べて、著しく狭かった。料理と言えば、和食に中華、フレンチと決めてかかっていたわたしにとり、ものすごくハードルの高い試練だった。

「二品目。蜂の子の甘露煮でございます」

一品目のお皿を下げると、次に、スズメバチの幼虫を甘露煮にしたものが通された。

わたしは、ぎょっとした。こんなもの、食えるのか？　わたしは、わたし自身に問うた。周りの外国人を見ると、初めて見たと言わんばかりの態度で、ムシャムシャと咀嚼していた。そして、ゴクリと飲み込み、添えられていた日本酒の器を空にした。わたしは鼻をつまんで飲み込んだ。

「三品目。コオロギの素焼きでございます。足と羽根をもいでお上がりください。醤油だれがかかっております」

わたしの目の前には、可愛そうな姿になったコオロギが串に刺されて並んでいた。上等の器に盛られていた。もし、これが、普段目にする虫でなかったら、彼ら外国人と同じような態度で、口にしていたに違いない。わたしは、普段のグルメめいた言動を恥じ、もう、周りに食通めいた言動をするのを辞めようと決意した。

「四品目。ゴキブリの天ぷらでございます。塩をつけてお召し上がりください」

女将はあくまでも冷静な態度を保ちながら料理の紹介をした。もう、天ぷらだろうが、そのままであろうが関係なしにわたしには、食べられなかった。周りはどうしているだろう？　食べた人もいるのだろう。じっとしていると器を下げられた。

「五品目」はカメムシの佃煮だった。わたしは気を失い倒れてしまった。

「大丈夫ですか？」と、終わった後らしく、会長はわたしを看護してくれていた。「実は、あの昆虫は全て野菜で出来ているのです。ゴキブリの羽根は柿の種です。こういう催しをしないと、昆虫食は広がらないし、環境負荷の抑制も実現しないでしょう。あなたもこれに懲りず、また、チャレンジしてみて下さい」

そう、静かに語るのだった。了

最後の一報

最後の一報

わたしは政府の諜報当局に追われていた。アメリカに来たのは１９４０年のこと。太平洋戦争が勃発し、陸軍は急遽、日本語の出来る兵士の育成に迫られ、日系二世の若者に目をつけた。しかし、いかんせん、数が圧倒的に足りなかった。そんなとき、わたしは、ブラジル移民の二世として合衆国入りした。教育職の労働ビザで入国し、アメリカ人の若者に日本語を教えるという仕事についた。

彼らは優秀で、すぐに日本語を話せるようになると、次は、戦場で捕獲した兵士の持っている手帳や文書の解読に乗り出した。日本語の読み書きは当時としては、かなり難しい部類に属した。旧かな遣いはもちろんのこと、軍独特のカタカナ言葉に四文字熟語。日本人でないとわからない言葉の翻訳に呻吟していた。

日本語を覚えた新しい兵士たちは、日本語将校として、戦地へ赴いていった。

彼らは、故郷を懐かしんで手紙を書くのと同時に、恩師であるわたしの元へも、ときどき、たどたどしい日本語で手紙を書いてよこしたのだ。

日本軍と違い、アメリカ軍では最前線に出っぱなしと言うことはなく、ある程度の軍務を終えると、三週間ほど、故郷に戻ると言った制度が存在していた。兵士を死ぬまで戦う捨て駒として使うのではなく、元気を取り戻させて、また、後から来るもののために、戦地での経験や敵の情報などを合衆国内の兵学校で教えると言ったことをしていた。

わたしは戻ってきた彼らの姿を見ると、心底ほっとして、ねぎらいの言葉をかけることを忘れなかった。

彼らの活躍が認められるようになると、日系人に対する風当たりも和らぐようになり、また、社会的地位も軍での地位も向上していった。

そんなときである。わたしは、サンフランシスコに住んでいるアジア系の男に誘われ、高級クラブへ連れて行かれた。日系人や日本人はすでに強制収容所に入れられていたから、アジア系の人間を日本側の諜報員として採用したのだと思う。

「アレックス。日本は負けない」

と、彼はわたしの名前アレハンドロ・タロー・ヤマダを愛称で呼んだ。

「何ですって？　日本軍は現に数々の会戦で大敗北を続けていて、もう、碌な軍艦も兵士も残っていないのではないですか？」

わたしがそう言うと、男は無言で首を横に振り、そして、ふうっとため息をついた。

「本土決戦と大本営は呼んでいます。ご存じですか？」

「本土決戦？　日本本土で戦うと言うことですか？　まさかそんなこと……本国が焦土と化すではないですか」

「日本の陸戦隊はある意味無敵です。例えば先日戦闘を終えたばかりの硫黄島では合衆国参謀本部は三日で占領出来ると豪語していましたが、実際には三ヶ月以上かかり、そして、日本軍の倍の死傷者を出す羽目になってしまいました。日本軍の戦力を甘く見過ぎたつけが回っているのです。そして、現在、フィリピンや沖縄で、陸軍と海兵隊は苦戦を続けています。兵士は極度の緊張を強いられ、終わりの見えない戦いに、もう精神的に限界に達しています。その上、日本本土で決戦を行うとなれば数年に及ぶ期間がかかり、百万からの合衆国兵士の死傷者が予想されます」

「アメリカの太平洋での快進撃は嘘だったのですか？」

「そうです。……ときにあなた。日系人でしょう？　日本のために働く気はありませんか？」

「わたしに出来ることなどありませんよ」

わたしは男の申し出をあっさり断ったつもりだった。しかし、男は続けた。

「あなたの教え子である日本語将校は、今ではすっかり階級も上がり、重要機密に接することが出来る立場になっています。そんな彼らからの生の情報を得るには、あなたのような人が必要なのですよ」

「それは確かに……多くの若者を戦地に送り出しては来ましたが、彼らの生命を危険にさらす行為は断じて出来ませんよ」

「合衆国は本土決戦を避けるための奥の手を隠し持っているはずなのです。このまま、みすみす本土に手を出し、同じように数百万の犠牲を払うつもりがあるとは思えません」

「奥の手」と言われて、わたしは新型爆弾のことをとある将校から聞いたことを思い出した。

火薬などではなく、これまで知られていない物質を使った高性能爆弾で、たった一発で町ごと吹き飛ばし、数十万の人を焼き殺すほどの性能を持っていると言うことだった。もっとも、このことは一般の兵士には知らされていないし、大統領の直轄事業でもあり数十人の開発メンバー以外は誰も詳細なことは知らないはずだった。

「最前線で戦う日本語将校の生命はどうです？　彼らが滞在している所にそんな新兵器を使うはずはありません。必ず前もって避難させるはずです」

男は熱弁を振るった。

わたしは、軍の上級将校となった元生徒に、トイレでそれとなく尋ねてみた。

「ええ、そんな兵器が存在することを聞いたことがあります。これがあれば日本の天皇も白旗を揚げて降伏するでしょう。実戦投入は間近と聞いていますよ」

そんなことを口にした。

わたしは焦った。わたしも日系人であり、町がひとつ吹き飛んでしまうような兵器があるとすれば何としてでも阻止しなければならない。生徒は続けた。「日本軍に対するチェックメイトです。もう、彼らとの地上での決戦など考えるだけでも、ぞっとします」

そして、新兵器を積み込んだ重巡洋艦「インディアナポリス」が７月１６日にサンフランシスコを出発すること。７月１９日に真珠湾を経由し、２６日に重爆撃機Ｂ２９の出撃基地であるテニアン島に到着することを、彼ら将校のトイレでの会話から聞き取った。

わたしは、謎の男にそれを知らせた。何としてでも、日本への使用は止めなければならない。そう確信していた。

話を聞いた彼は――よくやった。とわたしをねぎらい、その足で店を飛び出していった。

その後、重巡洋艦「インディアナポリス」は７月３０日に日本軍の潜水艦「伊５８」からの魚雷攻撃で撃沈されたそうだった。新兵器はすでに基地に引き渡された後だった。本土決戦を企図していた大本営も、この新兵器で方針を転換せざるを得なかったのだ。後日８月６日と９日に、それぞれヒロシマとナガサキに投下され、町が焼き尽くされ十万からの死者をだす大打撃を与えた。

フィリピン他各所ではまだ戦闘が続いていたが、大日本帝国政府は降伏を決定した。了

タイムトラベル

タイムトラベル

　わたしがカプセルの中で目覚めたとき、周りには何人もの白衣を着た医師たちに取り囲まれていた。意識が混濁する中、彼らはわたしに呼びかけ、そして、質問を浴びせかけた。
「今日は何日かわかりますか？」
「あなたのお名前は？」
「ここがどこだかわかりますか？」
　彼らの質問には、即座に答えられなかった。

　わたしは実験物理学者の横山教授の作り出した巨大な電子加速器であるサイクロトロンで、粒子を光速にまで加速させ、反対側から飛んできた同じ粒子に衝突させることで発生した小型のブラックホールを使ったタイムマシンで、数年の過去の世界へと移動したのだった。実験が成功していればである。
　これまで、粒子を時間の異なる空間に移動させる実験には、教授は何度も成功させていた。このことで国際的な賞を何度も取った実績があった。もっとも、人体であるわたしを過去の世界に「飛ばし」たのは初めてのことだった。この実験が成功したことを知る唯一の方法は、わたしがこの数年を生き残り、実験直前の教授の前に姿を見せて、その存在を認識させることが必要だった。もしかしたら、このカプセルにもう一度入り、ブラックホールを生成してもらえれば、また、数年の未来の世界――本来の現在の世界に、また戻ることも可能かと想像したが、この世界ではまだ、地上にブラックホールを作れるほど科学は進歩していない模様だった。

　この世界は、一体西暦何年なのか、わたしにもすぐにはわからなかった。
　医師たちに取り囲まれているときに、背後にカレンダーがかかっているのに気づいた。
　１９８８年１０月のものになっていた。わたしが「飛ばされ」たとき、２０２５年だったからざっと３７年前になる。
「もしかしたら、バブル景気の時代ですか？」
　わたしは医師の一人に尋ねた。
「バブル？　　景気？　　一体何のことだい？」
　彼はキョトンとした顔になった。無理もない。バブルは、それがはじけて初めてバブ

ルだったと気づいたのだ。その瞬間に生きている人にとっては「随分と景気がいいなあ、学生の就職率は好調だぞ」などと実感があるだけで、実際、バブル景気の最高期だとは夢にも思うまい。

わたしは、昭和から平成に変わる時期。そうした景気のものすごく上向いた時期があることを彼らに告げた。

「あはは。何を言っているんだい？　陛下が亡くなるはずはないじゃないか。確かに体調はすぐれないご様子だけど、それは失礼極まりないことだよ。それに、平成？　平成ってなんだい？　あなた……カプセルの中で酸欠になったのではないか。ちょっと検査してみましょう。何、すぐに終わるから」

検査は、昭和末期のものだった。まだブラウン管式の表示画面を持った機器と、古めかしい計器板のついたＣＴスキャン。そんなものに入れられて、わたしの脳と身体は「検査」された。

「一応、異常はないみたいだねえ。今日は、一日入院して安静にしておいてね」

医師はそんなことを言い、わたしを大部屋に移し、医局へ戻って行った。

大部屋は六人部屋だった。これは平成十五年頃までこんな感じだったのだろう。鉄製パイプのついたリクライニングのないベッドとお金を入れる方式のブラウン管テレビ、そして、酸素のプラグとナースコールのボタンがついていた。

向かいのベッドの男が声をかけてきた。

「あんた、どこが悪いんだい？」

「頭がおかしいと思われているみたいです。身体に異常はないみたいです」

「あはは、そっち系だったの？　何か変なことを言う患者が入ったって、婦長さんが言っていたよ。あんただったのかい？」

彼は、腕にゴールドのロレックスを嵌めていた。脇の棚に外国たばこカルティエのライターが置いてあった。昔はどこででもたばこが吸えたと先輩に聞いたことがあった。

「景気よさそうですね？」

「ああ？　ああ、この時計かい？　結婚記念日に買ってもらったんだ。いいよ、ロレックスは。丈夫で壊れないし、正確だし」

「いや、わたしには高すぎます」

「へえ。あんた何する人？」

「大学の研究室でポスドクです」

「何だい？　それは？」

「博士号を取った後、大学で有期契約で採用される研究者のことです」

「ふうん。聞いたこともないなあ」

この世界ではわたしの言うことはことごとく通らなかった。

「ふうん。平成の世ねえ。……どんな時代なの？」

隣のベッドの男が尋ねて来た。多分、よっぽど入院生活が暇だったのだろう。こんな与太話にでも食いついてくるのだ。もう、一日が四十八時間に感じられるくらい長くなっ

ていたのかも知れない。
「とにかく、災害が多いんです。火山が噴火したり、阪神・淡路大震災が起こったり、東日本大震災が起こったり……」
「嘘だよ。それは。関西で大地震なんて起こるわけないじゃないか。よっぽどおかしいよ。この人の言うことは。笑い話にもならねえ」
　一言で切り捨てられた。

　気づけば、六人部屋のわたしを除く五人が腹を抱えて笑っていた。しかも、わたしを指さしていた。この分だと、平成の世の次に令和が来ることも信じられないだろう。
　でも、そんなことはどうでもよかった。このままでは、わたしは完全に認知症の老人のような扱いを受け続ける。早く退院して、元の時代に戻るには、普通の人のように振る舞わなければならなかった。

　そして、三ヶ月。
　昭和天皇が崩御して、わたしの「予言」のひとつは当たった。改元されて「平成」の世になり、小渕恵三官房長官がその額を持ち、記者会見する様子が、テレビで何度も流され、「平成おじさん」のあだ名がつけられた。
「もしかしたら、あんた本物なのかい？」
　隣のベッドの男は尋ねた。
「ですから、何度も言っているでしょう？　　本物です」
「じゃあさ。何か儲ける方法はないかい？　　この先十年か、二十年で」
「ふうむ。そうですねえ。アメリカのアップル社とマイクロソフト社の株を買っておいたら値上がりすると思いますよ」
「ええ！　　ただのパソコンとソフトの会社だろう？」
　男は、わたしを笑った。まだ、パソコンもＯＳも一部マニアの趣味の世界のものだった。でも、わたしはそれらを買っておいた。３７年後のための小遣い稼ぎだった。了

尾翼の行方

尾翼の行方

　わたしは三十歳の山岳ガイドだった。学生時代から山岳部に所属して日本のみならず、海外の山々を登っていた。就職のときは、企業はどことも所謂構造不況のまっただ中であり、成績も下から数えた方が早いわたしにとり、わたしを雇おうという奇特な会社は一社もなかった。

「山田くん。うちの山小屋の面倒をみてくれないかなあ」
　と、山の管理をしているおじいさんに声をかけられたのが一般企業への就職活動を打ち切った理由でもあった。好きな山で食べていける。それも、この仕事を選んだ動機となった。しかし、実際始めてみると想いは外れた。
　マナーの悪い登山客や、登れもしないのにやってくる無謀な中年や若者たち。そんな人たちの手助けに、半ば一日忙殺されているのが正直な所だった。本気で山を愛する人たちと想いを共有して、山岳ライフを楽しみたい。わたしはガイドとして山を登る度にそう心から思うのだった。

　そんなある日、空港を飛び立った飛行機が、離陸後間もなく貨物室で爆発を起こし、墜落するという事故が起こった。わたしがガイドをしている山がその墜落地点となっていた。
「捜索隊が出るんでしょうかね？」
　わたしは、おじいさんに語りかけた。
「どうだろう。貨物機らしいから、物損事故だけじゃないかな」
「航空テロでしょうか？」
「いいや、積み荷のリチウムイオン電池が発火して爆発したらしい。単純事故だろうねえ」
　おじいさんは、新聞紙をたたみながらそう言うと、ううんと声を上げて背伸びをしてから、壁に掛けてあるホワイトボードの名前を確認して、今日の仕事を読み上げた。登山パーティーの代表者氏名と参加人数だった。
　あんまり見かけない名前が並んでいた。年齢は四十代を先頭に、三十代が三人、二十代が二人だった。
「なんだか、役人さんみたいだな」
　おじいさんは言った。航空機事故の直後だった。国土交通省の事故原因調査団の面々

だとしてもタイミング的に合っていた。しかし、やってきた人たちから登山者名簿の提出を受けると、調査団の人は半数だけで、残りは航空機メーカーの人だと言うことがわかった。

この時点ではわたしは何の疑問も抱いていなかった。

今日の天候と山の状態を説明してから、先頭に立ち彼らを案内して山に入った。もう、何度も登った慣れた山。地図とコンパスなしでも……歩くことは可能だったが、でも、気を抜いてはいけない。そうした行為が山岳事故に直結するのだ。わたしは、彼らから託された任務を遂行すべく慎重に歩を進めた。

途中、何度か休憩を入れた。かなりいい体格をしたメンバーばかりだったが、山登りは初心者の様だったからだ。そして、彼らの一人は、背中に担いでいたリュックの中から、計器を取り出し、何度も辺りの何かを計測していた。

「ガイドさん。飛行機はどこに落ちたと思います？」

そんな質問を飛ばしてきた。わたしは、飛行機は全くの素人だ。飛んできた方向から推理するしかなかった。東から来て落ちるとするなら、山の斜面だろう。木々をなぎ倒し、運が悪ければ漏れた燃料で炎上することもあり得た。わたしは双眼鏡で辺りを確認した。すると、かすかに、木々の倒れた痕跡を見て取れた。

ただ、山の緑に遮られ近くまで行かないと、正確に断定することは出来なかった。

「双眼鏡を貸して下さい」

若いメーカーの職員から声をかけられた。わたしが双眼鏡を渡すと、「うん、うん」と言いながら木々の倒れた辺りを詳細に見て取った。「あそこかも知れません。……課長。どうでしょう？」

彼は上司に尋ねた。

「ガイドさん。あそこまで誘導して下さい」

「わかりました」

わたしは、地図の上にコンパスを置き、その地点までの最短ルートを頭の中で算出した。切り立った尾根を二つ越えなければならなかった。素人の登山パーティーでは困難だと思った。そして、遠回りになるが、平坦地から、尾根を迂回するルートに決めた。一行は小休止をやめて前進を始めた。

歩くこと二時間半。我々は飛行機の墜落現場に到着した。

青く茂った木々の間に飛行機の胴体の一部や翼の残骸が散乱していた。上空からでは多分わからなかっただろう。

国土交通省の一団は、そこから時間をかけて、散乱した場所と部品の写真を撮り始めた。そして現場の位置を地図上で確認し、緯度と経度で記録を取った。後から、回収班がやってきて、それら散乱物を東京に持ち帰るのだそうだった。

一方、メーカーの若手社員は、計測器で辺りを何度も行ったり来たりしながら何かを探していた。

「あなた、何をお探しですか？」

　わたしは、彼らに滑落事故を起こしてもらいたくない一心で、声をかけた。

「尾翼です。どこかにそんなものが落ちていませんでしたか？」

「尾翼？」

「ええ、尾翼です」

　ジェット旅客機の尾翼には渦による振動を抑えるために、重くて固い金属である劣化ウランのブロックが使用されているそうだった。ここに来て、わたしは彼が最初から計測器を手にあちこち探し回っていた理由を知った。

　そんなものが、山中に飛散し、万が一、放射能汚染でも起きたら、山全体が立ち入り禁止区域になってしまう。わたしはそのことで自分の仕事がなくなってしまう方を心配した。

「尾翼は……」

　目撃された情報からは飛行機が墜落する寸前に胴体後部が爆発して部品を散乱させていたことを彼に告げた。

「ええ、本当ですか？」

「多分ですが、この地点からもっと東に行ったところに、別の斜面があります。一時間ほどかかりますがそちらかと思われます」

「案内してください」

「わかりました」

　若手社員は、この調査団の代表者にそれを告げ、登山パーティーの移動を始めることとなった。……現場にたどり着いたとき、日はかなり落ちていた。しかし、彼の持っていたガイガーカウンターが、激しく反応した。このとき、彼はこの計器が放射能測定器であることをわたしに告げた。彼らは手分けして尾翼の残骸を探し当てると、中に入っていた劣化ウランのブロックを取り外して、若手社員の担いでいた大きなリュック……中をのぞき込むと鉛の板で四方を囲まれていた……の中に収めて、作業の完了を宣言した。了

最後のフライト

最後のフライト

　わたしは六十四歳のパイロットだった。
現在は、不況に伴う減便のせいで、飛行機には乗せてもらえず、地上で事務仕事をしていた。そして来月、定年を迎える。
　そんなわたしに運行の話が持ちかけられた。
　老朽化、と言っても、本当に劣化したのではなく、旧型で運行コストが高いために、新型の中型機に置き換えられる古い機体の運行だった。Ｂｗｉｎｇ (ビーウィング) ７４７大型ジェット旅客機だ。
「客は乗せません。ただ、機体をロサンゼルス郊外のモハベ空港まで運んでもらいたいのです」
　運行マネージャーにそう言われただけだった。わたしはそれでもいいと思った。大好きだったジャンボジェット。子供の頃から憧れ、訓練学校に入学し、努力を重ねてパイロットになり、好景気だった時代は機長まで勤め上げてきた機体だった。
「山田さんには、機長を務めていただきます。副操縦士は同じくジャンボジェットのパイロットだった西島さんを予定しています。運航日はあさって。燃料は……」
　現地までたどり着けるギリギリの量だった。天候不順や風向きの影響で着陸予定地が変更された場合でも、迂回の出来ない航路を取るしかない。まさに、特攻隊みたいなフライトを予想させた。
「現地到着後、機体は燃料・オイルを抜かれ、駐機場に留め置かれる予定です。……解体が決まるまでの間」
　マネージャーは淡々と説明した。客を乗せるのでもなく、貨物を運ぶのでもなく、ただスクラップ場まで運ぶだけの仕事だった。

　わたしは、搭乗する機の最終点検を自分の手と目で行った。客がいないとはいえ、自分に取り身の安全を守るために必要なことだった。点検して回っていると、副操縦士の西島君がやってきた。
「そんなもの、コクピットのコンピュータで確認すればいいのに」
　と、とんでもないことを言った。確かに最新鋭機ならコンピュータで全て管理されている。しかし、計器と実際の機の状態とは違うものだ。実際に自分の身体を使って確認することで、長年のフライト生活で事故もなく過ごすことが出来たのだ。

　でも、彼にそんな説教を垂れることはしなかった。この先長い若者ならともかく、わたしも彼も、定年が間近のロートル選手だった。彼も新たな最新鋭機のライセンスを取得して、残りの何年かをパイロットとして過ごすのであれば、この説教も生きてくるだろう。しかし、彼もわたしも、このフライトが終われば、また、元の地上勤務で定年までの時間を過ごすことになるのだ。だから、無意味な説教を垂れるつもりは毛ほどもなかった。

　当日、わたしはコクピットに座り、計器を確認し、エンジンを始動させた。

　昔ほど、快調ではない四基のエンジンが外部電源からの動力を受けて、回転を始めた。このとき、どこか調子が悪いのか、普段聞き慣れたエンジン音がしてこなかった。キイーンと言う音も濁って聞こえた。西島君は平気な顔でコクピットからコンピュータの示す画面を確認していた。

「オール・ＯＫ。異常なしです。機長」

「おいおい。コンピュータ画面だけじゃ駄目だよ」と言いかけてやめた。

「管制塔。こちら大日本航空００１便。滑走路への進入をリクエスト」

「こちら管制塔。滑走路。オール・クリア。進入を許可します」

　わたしは、スロットルを開け、機を前進させ、離陸地点へと移動させた。

　スロットルを全開にすると、機は加速し長い滑走路を一杯に使い離陸・上昇を開始した。

　わたしは、誰もいない客室に向け、機内アナウンスを行った。

「当機は、十六時発大日本航空機００１便。アメリカ・モハベ空港行きです。機長は山田、副操縦士は西島で、安全運行で現地へ飛行します。到着は現地時間八時の予定です」

　西島君は、何を酔狂なことをしているのだと、変なものを見る目でわたしにチラリと視線を投げかけた。

　雲を抜け、上空一万メートルに達すると、機は水平飛行に移行し、自動操縦に切り替えられた。

　燃料は、着々と消費されていく。

　しかし、その量は、わたしの現役時代のものより少し多かった。燃料ポンプの圧力は少し高かった。わたしは、コンピュータのセッティングを変更した。どこかおかしい。

「おかしくても当たり前ですよ。この機はモハベ空港に隣接した砂漠の中で、廃棄されるのでしょう。禄に整備もなされていません。エンジンから火を噴こうが、部品が落下しようが、とにかく現地まで飛べばそれでいいんだと、マネージャーは言っていましたよ」

　西島君がそんなことを言った。

「おいおい。でも、このままだと我々も太平洋を越せないかも知れないんだぞ」

「冗談でしょう。この機の安全性はピカイチです。日本では定期的に分解整備がなされていますが、発展途上国で運用されている機は、整備なんかされていないと聞いています。それでいて、運行開始から今まで、……まあ、大きな事故もありましたが、それでも、それなりに安全運行がなされてきたんです。実績を信じましょうよ」

　と、彼が言った途端、エンジンの異常を示すアラームが鳴り始めた。

「おいおい。早速だよ。潤滑油ポンプの圧力が低下している。下手をしたら焼き付くぞ。……二番エンジン停止させよう」
「了解。……停止。でも、これで、燃費はちょっとだけよくなる気がしますね」
「冗談だろう。速度が落ちれば、それだけ滞空時間が長くなる。本当に大丈夫なのか？
コンピュータと計器をチェック。他に異常がないか確認してくれ」
「了解。自己確認プログラム作動させます。……他のエンジンには異常は見られません」

わたしの乗った機は、そのまま三基のエンジンで飛び続けた。

そして、アメリカ大陸が見えてくる。ロサンゼルスの北、砂漠地帯にある空港だった。

空から見ると、古い飛行機が整然と並べられ、解体や部品取り、または、長期保管のために砂漠の中に駐機されていた。まさに、飛行機の墓場だった。

空港に近づくと、管制塔から着陸許可の無線が入った。

定年まで一ヶ月。最後のフライトだった。

わたしは、感慨にむせびながら、慎重に操縦桿を操作し、滑走路へ機首を向け、そして、着陸した。惰性で進み、滑走路の半ばで停止した。
「フライトお疲れ様です」

と管制塔から無線が入った。わたしは、計器と操縦桿を指先で軽くなぞった。西島君はそんなわたしを静かに見守っていた。了

弱気な競技者

弱気な競技者

　わたしは、レスリング・フリースタイルの選手だった。小さい頃のトラウマであらゆる試合で勝てる気がしないでいた。それでも競技を続けていられたのは、おだて上手なコーチのお陰だった。

　次のオリンピックに向けて、出場権を賭けての国内大会でも、わたしは何週間も前から気にし始め、夜も寝られなくなるほどだった。

「おい、山田。体調はどうだ？　　最近顔色が悪いぞ」

　と、練習場に来るたびにコーチはわたしに尋ねた。

「いや、大丈夫です。体調はいいんですが……気持ちが塞いでしまって」

「それはいかんなあ。大会がなければ飲みにでも誘いたい気分だが、体重制限があるからな。大会が終わるまで、御法度だ。でも、どうしてそんなに気分が塞ぐんだ？　　体調がいいなら文句の付け所もないだろう」

「いえ、例えば、令和大学の赤堀選手とか、神戸体育大学の青山選手とか、最近、めっちゃ伸びてきているではないですか？　　わたしの実力ではてんで敵わないと思うようになってしまって……」

「馬鹿言っちゃいかんよ。彼らならまだ格下だろう。お前が負ける訳がないじゃないか」

「でも……」

「でもってなんだよ。俺の指導に文句があるのか？」

「い、いいえ。そんなこと。……コーチの指導と心配りにはものすごく感謝しています。いつも、適切な指導でわたしの力を一二〇パーセント引き出して下さって」

　わたしがそう言うと、コーチはため息を漏らした。

「確かに、最近、下半身の粘りが足りないな。どこか悪いところはないのか？」

「いえ、わたしの努力不足です。すみません」

「ちょっと、俺と組んでみろ……。手を前に伸ばして！」

　わたしはコーチの胸を借り、両手をまっすぐ伸ばし、組んでみた。びくともしなかった。そして、コーチの腰に両手を回して、上から潰すように組んだ。コーチの膝が地面についた。このままぐるりと回せば、コーチの背中が床につく。フォール勝ちの組み手だった。

「ほらほら。調子いいじゃないか。試合でも通用するだろう」

　押さえ込まれたコーチは下から声をかけてくれた。

　わたしが競技を始めたのは、子供の頃に父親につれられて行ったジムで、試合を見て

からのことだった。大きな男が組み合い、お互いに研ぎ澄まされた技を掛け合っていた。相手の背中を床につければ勝ちだと父親にルールを教わった。

「中々いい体つきをしているね。坊や」

ジムのオーナーはわたしの体つきを褒めた。

確かに、幼稚園では一番大きかったし、力もあった。父親が身体を鍛えるのに使用していたバーベルを同じように持ち上げたり下ろしたり出来るくらいの筋力があった。オーナーはそんなわたしたち親子を見て、一度試合してみないかと誘ってきたのだ。オーナーからすれば、新たな会員を勧誘する単なる一つの契機だったのかも知れない。しかし、当時のわたしは、前向きな性格で、大きな身体を生かして、相手を組み伏せるこの競技に運命的な出会いを感じ始めていた。

オーナーが自分ほどの背格好の少年を手招きして呼び、わたしと組んでみるように言った。相手は背丈は同じほどだが、近所の小学生だった。そして、このジムで、もう三年ほど練習を積んでいるらしかった。肩と腕の筋肉は発達していて、引き締まった体つきをしていた。

「じゃあ。今はルールなんて気にしないで、自由に組んでみてくれ。相手の背中を床につけたらそこで終わりにしよう」

オーナーは気軽に、その少年に言い、わたしと練習試合をすることになった。

相手は強敵だった。筋力的にも自分より勝っていたし、覚えた技のバリエーションも豊富だった。わずかに、わたしの体重が相手より多かったことくらいが有利なくらいだった。

わたしは、そう年の変わらない少年に、三度も組み伏せられ、簡単に負けてしまった。

そのときからだった。自分と体格の変わらないくらいの選手にも、勝つ気がしなくなってしまったのだ。この「小さな、取るに足らない」体験はわたしの心の底深く刻み込まれ、トラウマとなり試合前のわたしの心を責めさいなんだ。

もし、あのとき、オーナーが自分より弱い相手を、呼んでいれば……と思うことはよくあった。例えば、闘犬の世界では、犬の話ではあるが、自分より強い相手と練習させることはないと聞く。もし、負けてしまえば、それっきり、文字通り負け犬根性が心根に染み込み、勝てる相手でも勝てるとは思えなくなってしまうのだ。

わたしの心が丁度そんな状態だった。

父親に強く勧められ、このジムに通い練習を積み、そこそこ頑張って今まで続けてきた。確かに、筋力を鍛えて技を何通りか覚えて、勝つ体験を積み重ねれば、いつの間にか、このジムが出来て以来の強い選手となっていったのだ。

しかし、大学に入り、わたしは他の大学のレスリング部の練習を見学に行ったり、試合を見たりしてイメージトレーニングを始めた。

その経験で、他の大学のいい所ばかりに目が向いてしまい、昔のトラウマだった。自分より少し格上と思われる相手に歯が立たない妄想が芽生え始めたのだった。

――駄目だ。この大学の選手は自分より下半身が強いだとか、自分より技の切れがいい

だとかそんなことばかりが頭の中で渦を巻くように、わたしの心の中に巣くっていった。

心は正に、「負け犬」「かませ犬」に落ちぶれていた。わたしは彼ら「格上」の選手にどうやったら勝てるかイメージトレーニングをした。しかし、心が負けているのでは、どうやっても、イメージ上では勝てないものだった。

そんな折、今のコーチと出会ったのだ。彼はおだて上手で、わたしより格上の相手でも、嘘八百を並べて、わたしより「格下」なのだと信じ込ませた。わたしは試合中も相手の目を見てはいなかった。ただ、コーチのおだてに乗る形で持ちうる技術を尽くして技をかけ、鍛え上げた筋力で相手に圧力を加え続けた。

コーチは言った。

「本当に強い選手は『負けること』を知っている選手だ。失敗を経験しないで本当の『強さ』は身につかないものだ」

わたしは、コーチにのせられる形で練習を重ね「そういうものだ」ということを得ることが出来た。了

苦渋の決断

苦渋の決断

わたしは三人の部下を連れて、山岳地帯の農村を一望できる丘陵地帯に来ていた。
作戦の目的は、国際テロ組織の幹部が潜伏している家屋を特定すること。つまり、偵察活動だ。三日ほど前に、人工衛星がこの村に十数台の四輪駆動車がそろって入るのを確認していた。
もし、幹部の家がわかれば、われわれがターゲットに印をつけ、そこに無人機からのミサイル攻撃をしかけることになっていた。

一人は三人が偵察している背後の護衛をし、一人が双眼鏡から村人一人一人の顔を確認していた。彼は普段から顔を認識する訓練を受けていて、テロ組織メンバーの顔写真を見ただけで、村人かテロリストかを識別することが出来た。もう一人は通信兵だった。
わたしは軍曹としてこの四人だけの偵察隊を指揮していた。
「軍曹殿。テロ組織のメンバー五人を確認しました。幹部は見つかっていません」
双眼鏡を覗いていた二等兵はそう告げた。
「この村にはいないのか？」
「わかりません。もっと奥の家屋にいるかも知れませんし、偵察衛星に捉えられたことを察知して、すでにこの村を去ってしまった可能性も考えられます」
国際テロ組織のことだ。我が国の偵察衛星が何時何分に上空を通過するか把握している可能性は十分考えられた。この丘の上からは、手前の家屋しか確認出来なかった。丘をさらに登り、高さを確保出来れば村の最奥部まで見渡せるかも知れない。わたしは部隊を移動させることにした。
無人機からの攻撃に使用されるミサイルは一発五百万ドルだった。平の兵士を片付けるには高すぎる。撃つからには幹部を逃すことは考えられなかった。
わたしは手の合図で移動することを命じた。
一人が先頭に立ち、それぞれが五メートルほどの距離を置きながら丘から見える岩山の頂上を目指し隠密裡に前進した。
岩場を抜けると急に目の前が広がった。放牧に適した牧草地が広がっていた。そして、突如、一人の男がわたしたちの目前に姿を現した。わたしは咄嗟に小銃を向けた。
　男はびっくりしていた様だった。いきなりの遭遇だった。地元の羊飼いの様に見えた。しかし男は相手に敵意がないことを示そうとしたのか、片言の英語で「ハロー」を繰り返した。多分、それ以上の語彙はなかったに相違なかった。

双眼鏡の兵士が彼に話しかけた。彼はこの土地の言語に通じていた。
「彼はただの羊飼いだと言っています。敵意はない。見逃して欲しいと」
「まさか、スパイではあるまいな」
「どうでしょうか。怪しいと思えばそうとも見えるし、ただの羊飼いだと思えばそうとも取れます」
「いや、スパイに違いない。射殺すべきです」
護衛をしていた、サンダース二等兵は主張した。「ただの羊飼いにしては、兵士の相手に長けているみたいです。それにこんな場所でわれわれと出会うなど不自然です」
確かに、敵兵なら捕虜にしなければならず、その場合、その監視に一人が裂かれてしまうことにもなった。しかし、スパイの扱いに関しては部隊で処刑してもいいことになっていた。サンダースは小銃を羊飼いに向けた。
――助けて下さい。わたしはただの羊飼いです。ここであったことは誰にも言いません。お願いだから。助けて！
羊飼いは片言の英語を混ぜた現地の言葉で助命嘆願した。わたしの心に迷いが生じていた。彼がスパイなら処刑して埋めておけばいい。しかし、民間人を射殺すれば後で軍法会議に掛けられる。責任者のわたしはかなりの重大な犯罪に手を染めたと見なされることになったのだ。
「サンダース二等兵。羊飼いの身体検査をしろ」
サンダースは小銃を肩の後ろにやり、羊飼いの男の体を隅々まで調べた。羊を追う棒きれの他は銃もナイフも肝心の無線機さえ持っていなかったのだ。五分後、サンダースはこちらを向いて首を横に振った。証拠品は何一つなかった。
　証拠はないが、彼がスパイではないと言う保証もどこにもなかった。そしてサンダース二等兵の言うとおり、羊飼いは外国人兵士の扱いに長けている風であった。わたしは、五分ほど逡巡した。撃つべきか逃がすべきか。そして、その判断には我々四人の命が掛かっていた。それに連絡に無線機が必要なのは我が軍だけの常識だった。その気になれば手旗信号で情報を伝達することも可能だった。羊飼いの着ているシャツがその旗になるのだ。わたしは羊飼いの目を見た。どうもただの羊飼いとは思えなくなっていた。この偵察部隊が任務を遂行して無事に帰還するためには危険なことは何ひとつ犯せなかった。
「こいつは信用出来ない。サンダース。射殺しろ」
　わたしは小銃を構えたサンダース二等兵に命じた。その後、彼ら三人に穴を掘るよう命じて、羊飼いの遺体を埋めた。わたしたちは、村から見えない位置に陣取り、さらにテロ組織幹部の居場所を探す作業に戻った。

「軍曹殿。幹部の姿を発見しました」
　双眼鏡の兵士がそう告げた。やはり幹部は農家に潜伏していたのだ。通信兵に農家の正確な位置を本部に伝えさせた。……間もなくしてわたしたちの上空を無人機が通過した。わたしたちはその行方を見守った。やがて小型ミサイルを発射した。農家に命中し、建物は辺りに吹き飛んだ。双眼鏡の兵士が中に潜んでいたテロ組織の幹部とその部下五名の死亡を確認した。

わたしたちは攻撃が成功裏に行われた後、テロ組織のメンバーに遭遇しない様に岩場に姿を隠しながらまた来た道を引き返した。現場は大変な騒ぎになっている。何せ、世界中を騒がせていたテロ組織の幹部がミサイル攻撃で殺害されたのだ。もし、見つかればわれわれは一人残さず確実に殺されていただろう。その道中、安全な場所でわれわれは、一人を見張りに立たせ、小休止を取った。サンダース二等兵がつぶやいた。

「軍曹殿。あの羊飼いは本当に奴らのスパイだったのでしょうか？」

今の今まで幹部殺害で忘れ去っていた羊飼いの最期の姿と表情が思い出された。

「サンダース。考えるな。ここは戦場だ。責任はわたしが取る」

わたしがそう言うと、彼は黙り込んだ。人を一人殺したと言う現実に彼は一時間遅れで罪悪感に捕らわれだしたのだ。しかし、それはわたしも同様だった。あのときは逡巡していたのだ。もし、見逃せば彼は平和な牧畜活動を続けていたかも知れないのだ。基地に戻った後、わたしは罪の意識に苛まれ、上官に現場であったことをそのまま報告した。了

アクリルガラスの向こう側

アクリルガラスの向こう側

　アクリルガラスの向こう側で、担当の弁護士が「ふううっ」とため息をついた。
「なぜ、あんなことをしたんです？」
　わたしは、逮捕されて警察の留置場にいた。相手は当番弁護士と呼ばれる、刑事裁判における国選弁護人みたいな役職だ。警察の厳しい取り調べに対して、助言や弁護をしてくれる制度で、今のわたしに取っては唯一の味方と言える存在だった。
「あなたは、今日の午後一時にH電鉄に乗り、乗客の男性に対し、散弾銃を発砲して死に至らしめました。間違いないですね？」
　わたしは三十代に差し掛かったばかりの銃砲店の店員だった。自身でも銃所持免許と狩猟免許を持ち、オフの日は県中央の山間部に入り、山から下りてきては田畑を荒らし回っているクマやイノシシを撃ったりしていた。もっとも、これらを食用に供すると言う訳でもなく、狩猟は、純粋に食害に困っている老齢農家さんへのボランティア活動の一環だった。一世代前までは、山と里との間に里山という緩衝地帯があり、動物は人間の気配を恐れて近づかず、人間も山に入るときには気をつけるという習慣が根付いていた。しかし、農家の高齢化でこうした里山が維持出来なくなり、動物の縄張りと人間の暮らす地域が密着するようになった。そして、たまたま不用心に里に下りてきた動物と、そこに暮らす人間との間に軋轢が生じていた。
　食べる目的でもないのに殺生をする。そこに幾ばくかのためらいのようなものが最初のうちはあった。しかし、農家さんが丹精込めて作った作物を、収穫前に荒らしてしまう動物を駆除する必要に迫られ、段々と、心のバリアは取り除かれていったのだ。

「はい。でも、それには事情が……」
　わたしは弁護士の問いに口を濁した。警察署では、警官や刑事たちに何度も同じことを聞かれた。どんな行動にもそこには深い事情があるものだ。わたしは、聞かれるたびに、そのことを強調していた。弁護士は続けた。
「そうですね。男性は電車の中で女性A子さんに暴行しようとしていた。あなたは止めに入ろうとしたが、逆上した男性はあなたに向かってきた？　　そうですね？」
　弁護士はその権限でもって、警官の作成した調書のコピーの一部を読んでそう言った。
「はい。間違いありません」
「男性がA子さんを強姦しようとしていた。あなたがそう判断した理由は何ですか？」

そう、……まさに白昼堂々の傍若無人の振る舞いだった。大柄な男が小柄な二十歳ほどの気の弱そうな女性客に絡み、そして、体を触り、痴漢行為をし、それがエスカレートして、強姦に及ぼうとしていたのだ。わたしの目の前の出来事だった。

「そのとき男性は下半身裸でした。女性は押し倒されて下着を剥ぎ取られそうになっていたんです。そのとき同じ車内には五、六人の乗客がいました。……けれど、皆、見ないふりをしていました。わたしはこれは間違っている。とめなければと思ったんです」

「わかりました。ときにあなた。……なぜ、散弾銃など持ち歩いていたのです？」

「わたしは、銃砲店の店員でした。その日、店長がお得意様を案内して、射撃クラブへの送迎をしていたのです。クルマが使えないし、先方のお客様は今日中に納品して欲しいと仰っていたのです。わたしはやむを得ず、散弾銃を携帯用の銃ケースに厳重に入れて、電車で納品に伺おうとしていたのです」

わたしがそう告げると、弁護士はふうっとため息をついた。

「あなたは、女性A子さんを救うために散弾銃を発砲して男性を殺害したと、そういう訳ですね？」

「はい。警官にも何度も聞かれました。でも、まだ二十歳かそこいらの娘さんが、狼藉者の男に強姦されかかっていたのですよ。黙ってみていろと言うのですか？」

弁護士は、少し視線を落として考えているそぶりを見せた。

「あなたに取り、一番よい選択肢は、強姦事件現場をスマホのカメラで一部始終撮影して、警察に通報することだったんですよ。そうすれば、男性は強姦容疑で逮捕され、女性の人権も守られたのです」

「でも、そんなことをすれば、女性は強姦されてしまいます！」

わたしにも妻と、小さな娘がいた。他人事とは思えなかった。

「その女性はあなたの知り合いか、親戚か何かだったのですか？」

弁護士は黒革の帳面を取り出し、わたしから聞き取った情報をメモしていた。ほとんどは、警官から受け取った調書のコピーと同様の内容のはずだった。もし、何らかの条件が折り合えばもしかしたら？　という感じでの質問だった。

「い、いいえ。初めて合う人でした」

わたしは、恐る恐る答えた。

「なら、なおさらのこと。あなたの行為は正当防衛には該当しません。日本では集団的自衛権など認められていないのです。少なくとも、あなたの妻か娘が被害者でもない限り、男性に対する暴力は認められていないのです」

「散弾銃を使用したことが問題なのですか？　じゃあ、素手なら？」

「どちらも駄目です。男性の体格はどんなでしたか？」

「わたしより二十センチほど背が高く、体重もあったと思います。ものすごい大男でした。わたしが素手で止めても、男には何の支障もなかったでしょう。わたしはやむを得ずに、お客様の散弾銃を取り出し、弾を込めて発砲に至ったんです」

「大男だったのですか。それは、仕方ないですねえ。やっぱり、あなたは男性を刺激することなく、警察に通報して、警官に任せるべきだったのですよ。それに、威嚇射撃はし

なかったのですか？　それとも、いきなり腹部を狙って撃ったのですか？」
「威嚇射撃？　電車内には他の乗客がいました。見て見ぬふりをしている冷淡な奴らです。でも、その人たちに被害を及ぼしてはいけない。そう思って、他の方向に射撃することは出来ませんでした」
　弁護士は、深くうなずいた。
「わかりました。警察の聴取に対しては、大男で女性を助けるためには他の手段が思いつかなかった。今となっては、警察に通報するべきだったと反省している。と、述べておいた方がいいでしょう。それが、今の私に出来る唯一のアドバイスです。ちなみに、刑事裁判になった場合、依頼する弁護士は決まっていますか？」
　彼は、もう起ってしまったことはしょうがない。事実は事実として認め、今となっては反省しているとわたしに言わせて、刑の減免を図ろうという考えを示した。
　その後、わたしの身柄は検察庁に送られた。　了

短編集「輪ゴムのイカフライ」

著　　黒川 文

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社